ISSN 0917-2181

浄土宗総合研究所年報

# 教化研究

2024年（令和６年）

No. 35

浄土宗総合研究所

# 教化研究

2024年（令和６年）

No. 35

# 教化研究　第三十五号●目次

## 令和五年度　研究活動報告


総合研究プロジェクト　四十八軽戒の現代的理解……2
総合研究プロジェクト　次世代継承に関する研究……5
総合研究プロジェクト　浄土宗寺院における対人援助の研究―浄土宗的カウンセリング―……8
総合研究プロジェクト　科学技術の進展に伴う社会の変化と浄土宗の対応……10
総合研究プロジェクト　浄土宗寺院における社会事業の地域間連携の展開……15
総合研究プロジェクト　宗立宗門学校における仏教教育……18
総合研究プロジェクト　浄土宗の平等思想とＬＧＢＴＱ……21
応用研究プロジェクト　「和語灯録」現代語訳の研究……26
応用研究プロジェクト　海外開教区用儀式文例作成……29
応用研究プロジェクト　釈尊聖語の広報・布教用現代語訳研究……31
応用研究プロジェクト　浄土宗基本典籍の英訳研究……33
応用研究プロジェクト　法然上人漢語文献『無量寿経釈』の研究……37
応用研究プロジェクト　浄土宗関連情報デジタルアーカイブ研究……39
基礎研究プロジェクト　法式研究……41
基礎研究プロジェクト　布教研究（『三部経』説教の研究―讃題・フレーズ集の作成―）……45
基礎研究プロジェクト　教学研究Ⅰ（東京）……48
基礎研究プロジェクト　教学研究Ⅱ（京都分室）……50
コーポレート業務　門葉アンケート……53

## 研究成果報告

『黒谷上人語灯録』（和語）　巻第十三　現代語訳③
「和語灯録」現代語訳の研究……58
『三部経』説教の研究 ―讃題・フレーズ集の作成― （一）『無量寿経』巻上
布教研究……150
科学技術の進展に伴う社会の変化と浄土宗の対応……289
海外開教区用儀式文例作成……＊94
次世代継承に関する研究……＊37

## 研究ノート

十重禁戒のキャッチコピー
四十八軽戒の現代的理解……340
釈尊聖語の広報・布教用現代語訳研究……＊19
浄土宗基本典籍の英訳研究……＊11
英訳「登山状」抄訳

## 取材記録

釈尊三大法要取材の記録
法式研究……388
令和五年度　研究プロジェクト別スタッフ一覧……＊7
令和五年度　研究プロジェクト一覧……＊6
浄土宗総合研究所運営委員一覧……＊5
浄土宗総合研究所研究員一覧……＊4
編集後記……＊3

# 【令和五年度】研究活動報告

総合研究プロジェクト

# 四十八軽戒の現代的理解

## 【研究担当者一覧】

研究主務　井野周隆

研究員　齊藤舜健　市川定敬　田中芳道
柴田泰山　八橋秀法

研究スタッフ　南宏信　曽田俊弘　伊藤茂樹
安達俊英　善裕昭　上野忠昭
中川正業　鵜飼秀徳　粟飯原岳志
角野玄樹　岩井正道　田中裕成

## 【研究目的】

現在、浄土宗教師養成課程において、四十八軽戒の戒相まで学ぶ機会は少ない。したがって、教師ですら四十八軽戒の条項や一々の戒相については、理解が不十分である傾向があるように思われる。そこで、まず教師自身が、四十八軽戒の条項や一々の戒相を正しく理解したうえで、現代社会に戒の精神を伝え、実践につなげてゆくことが必要であると考える。

本研究班の目的は、四十八軽戒の条項や一々の戒相について、制定意図を踏まえたうえで、現代的解釈を施し、一般・檀信徒に対し、戒に基づく生活を勧める一助となる試案を提示することにある。具体的に四十八軽戒の一々の条項をキャッチコピー化して、掲示伝道やＳＮＳ等で利用し易い情報を提供したい。

## 【研究内容】

本研究班では、研究目的を達成するために、大雲校訂版『梵網経』（『菩薩戒経』）を輪読し、書き下しと現代語訳を作成したうえで、四十八軽戒の一々の戒相について現代的理解を施していきたい。そもそも、四十八軽戒の戒相の中には、少なからず現代人の生活習慣や価値観とかけ離れたものも含まれている。そこで、本研究班の方針として、字句通りに理解するだけでなく、一々の戒相の制定意図を踏まえたうえで、現代にも通じるような四十八軽戒の理解を施していきたい。

そこで本年度は、四十八軽戒を検討する前段階として、大雲校訂版『梵網経』（『菩薩戒経』）に基づき、十重禁戒の書き下しと現代語訳を作成し、以下の形式で十重禁戒のキャッチコピーを作成した。

一．戒の名称　二．キャッチコピー　三．戒の趣旨
四．『梵網経』漢文　五．『梵網経』訓読
六．『梵網経』和訳　七．例話

また、キャッチコピー作成に向けて根本的な考え方について、五月十六日の研究会で仏教伝道協会の江田智昭師を講師に招聘し、講義を賜った。

## 【研究成果】

十重禁戒の「第一殺戒」から「第十謗三宝戒」までのキャッチコピーを上記の形式で作成し、『教化研究』三十五号に掲載する。

## 【研究期間】

令和四年四月～令和九年三月（六年計画の二年目）

## 【研究会開催日】

令和五年　四月十八日　五月十六日　六月十三日
六月二十九日　七月四日　七月二十五日
九月五日　九月二十六日　十一月七日
十一月十五日　十二月五日　十二月十九日
令和六年　一月二十三日　一月三十一日　二月二十日

二月二十一日　三月十二日

【文責】井野周隆

令和五年度　研究活動報告

総合研究プロジェクト

# 次世代継承に関する研究

## 【研究担当者一覧】

研究主務　名和清隆

研究員　袖山榮輝　東海林良昌　宮坂直樹　和田典善　大橋雄人　工藤量導

研究スタッフ　武田道生　石上壽應　菅波正行　鍵小野和敬　大屋正順

## 【研究目的】

開宗八五〇年を迎えるにあたり、寺檀関係、またお念仏の信仰を如何に継承していくかについて考えることは喫緊の課題である。本研究班では、これまで子どもとその親世代、また喪主として寺院と中心的に関わり始める世代をターゲットとして研究を行ってきた。

令和四～五年度は青年層（高校生～二〇歳代）、および壮年層（三〇歳代～五〇歳）をターゲットとし、これらの世代に対する教化施策について、広報の視点を含めながら研究を行っている。本研究班は、社会部からの研究委託を受けて研究活動を行っている。

## 【研究内容】

令和五年度で収集した情報を研究班で検討し、その成果のとりまとめを行った。上半期では浄土宗総合学術大会での発表に向けてのとりまとめを行い、下半期

では『教化研究』成果報告での報告、および浄土宗総合研究所ホームページで公開する「青壮年層向け教化事例リスト」のとりまとめを行った。

## 【研究成果】

青壮年層教化の可能性について多方面より検討を加え、その成果を『教化研究』成果報告として上梓した。第一章では教化を「直接的教化」と「間接的教化」とに分類し、檀信徒のみならず、それ以外のターゲットへの教化の可能性について言及をした。また本研究班で収集した青壮年層教化の事例一覧について紹介をした。第二章では、他教団で行われている取り組みを分類し、その特徴について言及をした。第三章では、教団として青壮年層教化に取り組んでいる二つの教団の事例を紹介した。第四章では、教育機関における青壮年層教化の可能性について提言をした。第五章では青壮年層の宗教意識に基づき、広報という視点を含めながら青壮年層教化の「マネジメント戦略」について論考した。第六章では全国浄土宗青年会が推進活動として展開した「慈悲つむぎ法要・セミナー」に関する効果について報告をした。詳しくは本号『教化研究』成果報告を参照頂きたい。

また本研究班で収集した青壮年層教化の事例一覧は、浄土宗総合研究所ホームページに掲載をした。是非ご覧頂きたい。

## 【研究期間】

令和四年四月～令和六年三月（二年計画の二年目）

## 【研究会開催日】

令和五年　四月三日　四月十日　四月十九日
五月一日　五月十五日　六月十九日
七月四日　七月二十四日　八月二日
八月二十八日　九月五日　九月十四日
十一月六日　十一月十三日　十二月四日
十二月十八日

令和六年　一月十五日　一月二十二日　一月二十九日
二月二十日　三月四日　三月十五日
三月二十二日

【文責】名和清隆

総合研究プロジェクト

# 浄土宗寺院における対人援助の研究―浄土宗的カウンセリング―

## 【研究担当者一覧】

研究主務　曽根宣雄

研究員　郡嶋昭示　宮坂直樹　春本龍彬

研究スタッフ　石川到覚（研究代表）　曽田俊弘

大河内大博　樋口広思　大島慎也

籠島浩貴　小野静法　高瀬顕功

平間俊宏

## 【研究目的】

カウンセリングは、今後の僧侶や寺庭にとって必要不可欠なスキルであると言うことが出来る。このスキルを学ぶことは、日常の寺院活動において非常に有益である。当研究会では、「法然仏教カウンセリングに関する研修会」の開催を目標に掲げて研究を進める。

## 【研究内容】

令和五年度はこれまでの研究成果に基づき、「法然仏教カウンセリング」のテキストの作成を行った。テキスト作成を目指し原稿の執筆作業を進め、研究会において内容の修正を行った。テキストの内容と執筆者は、以下の通りである。

『（仮）法然上人の教えとカウンセリング～凡夫が凡夫によりそう～』

Ⅰ　法然上人の教えとカウンセリング

1　なぜ法然仏教カウンセリングなのか　曽根宣雄

2　法然上人の人間観　―人間は皆凡夫である―　郡嶋昭示

3　法然上人の救済観　―全ての人が救われる教え―　曽田俊弘

4　法然上人の実践　―よりそう姿―　春本龍彬

5　法然上人の教えと中原カウンセリング論　曽根宣雄

コラム「おかじまから皆さんへ」　岡島孝喜

Ⅱ　法然仏教カウンセリングの実践

1　法然仏教カウンセリングの基礎　樋口広思

2　法然仏教カウンセリングの展開　大島慎也

3　法然仏教カウンセリングの心得　大河内大博

資料：中原実道師最終講義録

**【研究成果】**

テキストの原稿については、完成させることができ、現在出版に向けて作業を進めている。

**【研究期間】**

令和二年四月～令和五年三月（三年計画の三年目）

**【研究会開催日】**

令和五年　四月二十四日　五月二十二日
六月二十六日　七月三十一日
九月二十五日　十月二十三日
十一月二十七日　十二月十八日
令和六年　一月二十二日　三月四日

※なお、永年に渡って研究代表を務められた大正大学名誉教授石川到覚先生が本年度をもって御勇退される。これまでの御指導に深く感謝を申し上げる次第である。

【文責】曽根宣雄

総合研究プロジェクト

# 科学技術の進展に伴う社会の変化と浄土宗の対応

**【研究担当者一覧】**

研究主務　吉田淳雄

研究員　工藤量導　若林隆仁

研究スタッフ　坂上雅翁　水谷浩志　伊藤竜信　熊谷信是　岡崎秀麿　平子泰弘

**【研究目的】**

科学技術が進展し社会へ普及することで私たちの生活や意識は大きく変わってきた。当プロジェクトでは、こうした変化を追尾しつつ教化の現場における影響や対応を検討し、宗内（議会等）および社会（マスコミ等）から見解を求められた場合に備えると共に、個々の寺院ないし一宗の教化方針の参考に資することを目的とする。

令和四年度からの二年間は、「移植医療」をテーマとした。研究所ではかつて「脳死・臓器移植問題に対する報告」（一九九二年九月）、「『臓器の移植に関する法律』について」（二〇〇七年七月）、総研叢書『いのちの倫理』（二〇〇八年三月）などで基本的な立場を表明しているが、十年以上の歳月が経過した今日、あらためて移植医療に注目し、私たちの向き合い方について検討する必要があると考える。近年では、患者の生存を目的とするわけではない移植医療（子宮移植）や、

移植用臓器を遺伝子操作したブタによって供給する「異種移植」が臨床応用されはじめて、こうした移植技術をどう捉え、どう向き合うべきなのであろうか。

そこで、移植医療の現状とその問題点について調査しその成果を報告すると共に、浄土宗教師・寺院の対応についても検討、成果報告書として公表し今後の議論の端緒としたい。

## 【研究内容】

二年計画で進める。令和四年度は、主に移植医療をめぐる現状について調査し、問題点を整理した。令和五年度はそれを踏まえて、浄土宗の立場から各論点に対してどう考えるべきかを検討し、それぞれが判断を迫られた場合に考慮すべきポイントや基本的な向き合い方についてまとめてゆく。なお両年度とも、必要に応じて適時専門家を招いて聞き取りを行うなどし、正確な知識・情報の取得に努める。

令和五年度は、前年度の調査により浮上してきた移植医療をめぐる問題点について、それぞれ担当者を決めて更なる調査を実施、研究会にて報告と討議を重ね、報告書にまとめる作業を行った。その最終段階では、移植医療の現場での実際、とくに臓器移植コーディネーターの役割について石井賀洋子先生（元愛知県臓器移植コーディネーター）をお招きし、聞き取り（二月六日）を実施している。なお石井先生には、公開研究会（三月二十五日）にも出講いただき、最新の移植医療の動向について解説、参加した教団付置研究所懇話会・生命倫理研究部会のメンバーとの間で活発な質疑応答・意見交換を行った。

## 【研究成果】

今年度の研究成果については、『教化研究』所載の「成果報告書」にて詳述した。ここでは報告書の構成と担当者を掲げ、全体のまとめのみ簡潔に記載したい。

はじめに（吉田淳雄）

第一章　臓器移植の実際と関係者の苦悩

1　臓器移植医療における移植コーディネーターの関わりと実態について（伊藤竜信）
2　臓器提供する家族の決断のうちにある思い（平子泰弘）
3　移植後の健康管理の課題（水谷浩志）
第二章　臓器移植の光と影
1　海外渡航移植の実態と問題点（坂上雅翁）
2　小児臓器移植の課題（岡崎秀麿）
3　生体移植の問題点（吉田淳雄）
4　異種移植の倫理的課題（熊谷信是）
第三章　移植医療に私たちはどう向きあうか
1　浄土宗総合研究所の見解（吉田淳雄）
2　異種移植をどう考えるか（熊谷信是）
おわりに

＊移植医療は有効な医療であり、当該患者にとって大きな希望の灯となっているのは事実である。しかし自家移植を除けば、他者（提供者）の生命や健康と引き換えに患者の治療が可能となることを忘れてはならない。とくに日本では、深刻な臓器不足が背景となっているためか、患者が救われるという側面のみが強調され、提供臓器数を増やそうという社会的な傾向が認められる。

＊器移植について考えるためには、臓器移植の実際の手順やリスク、関係者の心理や社会的・倫理的な問題点などについて知る必要がある。ポジティブな面もネガティブな面も両方知ってはじめて、自分や家族が直面した場合どうするかを考えるための材料が揃うことになる。

＊浄土宗総合研究所ではこれまで、「脳死・臓器移植問題に対する報告」（一九九二年）、「『臓器の移植に関する法律』について」（二〇〇五年）、総研叢書『いのちの倫理』（二〇〇八年）などで基本的な立場を表明してきた。それらにおいては以下のような見解が述べられており（一部抜粋）、現在においても概ね変更や修正の必要はないと考える。

・脳死・臓器移植問題について、浄土宗が教団としての見解を、賛成か反対かという二者択一的な立場から公表すべきではない。

・脳死・心臓死どちらによって人間の死とするのか、臓器移植をおこなうのかという問題に対しては、念仏の教えをどのようにいただいて生きていくのかという目的のもとに、各個人の主体的な判断によることを重んじるべき。

・（臓器を）提供することに対しては、否定する根拠は極めて少ない。純粋な気持ちから他者の幸福を願って、自らの臓器を進んで提供しようとする姿勢は評価すべきである。臓器の提供を受ける側としては、自然な命の営みに抗してながらえるものであることを自覚し、さらに提供する人をはじめ、さまざまな縁によって移植できることを感謝し、その恩に報いる生き方をすることが望まれる。

＊近年の移植医療の動向や現状を踏まえて、右の見解に付加するならば以下の通りである。

・脳死からの臓器提供は家族に深い苦悩を残すことがあり、充分な情報収集と普段からの家族間でのコミュニケーションが必要（それでも悔いや葛藤は起こりうる）。移植後の健康管理もシビアで、必ずしも期待していたような結果につながらない可能性も考慮しておかなければならない。

・海外渡航移植や生体移植においては、他者の臓器を資源として見てしまい、相手の健康や生活、本当の意思などを軽視ないし度外視することも起こりうる。私たちは凡夫であり、そのような利己的な判断や行動に傾くおそれが充分考えられることを自覚しておかなければならない。したがって、社会的に弱い立場にある人やまだ自分の意思を明示できない小児などが、そうした状況に追い込まれないことを最優先とした社会的な仕組みが確立するよう注視し、努めてゆく必要がある。

・異種移植のような、臓器提供元に動物を利用する手法も実施されつつある。動物の生命は食料をは

じめ様々に利用されているので、様々な考え方が成り立つと思われるが、宗教的な立場からは、人間も動物も一つの「いのち」である点を重視したい。異種移植の場合も、自然な命の営みに抗してながらえることを自覚し、提供者（動物）をはじめ医療関係者などさまざまな縁によって移植が実現していることを感謝し、その恩に報いる生き方をすることが望まれる、という点は従来の臓器移植と同じであると考えられる。

**【研究期間】**

令和四年四月～令和六年三月（二年計画の二年目）

**【研究会開催日】**

令和五年　六月二十六日　七月十日　七月二十四日
　　八月二十八日　九月十一日　十月二日
　　十月二十三日　十一月二十七日
　　十二月十八日
令和六年　一月二十二日　二月五日　二月二十七日
　　三月四日　三月十二日

三月二十五日（教団付置研究所懇話会第23回生命倫理研究部会）　四月一日

【文責】吉田淳雄

令和五年度　研究活動報告

総合研究プロジェクト

# 浄土宗寺院における社会事業の地域間連携の展開

**【研究担当者一覧】**

研究主務　東海林良昌

研究員　中野孝昭　名和清隆　田中芳道
吉田淳雄　宮入良光　工藤量導
大橋雄人

研究スタッフ　伊藤竜信　岩田照賢　小川有閑
下村達郎　高瀬顕功　石井綾月
小林惇道　山下千朝

**【研究目的】**

本研究は、浄土宗寺院における社会事業の地域間連携の展開を示すことを目的とする。我々は前期「浄土宗寺院における社会事業の地域間連携」研究の成果として浄土宗が推進する「お寺での介護者カフェ」を開催している寺院が、地域を超えて連携することの必要性を明らかにした。現在、浄土宗社会部の推進により、北海道第一教区1カ寺、宮城教区3カ寺、山形教区1カ寺、埼玉教区1カ寺、東京教区6カ寺、神奈川教区1カ寺、静岡教区4カ寺、尾張教区1カ寺、三河教区2カ寺、京都教区3カ寺、大阪教区5カ寺、南海教区1カ寺、三州教区1カ寺の30カ寺において開催されているカフェでは寺檀関係のみならず、地域包括支援センターや社会福祉協議会など様々な公的セクターと共

同することで、社会資源としての寺院の存在感を示すことができている。

本研究では、先に述べたような宗内各地で広がり、社会的な意義を持つ草の根の活動である、「お寺での介護者カフェ」をそれぞれの寺院の活動に限定することなく、地域を超えて広く行われ、力強い結びつきを持った活動として発展させることを企図し、浄土宗寺院における社会事業の地域をこえた連携の展開を探っていくことを目的とする。本研究の成果は、宗内寺院が超高齢社会における身近な地域課題（当事者となる可能性も含める）としての「介護者」への支援に取り組むこと、そしてそれぞれの寺院での活動の地域を超えた連携を行うことで、より大きな社会課題としての介護者支援に浄土宗が役割を果たすことへと結びつくと思われる。

## 【研究内容】

月一～二回の研究会議を行い、研究会スタッフの意識共有を図ると共に、具体的な研究調査の運営や確認を行っている。具体的な調査としては、現在浄土宗の推進事業である「お寺での介護者カフェ」開催寺院ミーティングをこれまでオンラインで二十五回行った。これまで開催寺院が交流することによる、それぞれのカフェに取り組むためのモチベーション維持、ノウハウの共有、運営の悩みの分かち合いが行われている特色を確認したが、現在では内部研修や積極的なプロモーションについての企画も生まれている。社会課題としての介護者支援に浄土宗が果たす役割を形作るためにも、開催寺院ミーティングのさらなる調査を行っていきたい。また、社会部からの要請により、「お寺での介護者カフェ」立ち上げについて、ノウハウ提供と現地支援を行っている。九月には浄土宗総合学術大会においてポスターセッションに参加し、研究者向けの掲示説明を行った。さらに東京都健康長寿医療センター研究所の研究員と研究連携を行い、高齢者に対する寺院の関わりの可能性に関して知識提供を行っている。

十一月四日には、大本山清浄華院で行われるイベントにおいて、「お寺での介護者カフェ」開催寺院によるブース展示へのノウハウ提供を行った。開催寺院についてはリモートミーティングへの継続調査を行う予定である。また社会部の事業への協力、東京都健康長寿医療センター研究所研究員との研究連携も引き続き行っていった。さらに来年三月には総研叢書としてこれまでの研究成果をまとめ報告するために、下半期はその執筆や編集作業を中心に研究会を開催した。

## 【研究成果】

これまでの研究成果として、浄土宗総合研究所総研叢書第十三集『つどう・やすらぐ・ささえあう-お寺での介護者カフェの取り組み』として刊行した。

## 【研究期間】

令和四年四月～令和八年三月（四年計画の二年目）

## 【研究会開催日】

令和五年　四月十日　四月二十四日　五月十五日
六月十二日　六月十九日　七月十日
七月二十七日　八月七日　八月二十八日
九月二十五日
令和六年　一月九日　一月十五日　一月二十二日
三月二十七日

【文責】東海林良昌

総合研究プロジェクト

# 宗立宗門学校における仏教教育

## 【研究担当者一覧】

研究主務　宮坂直樹

研究員　今岡達雄　袖山榮輝　林田康順
名和清隆　工藤量導　石田一裕
青木篤史

研究スタッフ　澤田和幸　高瀬顕功　大屋正順
平間理俊　齋藤知明　神田眞雄
渡邉龍彦

## 【研究目的】

浄土宗は多くの宗立宗門学校を抱えている（中学校十二校、高校十七校）。毎年数千人の生徒を相手に仏教教育を行っているこれらの学校現場の経験や事例の中には、十代の若者が興味を持つ内容、生徒の悩みの解決に寄与した内容など、「中高生世代への教化」という点で知見を有していると考えられる。

そこで本研究班は、担当の教学部と連携を取りながら、こうした宗立宗門学校の仏教教育の内容調査を通して、以下の二点を目標とする。

①全国の浄土宗寺院と浄土宗教師が中高生世代の檀信徒への教化にあたって有効な仏教の要素を明らかにしていくこと

②学校間で種々の情報交換を行うことにより宗立宗門

学校での仏教教育の充実に寄与すること
合わせて各校で情報を共有できるプラットフォームの可能性について考察する。

**【研究内容】**

本年度は学校における仏教教育の在り方を考察する上で、①受け手である生徒の仏教への意識の調査（昨年度も実施）、②各教員が行っている授業情報の共有手段、について引き続き検討した。その他、以下についても研究会を行った。

・教員人材バンクについての検討
・宗立宗門校教職員研修会での討論会の内容と、事後レポートの項目の検討、事後レポート分析
・全日本仏教会様より、同会の宗教教育推進委員会との関連で研究内容の聞き取りを受ける（各校へのアンケート結果や、公開研究会の内容、その他研究内容について情報を提供）
・仏教教育を社会的意義として広義で捉えるための考察
・浄土真宗本願寺派伝道本部（宗務所）社会部宗教教育担当様への聞き取り調査
・真和中学高等学校・鎮西高等学校聞き取り調査
・東山中・高「主体的な学び実践研究フォーラム２０２３」参加報告と討議
・公開研究会の開催「ブッダの仏教と法然の仏教」講師・平岡聡先生（京都文教大学）
・浄土宗の平等思想とＬＧＢＴＱ研究班との協働について

**【研究成果】**

・「教員人材バンク」については、学校側が集めたい項目について一通り整理を終えた。しかし、メールやＷＥＢ上で運用となった場合には管理する主体が必要となるため、その主体が見つからない限りは実現は出来ても継続は難しいとの判断にいたった。
・浄土真宗本願寺派様では二十四学園七十三校すべて

を一つのグループと位置付け、「龍谷総合学園」の名称にてスケールメリットを活かしながら協力連携を取っている。異なる学校の生徒同士の交流（ディスカッションや各種行事を通して）や、寺院や本山を利用しての研修会、宗内各団体と連携した企画など、専門の職員を配置しながらかなり活発な活動をしていることがわかった。一方で本願寺派としての教材作成の際には浄土宗が発行し宗立宗門学校の生徒にも配布されている『仏教読本』が大変参考になったとのお話しもいただいた。引き続き、意見や情報交換を行っていくこととなった。

・浄土宗宗立宗門校教育振興会主催の宗教教員向け研修会である「ともいき研修会」でのディスカッションで聞かれた「『仏教読本』の「釈尊部分」と「法然上人部分」で、生徒は同じ仏教といっても別個のものに感じてしまうようだ。そこをどのように橋渡ししたら良いのか苦心する」という声をいくつか耳にした。そこで執筆者のお一人でもある平岡聡先生をお招きして公開研究会を実施し、両者の立場また共通点についてお話しいただいた。講義後は意見交換をしたが、そうした場を継続的に持つことのご提案を平岡先生からも頂戴した。

**【研究期間】**

令和二年四月～令和六年三月（四年計画の四年目）

**【研究会開催日】**

令和四年　四月二〇日　五月二日　五月十六日
　五月二十三日　六月九日　六月十六日
　七月七日　七月三十一日―八月二日
　九月二十六日　十月二十四日　十一月十日
　十二月二十六日
令和五年　一月二十四日　一月二十七日　二月九日
　二月二十九日　三月十八日

【文責】宮坂直樹

令和五年度　研究活動報告

総合研究プロジェクト

# 浄土宗の平等思想とＬＧＢＴＱ

**【研究スタッフ一覧】**

研究主務　工藤量導

研究員　東海林良昌　石田一裕　宮坂直樹
宮入良光　大橋雄人　青木篤史

研究スタッフ　斎藤唯衣　吉水岳彦　服部祐淳
関光恵　山下千朝　中村吉基
エリカ・バッフェッリ　若麻績憲義

**【研究目的】**

本研究会の目的は、ＬＧＢＴＱの問題に関する最新の情報、とくに各宗教団体がどのような対応を行っているのかを調査し、それをふまえて法然上人の平等思想を基底とする浄土宗寺院および教団がこの問題といかに関わり、社会に対してどのようなメッセージを伝えてゆくべきかを検討して提言することである。浄土宗の寺院が誰にとっても足が運びやすく、僧侶が安心の存在であるために、教学・布教・法式の各分野においてどのような点に配慮すべきかをまとめる。

**【研究内容】**

本年度は、他教団における取り組みのヒアリング調査、ならびに専門有識者の講師招聘によってＬＧＢＴＱに関する最新の情報を取り入れ、それをもとに研究

会内部において意見交換を行って、本課題に関する研究班の基本スタンスをまとめてゆくことを主題としている。

浄土宗総合研究所では、二〇一八年に総研叢書第一〇集『それぞれのかがやき：ＬＧＢＴを知る』を刊行、二〇一九年に公開シンポジウム「法然上人にみる平等思想―ＬＧＢＴを考える視座として」を開催して、寺院および僧侶がＬＧＢＴの当事者の抱える困難や生きづらさを知り、どのように共に社会を生きてゆくかを考えてゆくための第一歩とした。ただし、それ以降は、具体的な展開を欠いたままの状態が続いている。

現在、ＬＧＢＴＱへの社会的な関心はより高まっており、小・中・高・大学などの教育機関や各種ＮＰＯなどにおける活動の進展はもとより、宗教界および仏教界においても個々の事例ではあるが、少しずつ支援の輪が広がりを見せている。二〇一八年には牧師かつ当事者でもある中村吉基氏（本研究班スタッフ）が「宗教とＬＧＢＴネットワーク」を立ち上げ、本研究班に属する工藤、石田もこれに名を連ねている。

この問題に対するスタンスや取り組みは、多様性、社会的包摂、公益性、ＳＤＧｓといった現代社会の宗教者・宗教団体に期待される示準とも直結する重要な課題である。それらの状況をフォローしながら、浄土宗寺院および教団がこの問題について、具体的にどのように関わってゆくことが可能かを研究し、提言をまとめてゆく。

## 【研究成果】

本年度の研究活動における研究成果については次の通りである。

（1）講師招聘

・若麻績憲義先生（浄土宗淵之坊副住職、公益社団法人長野青年会議所）

浄土宗僧侶（長野教区長野組淵之坊副住職）であり、公益社団法人長野青年会議所に所属している若麻績憲

義先生を招聘して、「性の多様性について理解を深めよう」という発題にて講義をいただき、研究員および研究スタッフと意見交換を行った。

主たるヒアリング内容は、長野青年会議所の国際交流委員会（ダイバーシティ&インクルージョン）における多様化推進事業として行われたLGBTQ交流会（レインボーミーティング）、例会（多様な個性の受容）、LGBTQに関する企業向けWEBセミナー、JCI長野ALLY宣言についてである。さらに令和3年12月に長野市に『性の多様性を認め尊重しあえるまちを目指して』とする提言書を提出し、①自治体としてLGBTQへの配慮や支援を行うことの宣言の実施、②パートナーシップ・ファミリーシップ宣誓制度の導入、③性の多様性に関する学校教育の拡充及び教員、学校関係者への研修の拡充、④性的マイノリティの自死対策、子どもたちの居場所づくり、企業研修の拡充、⑤トランスジェンダーの方への医療情報の提供と医療従事者への正しい知識の提供について、という政策提言を行った点についても詳細をうかがった。

（2）LGBTQに関する啓発リーフレット「仏教の平等思想とLGBTQ（仮）」の作成について

本研究プロジェクトでは、LGBTQに関する啓発リーフレット「仏教の平等思想とLGBTQ（仮）」の作成を進めている。今年度の主たる活動はリーフレット案の企画を検討することであった。現段階で予定されている内容は次の通りである。

**【作成の目的】**

現在、LGBTQへの社会的な関心は高まっており、小・中・高・大学などの教育機関や各種NPOなどにおける進展はもとより、宗教界および仏教界においても個々の事例ではありますが、少しずつ支援の輪が広がりを見せています。ご存じのとおり、この課題への取り組みは、多様性、社会的包摂、公益性、SDGsといった現代社会の重要な課題と結びついております。

本リーフレットは、ＬＧＢＴＱの当事者の抱える困難や生きづらさを知り、どのように共に社会を生きてゆくかを考えるための一助として企画しました。法然上人の平等思想を通じて、自分自身のなかに偏見や差別の意識がないかどうか見つめなおし、性の多様性とそれにまつわる生きづらさという課題について、「ともいき」の立場から一緒に考えてゆきましょう。

**【装丁イメージ案】**

・Ａ５版、カラー、二十頁程度、読者世代をふまえたデザイン・編集とする。

・宗門学校の教材として利用できるように「教材案＋ワークシートの作成」も念頭に入れて企画している。その他、タブレット用データの提供なども考えている。

**【目次案】**

①　導入：普通に生きるって何だろう？

・Ｚ世代と考える仏教の「これから」を対談

②　背景：何故ＬＧＢＴＱに取り組むのか？

・セクシュアリティとは何か、トイレ制服名簿など身近な具体的事例

・カミングアウト・アウティングの理解、差別的言動への注意喚起（ＳＮＳなど）

③　定義：ＬＧＢＴＱとは？

・性の多様性を示す…人それぞれのセクシュアリティ（個性）はみんな違う

④　解釈＋メッセージ：法然上人の平等思想とＬＧＢＴＱ

・浄土宗のＬＧＢＴＱの考え／性差を条件としない平等往生、『阿弥陀経』青黄赤白の蓮色

⑤　アクション：身近で実際に取り組めること

・相談窓口、生きづらさを抱えた人への手の差しのべ方など

**【研究期間】**

令和三年四月～令和六年三月（三年計画の三年目）

**【研究会開催日および協議内容】**

令和五年　四月十三日（若麻績憲義先生講義）
四月二十七日　五月十六日　六月八日
七月三日　七月二十日　八月三日
九月二十八日　十月四日　十月五日
十月二十三日　十一月九日　十二月七日
十二月十四日　十二月二十五日

令和六年　一月十日　一月十八日　二月一日
二月十五日　三月七日　三月十四日
三月二十八日

【文責】工藤量導

応用研究プロジェクト

# 「和語灯録」現代語訳の研究

## 【研究担当者一覧】

研究主務　林田康順

研究員　袖山榮輝　曽根宣雄　和田典善
東海林良昌　佐藤堅正　郡嶋昭示
石田一裕　工藤量導　大橋雄人
春本龍彬　青木篤史

研究スタッフ　石川琢道　吉水岳彦　石上壽應
杉山裕俊　長尾隆寛

## 【研究目的】

本研究プロジェクトは、法然上人『和語灯録』全七巻（「浄土宗聖典」第四巻所収）の現代語訳を進め、その刊行を目指している。すでに当研究所において、「浄土三部経」（「浄土宗聖典」第一巻所収）、及び、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）（「浄土宗聖典」第六巻所収）の現代語訳が刊行されており、本研究はそうした「浄土宗聖典」現代語訳作業の一貫である。かつて、当研究所法語班において多くの法語が現代語訳されており、そのノウハウや人的資源が蓄積されている。そうした資産を大いに活用し、着実に成果を積み重ね、『和語灯録』全七巻の現代語訳を完遂したい。

『和語灯録』に所収される法然上人御遺文の現代語訳は、宗学・教学の興隆に寄与するばかりでなく、布

教の充実に直結し、本宗の一層の教線拡大を促すこととなるであろう。

## 【研究内容】

令和四・五年度の研究内容は概ね以下の通りである。まず現代語訳に取り組むテキストの底本は、「浄土宗聖典」第四巻所収の『和語灯録』の釈文とする。法然上人の御遺文集である『黒谷上人語灯録（和語）』（「和語灯録」）は正篇全五巻、及び、『拾遺黒谷語録（和語）』（「拾遺和語灯録」）は全二巻、和語は合わせて全七巻から構成されている。その中、令和四・五年度は、『黒谷上人語灯録　巻第十三』の現代語訳作業を進めた。

本巻は次の四編の法語が所収されている。

①九条殿下の北の政所へ進する御返事　第九
②鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事　第十
③要義問答　第十一
④大胡太郎へ遣わす御返事　第十二八

これらの御法語を全研究員が分担して試訳を作成し、全体会でそれを検討して、順次完成稿をまとめた。また、必要に応じて註を作成した。

※研究員による現代語訳作業の作成後、若麻績実豊上人（長野教区上小組・西念寺ご住職）に細部にわたるご指導を頂戴した。ここに深甚の謝意を表したい。

## 【研究成果】

令和四・五年度において、①九条殿下の北の政所へ進する御返事、②鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事、③要義問答、④大胡太郎へ遣わす御返事の全現代語訳と註の作成を終えた。これらの成果を取りまとめて、『教化研究』第三五号に掲載して研究成果の報告とする。なお、今後も作業を継続し、『和語灯録』全七巻現代語訳の刊行を目指したい。

## 【研究期間】

令和四年四月～令和六年三月（二年計画の二年目）

## 【研究会開催日】

令和五年　四月十日　四月十七日　四月二十四日
五月八日　五月十五日　六月五日
六月十二日　六月二十六日　七月三日
七月十日　九月四日　十月三日
十一月二十日　十一月二十七日
令和六年　一月十五日　一月二十二日　二月五日

【文責】林田康順

令和五年度　研究活動報告

応用研究プロジェクト

# 海外開教区用儀式文例作成

【研究担当者一覧】

研究主務　田中芳道

研究員　齊藤舜健　市川定敬　井野周隆　八橋秀法　北條竜士

研究スタッフ　南宏信　前田信剛　林雅清　原マリ　角野玄樹　石川広宣　吹田隆徳　下端啓介　岩井正道

【研究目的】

北米、南米に最初に伝わった仏教は、日本仏教であるといわれている。日本の伝統仏教教団が日本人移民を追うように各国に開教使を派遣したことがはじまりである。開教師らは、宗教儀礼を始め、教育や精神的なサポートなど、多方面で活躍しながら各地に寺院を建立し現在に至る。

しかし昨今では、ハワイ、北米、南米の日系人の間に、祖先の言語である日本語が継承されておらず、宗教教団の活動は日本語中心から、現地の言語中心へと変貌を遂げている。

移民の時代から一世紀が経った今、これから必要とされる人材の育成、現地の言語教材、文例など、浄土宗は今一度考えなければならない岐路に立たされている。先人たちの意志を継ぎ、浄土宗の劈頭宣言にある

「世界に共生を」を実現するため、このプロジェクトを遂行した。

## 【研究成果】

京都分室ではこれまで、『日常勤行式』の多言語化研究を通して海外開教区との繋がりを築いてきた。現在は、各言語への翻訳体制が整い、「表白・引導の多言語化研究」を通して、海外開教区での儀式等に使われる文例の翻訳を行っている

浄土宗の教えを海外開教区の次世代に繋げていくことを目的として、浄土宗社会部と連携を取りながら作業を進めてきた。

## 【研究内容】

「春彼岸表白②」、「盆施餓鬼会表白②」、「秋彼岸会表白②」、「開眼式表白（持仏）」、「開眼式表白（墓碑）」の英訳が終り、研究成果の報告のため引導、表白の全訳を再チェックした。

## 【研究期間】

令和二年四月～令和六年三月（四年計画の四年目）

## 【研究会開催日】

令和五年　四月二十五日　五月二十九日　六月十二日
七月二十四日　九月十一日　九月二十五日
十月十九日　十一月六日　十二月十一日
令和六年　一月二十二日　二月十九日　三月五日

【文責】田中芳道

令和五年度　研究活動報告

応用研究プロジェクト

# 釈尊聖語の広報・布教用現代語訳研究

【研究担当者一覧】

研究主務　石田一裕

研究員　袖山榮輝　佐藤堅正　北條竜士　春本龍彬

研究スタッフ　渡邉眞儀

【研究目的】

本研究の目的は釈尊聖語を通じて開宗八五〇年のキャッチコピー「お念仏からはじまる幸せ」への理解を深めるとともに、その広報や布教のための資料を提示することである。キャッチコピーについては、当研究所よりその解釈を提示した（『教化研究』三〇号）。本研究はその解釈を踏まえ、釈尊聖語に基づいた仏教的な幸せの理解を示すとともに、三部経や法語との関連を提示する。これは浄土宗教師が日常的な布教を行う際の資料とし活用されることを念頭に置いたものである。またＳＮＳなどによる広報・教化に資するため、原文を踏まえた短いキャッチフレーズを作成する。

【研究内容】

本年度は三か年計画の二年目として研究を進めた。昨年度に続き『スッタニパータ』の翻訳作業を行なった。本年度は第二章「宝経（ラタナスッタ）」と昨年度か

ら取り組んでいる第三章「セーラ経（セーラスッタ）」を翻訳した。さらに昨年度翻訳を終えた第二章「吉祥経（マンガラスッタ）」についてキャッチコピーと解説を作成し、またご法語や三部経の対応について検討した。

## 【研究成果】

本年度の研究成果は研究内容にもある通り、「宝経」と「セーラ経」の全翻訳、ならびに「吉祥経」の各偈に基づくキャチコピーの作成、解説文、さらにそれらに対応するご法語と三部経の選定が具体的研究成果である。なおキャチコピーなどの成果については、本誌研究ノートにて報告を行っている。

## 【研究期間】

令和四年四月～令和七年三月（三年計画の二年目）

## 【研究会開催日】

令和五年　四月三日　四月十三日　四月二十日
四月二十五日　五月九日　五月十六日
五月二十三日　六月九日　九月十二日
九月十九日　九月二十九日　十月四日
十月十日　十月十七日　十月二四日
十一月二十二日　十一月二十九日
令和六年　一月二十六日　三月一日　三月十五日
三月二十九日

【文責】石田一裕

令和五年度　研究活動報告

応用研究プロジェクト

# 浄土宗基本典籍の英訳研究

**【研究担当者一覧】**

研究主務　北條竜士

研究員　戸松義晴　齋藤舜健　柴田泰山　佐藤堅正　石田一裕　田中芳道　春本龍彬　青木篤史

研究スタッフ　髙瀬顕功　平間理俊　酒井仁成　和田良世　ジョナサン・ワッツ

業務委託　マーク・ブラム

**【研究目的】**

現在、海外あるいは英語文化圏において日本浄土教の基本典籍（浄土三部経、祖師の典籍など）を扱って日本浄土教について学ぶ場合、既に数多く出版されている浄土真宗本願寺派、真宗大谷派のものに依存し、その結果として世界における日本浄土教の関心あるいは研究対象が、親鸞中心となっている。

一方で法然、浄土宗関係の英語出版物は極めて少ない。この状況を鑑み、浄土宗の教えを世界に発信するには、まず浄土宗基本典籍の英訳作業を行い、それらを出版、公表する必要がある。それによって、法然浄土教に世界の人々が触れ、それを機縁に研究者の育成、浄土宗の信仰の拡充、牽いては浄土宗二十一世紀劈頭宣言の具現化が叶う。

本研究は浄土宗二十一世紀劈頭宣言である「愚者の自覚を　家庭にみ仏の光を　社会に慈しみを　世界に共生きを」の理念に基づき、浄土宗の教えを典籍の翻訳作業、出版、デジタル媒体での公表、国際学会での発表、海外研究者や仏教者との交流を通じて、国内はもちろん世界へ劈頭宣言を発信することを目的とする。

**【研究内容】**

①英訳『和語灯録』

・新規英訳作業…本作業はカリフォルニア州立大学バークレー校の仏教学教授であるマーク・ブラム先生と研究会を開催し、『和語灯録』の全英訳を目指す。

②英訳『観経疏』

マーク・ブラム先生と柴田研究員による研究会を開催し、『観経疏』の全英訳を目指す。

③英訳『四十八巻伝』

『四十八巻伝』の英訳本（Coats and Ishizuka『Honen The Buddhist Saint』）をＯＣＲ作業によってデータ化し、現代に適した英訳に修正し、その公開を目指す。現在、英訳修正作業は終了しているが、公開先である浄土宗総合研究所ホームページが更新作業中であるため公開作業は保留となっている。

④ＡＩ翻訳研究会

本研究会は英訳作業の将来的展望として従来のネイテイブ翻訳者による英訳作業に加えて、ＡＩ翻訳技術を英訳作業に導入し、効率的かつ生産的に翻訳作業を進めるための調査・研究を行なう。現在は国立研究開発法人情報通信機構（NICT）によって開発された「みんなの自動翻訳@TexTra テキストラ（自動翻訳サイトにおける高精度自動翻訳エンジン）」を利用し、当研究所が所有する経典等の日本語訳をテキストラに組み込み、その結果について考察・研究を行なっている。

**【研究成果】**

①英訳『和語灯録』

・新規英訳作業…「登山状」（『浄土宗聖典』四、釈文

四九三・七～五一一・一二、全訳完了）

・下訳編集作業…「ある女房に示すご法語」（『浄土宗聖典』四、五二一・一～五二二・五）、「津戸三郎へ遣わす御返事」（『浄土宗聖典』四、五一三・一二～五二〇・十四）、「熊谷入道へ遣わす御返事」（『浄土宗聖典』四、四一五・七～十四）

・グロッサリー作成作業…作業なし

②英訳『観経疏』

・新規英訳作業…『観経疏』散善義上品下生中輩観～中品下生（『浄土宗聖典』二、三〇八・八～三一四・六）

③英訳『四十八巻伝』

作業なし

③ＡＩ翻訳研究

・昨年度に代わり、埼玉工業大学の亀岡氏に Textra を利用した「浄土三部経」研究を依頼

**【研究期間】**

令和二年四月～令和七年三月（五年計画の四年目）

**【研究会開催日】**

①英訳『和語灯録』下訳作業研究会（オンライン）

令和五年　四月十三日　四月十九日　四月二十七日
五月十日　九月六日　九月十三日
九月二十七日　十月四日　十月十八日
十一月一日　十一月十五日
十一月二十九日　十二月十三日
令和六年　一月十七日　二月七日　二月十四日
二月二十八日　三月二十七日

②英訳『和語灯録』集中研究会

令和五年　（対面）五月二十二日　五月二十三日
五月二十四日　五月二十九日　五月三十日
六月五日　六月六日　六月七日
六月十二日　六月十三日
（オンライン）八月一日　八月三日
八月四日　八月九日　八月十日
八月十二日

③英訳『観経疏』研究会

令和五年　（対面）六月十四日　六月十五日

（オンライン）六月二十六日　九月十一日

④ＡＩ翻訳研究会（オンライン）

令和六年　二月二十六日

【文責】北條竜士

令和五年度　研究活動報告

応用研究プロジェクト

# 法然上人漢語文献『無量寿経釈』の研究

【研究担当者一覧】

研究主務　郡嶋昭示

研究員　吉田淳雄　青木篤史　春本龍彬

研究スタッフ　伊藤茂樹

【研究目的】

宗祖である法然上人の文献が、現代語訳や多言語化されるなど、現代社会に広まるような作業が行われている。それも『浄土宗聖典』に書き下し文・釈文が整理されているからこれらの作業が行いやすくなっているといえよう。

しかし、法然上人の文献の中、『浄土宗聖典』には『選択集』と『和語灯録』『往生機』が掲載されているが、教えの多くが記される『漢語灯録』の作業が行われていない現状がある。そこで本研究会ではこの『漢語灯録』所収の漢文の文献を翻刻・書き下しをし、今後の多くの研究の役に立つことを目指して活動したいと思う。具体的には『無量寿経釈』から作業を行っている。

【研究内容】

法然上人の遺文集『黒谷上人語灯録』の中、『浄土宗聖典』に収録されていない『漢語灯録』の書き下し作業を行う。本年度と来年度は冒頭の『無量寿経釈』

の作業を行いたい。底本を寛永版『無量寿経釈』とし、他の諸本も参照しながら書き下し作業を行っている。

**【研究成果】**

全五六丁中、本年度は二十八丁までの作業を終えた。

**【研究期間】**

令和五年四月～令和七年三月（二年計画の一年目）

**【研究会開催日】**

令和五年　六月二十三日　六月三〇日　八月四日
九月一日　九月二十一日　九月二十九日
一〇月十三日　一〇月二十七日
十一月一〇日　十一月二十二日
令和六年　一月十二日　二月二日

【文責】郡嶋昭示

令和五年度　研究活動報告

応用研究プロジェクト

# 浄土宗関連情報デジタルアーカイブ研究

【研究担当者一覧】

研究主務　佐藤堅正

研究員　齊藤舜健　柴田泰山　市川定敬

大橋雄人　工藤量導　春本龍彬

## 【研究目的】

近年の情報化の進展に伴い、浄土宗学・仏教学・宗教学・宗教社会学などを含む人文科学分野の研究においても、情報処理技術を駆使して基本的な典籍を調査分析する方法が一般的になってきた。このような調査分析方法を用いるためには、典籍が電子的情報に変換（電子テキスト化）されている必要がある。本研究会は、わが宗の宗典を統一的なデータ形式に基づいて電子化すべく、電子テキスト化の基本的な研究を行っている。

## 【研究内容】

本年度は、テキスト・画像・音声・映像などの電子データを保存するデジタルアーカイブの構築を念頭に置いて以下の作業を行なった。①インターネット公開されている浄土宗全書テキストデータベース（以下、浄全ＤＢ）およびＷＥＢ版新纂浄土宗大辞典（以下、ＷＥＢ版大辞典）の保守・管理、②浄土宗関係典籍の電子化。③浄土宗開宗八五〇年慶讃事業「増上寺三大

蔵経電子化」への協力。

【研究成果】

① 浄全ＤＢとＷＥＢ版大辞典の保守・管理を行っている。

② 『昭和新修法然上人全集』の後半の本文の電子テキスト化を業者に発注した。二月二十二日に納品された。

③ 浄土宗開宗八五〇年慶讃事業「増上寺三大蔵経電子化」へ協力し、画像データベースを公開した。

【研究期間】

令和元年四月～令和九年三月（八年計画の五年目）

【研究会開催日】

令和五年　四月二十四日　五月八日　十月十六日

【文責】佐藤堅正

令和五年度　研究活動報告

基礎研究プロジェクト

# 法式研究

## 【研究担当者一覧】

研究主務　中野孝昭

研究員　坂上典翁　西城宗隆　荒木信道
柴田泰山　八橋秀法　若林隆仁
青木篤史　大橋雄人

研究スタッフ　山本晴雄　清水秀浩　粟飯原岳志
井上良昭　八尾敬俊　遠田憲弘
青木玄秀　井川直樹　吉原寛樹

## 【研究目的】

今まで法式関係の研究班は「現代教化儀礼の研究」をテーマとして、現代教化儀礼の構築と伝承儀礼の保存という内容を研究対象としてきた。過去には「特殊法要」、「節念仏」、「声明」、「比較浄土儀礼」などを研究対象としてきたが、近年は「六道講式」、「三途講式」、「知恩講式」の各種講式、「半月布薩」、「般舟讃」、「放生会」、「地蔵講式・地蔵尊供養」など具体的法要を取り上げてきた。これらは本宗において「宗規」における特殊法要に該当するものであり、一部で伝承され修されているもの、寺院によって各々独自に修されているもの、経本法則本は存在するが現在は修されていないものなどがあり、それらの復興伝承を目的としてきた。また復興伝承だけではなく、現代に対応すべく内

容の要約化、一般寺院で行えるよう少人数でも修せるように簡略化を行い、次第を新たに作成し現代版として提案してきた。以上の研究成果を公開講座にて内容の講義と共に発表を行い、『教化研究』に掲載すると共に、研究成果の音声及び映像記録も行い、それらを研究所にて保存している。

「法式を研究する」という観点からは、または法式教師という立場において、法式関係資料の存在を知っている、またそれを閲覧できるという環境が重要である。従って、現在法式研究班では各種法要、作法の映像化を継続し行っており、伝承儀礼の保存の為の古式の復興だけではなく、現在修されている法要も映像化と保存を行っていくこととした。また法式関係各種資料を積極的にデータ化し保存し、それらを検索閲覧可能にして、今後の法式研究に役立てたい。

**【研究内容】**

儀礼の伝承は経本法則本とそれを修してきた寺院と、それに関わる人の記憶によって伝承されている。本研究班ではそれらを映像化し、それぞれで修すための参考となるものとしたい。今までの研究対象としてきた法要はもちろんのこと、古式法要・儀礼等他、現代各寺院で一般に行われている法要の映像化保存を行う。

また浄土宗における法式は、威儀・犍稚・音声といった基礎的なこと、更には各種法要儀式作法に至るまで、原則的に宗の定める『法要集』に基づいていなくてはならない。現在は『法要集』の威儀部・犍稚部及び「日常勤行式」は映像化されているが、差定部に所載の各種法要は映像化されていない。主だった法要次第を映像化し、今後修する場合の参考となるものとし、それら各種法要の映像化により後世に正しく伝承していきたい。

法式関係資料を常に探察・研究し、データ化保存していく。

## 【研究成果】

本年度以降の研究対象を「釈迦三大法要」とし、総合的な研究の他に本年度の映像化対象を「涅槃会」とした。

まずは本宗の釈尊関係の法要次第・偈文等を、経本・法要集・法式関係書から取り上げ、次第に関しては、現行『法要集』までの変遷の確認と比較を行い、現行『法要集』の各次第内容の研究を行った。次に、本山等の釈尊関係法要の実際を確認し、取材を行い、撮影可能ならば映像として保存する事とした。また本宗の釈尊由来の寺院である、九品佛浄眞寺・嵯峨釈迦堂清涼寺の取材許可を得、令和五年九月十三日に浄真寺の取材、十一月六日に嵯峨釈迦堂清涼寺の取材を行い、縁起沿革、年間行事とその次第内容の調査を行った。十二月八日に大本山増上寺「成道会」を取材撮影、令和六年二月十五日には、大本山増上寺涅槃会である椎尾辨匡作「涅槃講式」の取材撮影、三月十五日に嵯峨釈迦堂清涼寺の涅槃会関連行事として「嵯峨お松明式」の取材撮影を行う予定であったが、先方の都合によりかなわなかった。

『法要集』「涅槃会」次第の撮影映像化保存に関しては、来年度の『法要集』の刷新が予定されており、各次第も見直し変更か予想されるため、来年度に行う事とした。

平行して各資料のデータ化保存を行った。特に本年度は茨城報国寺より所蔵の諷誦文をデータ化保存の機会を得た。

## 【研究期間】

令和二年四月～令和七年三月（五年計画の四年目）

## 【研究会開催日】

令和五年　四月十二日　五月十日　五月二十九日
　　六月二十六日　七月四日　八月二十四日
　　九月十三日　十月十日　十一月八日

十二月九日　十二月九日
令和六年　一月二十二日　一月三十一日　二月十五日
二月二十八日　三月十三日

【文責】中野孝昭

令和五年度　研究活動報告

基礎研究プロジェクト

# 布教研究（『三部経』説教の研究―讃題・フレーズ集の作成―）

## 【研究担当者一覧】

研究主務　宮入良光

研究員　青木篤史　井野周隆　郡嶋昭示　北條竜士

研究スタッフ　岩井正道　大髙源明　工藤大樹　後藤真法　遠田憲弘　中川正業　宮田恒順　八木英哉　山田紹隆

## 【研究目的】

当研究班は、寺院・僧侶の布教教化活動について、主に布教師の視点から研究を行うものである。令和五年度は、「『三部経』説教の研究―讃題・フレーズ集の作成―」をテーマとし、後述の日程で研究会を開催した。

浄土宗の説教には、「讃題」（経文や祖師法語の一節）を頂戴し説き示し、称名念仏を結勧するという型がある。仏教徒として、何故我々は念仏行を頂戴し実践し布教するのか。仏教の教理（無常・無明・因果・苦・生死輪廻／仏の智慧、慈悲、覚り…）に立ち返って法を説くことを考える。

そこで本研究は、仏説を直に頂戴してお伝えすることを意識し、『三部経』説教を想定した「讃題・フレーズ集」作成を目的とする。そしてこれは従来の檀信徒を対象とした法話はもちろんのこと、教化の裾野を広

げるため、幅広い聴衆に対する仏教法話についても参考となる資料を意識したものである。

**【研究内容】**

・本研究は、三カ年の期間を予定している。

令和五年度…『無量寿経』巻上

令和六年度…『無量寿経』巻下

令和七年度…『観無量寿経』『阿弥陀経』

・本年度は、『無量寿経』巻上より讃題を選定した。

・選定した各讃題について、①〈讃題〉②〈現代語訳〉③〈キーワード／設定〉④〈キャッチフレーズ〉⑤〈語義・用語解説〉⑥〈解説〉⑦〈法話のポイント〉（ポイント・法話原稿など）というフォームに基づき、研究班員一名が執筆を担当した。執筆原稿は、研究会にて検討を加えた。

・①は『浄土宗聖典』第一巻より、②は『【現代語訳】浄土三部経』より引用させていただいた。

**【研究成果】**

令和五年度の研究成果は、「『三部経』説教の研究―讃題・フレーズ集の作成―（一）『無量寿経』巻上」と題して、『教化研究』本号の研究成果報告に掲載した。

**【研究期間】**

令和五年四月～令和八年三月（三年計画の一年目）

**【研究会開催日】**

令和五年　四月十四日　四月二十九日　五月十二日

五月三十日　六月十四日　六月二十八日

七月二十日　七月二十六日　八月二十五日

八月三十一日　九月六日　九月二十九日

十月十一日　十月二十五日　十一月七日

十一月十七日　十二月一日　十二月十五日

十二月二十六日

令和六年　一月十二日　一月十七日　二月一日

二月九日　二月二十二日　二月二十八日
三月七日　三月十三日　三月二十九日

【文責】宮入良光

基礎研究プロジェクト

# 教学研究Ⅰ（東京）

## 【研究担当者一覧】

研究主務　　柴田泰山

研究員

研究スタッフ　坂上雅翁　小川法道　長尾光恵

## 【研究目的】

当研究班は善導大師の主著である『観経疏』の全文現代語訳化を目的としている。

本研究の必要性は、浄土宗の歴史において『観経疏』研究を専門とした研究者による全文現代語訳が存在しなかったこと、および未来の浄土宗学の発展への寄与を考え、中国浄土教研究を専門とする研究員による『観経疏』現代語訳化を行い、善導教学の一次資料を開示することである。

## 【研究内容】

本研究は、研究予定期間を八年とし、本年度が最終の八年目となり、『観経疏』の現代語訳の完成を目指すものである。研究員が北九州・奈良・滋賀・青森と日本全国に点在しているため、ほぼすべての研究会をオンライン（ｚｏｏｍ）にて実施し、毎週木曜日の午後九時から午前十二時までを研究会の実施時間としている。

【研究成果】

本年度を以て予定通りに『観経疏』の現代語訳を完成した。

【研究期間】

平成二十八年四月～令和六年三月（八年計画の八年目）

【研究会開催日】

令和五年　四月一日　四月五日　四月十三日
四月十九日　四月二十六日　五月三日
五月十日　五月十七日　五月二十四日
五月三十一日　六月七日　六月十六日
六月三十日　九月七日　九月二十一日
九月二十六日　十月五日　十月十二日
十月十九日　十一月二日　十一月九日
十一月十六日　十一月二十三日
十一月三十日　十二月七日　十二月十四日
令和六年　一月十一日　一月十八日　一月二十五日
二月一日　二月八日　二月十五日
二月二十二日　三月七日　三月二十一日

【文責】柴田泰山

基礎研究プロジェクト

# 教学研究Ⅱ（京都分室）

## 【研究担当者一覧】

研究主務　八橋秀法

研究員　齊藤舜健　市川定敬　井野周隆　田中芳道

研究スタッフ　粟飯原岳志　伊藤茂樹　岩井正道　岩谷隆法　小川法道　角野玄樹　曽田俊弘　永田真隆　松尾善匠　南宏信

## 【研究目的】

幕末の混乱や明治維新後の廃仏毀釈を乗り越え、浄土宗が現在も存立しているのは、江戸時代の数多の先徳たちが積み重ねた基盤に拠るところが大きい。それ故、現代の浄土宗の教学・布教・法式について考える際、江戸時代の浄土宗についての研究が必要となってくる。この観点に基づき、京都分室を中心に活動する本研究プロジェクトは、江戸時代の教学・布教・法式等の様相を明らかにすることを目的として研究を行っている。

## 【研究内容】

令和二年度から、四休庵貞極（一六七七～一七五六）の研究を行っている。本年度も引き続き、『四休菴貞極全集（以下『全集』）』所収の著作の精読を行っている。

貞極は、浄土宗僧侶のあるべき姿を示した教訓書『蓮門住持訓』の著者としても知られているが、教学・布教・法式の各分野で、多くの業績を残しており、後世に与えた影響と比べると体系的に研究されたことが非常に少ない。著作も全三巻の『全集』として活字出版されているが、校勘が不十分である印象が否めない。

『全集』冒頭の『五重廃立鈔』から研究に取り掛かっているが、文意の取りにくい箇所も多い。そこで、『五重廃立鈔』撰述の理由を述べた上巻の精読・現代語訳を終了した後、『五重廃立鈔』の前身書である『五重相承節要』『五重相承私記』の精読・現代語訳を行った。

『五重相承節要』は、伝書について述べた『五重廃立鈔』中巻（本・末）の原型ともいえる。初重から第五重の伝書のそれぞれについて、三巻七書を中心に要文を抜粋し、適宜、貞極が批評を加えている。書き下しテキストと現代語訳は、『教化研究』三十四号に研究成果報告として掲載済であるので、ご一覧頂きたい。

『五重相承私記』は、九箇条の伝目について述べた『五重廃立鈔』下巻の祖形である。塗香・坐具・自証門・授手印・五通五箇伝・口授・三種病人・未回心声聞・気息の九箇条の伝目について、文献的な裏付け（文証）を重視する観点から解説している。

貞極の主張の概略を、以上の研究によって押さえた上で、『五重廃立鈔』の残りの巻に取り掛かっている。『全集』を底本に、諸写本と対比し、表記を整え、註記を加えつつ、精読を行っている。

## 【研究成果】

本年度は、『五重相承私記』を読了、現代語訳の再確認を行った。その後、引き続き『五重廃立鈔』中巻（本）の精読に取り掛かっている。精読していく中で、読解しやすいテキストの作成を行っている。

## 【研究期間】

令和五年四月～令和六年三月（七年計画の四年目）

【研究会開催日】

令和五年　四月十一日　五月九日　六月二十日
七月十一日　八月二十九日　九月十二日
十月二十四日　十一月二十八日
十二月十二日
令和六年　一月三十日　二月十三日　三月二十六日

【文責】八橋秀法

令和五年度　研究活動報告

コーポレート業務

# 門葉アンケート調査

## 【研究担当者一覧】

研究員　今岡達雄　坂上典翁　井野周隆
西城宗隆　柴田泰山　名和清隆
八橋秀法　吉田淳雄　和田典善
岩井正道　斎藤唯衣

## 【研究目的】

平成元年の開所より三十有余年が経過し、総合研究所のあり方も再考する必要がある。そこで、浄土宗開宗八五〇年という大切な節目を迎えるにあたり、より良い研究所のあり方を構築するためアンケート調査を実施し、研究内容等に関する認知度等を伺うとともに、門葉各位が望む研究内容、研究成果の利用方法への要望を広く収集することを目的とした。

## 【研究内容】

二〇二三年六月、アンケートを実施した。アンケート調査の概要は次のようである。

＊調査名称：「浄土宗総合研究所に関するアンケート調査」

＊調査目的：浄土宗総合研究所・研究内容等に関する認知度、また研究内容や研究内容の門葉への還元方法等に対する要望を広く収集することにより、より

良い総合研究所のあり方を構築することを目的とした。具体的には、研究所の認知度、研究内容の認知度、『教化研究』『総研叢書』の認知・利用度、研究所HPの利用状況、シンポジウムへの参加状況、研究成果の活用、研究テーマの要望、研究所に期待することなどに関する質問を行った。

＊対象：住職、副住職、所属教師、寺庭婦人、寺族、その他の寺院に関係する人（浄土宗正住寺院五三七八ヶ寺へアンケート用紙を配布）

＊調査方法：アンケート用紙での回答、およびインターネット（パソコン、スマートフォンなど）による回答

＊有効回答数：一一三三票（＊多少の地域の偏りはあるが全教区より回答あり）

なお、アンケート結果（単純集計）は『宗報』二〇二三年二月号に掲載したのでご参照いただきたい。

## 【研究成果】

調査の結果から多くの情報を得ることができた。結果の一部は次のようである。

一、研究所や出版物等の認知度

・研究所の認知度（82・3％）、出版物（『教化研究』）の認知度（89・9％）は高い。しかし、研究内容の認知度（53・6％）は高いとは言えない。

・いずれの認知度も、東海、近畿、北陸、九州地域は低い傾向。

・三十才代回答者の認知度が低い。これは三十歳代での住職率の低さが関係しており、住職以外に情報が届きにくい現状があることが想定される。

二、関心のある研究内容

・回答者の五割以上が「研究内容に興味がある」。

・「浄土宗の教えに関するもの」、次いで「現代社会と寺院の関わりに関するもの」に興味。

・関東、東北、北海道は「現代社会と寺院の関わり

に関するもの」への興味が強い。

・六十歳代は「浄土宗の教えに関するもの」より「現代社会と寺院の関わりに関するもの」への関心がやや高く、「法式に関するもの」への関心は四十歳代から年齢が上がるにつれて徐々に減少傾向。

・今後取り組んでほしいのは、・今後の寺院運営について・教化について・他宗教他宗派について・現代社会との関わりについて・資料作成や調査の希望・僧侶養成や研究者の育成・寺院、僧侶の制度について　など。

三、研究成果の利用、シンポジウムの参加状況

・『教化研究』を開いたことがある人は86・4％。その四分の三程度が「興味のある箇所だけ読んでいる」。

・『教化研究』も『総研叢書』も、三十歳代は「読んだことがない」割合が高い。

・研究所の成果を利用したことある人は44・9％。東海、北陸、近畿、九州地域が低い傾向。

・講習会の内容や講師の選定に、総合研究所の成果や研究内容を利用したことがある人は18・6％。

・シンポジウム・公開講座に参加したことある人は約二割。関東、東北、中四国地域はやや高く、九州、北陸地域では低い割合。

得られた情報から、今後の総合研究所のあり方を考える、大きな手掛かりを得ることができた。

**【研究期間】**

令和五年四月～令和六年三月

**【研究会開催日】**

令和五年　五月八日　五月二十二日　六月十二日
　　六月十九日　六月二六日　十一月六日
　　十二月六日　十二月十九日
令和六年　一月十五日　二月五日　二月十九日
　　三月十四日　三月二十五日

【文責】名和清隆

研究成果報告

# 『黒谷上人語灯録』（和語）巻第十三　現代語訳③

黒谷上人語灯録巻第十三

厭欣沙門了恵集録

和語（やまとことば）第二之三　当巻に四篇あり。

九条殿下の北の政所へ進（まいら）する御返事　第九

鎌倉の二位の禅尼へ進（まいら）する御返事　第十

要義問答　第十一

大胡太郎へ遣わす御返事　第十二

黒谷上人語灯録（念仏生活の灯火とするために収集した法然上人の遺文集）第十三巻

厭欣沙門了恵集録（娑婆を厭い浄土を願う沙門了恵道光が集め収録した。）

黒谷上人語灯録　第二（和語）[1]の第三巻　当巻に四篇がある。

九条殿下の北の政所へ進上する御返事[2]　第九篇

鎌倉の二位の禅尼へ進上する御返事[3]　第十篇

要義問答　第十一篇

大胡太郎へ遣わす御返事　第十二篇

九条殿下の北の政所へ進する御返事

第九

畏りて申し上げそうろう。さては御念仏申させおわしましそうろうらんこそ世に嬉しくそうらえ。まことに往生の行には念仏がめでたき事にてそうろうなり。その故は弥陀の本願の行なればなり。余行はそれ真言止観の貴き行なりといえども、弥陀の本願にあらず。

また念仏は釈迦如来の付属の行なり。余行はまことに定散両門のめでたき行なりといえども、釈尊これを付属したまわず。また念仏は六方の諸仏の証誠の行なり。余行は顕密事理のやんごとなき行なりといえども、諸仏これを証誠したまわず。この故に様様の行多しといえども、往生の道には偏に念仏が勝れたる事にて

九条兼実公の夫人へ進上するお返事　第九篇

謹んでお返事申し上げます。さて、あなた様がお念仏をお称えになっておられることは、非常に喜ばしく存じます。極楽往生の行として、お念仏は実に素晴らしい行であります。なぜなら、お念仏は阿弥陀仏が本願に誓われた行であるからです。その他の行は、そもそも真言を唱えたり止観を実践したりするような尊い行(4)であっても、阿弥陀仏が本願に誓われた行ではありません。

またお念仏は釈尊が往生の行として私達のために伝え託された行であります。その他の行は、心を一つに定めて修める定善の行も、心が散乱しながらも修めることのできる散善の行も、共に素晴らしい行ではありますが、釈尊が往生の行として私達のために伝え託された行ではありません。また、お念仏はあらゆる世界の諸仏が必ず往生が叶うと証明された行であります。その他の行について言えば、顕教や密教における行や具体的な現象や普遍的な真理を明らかにする行は尊い行ではありますが、あらゆる世界の諸仏が必ず往生が叶

そうろうなり。

しかるを往生の道に疎き人の申す様は、余の真言止観の行に堪えざる易きままの勤にてこそ念仏はあれと申すは、極めたる僻事（ひがごと）にてそうろうなり。その故は余行をば弥陀の本願にあらずと嫌い捨てて、また釈尊の付属にあらざる行をば簡（えら）び止（とど）め、また諸仏の証誠にあらざる行をば止め収めて、今ただ弥陀の本願に任せ、釈尊の付属に依り、諸仏の証誠に随いて、愚かなる私の計（はからい）をば止めて、これらの故強（ゆえつよ）き念仏の行を信じ勤めて往生をば祈るべしと申す事にてそうろうなり。されば恵心の僧都の『往生要集』に「往生の業は念仏を本とす」と申したるはこの意なり。

うと証明された行ではありません。このようなわけで、行にはいろいろ多くありますが、極楽往生の道としては、ただただお念仏が勝れているのです。

それなのに、往生の道に明るくない人達が、「真言の行や止観の行に耐えられない者のため、たやすく実践できる行としてお念仏があるのだ」などと言っているのは、まったく道理に合わないものです。なぜなら、まずもってお念仏以外の行は、阿弥陀仏が往生のための行として本願に誓われていないので私達は厭い捨て、また釈尊が往生のための行として伝え託されていないので私達は選り分けて除き、あらゆる世界の諸仏が必ず往生が叶う行として証明されていないので私達は封印しておくのです。そして、ただちに迷うことなく、阿弥陀仏の本願にわが身を任せ、釈尊が私達に伝え託して下さったことを信じ、あらゆる世界の諸仏が証明されている教えに素直に従って、愚かな凡夫である私達のはからいを止めて、こうした弥陀・釈尊・諸仏と私達とのご縁が強く結ばれているお念仏の行を信じ修めて、浄土往生をお祈り下さい、と申し上げているのです。ですから、恵心僧都源信の『往生要集』に「往生のための修行は、念仏を根本とする」[5]と記されているのは、ここに述べたことと同じ意味なのです。

今はただ余行を止めたまいて一向に念仏にならせたまうべし。念仏にとりても一向専修の念仏がめでたき事にてそうろうなり。その旨は三昧発得の善導和尚の『観経疏』に見えてそうろう。

しかのみならず『双巻経』には「一向専念無量寿仏」と説きたまえり。およそ一向のことばは二向三向に対して、偏に余の行を簡び捨て嫌い除く意なり。君達なんどの御祈の料なんどにも念仏がめでたき事にてはそうらえば、『往生要集』に余行の中にも念仏勝れたる由見えてそうろう。

また伝教大師の『七難消滅の法』にも念仏を勤むべしと見えてそうろう。およそ十方諸仏三界の天衆の擁護したまう行にてそうらえば、現世後生の御勤、何事かこれに過ぎそうらわん。今はただ一向

今すぐに迷うことなくその他の行をお止めになって、ひたすらお念仏をお称え下さい。お念仏に関していえば、他の行を交えず、ただひたすらお念仏をお称えするのが素晴らしいことなのです。その素晴らしさについては、三昧発得をされた善導大師の『観経疏』[7]に説かれています。

それだけではなく、『無量寿経』には、「ただひたすら無量寿仏の御名を称えよ」[8]と説かれています。総じて「一向」という言葉は、あれもこれも兼ねて行うという「二向」や「三向」という言葉に対するもので、ひとえにその他の行を選び捨てて、嫌い除くという意味です。あなた方の御祈祷の手段としても、お念仏は素晴らしい功徳がありますので、『往生要集』[9]には、様々な行の中でもお念仏が優れている旨が見てとれます。

また伝教大師最澄が著した『七難消滅護国頌』[10]の中にも、お念仏を勤めるように勧められています。お念仏はあらゆる世界にましますす諸仏や天界におられる神々が加護して下さる行なのですから、現世の平安と後世の往生を願う勤めとして、お念仏に勝る勤めなどございましょうか。ただちに迷うことなく、ひたすらお念仏一行をお

専修の但念仏にならせたまうべくそうろう。

鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事　第十

御文詳しく承りそうらいぬ。さては念仏の功徳は仏も説き尽くし難しとのたまえり。また智慧第一の舎利弗、多聞第一の阿難も、念仏の功徳は知り難しとのたまいし広大善根にてそうらえば、まして源空なんどは申し尽くすべくもそうらわず。

源空、この朝に渡りてそうろう聖教を随分に披き見そうらえども、浄土の教文はこの朝に渡らずと考えそうらいて、僅かに震旦より取り渡してそうろう聖教の心をだにも一年二年なんどには申し尽くすべくも覚えそうらわず。さりながらも

称えするお姿におなりになるのがよろしいでしょう。

鎌倉の二位の禅尼へ進上する御返事　第十

お手紙の内容は詳細に承りました。さて、お念仏の功徳は仏でさえ説き尽し難いとおっしゃっています。またお釈迦さまの弟子の中でも、智慧第一と讃えられた舎利弗尊者や多聞第一と讃えられた阿難尊者でさえも、お念仏の功徳は知り尽くし難いとおっしゃった程、広大な功徳を具える行でありますから、ましてやこの源空などにその功徳を説き尽くせるものではありません。

私、源空はわが国に渡ってきた経論をできるだけ開いて拝見してきましたが、浄土の教えを記した典籍は、すべてわが国に渡ってきたとは考えられません。[11] わずかに中国より請来した経論の主旨だけでも一年、二年などではとても説き尽くすことができるとは思えません。しかしながら、仰せをいただいておりますので、少々、浄土の教えについて申し述べようと思います。

仰を蒙りてそうらえば、申し述べそうろうべし。

まず念仏を信ぜざる人人そうらいて申しそうろうなる事は、熊谷入道、津戸三郎は無智の者なればこそ余行をばせさせずして念仏ばかりをば法然房は勧めたれと申しそうろうなる事、極まりなき僻事にてそうろう。

その故は念仏の行はもとより有智無智を簡ばず、弥陀の昔誓いたまいし本願は遍く一切のためなり。無智のためには念仏を願とし、有智のためには余行を願としたまう事なし。十方世界の衆生のためなり。有智無智、善人悪人、持戒破戒、貴きも賤きも、男も女も隔てず、もしは仏在世の衆生、もしは仏の滅後の衆生、もしは釈迦の末法万年の後三宝みな失せて後の衆生まで、ただ念仏ばかりこそ現

まず、お念仏を信じていない人々がおそばに伺って、その人々が、「熊谷次郎直実や津戸三郎為守は無智の者であるからこそ、他の行をさせずにお念仏だけを法然房が勧めているのだ」と申し上げているそうですが、まったくの事実無根であります。

なぜなら、そもそもお念仏の行は、智慧のある人、智慧のない人を選ぶものではなく、阿弥陀仏がその昔、法蔵菩薩として修行されていた時に誓われた本願は、すべての人々のためであるからです。智慧のない人のためにお念仏を本願の行とされ、智慧のある人のために他の行を本願の行とされたわけではありません。すべての人々のためなのです。智慧のある人もない人も、善人も悪人も、戒を守っている人も守っていない人も、身分の高い人も低い人も、男性も女性も、一切の隔てなく、お釈迦さまがいらっしゃった時代の人々も、入滅された後の人々も、さらには末法の時代が過ぎて仏法僧の三宝がみな滅んだ後の法滅の時代の人々までも、ただお念仏一行だけが、(12)

当の祈祷とはなりそうらわめ。

善導和尚は弥陀の化身にて、殊に一切衆生を哀れみたまいて、一切の聖教を勘えて専修念仏を勧めたまえるも広く一切衆生のためなり。方便の時節末法に当たりて、今の教これなり。されば無智の人のみに限らず。広く弥陀の本願を憑みて遍く善導の御心に随いて、念仏の一門を勧めそうらわんに、いかでか無智の人のみに限りて有智の人を隔てて往生させじとはしそうらわんや。

もししからば弥陀の本願にも背き善導の御心にも契うべからず。しかればこの辺に詣で来て往生の道を尋ねそうろうには、有智無智を論ぜず、偏に専修念仏を勧めそうろうなり。

さように専修念仏を申し止めんと仕現世を幸せに過ごし、来世にも極楽往生を遂げるための祈りとなるに違いありません。

善導大師は阿弥陀仏の化身であり、特にすべての人々を哀れまれて、すべての経論を考え合わせて専らお念仏を修めることを勧められました。それも、広くすべての人々のためです。今こそ、阿弥陀仏が人々を救い摂る手だてを発揮する末法にあたっており、お念仏の教えがまさにそれなのです。[13] ですから、私法然は、仏道に無智な人だけに限らず、すべての人々のために、広く阿弥陀仏の本願を頼りとして、偏に善導大師の御心に随って、お念仏の教えをお勧めしておりますのに、どうして、仏道に暗い無智の人に限ってお念仏を勧め、智慧のある人をのけ者にして往生させまいなどといたしましょうか。

もしそのように理解するならば、阿弥陀仏の本願にも背き、善導大師の御心にも相応しません。そのため、私のもとに訪ねて来て、[14] 往生の道を尋ねる方に対しては、智慧のあるなしにかかわりなく、ただひたすらお念仏を称えることをひとえに勧めております。

そのように専らお念仏を称えることを止めさせようとする人は、

る人は、前の世に念仏三昧得道の法門を聞かずして後の世にまた定めて三悪道に還るべき者の、しかるべくてさように申しそうろうなり。その故は聖教に広く見えてそうろうなり。

これはすなわち「修行することあるを見ては毒心を起して、方便して競いて怨を生す。かくのごときの生盲闡提の輩は、頓教を毀滅して永く沈淪す。大地微塵劫を超過すとも、いまだ三途の身を離れんこと得べからず」と説きたまえり。

この文の意は、浄土を欣い念仏を行ずる人を見ては毒心を起し、僻事を巧み廻らして様様の方便をなして専修念仏の行を破り、怨を生して申し止むるにそうろ

過去の世においてはお念仏による極楽浄土への往生の教えに耳を傾けることなく、未来の世には再び間違いなく三悪道に戻って行くべき人であって、だからこそ当然のごとく、そのように申してしまうものなのです。その理由は、仏典に広く示されています。

すなわち、このことは、善導大師が「（悪しき時代に生きる者は、）人々が修行している姿を見て、邪悪な心を発して、巧みに彼等をそそのかして、互いに競わせ怨みを生じさせている。このように仏の教えに巡り会っても信心を発すことなく、そればかりか誹謗を重ねる者は、極楽浄土において速やかにさとりを開く教えを打ち壊し[15]滅ぼすのであって、永く生死を繰り返す輪廻の世界に沈み続けるのである。そして、計り知れないほどの永い時間を経たとしても[16]、いまだその程度では地獄・餓鬼・畜生といった三悪道の世界を離れ出ることはできない」[17]とお説きになっています。

この文言は、（悪しき時代に生きる者が、）極楽浄土への往生を願いお念仏を称える人を見て、邪悪な心を発し、悪事を企んであれこれと策略し、様々な手だてで彼等をそそのかして、専らお念仏を称える行を否定し、念仏の行者に敵愾心を発して、お念仏を止めさせ

うなり。

かくのごとくの人は生まれてより仏法の眼しいて善根の種を失える闡提人の輩なり。この弥陀の名号を称えて長き生死を離れて常住の極楽に往生すべけれども、この教法を謗り滅ぼしてこの罪によりて永く三悪道に沈む。かくのごとくの人は大地微塵劫を過ぐれども、永く三途の身を離れん事あるべからずというなり。

しかればすなわちさように僻事を申さん人をば却りて哀れみたまうべきなり。さほどの罪人の申さんによりて専修念仏に懈怠をなし、念仏往生に疑をなし不審を致さん人は、いうに甲斐なき事にこそそうらわめ。およそ弥陀に縁浅く往生時至らぬ者は、聞けども信ぜず、念仏の者を見ては腹立ち、声を聞いては瞋をなようとする、という意味なのです。

このような人は、生まれて以来、仏法を見る眼が曇っていて、仏の教えを信じずによい果報をもたらす種を失っている者と同類なのです。こうした人でも、この阿弥陀仏の名号を称えて、際限なく生まれ変わり死に変わりを繰り返す輪廻を離れて、常に真実の世界に住み続けることができる極楽浄土に往生できるのですが、かえって、この教えを謗り排斥してしまい、その罪によって永く三悪道に沈み込んでしまうのです。このような人は、計り知れないほどの永い時間を経たとしても、永い間、三悪道の世界を離れることはできない、と言うのです。

ですから、つまりそのように事実と異なる誤ったことを申しているような人をかえってお哀れみになればよいのです。それほどの罪人が申しているようなことを受け入れてしまい、専らお念仏を称えることを疎かにして、お念仏による浄土往生に疑問を持ち、不審を抱くようになってしまった人については、残念ながら、今の私達では何を言っても無駄になってしまうことでしょう。そもそも阿弥陀仏とのご縁が浅く、まだ極楽往生への思いの及ばぬ人は、念仏往生の教えを聞いても信じることはありません。そればかりか、お念仏

して、悪しき事なり、なんど申すは経論にも見えざる事を申すなり。

御心を得させたまいて、いかに申すとも御心ばかりは御変改そうろうべからず。強ちに信ぜざらん人をば御勧めそうろうべからず。仏なお力及びたまわず、いかにいわんや凡夫の力は及ぶまじくそうろう。

かかる不信の衆生を思えば過去の父母兄弟親類なりと思召しそうらいて、慈悲を起して念仏申して極楽の上品上生に参りて、悟を開きて生死に還り入りて誹謗不信の人をも迎えんと思召すべき事にてそうろうなり。この由を御心得そうろうべきなり。

一つ、雑行の人人余の功徳を修せんには、財宝をあい助成して思召すべき様は、している者を見ては腹を立て、お念仏の声を聞いては怒りをおぼえ、お念仏は悪事であるなどと経論にも書かれていないことを申しているに過ぎないのです。

いずれにせよ、そういうものだと心得られて、たとえどんなことを言われても、お念仏の信仰だけは心変わりしてはいけません。頭から信じようとしない人に無理にお念仏の教えをお勧めになってはいけません。たとえ仏であっても力が及ぶものではありません。ましてや凡夫の力が及ぶはずなどありません。[18]

このような不信の人々を哀れに思うのであれば、過去の世においては父母や兄弟姉妹、あるいは親類であったとお思いになって、慈悲の心を発し、お念仏を称えて、極楽浄土の上品上生[19]に往生して、速やかにさとりを開き、この生死を繰り返す迷いの世界に再び還り、御仏の教えを謗ったり、信じようとしたりしない人をも往生させようとお思いになるのが良いのです。こうした事情を心得られるべきです。

一つ。雑多な行を修めている人々がお念仏以外の善行を修めて功徳を積もうとしていることに対して、あなたがさまざまな財宝を援

これはこれ一向専修にて決定して往生すべき身なり。他人の遠き道を我が近き道に結縁せさせん、と思召すべきなり。その上に専修を妨げそうらわざらんは、結縁せんに過なし。

一つ、人人の堂を造り、仏を造り、経を書き、僧を供養せんをば、よくよく心を乱らずして信を発して、かくのごとくの雑善根をも修せしめたまえ、と御勧めそうろうべし。

一つ、この世の祈に念仏の心を知らずして仏神にも申し、経をも誦し書き、堂をも造らば、それも前のごとくそうろうべし。せめてはまた後世のためにせばこそそうらわめ。その要なし、と仰せそうろうべからず。専修を障うる行にもあらざりけりと思召しそうろうべし。

助するときにお心がけになるべきことは、「私自身はただひたすら称えるお念仏の行によって浄土往生が決定している身である。種々雑多な行を修めている人が遠回りな道を歩んでいるのを、こちらの念仏往生という近道にご縁を結ばせてあげよう」とお思いになればよいのです。その上で、専らお念仏を称えることを妨げないならば、さまざまな仏道修行に縁を結ぶことに罪はありません。

一つ。多くの人々[20]がお堂を建立し、仏像を造立し、経典を書写し、僧侶に供養したいと願っているのであれば、彼等の心を乱さないよう慎重に対応して、浄土往生を願う心を発させた上で、「こうしたお念仏以外の種々雑多な善根をもお修めなさい」と勧められるのがよろしいでしょう。

一つ。お念仏の心をわきまえないままに、この世をより良く過ごせるように仏や神に祈りを捧げ、経典を読み、写経をし、お堂を造立するならば、前段にも述べたようにお勧めするのがよろしいでしょう。[21] 少なくとも、それによって後の世の極楽への願いを発すきっかけになるならば、それも結構なことでしょう。「それらを修める必要はない」などとおっしゃってはいけません。専らお念仏を称えることを妨げる行ではないとお思いになるべきです。

一つ、念仏を申す事様様の義そうらえども、ただ六字を称うるばかりに一切は摂まりてそうろうなり。意には願を憑み、口には名号を称えて、手には数を取り、常に心に係くるが究めたる決定の業にてそうろうなり。念仏の行はもとより行住坐臥時処諸縁を簡ばず、身口の不浄をも嫌わぬ行にてそうらえば、楽行往生とは申し伝えてそうろうなり。

ただしその中にも心を浄くして申すをば第一の行と申しそうろうなり。ただ浄土を心に係くれば心浄の行法にてそうろうなり。かように御勧めそうろうべし。

さように常に申させたまわんをばとかく申すべき様そうらわず。我が身もしかるべくて往生この度すべしと思召しそうろうべし。ゆめゆめこの心よくよく強くならせたまうべし。

一つ。お念仏を称えるにあたっては様々な意義がありますが、ただ〈南無阿弥陀仏〉と六字の名号を称えるだけの中に、ありとあらゆる功徳が込められているのです。[22] 心には阿弥陀仏の本願を頼み、口にはその名号を称えて、手には数珠を持ち、常に阿弥陀仏に心を掛けていることが、必ず往生が叶う、この上ない行なのです。お念仏を称えることは、もともと歩いていても止まっていても座っていても横になっていても、時や場所、様々な条件を選ぶことなく、たとえ見かけは身体や口が汚れていようともそれを区別しない行[23]でありますから「楽行往生」[24]と申し伝えられているのです。[25]

ただ、そうはいっても心を清らかにしてお念仏を称えることが最も大切な行なのです。専らお浄土のことを心にかけていれば、自ずと心清らかな行となるのです。このように他の人にもお勧め下さい。

あなた様が、常にそのように仰っておられるならば、私からあれこれと言うことはございません。あなた様も「自身は、まさに浄土往生にふさわしい者であって、今生こそは往生が叶うのだ」とお思いになるのがよろしいでしょう。努めてこの心を十二分に強くなさるべきです。

一つ、念仏の行を信ぜぬ人に遇いて論じ、またあらぬ行の人人に向かいて執論そうろうべからず。強ちに別解異学の人人を見ては侮り譏る事そうろうまじ。いよいよ重罪の人にもなさん事不便にそうろう。同じ心に極楽を欣い念仏を申さん人をばたとい卑賤の人なりとも父母師匠にも劣らず思召すべし。

今生の財宝の乏しからんにも力を加えたまうべし。さりながらも少しも念仏に心を係けそうらわんをばよくよく勧めたまうべくそうろう。これも弥陀如来の御宮仕と思召しそうろうべし。釈迦如来滅後よりこのかた次第に小智小行に罷りなりてそうろう。我も我もと智慧あり顔に申す人人は過にてそうろうべし。せめては録内の経教をだにも聞かず見ず、いかにいわんや録の外の経教を見ざる人の智

一つ。お念仏の行を信じない人に会って論議し、またお念仏の教えと理解や実践が異なる人々に向かって、論争を仕掛けてはいけません。私達と異なる見解や学びの人々を見て、決して軽蔑したり非難したりするようなことがあってはいけません。ともすると、ますます彼等を重罪の人にしてしまうことが気の毒だからです。同心に極楽往生を願い、お念仏を称える方については、たとえ身分が低いとされる人であっても、両親や恩師にも劣らないほど大切な方々であると考えるべきです。

今、この世において財宝に恵まれない人にも、手を差し伸べるべきです。それはそのままとしても、わずかであってもお念仏に心を向けようとしている人には、心を込めてお念仏をお勧めするべきです。これも阿弥陀仏への宮仕えであるとお考えになるべきでありましょう。釈尊が入滅されてから今日まで、だんだんと智慧が浅はかとなり、修行も形ばかりになっています。それにもかかわらず、我こそはと智慧がありそうな顔をして仏の教えを言い募る人々は、まことに罪深いことです。[27] 強いて言うならば、経録に所収されている仏典すら紐解くこともなく、ましてや経録に所収されていない仏典など紐解くことをされたことなどないような人が、いかにも智慧

慧あり顔に申すは、井の中の蛙に似たり。

随分に震旦日本の聖教を取り集めて披き勘えてそうろうに、念仏を信ぜぬ人は前の世に重罪を造りて地獄に久しくありて、また地獄へ疾く還るべき人なり。

たとい千仏世に出でて、念仏は全く往生の業にあらず、と教えたまうとも信ずべからず。これは釈迦如来より始めて恒河沙の仏の証誠したまえる事なればと思召して、御こころざし金剛よりも堅くして、一向専修は御変改そうろうべからず。

もし論じ申さん人をばこれへ遣わして、立て申さん様を聞け、と仰せそうろうべし。様様の要文、書き記して参らすべくそうらえども、ただこれに過ぎそうろうまじ。

また娑婆世界の人は余の浄土を欣わん事は、弓なくして天の鳥を取り、足なくがありそうな顔をしているのは、「井の中の蛙」に似ています。

可能な限り中国や日本の聖教を取り集めて、紐解いて学びましたところ、お念仏を信じない人は、前世において重い罪を造り続け、長い間地獄にいたものの、再び来世には地獄に還っていくような人であります。

たとえ、千の御仏がこの世にお出ましになり、〈お念仏は浄土往生のための行では決してない〉と教えられても信じてはいけません。このことは釈尊をはじめ、ガンジス河の砂の数ほどの多くの御仏が真実であることを証明されたことであると受けとめられて、浄土往生の志を金剛石よりも堅くして、ただひたすらお念仏を称えるという姿勢から心変わりしてはいけません。

もしも、これ以上議論したい人がいるならば、〈私、源空のもとへ手紙などを遣わして、浄土宗を立宗した真意を尋ねなさい〉とおっしゃってください。経典などからいくつかの肝要な文を書き記そうと考えてはいましたが、そうはいっても、これまで述べてきたことで尽きております。

またこの迷いの世界である娑婆に生きる人が、極楽以外の浄土への往生を願うことは、弓がないのに空を飛ぶ鳥を捕らえ、足を支え

して高き梢の花を折らんとせんがごとし。必ず専修念仏は現当の祈となりそうろうなり。これも経の説にてそうろうなり。

また御内の人人には九品の業を人に随いて始め終り堪えそうらいぬべきように御勧めそうろうべし。あなかしこ、あなかしこ。

要義問答　第十一

まことにこの身には道心のなき事と病ばかりや嘆にてそうろうらん。世を営む事なければ四方に馳走せず、衣食取るに欠けたりといえども身命を惜しむ心切ならねば強ちに憂とするに及ばず。

心を安くせんためにも捨てそうろうべき世にこそそうろうめれ。いわんや無常るはしごや脚立のようなものがないのに高い木の枝に咲いている花を折ろうとしているようなものです。ただひたすらお念仏を称える専修念仏は、必ずや現世にも来世にも通じる祈りとなるものです。これも経典の中に説かれていることです。

また、ご家族の方々には、極楽浄土に往生するための行であるお念仏を、その器量に応じて、決して絶えることがないように修めるようにとお勧め下さい。謹んで申し上げます。

要義についての問答　第十一

まったくもってこの身には、さとりを目指す志がなかなか発らないことと、病気を患うことばかりが悲しみとなるのでしょうか。私（法然）は俗世に暮らしていないので、あちらこちらへと奔走する必要もなく、また、着る物や食べ物に困ったとしても、この身命を惜しむ心がそれほど強くないので、むやみに思い患う必要もありません。

心を安らかにするためにも、俗世は厭い捨てるべきものでありましょう。いうまでもなく、無常の世の悲しみは目の前に満ち広がっ

の悲みは目の前に満てり。いずれの月日をか終りの時に期せん。栄ある者も久しからず、命あるものもまた憂あり。すべて厭うべきは六道生死の境、欣うべきは浄土菩提なり。天上に生まれて楽しみに誇るといえども五衰退没の苦しみあり。人間に生まれて国王の身を受けて一天下を従うといえども生老病死愛別離苦怨憎会苦、一事も免るる事なし。

たといこれらの苦なからんすら三悪道に還る恐れあり。心あらん人いかが厭わざるべき。受け難き人界の生を受けて遇い難き仏教に遇う。この度出離を求めさせたまえ。

問う、大方さこそ思う事にてそうらえども、かように仰せらるることばにつきて左右なく出家をしたりとも、心に名利ています。いずれの時が命の終わりとなると予期することなどできましょうか。[29] たとえ栄華のなかにある者でも長くは続かず、生ある者にもまた嘆き悲しみがあります。およそ厭い捨てるべきは生き死にを繰り返す六道という境界であり、欣うべきは浄土に往生してさとりを開くことです。たとえ天上界に生まれて享楽にふけったとしても、いずれはその身に五種の衰えが[30]あらわれて苦しみ、たとえ人間界に生まれて国王の身となって世界中を統治したとしても、生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦などの苦しみから[31]は、どれ一つとして逃れることなどできません。

たとえ、こうした苦しみを受けないまでも、地獄・餓鬼・畜生の三悪道に堕ちてしまう恐れがあるのです。道理をわきまえている人ならばこの生き死にを繰り返す六道という境界を厭わないでいられようはずがありません。人としてこの世に受け難い命を授かり、遇い難い御仏の教えに出会ったのですから、今生こそは生まれ変わり死に変わりを繰り返す迷いの世界から離れ出ようと志して下さい。

お尋ねします。おおよそ、その通りだと思いますが、このように、お師匠様のおっしゃるお言葉にしたがい、ともかく出家はしたものの、心は名声と利益を求めることから離れられず、「道心がない」

を離れたる事もなく、無道心にて人に謗(そしり)をなされん事いかがと覚えそうろう。在家にありて多くの輪廻の業を増さんよりは善き事にてやそうろうべき。

答う、戯(たわむ)れに尼の衣を着、酒に酔いて出家をしたる人、みな仏道の因となりきと旧きものにも書き伝えられてそうろう。

『往生十因』と申す文には、勝如聖人の父母、ともに出家せし時、夫は年四十一、妻は三十三なり。修行の僧をもて師としき。師、誉めていわく。「衰老にも至らず、病患にも臨まず、今出家を求む。これ最上の善根なり」とこそはいいけれ。

釈迦如来、当来導師の慈尊に付属したまうにも「破戒重悪の輩(ともがら)なりというとも、頭(こうべ)を剃り衣を染め袈裟を掛けたらん者をばみな汝に付(つ)く」とこそは仰せられてそ

などと人から謗られることは、いかがなものかと思っております。在家にあって、輪廻をもたらす行為を多く増すよりも、出家をすることは善いことなのでしょうか。

お答えします。ある人がふざけて尼僧の袈裟を着けたことが遠因となって出家したり、またある人が酒に酔って仏に救いを求めたことを契機に出家したり、これらのことがみな仏道に縁を結ぶ原因となった、と古い書物に書き伝えられております。[32]

永観律師の『往生拾因』という書物には、「勝如聖人[33]の父母がともに出家する際、夫の年齢は四十一歳、妻は三十三歳であった。行を積み重ねた僧を師として出家した際、その師は、大いに褒めて〈老齢による衰えを迎える前に、また、病気による患いに向き合う前に、今まさに出家を求めていること、これはこの上ない善根である〉と語ったという」[34]と述べられています。

釈尊が、将来的に仏となり世を導く弥勒菩薩に法を伝えることを託された際にも、「戒を破り、重い悪事を犯した輩であったとしても、髪を剃り、墨染めの衣を着て、袈裟を掛けた者は、みな汝に委ねる」[35]と確かにおっしゃっています。それ故、破戒した者であったと

うらえ。されば破戒なりといえども、三会得脱なお憑(たのみ)あり。

ある『経』の文には「在家の持戒には出家の破戒は勝れたり」とこそは申してそうらえ。まことに仏法流布の世に生まれて出離の道を知りて解脱幢相(どうそう)の衣を肩に掛け釈氏に連なりて仏法修行せざらんは、まことに宝の山に入(い)りて手を空しくして還る例(ためし)なり。

問う、まことに出家なんどしてはさすがに生死を離れ菩提に至らん事をこそは営みそうらえ。いかやうにか勤めいかようにか願いそうろうべき。

答う、『安楽集』にいわく「大乗の聖教によるに二種の勝法(しょうぼう)あり。一つには聖道、二つには往生浄土なり」。穢土の中にしてやがて仏果を求むるはみな聖道門なり。諸法の実相を観じて証を得んとし、しても、出家した功徳によって、成仏された弥勒菩薩が説法を施す竜華三会に臨(36)み、そこで解脱する機会に恵まれることとなるのです。

ある『経』には、「在家のまま戒を守ろうとするよりも、戒を破ってしまっても出家をした方が、その功徳は勝れている」(37)と説かれております。まったくもって、仏の教えが広まっているこの世に生まれて、迷いの世界を離れ出るための道を知り、出家して袈裟(38)を掛け、釈尊の仏弟子に連なったにも関わらず、仏の教えに基づいて修行しないということは、誠に宝の山に入りながら、何も手にすることなく還って行くようなものです。(39)

お尋ねします。実際に出家した以上は、やはり、生まれ変わり死に変わりを繰り返す迷いの世界を離れ、さとりの境地に至ろうとすることこそ日々の勤めとなりましょう。どのように勤め、どのように願うべきでありましょうか。

お答えします。道綽禅師の『安楽集』には、「大乗仏教の聖典によれば、仏教には二種類の勝れた教えがある。一つにはさとりの境地を目指す聖道の教え、二つには浄土往生を目指す浄土の教えである」(40)と説かれています。この穢れた娑婆世界にありながら、この身このままでさとりの境地を求める教えは、すべて聖道門です。あら

法華三昧を行じて六根清浄を求め、三密の行法を凝らして即身に成仏せんと思い、あるいは四道果を求め、また三明六通を願う、これみな難行道なり。

往生浄土門というはまず浄土へ生まれて彼にて悟をも開き、仏にも成らんと思うなり。これは易行道という。生死を離るる道道多し。いずれよりも入らせたまえ。

問う、これは我らがごときの愚かなる者は浄土の往生を願いそうろうべきか、いかん。

答う、『安楽集』にいわく「聖道の一種は今の時には証し難し。一つには大聖を去ること遥かに遠きによる。二つにはゆる存在や事象のありのままの相を正しく見極めてさとりを得るために、法華三昧[41]を修めて六根[42]が清らかになることを目指したり、衆生の身・口・意の三業と仏の身・口・意の三密の一体化を目指す行[43]を究めてこの身このままで仏になろうとしたり、あるいは煩悩を断つ修行過程である四道[44]によってさとりを目指したり、仏や菩薩が身につけている三明六通[45]の体得を目指すことなどがそれにあたります。これらはみな難行道です。

また、往生を志す浄土門とは、まず浄土に往生して、そこでさとりを開き、最終的には仏になろうと志すものです。この教えは易行道といいます。生まれ変わり死に変わりを繰り返す迷いの世界を抜け出すための道は種々多くあります。いずれの道からでもお入りください。

お尋ねします。そうであれば、この私のような愚か者は、浄土への往生を願うべきなのでしょうか。いかがでしょう。

お答えします。道綽禅師の『安楽集』には、「聖道門の教えでは、今のこの時代にさとりを開くのは難しい。なぜなら、一つには仏教の開祖である釈尊の入滅から遥かな時を経てしまったからであり、

理は深くして解は微きによる。

この故に『大集月蔵経』にいわく、我が末法の時の中の億億の衆生、行を起し道を修するにいまだ一人も得る者はあらず。まさに今末法五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみありて通入すべき路なり。

ここをもて諸仏の大悲、浄土に帰せよと勧めたまう。一形悪を造れどもただよく意を繋けて精を専らにして常によく念仏せよ。一切の諸の障自然に除こりて、定めて往生を得。なんぞ思い量らずして去る心なきや」といえり。

永観のいわく「真言止観は理奥くして悟り難く、三論法相は道幽かにして迷い易し」なんどそうろう。まことに観念にも堪えず、行法にも至らざらん人は浄土二つにはその教えは非常に奥深いのに対して、今の時代の人々の理解力が著しく劣っているからである。

このようなわけで『大集経』月蔵分には、〈私が入滅した後の末法の時代には、どれほど多くの人々が修行したところで、一人としてさとりを得る者はいないだろう〉[46]と説かれているのである。今がまさにその末法、五濁[47]にまみれた悪世であり、ただ浄土門の教えのみが、迷いの世界を離れて広く人々を浄土へと導く道である。

こうしたことから、もろもろの仏は大慈悲を垂れて、浄土門の教えに帰入するようお勧めになっているのである。一生涯、悪を犯し続けざるを得なかったとしても、ただ念入りに西方浄土に心を寄せて、誠の思いで常にひたすら念仏を称えよ。そうすれば、あらゆる妨げは自ずと取り払われ、必ず往生が叶うのである。どうして、こうした実情に思いを巡らすことをせず、穢土を捨て、浄土を求める心を発さないのだろうか」[48]と説かれています。

永観律師は、「真言や天台の教理は奥深いがためにさとり難く、三論や法相の道程は実に幽玄なために惑いやすいものである」[49]などと述べられております。まことに、静めた心に御仏のお姿などを思い描く観念にも堪えられず、いかなる仏道修行もまっとうすること

の往生を遂げて一切の法門をも易く解らせたまわんは善くそうらいなんと覚えそうろう。

問う、十方に浄土多し、いずれをか欣いそうろうべき。兜率の往生を願う人も多くそうろう。いかが思い定めそうろうべき。

答う、天台大師ののたまわく「諸教に讃むるところ多く弥陀にあり。故に西方を以ちて一準とす」と。また顕密の教法の中に専ら極楽を勧むる事、称計すべからず。

恵心の『往生要集』に十方に対して西方を勧め、兜率に対して多くの勝劣を立て、難易相違の証拠どもを引けり。尋ね御覧ぜさせたまえ。極楽この土に縁深し。弥陀は有縁の教主なり。宿因の故、本願の故、ただ西方を欣わせたまうべきとぞ

のできないような末法に生きる人々は、浄土への往生を遂げて、そこであらゆる教えをたやすくおさとりになるのがよかろう、と受けとめております。

お尋ねします。あらゆる方角に浄土は数多くありますが、そのうち、どちらの浄土への往生を願うべきでしょうか。弥勒菩薩がいらっしゃる兜率天への上生を願う者も多くございます。[50] どの浄土に思いを定めればよろしいでしょうか。

お答えします。妙楽大師湛然は、[51]「もろもろの経典が讃える仏の中、多くは阿弥陀仏である。それ故、専ら西方浄土を目指す教えを拠り所とし、それに順うべきである」[52]とおっしゃっています。また、顕教や密教の教えの中にも、専ら西方極楽浄土を勧める説示は枚挙に暇がありません。

恵心僧都源信の『往生要集』では、第一に十方の浄土に対して西方の極楽浄土を勧め、第二に兜率天と極楽浄土を総合的に対比する中、多くの勝劣と難易の相違があることを明示するため、様々な典籍を引用してその証拠としています。[53] 探し求め、ご覧になられて下さい。[54] 極楽浄土はこの娑婆世界と縁が深く、阿弥陀仏は私達と縁の深い教主なのです。それは、はるか昔、阿弥陀仏の前身である

覚えそうろう。

問う、まことにさては一筋に極楽を欣うべきにこそそうろうなれ。極楽を欣わんにはいずれの行か勝れてそうろうべき。

答う、善導釈してのたまわく「行に二種あり、一つには正行、二つには雑行。正の中に五種あり。一つには礼拝の正行、二つには讃歎供養の正行、三つには読誦の正行、四つには称名の正行、五つには観察の正行なり。

一つに礼拝の正行といは、礼せんにはすなわちかの仏を礼して余礼を雑えざれ。二つに讃歎供養の正行といは、讃歎せんにはすなわちかの仏を讃歎供養して余の讃歎を雑えざれ。三つに読誦の正行といは、読誦せんには『弥陀経』等の三部経法蔵菩薩が仏になろうと修行されたという過去の因があるからであり、そして私達衆生を救うために誓われた本願を成就されたからであります。ただただ、西方浄土を願うべきであるとお心得下さい。

お尋ねします。まことにその通りであって、だからこそ私達は、ひたすら極楽浄土への往生を願うべきでありましょう。極楽浄土への往生を願うには、どのような行が勝れているのでしょうか。

お答えします。善導大師は、「極楽浄土へ往生するための行に二種がある。一つには、阿弥陀仏や極楽浄土に直接関係する行（正行）であり、二つにはその他の雑多な行（雑行）である。正行の中に五種がある。一つには礼拝正行、二つには讃歎供養正行、三つには読誦正行、四つには称名正行、五つには観察正行である。

第一の礼拝正行とは、礼拝するにあたっては阿弥陀仏のみを礼拝し、他の仏・菩薩・諸天などへの礼拝をまじえてはならない。第二の讃歎供養正行とは、仏・菩薩の徳をほめ讃えるにあたっては阿弥陀仏のみを讃歎し、また供養を施して、他の仏・菩薩・諸天などへの讃歎をまじえてはならない。第三の読誦正行とは、経典を読誦するにあたっては『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の「浄土三

を読誦して余の読誦を雑えざれ。四つに称名の正行といは、称せんにはすなわちかの仏を称して余の称名を雑えざれ。五つに観察の正行といは、憶念観察せんにはかの土の二報荘厳等を観察して余の観察を雑えざれ。この五種を往生の正行とす。

この正行の中にまた二つあり、一つには正、二つには助なり。称名をもては正とし、礼誦等をもては助業と名づく。この正助二行を除きて自余の修善はみな雑行と名づく」。

また釈していわく「自余の衆善はみな善と名づくといえども、念仏にたくらぶれば全く比挍（ひきょう）にあらず」とのたまえり。浄土を欣わせたまわば一向に念仏をこそ部経」を読誦して、他の経典の読誦をまじえてはならない。第四の称名正行とは、名号を称えるにあたっては阿弥陀仏の名号のみを称えて、他の仏・菩薩・諸天などの名号を称えることをまじえてはならない。第五の観察正行とは、仏のお姿や浄土のあり様を心に想い描く観察の行やその想いを長く留める憶念の行を修めるにあたっては、阿弥陀仏のお姿や極楽浄土のあり様を観察して、他の仏のお姿や他の浄土のあり様を対象として観察することをまじえてはならない。これら五種の行を、極楽浄土へ往生するための正行とする。

この正行の中にもまた二種がある。一つには正しく阿弥陀仏の本願に定められた行であり、二つにはその本願の行に思いを向けさせる行である。五種正行のうち、第四の称名正行を正（正定業）とし、礼拝や読誦等の正行を助（助業）と名付ける。そしてこれらの正定業と助業を除き、その他の行はことごとく雑行と名付ける」[55]と解釈されています。

また善導大師は、「称名念仏以外のさまざまな行はすべて善行と名付けるといっても、称名念仏に比べればまったく比較にならない」[56]とおっしゃっています。ですから、極楽浄土への往生を願うのであれば、ただひたすらお念仏をお称え下さいませ。

は申させたまわめ。

問う、余行を修して往生せん事は叶いそうろうまじや。されども『法華経』に「すなわち安楽世界の阿弥陀仏の所に往く」といい、密教の中にも決定往生の真言あり。諸教の中に浄土に往生すべき功力を説けり。

また穢土の中にして仏果に至るという、難き徳をだに具せらん教を修行して、易き往生極楽に廻向せば、仏果に叶うまでこそ難くとも往生は易くそうろうべきとこそ覚えそうらえ。またおのずから聴聞なんどに承るにも「法華念仏一つもの」と釈せられそうろう。並べて修せんに何か苦しくそうろうべき。

答う、『双巻経』に三輩往生の業を説きてともに「一向専念無量寿仏」とのたまえり。『観無量寿経』に諸の往生の行

お尋ねします。称名念仏以外の行を修めて往生しようという願いは叶わないのでしょうか。しかし、『法華経』には「（経典を学んで、その説示のままに行を修めれば）速やかに極楽世界の阿弥陀仏のみもとへ往生する」[57]と説かれ、密教の中にも往生を揺るぎないものとする真言があり、さまざまな教えの中にも浄土往生が叶えられるという功徳を具えた行が説かれています。

また穢れたこの世界にいながらこの身このままでさとりを開くという、ありがたい功徳を具えた行を修め、その功徳を遂げやすい往生浄土のために振り向ければ、今生にさとりを開くまでには至らなくとも、往生することはたやすいものだと考えています。また説法などでたまたま耳にしたところでは、「『法華経』を読誦しても称名念仏を修めても、極楽浄土に往生するという功徳は等しい」[58]などと解釈されていました。この二つの行を並行して修めることに何か不都合があるでしょうか。

お答えします。釈尊は『無量寿経』において、浄土往生の様相を上・中・下に分けた三輩のそれぞれに共通する往生の行として「ただひたすらに阿弥陀仏を念じよ」[59]と説かれています。『観無量寿経』

を集めて説きたまう終りに阿難に付属したまうところには「汝、この語を持て。この語を持てというは無量寿仏の名を持つなり」と説きたまう。善導『観経』を釈してのたまうに「定散両門の益を説くといえども、仏の本願に望むれば、一向に専ら弥陀の名号を称せしむるにあり」という。

同じき『経』の文に「一一の光明は十方世界の念仏の衆生を照らして摂取して捨てたまわず」と説けり。善導釈してのたまわく「余の雑業の者を照らし摂取すということをば論ぜず」とそうろう。余行の者はふつと生まれずというにあらず。善導も「廻向して生まるべしといえども諸の疎雑の行と名づく」とこそは仰せられたれ。

では、浄土往生のためのさまざまな行をまとめて説かれてから、最後に阿難尊者に「そなたは、この言葉をよくよく胸に刻み、後世に伝えなさい。この言葉を胸に刻むとは、阿弥陀仏の名号を決して忘れることなく、後世に伝え遺すということである」[60]と告げられました。善導大師は『観経』のこの部分を解釈されて、「釈尊は、心を一つの対象に定めて行う善行（定善）と心が散乱しながらも修められる善行（散善）を説かれたが、阿弥陀仏の本願に照らし合わせてみれば、その本意はただひたすら阿弥陀仏の名号を称えさせることにある」[61]とおっしゃっています。

また同じく『観経』の経文に「阿弥陀仏から放たれるひと筋ひと筋の光明は、あらゆる世界において念仏を称える人々を照らして、一人も漏らさずお救い下さり、お見捨てになることはない」[62]と説かれています。善導大師はこの点について、「阿弥陀仏の光明が、称名念仏以外の種々雑多な行を修める者を照らして救い摂るということを説いているわけではない」[63]とおっしゃっています。ただし、お念仏以外の行を修める者はまったく往生できないということではありません。善導大師も「それらの功徳を振り向ければ往生できるものの、いずれも往生のためには疎遠で粗雑な行と名付ける」[64]とおっ

『往生要集』の序にも「顕密の教法、その文一つにあらず。事理の業因、その行これ多し。利智精進の人はいまだ難しとせず。予がごときの頑魯の者、あに容易からんや。この故に念仏の一門により経論の要文を集む。これを披きこれを修するに覚り易く行じ易し」という。

これらの証拠明らめつべし。教を簡ぶにはあらず、機を料らうなり。我が力にて生死を離れん事励み難くして、偏に他力の弥陀の本願を憑むなり。先徳たち思い量らいてこそは道綽は聖道を捨てて浄土の門に入り、善導は雑行を止めて一向に念仏して三昧を得たまいき。浄土宗の祖師、次第に相続げり。僅かに一両を挙しゃっています。

恵心僧都源信の『往生要集』の序文にも、「顕教にしても密教にしても、[65]その教えを説く文は一様ではない。事や理を行ずるにしても、[66]その行の種類は数多い。秀でた智慧を具え精進を重ねた者であれば、いまだにそうした修行の完成は難しいものではないだろう。しかし、私、源信のようにかたくなで道理をわきまえない愚か者が、どうしてたやすく修められるというのか。だからこそ、念仏の教えを中心にして、それに関する重要な文章を経典や論書から集めたのである。本書を紐解き修めるならば、さとりやすく行じやすいであろう」[67]と記されています。

これらのさまざまな典拠をよくよく見究めるべきです。私達が教えに優劣をつけて選ぶのではなく、私達の身の程にはどのような教えがふさわしいかを見定めることが大切です。私達の自力によって生まれ変わり死に変わりを繰り返す迷いの世界を離れようとしても、それを目指して励むことは難しいので、ただひたすら他力である阿弥陀仏の本願を頼みとするのです。先達方もそのように思い巡らされたからこそ、道綽禅師は聖道門の教えを捨てて浄土門に入り、善導大師は種々雑多な行を止めてひたすらお念仏を修められたのです。

ぐ。

この朝にも恵心、永観なんどいう自宗他宗、偏に念仏の一門を勧めたまえり。専雑二修の義初めて申すに及ばず。浄土宗の文多し、細かに御覧ずべし。また即身得道の行、往生極楽に及ばざらんやとそうろうは、まことにいわれたるようにそうらえども、何にも宗と申す事のそうろうぞかし。

善導の『観経疏』にいわく「『般若経』のごときは空慧をもて宗とす。『維摩経』のごときは不思議解脱をもて宗とす。今この『観経』は観仏三昧をもて宗とし、その結果、善導大師は、いつしか阿弥陀仏のお姿や極楽浄土の荘厳を目の当たりにできる三昧の境地を体得されたのです。浄土宗の祖師方は、このように脈々と教えを継承してこられましたが、今はわずかにお二方だけを取り上げました。

この日本にも恵心僧都源信や永観律師などというお念仏を旨とする宗の僧侶もそうでない宗の僧侶も、[68] ひとえにお念仏の教えを勧められました。仏道修行について専らお念仏を称える「専修」と、その他の諸行を雑多に修める「雑修」の二種に分類することは、私（法然）がはじめて申したわけではありません。浄土宗に関する要文は数多いので、それらを詳しくご覧になるのが良いでしょう。また、「この身このままでさとりを開くほどの行であれば、浄土往生を遂げるのに不足があるだろうか」という疑問は、広く言われているようですが、いずれの教えにも宗旨というものがあるので、それをわきまえることが大切です。

すなわち、善導大師の『観経疏』に「『大品般若経』はすべての存在が空であると知見する智慧をもって宗旨とする。『維摩経』は私達の思惟を超えたさとりの境地をもって宗旨とする。今、この『観経』は阿弥陀仏のお姿や極楽浄土のあり様を深く観想する観仏三昧

念仏三昧をもて宗とす」というがごとき。

法華は真如実相平等の妙理を観じて証を取る、現身に五品六根の位にも叶う、これらをもて宗とす。また真言には即身成仏をもて宗とす。

法華にも多くの功力を挙げて経を称むるついでに即往安楽ともいい、また即往兜率天上ともいう。これは便宜の説なり。往生を宗とするにはあらず。真言またかくのごとし。

法華念仏一つなりといいて、並べて修せよといわば、善導和尚は『法華』『維摩』等を誦しき。浄土の一門に入りにしよりこのかた一向に念仏してあえて余の行を雑うる事なかりき。

をもって宗旨とし、また阿弥陀仏の名号を称え続ける念仏三昧をもって宗旨とする」[69]と説かれている通りです。

天台宗では、あらゆる存在や事象のありのままの姿はすべて平等であるという真理を体得してさとりを開き、この身このままで五品の位や六根清浄の位[70]にも至れることを宗旨としています。また真言宗では、今生にこの身このままでさとりを開くことを宗旨としています。

天台宗では、読誦することなどによってもたらされる多くの功徳を挙げて『法華経』を褒め讃えて、それに続けて「速やかに極楽浄土に往生できる」[71]とも、また「速やかに兜率天に上って生まれる」[72]とも説かれています。しかし、こうした一節は、かたわらに説かれた教えであって、浄土往生を宗旨としているわけではありません。真言宗もまた同様です。

「『法華経』を読誦しても称名念仏を修めても極楽浄土に往生するという功徳は等しいのだから並行して修めなさい」と言われていることについては、たしかに善導大師もかつては『法華経』や『維摩経』を読誦されていました。しかし、浄土往生を目指す教えに帰入されてからは、ひたすらお念仏を称え続け、まったく他の行をま

しかのみならず浄土宗の祖師、相続いでみな一向に名号を称して余業を雑えざれと勧む。これらを案じて専修の一行に入らせたまえと申すなり。

問う、浄土の法門に、まず何何を見て心付きそうろうなん。

答う、経には『双巻』『観無量寿』『小阿弥陀経』等、これを浄土三部経と名づく。文には善導の『観経疏』『六時礼讃』『観念法門』、道綽の『安楽集』、慈恩の『西方要決』、懐感の『群疑論』、天台の『十疑論』、我が朝の人師には恵心の『往生要集』なんどこそは常に人の見るものにてそうらえ。ただし何を御覧ぜずとも、よく御心得て念仏申させたまいなんに、往生何事か疑いそうろうべき。

問う、心をばいかようにか遣いそうろじえることはありませんでした。

善導大師に限らず、浄土宗の祖師方は、皆次々と「ひたすら阿弥陀仏の名号を称え、他の行をまじえてはならない」とお勧めになっています。こうしたことを推し量って、専ら称名念仏一行に邁進されるようにと申し上げているのです。

お尋ねします。浄土の教えについて、まずどういった典籍を読んで正しい理解を身につけたら良いのでしょうか。

お答えします。経典としては『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』であり、これらを「浄土三部経」と申します。中国の典籍としては善導大師の『観経疏』『往生礼讃』『観念法門』[73]、道綽禅師の『安楽集』、慈恩大師の『西方要決』、懐感禅師の『釈浄土群疑論』、天台大師の『浄土十疑論』、また日本の祖師の著作としては恵心僧都源信の『往生要集』などは、浄土の教えに心を寄せる人々が常に見るべきものです。ただし、これらの書物をご覧にならなかったとしても、よくその道理を心得てお念仏をお称えすれば、浄土往生に何の疑いもございません。

お尋ねします。お念仏をお称えするときの心はどのように調える

うべき。

答う、三心を具足せさせたまえ。その三心と申すは、一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向発願心なり。

一つに至誠心というは、真実の心なり。善導釈してのたまわく「至というは真の義、誠というは実の義。真実の心の中にこの自他の依正二報を厭い捨てて、三業に修するところの行業に必ず真実を須いよ。

外に賢善精進の相を現じて内に虚仮を懐く者は、日夜十二時に勤め行うこと頭の火を払うがごとくにすれども、往生を得ずという。ただ内外明闇を簡ばず、真実を須いる故に至誠心と名づく。

二つに深心というは、深き信なり。決べきでしょうか。

お答えいたします。三心をお具えになるべきでしょう。三心とは一つには至誠心、二つには深心、三つには回向発願心です。

一つ目の至誠心というのは、真実の心のことです。善導大師は三心を解釈して次のように述べられています。「至とは真の意味であり、誠とは実の意味である。真実の心の中において、自身や他の人々がこれまで犯し、これからも犯すであろうさまざまな悪行や穢れた世界への執着を厭い捨てて、自身が修める身体や言葉や心の働きにおいては、必ずすべて阿弥陀仏や極楽浄土に対して真実の姿で臨まなければいけない。

外面では賢く善良で精進している姿を見せる一方、内面では嘘偽りの心を抱いている者は、頭に降りかかった火の粉を払うように、昼も夜も一日中、浄土を目指す勤めを実践したとしても往生は叶わないという。内心も外面の態度も、人目のある時も人目のないときも、まったく変わりなく、阿弥陀仏や極楽浄土に対して真実の心を用いることから至誠心と名付けるのである。

二つ目の深心というのは、深い信心である。まずもって我々は、

定して深く信ぜよ、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫なり、曠劫よりこのかた常に没み常に流転して出離の縁あることなし。

また決定して深く信ぜよ。この阿弥陀仏、四十八願をもて、衆生を摂受して疑いなく慮なく、かの願力に乗りて定めて往生すと。

仰ぎ願わくは仏のことばを信ぜよ。もし一切の智者百千万人来たりて経論の証を引きて、一切の凡夫念仏して往生することを得ずといわんに、一念の疑退の心を起こすべからず。

ただ報えていうべし、汝が引くところの経論、信ぜざるにはあらず。汝が信ずるところの経論は汝が有縁の教、我が信ずるところは我が有縁の教。今引くところの経論は菩薩人天等に通じて説けり。

今現に生まれ変わり死に変わりを繰り返してきた罪深い悪しき凡夫であり、計り知れないほどの過去から今に至るまで、この迷いの世界に常に沈み、輪廻を繰り返し、この世界から離れ出る縁にまったく出会えなかったということを心の底から深く信じなさい。

また、阿弥陀仏は四十八願を通じて衆生を救い摂るという救いの働きに対して疑いを抱くことなく、いたずらに不安に思うことなく、その本願の力によって必ず浄土往生が叶うということを心の底から深く信じなさい。

仰いで願うことは、御仏のお示しを信じなさい。もし、百千万にも及ぶ智慧ある人が皆こぞってやって来て、経典や論疏を根拠として示し、〈おしなべて凡夫は、念仏を称えたところで往生することなどできない〉と批判したとしても、たとえ一瞬であっても念仏往生に疑いの心を発し、信心を退転してはならない。

そのように言われたとしても、ただ次のように答えなさい。〈あなたが示している経典や論疏を信じていないわけではない。ただあなたが信じている経典や論疏はあなたに縁がある教えであり、私が信じている経典や論疏は私に縁がある教えである。今、あなたが引用して示された経典や論疏は多くの菩薩や人道・天道の衆生を共通

この『観経』等の三部は濁悪不善の凡夫のために説きたまう。

しかればかの経を説きたまう時には、対機も別に、所も別に、利益も別なりき。今君が疑いを聞くにいよいよ信心を増上す。もし羅漢辟支仏、初地十地の菩薩十方に満ち、化仏報仏光を輝かし、虚空に舌を吐きて生まれずとのたまわば、また報えていうべし、一仏の説は一切仏の説に同じ。釈迦如来の説きたまう教を改めば、制したまうところの殺生十悪等の罪を改めてまた犯すべしや。

前の仏空事したまわば、後の仏もまた空事したまうべし。同じ事ならば、ただ為初めたる法をば改めじといいて、永く退することなかれ。かるが故に深心なり。

の対象として説かれたものである。一方、この『観無量寿経』などの「浄土三部経」は、汚れや悪がはびこる時代において善行を修められない機根の劣った凡夫のために説かれた教えである。

そうであれば、『観無量寿経』を説かれた時と現在とでは、説法の対象である衆生の能力も、教えを説かれた場所も、その利益も異なるのである。今、あなたが述べた疑いを聞いたので、ますます私の信心は深まった。もし、阿羅漢や辟支仏、[74][75] 初地から十地までの高位の菩薩[76]があらゆる世界に満ち広がって、化仏や報仏[77][78]がそのお身体から光を輝かせ、大空に広く長い舌を伸ばされて〈凡夫が浄土往生することなど決してない〉とおっしゃったならば、次のように答えて言うべきである。〈お一方の仏の説示はすべての仏の説示と共通である。釈尊の説かれた教えを改めるというのならば、戒められた殺生をはじめとする十悪などの罪の規定を改めて、それらを犯しても構わないなどと規定するというのか。

過去の仏が偽りの説法をされたならば、後の世の仏もまた偽りの説法をされることだろう。同じく偽りということならば、最初に信じた仏の教えを信じていくだけである〉と宣言して、永遠にお念仏の信心を退転することがないようにせよ。この故に深心と言うので

三つに廻向発願心というは、一切の善根をことごとくみな廻向して往生極楽のためとす。決定真実の心の中に廻向して生まるる思いをなすなり。この心深信なる事金剛のごとくにして一切の異見異学別行人等に動乱破壊せられざれ」。

「今さらに行者のために一つの譬喩を説きて外邪異見の難を防がん。

人ありて西に向いて百里千里を行くに、忽然として中路に二つの河あり。一つはこれ火の河、南にあり。二つはこれ水の河、北にあり。各闊さ百歩、深くして底なし。正に水火の中間に一つの白き道あり。闊さ四五寸ばかりなるべし。この道、東の岸より西の岸に至るまで、長さ百歩。そ

ある。

三つ目の回向発願心というのは、これまで修めてきた善行の功徳をことごとく極楽往生のために振り向けることである。嘘偽りのまったくない真実の心の中に善行の功徳を回向して、浄土に往生しようとする思いを発すのである。またこの回向発願心を発すにあたっては、阿弥陀仏の救いの働きを深く信じる思いを金剛のように固くして、異なった見解や異なった学問を学び、念仏とは別の行を修めているようなすべての人々によって心を乱されたり、破られ壊されたりしてはいけない」。[80]

「今、さらに念仏の行者のために一つの譬喩を説いて、邪な見解や私達とは異なる見方による非難を防ぐこととしよう。

ある人が、西へ向かって百里あるいは千里（およそ五〇キロあるいは五〇〇キロ）と歩んでいくと、突然、二つの河が目の前に現れる。一つは南に伸びる火の河であり、もう一つは北に伸びる水の川である。その河幅は百歩（およそ一五〇メートル）で、底が分からないほど深い。まさにその二つの河に挟まれた中央にひと筋の白い道がある。その道幅は四寸から五寸（およそ一二センチから一五センチ）で、この道の長さは東の岸から西の岸に至るまでの百歩である。水

の水の波浪交過して道を湿す。火焔また来たりて道を焼く。水火相交わりて常に休息むことなし。

この人すでに空曠の迥かなるところに至るに人なくして群賊悪獣あり。この人の単独行くを見て競い来たりて殺さんとす。この人、死を怖れて直に走りて西に向かう。

忽然としてこの大河を見るにすなわち念言すらく。南北に辺畔なし。中間に一つの白道を見る。極めて狭小なり。二つの岸相い去ること近しといえどもいかが行くべき。今日定めて死せんこと疑なし。正しく廻らんと欲えば群賊悪獣ようやく来たりて逼む。南北に去り走らんと欲えば悪獣毒虫競い来たりて我に向かう。正に西に向かいて道を尋ねてしかも去らんと欲えば恐らくはこの二つの河に堕ちぬの河からは荒れ狂う波が押し寄せて道を濡らし、火の河からは燃えさかる炎が立ち昇って道を焼いている。水と火は、道を濡らしたり焼いたりしながら互いに白道を覆い、決してそれが止むことはない。

この旅人は、すでに果てしなく広がる荒野に辿り着いており、見渡す限り周囲に人はいなかったものの、盗賊や悪人の集団、人に危害を加えるような猛獣が続けてやってくる。彼等は、この旅人が一人で歩いているのを見て、我先にと襲い掛かり旅人を殺そうとして向かって来る。旅人は、死を恐れてすぐさま西に向かって走り出す。

すると旅人は、突然この大河を見て、すぐさま心の中で次のようにつぶやいた。〈二つの河は北も南もどこまでも続いている。その中間に一つの白道がある。白道は極めて狭く細い道である。東西両岸はそれほど離れてはいないものの、どうすれば向こう岸に辿り着くことができるだろうか。このままでは、今日まさに命を落とす運命になることは間違いない。来た道を東に戻ろうとしても、盗賊や悪人、猛獣が迫ってくる。南や北に走り去ろうとしても、猛獣や猛毒を持つ虫が競って私に襲いかかってくる。まさに西に向かおうとこの白道を頼りに進んだとしても、おそらく、この水と火の二つの河に堕ちてしまうだろう〉と。この時、この旅人が抱いた恐怖は、

べし。この時惶るるこというべからず。
すなわち思念すらく、廻るとも死し、また去るとも死せん。一種としても死を勉れざるものなり。我むしろこの道を尋ねて前に向かいて去らん。すでにこの道あり。必ず度るべし。

この念いをなす時に、東の岸に忽ちに人の勧むる声を聞く。仁者、決定してこの道を尋ねて行け。必ず死の難なけん。住せばすなわち死なん。

西の岸の上に人ありて喚いていわく、汝、一心に正しく念じて道を尋ねて直に進みて疑怯退心を生さざれと。

あるいは一分二分行くに群賊等喚いていわく、仁者、廻り来たれ。かの道は嶮言葉に表現できないほどであった。

その時、この旅人は次のように思いを巡らせた。〈東の道に戻ろうとしても死んでしまうし、また、南や北に走り進もうとしても死んでしまうであろう。一つとして死を免れることはできそうにない。そうであるならば、むしろ私は、この白道を頼りとして、前に向かって進むこととしよう。すでにこの白道があるのだから、必ず向こう岸に渡れるであろう〉と。

このような思いに至った時、ただちに東の岸から、ある人が、この者へ次のように西への歩みを勧める声が聞こえてきた。〈あなたは、心を決めて、この道を頼りとして進みなさい。そうすれば決して命を落とすという災難はない。しかし、ここに留まっていては、すぐにでも命を落としてしまうであろう〉と。

また西の岸の上にいるある人が、次のようにこの者に呼びかけて言う。〈あなたは、心を一つにして、また、覚悟を決めて、今すぐにこの白道を頼りとして進んで、疑い迷う心や怖じ気づいて道を退こうとする心を発してはならない〉と。

また、この旅人が一歩二歩と白道を歩み出すと、盗賊などが次のように呼びかけてくる。〈おい、おまえ、戻ってこい。この道は荒々

しく悪しき道なり。過ぐることを得べからず。死なんこと疑なし。我らが衆は悪心なしと。

この人、喚ばう声を聞くといえども廻顧ず、直に進みて道を念じてしかも行くに、須臾にすなわち西の岸に到りて永く諸の難を離る。善友、相向いて、慶喜已むことなし。これは喩なり。

次に喩を合すというは、東の岸というは、すなわちこの娑婆の火宅に喩うるなり。

群賊悪獣、詐り親づくというは、すなわち衆生の六根六識六塵五陰四大なり。

人なき空迥の沢というは、すなわち悪友に随いて、真の善知識に値わざるなり。

しくて危なっかしい道だ。渡りきることなどできないぞ。間違いなく死んでしまうだろう。俺達はみんな悪心など持っていない〉と。

この旅人は、盗賊などのこうした呼び声を聞いても振り返ることなく、覚悟を決めてすぐさまこの道を進んで行くと、わずかな時間で西の岸に到達して、そのまま永遠に様々な厄難を離れることとなった。旅人は真の善き友人と向かい合えたことで、喜びが心に満ち溢れてきた。これが一つの喩えである。

次にこの喩えを解釈しよう。[81]〈東の岸〉というのは、多くの煩悩に苛まれ、苦しみ多き娑婆世界を燃えさかる家に喩えたものである。

〈盗賊や悪人の集団、人に危害を加えるような猛獣が偽って親しげに近づいてくる〉というのは、煩悩多き私達衆生の六つの感覚器官、[82]六つの認識、[83]六つの認識対象、[84]心身を構成する五つの要素、[85]肉体を形作る四つの元素[86]のことである。

〈水と火の二つの河に沿って見渡す限り人がいない果てしなく広がる荒野〉というのは、悪い友人にしたがってしまい、仏道に導く真の善き人物に出会わないことである。

水火の二河というは、すなわち衆生の貪愛は水のごとく瞋恚は火のごとくなるに喩うるなり。

中間の白道四五寸というは、衆生の貪瞋煩悩の中によく清浄の願往生の心を生すなり。貪瞋強きによるが故にすなわち水火のごとしと喩うるなり。願心微なきが故に白道のごとしと喩うるなり。

水波常に道を湿すというは、愛心常に起りて善心を染汚するなり。

また火焔常に道を焼くというは、瞋嫌の心よく功徳の法財を焼くなり。

人、道を上るに直に西に向かうというは、すなわち諸の行業を廻らして直に西に向かうに喩うるなり。

〈水と火の二つの河〉というのは、衆生の貪りの心は荒れ狂う水のようなものであり、怒りの心は燃え盛る火のようなものなので、そのように喩えている。

〈水と火の河の中央にあるひと筋の白い道の幅が四寸から五寸〉というのは、衆生の貪りや怒りといった煩悩の中にあっても、浄土往生を願う清らかな心が確かに生まれることを喩えている。貪りや怒りの心が強く激しいので、荒れ狂う水や燃え盛る火のようであると喩え、浄土往生を願う心は取るに足らないほど軽微なものなので、狭く細い白道のようであると喩えている。

〈水の河からは荒れ狂う波が押し寄せて道を濡らす〉というのは、さまざまなものに執着する心が常に湧き起こり、善行を修めようとする心を汚してしまうことを喩えている。

また〈火の河からは燃え盛る炎が立ち昇って道を焼く〉というのは、怒り嫌悪する心が湧き起こり、仏法を修めることによってもたらされる功徳という財産を焼き尽くしてしまうことを喩えている。

〈旅人がその白道を進んで、すぐさま西に向かう〉というのは、お念仏をはじめとするさまざまな行の功徳を振り向けるなどして、すぐさま西方浄土を目指して歩みを進めていくことを喩えている。

東の岸に人の声の勧め遣るを聞きて道を尋ねて直に西に進むというは、すなわち釈迦はすでに滅したまいて後、人見たてまつらざれども、なお教法ありて尋ねつべし。これを声のごとしと喩うるなり。

あるいは行くこと一分二分するに群賊等喚び廻すというは、別解別行悪見人等、妄りに見解を説きて相惑乱し、およびみずから罪を造りて退失するに喩うるなり。

西の岸の上に人ありて喚ばうというは、すなわち弥陀の願の意に喩うるなり。

須臾にすなわち西の岸に到りて善友相見て喜ぶというは、すなわち衆生久しく

〈東の岸から、人の声でその旅人に『この白道を進むように』と勧め励まして送り出す声を聞いて、旅人が白道を頼りにすぐさま西に進む〉というのは、釈尊が入滅された後の時代には、人々はそのお姿を拝謁することが叶わないけれども、なお仏の教えとしての仏法〈経典〉が遺っていて、それを信仰の拠り所にして進むことができる。こうしたことを〈旅人に勧め励まして送り出す声のようである〉と喩えている。

〈また白道を歩み出すこと一歩二歩すると盗賊や悪人の集団などが引き返すように呼びかける〉というのは、お念仏の歩みを進める者と理解を別にしたり、修行を別にしたり、悪しき見解を抱いている人などが、自分勝手な見解を示して念仏者の心を惑わせ乱そうとして、また自らも罪を犯して仏道を退き失ってしまうことを喩えている。

〈西の岸の上に人がいて白道を歩む者に呼びかける〉というのは、お念仏を称えた者を必ず救い摂るという阿弥陀仏の本願の御心を呼びかける声に喩えている。

〈わずかな時間でそのまま西の岸に到達して、善き友と相まみえて喜ぶ〉というのは、次のようなことである。すなわち、衆生は、

生死に沈みて曠劫に輪廻し、迷倒しみずから纏いて解脱するに由なし、仰ぎて釈迦発遣して西方に指向かわしめたまう。

弥陀の悲心、招き喚ばいたまうに依りて、二尊の意に信順して水火の二河を顧ず。念念に遺るることなくかの願力の道に乗じて、命を捨て已りて後、かの国に生まるることを得て、仏を見たてまつりて、慶喜すること極りなからん。

行者、行住坐臥の三業に修するところ、昼夜時節を問うことなく、常にこの解をなしこの想をなすが故に廻向発願心という。

また廻向というは、かの国に生まれ已実に永い期間にわたって、生まれ変わり死に変わりを繰り返して輪廻をさまよい、進むべき道を見失って迷い当惑してしまい、自らは煩悩によってがんじがらめとなり、さとりに向かう縁などまったくない。だからこそ、釈尊は人々に西方極楽浄土へ向かって進みなさいと教え示して下さる。

阿弥陀仏は大いなる慈悲の御心で人々に呼びかけて西方極楽浄土にお招き下さる。そんな釈尊と阿弥陀仏の二尊の御心を信じて、それに素直にしたがって、水・火の二つの河に喩えられる煩悩にとらわれることなく、浄土往生の思いを片時も忘れることなく念仏を称えて、阿弥陀仏の本願力に頼りすがってその白道を歩み、この世での命を終えた暁には、極楽浄土に往生して、阿弥陀仏に見えることによって、この上ない喜びが溢れ出てくる。

念仏の行者は、歩いていても止まっていても、座っていても横になっていても、身体と言葉と心の三つの行いによって修めるところを、昼夜問わずいついかなる時も、常にこうした二河白道の譬喩を受けとめ、念仏の実践という白道を歩み続ける想いを発しているので、回向発願心というのである。

また、これまで述べてきた善根を振り向けて浄土往生を願うとい

りて大悲を起して生死に還り入りて衆生を教化するを廻向と名づく。

三心すでに具すれば行として成ぜずということなし。願行すでに成じてもし生まれずといわばこの処あることなけん」。以上、善導の釈の文なり。

問う、『阿弥陀経』の中に一心不乱とそうろうぞかしな。これ阿弥陀仏を申さん時、余事を少しも思い雑ぜそうろうまじきにや。一声念仏申さん程ものを思い雑ぜざらん事は容易くそうらえば、一念往生には漏るる人そうらわじと覚えそうろう。また命の終るを期として余念なからん事は、凡夫の往生すべき事にてもそうらわず。この義いかが心得そうろうべき。

う回向（往相回向）に加えて、もう一つの回向として、[87] 極楽浄土に往生した後、大いなる慈悲の心を発して、生まれ変わり死に変わりを繰り返す世界に戻って、人々に浄土への道を教え導くことを回向（還相回向）と名付ける。

三心がすでに具わったならば、修めた行が完成しないということはない。浄土往生への願い（三心）と修行（念仏）が円かに具わっているのに、浄土往生が遂げられないということなど決してない」[88] と。以上、善導大師が三心を解釈された文章です。

お尋ねします。『阿弥陀経』の中に「一心不乱」[89] とあります。これは〈南無阿弥陀仏〉とお念仏を称える時、他のことを少しも思いまじえてはならないということなのでしょうか。お念仏をひと声称える程度であれば、他のことを思いまじえないというのはたやすいことですから、一遍のお念仏であっても往生するという教えから漏れ落ちる人はいないように思われます。そうではなくて、臨終に至るまでの一生涯を通じて、他のことを少しも思いまじえてはいけないということであるならば、とても凡夫の往生が叶うとは言えません。この点については、どのように理解したらよいのでしょうか。

答う、善導この事を釈してのたまわく「一度三心を具足して後、乱れ破られざる事金剛のごとくにて、命畢るを期とす」るを名づけて一心というにそうろう。

阿弥陀仏の本願の文に「もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に、信楽して、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覚を取らじ」という。

この文に至心というは『観経』に明かすところの三心の中の至誠心に当たれり。信楽というは深心に当たれり。欲生我国は廻向発願心に当たれり。これを総ねて命畢るを期として乱れぬものを一心とは申すなり。この心を具せん者、もしは一日二日乃至十声一声に必ず往生することを得という。いかでか凡夫の心に散乱なき事そうろうべき。さればこそ易行道と

お答えします。善導大師は、こうした心の持ちようについて解釈して、「ひとたび三心が具わった後ならば、金剛石のように固くて乱れ破れることがない念仏往生の思いを臨終の時まで続けるさま」を名付けて「一心」とされています。[90]

阿弥陀仏の第十八願の文には「もし、私、法蔵菩薩が仏となった時、あらゆる世界の衆生が、まことの心をもって、深く私の誓いを信じ、私が建立した極楽浄土に往生を願い、わが名号を称えることがわずか十遍であったとしても、必ず往生を叶えよう。もしそれが叶わなければ、私は決してさとりを開かない」とあります。[91]

この文中にある「至心（まことの心をもって）」というのは『観無量寿経』に説き明かされている三心の中の至誠心に該当し、「信楽（深く私の誓いを信じ）」というのは深心に該当し、「欲生我国（私が建立した極楽浄土に往生を願い）」というのは回向発願心に該当します。[92] この三つの心をまとめて、臨終に至るまで浄土往生の願いが乱れないことを「一心」というのです。この心を具えた人は、一日や二日のお念仏、あるいは、たとえ十遍や一遍のお念仏であっても必ず浄土往生が叶うといいます。私達凡夫の心が、どうして散り乱れないことなどありましょうか。だからこそ、凡夫を浄土往生

は申す事にてそうらえ。

『双巻経』の文には「横に五悪趣を截り、悪趣自然に閉じ、道に昇ること窮極なし。往き易くして人なし」と説けり。まことに往き易き事これに過ぎたるやそうろうべき。劫を積みて生まるといわば、命も短く身も堪えざらん人いかがと思うべきに、本願に乃至十念という、願成就の文に「乃至一念もかの仏を念じて心を至して廻向すればすなわちかの国に生まるることを得」という。

造悪の者生まれずといわば、『観経』の文に「五逆の罪人生まる」と説く。もし世も下り人の心も愚かなる時は信心薄に導く易行道というのです。

『無量寿経』の経文には「極楽に往生すれば、地獄・餓鬼・畜生・人・天という五つの悪しき世界へと輪廻転生する道を瞬く間に断ち切り、それらの悪しき世界に堕ちゆく道が自ずと閉ざされて、どこまでも仏道を昇り進んでゆくこととなる。迷いの世界を離れるにあたって浄土往生の道こそ遂げ易いのに、その道を願う人はほとんどいない」と説かれています。[93] まったく極楽浄土へ往き易いという点において、お念仏の教えに勝るものがありましょうか。もし途方もない長期間の修行を積み重ねて往生するということであれば、命も短く、修行に耐えられない人は、いったいどうしたらよいだろうかと途方に暮れてしまいます。第十八願に「乃至十念（わが名号を称えることがわずか十遍であったとしても）」といい、その本願が成就したことを示す経文に「たとえ一遍であったとしても、阿弥陀仏の名号を称えて、まことの心で常に浄土に振り向ければ必ず極楽浄土への往生が叶う」[94]とある通り、これ以上易しい教えはないのです。

例えば、悪事を犯した人が往生できないと言われていますが、『観無量寿経』の文には、「五逆の罪を犯した人であっても念仏を称えれば往生することができる」[95]と説かれています。あるいは、もし末

くして生まれ難しといわば、『双巻経』の文に「当来の世、経道滅尽せんに我れ慈悲をもちて哀愍して、特りこの経を留めて止住すること百歳ならん。それ衆生ありてこの経に値う者は、意の所願に随いて、皆得度すべし」云云。

その時の衆生は三宝の名を聞く事なし。諸の聖教は竜宮に隠れて一巻も留まるものなし。ただ邪悪無信の盛りなる衆生のみあり。みな悪道に堕ちぬべし。弥陀の本願をもて、釈迦の大悲深きが故に、この教を留めたまえる事百年なり。いわんやこのごろはこれ末法の初めなり。万年の後の衆生に劣らんや。かるが故に易往という。

法の世になれば、人の心も愚かとなり、信心が薄くなって浄土に往生することなど難しいと言われていますが、『無量寿経』の文には「末法の世を経た後、私（釈尊）の説いた教えがすべて消滅してしまう法滅の世が訪れたとしても、私は慈悲の心をもって人々を哀れみ、この経に説いた念仏の教えだけは、さらに百年の間、残し留めておくこととしよう。[96] そして、人々がこの教えに巡り会えたならば、彼等の願い通り、みな迷いの世界を離れて、浄土往生を遂げられるのである」とある通りです。

法滅の時代の衆生達は仏法僧の三宝の名さえ聞くことはありません。もろもろの経典は深い海の底にある竜宮の中に隠れてしまい、一巻の経典さえもこの地上に留まるものはありません。[97] ただ邪悪で信仰心のかけらもない人々だけがはびこり、みな悪しき道に堕ちてしまうことでしょう。そうした中であっても、阿弥陀仏の本願によって人々は救われるのです。それ故、慈悲深き釈尊であればこそ、その教えを法滅の後、百年にわたって伝え留めようとされたのです。まして現在はまだ末法のはじまりであって、今に生きる人々が、末法一万年が経過した後の世に生きる人々よりも劣っているということがあるものでしょうか。だからこそ釈尊は、「浄土往生はたやす

しかりといえどもこの教に値う者は難し。またおのずから聞くといえども信ずる事難きが故に、しかも無人という。まことに理なるべし。

『阿弥陀経』に「もしは一日もしは二日乃至七日、名号を執持して一心不乱なれば、その人命終の時に阿弥陀仏、諸の聖衆と現にその人の前に在す。終る時、心顛倒せずして阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得」という。

この事を説きたまう時に釈迦一仏の所説を信ぜざらん事を恐れて、六方の如来同心同時に各広長の舌相を出だして遍く三千大千世界を覆いて、もしこのこと空事ならば、我が出だすところの広長の舌破れ爛れて口に入ることあらじと誓いく叶う」[98]と説かれたのです。

それほどの尊い教えであっても、このお念仏の教えに巡りあう人はごくわずかです。また、その教えが自然と耳に届いたとしても、それを素直に信じることは難しいので、釈尊は「しかしながら、結局のところ、往生する人はまれである」[99]と続けて説かれたのです。まったくもって釈尊のお言葉通りです。

また『阿弥陀経』には「一日、二日ないしは七日の間、心を一つにしてただひたすら〈南無阿弥陀仏〉と念仏を称えれば、その人の臨終にあたり阿弥陀仏は極楽の菩薩などと共にその人の目の前に出現される。そして、その人の命が尽きる時、心乱れることなく、阿弥陀仏の極楽浄土へ往生することが叶う」[100]とあります。

このことを釈尊がお説きになった時、人々が釈迦一仏だけの教説を信じられないであろうことを恐れて、あらゆる世界にまします諸仏は各々で広く長い舌をお出しになって、ご自身が教化しているすべての世界[101]を覆い尽くして、「もしこの念仏往生の教えが何の根拠もない絵空事であったならば、私が出した広く長い舌はただれ落ちてしまい、決して口の中に戻ることはない」[102]とお誓いになりました。

たまいき。

経文、釈文、顕なり。また大事を成じたまいし時はみな証明ありき。『法華』を説きたまいし時は多宝一仏証明し、『般若』を説きたまいし時は四方四仏証明したまう。しかりといえども一日七日の念仏のごとく、証誠の盛なる事はなし。仏もこの事をまことに大事に思召したるにこそそうろうめれ。

こうしたことは『阿弥陀経』などの経文や『観念法門』などの経文を解釈した典籍の文に明らかです。また、念仏往生のような重大な教えが説き終えられた時には、ことごとく証明が行われました。例えば、『法華経』が説かれた時は、大地から出現した宝塔の中に座している多宝一仏だけが『法華経』の教えを真実であると証明し、[103]『般若経』が説かれた時には、東南西北にまします四人の仏だけがその教えを真実であると証明しておられます。[104]このような例があるとはいえ、『阿弥陀経』に説かれるように、一日ないし七日の間の念仏によって浄土往生を遂げられることを無数の諸仏が広く長い舌をお出しになって真実の教えであると証明されているほど、仏による証明が大々的なものはありません。きっと諸仏も、『阿弥陀経』に説かれる念仏往生の教えが何よりも大事なことであるとお思いになって、そのように証明して下さったのでしょう。

問う、信心の様は承りぬ。行の次第いかがそうろうべき。

答う、四修をこそは本とする事にてそ

質問します。お念仏を称える上での信心のありさまとはどのようなものか、確かに承りました。それでは、念仏者が日々の生活を送るにあたってのありようはどのように心掛けるのがよいでしょうか。

お答えします。念仏者が日々の生活を送るにあたって、他ならぬ

うらえ。一つには長時修乃至四つには無余修なり。

一つに長時修というは、慈恩の『西方要決』にいわく「初発心よりこのかた恒に退転なきなり」。善導は「命の畢るを期と誓いて中止せざれ」という。

二つに恭敬修といは「極楽の仏法僧宝において常に憶念して尊重を生すなり」、『往生要集』にあり。また『要決』にいわく「恭敬修。これにつきて五つあり。一つには有縁の聖人を敬う。二つには有縁の聖教を敬う。三つには有縁の善知識を敬う。四つには同縁の伴を敬う。五つには三宝を敬う。

一つに有縁の聖人を敬うというは、行

四修を根本に据えるべきでしょう。四修とは、第一の長時修から第四の無余修までです。

第一に長時修とは、慈恩大師の『西方要決』に「初めてさとりを求める心を発してから、退転することなく常に西方浄土を目指す行を修め続けることです」[105]と説かれています。また善導大師は、「命終わるその時まで西方浄土を目指す行を修め続けるのだと心得て、〈途中で止めてなるものか〉と誓うべきである」[106]と説かれています。

第二に恭敬修とは、「極楽浄土にまします阿弥陀仏、その浄土について説かれた教え、その教えを実践する僧侶という三宝を、常に思い留めて、尊崇の心を発すことである」[107]と源信の『往生要集』に説かれます。また『西方要決』には次のように説かれています。「恭敬修には、五つの敬う対象があります。一つには念仏者に縁の深い極楽の阿弥陀仏や観音・勢至両菩薩等の聖者を敬うこと、二つには念仏者に縁の深い阿弥陀仏の仏像や〈浄土三部経〉などの経典を敬うこと、[108]三つには念仏者に縁のある教えについてお説き下さる善知識を敬うこと、四つには縁あって信仰を同じくする者を敬うこと、五つには広く仏法僧の三宝を敬うこと、以上である。

一つ目の〈念仏者に縁の深い極楽の阿弥陀仏や観音・勢至両菩薩

住坐臥に西方を背かず、涕唾便痢に西方に向かわざれという。

二つに有縁の像と教とを敬うというは、阿弥陀仏の像を造りも画きもせよ、広くすること能わずば一仏二菩薩を作れ。また教を敬うというは、『弥陀経』等を五色の袋に盛れてみずからも読み他を教えても読ませよ。像と経と室の中に安置して六時に礼懺し、香華を供養すべし。

三つに有縁の善知識を敬うというは、浄土の教を宣べん者をば、もしは千由旬よりこのかた並びに敬重し親近供養すべし。別学の者をも総じて敬う心を起すべ

等の聖者を敬うこと〉とは、歩いている時も止まっている時も座っている時も横になっている時も、いついかなる時も阿弥陀仏がおられる西の方角に背を向けず、涙や唾、小便・大便など不浄なものを西の方角に向けないということである。

二つ目の〈念仏者に縁の深い阿弥陀仏の仏像や〈浄土三部経〉などの経典を敬うこと〉とは、次のようである。まず、仏像を敬うとは、阿弥陀仏の仏像を造立したり、仏画を描いたりして敬いなさいということである。無理のない程度に造ったり描いたりすれば良いのであるが、可能であれば阿弥陀仏と観音・勢至両菩薩の三尊を造って敬いなさい。また、経典を敬うとは、『阿弥陀経』などの経典を青・黄・赤・白・黒といった五色の糸で縫われた袋に納めて尊び、自らこれを読み、他の人にも教えて読ませなさい。また、仏像と経典を清められた部屋に安置して、一日に六回、その前で礼拝や懺悔を修めて、お香やお花を捧げて供養しなさいということである。

三つ目の〈念仏者に縁のある教えについてお説き下さる善知識を敬うこと〉とは、浄土の教えを説こうとする者がおられれば、千由旬[109]という遥か遠いところにおられてもごく近くにおられても、同じように篤く敬い、心を込めて親しくもてなしなさいということで

し。もし軽慢を生さば罪を得ること窮なし」。

「進みても衆生のために善知識となりて、必ず西方に帰することを須いよ。この火宅に住せば、退没ありて出で難きが故なり。火界の修道甚だ難かるべきが故に西方に帰せしむ。一度往生を果つれば三学自然に勝進して万行並びに具わるが故に、弥陀の浄国は造悪の地なし。」

「四つに同縁の伴を敬うというは、同じく業を修する者なり、みずからは障重くして独業成ぜずといえども必ず良き朋に藉りてまさに行を作す。危うきを扶け危うきを済うこと、同伴の善縁なり。深く相憑みて重くすべし。

ある。また、これ以外の教えを学んでいる者であっても同じように敬う心を発しなさい。もしこれらの者を軽んじて慢心を生ずるようなことがあれば、計り知れない程の罪を作ったことになる」[110]。

「修行が進んだとしても慢心を発さず、衆生のために自らが善知識となって、西方浄土への往生に帰依することを促し実践しなさい。それは、この娑婆世界に生きている限り、煩悩によって迷いの世界に沈み込んでしまい、そこから離れ出ることはとても難しいからである。また、娑婆世界においてさとりを目指す行を進めていくことはとても困難なのであるから、西方浄土の教えに帰依させるのである。ひとたび浄土往生を果たすことができれば、三学は自ずと速やかに進み、いかなる行も成し遂げることができる。その結果、阿弥陀仏の浄土では悪のはびこる場所などない」[111]。[112]

「四つ目の〈縁あって信仰を同じくする者を敬うこと〉とは、行を同じくする者を敬うということであり、自分自身は障りが重く、一人だけでは浄土往生の勤めを果たしきれないけれども、どんなことがあっても良き仲間を頼りにすることで、間違いなく行を修めることができる。信仰が揺らいでしまうかも知れないという危機から仲間を励まし、その危機から救い出すこと、これは同志の善き縁で

五つに三宝を敬うというは、絵像木仏、三乗の教旨、聖僧菩薩破戒の流まで、敬を起し慢を生ずることなかれ」。

「樹の傾きたるは倒るるに曲れるに随るがごとし」。「事の礙ありて西に向かうに及ばずば、ただ西に向かう想をなすべし」。

三つに無間修というは、『要決』にいわく「常に念仏して往生の心を作せ。一切の時において心に恒に想い巧むべし。譬ば、もし人、他に抄掠せられて身下賤となりて艱辛を受く。忽ちに父母を思いて本国に走り帰らんと欲う。行くべき計いまだ弁えずして他郷にある。深くこの善き縁を互いに頼りとして大切にしなさい。

五つ目の〈広く仏法僧の三宝を敬うこと〉とは、絵に描いたり木に刻んだりした仏像（仏宝）、声聞・縁覚・菩薩の三乗に向けた仏のみ教え[114]（法宝）、清浄な僧や菩薩をはじめ破戒の僧に至るまで（僧宝）、ことごとく敬いの想いを起こして軽んじてはならないということである」[115]とあります。

また、善導大師の『往生礼讃』には、「常に西方に心を傾けているというのは、傾いて生えている樹が倒れる時には傾いている方に倒れるようなものである。何かしらの障りがあって西方浄土の方角に向かって敬うことができないのであれば、ただ西方浄土に向かう想いを発しなさい」[116]とあります。

第三に無間修とは、『西方要決』には、次のように説かれています。「常に念仏して浄土往生を願う心を発しなさい。いかなる時も心の中で常に工夫して思いを巡らせなさい。それを例えるならば、次のようである。もしあなたが財産を掠め取られて貧しく落ちぶれた身となって、実に辛い思いをしたところ、ただちに両親のことを思い出して生れ故郷に走り帰りたいと思ったとしよう。

しかしながら、どうすれば故郷に帰れるのかも分からないまま、

あり。日夜に思惟する苦しみ堪え忍ぶべからず。時として本国を念わずという事なし。計をなす事を得て、すでに帰りて達する事を得て、父母に親近しほしきままに歓娯するがごとし。

行者もまたしかなり。往因の煩悩に善心を壊乱せられて、福智の珍財並びに散失して、久しく生死に沈みて六道に駈馳し、苦しみ身心を責む。今善縁に遇いて弥陀の慈父を聞きて、まさに仏恩を念じて、報尽を期として、心に恒に念うべし」。「心心相続して余業を間えざれ」。

四つに無余修というは、『要決』にいわく「専ら極楽を求めて礼念するなり。諸余の行業を雑起せざれ。所作の業は日別に念仏すべし」。いまだにその土地に留まり続けている。四六時中、あれこれと思い悩む苦しみを耐え忍ぶことができない。そうした中でも、ひと時も故郷を想わぬことはなかった。そして、故郷に帰る算段をつけ、遂に帰ることが叶い、父母に間近に親しく再会して、思いのままに歓喜する、という。

西方を願う行者も同じようなものである。かねて起こし続けた煩悩によって善き心を壊し乱されて、福徳や智慧という妙なる財宝を失ってしまい、永く生まれ変わり死に変わりを繰り返す輪廻に沈み込んで六道を駆け巡り、その苦しみが身と心を責める。今、善き縁に巡り会い、慈悲深い父のごとき阿弥陀仏の救いを聞き、まさにその仏のご恩を胸に刻み、命尽きる時までを限りとして、心に常に阿弥陀仏を想うべきである」[117]とあります。また、善導大師の『往生礼讃』には、「一念々々に絶え間なく念仏を続け、他の行を差し挟まぬようにせよ」[118]とあります。

第四に無余修とは、『西方要決』には、「ただひたすら極楽浄土への往生を求めて礼拝や念仏を修めることであり、それ以外の行を雑多に修めようと思ってはいけない。修めるべきこととして、毎日念仏に努めなさい」[119]と述べられています。

善導ののたまわく「専らかの仏の名号を念じ、専らかの仏及びかの土の一切の聖衆等を讃めて余業を雑えざれ」。

「専修のものは百はすなわち百ながら生まれ、雑修のものは百が中に希かに一二なり。雑縁に近ずきぬれば、みずからも障え他の往生の正行をも障うるなり。我みずから諸方を見聞くに道俗の解行不同にして専雑異なり。ただ意を専らに作すは十はすなわち十ながら生まる。雑修の者は千が中に一つも得ず」という。

また善導の御弟子釈してのたまわく「西方浄土の業を修せんと欲わん者は、四修墜つることなく、三業雑わることなくして、一切の諸願諸行を廃して、ただ

善導大師は、「ただひたすら阿弥陀仏の名号を称え、ひたすら阿弥陀仏と極楽浄土にまします、あらゆる菩薩や聖者などを讃えて、それ以外の行を交えてはいけません」[120]と述べられています。

また、善導大師は、「念仏をひたすら修める者は百人のうち百人が浄土に往生し、それ以外の行を雑多に修める者は百人のうちわずか一人か二人が往生するに過ぎない。さまざまな行を雑多に修めようとする縁に近づいたならば、自らが修める念仏を妨げてしまうばかりでなく、他の人が修める念仏を妨げてしまうのである。私自身が各地の様子を見聞したところ、出家の者も在家の者も教えの理解や修行方法がさまざまで、念仏をひたすら修める者や種々の行を雑多に修める者など異なっている。ただ心を阿弥陀仏に向けて、ひたすら念仏を称える者は十人のうち十人すべてが極楽浄土に往生し、さまざまな行を雑多に修める者は千人のうち一人も往生できない」[121]とも述べられています。

また、善導大師の弟子懐感禅師は、「西方極楽浄土に往生するための行を修めようとする者は、こうした四修を怠ることなく、身と口と心の三業において雑多な行を交えることなく、西方浄土を目指す以外のあらゆる願いや行をなげうって、ただ西方浄土への往生を

西方の一行一願を修せよ」とこそそうらえ。

問う、一切の善根は魔王のために妨げらる。これはいかがして対治しそうろうべき。

答う、魔界というものは衆生を誑ろかすものなり。一切の行業は自力を憑む故なり。念仏の行者は身をば罪悪生死の凡夫と思えば、自力を憑む事なくして、ただ弥陀の願力に乗りて往生せんと願うに、魔縁便を得る事なし。観慧を凝らす人にもなお九境の魔事ありという。

弥陀の一事にはもとより魔事なし、果人清浄なるが故にといえり。仏を誑ろか願って念仏一行を修めなさい」[122]と解釈しておられます。

質問します。私達のような煩悩具足の凡夫が、どのような善行を修めたとしても、欲界の魔王[123]によって妨げられてしまいます。[124]こうした妨げは、どのようにして退治すべきなのでしょうか。

お答えします。魔界ともいわれる迷いの世界[125]は、私達衆生をだまし惑わすものです。どのような行であれ、さとりを目指して仏道を修める者は、自分の力をより所としているので、魔王によって修行を妨げられてしまうのです。一方、念仏の行者は、自身のことを「悪事を積み重ね、生まれ変わり死に変わりを繰り返す凡夫に他ならない」と受けとめているので、自分の力をより所とする事はありません。ただ阿弥陀仏の本願のお力に乗じて往生しようと願っているので、お念仏の実践を退転させる魔王につけいれられることなどありません。（天台宗において説かれる）止観の実践によってさとりの智慧を得ようとする人であっても、清浄なさとりの境地に達するまでは、なおさとりを妨げる九段階の魔事[126]があるといいます。

一方、「阿弥陀仏の救いの一事のみは、はじめから魔事など介在する余地などない。それは、修行の結果、さとりを開かれた阿弥陀

す魔縁なければ念仏の者をば妨ぐべからず。他力を憑むによるが故なり。百丈の石を船に置きつれば万里の大海を過ぐるがごとし。また念仏の行者の前には弥陀観音常に来たりたまう。二十五の菩薩百重千重に囲遶護念したまうに便を得べからず。

問う、阿弥陀仏を念ずるにいかばかりの罪をか滅しそうろう。

答う、「一念によく八十億劫の生死の罪を滅す」といい、また「ただ仏の名二菩薩の名を聞くすら無量劫の生死の罪を除く」なんど申しそうろうぞかし。

仏がまことに清浄だからである」[127]と言われています。たとえ魔王であっても阿弥陀仏につけいることはできず、念仏の行者の実践を妨げることなどあり得ません。なぜなら、念仏の行者は阿弥陀仏のお力を頼りとしているからです。例えるならば、とてつもなく巨大な石[128]であっても、船に乗せれば果てしない大海を進むことができるようなものです。また、念仏の行者の眼の前には、阿弥陀仏や観音菩薩が常にお越し下さいます。さらに極楽の二十五菩薩[129]は、念仏行者の周りを百重千重に取り囲んでお守り下さるので、魔王につけいれられることなどないのです。

質問します。阿弥陀仏の御名を称えることで、どれほどの罪を滅していただけるのでしょうか。

お答えします。釈尊は『観無量寿経』下品下生において、「一遍の念仏を称えるだけで、阿弥陀仏が、八十億劫というはかり知れない長い時間、迷いの世界を苦しみさまよわねばならないほどの罪の報いを滅せられる」[130]と述べられており、また、『同』流通分において「ただ阿弥陀仏の御名や観音・勢至菩両菩薩の御名を耳にするだけでも、無量劫という永い間、迷いの世界を苦しみさまよわねばならないほどの罪の報いを除かれる」[131]などと仰っています。

問う、念仏と申しそうろうは仏の色相を念じそうろうか。

答う、仏の色相光明を念ずるは観仏三昧なり。報身を念じ同体の仏性を観ずるは、智浅く心少なき我らは境界にあらず。

善導のたまわく「相を観ぜずしてただ名字を称せよ。衆生、障重くして、観成ずること難し。この故に、大聖、憐を垂れて称名を専らに勧めたまえり。心微かにして、神十方に飛び散るが故なり」といえり。

また本願の文を善導釈してのたまわく「もし我れ成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称すること下十声に至るまで、

質問します。お念仏とは、仏の姿や形を心に思い描くことなのでしょうか。(132)

お答えします。仏の姿・形や光明等を静めた心に思い描くのは「観仏三昧」といいます。誓願と修行を成就して得られた仏のお姿を心に思い描いたり、衆生が身に宿しているさとりの本質（仏性）を観じたりすることは(133)、真理を見出す智慧が浅く、常に心が散り乱れてしまう私達凡夫には到底不可能なことです。

これについて善導大師は「阿弥陀仏の姿を観じるのではなく、ただその御名を称えなさい。衆生は、仏道を妨げる煩悩が極めて重く、仏の姿を心に思い描く観想念仏の修行を成就することなど困難である。だからこそ、尊いさとりを開かれた聖者である釈尊は、苦しみや迷いから逃れる術なき衆生を憐れんで、〈南無阿弥陀仏〉と声に出して称える称名念仏を専ら勧められたのである。なぜなら、衆生の心は粗雑であり、それは四方八方に散乱してしまうからである」(134)とおっしゃっています。

また善導大師は、第十八念仏往生の本願の文を解釈して「もし私（法蔵菩薩）がさとりを開いて仏になった時、あらゆる世界の衆生で、私の名前を〈南無阿弥陀仏〉と、わずか十遍称えた者に至るまで、

我が願力に乗じて、もし生ぜずば正覚を取らじ。かの仏、今現に世に在して成仏したまえり。まさに知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生することを得」と仰せられてそうろう。

疾く疾く安楽浄土に往生せさせおはしまして弥陀観音を師として『法華』の真如実相平等の妙理、『般若』の第一義空、真言の即身成仏、一切の聖教心のままに解らせおわしますべし。云云。

大胡太郎実秀へ遣わす御返事　第十二

前の便には差合う事そうらいて、御返事細かに申さずそうらいき。定めて不審に思召しそうろうらんと思いたまえそうろう。

私の誓願の力に乗ずることで、もし極楽に往生しないならば決して仏とはなるまい、とお誓いになっている。（かつて法蔵菩薩であった）その仏は、今現に極楽世界にいらっしゃって阿弥陀仏となっておられる。よく理解しなさい。仏になる以前に誓われた深重な慈悲が籠もっている阿弥陀仏の願いは確かなものであり、衆生が救いを求めて阿弥陀仏の御名を称えれば必ず極楽に往生することができる」[135]とおっしゃっています。

一刻も早く、仏道修行をやすやすと行うことができる安楽な極楽浄土に往生させていただき、阿弥陀仏や観音菩薩を師と仰ぎ、『法華経』に説かれる「真如実相平等の妙理」[136]や『般若経』等に説かれる「第一義空」[137]、真言宗で説かれる「即身成仏」[138]の教えなど、あらゆる仏の教えを心のままに理解させていただきましょう。

大胡太郎実秀へ遣わされた御返事　第十二

以前にお手紙をいただいた際にはさしつかえがございまして、お返事を詳しく申し上げられませんでした。さぞかし、いぶかしくお思いのことと申し訳なく思っております。

さては尋ね仰せられそうらいし事ども、御文なんどにて容易く申し開き難き事にてそうろう。あわれ京に久しく御逗留そうらいし時細かに御沙汰そうらわましかば善くそうらいなまし。

大方は念仏して往生すと申す事ばかり僅かに承りてそうろう。我が心一つに深く信じたるばかりにてこそそうらえども、人まで審らかに申し聞かせなんとする程の身にてそうらわねば、まして立ち入りたる事どもの不審なんど御文にて申し開くべしとも覚えそうらわねども、僅かに見及びそうらわん程の事を、憚り参らせて、ともかくも御返事申しそうらわざらん事の懼れにてそうらえば、心の及ぶ程は形のごとく申しそうらわんと存じそうろうなり。

まず三心具足して往生すと申しそうろ

さて、お尋ね下さったいくつかのことは、お手紙では簡単に申し上げにくいことでございます。ああ、あなたが京都に長く滞在されていた時、私に細かくお尋ねいただければようございましたのに。

私は、およそお念仏をして往生するということだけを、少しばかり存じ上げているに過ぎません。私は、自分自身の心ひとつにおいて念仏往生の教えを深く信じているだけに過ぎないのであって、他の人にまで詳しく説き聞かせようとするほどの者ではございません。ましてや、教えの深い部分にまで踏み込んだ疑問などお手紙ではご説明できるとも思えません。そうはいっても、わずかばかりではありますが私の存じ上げていることをはばかり遠慮して、何ともお返事を申し上げませんことも恐れ多いことですので、お伝えできる程度のことは形ばかりでございますが申し述べさせていただきます。

まず、三心をすべて具えて往生すると申しますことは、まことに

う事は、まことにその名目ばかりを打聞く時にはいかなる心を申すやらんとことごとしく覚えそうらいぬべけれども、善導の御心にては心得易き事にてそうろうなり。必ずしも習い沙汰せざらん無智の人や、解なからん女人なんどのえ具せぬ程の心ばえにてはそうらわぬなり。

ただまめやかに往生せんと欲いて念仏申さん人は、自然に具足しぬべき心にてそうろうものを。その故は三心と申すは『観無量寿経』に説かれてそうろう様は「もし衆生ありてかの国に生まれんと願わん者は、三種の心を発してすなわち往生すべし。何等をか三つとする。一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向発願心なり。この三心を具する者は必ずかの国に生まる」と説かれたり。

しかるに善導和尚の御意によらば、初その名称だけを耳にする時、どのような心のことを言っているのだろうと物々しく思われるでしょうが、善導大師のお考えによれば具えやすいことでございます。必ずしも、仏教を学び理解する機会に巡り会わなかった無智の人や、仏教の教えを学ぶことができる環境から遠ざけられていた女性などであったとしても具えられない心のことではございません。

ただ心から往生を願ってお念仏を称えている人には三心は自ずと具わるものです。その理由は、以下に述べる通りです。まず、三心と申しますのは、『観無量寿経』に「かの極楽浄土に往生したいと願う衆生は、三種の心を発しなさい。そうすれば往生することができる。何を三種の心というのか。一つには至誠心、二つには深心、三つには回向発願心である。この三心を具える者は必ず極楽浄土に往生する」[139]と説かれています。

その三心について、善導大師のお考えに基づくならば、はじめの

めに至誠心というは真実の心なり。真実というは、いわく、内は虚しくして外を飾る心のなきを申すなり。

すなわち『観経疏』に釈していわく「外には賢善精進の相を現じ、内には虚仮を懐くことを得ざれ」といえり。この釈の意は、内は愚かにして外には賢き人と思われんと振る舞い、内には悪を造り外には善人の由を示し、内には懈怠の心を懐きて外には精進の相を現ずるを、真実ならぬ心とは申すなり。外も内もありのままにて飾る心のなきを至誠心と名づくるにこそそうろうめれ。

二つに深心というは、すなわちこれ深く信ずる心なり。何事を深く信ずるぞというに、まず諸の煩悩を具足し多くの罪を造りて余の善根なんどなからん凡夫、阿弥陀仏の大悲本願を仰ぎてその仏の大

至誠心とは真実の心のことです。真実というのは、内面には阿弥陀仏に向けた真実の心がないのに外面ばかりを飾り立てようとする心のないことをいうのです。

すなわち、『観経疏』において、そのことを解釈して「外面には賢く善人ぶって仏道修行に励んでいる姿を表す一方、内面には阿弥陀仏に向けた嘘偽りの心を抱くようなことがあってはならない」[140]とおっしゃっています。この解釈の意図するところは、内面は愚かであるのに外面は賢い人に思われようと振る舞ったり、また、内面は悪い心を働かせているのに外面は善人であるかのように振る舞ったり、また、内面は怠け心を抱いているのに外面は精進しているかのように振る舞ったりすることを真実ではない心と言うのです。外面も内面も阿弥陀仏に向けてありのままの真実をもって飾る心のないことこそ至誠心と名付けるのです。

二つ目に深心とは、すなわち深く信じる心のことです。何を深く信じるのかというと、まずは私達自身が諸々の煩悩を断ち切ることができず、多くの罪を犯してしまい、お念仏以外の善根などまったく修められない凡夫であることを信じるのです。次にそんな私達が阿弥陀仏の大いなる慈悲に基づいて建てられた本願を仰いで、阿弥

悲の名号を称えて、もしは百年にても、もしは四五十年にても、もしは十二十年にても、乃至一二年にてもあれ、すべて往生せんと思い始めたらん時よりして最後臨終の時に至るまで懈怠せず、もしは七日一日十声一声にても多くも少くも称名念仏の人は決定して往生すべしと信じて、乃至一念も疑う心なきを深心とは申すなり。

しかるに諸の往生を願う人、本願の名号を持ちながらなお内に妄念の起るを恐れ、外に余善の少なきによりても偏に我が身を軽しめて往生を不定に思わば、すでに本願を疑うなり。

されば善導は遐かに未来の行者のこの疑を残さん事を鑑みてその疑心を除き陀仏の大いなる慈悲の働きの及ぶ名号を称えることが、例えば百年であっても、四十年や五十年であっても、十年や二十年であっても、あるいは、一年や二年であっても、その長短にかかわらず、浄土往生を目指した時から最後臨終の時に至るまで懈け怠ることなく、さらには、わずか七日や一日の期間であったとしても、あるいは、たとえ十遍や一遍であったとしても、その多少にかかわらず、称名念仏の行者は必ず浄土に往生することができると信じて、上は一生涯を尽くして称えるお念仏から下はわずか一遍のお念仏に至るまで、浄土往生が叶うことを疑わない心を深心というのです。

ところが、浄土往生を願う人々の中には、阿弥陀仏の本願に誓われた行である名号を称えることを相続しながら、それでもやはり内に迷いの心が沸き起こることを恐れて、また日々の生活の中でお念仏以外の善行を実践することが少ないことに罪悪感をおぼえて、むやみに自分を軽んじて、自身の往生など叶わないのではないか、と思ってしまう人もいます。もしそのようであるならば、それはすでに阿弥陀仏の本願を疑っていることになるのです。

それ故、善導大師は、はるか先の未来の行者が、この阿弥陀仏の本願に疑いを抱いてしまうことを予想して、そうした疑いの心を取

て決定の心を勧めんがために、煩悩を具足して罪業を造り善根少なく智解なからん凡夫、十声一声までの念仏によりて決定して往生すべき理を審しく釈し教えたまえるなり。

たとい多くの仏空の中に充ち満ちて光を放ち舌を舒べて「造罪の凡夫念仏して往生すということは僻事なり、信ずべからず」とのたまうとも、それによりて一念も驚き疑う心あるべからず。

その故は阿弥陀仏いまだ仏に成りたまわざりし昔「もし我れ仏に成りたらん時、十方の衆生、我が名号を十声称え一声も称えん、称うる事上百年より下十声一声までにせんに、もし我が国に生まれずといわば我仏に成らじ」と誓いたまいたりしに、その願虚しからずして仏に成りて

り除き、彼等に阿弥陀仏の本願を深く信じる心を勧めるために、煩悩を断つことができずに罪を造り、あるいは、善行の実践が少なくて仏の智慧を具えられず、それに基づく実践を修められない凡夫であっても、わずか十遍や一遍のお念仏によって、必ず往生することができる道理をつまびらかに解釈して教えて下さったのです。

そして、たとえ多くの仏が空中に満ち溢れるほどに現れて、光を放ち広く長い舌をお出しになって、「これまで罪を犯し続け、これからも罪を犯してしまうであろう凡夫が念仏を称えるだけで浄土往生を遂げることができるという教えは間違いである。信じてはいけない」とおっしゃったとしても、その言葉によって一瞬たりとも驚きや疑いの心を発してはいけません。

その理由は、阿弥陀仏が成仏を目指して修行されていた昔、「もし私が仏になったならば、あらゆる世界の衆生が、私の名をわずか十遍や一遍称えただけであっても、それはすなわち、上は百年間も念仏を称え続けることから、下はわずか十遍や一遍だけの念仏を称えることに至るまで、[141]その者達の往生を叶えるようにしよう。もしそれが叶わないようであれば、私は仏にならない」とお誓いになり、その誓願は達成して成仏を遂げられ、すでに長い時間が経っている

すでに久しくなりたまえり。知るべし、その名号を称えん人は必ず往生すべしという事を。

また釈迦仏、この娑婆世界に出でたまいて、一切衆生のためにかの弥陀の本願を説きて念仏往生を勧めたまえり。

また六方恒沙の諸仏、各広長の舌を出だして「釈迦の念仏して往生すと説きたまうは決定なり、諸の衆生深く信じて少しも疑う心あるべからず」と爾許の仏たちの一仏も残らず一味同心に証誠したまえり。

すでに阿弥陀仏はその願を立てたまう。釈迦仏、その願の虚しからざる事を説き勧めたまう。六方恒沙の諸仏はその説の真実なる事を証誠したまえり。

この外にいずれの仏のまたこれらの諸仏に違いて、凡夫念仏して往生せず、とからです。ですから、阿弥陀仏の名号を称える人は、必ず浄土往生が叶うということを知らねばなりません。

また釈尊がこの娑婆世界にお出ましになって、すべての衆生のために阿弥陀仏の本願をお説きになって念仏往生の教えを勧められました。

また、あらゆる世界のガンジス川の砂の数ほどの数限りない仏が、それぞれ広く長い舌を出して「釈尊が〈念仏を称えれば必ず浄土往生が叶う〉と説かれたことは疑いのない真実であり、もろもろの衆生は、そのことを深く信じて一瞬たりとも疑う心を発してはいけない」と述べ、実にたくさんの仏が一仏も違うことなく、心を一つにしてお念仏の教えを証明しておられるのです。

すでに阿弥陀仏は、念仏往生の誓願をお建てになりました。釈尊は、その念仏往生の誓願が報われて成就されたことを説き勧められました。あらゆる世界の数限りない仏は、その念仏往生の誓願が真実であることを証明して下さいました。

またこの他、念仏往生の真実を証明しているこれらの諸仏と意見を異にして〈凡夫が念仏を称えても往生しない・・・〉などという理

はのたまうべきぞという理をもて、多くの仏現じてのたまうともそれに驚きて、さては念仏往生叶うまじきか、と信心を破り疑心を起すべからず。いわんや菩薩たちののたまわんをや、いわんや羅漢辟支等をやと釈したまいてそうろうなり。

いかにいわんや近来の凡夫のいい妨げんをや。いかにめでたき人と申すとも善導和尚に勝りたてまつりて往生の道を知りたらん事も有り難くそうろう。

善導はまたただの凡夫にはあらず、すなわち阿弥陀仏の化身なり。かの仏、我が本願を弘めて遍く一切衆生に知らしめて決定して往生せさせん料に、かりそめに凡夫の人と生まれて善導和尚といわれたまうなり。いわばその教は仏説にてこそそうらえ。

屈をもって、仮に多くの仏が現れて言い募ったとしても、その説示に驚いて〈それならばお念仏を称えても往生は叶わないのではないか〉と念仏往生の信心を損なってしまい、疑いの心を発すようなことがあってはいけません。ましてや仮に菩薩達が言い募ったとしても、なおさら疑いの心を発してはいけませんし、ましてや仮に阿羅漢[142]や辟支仏等[143]が言い募ったとしてもなおさら疑いの心を発してはいけません、と解釈しておられます。[144]

さらに言うまでもなく、末法の時代に生まれた凡夫が言い募って念仏往生の信心を妨げたしてもなおさら疑いの心を発してはいけません。どれほど仏典を学び仏道に励まれた立派なお方であっても、善導大師に勝って浄土往生の道をご存じの方などおられません。

また善導大師は、私達のようなただの凡夫ではありません。すなわち、阿弥陀仏の化身なのです。阿弥陀仏が、ご自身の本願を広めて、すべての衆生にあまねく知らしめて、必ずや浄土往生を遂げさせるために、一時的に凡夫として人の世に生まれて、善導大師と呼ばれておられるのです。言ってみれば、善導大師の教えは仏説に他ならないのです。

いかにいわんや垂迹の方にても現身に念仏三昧を得て、目の当たり浄土の荘厳を見、仏に向いたてまつりて直ちに仏の教えを承りてのたまえることばどもなり。本地を思うにも垂迹を訪ぬるにもかたがた仰いで信ずべし。

されば誰も誰も煩悩の濃き薄きを顧みず、罪障の軽き重きをも沙汰せず、ただ口に南無阿弥陀仏と称えん声につきて決定往生の思をなすべし。その決定の心をやがて深心とは名づくるなり。その深心を具しぬれば決定して往生するなり。詮ずるところはとにもかくにも深心念仏して往生すということを深く信じて疑わぬを深心とは名づけてそうろうなり。

三つに廻向発願心というは、これまた別の心にはそうらわず。我が所修の行業

ましてや善導大師が阿弥陀仏の垂迹[145]の姿としてこの世にお出ましになった時には、その身において念仏三昧[146]の境地に入られて、まのあたりに浄土の荘厳をご覧になって、阿弥陀仏にお目にかかって、善導大師のお姿として直接阿弥陀仏から教えを承った上でおっしゃっているお言葉なのです。善導大師の本地[147]のお立場を思い巡らしてみても、垂迹のお姿を考えてみても、どれもこれも仰いで信ずるべきなのです。

そうであるから、人々が具えている煩悩が濃いとか薄いとかについて省みることもなく、人々が犯してきた罪障の軽いとか重いとかについて問題として論ずることもなく、ただ口に〈南無阿弥陀仏…〉とひと声ひと声称える毎に必ずや浄土往生が叶うという決定往生の思いを発すべきなのです。そのひと声毎に決定往生が叶うという心をそのまま深心と名付けるのです。その深心を具えているので必ず浄土往生を遂げるのです。結局のところは、とにもかくにもお念仏を称えて往生[148]するということを深く信じて疑わない心を深心と名付けられたのです。

第三に回向発願心とは、これはまたとりたてて特別な心ではありません。自分自身が修めた行の功徳を専ら極楽に回向して浄土往生

を一向に極楽に廻向して往生を願う心なり。

「かくのごときの三心を具して必ず往生すべし。この心一つも少けぬれば往生せず」と善導は釈したまえるなり。たとい真実の心ありて上を飾らずとも、仏の本願を疑わばすでに深心少けたる念仏なり。たとい疑心なくとも外を飾りて内にまことの心なくば至誠心少けたる心なるべし。

たといこの二心を具して飾る心も疑心もなくとも、極楽に生まれんと思う心なくば廻向発願心少けぬべし。三心を心得分かつ時にはかくのごとく別別なる様なれども、詮ずるところは真実の心を発して深く本願を信じて往生を欣う心を三心具足の心とは申すなり。

まことにこれ程の心だにも具足せずしを願う心です。

「こうした三心を具えれば、必ず浄土往生は遂げられます。この三心の中、一つでも欠けてしまえば浄土往生は叶いません」[149]と善導大師は解釈されています。たとえ阿弥陀仏に向けて真実であって外面を取り繕うとする心がなかったとしても、仏の本願を疑ったならば、もはや深心が欠けているお念仏となるのです。一方、たとえ阿弥陀仏の本願を疑う心がなかったとしても、外面ばかりを取り繕って内面には阿弥陀仏に向けた誠の心がなかったならば至誠心が欠けている心となるのです。

たとえこれら至誠心と深心を具えていて取り繕う心や疑いの心がなかったとしても、極楽に往生しようと思う心がなければ回向発願心が欠けていることになるのです。三心をそれぞれに分けて心得ようとする時には、このように別々のありさまに見えますが、結局のところは真実の心を発して、深く阿弥陀仏の本願を信じて、浄土往生を欣う心を三心具足の心というのです。

まことにこれ程の心でさえも具えられないのであれば、どうして

ては、いかが往生程の大事をば遂げたまうべきや。この心は申せば、また易き事にてそうろうなり。

これをかように心得知らねばとて、またえ具足せぬ心にてはそうらわぬなり。その名をだにも知らぬ者もこの心をば具えつべくそうろう。よくよく知りたらん人の中にも、そのままに具せぬもそうらいぬべき心ばえにてそうろうなり。

さればこそいうに甲斐なき人ならぬ者どもの中よりも、ただひらに念仏申すばかりにて往生したりという事は昔より申し伝えたる事にてそうらえ。それらはみな知らねども三心を具したる人にてありけりと心得らるる事にてそうろうなり。

また年ごろ念仏申したる人の、臨終の悪き事のそうろうは、前に申しつるように上ばかりを飾りて貴き念仏者と人にい

浄土往生のような一大事を遂げることができましょうか。言ってみれば、この三心を具えるのは、これもまたたやすいことなのです。

三心について、これまで述べてきたようなありようを心得て理解していなければ、また具足できない心[150]であるというわけではありません。三心の名称さえ知らない者であってもこの心をしっかり具えることができるものです。その一方、よくよく三心のありようを知っている人の中にも、その通りには具えていない人もいらっしゃるような心持ちなのでございます。

そのようであるからこそ、三心について細かく説明しても理解が及ばない人であっても、その人々の中からも、ただひたすらお念仏を称えることで往生した人がいるということは昔から申し伝えられている通りです。彼等は皆、三心のありようについて知らなかったけれども、いずれも三心を具えた人であったのだなぁと納得できる事例なのでございます。

また長年にわたってお念仏を称えた人が、臨終を迎えて穏やかでない様子になってしまうのは、先程も述べたように外面ばかりを飾り立てて〈いかにも貴き念仏者だ〉と人に言われようとだけ思って、

われんとのみ思いて、下には深く本願をも信ぜずまめやかに往生をも願わぬ人にてこそはそうろうらめと心得られそうろうなり。さればこの三心を具せざる故に臨終も悪く往生もせぬ事にてそうろうなりとしろしめすべきなり。

かく申しそうらえば、かくは往生は大事の事にこそと思召す事ゆめゆめそうろうまじきなり。一定往生すべしと思い取らぬ心をやがて深心少けて往生せぬ心とは申しそうらえば、いよいよ一定の往生とこそ思召すべき事にてそうらえ。

まめやかに往生のこころざしありて弥陀の本願を疑わずして念仏を申さん人は、臨終の悪き事は大方はそうろうまじきなり。その故は仏の来迎したまう事はもとより行者の臨終正念のためにてそうろうなり。それを心得ぬ人はみな我が臨終正内面には阿弥陀仏の本願を深く信じることもなく、真剣に浄土への往生を願うこともない、まさにそのような人であろうと心得ることができるのです。そうであるから、その人は、こうした三心を具えることがないので臨終が穏やかでなく、浄土往生も遂げられないのだ、と解釈すべきです。

以上のように申し上げてしまうと、「そのような三心であれば、[151]私達には浄土往生など到底遂げられない」とお思いになってしまいますが、決してそのようなことがあってはいけません。「必ず往生を遂げるのだ」としっかりと信じられずに疑ってしまう心を、とりもなおさず深心が欠けていて浄土往生などできない心と申しますので、いよいよ「必ず往生を遂げるのだ」とお思いになるべきです。

心から往生したいという志があって、阿弥陀仏の本願を疑うことなくお念仏を称えている人は、臨終に取り乱してしまうことはまずありません。その理由は、阿弥陀仏が来迎されるのは、そもそもお念仏を称える人の臨終にあたって、彼等を安らかな心持ちへと導くためだからです。そうした経緯を理解していない人はみな、「自分自身が臨終において安らかな心持ちでお念仏を称えた時、はじめて

念にて念仏申したらん時に仏は迎えたまうべきなりとのみ心得てそうろうは、仏の願をも信ぜず経の文をも心得ぬ人にてそうろうなり。

その故は『称讃浄土経』にいわく「仏、慈悲をもて加え祐(たす)けて心をして乱らしめたまわず」と説かれてそうらえば、ただの時によくよく申し置きたる念仏によりて臨終に必ず仏は来迎したまうべし。仏の来迎したまうを見たてまつりて、行者正念に住すと申す義にてそうろうなり。

しかるに前の念仏を虚しく思いなして由(よし)なく臨終正念をのみ祈る人なんどのそうろうはゆゆしき僻胤(ひがいん)に入(い)りたる事にてそうろうなり。されば仏の本願を信ぜん人は、予(か)ねて臨終を疑う心あるべからずとこそ覚えそうらえ。

ただ当時申さん念仏をばいよいよも心阿弥陀仏は私のもとへお迎えに来て下さるはずだ」とばかり理解しており、阿弥陀仏の本願も信じていない人であり、経文の意味内容も心得ていない人なのです。

その理由は、『称讃浄土経』に「阿弥陀仏は、慈悲の力を念仏者に加えられ、彼等を助け守ろうとして、彼等の心を散乱しないようにして下さる」[152]と説かれていますので、常日頃からよくよく称えてきたお念仏の功徳によって、臨終にあたり必ず阿弥陀仏は来迎して下さるのです。そして、阿弥陀仏が来迎して下さるのを拝見して、念仏行者は、安らかな心持ちに定まり留まるという意味なのです。

それなのに、普段称えているお念仏は無益だと思い込んで、わけもなく、臨終にあたって安らかな心持ちになることだけを願って祈る人達がいるのは、たいへん誤った考え方に陥っているということです。そもそも、阿弥陀仏の本願を信じている人は、常日頃から、阿弥陀仏の臨終来迎を疑う心を抱いてはならないと受けとめております。

ひたすら、その時々に称えるお念仏を、ますます心の限りを尽く

を至して申すべきにてそうろう。いつかは仏の本願にも臨終の時念仏申したらん人をのみ迎えんとは立てたまいてそうろう。

臨終の念仏にて往生すと申す事は日ごろ往生をも願わず念仏をも申さずして、偏に罪をのみ造りたる悪人のすでに死なんとする時、初めて善知識の勧に遇いて念仏して往生すとこそ『観経』にも説かれてそうらえ。

もとよりの行者は臨終の沙汰をば強ちにすべき様はそうらわぬなり。仏の来迎一定ならば臨終の正念もまた一定と思召すべきなり。この大意をもてよくよく御心を止めて心得させたまうべくそうろう。

また罪を造りたる人だにも念仏して往生す、まして『法華経』なんどうち読みて念仏申さんは何かは苦しかるべきと人して称えるべきです。いったいいつ阿弥陀仏の本願において〈阿弥陀仏が臨終の時にお念仏を称えている人だけを極楽浄土に迎え摂る〉とお立てになったというのでしょうか、決してそんなことはありません。

臨終に称えるお念仏によって往生するという事は、常日頃浄土往生を願うこともなく、お念仏を称えることもなく、専ら罪のみを造っている悪人が、今まさに命を終えようとしている時、はじめて善知識によるお念仏の勧めにお会いして、勧められた通りにお念仏を称えて浄土往生を遂げたと確かに『観無量寿経』にも説かれています。

常日頃からお念仏を称えている者は、臨終にあたって特別な心の準備をする必要などありません。お念仏によって阿弥陀仏の来迎が確かなものであるならば、臨終において私達が安らかな心持ちになれることもまた確かなものだとお思いになるべきです。これまで述べてきたことの肝要をよくよくお心に留めて、理解されるべきです。

また、「罪を犯した人でさえお念仏を称えれば極楽に往生することができるのだから、まして『法華経』などをいくらか読誦しつつ、お念仏を称えることがどうして問題となるものだろうか」と、そち

人の申しそうろうらんことは、京辺にもさように申しそうろう人人多くそうらえば、まことにさぞそうろうらん。それは余宗の心にてこそそうろうらめ。善し悪しを定め申すべきにそうらわず。僻事と申さば恐れある方多くそうろう。

ただし浄土宗の心、善導の御釈には「往生の行に大きに分かちて二つとす。一つには正行、二つには雑行なり」。

始めに正行というはこれに数多の行あり。始めに読誦正行というは、これは『無量寿経』『観経』『阿弥陀経』等の『三部経』を読誦するなり。次に観察正行というは、これはかの国の依正二報のありさまを観ずるなり。次に礼拝正行というは、これは阿弥陀仏を礼拝するなり。次に称名正行というは、南無阿弥陀仏と称うるらの人々が言っているということですが、都とその周辺にもその様に言っている人達がたくさんおりますので、さぞやおっしゃる通りの状況なのでしょう。そうした理解は、他宗の受けとめ方であれば問題ありません。その善し悪しを判定して申し上げるべきではありません。「そうした理解は間違いである」と言ってしまったら、はばかりのあることがたくさんございます。

とはいうものの、浄土宗の受けとめ方について、善導大師の『観経疏』には「阿弥陀仏の極楽浄土へ往生するための行は、大きく分けて二つある。一つ目は正行であり、二つ目は雑行である」[153]とあります。

はじめに正行には多くの行があります。はじめに読誦正行とは、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』という「浄土三部経」を声を出して読むことをいいます。次に観察正行とは、極楽浄土の阿弥陀仏や観音・勢至両菩薩のお姿などと極楽浄土のありさまを心に思い浮かべることです。次に礼拝正行とは、阿弥陀仏に対して礼拝を捧げることです。次に称名正行とは、〈南無阿弥陀仏〉とお念仏を称えることです。次に讃歎供養正行とは、阿弥陀仏を讃えて、阿弥陀仏に供養の誠を施すことです。

なり。次に讃歎供養正行というは、これは阿弥陀仏を讃歎したてまつるなり。

これを指して五種の正行と名づく。讃歎と供養とを二つの行とする時は六種の正行とも申すなり。

この正行につきて総ねて二つとす。一つには「一心に、専ら弥陀の名号を称えたてまつりて、立居起臥昼夜に忘るることなく念念に捨てざる者を、これを正定の業と名づく、かの仏の本願に順ずるが故に」と申して、念仏をもて正しく定めたる往生の業と立てて「もし礼誦等によるをば名づけて助業とす」と申して、念仏の外の礼拝や読誦や讃歎供養なんどをば、かの念仏を助くる業と申してそうろうなり。

さてこの正定業と助業とを除きてその外の諸の業をばみな雑行と名づく。布施

これらを指して「五種の正行」と名付けます。讃歎と供養とを二つの行とする時は「六種の正行」とも呼んでいます。

この正行をまとめて二つとします。善導大師は、一つには「心を一つにしてただひたすら阿弥陀仏の名号を称え、立っているときも座っているときも、起きているときも横になっているときも、昼も夜も、忘れることなく、ひと声ひと声の念仏を怠らずに称えることをまさに浄土往生が叶う行（正定の業）と名付ける。それは阿弥陀仏の本願に順じているからである」[154]と述べられて、お念仏を阿弥陀仏によって正しく定められた浄土往生のための行（正定の業）であるとするのです。また善導大師は、「もし礼拝正行や読誦正行などを修めるというのであれば、それらを念仏に心を向けさせる行（助業）と名付ける」[155]と述べられて、お念仏以外の礼拝正行や読誦正行や讃歎供養正行などを、お念仏を助ける行（助業）というのです。

さてこの正定の業と助業を除いた、それ以外の諸々の行を雑行と名付けます。布施・持戒・忍辱・精進等の六波羅蜜、『法華経』の

持戒忍辱精進等の六度万行も、『法華経』をも読み、真言をも行い、かくのごとくの諸の行をばみなことごとく雑行と名づく。前の正行を修するをば専修の行者といい、後の雑行を修するをば、雑修の行者と申してそうろうなり。

「この二行の得失を判ずるに、前の正行を修するには心常にかの国に親近して憶念間なし。後の雑行を行ずるには心常に間断す、廻向して生まるることを得べしといえどもすべて疎雑の行と名づく」といいて極楽に疎き行といえり。

また専修の者は十人は十人ながら生まれ、百人は百人ながら生まる。何をもての故に。外の雑縁なくして正念を得るが故に、弥陀の本願と相応うが故に、釈迦の教に違わざるが故に。

読誦、真言を唱えるなどといった諸々の行をみなすべて雑行と名付けるのです。前に述べた正行を修める者を専修の行者といい、後に述べた雑行を修める者を雑修の行者といいます。

「この二行の得失を判断するならば、前の正行を修める者は、心が常に極楽浄土や阿弥陀仏と親しくかつ近く、その想いが決して途切れることがない。後の雑行を行じる者は、心が常に極楽浄土や阿弥陀仏と途切れてしまう。雑行を修めた功徳を極楽に回向したならば浄土往生できる可能性があるかも知れない。しかし、それらはすべて疎く雑多な行と名付ける」[156]といい、雑行は極楽浄土に疎い行と述べられています。

またお念仏を中心に修める専修の行者は、十人いれば十人すべてが往生し、百人いれば百人すべてが往生します。それはいかなる理由によるのでしょうか。専修の行は、種々雑多な妨げに結びつくような縁がないので心の安定を得られるからであり、阿弥陀仏の本願に適っているからであり、釈尊の教えに相違しないからであります。

雑行の者は百人が中に一二人生まれ、十人が中に四五人生まる。

何をもての故に。雑縁乱動して正念を失うが故に、弥陀の本願と相応せざるが故に、釈迦の教に随わざるが故に、係念相続せざるが故に、憶念間断するが故に、みずからも往生の業を障え他の往生をも障うるが故になんど釈せられてそうろうめれば、善導和尚を深く信じて浄土宗に入らん人は、一向に正行を修すべしと申す事にてそうらえ。

その上は善導の教を背きて余行を加えんと欲わん人は各習いたる様ともこそ候らめ。それを善し悪しとはいかが申しそうろうべき。

善導の御心にて勧めたまえる行どもを雑行を修める者は、百人の中にはわずか一人か二人しか、千人の中にはわずか四人か五人しか往生できません。(157)

それはいかなる理由によるのでしょうか。雑修の行は、種々雑多な縁と結びついて心が乱れ動き安定を失うからであり、阿弥陀仏の本願に適っていないからであり、釈尊の教えに相違しているからであり、阿弥陀仏や極楽浄土に寄せる心が続かないからであり、常に阿弥陀仏や極楽浄土を心に思い留めることが途絶えてしまうからであり、自身の浄土往生の実践の妨げとなるからであり、周囲の人々の浄土往生の実践の妨げともなるからであるなどと善導大師は解釈しておられます。だからこそ、善導大師を深く信じて浄土宗の教えに帰依した人は、心を一つにしてただひたすら正行を修めなさいと申し上げているのです。

浄土宗の教えに帰依した状況において、善導大師の教えに従わず、お念仏以外の行をあれこれと修めてみようと思うような人は、それぞれが学び修めてきた事情などがきっとあることでしょう。(158) それについて「善い」「悪い」などとどうして申し上げられるものでしょうか。

善導大師の御心によってお勧めいただいた正行を差し置きながら、

措きながら、勧めたまわぬ行を少しにても加うべき様なしと申す事にてそうらえ。

勧めたまえる正行ばかりだにもなお物憂き身にて、いまだ勧めたまわぬ雑行を加えん事はまことしからぬ方もそうろうぞかし。

また罪を造る人だにも念仏して往生す、まして善なれば『法華経』なんどを読まんは何か苦しからんなんど申しそうろうらんこそ無下に気穢なく覚えそうらえ。

往生を助けばこそいみじくもそうらわめ。障にならぬばかりをいみじき事として加え行わん事は何かは詮にてそうろうべき。

されば悪をば仏の心に造れとや勧めさせたまう。構えて止めよとこそ誡めたまえども、凡夫の習当時の惑に引かれて悪を造るは力及ばぬ事にてこそそうらえ。お勧めにならない行をわずかであっても修め加える必要などありません、と申し上げているのです。

善導大師がお勧めになられた正行のみを修めようということさえ気が進まないというありさまなのに、お勧めになられていない雑行をも加えて修めようなどというのは、まったくもって不誠実な態度というものです。

また「罪を犯した人であっても念仏を称えて往生すると言うのであれば、まして善行に他ならない『法華経』などを読誦することに対して、どうして差し障りがあるものだろうか」などと言っていることこそ、どうしようもなくいやしく感じられます。

浄土往生に心を向けさせることになればこそ素晴らしくもありましょう。浄土往生の障害とならないというだけの理由で、善行として追加して修めようなどということに、いったいどんな意味があるというのでしょうか。

そもそも、悪について言えば、仏の御心に「罪を犯しなさい」と勧められるお考えなどありましょうか。「決して罪を犯してはいけません」と誡められることでしょう。けれども、そこが凡夫の悲しさ、その時その時の煩悩に引きずられて、知らず知らずの内に悪行を犯

まことに悪を造る人の様に、しかるべくて経も読みたく余行も加えたがらん事は力及ばず。

ただし『法華経』なんどを読まん事を一ことばなりとも悪を造らん事にいい並べて、それも苦しからねばましてこれはなんど申すらん事こそ不便の事にてそうらえ。

深き御法も悪しく心得る人に遇いぬれば、却りてものならず聞こえそうろう事こそあさましく覚えそうらえ。これをかように申しそうらえば、余行の人人は腹立つ事にてそうろうに、御心一つに心得て広く散らさせたまうまじくそうろう。

あらぬ解の人のともかくも申しそうらわん事をば耳に聞き入れさせたまわで、してしまうのは、私達の力ではどうしようもないことなのです。こうして人が悪行を犯してしまうように、浄土往生の障害とならないというだけの理由で当然のごとく『法華経』も読誦しようとしたり、お念仏以外の行も修めようとしたりしたがるのは、私達の力ではどうしようもないことです。

ただし、『法華経』などを読誦しようとすることを、わずかであっても、悪事を犯すことと同列のようにみなして、その悪事を犯すことも差し支えがないのならば、ましてや『法華経』を読誦することが差し支えになるはずがないなどと言っていることこそ、あわれむべきことなのです。

奥深い御教えであっても心得違いの人に出くわしてしまっては、かえって中途半端な教えに聞こえてきて何とも嘆かわしく感じられます。とはいえ、お念仏以外の行を修めることについて、このように言ってしまいますと、余行を修めている人々は腹を立てることになりますから、あなたお一人の胸に納めるように心得ていただき、外に言い触らすようなことがあってはいけません。(159)

私達とはまったく理解の異なる人があれこれと言い立ててくるであろうことについてはお聞き入れになることなく、ただひと筋に善

ただ一筋に善導の御勧に随いて、いま少しも一定往生する念仏の数遍を申し添えんと思召すべき事にてそうろうなり。

たとい往生の障とこそならずとも不定の往生とは聞こえてそうろうめれば、一定往生の正行を修すべき行の暇を容れて不定の往生の業を加えん事は、且うは損にてはそうらわずや。よくよく心得させたまうべき事にてそうろうなり。

ただしかく申しそうらえば雑行を加えん人は永く往生すまじなんど申す事にてはそうらわず。いかさまにも余行の人なりとも、すべて人を下し人を譏る事はゆゆしき過重き事にてそうろうなり。よくよく御慎みそうらいて雑行の人なればとて侮る御心のそうろうまじくそうろうなり。よかれあしかれ人の上の善し悪しを思い容れぬがよき事にてそうろうなり。

導大師のお勧めにしたがって、必ず浄土往生が叶うというお念仏を称える回数を、わずかであっても加えてみようとお思いになるべきなのです。

たとえ浄土往生の障害にはならないまでも、お念仏以外の行は往生が叶うかどうか定かでない行と言われておりますので、必ず往生が叶う正行として修めるべきお念仏の時間を割いてまでして、[160]往生が叶うかどうか定かでない行を加えてしまうのは、重ねての損[161]失になるということではないでしょうか。よくよく心得ていただくべきことです。

ただし、このように申しましても「浄土往生のために雑多な行を加え修めようという人は、永い間、往生が叶わないであろう」などと言い立てるものではありません。いずれにしてもお念仏以外の行を修めている人であっても、おしなべて人を見下したり非難したりすることは非常に重たい罪なのです。よくよくそうした物言いは慎まれて、雑多な行を修めている人だからといって侮る御心を抱いてはいけません。善くも悪くも人様が修めている行の是非など判断を下さないのが善いことなのです。[162]

またこころざしもとよりこの門にありて進みぬべからんをば拵え勧めさせたまうべくそうろう。解違いてあらぬさまならん人なんどに論じ合わせたまう事はあるまじき事にてそうろう。

よくよく習い知りたまいたる聖たちだにも、さようの事をば慎みておわしましあいてそうろうぞ。まして殿原なんどの御身にては一定僻事にてそうらわんずるにそうろう。

ただ御身一つにまずよくよく往生を願いて念仏を励ませたまいて、位高き往生を遂げて急ぎ娑婆に還りて人をば導かせたまえ。

かように審しく書きつけて申しそうろう事もかえすがえす憚り思う事にてそうろうなり。あなかしこ、あなかしこ。御披露そうろうまじくそうろう。あなかし

また、その志がはじめからこの浄土門にあって、その道を歩んでいくであろう人々を育て上げ、その教えをお勧めになるのがよいでしょう。理解が噛み合わずに異なる行を修めている人々と論じ合われることはあってはならないことです。

浄土門についてよくよく学び知り尽くしている尊い僧達であっても、そのような論争は慎んでおられます。まして武士である御身にとってみれば、そのような論争に関わることは間違いなく誤りとなってしまうことでしょう。

とにもかくにもあなたご自身が、まずはよくよく浄土往生を願ってお念仏に励まれて、高い位への往生を遂げて、急いでこの娑婆世界に戻って来て、人々をお導き下さいませ。

このようにこまごまと書きつけて申し上げたことも、返す返すも畏れ多く思う次第です。謹んで申し上げます。他の方にはお見せしないで下さいませ。謹んで申し上げます。

こ、あなかしこ。

三月十四日　源空

黒谷上人語灯録巻第十三

三月十四日源空

黒谷上人語灯録巻第十三

注

（1）和語―当巻のみ詞書のルビが「和語（やまとことば）」となっており、他の巻の詞書では「和語（わご）」となっている。なお釈文は「和語（わご）」を採用している。

（2）進する―詞書では「九条殿下の北政所へ進（まい）する御返事」、釈文では「九条殿下の北の政所へ進（まい）する御返事」、また昭法全では「九条殿下の北政所へ進（まい）ずる御返事」（昭法全五三三）となっている。

（3）進する―詞書では「鎌倉の二位の禅尼へ進（しん）する御返事」、釈文では「鎌倉の二位の禅尼へ進（まい）する御返事」、また御法語本文前のタイトルは詞書釈文ともに「鎌倉の二位の禅尼へ進（まい）する御返事」となっている。

（4）真言止観―真言とは、真理を引き起こそうと働く言葉であり、止観とは、止とは心を一つの対象に集中することで、観とは止によって起こされた正しい智慧に基づいて対象を明らかに捉え、さとりに至ろうとする行法である。ここでは広くこうした密教や顕教において修される行を指していると思われる。

（5）『往生要集』第五大門（浄全一五・一〇八上）

（6）三昧発得―心やすらかで静寂な状態に達し、阿弥陀仏とその極楽浄土の荘厳を目の当たりにして、その境地を体得すること。

（7）『観経疏』散善義に「正に念仏三昧の功能超絶して、実に雑善をもて比類となすことを得るにあらざることを顕す」（聖典二・三二三／浄全二・七一上）とあり、諸行に比して念仏三昧の功徳が素晴らしいと説かれている。

（8）『無量寿経』（聖典一・二四九／浄全一・一九）

（9）『往生要集』第十大門に「問う、往生業の中には念仏を最とす。余業の中に於いて亦最もとするや。答う、余の行法の中にも此れ亦最勝なり」（浄全一五・一四八下）とあり、諸行に比して念仏三昧の功徳が素晴らしいと説かれている。

（10）七難消滅の法―衆生が被る七つの災難から逃れるた

めに修された法。七難は『仁王般若経』『薬師瑠璃光経』『法華経』普門品などに説かれ、普門品によれば火難・水難・羅刹難・刀杖難・鬼難・枷鎖難・怨賊難の七つをいう。「七難消滅護国頌」に「国家隆平にして人道を求め 依正安穏にして念仏を修せん」（『伝教大師全集』四・三一五～八）とあることを受けていると思われる。

（11）この朝に渡らず―元亨版に「浄土の教文はこの朝に渡らずと考えそうらいて」とある箇所は、正徳版には「浄土の教文は。わたりはてすとかんかへて候」（浄全九・五三二下）とあり、ここでは正徳版の説示に沿って現代語訳を施した。

（12）末法万年の後三宝みな失せて後―ここは『無量寿経』の「当来の世、経道滅尽せんに、我れ慈悲をもって哀愍して、特りこの経を留めて、止住すること百歳ならん」（聖典一・二八五／浄全一・三六）に基づいていると考えられる。

（13）方便の時節末法に当たりて、今の教これなり―ここは『観経疏』定善義の「諸仏出世して種種に方便を以て、衆生を勧化したまうことは、ただ悪を制し福を修して人天の楽を受けしめんと欲するにあらざればなり。人天の楽は、なおし電光のごとし、須臾にすなわち捨て還って三悪に入って、長時に苦を受く。この因縁に為って、ただ勧めて、すなわち浄土に生ぜんことを求めしめ、無上菩提に向わしむ」（聖典二・二五二／浄全二・四〇上）に基づいていると考えられる。あるいは、「方便の時節」は、「方今（只今、現在、現今）」の誤写か。

（14）この辺―『和語灯録日講私記』には「此辺にまうて来てとは元祖の草庵のこと也」（浄全九・七六七下～七六八上）とある。

（15）頓教―速やかに修行が完成する教えのこと。釈尊の教説を整理して体系づける教相判釈が行われる中で生まれた概念であり、時代を経るにしたがって内容に変化がみられる。頓教と対になるのは、漸教である。漸教は次第に修行が完成する教えのことである。

（16）大地微塵劫―非常に長い時間のこと。大地を極めて細かな塵にし、それをすべて数えあげるのにかかる時間以上の途方もない時間を意味する。

（17）『法事讃』（浄全四・二五下）

（18）いかにいわんや凡夫の力は及ぶまじくそうろう―「そうろう」の後に「をや」があったのかもしれないが、「いかにいわんや」から始まる文章が必ずしも反語表現になるわけではない。ここではそのような事情も考慮した上で現代語訳した。

（19）上品上生―九種類ある極楽浄土への往生のあり方の

一つ。上品上生で極楽浄土へ往生することによって、速やかに往生後に再び迷いの世界へ戻り、人々を教導できる。

(20) 人々―ここでいう「人々」には、消息の相手である北条政子も含まれていることを念頭にしていると考えられる。

(21) 前のごとくそうろうべし―『和語灯録日講私記』に「先のごとくおぼしめすべくとは、次上の雑善根をもすすめ給へと云ふを指すなり」(浄全九・七六八上)とあり、それに準じて現代語訳を施した。

(22) 一切は摂まりてそうろう―『和語灯録日講私記』に「一切はおさまりて候也とは、凡そ往生の行に三心五念四修三種行儀など種々のことあれども只六字を唱ふるにあるなり」(浄全九・七六八上)とあり、それに準じて現代語訳を施した。

(23) 身口の不浄をも嫌わぬ行―『和語灯録日講私記』に「身口の不浄等とは一乗骨目章 華厳宗元暁作 偈に曰不論不浄不論心乱但念弥陀即得往生と此の意也」(浄全九・七六九上)とある。

(24) 楽行往生―元亨版と『西方指南抄』には「楽行往生」とあり、正徳版や『四十八巻伝』には「易行往生」とある。あらゆる制約を離れた念仏による往生のこと。

(25) 楽行往生とは申し伝えてそうろうなり―「楽行往生」と「申し伝え」ている典籍については不明。

(26) 執論―『四十八巻伝』では「宗論」とある(聖典六・三六八)。

(27) 過―『西方指南抄』には「サトリ」とある(昭法全五三二)。「過」には、「過ぎる」などの意味があるが、ここでは「過」の意味で現代語訳した。

(28) 録内―『和語灯録日講私記』には、「元祖被閲の蔵は開元録也」(浄全九・七六九下)と記しており、法然上人所覧の一切経目録を「開元釈教録」と指摘している。しかし、『選択集』第一二章において法然上人は、「貞元入蔵録」所収の典籍を「翻訳将来の経」(聖典三・一六九)と述べていることから、一切経目録の基準として「貞元入蔵録」を用いていたと考えられる。

(29) いずれの月日―『四十八巻伝』一五(聖典六・一七九～一八一)には、妙香院(良快、九条兼実の子)の『浅近念仏抄』序文が挙げられ、『要義問答』のこの箇所と近似する内容が説かれている(『和語灯録日講私記』〈浄全九・七七〇上〉)。また、『要義問答』にてこの後に引かれる『止観輔行伝弘決』も『浅近念仏抄』の文として『四十八巻伝』に示されている。

(30) 五衰退没―天界の住人の死に際してあらわれる五種

の衰弱の様相。その内容や順序は経説によって異なるが、『往生要集』では『六波羅蜜経』により、①頭上の花鬘が萎み、②天衣が塵や垢によって汚され、③腋の下より汗が流れ、④目がくらみ、⑤天界の生活を嘆く、といった五種の相を挙げる。

(31) 生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦などの苦しみ——四苦八苦の内、求不得苦・五陰盛苦は略されている（『和語灯録日講私記』〈浄全九・七七〇上〉参照）。

(32) 戯（たわ）れに尼の衣を着、酒に酔いて出家をしたる人——『和語灯録日講私記』には、「蓮華色比丘尼」と「酔婆羅門」の二つの因縁に関して『大智度論』をもとに、『優鉢羅華比丘尼本生経』が挙げられる。他に、『四分律行事鈔』『四分律行事鈔資持記』などが挙げられている（浄全九・七七〇上～下）。『今昔物語集』などにも紹介されている。

(33) 勝如聖人—勝如（七八一～八六六）は勝尾寺（弥勒寺）の住僧。

(34) 『往生拾因』（浄全一五・三七五下）取意

(35) 釈迦如来、当来導師の慈尊に付属したまう——『大方等大集経』五六（正蔵一三・三八一中）。『往生要集』第九大門（浄全一五・一五二下）に引用される。

(36) 竜華三会—弥勒菩薩が兜率天より人間界に下生して、竜華樹の下で悟りを得て、三会（三回）にわたり説法すること。『和語灯録日講私記』には「三会得脱とは、龍華会にして弥勒を見奉りて得脱するを三会得脱と云う。（中略）弥勒成仏して、初会の説法の時には九十六億の人、阿羅漢を得、第二会の時には九十四億の人、阿羅漢を得、第三会時には九十二億の人、阿羅漢を得。釈迦遺法の弟子、三帰五戒をたもち、袈裟をかくるほどの人は、皆初会に得度す」（浄全九・七七〇下）という『弥勒成仏経』の説が挙げられ、持戒の出家者は初会に得度することが示される。

(37) ある『経』の文—出典不明。『和語灯録日講私記』にも、「未だ在家の持戒より出家の破戒は勝れると云ふ文を得ず。若し考え得ば此につくべきなり」（浄全九・七七一上）とある。「ある経」との関係は不明であるが、元照「為判府蔣枢密開講要義」（『芝苑遺編』巻下所収、『卍続蔵』五九・六四二中）には、受戒後の破戒行為は受戒をしていないよりははるかに良いとして、受戒の大切さが説かれている。また、聖冏『顕浄土伝戒論』には、「設い此れを破るとも、受戒の功徳、即ち無尽なり。（中略）破戒と云わるるとも、無戒とは云われず。汝若し破戒を恐るれば、何ぞ無戒を恐れざる」（浄全一五・八九七上）として、受戒の功徳が説かれている。

(38) 解脱幢相の衣—袈裟のこと。『往生要集』下末には、『地

蔵十輪経』によって「十輪経の偈に云わく、恒河沙の仏の解脱幢相衣を被るに、此に於いて悪心をおこさば、定めて無間獄に堕すと。袈裟を名づけて解脱幢の衣と為す」（浄全一五・一五三上）とある。

(39)宝の山に入りて手を空しくして還る―『大智度論』（正蔵二五・六三上）。『観心略要集』（仏全三一・一五六下）に引用される。

(40)『安楽集』上（浄全一・六九三上）取意

(41)法華三昧―「法華経」の真髄を体得する三昧。智顗は大蘇山の慧思の下で法華三昧の前方便（準備的な段階。空観に相当）を得たとされ、のちにその内容を空仮中三諦円融、一心三観の説にまで発展させた。またその境地を証得するための行法をも法華三昧と称する。すなわち智顗は四種三昧の内、半行半坐三昧に法華三昧行法（懺儀）を位置づけたが、これが法華三昧といわれ、法華懺法の通称となる。

(42)六根―眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根の六つの認識器官（能力）。

(43)三密の行法―密教において、仏の身口意の行為を身密・口密・意密の三密とする。行者が、手に手印を結び、口に真言を読誦し、心に本尊の観想を行うという修法（三密の行法）により、仏と我とが不二一体となって三業が三密に浄化されるという。

(44)四道―煩悩を消滅させて、涅槃に入るための修行階位のこと。ここでは『大智度論』の解釈に基づき、四道を四向四果と捉える。すなわち、①預流、②一来、③不還、④阿羅漢のそれぞれに向（向かって修行する段階）と果（到達した境地）を立てる。なお四道とは、三学を修する加行道、正しい智慧を起こして煩悩を断ずる無間道、無間道の後に起こる智慧によって正しく仏法を理解する解脱道、その後さらに定と慧が発達していく勝進道のことを指すこともある。

(45)三明六通―三明とは、宿命通・天眼通・漏尽通の三つの智慧のこと。これら三明は修行者がもつ超人的な能力と考えられており、神足通・他心通・天耳通の三つを加えて六神通とする。

(46)『大集月蔵経』にいわく―『大方等大集経』月蔵分（正蔵一三・三六三上～中、二六七上、三七七上）取意

(47)五濁―時代が下るにつれて増進する五つのけがれのこと。①劫濁―時代の乱れのことであり、戦乱・飢饉・疫病などが多くなること。②見濁―思想の乱れのことであり、邪悪な思想がはびこること。③煩悩濁―貪・瞋・痴の三毒煩悩などが盛んになること。④衆生濁―人々の資質が低下して教えの理解力が劣化すること。⑤命

濁―人々の寿命が短くなること。

(48)『安楽集』上（浄全一・六九三上）

(49) 永観のいわく―『往生拾因』（浄全一五・三九四上）には、「真言止観の行は道幽かにして迷い易く、三論法相の教は理奥くして悟り難し」と説かれ、「要義問答」の「真言止観は理奥くして悟り難く、三論法相は道幽かにして迷い易し」という説示と異なる。『往生拾因』の原文と異なる理由は不明である。

(50) 兜率の往生―『和語灯録』では「往生」と示されるが、ここでは『西方指南抄』に基づき、「上生」と訳した。

(51) 天台大師―原文では「天台大師」と示されるが、引用文は『止観輔行伝弘決』の内容であり、湛然を指すことは明らかであるため、「妙楽大師湛然」と訳した。

(52) 天台大師ののたまわく―『止観輔行伝弘決』（正蔵四六・一八二下）。ここに説かれる「一準」について、『和語灯録』の元亨版などでは「一順」と示され、「寛永版」では原文と同様に「一準」と示されている。ここでは両者の意味が含まれるように訳した。

(53) 難易相違の証拠どもを引けり―『往生要集』（浄全一五・六四下～六八上）には、「大文第三に極楽の証拠を明かさば二有り。一には十方に対し、二には兜率に対せん」として、十方浄土や兜率天と極楽浄土に関する勝劣・難易を示す諸経論が示される。初めに十方浄土との対比に関して『往生要集』に挙げられる諸経論について、『和語灯録日講私記』では、「天台諸経論」「無量寿経観経往生論等数十余部経論」「迦才師は浄土論に十二経七論を引けり」「恵心は更に諸の顕密の教中に於て、十五部を別出せり」（『和語灯録日講私記』〈浄全九・七七一下～七七二上〉）と示され、兜率天に対しては「懐感禅師群疑論」などが挙げられている。

(54) 御覧ぜさせたまえ―「御覧ず」は平安時代から用いられ、「見給う」より尊敬の度合が高い。古くは天皇・皇后などに用いた。「させたまえ」は二重尊敬（最高敬語）の意味と考えられる。

(55)『観経疏』散善義（聖典二・一二五／浄全二・五八下）取意。聖典四巻三八〇頁一〇行目のカギ括弧（閉じ）の位置を後に移した。該当箇所の五種正行の順序が相違しているが、この点について『和語灯録日講私記』には、「一には礼拝の正行とは、此の次第疏と違せり。只意を取りて暗に仰せらるゝ故に混雑せり」（浄全九・七七二上）とある。また、『西方指南抄』本には、「一ニハ礼拝ノ正行、二ニハ讃歎供養ノ正行、三ニハ読誦正行、四ニハ観察正行、五ニハ称名ノ正行ナリ」（昭法全六一七）とある。

(56)『観経疏』定善義（聖典二・一〇五／浄全二・四九上）

(57)『法華経』六（正蔵九・五四下）。『和語灯録日講私記』には、「法華経とは、薬王品 二科註七／三十丁」に云わく、若し女人有りて、是の経典を聞きて、説の如く修行せば、此に於いて、命終して即ち安楽世界の阿弥陀仏の大菩薩衆に囲繞せらるる住処に往きて蓮華の中の宝座の上に生れん」（浄全九・七七二上）とある。

(58) 法華念仏一つもの―『和語灯録日講私記』には、『沙石集』や『法華直談』など、さまざまな典拠を挙げているが（浄全九・七七二下～七七三上）、明確なものは示しがたい。法華三昧と念仏三昧を含む四種三昧から展開された「朝題目夕念仏」などといった受けとめから派生したものと考えられる。

(59)『無量寿経』（聖典一・七一～七三／浄全一・一九～二〇）。ちなみに下輩には、「一向専意乃至十念念無量寿仏」とある。

(60)『観経』（聖典一・一九三／浄全一・五一）

(61)『観経疏』散善義（聖典二・一五三／浄全二・七一下）

(62)『観経』（聖典一・一六六／浄全一・四四）

(63)『観念法門』（浄全四・二二八下）

(64)『観経疏』散善義（聖典二・一二六／浄全二・五八下）

(65) 顕密の教法―顕教と密教のこと。仏の教説を大きく二分したもので、顕教とは衆生の機根に応じて誰にでもはっきりとわかる言葉や文字で明確に説かれた教えを指し、密教とは法身である大日如来が自らさとりの境地を享受する（自受法楽）ために示した秘密の教えを指す。日本においては、真言宗の「東密」と天台宗の「台密」がある。

(66) 事理の業因―森羅万象の事相を観ずる事観と、普遍的かつ唯一平等の真理そのものを観ずる理観のこと。源信は『往生要集』中において仏の姿やその功徳、さらには浄土の具体的様相を想起する観想念仏を事と理に大別し、三身即一の仏を観ずる理観に堪えることができない者は、仏の相好を個々に観ずる事観を修し、それすらも修せない者は帰命・引摂・往生の三想を通じて一心に称念せよと説いた（浄全一五・八五下）。

(67)『往生要集』上（浄全一五・三七上）

(68) 自宗他宗―正徳版には、「自宗他宗の人師」（浄全九・五四〇上）とある。なお、『和語灯録日講私記』に「永観は三論宗なり」（浄全九・七七四上）とあり、恵心を自宗、永観を他宗として想定しているようである。また、永観は『往生拾因』には「念仏宗　永観集」（浄全一五・三七一上）と記載がある。

(69)『観経疏』玄義分（聖典二・九／浄全二・三下）

(70) 五品六根の位―天台宗で立てる修道者の階位のうち、五品弟子位と六根清浄位のこと。五品弟子位とは菩薩の五十二位における十信以前、すなわち外凡の位を随喜品・読誦品・説法品・兼行六度品・正行六度品の五種に区別したもので、円教の六即位の中では第三の観行即にあたる。六根清浄位とは十信の位を指し、菩薩の六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）が仏に似て清らかになることから、同六即位の中では第四の相似即にあたる。『法華経』法師功徳品第一九には「若し善男子善女人、是の法華経を受持し、若しは読み、若しは誦し、若しは解説し、若しは書写せん。（中略）是の功徳を以て、六根を荘厳して、皆清浄ならしめん」（正蔵九・四七下）とあり、『法華経』を受持・読・誦・解説・書写することによって六根が清浄となり、種々の功徳が得られると説く。

(71) 『法華経』六（正蔵九・五四下）

(72) 『法華経』七（正蔵九・六一下）

(73) 善導の『観経疏』『六時礼讃』『観念法門』―『和語灯録日講私記』には、「文には善導等とは法事讃を略したまふ。般舟讃は本より元祖不見なり。元祖の御時代未だ流布せざる故なり」（浄全九・七七五下）

(74) 阿羅漢―仏道修行における最高位、また如来の十号の一つでもある。供養に値する聖者のこと。

(75) 辟支仏―独力でさとりを開いた人。独覚、縁覚ともいう。

(76) 初地十地の菩薩―菩薩の五十二位の階位のうち第四十一から五十番目の位にあたる。十聖ともいう。

(77) 化仏―仏が神通力によって別の姿で現出させた身。変化仏ともいう。

(78) 報仏―菩薩の立てた本願が成就することによって得られた身。

(79) 金剛―金剛石（ダイヤモンド）のこと。鉱物のなかで最も硬いことから信心などが強固な様子に喩えるときに用いられる。

(80) 『観経疏』散善義（浄全二・五五下～五九上）取意

(81) 次に喩を合すというは―『和語灯録日講私記』に「次にたとへを合す等とは已下、譬の中に未だ法に合せざる有り。三心私記の下に委釈有り。弁ずべき也」（浄全九・七七五下）と述べられているように、二河白道の比喩の合釈すべてに言及しているわけではない、という指摘がある。

(82) 六根―六つの認識器官のこと。眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根の六種をいい、前の五つは視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚を支える感覚器官であり、意根は概

念的な認識を支える器官と考えられている。

(83) 六識―六つの認識のこと。眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六種をいい、六根と六境が接触することで生じる視覚認識・聴覚認識・嗅認識覚・味覚認識・触覚認識と概念的認識のこと。

(84) 六塵―六境ともいい、色境・声境・香境・味境・触境・法境の六種の認識対象のこと。眼根の対象となる色・形、耳根の対象となる音声、鼻根の対象となる香り、舌根の対象となる味、身根の対象となる接触、意根の対象となる存在のこと。

(85) 五陰―五蘊ともいい、心身を構成する色蘊・受蘊・想蘊・行蘊・識蘊の五つの要素。色蘊は肉体、受蘊は感受、想蘊は表象、行蘊は意思、識蘊は認識のことである。

(86) 四大―物質、あるいは肉体を構成する四つの要素。地大・水大・火大・風大の四種のこと。具体的には、地大は堅さのことであり爪や髪などを構成する要素、水大は潤いのことであり唾液や血液などを構成する要素、火大は温かさのことであり体温などを構成する要素、風大は動きのことであり呼気や吸気などを構成する要素である。

(87) また廻向というは―『和語灯録日講私記』に「又回向といふはとは、上来は往相回向也。自下は略して還相回向を明かす也」(浄全九、七七六上)と述べられている。

(88)『観経疏』散善義(浄全二・五五下～五九上)取意

(89) 一心不乱―『阿弥陀経』(聖典一・三一八／浄全一・五四)。

(90) 善導この事を釈してのたまわく―『和語灯録日講私記』に「答。善導此事を釈してとは、散善義廻向心の下の釈を取意して書き給うなり」(浄全九・七七六上)とあり、『観経疏』「回向発願心釈」の「この心、深く信ずること、なおし金剛のごとくにして(中略)ただこれ決定して一心に投じ、正直に進んでかの人の語を聞いて、すなわち進退し、心に怯弱を生ずること有って、回顧して道に落つることを得ざれ」(浄全二・五九上)といった説示を取意していると指摘している。この『日講私記』の指摘のように、法然上人は、質問者が『阿弥陀経』所説の「一心不乱」について問うているのに対して、広く念仏者の心のありようを通じて回答していると想定される。

(91) 阿弥陀仏の本願の文―『無量寿経』(聖典一・二二七／浄全一・七)。

(92)『観経』に明かすところの三心―聖典一・三〇五～三

○六／浄全一・四六。

(93) 横に五悪趣を截り、悪趣自然に閉じ、道に昇ること窮極なし。往き易くして人なし―『無量寿経』（聖典一・二六〇／浄全一・二四）。

(94) 願成就の文―『無量寿経』（聖典一・二四九／浄全一・一九）。

(95) 五逆の罪人生まる―『観無量寿経』（聖典一・三一二～三一三／浄全一・五〇）。

(96) この経を留めて止住すること百歳ならん―『無量寿経』（聖典一・二八五／浄全一・三六）。

(97) 諸の聖教は竜宮に隠れて一巻も留まるものなし―『和語灯録日講私記』には、懐感の『群疑論』と僧祐の『釈迦譜』が関連のある文献として挙げられている（浄全九・七七六下）。『群疑論』には「衆生、薄福にして感化の縁絶えぬれば、所有る聖教皆龍宮に隠れ…」（浄全六・四六上）とある。また、『末法灯明記』に「教法は竜宮に蔵まる」（『伝教大師全集』三、四八四）とある。

(98) 易往―『無量寿経』（聖典一・二六〇／浄全一・二四）。

(99) しかも無人―『無量寿経』（聖典一・二六〇／浄全一・二四）。

(100) 『阿弥陀経』（聖典一・三一八～三一九／浄全一・五四）。

(101) 三千大千世界―一人の仏が教化する世界であり、三千大千世界の三千とは小千・中千・大千の三種の千世界のこと。一世界が千個集まったものが小千世界、小千世界が千個集まったものが中千世界、中千世界が千個集まったものが大千世界とされる。三千大千世界があらゆる方向に広がっているとするのが仏教の宇宙観といえる。

(102) 六方の如来同心同時…―ここは『観念法門』の「又、弥陀経に云うが如き…自然に壊爛せんと」（浄全四・二三五下）といった一節に基づいていると思われる。

(103) 『法華』を説きたまいし時は多宝一仏証明し――羅什訳『妙法蓮華経』に「此の宝塔の中に如来の全身有り。乃往過去に東方の無量千万億阿僧祇の世界、国を宝浄と名く。彼の中に仏有り、号して多宝と曰う。其の仏、本、菩薩の道を行ずる時、大誓願を作して、若し我れ成仏して滅度の後、十方の国土に於て法華経を説く処あらば、我が塔廟、是の経を聴かんが為の故に、其の前に涌現して、為に証明を作し、讃じて善哉と言う」（正蔵九・三三下）とある。

(104) 『般若』を説きたまいし時は四方四仏証明したまう―『和語灯録日講私記』に『法事讃私記』を引き、『般若経』の説示が見出せず、『金光明経』であることを指摘している（浄全九・七七六下）。一般的に四方四仏の証明は『金

光明経』等の説とされ、『放光般若経』は東西南北上下の六仏であり、『大品般若経』は十維十仏である（望月信亨『浄土教の起原及発達』四六三～四七〇頁）。なお、伝証空『選択密要決』に「『故法花経』とは多宝一仏の証明なり。『金光明経』とは四方四仏の証明なり。『今弥陀功徳』とは唯だ慈悲の故に、以て機を簡ばず。十方恒沙諸仏は皆共に証するなり」（正蔵八三・三五五上）とあり、永観『往生拾因』に「之に依りて十方恒沙諸仏は広長の舌を出して各勧進を垂れたもう。是れ実語を表するなり。仰彼の信を取るべし。鷲峯の妙法は多宝一仏の証明す。又、王城の金典は四方四仏倶に説く。凡そ厥れ処処の集会の道場も今の説の舌相証誠の盛あるには如かず」（浄全一五・三七三上）とある。

(105)『西方要決』（浄全六・六〇四下）

(106)『往生礼讃』（浄全四・三五五下）

(107)『往生要集』（浄全一五・八八下）

(108) 有縁の聖教―原文には「有縁の聖教」とあるが、後の文（『西方要決』）に「有縁の像と教を敬う」と詳説されているため、ここでは「聖教」を「仏像や経典」と訳した。

(109) 由旬…長さの単位で、牛が一日で進む距離が一由旬とされる。

(110)『西方要決』（浄全六・六〇四下）

(111) 三学…仏道修行で得るべきものの三大要素で、戒律・禅定・智恵のこと。

(112)『安楽集』（浄全一・七〇八上～下）取意

(113) 三乗…悟りを求める者の分別で、声聞乗・縁覚乗・菩薩乗のこと。菩薩乗を上位として悟りとの縁が深まる。大乗仏教では声聞は仏の教えを聞いたが実践をしない者、縁覚は自行に励み化他行が欠けた者で、菩薩は自行化他共に具わるものとする。

(114) 三乗の教旨―『和語灯録日講私記』には「三乗の教旨とは、四諦・十二因縁・六度等の教法也」（浄全九・七七八上）とある。

(115)『西方要決』（浄全六・六〇五下）

(116)『往生礼讃』（浄全四・三五六下）。『和語灯録日講私記』には「木のかたふきたる等とは上来は要決を略抄し玉ふ。此の恭敬修の五種は慈恩の釈なれば、善導五種正行の中の供養正行并に礼讃の恭敬修とは其意各別也。初学の人心得べし。扨自下は西方を恭敬すると云に付て礼讃の釈を出し玉ふ也」（浄全九・七七八上～下）とある。

(117)『西方要決』（浄全六・六〇五下）

(118)『往生礼讃』（浄全四・三五六下）

(119)『西方要決』（浄全六・六〇五下）

(120)『往生礼讃』(浄全四・三五五下)取意

(121)『往生礼讃』(浄全四・三五六下～三五七上)取意

(122)『釈浄土群疑論』(浄全六・四九下)

(123)魔王―欲界の最高位である第六他化自在天の王のこと。法然上人述『無量寿経釈』に「魔王とは欲界の第六天他化自在の王なり」(昭法全七六)とある。

(124)魔王のために妨げらる―智顗『天台小止観』には「覚知魔事」についての項目があり、「如何をか魔事と名づくるや。仏の如きは、功徳・智慧を以て衆生を度脱して涅槃に入らしむるを事と為す。魔も亦た是くの如く、常に衆生の善根を破壊して生死に流転せしむるをもって事と為す。若し能く心を道門に安ずるに、道高ければ則ち魔盛んなり。故に須らく善く魔事を識るべし」(正蔵四六・五〇六下)とある。ここに、魔事とは魔が衆生の善根を破壊して迷いの生存を繰り返させる事を意味すると説明されている。法然上人『逆修説法』初七日(昭法全二三五)にも「対治魔事」に関する言及があり、この『天台小止観』の言及を意識した内容になっている。この問答も、同じく天台における魔事の理解が前提となっている。

(125)魔界―魔境、魔郷と同じく、迷いの世界のこと。

(126)九境の魔事―法然上人『逆修説法』初七日にも「天台止観の四種三昧を修行するに、十種境界の発る中に『魔事境来る』と云う」(昭法全二三五)とあり、天台止観の観察の対象である十種の境界のなかにも魔事が現れ、仏道修行を妨げることが指摘されている。ここには具体的に九種の境界が何かは明確に示されないが、先に引用した『天台小止観』に「若し能く心を道門に安ずるに、道高ければ則ち魔盛んなり」(正蔵四六・五〇六下)とある通り、十境十乗観法でも、修行が進むにつれて魔事が覚知され、それが修行の完成である涅槃まで続くことを意味している。

(127)弥陀の一事～果人清浄なるが故に―『和語灯録日講私記』(浄全九・七八〇上)では、宋・択瑛撰『浄土修証儀』「弥陀の一教は魔事なし。果人を縁ずるが故に」と元照撰『観経義疏』「今、弥陀果得真実の境界を観ずるが故に魔事なし」(浄全五・三六三上)を提示したうえで、「果人清浄」については管見の限り見当たらないとしている。しかし、珍海撰『決定往生集』に「択瑛師云、十乗の理観は猶し九境の魔事を発す。弥陀の一門は本より魔事なし。弥陀を以て境となし、果人清浄なるが故に」(浄全一五・四九六上)とあり、法然上人はこうした一文を取意していると考えられる。

(128)百丈の石―一般的に「丈」は高さを示す単位とされ、

一丈は約三メートルとされる。ここでは大数として現代語訳した。

(129) 二十五の菩薩―『観念法門』には「『十往生経』に説くが如き、〈仏、山海慧菩薩、及以び阿難に告げたまわく。若し人有りて、専ら西方の阿弥陀仏を念じて往生を願ぜば、我れ今より已去、常に二十五の菩薩を使わして行者を影護せしめ、悪鬼悪神をして行者を悩乱せしめず、日夜に常に安穏なることを得しむ〉と。此れは、亦た是れ現生護念増上縁なり」(浄全四・二二九上)と述べられている。このように、善導大師は複数の著作において『十往生阿弥陀仏国経』(『十往生経』)を引用して、阿弥陀仏がつかわした二十五の菩薩が極楽往生を願う念仏行者を護念する功徳を説いている。法然上人もまた、そのような善導大師の言葉を『選択集』等に引用し、念仏行者に対する二十五菩薩の護念があると説明している。

(130) 一念によく八十億劫の生死の罪を滅す―『観無量寿経』(聖典一・一八六/浄全一・五〇)。『和語灯録日講私記』には「一念の力、九十億劫百億劫に及ばず、唯八十億劫の罪を滅すとは、不思議の仏法に際限有るに似たり。何ぞ無量億劫の罪障を滅せざるやと云ふとき(中略)一義に仏力に際限有るにはあらず。今八十億に限るは、只是れ、凡夫の心力、八十億の外に及ばざる故に、経に只八十億劫の罪を滅すと説きたもう」(浄全九・七八〇下)とあり、八十億劫が九十億劫や百億劫、無量億劫に及ばないというわけではなく、凡夫にとって心の及ぶ範囲が八十億劫であり、仏力に限りがあるわけではないと指摘している。

(131) ただ仏の名二菩薩の名を聞くすら―『観無量寿経』(聖典一・一九三/浄全一・五一)。

(132) 仏の色相を念じそうろうか―仏の色相を観じることが念仏ではないのかという問いの背景には、源信『往生要集』巻中(浄全一五・七九上)の観察門における観想念仏の説示などがあり、これが当時の浄土教や念仏についての一般的な理解であったと推定される。

(133) 同体の仏性を観ずる―平安後期から鎌倉期にかけて撰述された密教系の浄土教テキストに伝覚鑁『孝養集』がある。ここに「彼法性真如の理は、十方の仏菩薩にも一切衆生にも蟻けらに至る迄も露塵かはる事なく、皆いませ共たふろき迷へる故に此生死には沈めり。所以に妄想を留めて我身の仏性を観念すべきなり。我心是諸仏の心なり。諸仏の心此れ我心なり。法身同きが故に。真如一なるが故に。法身同なれば報身・応身皆同じ。三身皆同ければ一切の相好功徳皆同じ。故に我

身の仏性を観ずるが則三世十方の諸仏を念じ奉る功徳とは成るなり」（続浄一五・四九下）などとある。このように法然上人ご在世当時、仏と本来平等で同質の性質を観じることが諸仏を念じることになるとの見解があり、これが「念仏」と理解されることもあったと推察される。

（134）善導『往生礼讃』（浄全四・三五六上）

（135）善導『往生礼讃』（浄全四・三七六上）

（136）真如実相平等の妙理―誰もが本質的には平等に具えているという、ありのままのさとりの姿を観ずる法門。

（137）第一義空―一切の迷いがなくなった絶対なるさとりの境地のことであり、究極の真理である空のこと。

（138）即身成仏―現世に受けたその身そのままでさとりを開き仏となること。

（139）『観無量寿経』に説かれてそうろう様は―『観無量寿経』上品上生（聖典一・三〇五～三〇六、浄全一・四六）。原文では、「三種の心を発すべし。すなわち往生す」とある。

（140）『観経疏』（聖典二・二八八、浄全二・五五下）

（141）称うる事上百年より下十声一声までにせんに―『西方指南抄』には、「モシワレ仏ニナリタラムニ、ワカ名号ヲトナフル事、十声一声マテセムモノ、ワカクニニムマレスハ、ワレ仏ニナラシト、チカヒタマヒタリシ」（昭法全五一七）と説かれており、該当部分を見出すことができない。

（142）羅漢―小乗仏教の最高のさとりに達した聖者のこと。

（143）辟支―独力でさとりに向かい、さとりを開いた人のこと。

（144）『観経疏』散善義（聖典二・二八九、浄全二・五六上）取意。

（145）垂迹―仏菩薩が衆生を教化するために神や人間の姿として現れた姿のこと。ここでは阿弥陀仏の垂迹として善導がこの世に姿を現したことを指す。

（146）念仏三昧―一般に心を静めて念仏に称えることや仏菩薩の姿やその功徳や荘厳を憶念する境地にいたる方法を指すが、浄土宗においては、専ら念仏を称え続けることを意味する。ここでは善導大師が称名や観想の行法によって浄土の荘厳や阿弥陀仏にまみえるに至った境地を指す。

（147）本地―教化のために姿を現わした人間や神の本体としての仏菩薩のこと。ここでは垂迹としてこの世に姿を現した善導大師の本体としての阿弥陀仏のことを指す。

（148）深心念仏して―『西方指南抄』や『九巻伝』等には「深

心」の二文字が記載されていないので（昭法全五一九）、それに基づいて現代語訳した。

(149)『往生礼讃』（浄全四・三五四下）

(150) え具足せぬ心―この中、「え」について聖典の詞書では「□」で表現され読み切れないようであるが、釈文では「え」と翻刻され、『龍谷大学図書館蔵　黒谷上人語燈録　元亨版　翻刻および総索引』（勉誠出版、二〇二〇年）でも「え」と翻刻されている（一一九頁下段）。

(151) かくは―聖典の詞書と釈文では「かくは」で翻刻されているが、『龍谷大学図書館蔵　黒谷上人語燈録　元亨版　翻刻および総索引』（勉誠出版、二〇二〇年）では「さては」と翻刻されている（一二〇頁下段）。

(152)『称讃浄土経』（浄全一・一八八上）

(153)『観経疏』散善義（聖典二・二九四、浄全二・五八下）

(154)『観経疏』散善義（聖典二・二九四、浄全二・五八下）

(155)『観経疏』散善義（聖典二・二九四、浄全二・五八下）

(156)『観経疏』散善義（聖典二・二九四～二九五、浄全二・五八下）

(157) 十人が中に四五人生まる―『往生礼讃』には「千時希に五三を得」（浄全四・三五六下）とあるが、ここでは「十人が中に四五人生まる」とある。ここでは、「十」を「千」の翻刻ミスと解釈して現代語訳を施している。

(158) 釈文は「各習いたる様どもこそそうらわめ」（聖典四・四〇五）となっているが、詞書では「おのおのならひたる様ともこそ候らめ」（聖典四・一二四）とある。ここでは、詞書を用い、それに基づいて現代語訳を施している。

(159) 釈文は「散らせ給うまじく」（聖典四・四〇六）となっているが、詞書では「ちらさせ給ましく」（聖典四・一二四）とあり、詞書の「散らさせ」を用い、それに基づいて現代語訳を施している。

(160) 容れて―元亨版では「いれて」とあり、九巻伝では「入れて」となる。

(161) 且うは―『西方指南抄』には、「且は」を欠く。元亨版と九巻伝では、「且は」とある。正徳版では、「且に」となる（昭法全五二六註②）。ここでは、これらを勘案して「重ねての」と現代語訳した。

(162) 容れぬ―元亨版では「いれぬ」とあり、九巻伝では「入れぬ」となる。

(163) この門―『大胡太郎実秀に遣わす御返事』において「門」は初出だが、文脈上、「浄土門」として現代語訳を施した。

(164) 位高き往生を遂げて―現世の行為に応じた九通りの浄土往生（九品）の中、上品に往生した者は、速やかに還相回向ができることが説かれており、法然上人も

「上品ノ往生手ヲヒクヘカラス」（『三部経大意』昭法全四五）などと教示されている。

# 『三部経』説教の研究 ―讃題・フレーズ集の作成―（一）

## 『無量寿経』巻上

### 1．はじめに

当研究班は、寺院・僧侶の布教教化活動について、主に布教師の視点から研究を行うものである。令和五年度より、「『三部経』説教の研究―讃題・フレーズ集の作成―」をテーマとし研究会を開催した。なお、本研究の期間は三年間とする。

浄土宗の説教には、「讃題」（経文や祖師法語の一節）を頂戴して説き示し、称名念仏をもって結勧するという型（五段法・七段法など[1]）がある。現在では、総本山知恩院『元祖大師御法語』（前篇・後篇）から法然上人のお言葉を讃題として頂戴することが多い。仏教徒として、なにゆえ我々は念仏行を頂戴し実践し布教するのか。浄土宗開宗八五〇年の節目に、あらためて「凡入報土」をお示しくださった法然上人の御心を拝し、仏教の教理（無常・無明・因果・苦・生死輪廻／仏の智慧、慈悲、覚り…）に立ち返って法を説くことを考えることとした。そこで本研究は、仏説を直に頂戴してお伝えすることを意識し、『三部経』説教を想定した「讃題・フレーズ集」の作成を目標に掲げた。

令和五年度は『無量寿経』巻上より讃題を選定し、次に挙げる「凡例」に沿ってまとめたものが本報告である。そしてこれは従来の檀信徒を対象とした法話はもちろんのこと、教化の裾野を広げるため、幅広い聴衆に対する仏教法話についても参考となる資料を意識

したものである。

## 2. 凡例

### ①〈讃題〉

『浄土宗聖典』第一巻より引用させていただいた。

※四十八願より讃題を選定するにあたり、聖冏上人の『浄土二蔵二教略頌』における三種の分類を参考にした。[2] 第一に仏の有り様に関する誓願（摂法身の願）、第二に仏国土の有り様に関する誓願（摂浄土の願）、第三に教化に関する誓願（摂衆生の願）である。選定した讃題は、基本的に第一・第二にあたる誓願および第三のうち凡夫（人・天）に向けた誓願である。第三における聖人（声聞・菩薩）に向けた誓願は、今回の研究範囲としなかった。

### ②〈現代語訳〉

浄土宗総合研究所編『【現代語訳】浄土三部経』（浄土宗、二〇一一）より引用させていただいた。

### ③〈キーワード／設定〉

その讃題にてお伝えする内容のキーワードを並べた。「／」のあとには、讃題を掲げる法話が特に適していると思われる法要行事等を挙げた。

※「年回法要」は、その前後の短い時間に讃題を拝読して法話を勤めることはないであろうが、その内容が適していると思われる讃題には設定に掲げた。また、年忌によってご遺族の心情に変化があるため、充分に慮って導入や話材を選ぶべきである。

### ④〈キャッチフレーズ〉

各讃題の要旨を一言で言い表した、キャッチフレーズ案である。寺報、掲示伝道、ホームページ等に使えるものを意識した。

### ⑤〈語義・用語解説〉

主に、義山上人（一六四八―一七一七）の講説を記した『無量寿経随聞講録』を参照した。『三経随聞講録』は『浄土宗全書』巻一四に収録されている。本研究では特に、平成一九年度より発足した「近世浄土宗学の

基礎的研究」（平成二六年度からは「教学研究Ⅱ〈京都分室〉」プロジェクトにおける研究成果である、左記の資料を大いに活用させていただいた。

・「『無量寿経随聞講録』巻上之一―四　書き下し」（『教化研究』第一一号〈二〇一〇年〉―第一四号〈二〇一三年〉）

**⑥〈解説〉**

讃題に採り上げた経文の簡単な解説である。また、関連する経文（願文に対する願成就文や御法語など）をここで示した。

**⑦〈法話のポイント〉**

〈法話のポイント〉は、研究班一名が執筆を担当し、研究会にて内容を検討したものである。（記名原稿）

基本的には法話のポイントの箇条書きである。適宜、法話原稿を付したものもある。また、現在起きている時事問題や身近な問題に繋がるよう努めた記述もある。

**○〈その他〉**

・注などにおける書名は、次のような略号を用いた。

聖典　…『浄土宗聖典』
昭法全　…『昭和新修法然上人全集』（平楽寺書店、一九五五）
浄全　…『浄土宗全書』
続浄　…『浄土宗全書続篇』
正蔵　…『大正新脩大蔵経』
現代語訳…『【現代語訳】浄土三部経』（浄土宗、二〇一一）

## 3．讃題・フレーズ集（『無量寿経』巻上）

### 3―1「如来無尽の大悲」

**①〈讃題〉**

「如来無尽の大悲をもって、三界を矜哀（こうあい）す。所以に世に出興して、光（ひろ）く道教を闡（ひら）き、群萌を拯（すく）わんと欲して、恵むに真実の利をもってす」（聖典一・二一八頁）

**②〈現代語訳〉**

「如来とは、尽きることのない大悲の心で迷いの世界〔の人々〕を憐れむ。それ故、〔迷いの〕世界にお出ま

しになって覚りへの道を弘く説き明かし、あらゆる人々を救おうと願って、恵みとして〔覚りの世界へと導くという〕真実の利益を施す〔方なのである〕」（現代語訳・三五―三六頁）

**③〈キーワード／設定〉**

如来、大悲、三界、矜哀、真実の利／一般仏教法話会、十夜会、通夜・葬儀、年回法要

**④〈キャッチフレーズ〉**

「仏よ、人々を救え！」

「人々よ、私が救うぞ！」

「救いたい仏と救われたい私」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・如来…梵語 tathāgata の訳語。如去、多陀阿伽度、多陀阿伽陀とも訳す。「そのように行く者」「そのように実践をした者」「人々を救うためにそのように来た者」、すなわち仏のこと。如来の十号の一つ。如来はインドの諸宗教ですぐれた宗教者に対する呼び名で、仏教では仏や世尊と同様に覚者を意味する。釈迦牟尼仏を釈迦牟尼如来、阿弥陀仏を阿弥陀如来という。

・大悲…仏の大悲。大慈悲、大慈大悲ともいう。「慈」は梵語 maitrī、「悲」は梵語 karuṇā の訳語。仏・菩薩が人々をあわれみ、楽を与え、苦を取り除くこと。経典では筏に喩えられる。法然上人の『逆修説法』一七日には「次には道の先達の為に来迎したもうなり。或は往生伝に沙門志法の遺書に曰く、我、生死の海に在て、幸に聖の船筏に値り[3]」とある。聖光上人の『授手印』序に「法蔵菩薩の大悲誓願の筏、今の弥陀覚王の広度衆生の船[4]」とある。

・三界…欲界・色界・無色界のこと。衆生が輪廻して生死を繰り返す三種の境界。三界は五趣（あるいは六趣）とともに仏教の世界観を表している。欲界には地獄・餓鬼・畜生・人・天の五趣、色界と無色界には天のみしか存在しない。三界は煩悩に縛られ輪廻にさまよう境界であるから、そこを厭い、速やかに抜け出すべき境界でもある。

・矜哀…「矜」はあわれむ、「哀」はかなしむの意。『菩薩本縁経』『賢愚経』『正法華経』『華厳経』等に出る。『無量寿経』ではこの箇所のみ出る。

・道教…仏道、仏教を指す。この箇所の少し前にも「（諸々の菩薩は）諸仏の国に遊んで、普く道教を現ず」[5]とある。

**⑥〈解説〉**

・如来はこの世の衆生を憐れみ、真実の道に向かわせるために教えを説き、この世に現れたことを説く。ここでの「如来」は諸仏一般の仏を指す。讃題の経文は、『無量寿経』巻上の序分で、五徳瑞現の後、釈尊がいつもより増して非常に輝かしいお顔をされている理由について、阿難尊者が釈尊に問い（諸根悦予、光顔巍巍）、それに対して釈尊が如来の様相を様々に説く。引き続き、正宗分において教えを説くきっかけとなる場面である。

**⑦〈法話のポイント〉**

・如来（仏）がこの世に現れた理由を、改めて法話で取り上げることによって、私たち衆生が実は救われるべき存在であったことをお伝えすることできるでしょう。また、説法前の釈尊のお姿が、いつもよりも輝きが増し、すぐれていることによって、これから説かれる阿弥陀様の本願念仏の教えのすばらしさが、より強調されていることをお伝えできるでしょう。

・『無量寿経』中でこの讃題の経文に続くものとして、「（如来は）無量億劫にも、値い難く見難し。なお霊瑞華の、時時（ときあって）すなわち出づるがごとし」[6]とあり、仏のこの世での出現が非常に稀有であることを霊瑞華の喩えで説く。霊瑞華は優曇華、優曇波羅華（梵語でudumbara）ともいい、クワ科のイチジク属の一種。経典では伝説上の植物として扱われ、三千年に一度しか咲かない花とされます。その花が咲く時は転輪聖王（特に金輪王。須弥山の四州を統治する王）が姿を現すといわれます。

・仏の出現が稀有であることの説示について、『元祖

大師御法語』前篇第一「難値得遇」と関連付けても良いでしょう。「正に今、多生曠劫を経ても、生まれ難き人界に生まれて、無量億劫を送りても、遇い難き仏教に遇えり。釈尊の在世に遇わざる事は悲しみなりと雖も、教法流布の世に遇う事を得たるは、これ喜び也」[7]の御文を讃題に添えるものとして簡略に取り上げて、「盲亀浮木の喩え」を付け加えながらお伝えしてもよいでしょう。

・如来の大悲は、しばしば親の子に対する思いに譬えられます。『元祖大師御法語』前篇第二七「親縁」には「衆生仏を礼すれば、仏これを見給う。〈中略〉仏も衆生も親子のごとくなる故に、親縁と名付く」[8]とあり、仏非親、衆生非子、すなわち「仏と凡夫」という関係性において表現されます。親というものは常に子に目を向け、その声に耳を傾け、思いを寄せる存在であり、はたまた子に危機が迫れば、自分の身を犠牲にしてまでも我が子を助けようとします。それと同様に仏というのも常に衆生に目を向け救おうと働きかけている存在であり、身口意の三業によって仏と衆生は呼応関係にあるべきことをお伝えしましょう。

また、親も凡夫であるがために、その思いや愛情には限界があります。我が子を蔑ろにする親、傷つける親、殺める親もいます。やむを得ない事情で我が子を手放すこともありましょう。一方で、仏の大悲のみ心は限りがなく、私たち三界の衆生を見捨てることはないことをお伝えしましょう。また、その大悲は第十八願に基づいていることや、「摂益文」に説かれるようにその大悲は「光明」としてこの世を照らし働きかけて下さっていることも付け加えてもよいでしょう。

（執筆者：北條竜士）

## 3―2「法蔵説話」

### ①〈讃題〉

「時に国王あり。佛の説法を聞きて、心に悦豫を懐き、

すなわち無上正真の道意を発し、国を棄て王を捐てて、行じて沙門となる。名づけて法蔵という。高才勇哲にして、世と超異せり」（聖典一・二二〇頁）

**②〈現代語訳〉**

「時を同じくして、〔ある〕国王がいた。〔世自在王〕仏の説法を聞いて、心に〔目の前が晴れわたるような〕深い感銘を受け、そのままこの上ない覚りを求める心を発し、国政からも王位からも退き、修行すべく沙門となった。〔その沙門は〕法蔵と呼ばれた。すぐれた才能を身に具え、志の堅固なることは、すでに世間を超越していた」（現代語訳・三八頁）

**③〈キーワード／設定〉**

法蔵説話、本願、発心、報身／十夜会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「一念発起」

「法蔵の発心」

「菩薩の歩み」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・国王…法蔵菩薩の前身。『無量寿経』には法蔵菩薩の国王時代の名前は記されていないが、義山の『無量寿経隋聞講録』によると、『平等覚経』には「世饒王」、『大悲分陀利経』には「離諍王」という名が記されている。また、法然上人も法蔵菩薩の国王時代の名前を、『無量寿経釈』の中で、「離垢浄王」、「無諍念王」と記している。国王の名について、法然門下の間では、「無諍念王」という表記が多くみられる。

・佛…ここでの佛は世自在王仏を指す。阿弥陀仏が法蔵菩薩であった因位の時に帰依し導かれた仏。『無量寿経』によると、久遠の昔、錠光如来が世に出て衆生を教化した後、次々と五十三仏が出世して、その次に出た過去仏とされる。世自在王仏は法蔵菩薩のために二百一十億の諸仏刹土の天人の善悪、国土の粗妙を説き、これを示現して観見させ、これにより法蔵菩薩は四十八願を発すこととなったとされる。

・悦豫…喜び楽しむこと。喜びが表に現れたすがた。

・沙門…出家修行者のこと。
・正真道意…菩提心のこと。法蔵菩薩の発心のことを指す。
・法蔵…阿弥陀仏の前身。阿弥陀仏が菩薩であった時の名前。
・高才勇哲…智慧が人より優れ、意志が強いこと。

**⑥〈解説〉**

そもそも阿弥陀仏は、仏になる前に一国の国王であった。その国王であった時に世自在王如来という仏の教えを聞き、感銘を受け、発心した。国王は世自在王如来に憧れの心を抱き、如来と同じように多くの人々を救いたいと願い、王位を捨てて出家し、法蔵という修行者になった。この讃題は、阿弥陀仏が、出家するに至る経緯を述べている。

**⑦〈法話のポイント〉**

**◆法話のポイントと法話例**

・阿弥陀仏は、最初から仏でなく、もとは我々と同じ、ただの人間であった。その人間であった国王が出家し、阿弥陀如来という仏になる、「国王→法蔵菩薩→阿弥陀仏」という一連の流れを順序立てて説くのもよいであろう。

その一連の流れは、『無量寿経』によると以下の通りである。

一、ある国王が、世自在王如来の説法を聞き、菩提心を起こし、王位を捨てて、法蔵菩薩という沙門になった。

二、法蔵菩薩は、世自在王如来に、如何なる浄土を建立すべきか、尋ねると、世自在王如来は、法蔵菩薩のために二百一十億にも及ぶ浄土の長所、短所を説き、実際に浄土の様子を法蔵菩薩に見せた。

三、法蔵菩薩は、世自在王如来の説く浄土を参考に、理想の浄土を建立するために、五劫の間、思惟して、衆生済度のために四十八の本願を立てた。

四、法蔵菩薩は、四十八の本願を成就すべく、兆載永劫という永遠に近い時間、修行に努めた。そ

の結果、本願は成就され、阿弥陀仏という仏となり、西方に極楽浄土という最高の浄土を建立した。阿弥陀仏は、もうすでに十劫も昔から極楽浄土に在し、現在も極楽浄土で説法している。

以上、国王が阿弥陀仏になるまでの概略を述べたが、これを「法蔵説話」という。この「法蔵説話」を説く時に、客観的な説話、神話、おとぎ話として絵空事のように説くのではなく、私たちを救わんがために、五劫思唯と兆載永劫の修行の結果、仏となられた血の通う、温もりを持った阿弥陀仏であることを強調すべきであろう。

・浄土宗では、阿弥陀仏の仏格を報身と定義する。善導大師は『観経疏』において、

『無量寿経』に云く、「法蔵比丘、世饒王仏の所に在って、菩薩の道を行じたまいし時、四十八願を発し、一一に願じて言く、もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、我が名号を称して我が国に生ぜんと願じて、下十念に至るまで、もし生ぜずんば、正覚を取らじ」と。今すでに成仏したまう、すなわちこれ酬因の身なり。(9)

と述べ、四十八願を建てその願を成就したことをもって「酬因の身」であるとしている。

また、法然上人も『無量寿経釈』の中で、

およそ万行の因に答えて万徳の果を感ずること、依因感果、華の果を結ぶが如し。業に酬いて報を招く、響の声に随うに似たり、これすなわち法蔵比丘実修の万行に酬いて、弥陀如来実証の万徳を得たまえる報身如来なり。(10)

と述べ、報身とは、万行の因に答えて、感得する「酬因の身」であるとしている。このように酬因の身は、阿弥陀仏の報身としての仏格を表すものである。

したがって、我々浄土宗教師が説く阿弥陀仏は、「酬因の身」である報身の阿弥陀仏でなければならない。

・浄土宗総合研究所では、平成一二年に「布教・情報研究班」が、阿弥陀仏の説き方について、浄土宗内で出版されている書籍調査から、以下のような「阿

弥陀仏の表現」があることを報告した。[11]

① 法蔵説話によって阿弥陀仏を説く
② 無量寿・無量光から阿弥陀仏を説く
③ 大宇宙・生命の根源であると阿弥陀仏を説く
④ 私たちの親様、大親様として阿弥陀仏を説く
⑤ お陰様で生かされている、そのお陰様こそ阿弥陀仏であると説く
⑥ 私たちは阿弥陀仏から命を授かり、阿弥陀仏のもとに帰ると説く
⑦ 私の心の中に阿弥陀仏が在すと説く

以上、阿弥陀仏の説き方について、七つに分類分けされており、当時、布教の現場においても様々な阿弥陀仏の説き方がなされており、中には、浄土宗が定義する報身の阿弥陀仏とは、異なる説き方も見受けられる。

このような当時の状況について、深貝慈孝師（一九三七―二〇〇一）は、論文の中で、以下のように指摘している。

たとえば「南無阿弥陀仏」という所帰の仏についていう場合にも、阿弥陀仏は宇宙の大生命だとか、本願は宇宙の救済の意志だとかの説が浄土宗門人によって説かれたことがあったが、それは法然上人の教えに従ったものではなく、立場を異にする仏教者の所説に随ったものである。そのように説かれる阿弥陀仏は、我われ浄土宗教師が所帰とする阿弥陀仏ではないのである。[12]

以上、深貝慈孝師の指摘通り、我々浄土宗教師が説く阿弥陀仏は①の法蔵説話に基づく阿弥陀仏であり、「酬因の身」である報身の阿弥陀仏であることを肝に銘じておくべきであろう。

**《十分法話例》**

令和六年は、法然上人が浄土宗を開かれて八五〇年目にあたる記念すべき年です。今から八五〇年前に法然上人は、「我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり」と浄土宗を開く旨を宣言されました。つまり、法然上人の浄土立教開宗

の目的は、凡夫である我々が報土である極楽浄土に往生が叶う「凡入報土」の教えを明かすためにあったのです。「報土」とは、仏さまの本願成就のお浄土を指します。ならば、そのお浄土に在す仏さまは、当然、その修行に報いられて仏となられた「報身」の阿弥陀さまであります。法然上人は、南無阿弥陀仏のお念仏をもってして報身・阿弥陀さまの報土へ往生できることを世に広められました。その根拠となっているのが、

もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信楽して、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば、正覚を取らじ。

という御文です。

この御文は、『無量寿経』に説かれる四十八項目ある願いの中の第十八番目にあたる願いです。ちなみに、四十八項目ある願いのことを「本願」と申します。

「本願」とは、「もともとは願であった」という意味で、ここには願が成就しているという意味も含まれており、例えて言うならば、阿弥陀さまが仏さまになる前に宣言された公約のようなものです。その公約に四十八項目の内容が掲げられているのですが、さらに、法然上人は、十八番目の願を四十八願の中心にそえ、本願の王であるとして、第十八願のことを「王本願」と名付けられました。

第十八願を現代語に訳しますと、「私が仏となった暁には、極楽往生を願い、念仏を称える、すべての者を極楽浄土に救い摂ってやろう。もし、救いの手から一人でも取り残すことがあったならば、私は決して仏とはならない」という意味です。つまり、如何なる者でも「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えたならば、阿弥陀さまは、すべての者を平等に極楽浄土に往生させると誓われているのです。ですから、浄土宗では、この第十八願のことを「念仏往生の願」と呼び、重視するのです。

それでは、ここで「法蔵説話」といって、阿弥陀さまが仏さまになられる経緯について、お話しさせていただきます。そもそも阿弥陀さまという仏さまは、最

初から仏さまではなく、もとは私たちと同じただの人間でした。その証拠に、阿弥陀さまは遥か遠い昔、とある国の国王でした。その国王が、「世自在王如来」という仏さまのご説法を聞かれ、そのご説法にいたく感動され、自分も世自在王如来さまのような仏さまになりたいと憧れの心を抱き、実際、王位を捨てて出家されます。出家された時のお名前を「法蔵菩薩」といいます。ちなみに「菩薩」とは「覚りを求める人」という意味ですから、仏に成ることを目指し修行に励んでいる最中の人のことを言います。その修行中に、法蔵菩薩さまは世自在王如来さまの前で「すべての者を救いたい」と願われます。その願いを世自在王如来さまは一旦、退けられます。それはなぜかと言うと、すべての者を救うという行為が、たった一人で、一升の桝でもって大海、大きな海の海水を一滴残らず掬いとるのと同様に、困難極まりないことであったからです。しかし、世自在王如来さまは、法蔵菩薩さまの「すべての者を救いたい」という熱意に押され、たとえ大海の海水であっても、根気よく永い永い時間をかけて掬い続ければ、いつかは一滴残らず掬い取ることができると思い直し、願いの実現に向けて、世自在王如来さまは、法蔵菩薩さまに二百一十億にものぼる様々なお浄土をお見せになります。

この時、法蔵菩薩さまは数多くのお浄土を具にご覧になり、五劫という気の遠くなるような時間をかけ考え抜かれ、それぞれのお浄土の長所と短所を取捨選択し、そのエッセンスを四十八項目として選び取られます。これを、「五劫思惟」と申します。ちなみに「劫」とは、時間の単位で、どれぐらいの時間の長さかというと、四十里四方の大きな岩があるとします。この里という距離の単位も中国の時代によって変わってまいりますが、仮に一里を四キロで計算すると一六〇キロメートル四方の大きな岩に対して、百年に一度、天から舞い降りてきた天女が、羽衣で岩をスッとひと撫でいたします。すると、その時の摩擦が生じ、その摩擦によって、ほんの僅かではありますが、岩が擦り切れ

ます。それを、百年に一度繰り返し、徐々に岩が擦り減って完全に岩が無くなったとしても、まだ足りない時間が一劫といわれています。まさに、その一劫の五倍ですから、私たちの想像を絶する人智を超えた長い、長い時間が「五劫」という時間なのです。このように法蔵菩薩さまは、「五劫」という気の遠くなるような間、考えに考え抜かれ、最高のお浄土を建立するために様々なお浄土から、これ以上はない最高の組み合わせとして四十八の長所を選び抜かれました。その四十八の長所が、さきほど申しました四十八願、ご本願につながっていくのですが、法蔵菩薩さまは世自在王如来さまの前で四十八項目の様々な願いを立てられました。

その後、法蔵菩薩さまは、願いを願いのままで終わらせることなく実現に向けて、今度は「兆載永劫」とこれまた永遠にも思える永い時間をかけて修行に励まれ、それこそ自らの目玉を施し、時には自らの肉を差し出し、あるいは自らの生き血を与えてまで、命がけでご修行に取り組んでいかれました。

その「兆載永劫」にまで及ぶ、ご修行の結果、法蔵菩薩さまは、ついに四十八願を全て実現され、阿弥陀さまという仏さまになり、太陽の沈む西の方角、ここから遥か彼方西方十万億土離れた所に、西方極楽浄土という最高のお浄土を建立してくださったのです。その極楽浄土に私たちを救わんがために、阿弥陀さまは、南無阿弥陀仏の六字の御名号に、兆載永劫にまで及ぶご修行の全ての功徳を収め込んでくださり、私たちが南無阿弥陀仏とお念仏を称えるだけで極楽に往生が叶うようにしてくださったのです。

それも、今から十劫も遥か昔に仏さまとなり、その時から現在にいたるまで、ずっと「我が名を呼べ、ならば必ず救う」と願いをかけ続けてくださっているのです。だからこそ、私たちがこの口に南無阿弥陀仏とお念仏を称えるだけで、すべての者が極楽浄土に間違いなく救われることができるのです。

ここで大切なことは、すべての者の中には、この私も含まれているということであります。これについて

法然上人の弟子である親鸞聖人が『歎異抄』で「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人が為なりけり」と述べられたように、この私に向けられた願であるという受け取りが大切なのです。つまり、この私を救わんがために阿弥陀さまは、「五劫思惟」してくださり、さらには「兆載永劫」にも及ぶご修行をしてくださったといっても過言ではありません。

このように、阿弥陀さまは「すべての者を救いたい」という願い（願）と、その願いの実現に向けてのご修行（行）に報いて、仏さまとなられたので、阿弥陀さまのことを「酬因感果身」とも言うのです。

したがって阿弥陀さまは、「願」と「行」という因に酬いて、「仏の覚り」という果を感じられた姿、形のある報身であって、私たちが南無阿弥陀仏と呼べば、その声に応えてくださる、血の通う、温もりを持った仏さまなのでございます。

（執筆者：井野周隆）

## 3―3「生死を過度す」

**①〈讃題〉**

「願わくは我れ作佛して、聖法王に斉しく、生死を過度して、解脱せずということなからん」（聖典一・二二一頁）

**②〈現代語訳〉**

「願わくは〔この〕私は仏となって
〔あなたのような〕聖なる法王と同じく
生死（しょうじ）〔を繰り返す人々〕を救い摂り
必ず解脱を果たさせたい」（現代語訳・四〇頁）

**③〈キーワード／設定〉**

歎仏頌、仏、法蔵菩薩、法蔵菩薩の誓願、志願、生死輪廻、慈悲、救い、解脱／仏教法話、一般聴衆

**④〈キャッチフレーズ〉**

「生死の苦から救い摂ろう」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・作仏…仏に作（な）ることをいう。成仏。『随聞講録』には「上求は自れの為に非ず。是れ化他の為なり」[13]

とある。

・聖法王…『随聞講録』には、「聖は无漏の義なるが故に何れの仏にも通ずべしと雖も、今は世自在王仏を指すなり」[14]とある。

・生死を過度して…『随聞講録』には、「生死の苦果を過度す。此れ苦を棄つるなり。過とは度なり。度とは出なり」[15]とある。

・解脱…道光『無量寿経鈔』には「過度は苦を棄て解脱は業を離る」[16]とある。

**⑥〈解説〉**

・「歎仏頌」の一節。法蔵菩薩様が世自在王仏の尊容や智慧光明を称讃した後に発した、最初の願いである。これは『無量寿経』全体においても、法蔵様ご自身の言として最初に発せられた願いとなる。それは、世自在王仏のような強大な力を持った仏に成って、生死を繰り返す人々を救い摂り、必ず覚りの境地へ至らせたいという利他の願いであった。また、この利他の願いは、同じく「歎仏頌」の中の一節に「我れまさに一切を哀愍し度脱すべし」（聖典一・二二二頁）と謳われ、また「歎仏頌」を説きおわって後に、「願わくは佛、〈中略〉諸もろの生死、勤苦の本を抜かしめたまえ」（聖典一・二二三頁）と発せられている。

**⑦〈法話のポイント〉**

・法蔵様が、まず最初に発した願いであるということ

四十八願にて具体的な仏および仏国土の理想像が誓われる前に、「歎仏頌」において、①仏としての一切衆生救済、②菩薩道の完遂、③理想の仏国土の建立、④往生人の平安、といった四十八願の骨子ともいえる誓願（志願）[17]が述べられている。

・仏とは

同じく「歎仏頌」には「無明と欲と怒（ぬ）と、世尊は永くなし」（聖典一・二二一頁）／「愚かさや欲深さや怒り〔などといった煩悩は〕／世尊には断じてなく」（現代語訳・四〇頁）とある。み仏は痴（おろかさ）・貪（むさぼり）・瞋（いかり）の三毒を断じ

ている。だから我ら凡夫の所行に怒りを振るわせ罰を与えるようなことはない。ただ慈悲哀愍の御心により、悲しまれるのである。菩薩もまたしかり。阿弥陀様や菩薩となった往生人（故人・ご先祖さま）をなるべく悲しませないような日々の暮らしを心がけましょう、あわせてまた、喜んでいただける生活を共に歩みましょうとお伝えする。

・世間一般の感覚と仏教の世界観の違いを伝える

「生死」は、一般的には「せいし」と読む。この場合は基本生まれてから死ぬまでの一生以外は念頭にない。しかし「しょうじ」と読む場合は仏教語であって、生まれかわり死にかわりを繰り返すことをいう。生死輪廻や生死流転などともいい、我ら衆生は生死から抜け出せないでいることを示す。仏教の目的は、生死における永続の苦しみ（世間一般にいうところの「死んだら終わり」では済まされない苦しみ）をいかにして終わらせるか、である。

また、業（心身による行為）が生死輪廻を引き起こす原動力である。三毒煩悩を断って業を離れ、生死輪廻の苦から解放されることを解脱という。こうした仏教の基本もあわせてお伝えしたい。

・この「生死」の苦しみ・悲しみを、いかに我が身に引きあてて伝えるか

弘法大師の有名なお言葉に、「生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥（くら）し」（『秘蔵宝鑰』）とあるように、何処から来て何処へ往くのか分からず、不安を抱えながら生きている者がほとんどである。また、なんとなく良い世界に生まれ変われるのでは、という根拠のない想いによってこの不安から目を背けてもいよう。この我々に付きまとう、漠然としているが強烈な不安は、現代にあって尚も大きく存在し、閉塞感や生きづらさを助長している。このような世間において、宗教者こそが、自身の信仰（の世界観）に基づいて、過去世と未来世（往くべき世界）を明確にお伝えすることができるのである。例えば法然上人のお示し

の中より、『登山状』に見られる「難値得遇[18]」の御法語や「無常迅速[19]」の御法語などを頂戴し、過去・現在・未来の真の有り様をお取り次ぎする。

・生死出離、「念仏して西方に往くに過ぎたるはなし」。善導大師は、「二河白道」の譬えの中で「衆生久しく生死に沈んで曠劫に淪回し、迷倒自纏して、解脱するに由し無し。仰いで釈迦発遣して西方に指向せしむることを蒙り、また弥陀、悲心をもって招喚したまう[20]」と述べられ、『法事讃』では「種種の法門はみな解脱すれども念仏して西方に往くに過ぎたるはなし[21]」と仰っている。法然上人は「悪業煩悩の縄を断たずばなんぞ生死繋縛の身を解脱することを得んや[22]」（「三学非器」の御法語）との嘆きの中で、法蔵菩薩つまり阿弥陀様が願い誓われた「選択本願念仏」に帰依されたのである。我らにとって唯一最高の解脱の法こそ称名念仏であると頂戴し、日々の念仏をお勧めする。

また、檀信徒以外の一般聴衆への仏教法話では、「八万四千の法門あれども、この私は称名念仏をもって生死出離の道を歩んでまいります」と自身の信仰の結論と実践を示せばよい。もちろん、極楽往生をもって生死出離を遂げたいと思われた方には称名念仏をお勧めする。

**【参照】**

・井野周隆「十分法話例（歎仏頌）」（「常用の偈文を通した法話の研究（二）」、『教化研究』三四・八二―八六頁）

（執筆者：宮入良光）

## 3―4「大安を作さん」

**①〈讃題〉**

「吾れ誓う、佛を得るまでに、普くこの願を行じて、一切の恐懼に、大安を作さん」（聖典一・二二二頁）

**②〈現代語訳〉**

「私は誓う

仏となるその時まで

いつ何時でもこうした願いを叶えるべく励み
数々の苦しみに慄くすべての人のために
大いなる安らぎ〔を与える存在〕となろう」（現代語訳・四一頁）

**③〈キーワード／設定〉**

歎仏頌、志願、精進、努力、大乗菩薩道、仏／仏教法話、学生への法話

**④〈キャッチフレーズ〉**

「夢叶うまで挑戦!!」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・普くこの願を行じて…「この願」とは、文脈上、**3―3「生死を過度す」**の願いと思われるが、義山上人は「此の願とは下に『一切恐懼為作大安』と云う」[23]と記している。どちらにせよ利益衆生の願である。また「普く…行じて」とは同所に「今日より仏果を得るに至るまで此願を行ず」と解されており、この御文の前文に示される「布施調意、戒忍精進、かくのごときは三昧と智慧とを上（すぐ）れたりとす」、つまり菩薩の六波羅蜜を励み行じて仏果を得る旨を示していると思われる。

・恐懼…煩悩によって恐れおののく衆生のことをいう。

・大安…大いなる安らぎを与える存在、つまり仏のこと。

**⑥〈解説〉**

・『無量寿経』巻上の中の、いわゆる「歎仏頌」の中にある一文。法蔵菩薩が世自在王仏の徳を讃歎し、出家する願意を説き、世自在王仏と諸仏に悟りの証明を請う。

・法蔵菩薩が仏となるその日まで修行に励み、仏となった後は、衆生救済を誓う御文である。

・法蔵菩薩としての総願である。「総願偈」（四弘誓願）と照らしあわせて頂戴したい御文である。

**⑦〈法話のポイント〉**

〔教員の立場から〕

・我々は夢や目標を掲げ、それに向かって進んでいきたいものである。その夢や目標が叶うように挑戦し続け、もしそれが叶ったならば、すべての人々に恩

返しをするような行動をするべきなのではないか。

・しかし人生の中で、多くはつまづきと失敗に終わることが現実であろう。こうした時、自然のままの人間からは、悲しみ、苦しみ、執着や煩悩の心は無くすことはできない。心が悲しみや苦しみや不安にさいなまれる時、法蔵菩薩（阿弥陀仏）のみ心に触れて、その苦しみや悲しみを一緒に受け止めて頂き、前を向くことができるのである。

・阿弥陀仏や諸仏の救いの働きは、今現在のこの私の様々な恐れや不安、苦しみを共有し、決して見離すことはない。我らを精一杯つつみ、安堵の心を恵んでくださる。

・『維摩経』に「衆生病めば則ち菩薩も病み、衆生の病愈ゆれば菩薩もまた愈ゆ」[24]とあるように、私の悲しみや苦しみは、私だけのもののようでありつつも、それは仏様や菩薩様の悲しみなのではないか。私が悲しむ時、仏様菩薩様も同じように悲しんでくださり、私が喜ぶ時、同じように喜び微笑んでくださるのである。

○【話材】金子みすゞ「さびしいとき」

わたしがさびしいときに　よその人は知らないの
わたしがさびしいときに　お友だちはわらうの
わたしがさびしいときに　お母さんはやさしいの
わたしがさびしいときに　ほとけさまはさびしいの

・我々教員は、悩む生徒がいれば共に悩み、悲しむ生徒がいれば共に悲しみ、喜ぶ生徒がいれば共に喜ぶ存在であり続けるべきである。生徒の夢や目標が叶うように応援し続けることが大切であろう。もちろん人として僧侶として、仏菩薩のみ心を理想とし、檀信徒やご縁のあった方には、わずかなりとも心から寄り添いたいものである。

○【話材】しずかちゃんのパパの言葉（『ドラえもん』二五巻「のび太の結婚前夜」より）

「のび太くんを選らんだきみの判断は正しかったと思うよ」

「あの青年は人のしあわせを願い、人の不幸を悲しむことのできる人だ。それがいちばん人間にとってだいじなことなんだからね」
「かれなら、まちがいなくきみをしあわせにしてくれると、ぼくは信じているよ」
（執筆者：青木篤史）

## 3―5「国土第一」

**①〈讃題〉**

「かくのごとく精進にして、威神量り難からんに、我が作佛の国土をして第一ならしめん。その衆、奇妙にして、道場超絶し、国、泥洹のごとくにして、等双なからん」（聖典一・二三二頁）

**②〈現代語訳〉**

「このように勤めて
〔彼らの光明に〕計り知れないほどの
強大な力がみなぎっているにしても
私が仏となった暁の〔我が〕国土を
最もすぐれた〔世界〕としよう
そこに住む人々はえも言われぬほど素晴らしく
修行の場としても〔他を〕凌駕し
〔その〕国土はさながら涅槃のような〔楽しみが溢れ〕
〔他に〕比肩できる〔国土など〕ないようにしよう」（現代語訳・四二頁）

**③〈キーワード／設定〉**

歎仏頌、菩薩の大慈悲、志願、国土第一、凡入報土、仏道修行の道場

**④〈キャッチフレーズ〉**

「法蔵菩薩の志は深く広く」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・如是精進威神難量…「この二句は神通荘厳なり。諸佛、各おのその土において懇ろに化事を作す。故に『精進』という。化を現ずること算の表（ほか）なり、故に『難量』という。著楽なきことを顕す。三禅の楽を受くれども、一念の著なきこと漏尽の人のごとし」[25]（『無量寿経合讃』）。

・威神…仏菩薩の、凡夫には理解できない不可思議な徳の働きをいう。ここでは、特に光明の威徳神力をいう。[26]

・令我作佛国土第一…「総じて最勝を求む[27]」（『無量寿経合讃』）。

・其衆奇妙…「已下の四句、別して最勝を求む。この句は衆第一を明かす。いわく、六通自在等[28]」（『無量寿経合讃』）。

・道場超絶…「この句は成佛第一なり。『道場』はこれ佛果の異称なり。速疾に成佛す。故に『超絶』という[29]」（『無量寿経合讃』）。

・道場…「道場行とは、菩提の果徳なり、これを名づけて道となす。場とはその処の別称なり[30]」（浄影寺慧遠『維摩経義記』）。

・国如泥洹…「この句は快楽第一なり。『泥洹』、ここに円寂という。彼土の快楽、涅槃に次ぐべし。故にもってこれに誓う。下の文にいわく、『微妙快樂次於無爲泥洹之道』と[31]」（『無量寿経合讃』）。

・而無等雙…「この句は諸もろの最勝を結して国土第一の義を成ず[32]」（『無量寿経合讃』）。

**⑥〈解説〉**

・「歎仏頌」は法蔵菩薩が世自在王如来の行徳を讃歎し、それを念じつつ、自身の広大な「志願[33]」を告白し、如来と諸仏にその証明を請う偈文である。その「志願」は法蔵菩薩がこの後、四十八願を発したまう基礎となるものである[34]。川合梁定師の『浄土三部経説教』によれば、その「志願」は三つある。（一）一切衆生の恐れと悩みを救ってやりたい、（二）我が作仏して構える浄土は、諸仏の国に比べて第一にならしめたい、（三）清き心の悦びを得させて快楽安穏ならしめたい、という願いである[35]。讃題は「我が作仏して構える浄土は、諸仏の国に比べて第一にならしめたい」との「志願」である。

・国土第一とは、決して諸仏の中において競争するのではない。衆生救済のために国土を最勝のものとして荘厳せずにはおかないという意である。これは善

導大師が「一々の誓願は衆生のためなり」[36]（『般舟讃』）と説かれた如く、大慈大悲の顕れに他ならない。そしてその願いは二百一十億の土の中より選取された仏国土として成就したまう。

・その土に生まれたものは奇妙すなわち最勝なる快楽神通の自在を得せしめるというは、往生人が単にその快楽を享受する為ではなく、菩薩道の実践の為であることは言うまでもない。仏道を成ずるに比肩するものがない場としての浄土を建立したいという願いである。

**⑦〈法話のポイント〉**

・最勝たる仏国土を成就せしめんために、法蔵菩薩は、五劫思惟して、二百一十億の仏土より選択し、四十八願を建て、兆載永劫の修行を完成させたこと。すなわち報身報土たることを伝える。志願の深さを示す。真理そのものである法身では、かような願いも慈悲も説くことができない。

・その土は、聖人も悪人もすべてのものが等しく生まれることができるという意でも、最勝第一である。それが叶うのは、王本願たる第十八願に誓われた称名念仏による。法然上人はこの義を顕わさんがために「我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まることを、示さむためなり」[37]と、浄土宗をお開きになられたことを伝える。志願の広さを示す。

・法蔵菩薩の志願の深広を受け取る前提として、この私がまさに罪悪、煩悩にまみれた凡夫であることを伝える。

・「その衆、奇妙にして」の「奇妙」とは、その土に生まれたものが快楽神通自在にして優れているという意で受け取るのが宗の本義ではある。一方で、「奇妙」には普通にはない不思議なことという意味もあり、本来なら浄土に生まれることができないような凡夫も皆等しくその土の妙なる菩薩となることができる不思議を示していると受け取ることもできるのではないか。[38]（「瓦礫変成金」[39]、『選択集』三）その意味でも他の仏国を超絶し、また等しくならぶもの

がないと伝えることもできよう。

・その土に生まれたものは、神通自在にして、三禅の楽を受け、その楽は涅槃に次ぐものであるが、決してそれに執着することはない。善導大師が「楽多けれども道を廃することなし」[40]（『往生礼讃』）と述べておられるように、その快楽は仏道を成ずるためのものである。すなわち極楽浄土はいわゆる天国のような快楽境ではなく、仏道修行の道場であることを伝える。

**※3―29「第三十九、受楽無染願」**を参照の事。

・その道場にて法蔵菩薩がとりわけ哀愍して仏道を成就せしめたいと願うのは、悲しみや苦しみにあえいでいる凡夫である。（「浄土宗意本為凡夫兼為聖人」[41]、『選択集』一）それはすなわち私自身であり、一切衆生のための願いとは、この私のための願いであることを伝える。

・法蔵菩薩が世自在王仏の御許にてかくなる志願を発されたごとく、我らもまた阿弥陀仏の御前にて、いつの日かその志を述べることがあろう。そして我が浄土を建立すべく誓願を建てるであろう。我らが菩薩道を歩む上での最も良き手本として法蔵菩薩のありさまを受け取ることもでき、我らの浄土での未来像を生き生きと伝えることができるのではないか。

（執筆者：大高源明）

## 3―6「快楽安穏ならしめん」

### ①〈讃題〉

「我れまさに一切を哀愍し度脱すべし。十方より来生せんもの、心悦清浄にして、すでに我が国に到らば、快楽安穏ならしめん」（聖典一・二三二頁）

### ②〈現代語訳〉

「必ずや私はすべての人々に憐れみの心を注ぎ
〔迷いの世界から〕救い導くのである
いかなる世界からでも〔我が国土に〕往生する者は
心が悦びに湧き立ち澄みわたり
我が国土に往生した時には

〔みな〕心安らかに幸せな思いに満たしめよう」（現代語訳・四三頁）

**③〈キーワード／設定〉**

歎仏頌、志願、慈悲、極楽浄土、往生人、衆生無辺誓願度、摂衆生願、総願

**④〈キャッチフレーズ〉**

「仏様の願い　～　救いたい　幸せにしたい　～　」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・一切…十方衆生のこと。

・度脱…世の人々を迷いから救い出して悟りの世界に入らせること。

・十方来生…『随聞講録』には「五乗斉しく摂し尽くす故に、此に生ずる者の多きを云うなり」[42]とある。五乗とは、人・天・声聞・縁覚・菩薩のこと。

・心悦清浄…『無量寿経合讃』には「帰心、これ純なり」[43]とあり、『随聞講録』には、「今、此の心と云うは、行を兼ぬる心なり。近を之を言わば、三心具足の者を心悦清浄と云う。意の云わく、本願に値遇スルコトヲ悦び、阿弥陀仏を帰敬したてまつり渇仰の心、純ナルハ、心悦ナリ。其の上に安心を具足して虚仮を離る等、清浄なり」[44]とある。

**⑥〈解説〉**

・「歎仏頌」の後半に説かれるこの御文は、法蔵菩薩が最初に発こした誓願の中の摂衆生願であり、全ての人を「救いたい　幸せにしたい」という思いが込められている。この時点ではまだ二百一十億の浄土をご覧になっておらず、菩薩の総願（衆生無辺誓願度）といえる。別願は、四十八願の内、第十二・第十三・第十七・第三十一・第三十二願を除いた四十三の本願として具体的な摂衆生願が誓われる。

**⑦〈法話のポイント〉**

・まず、この世は無常であり、四苦八苦から逃れられない世界であり、煩悩を抑えきれない凡夫と凡夫が傷つけあう世界であり、自然災害や戦争などで苦を受けるなど、苦しみ多き娑婆世界であること、さらには今生の後も輪廻を繰り返す中で苦を受け続ける

存在であることを伝える。

・元国王として娑婆世界の現実を直視した法蔵菩薩は、一切衆生に憐れみの心を発こし、「すべての者を苦しみから救いたい　幸せにしたい」という極めて純粋であり、実現が極めて難しい願いを建てられたことを伝えたい。

・法蔵菩薩の目的は、「すべての者を必ず救う」ことであるからこそ、その実現にはとてつもない歳月を要した。（五劫思惟して二百一十億の浄土を選択→四十八願→本願完成のため兆載永劫の修行→成仏・本願成就）法蔵菩薩の大慈悲が深広であることの一端を伝えたい。

・阿弥陀仏の成仏により「すべての者を苦しみから救いたい　幸せにしたい」という広大な願いが完成していることを明かし、「すべての者」の中に「自分」が入っていること、その「自分」が阿弥陀仏の願いに気づき受け止めることなく今も娑婆にいること、阿弥陀仏の願いに応えて日々お念仏を唱えるだけで「自分」が安らぎのみの世界である極楽に必ず往生できることを伝え、毎日お念佛精進することを勧めたい。

・別願としての四十三項目の本願（第十二・第十三・第十七・第三十一・第三十二願を除いた本願）を合せて説くことで、法蔵菩薩の思いをさらに伝えることもできる。

・阿弥陀仏の慈悲に包まれて娑婆を生きる自分が出来る範囲で、御縁のある方に対して「苦しみから救いたい　幸せにしたい（娑婆での救いや幸せには限りがあるが・・・）」と願う心を持つことの大切さを伝えることも可能であろう。

（執筆者：中川正業）

## 3―7「忍終不悔」

### ①〈讃題〉

「たとい身を　諸もろの苦毒の中に止むとも、我が行は精進にして、忍んで終に悔いざらん」（聖典一・二

二三頁）

**②〈現代語訳〉**

「たとえ〔我が〕身を
苦しみに満ちた世界に沈めようとも
私の修行は怠ることなく
耐え忍び決して悔いるまい」（現代語訳・四四頁）

**③〈キーワード／設定〉**

歎仏頌、精進、努力、忍辱、無常、忍終不悔／仏教法話、学生への法話

**④〈キャッチフレーズ〉**

「悔いのない人生を送りましょう」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・精進…仏道修行に邁進すること。ひたすら努力して怠けることなく、仏道にかなった善行を勇敢に実践し続けること。
・苦毒…地獄、三悪道での苦痛のこと。
・忍…堪え忍ぶこと。忍辱。六波羅蜜の一つにも数えられる。

**⑥〈解説〉**

・『無量寿経』巻上の、いわゆる「歎仏頌」の最後の一文。法蔵菩薩が世自在王如来の徳を讃歎し、出家する願意を説き、世自在王如来と諸仏に悟りの証明を請う偈頌である。
・俳優 高倉健氏の座右の銘である。（「往く道は精進にして、忍びて終わり悔いなし」）これは天台宗の大阿闍梨である、酒井雄哉師から贈られた言葉である。映画「南極物語」の撮影は過酷なものであったが、この一文に背中を押され撮影に臨んだとされる。酒井師は高倉氏のことを、「あの人はお侍さんや思う。すべてに命懸けで、いつも刃の上を歩いているような、そんなお人やと思う」と語る。これはすべて、この一文と出会い完成された人格なのではないだろうか。

**⑦〈法話のポイント〉**

・中高生に対しての話の場合、「無常」ということを重ねて話すと良いと思われる。この世は無常なのだ

から、一日一日、一分一秒を無駄にせず、今やるべきことは何かを見極め、目の前にあるやるべきことに全力を尽くし精進し続け、将来後悔しないように今を大切に生きることが大切であることを説くべきではないか。ここで重要なのは、「楽しい無常」と「苦しい無常」があるということである。

（例）「世の中の　娘が嫁と　花咲いて　カカアとしぼんで　ババアと散り行く」（一休宗純の名言…上の句が楽しい無常、下の句が苦しい無常）

※当然、男子もジジイと散りゆく。また、嫁と花咲くだけが幸せとは限らない現代です。

「楽しい無常」

（例）勉強すればテストの点数が良くなる、心身に良い成長をすることができる。

「苦しい無常」

（例）学んだことを復習しなければ、忘れていく。（成績が下がる）

・生徒に「今日が人生最後の日だとしたら、あなたは何をしますか?」と問いかけてみる。

（返答例）目一杯遊ぶ。昔からの友達と会う。美味しいものを食べる。等々。

・自分の目標や決意をあきらめることなく、それに向かって叶うまで挑戦し続けることが大切であると説く。

・何事も不退転の決意で、あきらめることなく精進努力を重ねることが大切なのではないか。

・人はまだ見ぬ困難に立ち向かうときに「人事を尽くして天命を待つ」という表現を使うように、突然訪れた試練に対して「必要な時に必要な事が起きる」という心持になるように、今できることに全力を尽くせば、最後に後悔はないのではないだろうか。

・同時に我々浄土宗僧侶は、法蔵菩薩さまのこの力強い決意を受け止め、日々の念仏および教化活動（自行化他）に邁進しなければならないだろう。

**【注意点】**

・中高生に説く場合は、「耐え忍ぶ」という部分で、

頑張る中に悩み苦しみを伴っても、何が何でもそれに耐えなければいけないという解釈をされてしまう恐れがある。悩みを抱えている生徒が多い昨今で、この話をする場合は注意が必要になってくる。

・「頑張れない自分」というのも大人はよくわかっている。阿弥陀仏はもっとわかって下さる。決して見捨てない、ということを生徒に伝えるとよい。

**【参照】**

・北條竜士「五分法話例（歎仏頌）」（「常用の偈文を通した法話の研究（二）」）、『教化研究』三四・八六―八八頁）

（執筆者：青木篤史）

## 3―8「至心精進求道不止」

**①〈讃題〉**

「譬えば大海のごときも、一人升量して、劫数を経歴せば、なお底を窮めて、その妙宝を得べし。人、至心あって、精進に道を求めて止まずんば、会ずまさに剋果すべし。いずれの願か得ざらんと」（聖典一・二二三頁）

**②〈現代語訳〉**

「たとえば、〔たった〕一人で大海〔の水〕を升で〔汲み取ろうとしよう。それがいかに困難なことであろうとも〕長い長い時間をかけたなら、必ず〔海〕底に至るまで〔汲み尽くし、底に沈んでいた〕珍宝を手にいれることができる。〔同様に〕人が嘘偽りのない心を懐き果敢に覚りを求めてとどまることがなければ、〔いつか〕必ず成し遂げるのである。いかなる願いであっても叶わぬものがあろうか」（現代語訳・四五―四六頁）

**③〈キーワード／設定〉**

五劫思惟、不可思議兆載永劫の修行、精進、求道／十夜会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「誠の決意は実を結ぶ」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・妙…極めて勝れていること。人智ではかり知る事

が出来ない程勝れていること。言葉では言い表せない程勝れていること。

・劫…インドの時間単位の最長単位。四十里四方の岩山を百年ごとに天界より天女が飛来し、その衣で払拭し、その岩山が磨滅しても終わらないとの譬えがあり、「盤石劫」と呼ばれる。また、四方一由旬の鉄城に芥子粒を満たし、百年ごとに一粒取り去る事を繰り返し、その鉄城が空になっても終わらないとの譬えもある。これを「芥子劫」と呼ぶ。

・至心…この上なく誠実な心のこと。嘘偽りのない心。

・剋果…必ず成し遂げること。

・世自在王仏…阿弥陀仏が法蔵菩薩であった時に帰依した仏。『無量寿経』巻上には錠光如来より五十三仏が娑婆に出でて衆生を教化した後に出でた過去仏として説かれる。法蔵菩薩の為に二百一十億の諸仏刹土の人天の善悪、国土の粗妙を説き、これを示現して観見させた。これにより法蔵菩薩は四十八願を発すこととなる。

## ⑥〈解説〉

・『無量寿経』巻上で、法蔵菩薩が世自在王仏の徳を讃嘆し、出家する願意を説き、世自在王仏の証明を請う「歎仏頌」に続く経文。世自在王仏が、法蔵菩薩の悟りへの意思が堅固なこと（「たとい身を　諸もろの苦毒の中に止むとも、我が行は精進にして、忍んで終に悔いざらん」[45]）を受けて、悟りへの道が確かに叶うであろう事を、譬えを以て説く。「授記」と受け取ることが出来る経文である。

・この経文に続き、世自在王仏は、法蔵菩薩に二百一十億の諸仏刹土の人天の善悪、国土の粗妙を示現し、五劫思惟の後に四十八願を発す。

・法蔵菩薩は、四十八願を発した後、「四誓偈」の頌を説く。「四誓偈」の末には法蔵菩薩の「受記」が説かれる事もあわせて受け止めることも大切であろう。「この願もし剋果せば、大千まさに感動すべし。／虚空の諸もろの天人　まさに珍妙の華を雨らすべし」[46]。

・『登山状』に、「昔の太子は、万里の波を凌ぎて、竜王の如意宝珠を得給えり。今の我等は、二河の水火を分けて弥陀本願の宝珠を得たり」[47]とある。波羅奈国の大施太子は、貧民を救わんと竜王に乞うて如意宝珠を得るが、竜臣の宝珠を惜しむ心が大きかったために奪われてしまう。そこで、大施太子は海水を貝殻をもって汲み干す決意をする。海水多しといえども限りあり、今生で汲みつくせなければ生死を重ねて汲み干すと誓った。この誓いの心の誠に、天神が感応して汲む事を助けた。今の我々は二河の水火をわけて弥陀本願の宝珠を得る事が出来たが、異学意見によりこれを奪われようとする。しかし、六方の諸仏が信の手を差し伸べて、阿弥陀仏の本願の真を証明する。法蔵菩薩の成仏は世自在王仏が間違いない事を証明する。

・『無量寿経』巻上には、「国を棄て王を捐て、財色を絶去して、自ら六波羅蜜を行じ、人を教えて行ぜしむ。無央数劫に、功を積み徳を累ぬ。その生処に随って、意の所欲にあって、無量の宝蔵、自然に発応し、無数の衆生を教化し安立して、無上正真の道に住せしむ。あるいは長者居士、豪姓尊貴となり、あるいは刹利国君・転輪聖帝となり、あるいは六欲天主乃至梵王となり、常に四事をもって、一切の諸佛を供養し恭敬したてまつる」[48]とあるように、不可思議兆載永劫の修行は、変易生死（悲願の力によって肉体や寿命を自在に改変できる菩薩の生死のこと）により、自らの意思で六道輪廻における生死を繰り返し、その境遇に随って、六波羅蜜の修行や、飲食、衣服、臥具、湯薬の四事供養を修するさまが説かれる。

**⑦〈法話のポイント〉**

・法蔵菩薩の成仏への決意の誠の御心と、世自在王仏の授記を有難く受け止めさせて頂く事のできる経文であり、五劫思惟、不可思議兆載永劫の御修行が如何に困難であったのか、そしてご修行を成し遂げられ、成仏された事を伝える。

・「歎仏頌」の「たとい身を　諸もろの苦毒の中に止

むとも、我が行は精進にして、忍んで終に悔いざらん」の決意の程は測り難いが、大海に水をただ一人ですべて汲み干さんとする程の、法蔵菩薩の決意の誠の有難さをお伝えしたいものである。その嘘偽りなき決意に対しての世自在王仏の「人が嘘偽りのない心を懐き果敢に覚りを求めてとどまることがなければ、いつか必ず成し遂げるのである。いかなる願いであっても叶わぬものがあろうか」との授記をあわせてお伝えしたい。

・二百一十億の諸仏刹土の人天の善悪、国土の粗妙をつぶさに観察して、完全なる仏国土を造り、その仏国土に往生した人天は退転することなく成仏への道を歩む事が出来る。その仏国土に往生を願う全ての衆生を如何にして救うのかと思惟なされた。そして、それら全てを成就する為に果てしなき御修行を重ねられた結果の本願成就、十劫正覚であるとの事を伝える。

・法蔵菩薩のご修行（布施の行の一端でもお伝えしたい）

『無量寿経釈』には、次のように示されている。

施した目は、ガンジス河の砂ほども多く、それは乞眼婆羅門のようであった。生血を飲みものとしている人があり、乞われるままに与えたところ、その量は須弥山をとりまく四大海の水ほどもあったといい、また肉を食べるのをことしている人に、身の肉を切り与えたところ、その量は須弥山の高さほどになったという。このようにして与えた舌は大鉄囲山、耳は純陀羅山、花は毘不羅山、歯は嗜闍堀山ほどの高さもあり、身の皮は三千大千世界に敷くほどの広さにもなった。[49]

・法蔵菩薩のご修行の時間

「不可思議」（十の六十四乗）・「兆」（十の十二乗）・「載」（十の四十四乗）・「永劫」（未来において時間が永い事）。

・『登山状』の大施太子や、二河白道の話をしても良いだろう。我々は、法蔵菩薩や大施太子のような完璧なる決意には程遠く、頼りなく思えるような心か

もしれないが、往生を願い、お念仏を称えるなかに、阿弥陀様のお導き、六方の諸仏の証明を頂く有難さを伝えたい。

・【話材】『ハチドリのひとしずく』[50]

南米アンデスに伝わる物語で、分かりやすい比喩である。

森が燃えていました
森の生きものたちはわれ先にと逃げていきました
でもクリキンディという名のハチドリだけは
いったりきたり
口ばしで水のしずくを一滴ずつ運んでは火の上に
落していきます
動物たちがそれを見て
「そんなことをしていったい何になるんだ」
といって笑います
クリキンディはこう答えました
「私は、私にできることをしているだけ」

（執筆者：山田紹隆）

## 3―9「第一、無三悪趣願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ仏を得たらんに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ」（第一無三悪趣願、聖典一・二二五頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔私の〕国土で地獄道・餓鬼道・畜生道〔に苦しむ者〕が、〔万が一にも〕あるようならば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・四七頁）

**③〈キーワード／設定〉**

・本願、第一願、因果、凡夫、苦、三悪趣、抜苦与楽（阿弥陀仏の大悲の本願によって、極楽世界に地獄・餓鬼・畜生の苦しい境遇は存在しない）／施餓鬼会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「極楽に三途の苦しみ無し」

⑤〈語義・用語解説〉

・本願…覚りに至る以前の修行時代（因位）にたてた誓願のこと。法然上人撰と伝わる『四箇條問答』には「本願と云うことは、もとの願いと訓ずるなり」[51]とある。阿弥陀仏の本願には、全てに「不取正覚」とあり、自身の成仏を賭けた誓願である。

・悪趣…悪しき行いをした者が趣く所。『無量寿経』にも「ただ衆悪を作して、善本を修せず。皆悉く自然に、諸もろの悪趣に入る」[52]とある。

・地獄…殺生・偸盗・邪淫・妄語・飲酒などの悪業の報いで堕ちる地下の牢獄。奈落ともいう。犯した罪業に応じて、獄卒から筆舌につくせぬ様々な呵責を受ける。

・餓鬼…慳貪・嫉妬などの報いで堕ちる境涯。常に飢渇に苦しむ。

・畜生…鳥・獣・魚など、人間以外の生き物。俗に「恥知らぬは畜生、念の深きは畜生」などという。性質は愚かで、貪欲・淫欲のみ持ち、身内でも害し合い、多苦少楽の境涯。

⑥〈解説〉

・師の世自在王仏に請い、二百一十億の諸仏の国土をつぶさに見聞した法蔵菩薩は、粗悪なるを除き、精妙なるを選りすぐって、自身がやがて建てる浄土の理想とし、五劫に及ぶ思惟の末、その実現を誓った。師の世自在王仏は「後進の菩薩たちのためにその誓願を述べよ」と仰せになり、法蔵菩薩はこれに答えて四十八の誓願を述べる。その第一が、「無三悪趣の願」である。

・願成就文（義山[53]）は、巻上の「また地獄・餓鬼・畜生、諸難の趣なく、また四時、春秋冬夏なし。不寒不熱にして、常和調適なり」（聖典一・二三六頁）である。／「また〔さらに、そこには〕地獄や餓鬼や畜生などといった悪しき迷いの境涯もない。加えて春夏秋冬という四季もなく、暑からず寒からず常に快適で心地よい」（現代語訳・六八頁）。

**⑦〈法話のポイント〉**

・まずは悪をなし、善をなさぬ者は「皆悉く自然に、諸もろの悪趣に入る」[54]という「因果律」の中に生きている私であるとの自覚を促すところから始めたい。

・諸々の悪業を、自ら嬉々として積み重ねている私たちであり、本来の行先は三悪趣でしかない。

・しかし、それを覆すような善行は、少しも喜んでできない「凡夫」の我が身である。

・施餓鬼会での法話であれば、大上段から「自分より劣る亡者に施してやる」という意識は捨てて、むしろ来世の自身の姿として受けとめるべき旨を伝える。

・仏の救いの対象は、六道の衆生（生きとしいけるものすべて）であり、人間だけを都合よく救う　教えではないことも、言い添えておきたい。仏が願われるのは、生きとしいけるものの「苦」からの解放・解脱であり、苦しむ境涯を無くすることである。その願いが「無三悪趣」と誓われ、その実現は「願成就文」に示されている。

・法然上人は『無量寿経釈』において「極楽世界の中にすでに三悪趣無し」[55]と申され、その証として「また地獄・餓鬼・畜生、諸難の趣なしと云えるこれなり」[56]と願成就の文を示されている。

・また、この苦の境涯の存在しない浄土が、私たちの苦を除くために用意された、阿弥陀仏の大慈悲に基づくのだということもお伝したい。『無量寿経釈』に「そもそもこの四十八の願は、皆抜苦与楽の義有り。しかる故は、大悲は抜苦なり、大慈は与楽なり。第一の無三悪趣は大悲抜苦なり」[57]とのお示しがある。法蔵菩薩の「衆生の苦を取り除いてやりたい」との大悲の願いが極楽において実現されているのである。

**【和歌・道詠など】**

「地獄餓鬼　畜生修羅は　世の中の　凡夫のつねのすみかなりけり」（至道無難）

「みな人は　欲悪業に　ひかされて　地ごくを願う　娑婆の有さま」（木喰）

「おのれいま　人と生れて　きしものの　いずれのかたに　向けてさを（棹）さす」（山崎辨榮）

（執筆者：八木英哉）

**【参考】**

※四十八願の願文を讃題として拝読するにあたって、その前文案をいくつか挙げておく。

「つつしみ敬って拝読したてまつる、

例①　釈迦牟尼世尊、『無量寿経』に阿弥陀仏の本願を示しのたまわく…」

例②『仏説無量寿経』巻上に、法蔵菩薩、その本願に誓いのたまわく…」

例③『仏説無量寿経』巻上に、西方願王阿弥陀仏、その本願を誓いてのたまわく…」

## 3―10「第二、不更悪趣願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ仏を得たらんに、国中の人天、寿終の後、また三悪道に更らば　正覚を取らじ」（第二不更悪趣願、聖典一・二二五頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔私の〕国土に住む人々や天人が命を終えた後、〔地獄・餓鬼・畜生の〕三悪道に堕ちることが、〔万が一にも〕あるようならば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・四七頁）

**③〈キーワード／設定〉**

・本願、第二願、因果、凡夫、苦、悪趣、輪廻転生、六道、三悪道、抜苦与楽（阿弥陀仏の大悲の本願によって、極楽世界に往生すれば二度と地獄・餓鬼・畜生の苦しい境涯に転生することはない）

**④〈キャッチフレーズ〉**

「極楽に生ずれば、再び悪道に戻ること無し」

「二度と苦界に戻さぬ誓い」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・本願…覚りに至る以前の修行時代（因位）にたてた誓願のこと。法然上人撰と伝わる『四箇條問答』には「本願と云うことは、もとの願いと訓ずるなり」[58]

とある。阿弥陀仏の本願には、全てに「不取正覚」とあり、自身の成仏を賭けた誓願である。

・不更…「かえらず」と読み、ここでは悪趣に転生しないということ。

・悪趣…悪しき行いをした者が趣く所。『無量寿経』にも「ただ衆悪を作して、善本を修せず。皆悉く自然に、諸もろの悪趣に入る[59]」とある。

・人天…通常は三界六道内の人と天人を指すが、ここでは極楽国土に往生した人や天人の意。『無量寿経』に「その諸もろの声聞・菩薩・天・人、智慧高明に神通洞達し、咸同じく一類にして、形異状なし。ただ余方に因順するが故に、天・人の名あり。顔貌端正にして、世に超えて希有なり。容色微妙にして、天にあらず人にあらず、皆自然虚無の身、無極の体を受く[60]」とあり、各々の業の報いによって分段生死した人間や天人とは異なる。人天の名は、往生以前の余方（他の世界）の呼び名に順じたものである。

・三悪道…前項の地獄道・餓鬼道・畜生道の三こと。三悪趣ともいう。

**⑥〈解説〉**

・師の世自在王仏に請い、二百一十億の諸仏の国土をつぶさに見聞した法蔵菩薩は、粗悪なるを除き、精妙なるを選りすぐって、自身がやがて建てる浄土の理想とし、五劫に及ぶ思惟の末、その実現を誓った。その第一「無三悪趣の願」に続いて誓われたのが、第二「不更悪趣の願」である。

・願成就文（義山[61]）は、巻下の「またかの菩薩、乃至成佛まで、悪趣に更らず。神通自在にして、常に宿命を識る。他方の五濁悪世に生じて、示現してかれに同ずること、我が国のごとくならんをば除く」（聖典一・二五六頁）である。／「また〔極楽世界の〕菩薩たちは仏となるまでの間、〔地獄・餓鬼・畜生の〕悪しき境涯に堕ちることがなく、思い通りに神通力を駆使して、過去世〔のありとあらゆる出来事〕を常に知り分けることができる。〔ただし極楽の菩薩が悪しき境涯に堕ちることがないとはいっても、極

楽〕以外の五濁悪世に〔敢えて〕生まれようとする者はその限りではない。〔というのも彼らがそうした世界に、〕そこに応じた身として現れるのは、私〔釈尊の住するこの娑婆〕世界〔で菩薩たちが、衆生を救い導いているの〕と同じなのである」（現代語訳・一一九頁）

**⑦〈法話のポイント〉**

・第一願と同様、まずは悪をなし、善をなさぬ者は「皆悉く自然に、諸もろの悪趣に入る」[62]という「因果律」の中に生きている私であるということを踏まえておきたい。

・自ら為した業の報いで輪廻転生する限り、六道の中はいずれもやがては寿命尽きて、再び苦のある世界へ生まれ変わる、苦の連鎖の世界であることを説く。そこから解脱を遂げさせ、二度と苦汁をなめさせまいとするのが第二「不更悪趣の願」である。

・法然上人は『無量寿経釈』において「彼の諸仏の土の中において、あるいはたとい国の中に三悪道無しといえども、その国の人天寿終の後、その国土より去って、また三悪趣に更るの土有り。あるいは悪道に更らざるの土有り。すなわちその悪道に更る麁悪の国土を選捨して、その悪道に更らざる善妙の国土を選取するが故に選択と云うなり」[63]と申され、『無量寿経』の願成就文には、その成就の証として「またかの菩薩、乃至成佛まで、悪趣に更らず」[64]と説示されている。

・また、この苦の境涯の存在しない浄土が、私たちの苦を除くために用意された、阿弥陀仏の大慈悲に基づくのだということもお伝えしたい。『無量寿経釈』に「そもそもこの四十八の願は、皆抜苦与楽の義有り。しかる故は、大悲は抜苦なり、大慈は与楽なり。第一の無三悪趣は大悲抜苦なり。第二の不更悪趣もまたこれ大悲抜苦なり」[65]とのお示しがある。第一「無三悪趣の願」同様、法蔵菩薩の「衆生の苦を取り除いてやりたい」との大悲の願いが、すでに極楽において実現されていることを、ご本願を通してお伝え

すべきであろう。

・「天界」と「極楽」を対比させて、やがて善縁尽きれば苦界に転落していく危惧のある「天界」と、本願力によって再び悪趣に転落する心配の一切無い「極楽」の差異を示すことも、願往生の心を育む糧となるかと思われる。『一百四十五箇条問答』の中に、「ながく生死をはなれ、三界にうまれじ」と願っているが、極楽に往生しても縁が尽きれば再びこの世に転生するというのは本当かと問う質問者がある。対して法然上人が示された答えは「これもろもろのひが事にて候。極楽へひとたびうまれ候いぬれば、ながくこの世に返る事候わず、みなほとけになる事にて候なり」[66]である。

・第十五「眷属長寿の願」には、極楽国中の人天の寿命に「限量無からん」とも誓われており、そもそも寿命尽きて他の世界に転生する心配自体が無い。また往生人の「滅度」を保証されている第十一「住正定聚の願」もあるから、これらの本願ともからめて、自他の退転を防ぎ、成仏を確実に保証される究極の浄土は「西方極楽」と説き、願往生のお念仏をお勧めしたいところである。

（執筆者：八木英哉）

## 3―11「第三、悉皆金色願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、国中の人天、悉く真金色ならずんば、正覚を取らじ」（第三悉皆金色願、聖典一・二二五頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔私の〕国土に住む人々や天人〔の肌〕が、一人でも金色に輝いていないことが、〔万が一にも〕あるようならば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・四八頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第三願、金色、与楽、聖衆倶会楽、増進仏道楽／年回法要

**④〈キャッチフレーズ〉**

「お姿に導かれて」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・真金色…『随聞講録』に「真とは似に対す。〈中略〉然るに金色を取ること、仏色に順ずるが故なり」[67]とある。また『逆修説法』一七日には、「但黄金のみ有て、不変の色なり。是の故に十方三世一切の諸仏、皆常住不変の相を顕さんが為、黄金の色を現じたまへるなり」[68]とある。

**⑥〈解説〉**

・自らが成仏し建立した国土（極楽浄土）の人天を、一人残らず真金色にしたいという願である。法然上人は第三願について「すなわち黄白二類の粗悪の国土を選捨して、黄金一色の善妙の国土を選取するが故に選択と云うなり」（『選択集』第三章、聖典三・一一六頁／昭法全・三一八頁）といい、四十八願には抜苦と与楽の義があるなかで与楽の願である（『無量寿経釈』、昭法全・七四頁）としている。『随聞講録』には、身の色が「同じからざるに由るが故に、互に勝劣を生じ、常に憂悩を懐く。法蔵、顕色不同の有情を愍念して、此の願を選択して衆生を摂す」[69]とある。

・「第三十七　極樂菩薩悉皆金色事」（聖光上人『浄土宗要集』）

問、四十八願の中、第三の願は何の願なりと云うべきや。答、所生の菩薩の悉皆金色を願ずるなり。菩薩は眞金色なり。難じて云、極樂に往生しなば身色は何の色にても有りなん。何ぞ必ず金色と願じ給えるや。強に選て金色ならしめんと願じ給えるは何の深意ありや。答、諸佛の土の莊嚴を選擇して極樂國土を莊嚴し給える時、諸佛の身色皆金色なればなり。諸土の上品の莊嚴を選取して極樂淨土を成就したまう時、諸佛の身色悉皆金色なるを取て我が土の菩薩の身色も佛の身色の如くナラシメント願じ給えるなり。難じて云、佛の身色と同く金色せしむるは何の用ありや。答、佛は皆金

色の相を具し給えり。見る者、敬重の想を成ず。二に希有不思議の思を成ずが故に。難じて云、何の修因をもって皆金色果報を得るや。答、大論の文を見るに檀波羅蜜を修するが故に皆金色の相を得と見えたり。難じて云、我れ等、檀波羅蜜を修さず、ただ念佛ばかりを以って往生せば、修因すでに無し。相好あにあらんや。答、自力修行の修因は叶ざるが故に、佛、願を発こしたまえり。これ即ち彌陀の願力なり。仍って失なし。[70]

・貞極上人の『三十二相顕要鈔』には「一切の大衆是を拝見して愛楽せずと云ことなし。如来金色身の容儀。是を見る人善念を生じて功徳を損ねず[71]」とある。

・願成就文①（義山[72]）は、巻上の「阿難。かの佛の国土の諸もろの往生せる者は、かくのごときの清浄の色身、諸もろの妙音声、神通功徳を具足す」（聖典一・二四三―二四四頁）である。／「阿難よ。かの〔無量寿〕仏の〔極楽〕世界に往生する者はみな、確かにその姿形は清らかで、〔口から発せられる〕音声は妙なる響きであって、神通力や〔様々な〕功徳を具えている」（現代語訳・八〇頁）（この御文は、第五～十願の成就文（義山[73]）でもある）

・願成就文②（義山[74]）は、巻下の「身色相好、功徳弁才、具足し荘厳して、与に等しき者なし」（聖典一・二六〇頁）である。／「〔また彼らには〕姿形といい、功徳といい、軽やかな弁舌といい、〔およそ考えられ得る〕すべての長所が〔他と〕比べようもないほどに具わっている。」（現代語訳・一二七頁）

**⑦〈法話のポイント〉**

・法事において、極楽往生した方の戒名が、位牌に金色に彫られていることを通して、菩薩として仏道修行に励んでいることを伝える。

・「倶会一処」「一蓮托生」を願う方も多いが、「死後にまで一緒にいたくない」という声を聞くこともある。娑婆で人間として過ごした頃であれば、欲望を抑えきれない凡夫であるが故に、良くない人間関係があったかもしれない。しかし極楽に往けば、仏様

と同じ金色の姿をした菩薩になるのであって、良い関係の中で共に仏道修行を励むことができる。

・仏の金色の姿を見れば、欲の心が無く、廃悪修善の業が自然に生じる。（解説の貞極上人資料参照）極楽の菩薩が、仏と同じ金色の姿であるということは、お互いの尊い姿を見ることで欲の心が出ず、反対に敬いの心が生じる。またお互いが善縁となって、修行による功徳を重ねられる。修行をするのに最適な環境である極楽浄土を建立してくださった阿弥陀仏の大慈悲を伝えることも出来る。

・人間は肌の色などの違いに対して、偏見により優劣を加えてしまい、つい差別の心を生じることもある。凡夫の愚かさを十分に理解された阿弥陀仏（法蔵菩薩）が、極楽の菩薩が悉皆金色であるよう本願としてくださった。差別もないし、苦しめあいもない世界が極楽浄土であることを伝える。またそういう世界を目指す私達だからこそ、娑婆においても差別の心が生じないよう、他者に苦悩を与えないように、心がけて生きることもお勧めしたい。

・娑婆において、金は他の金属に比べて錆びにくい性質で、経年による退色や腐食が極めて少ないため、不変のものとして高い価値を持っている。しかし娑婆世界のものに常（不変）であるものは存在せず、金であっても退色や腐食を逃れることはできない。しかし極楽で金色の姿を得た菩薩は、後に佛に成って以後も、貴い姿を保ち続けることができる。容姿において苦悩を持つことがある凡夫が、極楽に往生すれば、何の煩いも無く修行に専念できることを伝える。

・以上のポイントなどを通して、娑婆とは異なる極楽での姿を提示して、聴衆に欣慕の心を持っていただき、「極楽往生のためには、日々の念仏信仰が大切である」と伝えることが最も大切である。

（執筆者：中川正業）

### 3―12「第四、無有好醜願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、国中の人天、形色不同にして、好醜あらば、正覚を取らじ」（第四無有好醜願、聖典一・二二五頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔私の〕国土に住む人々や天人の姿形がまちまちで、美しい・醜いといった差が、〔万が一にも〕あるようならば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない。」（現代語訳・四八頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第四願、形色不同、人の物差しの拙さ（好い醜いというのは人の物差し、仏の物差しにそんなものはない）

**④〈キャッチフレーズ〉**

「極楽に良い醜いはない」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・形色…姿かたちのこと。『随聞講録』には、「形色等とは、顕色に非ざることを顕す[75]」とある。

**⑥〈解説〉**

・願意について『随聞講録』には、姿かたちがまちまちで、美しい・醜いといった差があると、「或いは憍慢が生じ、或いは恥辱を懐きて、常に苦患を増す[76]」ため、これを哀愍して建てられた願であるという。

・願成就文（香川[77]）は、巻上の「その諸もろの声聞・菩薩・天・人、智恵高明に神通洞達し、咸同じく一類にして、形異状なし。ただ余方に因順するが故に、天・人の名あり。顔貌端正にして、世に超えて希有なり。容色微妙にして、天にあらず人にあらず、皆自然虚無の身、無極の体を受く」（聖典一・二四四頁）である。／「その〔極楽世界にいる〕声聞や菩薩、天人や人々はすぐれた智慧を持つ〔と同時に、あらゆる〕神通力をすっかり具え、みな一様に同じ姿であって異なることがない。ただ、もといた世界にちなんで、天とか人という名があるのみである。顔立

ちは〔極めて〕端正で、今まで誰も見たことがないほどなのだ。その容姿は喩えようもなく端麗で、〔名こそ天・人とはいっても〕実際は天でも人でもなく、そもそも〔蜃気楼のように〕つかみどころがなく、物質的な肉体を持たない存在なのである」（現代語訳・八一頁）。

**⑦〈法話のポイント〉**

**◆法話のポイントと法話例**

・「阿弥陀仏の極楽浄土には容姿の良い者・醜い者はなく、すべては同じような美しい者に生まれ変わる」と受け取られるこの本願だが、「その身そのまま極楽に生まれ、美しい醜いといった物差しはなくなり、すべてが尊重される」という説き方ができればと思う。

**《法話例》**

「阿弥陀様の極楽浄土に生まれた者は、どんな者でも美しい者に生まれ変わって、醜いすがたにはならないのだ…」と、何か引っかかりながら話をしていたところ、案の定質問を頂戴しました。

「極楽浄土に生まれたならば、その身そのまま、美しいとか醜いとか、そういう物の見方はなくなる…そうとらえてもらえた方が、私はうれしいです」というものだった。私はその通りだと頷き、反省したことを忘れることはありません。

これは現代における理想的な物の見方を前提として、お釈迦様のお言葉を理解しようというものになりますが、多様性を認め合う、それぞれ違った価値観がありそれを否定せずに尊重し合おうということは、現代において大いに大切な考え方であると思います。

お経文を見ますと、極楽浄土に生まれた者が「形色不同にして好醜あれば」私は仏にはならないとあり、また、極楽浄土では「同じく一類にして、形異状なし」とあります。すこし難しいですが、確かに「みんな同じ姿になる」と受け取ることが出来ますね。しかし、「姿形もなく、この上ない姿を得る」とも説かれており、「どんな姿にもなれる」と受け取ることも出来そうです。

みんなが同じように、それぞれがなりたい姿になることができる身体を得るということですね。つまり、どんな姿にもなれる体にみんながなるということでしょうか。これならば大丈夫ですね。

阿弥陀様は、極楽浄土でこの私がどんな姿になろうとも、「すばらしいね」と心から認めて下さる、また極楽浄土におられる全ての化仏菩薩様達も同じなんですね。ああ、なんと心強いことでしょうか。

私達はこの現世で全ての人たちを認め、尊重するべきであることを知っていますね。しかし、それでも凡夫である私達は全てを尊重できないという限界を併せ持っていることも忘れてはなりません。人が一生懸命やっていることも、私は正しいとは思えないと認められないことも多いでしょう。そして自分が正しいと思っていること、一生懸命精一杯自分を信じてやっていることも、認めてもらえず、悲しい思いをすることも少なからずあるのがこの現世ではないでしょうか。それはこの現世が私達凡夫によってつくられている社会だからともいえましょう。

私も正しいと思っていることを信じてやっていますし、こういう姿でいることに想いをもって生きているつもりです。しかし、認めてくれる人は多くはありません。最近では笑われることも多いです。街に出るとみんなに笑われているように感じますし、歳をかさねるにつれて、目に映るもの、自分がやっていることに対する評価など、どんどん怖くなってきます。それでも一生懸命やろうとしています。笑われるようなこと、認めてもらえないこと、それでも認めてほしいこと、それを１００％の人たちが、１００％認めてくれる世界、それが極楽浄土だと思うと、涙が出てきませんか…。

認めてもらえなかったことが、努力の結果称賛されることになった、ということは世の中にはありますね？例えばスポーツの世界で結果を残したり、新たな開発をして世の中が大きく変わったり、やり遂げた先に認めてもらえるということは少なくないかもしれません。しかし、その途中は苦しいものだと察します。

そうして苦しむ人のほんの一握りの人が称賛され、認めてもらえるのが現世だと思います。つまり、ほとんどの人は認めてもらえずにつらい思いをしながら生きているといえるのかもしれません。いかがですか？そういう経験をされていませんか？

そうした想いを持つ方であれば、先にお伝えした極楽浄土の姿を思い浮かべてみてください。現世では到底かなわないであろう、全ての人を全ての人が認めて称賛すること、だれにも認められない自分を、心の底からみんなが認めてくれるということ。これが確実にそこにあるんですね。「認めてもらえないこと知っています。それでも一生懸命やっていること、私は知ってます。私は心からあなたを認めます」全ての仏様菩薩様が認めてくれる。極楽浄土はこうした世界だと教え、そういう世界に連れて行って下さるのが阿弥陀様の誓願、第四番目「無有好醜の願」のメッセージではないかと、紹介したご指摘の経験も踏まえ、お伝えいたしたいと思います。

だれもが認めてくれる世界、極楽浄土。阿弥陀様だけが連れて行って下さいます。南無阿弥陀仏とお称えして、阿弥陀様のお迎えをお願い致しましょう。南無阿弥陀仏。

（執筆者：郡嶋昭示）

## 3―13「第十一、住正定聚願」

### ①〈讃題〉

「もし我れ佛を得たらんに、国中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずんば、正覚を取らじ」（第十一住正定聚願、聖典一・二二六頁）

### ②〈現代語訳〉

「私が仏となる以上、〔私の〕国土に住む人々や天人が、〔覚りを開いて仏になることが確約されている〕正定聚〔の状態に万が一にも〕なれないようであるならば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・四九頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第十一願、正定聚、処不退、必至滅度、／十夜会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「必ず覚りへと至らせよう」

「必ず仏へと育て上げよう」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・定聚…正定聚のこと。『随聞講録』には「正定聚即ち、処不退なり」[78]とある。正定聚は、仏になれることが定まっている境地のこと。処不退とは、極楽浄土の徳として、その国に生まれた者は修行が後戻りすることなく、三悪道などの悪趣に退転することもないことをいう。

・滅度…生死輪廻の苦を「滅」して、覚りの境地に「渡（＝度）」ること。『随聞講録』には「大乗の滅度、即ち仏果を指すなり」[79]とある。

**⑥〈解説〉**

・穢土での修行は、一尺の善を成せば一丈ほど後退するという。[80]法蔵さまがご覧になった二百一十億の浄土の中、ある浄土の衆生は仏道修行をすれども、多くは退転して必堕地獄の邪定聚に入るのである。法蔵さまは退堕の衆生を憐れんでこの願を建てられ、我らを摂取してくださる。[81]

・願成就文（義山[82]）は、巻下冒頭の「佛、阿難に告げたまわく。それ衆生あって、かの国に生ずる者は、皆悉く正定の聚に住す。所以は何ん。かの佛国の中には、諸もろの邪聚および不定聚なし」（聖典一・二四九頁）である。／「釈尊が〔私〕阿難に仰せになった。「さて、誰であれ〔無量寿仏の極楽〕世界に往生する者は、みなことごとく〔覚りを開いて仏になることが確約されている〕正定聚〔の状態〕にある。なぜかというと、その仏の世界には〔地獄・餓鬼・畜生の三悪道に堕ちる〕邪聚〔の存在〕もないからである」（現代語訳・一〇〇頁）。

**⑦〈法話のポイント〉**

・この讃題は、我ら退堕の衆生を憐れんでのご誓願で

ある。まずは阿弥陀さまの大慈悲の御心をお伝えすると共に、第一・二願を念頭に置きながら、正定聚の境地についてお伝えする。

・その上で、「必ず滅度に至らずんば、正覚を取らじ」、つまり「必ず仏へと育て上げる」と誓われていることを尊く頂戴する。仏教の最終目標である覚りの境地を、我らにお約束下さっているのであって、四十八願の願文中、往生人の成仏を明確にお示し下さっているのはこの願文のみである。本経巻上の最後の御文にも、阿弥陀仏の化仏である「かくのごときの諸佛、各おの無量の衆生を、佛の正道に安立せしめたまう[83]／それらの仏は各々、数限りない衆生が覚りへと続く道をしっかり歩むようにさせるのである[84]」とある。ここでも示されるように、極楽の荘厳は、往生を果たした全ての衆生を覚りの境地へ導くためのお計らいであり、四十八願すべてが我らを「滅度に至らせる」ための誓願なのである。

・「四弘誓願」に見られる菩薩の道を歩むことができ、「この私が必ず仏に成れる」という未来像を、共に抱くことができる。

・極楽浄土は尊く有り難くも、単なる「あの世」ではない。往生人および未来の私が極楽浄土にて、仏道修行や菩薩行を「極めて楽しく」修める姿をお伝えする。（「浄土十楽」の増進仏道楽など参照）

・逆に、この穢土での修行の難しさを説く。（例えば『登山状』には、「或る文には、『一人一日の中に八億四千の念あり。念々の中の所作、皆是れ三途の業なり』といえり[85]」とある）しかし念仏は易行であり、我ら凡夫でも精進できる。

・浄土宗のみ教えは、我らにとって釈尊一代仏教の結論である。往生浄土のその先に、必ず成仏へと至る仏道があることをお伝えし、だからこそ称名念仏を結勧するのである。

（執筆者：宮入良光）

### 3―14「第十二、光明無量願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、光明能く限量あって、下、百千億那由他諸佛の国を照らさざるに至らば、正覚を取らじ」（第十二光明無量願、聖典一・二二六頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔私が放つ〕光明の輝きに〔万が一にも〕限界があり、少なくとも百千億那由他ものみ仏の国々を照らすことができないようであるならば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・四九頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第十二願、光明、光明無量、光明摂取／通夜、彼岸会、十夜会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「仏さまのみ光に限りなし」

「一人も捨てず」

「仏光に照らされている私」

「摂取のひかり」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・光明…仏菩薩の智慧の働きを象徴する光。中でも阿弥陀仏が放つ光明は、際限がない。つまり、本願成就によって阿弥陀仏の救いの働きである光明は全世界を照らしているのと同時に、全ての人に等しく降り注がれている。しかし、『観経』に、「光明、徧く十方世界を照らして、念仏の衆生を摂取して捨てたまわず」[86]と説かれるように、念仏を称える者のみ、その光に摂取され、阿弥陀仏に救済される。法然上人は『逆修説法』三七日[87]で光明の働きについて、全世界を照らす光明の働きを「常光」とし、念仏を称える者のみを照らす光明の働きを「神通光」としている。これについて、法然上人作である「月影」の道詠を解説する中で、藤堂恭俊台下は、前半の句「月かげのいたらぬさとはなけれども」は「常光」を指し、後半の句「ながむる人の心にぞすむ」は「神通光」を指すとしている。また、浄土宗では、阿弥陀仏の

身心から放たれる全世界を照らす光明の働きを、「色光」といい、とくに阿弥陀仏の慈悲によって念仏者を摂取する光明の働きを「心光」ともいう。

・那由他…（nayuta）の音写語。那由多とも書く。インドの数量の単位で、一千億とも、一千万ともいわれる。

**⑥〈解説〉**

・願名について

四十八の誓願のうち第十二番目の願。第十二願は、「光明無量願」、「光明遍照無数諸国願」、などと称される願文である。[88] ちなみに浄土宗では、了慧道光の『無量寿経鈔』の呼称に基づき、第十二願を「光明無量願」と呼び習わしている。

・第十二願の内容について

第十二願の内容は、「自分が仏となった暁には、光明に際限がないようにしたい」という意である。阿弥陀仏の梵語名は、「アミターバ」といい、無量光という意味であって、この願は阿弥陀仏の名に対応した内容になっている。

この願が建てられた意図は、諸仏のうちのある仏は百仏世界を照らし、ある仏は一仏土のみしか照らさない。しかし、それでは諸仏の光明に限りがあり、光明の届かない所では、仏の救いから漏れてしまう人々が出てくる。そこで、阿弥陀仏は念仏を称える全ての人々を救うために、光明に限りがなく、全世界に光明を届けるため、いかなる仏も実現しえなかった「光明無量の願」を建てられたのである。

・阿弥陀仏の光明の十二の徳用について[89]

「光明無量の願」を成就された阿弥陀仏の光明には、以下の十二の徳用が説かれている。これに仏格をあたえて十二光仏ともいう。

一、無量光…『観経』に八万四千の相・八万四千の随形好・八万四千の光明とあるが如く、その光明はまことに算数の及ぶところでないということ。

二、無辺光…照らすところが極まりない故に、どこ

までも有縁の衆生を求めて済度しようということ。

三、無碍光…この世の日月灯燭などは、へだてる物があれば光を通すことができない。しかるに仏の光明は、大小もろもろの山をも徹し照らして、この界の念仏の衆生を摂取されるのに、障害となるものは何もないということ。

四、無対光…他の仏の光明と比べることができないほど、阿弥陀仏の光明は勝れているということ

五、焔王光…三途の暗闇も徳光を蒙るということ。

六、清浄光…無貪の善根より生ずるところの光。この清浄光に触れる者は必ずそれらの貪欲の罪を滅することができる。即ちかの仏が無貪の清浄光を放って照触摂取してくださるが故に、淫貪・財貪の不浄を除き、無戒や破戒の罪を滅して、無貪善根の身とならせていただき、それは持戒清浄な人と同列であるということ。

七、歓喜光…無瞋の善根より生ずるところの光。この光に触れる者は瞋恚の罪を滅することができる。故に瞋恚憎盛の人であっても、専ら念仏を修する時、かの仏が歓喜光で摂取してくださるが故に、瞋恚の罪を滅し、それは忍辱波羅蜜の人と同じ価値があるという。

八、智慧光…無癡の善根より生ずるところの光。み仏は久しく一切の智慧を学んで愚痴の煩悩を絶ち尽くし、この光を得られたから「無癡所生の光」という。この光は愚痴の罪を滅し、無明の闇を破るということ。

九、不断光…常に照らして絶えない光。仏の光明が長時不断に照益を為すということ。

十、難思光…仏以外の声聞や縁覚という位の者では、測り知ることのできない徳光ということ。

十一、無称光…世の言相を過ぐ。余乗などの堪説するところにあらず。つまり文字や言葉では表し難く、説明できないということ。

十二、超日月光…世の色相を過ぐ。日夜恒に照らす

こと娑婆二曜の輝きに同じからず。つまり阿弥陀仏の光明の照り輝くさまは、この世の太陽や月の比ではないということ。

・願成就文（義山[90]）は、「無量寿佛の威神光明、最尊第一なり。諸佛の光明、能く及ばざる所なり」（聖典一・二三七頁）である。／「〔法蔵菩薩はすでに仏となり、無量寿仏という名の仏となられた。〕無量寿仏の強大な力みなぎる光明は、み仏方の中でも最も尊く最高〔の輝き〕であり、他の諸々の仏の光明が到底、追随できるものではない」（現代語訳・六九頁）。

## ⑦〈法話のポイント〉

### ◆法話のポイントと法話例

・阿弥陀仏が放つ光明は、いかなる諸仏の光明より勝れており、最尊第一であることを⑥の「解説」で挙げた「十二光」の徳用を例に出して伝えるとよい。例えば、法然上人は、阿弥陀仏の光明について、以下のように詠まれている。

障られぬ　光もあるを　をしなべて　隔て顔なる朝霞かな

〈訳〉

遮ることのできない光というものがあるものなのに、朝霞が一様に太陽の光を遮って、いかにもすべての光を遮っているようにたなびいていること[91]よ。

右の法然上人の和歌は、阿弥陀仏の「十二光」のうち、何ものにも遮られない「無碍光」を意識して詠まれたものと思われる。阿弥陀仏の光明には、何ものにも遮られない「無碍光」という徳が具わっている。ただ、太陽の光が朝霞には遮られるように、阿弥陀仏の光明も我々の煩悩によって遮られようとしている。しかし、阿弥陀仏の光明は、煩悩に束縛されている我々凡夫にでも、念仏さえ称えれば必ず届くことを、法然上人の和歌を用いながら伝えるとよい。

・阿弥陀仏の光明は、本願を成就したことで、全ての人に降り注がれているが、その光明に摂め取られる

のは、念仏を称える者だけである。これについて、法然上人は、『選択集』第七章段篇目に「弥陀の光明余行の者を照らさず、ただ念仏の行者を摂取したまうの文」と掲げ、和歌にも次のように詠まれている。

月影の　至らぬ里は　無けれども　眺むる人の心にぞ澄む

〈訳〉

月の光が照らさないところはないが、月を眺める人の心にこそ月は澄み渡るのである。[92]

これは、浄土宗の宗歌にも定められており、詞書に「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨の心を」と付されているように、法然上人が阿弥陀仏の光明を月の光に例えて詠まれたものである。「月影」とは、月の光のことで、阿弥陀仏の光明を表す。つまり、阿弥陀仏の光明が全世界を照らしているのと同様に、月の光も全ての場所をくまなく照らしてくれている。しかし、建物の中にいたり、他のことに気をとられていたら、月の光に気づくことができない。実際に、この目で月を眺めてこそ、月の光に心が奪われるのである。まさに、月の光と同様に、念仏を称えてこそ、阿弥陀仏の本願他力の御心を頂戴でき、極楽浄土へと救われていくのである。まずは、聴衆に、阿弥陀仏の光明に照らされている身であることを知らしめ、実際に、南無阿弥陀仏と念仏を称えることを勧めることが大切である。

・光明について法然上人が、『逆修説法』三七日の中で説いている「常光」と「神通光」の違いについても説明しておくとよい。

**《十分法話例》**

あるお寺の掲示板に次のような言葉が紹介されていました。

「のぞみはありませんが、ひかりはあります」

この言葉は新幹線の駅員さんがおっしゃった言葉だそうですが、この言葉の経緯を申しますと心理学者の河合隼雄さん（一九二八～二〇〇七）が切羽詰まった急用で、終電間際に新幹線に乗らなければならない状

況にありました。急いで新幹線の切符売り場に来た河合さんが「まだ新幹線はありますか」と尋ねたところ、駅員さんがさっきの言葉を告げられたのです。駅員さんからしてみたら「のぞみはありませんが、ひかりはあります」と、ただ事実を伝えられただけなのですが、この言葉がこの時、河合隼雄さんの心にグサッと刺さったのです。おそらく、河合隼雄さんがこの言葉に、これで何とか目的地まで辿りつけるという光を見いだされたのでしょう。

『無量寿経』というお経によると、私たち一人ひとりにも「ひかり」があり、その「ひかり」に照らされていると教えられます。この「ひかり」のことを光明といいます。光明とは阿弥陀さまから放たれる光のことで、智慧の働きを表しています。阿弥陀さまの光明は限りがなく、全世界を照らしてくれています。つまり、阿弥陀さまの光明は、全ての人に等しく降り注がれていますが、その光明に摂め取られることができるのは、南無阿弥陀仏とお念仏を称える人です。そのことは、『観経』にも、「光明、徧く十方世界を照らして、念仏の衆生を摂取して捨てたまわず」と説かれているように、念仏を称える者のみ、光明に摂取され、阿弥陀さまのお救いに預かることができるのです。

また、我が宗祖法然上人は、阿弥陀さまの光明を月の光に例えて、三十一文字のお歌にし次のように詠まれました。

月影の　至らぬ里は　無けれども　眺むる人の
心にぞ澄む

ちなみに月影とは、月の光のことです。月の光は、阿弥陀さまの光明と同じように、「至らぬ里は　無けれども」とあるように全世界を照らし、全ての人に等しく降り注がれています。しかし残念ながら、その月の光に気づくことができる人とできない人がいます。

約十年前の読売新聞の投書欄に、当時、六十五歳の齊藤さんという方が次のような投書を寄せておられました。

子どもの頃、いたずらをすると、夜に外へ出され、

闇の恐怖を味わった。だから、暗い中を出かけるのには、随分、勇気がいった。上級生になると、家から約５００メートルの距離にあった公民館での珠算塾に通い始めた。だが、夜は遠く感じた。頼りは懐中電灯。手提げ袋に入れたそろばんがカタコトと鳴るとおびえた。帰り際、空を見上げ、幻想的な光景に気づいた。空に浮かぶまん丸い月。月の光というプレゼントに私は心を奪われ、立ち尽くした。[93]

この斎藤さんのように、お月さんの光に心を奪われ、立ち尽くすことのできる人は、「眺むる人」であります。要は、実際に月をこの目で見た人にして、初めて「心にぞ澄む」という境地が得られ、私たちの心が、月の光というプレゼントによって、澄み渡っていくのです。

このように、阿弥陀さまの光明も全ての人に届いています。その中で、尚且つその光明に摂め取られ、阿弥陀さまのお救いに預かることができる人は、「我が名を呼べ、ならば必ず救う」という阿弥陀さまの願いに応えて、実際、この口に南無阿弥陀仏とお念仏を称えた人であります。ならば、阿弥陀さまは決して、お念仏を称える私たちをお見捨てになることはないのです。最後に、私たちは、この世で覚りを開き、仏となる「のぞみ」はありませんが、阿弥陀さまの光明に摂取されることで、仏となれる「ひかり」があるのです。どうぞ、阿弥陀さまのお救いに預かるためにも、共々にお念仏を称えてまいりましょう。

（執筆者：井野周隆）

## ３―１５「第十三、寿命無量願」

### ①〈讃題〉

「もし我れ佛を得たらんに、寿命能く限量あって、下、百千億那由他劫に至らば、正覚を取らじ」（第十三寿命無量願、聖典一・二二六頁）

### ②〈現代語訳〉

「私が仏となる以上、〔万が一にも自分自身の〕寿命に限りがあるようならば、〔たとえそれが〕百千億那

由他劫という〔無限に近い年月を〕下らないとしても、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・四九―五〇頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第十三願、寿命無量

**④〈キャッチフレーズ〉**

「限りない救い」

「いつの時代においても」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・有能限量…『隨聞講録』には「此れは是れ無量之無量にして有量之無量に非ざるなり。故に無量寿仏と名づく」[94]と解説される。すなわち、無限に近い数であったとしても限りが存在するのではなく、あくまで際限の無い無量の寿命が誓われているということである。ここでは「百千億那由他劫」として無限に近い年月が例示されるが、それでも際限がある場合には、決して仏と成らないことが固く誓われている。

・百千億那由他劫…仏教の時間的単位の最長である「劫」に、「那由他」という極めて大きな単位を重ね、無限に近い時間を表している。

**⑥〈解説〉**

・願成就文（義山）[95]は『無量寿経』巻上の「佛、阿難に告げたまわく、また無量寿佛の寿命長久にして、称計すべからず。汝むしろ知らんや。たとい十方世界の無量の衆生をして、皆人身を得せしめ、悉く声聞・縁覚を成就せしめて、すべて共に集会し、禅思一心に、その智力を竭くして、百千万劫に、悉く共に推算して、その寿命の長遠の数を計るとも、窮尽して、その限極を知ること能わじ」（聖典一・二三八頁）である。／「〔またさらに〕釈尊が〔私〕阿難に仰せになった。『また無量寿仏の寿命は果てしなく、とても計り知ることなどできない。〔もちろん〕そなたに分かるはずもない。たとえ、あらゆる世界の数限りない命あるものたちをみな人の身にして、〔その上、その〕すべてに声聞や縁覚〔の境地を〕

完成させ、〔そうした彼らが〕みな共々に集まって、精神を研ぎ澄ませた寂静の境地に入り智慧の限りを尽くして、百千万劫という永い時間をかけ、みな協力してその〔無量寿仏の〕寿命がどれほど長いかを〔何とか〕算出しようとしても、答えに辿り着くことは不可能であって、〔ただ、とめどなく計算を繰り返すばかり〕である」（現代語訳・七一―七二頁）

・『無量寿経』の経題にも示されているように、阿弥陀如来さまは誓願を成就して、無量寿を持つ仏である。寿命が無量であるということは、単に阿弥陀仏の寿命が量り知れないというだけではなく、その救済のはたらきも時間的な限定が存在しないことを意味する。また『阿弥陀経』にも「かの仏の寿命、およびその人民、無量無辺阿僧祇劫なり」[96]と説かれる。

・法然上人は『逆修説法』三七日において、「惣じて仏の功徳を論ずるに能持所持の二義有り。寿命を以て能持と云い自余の諸功徳を悉く所持と云うなり。一切の万徳はみな寿命の持つ所なるが故なり。〈中略〉ただ彼の仏寿命無くば、彼等の功徳荘厳等、何に依りてか留まるべき。然れば四十八願の中にも、寿命無量の願に自余の所願をば納めたるなり。たとい第十八願の念仏往生の願、広く諸機を摂して済度するに似たりと雖も、仏寿もし短くば、その願なお広からず。〈中略〉これを以てこれを思えば、済度利生の方便、寿命の長遠なるに過ぎたるは無く、大慈大悲の誓願、寿命の無量なるに顕るる故なり」[97]と説かれ、阿弥陀仏の寿命は諸願の能持であり、諸願はみな寿命無量の願に納められ、寿命無量であるからこそ、第十八願によって一切の衆生を救済することができると説示されている。（『新纂浄土宗大辞典』参照）

・法然上人は『三部経釈』において「光明無量の願は横に一切衆生を広く摂取せんがためなり。寿命無量の願は竪に十方世界を久しく利益せんがためなり」[98]と説かれ、広く久しく衆生を平等救済するための重要な願であることを示された。

**⑦〈法話のポイント〉**

・この「誓願」を法話で伝える際には、そこに込められている大慈悲にあらためて思いを馳せたいものです。阿弥陀如来さまは「無量寿仏」とも、「無量光仏」とも称えられます。どこにいても無量の光明で照らして下さり、どの時代を生きているとしても無量寿を持つ阿弥陀如来さまは念仏の衆生をお救い下さいます。浄土の荘厳も、阿弥陀如来さまのお救いも、限りのあるものであったならば真の救済とは異なります。しかし、時間における制限はなく、限りの無い無量の寿命をもち、その仏国土である西方極楽浄土も、第十八願における念仏往生の誓いも、決して途絶えることのないものなのです。それは、阿弥陀如来さまが、どの時代においてもすべての者を救いたいという大慈悲の表れであり、転じてこの「私」がどの時代に生きようとも必ず救おうと御心を向けて下さっていることでもあります。この誓願についてお話する際には、いつの時代においても、私たちに対して、大慈悲の御心をもって「今現に在します阿弥陀如来さま[89]」が救いたいと願いを向けて下さっていることを、自らの信仰とあわせてお話することが肝要と感じております。

（執筆者：宮田恒順）

## 3―16「第十五、眷属長寿願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、国中の人天、寿命能く限量なからん。その本願あって脩短自在ならんをば除く。もししからずんば、正覚を取らじ」（第十五眷属長寿願、聖典一・二二六頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔私の〕国土に住む人々や天人の寿命に限りがないようにしよう。〔ただし〕彼らに本願として〔寿命の〕長短を自由にしたい者については除くこととしよう。〔万が一にも〕そのようにできないのであれば、〔その間、〕私は仏となるわけにはい

かない」（現代語訳・五〇頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第十五願、眷属長寿

**④〈キャッチフレーズ〉**

「皆、命は意のままに」

「いつまでも　命の尽きぬ　よろこびに（私に／幸せに）」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・眷属…一般には一族、親族、身内、仲間の意。仏教では特に仏・菩薩を取り巻くもののことをいう。ここでは西方極楽浄土の衆生を指す。

**⑥〈解説〉**

・願成就文①（義山[100]）は『無量寿経』巻上の「声聞・菩薩・天・人の衆の寿命の長短も、またかくのごとし。算数譬喩の能く知る所にあらず」（聖典一・二三八頁）である。／「〔また、その無量寿仏の世界では、そこにいる〕声聞や菩薩や天人や人々の寿命の長さも、〔無量寿仏と〕同じように〔計り知れない〕。計算しても比喩を用いても、理解が及ぶものではない」（現代語訳・七二頁）

・願成就文②（義山[101]）は『無量寿経』巻下の「寿、一劫百劫千万億劫ならんと欲すれば、自在に意に随って、皆これを得べし。無為自然にして、泥洹の道に次げり」（聖典一・二六七頁）である。／「〔その上、極楽世界に往生した者は〕一劫でも百劫でも千万億劫でも望めば望むだけ、思いのままに寿命を得ることができ、取り立てて何もしなくても、〔その振る舞いは〕自然と覚りへの道に通じていくのである」（現代語訳・一四〇頁）

・四十八の誓願のうち第十五番目の願。西方極楽浄土においては、阿弥陀如来を中心として、その国中の衆生は皆その寿命が無量である。『阿弥陀経』にも「かの仏の寿命、およびその人民、無量無辺阿僧祇劫なり[102]」と説かれる。

・法然上人は『逆修説法』三七日において、「弥陀如来の寿命無量の願を発されたるは、御身のために長

寿の果報を求め給うにはあらず。済度利生のしかるべきためなり。また衆生をして欣求の心を発さしめんがためなり。一切衆生はみな寿ながからんを願うが故なり[103]」と説かれ、阿弥陀如来が極楽に往生した衆生に無量の寿命を与えるということは、極楽へ往生する心を発さしめるためであると説示されている。

・『無量寿経』には衆生の寿命に関する苦しみとして「天寿を全うせずに終わる[104]」、「輪廻の苦しみの中で受ける寿命はある時には長くある時には短い[105]」、「必ず死ぬ[106]」と説かれる。これらの肉体的・精神的苦しみから娑婆を生きる衆生が救われるために、阿弥陀如来さまはこの誓願を構えて下さったことを踏まえておきたい。

・「脩短自在」とあるのは、往生人が仏道を歩む上で、決して寿命の長短に煩わされることが無いということ。無量の寿命を持ち、悟りに至るまで決して成仏の道半ばで寿命が尽きることはない。もし往生人が何らかの理由によって、衆生済度のためにあえて短い寿命を望むのであればそれも叶う。すなわち、往生人が仏道を歩む上で寿命は意の如くであり、何の煩いも無いということを指す。

**⑦〈法話のポイント〉**

・阿弥陀如来さまは、ご自身の寿命だけでなく、西方極楽浄土に住まう仏菩薩、そして衆生の寿命に限りの無いよう誓いを立てて下さいました。ここで大切な事は、阿弥陀如来さまは凡夫の憂いや迷い、悲しみを、悉くその仏の眼で見通して下さり、私たちが心から往生を願えるようにお誓いを立てて下さっているということです。この世は、五濁悪世の穢土であり、私たち一人ひとり決してこの寿命を意の如く永らえることは叶いません。自分自身の寿命について、また大切な御方の寿命について、私たちは悲しみや苦しみを感じずにはおれません。しかし、阿弥陀如来さまはその姿をよくよくご覧になり、捨て置くのではなく、もう決してそのような想いをさせな

いためにと、抜苦与楽の姿で、この眷属長寿の誓いを立てて下さっているのです。阿弥陀如来さまの大慈悲のもと約束されたこの願によって、お浄土ではこの寿命に煩わされることはなく、再会を果たした多くの往生人の方と共に、菩薩としてよろこびの日々が送ることが叶うのだとお伝えすることが肝要だと思われます。

・また一方で、この世の中を生きる私たちは、自身の寿命は意の如くならず、無常であることも、それを救うために誓われた阿弥陀如来さまの尊いご本願にも、目を背けてしまうような愚かさを持ってしまっております。[107] この世での仮初めの楽しさばかりに囚われて、寿命の限りについても、それを終えた後に迎える輪廻についても、恐ろしさや悲しみから目を背けたくなる私たち「人」の現実の姿です。しかし、だからこそ、阿弥陀如来さまは大慈悲の御心でご誓願を構えて下さいました。愚かさを抱えながらでも、必ず西方の極楽浄土に救われるように、一つ一つのご誓願を凡夫の為にお立て下さったのです。法然上人の御法語に「ある時には世間の無常なる事を思いてこの世の幾程なき事を知れ。ある時には仏の本願を思いて必ず迎えたまえと申せ」[108]と示されるよう、折に触れて思い起こし、日々の身を正し、お念仏を相続することを目の前の皆さまにお勧めして参りたく思います。

（執筆者：宮田恒順）

## 3―17「第十六、無諸不善願」

### ①〈讃題〉

「もし我れ佛を得たらんに、国中の人天、乃至不善の名あることを聞かば、正覚を取らじ」（第十六無諸不善願、聖典一・二二六頁）

### ②〈現代語訳〉

「私が仏となる以上、〔私の〕国土に住む人々や天人が、善ならざるものの名称を万が一にも耳にすることがあるようならば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいか

ない」（現代語訳・五〇頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第十六願、不善の名、悪／法話会、彼岸会、十夜会、施餓鬼会等

**④〈キャッチフレーズ〉**

「さあ、不善のない世界へ」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・乃至…『随聞講録』には「乃至とは体より名に至るを説きて乃至という。乃至の言は悪趣の形を摂すと見るべし。鈔主のいうこの如き悪体は皆今経に摂す。乃至の言、最も巧説なりと」（浄全一四・三一七頁）

・不善の名…梵語 akusala. 善ではない名称。悪。『川合梁定『浄土三部経和解』には、「不善の名とは悪逆徳者犯罪人等の忌み嫌はるべき不愉快の名称にて其上の句に乃至と有るのは名称のみならず、その形体をも籠めたる意味で、ある国土にはたとい不善者の形体はなくとも、その名称があるのがある。またある国土には名実ともにあるのがあれども、我が国土には一切不善の形体は無論、その名称すら無からしめたしと、即ち清浄なる仏国を期せられたので、これを第十六無諸不善の願というのである」[19]とする。

**⑥〈解説〉**

・この第十六願は四十八願中、衆生の有り様に関する誓願（摂衆生願）であり、法蔵菩薩が成仏後に成就する仏国土では、人天が「不善の名」を聞くことがないようにという願文である。「不善の名」とは、『浄土三部経和解』に「不善の名とは悪逆徳者犯罪人等の忌み嫌はるべき不愉快の名称」とあるように、悪人や罪人などの名称と理解するのであれば、それらの存在はもちろん、名称までもないようにと誓われた願文であると考えられる。

**⑦〈法話のポイント〉**

・第十六願を法話の讃題として取り挙げる場合、願文中の「不善の名」という言葉の説明として、「善でないこと」「善でないことの名称」、もしくは「悪い行ないや悪い者」「その名称や概念」さえも極楽浄

土では存在せず、極楽浄土に往生した人々は、不善なことを耳にすることさえもないということ、また、そのことによって往生した人々にとっては「悪」という考え、その思いさえも湧き起こらない世界であることをお伝えしましょう。

・一方でこの娑婆世界では、悪の概念や悪人による悪行が横行し、世界情勢はもちろん、私たちの職場や学校、家庭といった日常の社会生活においても、いさかいや思い煩うことが絶えない。それは私たち人間が、それぞれに身勝手な善悪の基準で振舞っているからである。一部の支配者や政治家が引き起こす戦争、有利な側の一方的な見方が起こす差別、健常者による障害者に対する差別、加害者側の偏った思考によって起こる殺人事件、インターネットやSNS上で蔓延する誹謗中傷、お年寄りから財産を搾取する悪徳な業者、家庭や身内関係の間で起こるいさかい。すべて自分たちの都合や、身勝手な善悪の基準で引き起こる悪である。まさに十悪五逆の私たちである。釈尊は、このような私たちのために真実の善悪の基準である八正道、すわなち①正見（かたよらない見方）・②正思惟（かたよらない考え方）・③正語（かたよらない言説）・④正業（正しい行為）・⑤正命（正しい生活）⑥正精進（正しい努力）⑦正念（正しい思念）⑧正定（正しい禅定）、また十善業（不殺・不盗・不邪婬・不妄語・不両舌・不悪口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見）の教えを示されたのであるが、そのいずれも修められない私たちである。だからこそ、せめて次生（来世）では極楽浄土へ往生することによって、すなわち六道輪廻からの解脱を目指すべきことをお伝えしましょう。

また、悪については『無量寿経』に説かれる五悪段の内容に触れてもよいでしょう。それぞれの内容は、第一悪は殺生、互いに傷付け合うこと、弱肉強食の悪、第二悪は偸盗、物惜しみ、騙し合うこと、第三悪は邪婬から生じる殺戮強奪、第四悪は妄語、悪口、両舌、綺語といった口業の過、第五悪は飲酒によって

引き起こされる様々な悪業を説く。

**【参考】**

・「不善の名」についていくつかの翻訳を挙げておく。

［坪井俊英師訳（漢訳より）］

「もしわたしが仏になったならば、わたくしの構える浄土の人びとのなかに、小乗の修行者や不良や悪人や、またはそのような名前もない国にしたい。もしこれがあるなれば仏にはなりません。」（坪井俊英『浄土三部経概説』法藏館・一九五頁）

［梵文和訳］

「世尊よ。もしも、わたくしが覚りを得た後に、かの仏国土の生ける者どもの間に、〈悪い者〉という名称だけでもあるようであったら、その間はわたしくは、〈この上ない正しい覚り〉を現に覚ることがありませんように」（岩波文庫『浄土三部経』・三七頁）

「世尊、もしも私が菩提に到達したとき、かの仏国の有情たちのなかに、悪いものの名前だけでもあるようであったら、そのあいだは、私はこの上ない完全な正覚をさとることはないでありましょう（「大乗仏典六・浄土三部経」・二五頁）

・川合梁定『浄土三部経和解』参照。

・『新纂浄土宗大辞典』「不善」「八正道」「十善」「五悪」の項参照。

（執筆者：北條竜士）

## 3―18「第十七、諸佛称揚願」

### ①〈讃題〉

「もし我れ佛を得たらんに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟（しさ）して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ」（第十七諸佛称揚願、聖典一・二二七頁）

### ②〈現代語訳〉

「私が仏となる以上、あらゆる世界の無数のみ仏がお一人でも私を称讃せず、私の名を称えないようなことが、〔万が一にも〕あるならば、〔その間、〕私は仏と

なるわけにはいかない」（現代語訳・五〇頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第十七願、称名、称讃・讃嘆・称揚、聞名／年回法要、仏名会、十夜会、念仏会等

**④〈キャッチフレーズ〉**

「阿弥陀様を称（たた）えぬ仏なし」

「阿弥陀様の一切衆生救済の願い」

「阿弥陀様を敬い讃嘆してお念仏」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・咨嗟…『随聞講録』に「咨は讃なり。嗟は嘆なり」[110]とあり、讃嘆する（ほめたたえる）事。

**⑥〈解説〉**

・四十八の誓願のうち第十七番目の願。四十八の誓願の中で三願ある摂法身願の一願[111]。十方世界のすべての諸仏が阿弥陀様を称揚（讃嘆・称讃）することから「諸佛称揚（しょぶつしょうよう）の願[112]」という。『随聞講録』に「六八願の中に此の願、最も最要なり[113]」とあるように四十八願の誓願中でこの願は極めて重要な願であるといえる。というのも、この願が成就しているからこそ、お釈迦様は『浄土三部経』を説かれ阿弥陀様を称讃し、その中の一巻『阿弥陀経』では、六方の諸佛が阿弥陀様を称讃しながら本願の誤りなきことを証明しているのである[114]。

つまりこの願の成就によって、すべての世界で阿弥陀様の御名とその功徳を聞くことが可能となるのである[115]。今現に、私たちが、阿弥陀様の御名を聞き（聞名）、往生を願って（願往生）お念仏をお称えする（称名）という縁に巡り遇えているのもこの願が成就したお陰といえるのである[116]。

・願成就文①（義山[117]）は、「無量寿佛の光明顕赫にして、十方を照耀す。諸佛の国土に、聞こえずということなし。ただ我れ今、その光明を称するのみにあらず。一切の諸佛・声聞・縁覚・諸もろの菩薩衆も、咸く共に歎誉したまうこと、またかくのごとし」（聖典一・二三七頁）である。／「無量寿仏の光明は眩く輝き、

あらゆる世界を照らし、諸々の仏の世界において〔その光明への称讃が〕聞こえない所はない。今、私〔釈尊〕だけがその光明を称讃しているのではなく、あらゆるみ仏や声聞や縁覚、そして諸々の菩薩たちもみな同じように称讃しているのである」（現代語訳・七〇頁）。

※あらゆる世界の声聞・縁覚・菩薩も称讃しているところに注目したい。

・願成就文②（義山[118]）は、「十方恒沙の諸佛如来、皆共に無量寿佛の威神功徳の不可思議なることを讃歎したまう」（聖典一・二四九頁）である。／「〔だからこそ〕あらゆる世界にまします、ガンジス河の砂の数にも等しい様々なみ仏方は、こぞってみな無量寿仏の強大な力という人知の想像を絶した功徳を称讃するのである」（現代語訳・一〇〇頁）。

・願成就文③（義山[119]）は、「佛、阿難に告げたまわく。無量寿佛の威神極まりなし。十方世界の無量無辺不可思議の諸佛如来、称歎したまわずということなし」（聖典一・二五一頁）である。／「〔さて〕釈尊が阿難に〔次のように〕仰せになった。「無量寿仏が具える強大な力には際限がない。〔だからこそ〕あらゆる世界に数えても数えても限りなくおられるみ仏方は、〔無量寿仏を〕褒め讃えないということがない」（現代語訳・一〇三頁）。

### ⑦〈法話のポイント〉

・阿弥陀様の一切衆生救済の願いを受け取らせていただく

阿弥陀様は当願にあるように、すべての仏様から称讃されることを願われた。それは阿弥陀様という仏様が一切の衆生が救われる本願念仏をすべての世界に隈なく弘め、生きとし生けるものすべてを救い取りたいと願われているということである。如何に阿弥陀様が私たち衆生に対して慈悲深い仏様であるのかをお伝えしたい。

・お念仏のみ教えに出遇えたのもこの願のお陰

解説でも述べたが、この願が成就しているが故に、

お釈迦様等の諸仏によって阿弥陀様の御名が十方の世界を超えて聞えている。[120] この願がなければ、お釈迦様が阿弥陀様を称讃せずに、浄土三部経を説かず、私たちが阿弥陀様の御名を聞かず、[121] お念仏のみ教えに出遇えなかったはずである。当願が如何になくてはならない願であるか、有難い願なのかをお伝えしたい。

・お釈迦様をお手本として法を説く

お釈迦様が阿弥陀様を称讃されながらお念仏のみ教え（『浄土三部経』）を説かれたように、私たち僧侶も法話の際には、阿弥陀様を称讃してお念仏のみ教えを説きたいところである。

・阿弥陀様を称讃し、お念仏をお称えすることを勧める

聴衆も阿弥陀様を称讃しながら、お念仏をお称えするようにお勧めしたいところである。それは、四修の一つである恭敬修を勧めることにもなるであろう。

**【参考】**

・解説等を書くにあたり、了慧や義山等の注釈書に加えて次の論文も参考にした。

袖山榮輝「『無量寿経』光明歎徳章と『阿弥陀経』―いわゆる「称讃」と「阿弥陀仏」―をめぐって」（『佛教文化研究』五三、浄土宗教學院、二〇〇九）。

（執筆者：岩井正道）

## 3―19「第十八、念佛往生願」

**※本稿は、「ただ五逆と誹謗正法とを除く」に注目して作成した。**

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、十方衆生、至心に信楽して、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とを除く」（第十八念佛往生願、聖典一・二二七頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔誰であれ〕あらゆる世界に住

むすべての人々がまことの心をもって、深く私の誓いを信じ、私の国土に往生しようと願って、少なくとも十遍、私の名を称えたにもかかわらず、〔万が一にも〕往生しないというようなことがあるならば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない。ただし五逆罪を犯す者と、仏法を謗る者は除くこととする」（現代語訳・五〇頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第十八願、選択本願念仏、超世の願、王本願、往生、十念、称名、五逆、誹謗正法／十夜会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「悪人が救われてもいいの？」

「本当に悪人が救われてもいいの？」（井野周隆）

「世間のものさし、仏のものさし（まなざし）」（井野周隆）

「罪を憎んで人をきらわず」（井野周隆）

「罪人なお生まる、いわんや善人をや」（宮入良光）

**⑤〈語義・用語解説〉**

・五逆…五無間業ともいう。犯すと無間地獄に堕ちるという、最も重い罪悪。『倶舎論』一八には、殺母（母を殺す）、殺父（父を殺す）、殺阿羅漢（聖者を殺す）、出仏身血（仏の身体を傷つける）、破和合僧（教団を分裂させて乱す）と説かれている。法然上人は「正如房へ遣わす御文」の中で、

また五逆罪と申して現身に父を殺し母を殺し悪心をもて仏を殺し諸宗を破し、かくのごとく重き罪を造りて、一念懺悔の心もなからん、その罪により て、無間地獄に堕ちて多くの劫を送りて苦を受くべからん者[122]

と記されているので、上人の解釈も『倶舎論』と同じであろう。

その『倶舎論』一八には、「父母を害するは是れ恩田を棄つるなり」とあり、どの様な恩かといえば「身を生ずるの本なるが故なり」とある。また、「徳田とは、謂はく、余の阿羅漢等なり。諸の勝徳を具し、

及び能く〔他の勝徳を〕生ずるが故なり。徳の所依を壊するが故に逆罪を成ずるなり」とある。[23] 父母には大恩があり、阿羅漢・仏・教団は徳を生み出す存在だからこそ、害すれば必堕無間となるのである。また『観経疏』序分義には、三福の実践行をお示しになるところで、

〔三福の中の〕第一の「孝養父母」とは、これは一切の凡夫はすべて縁によって〔この世界に〕生を享けることを明かしている。〈中略〉ただ〔それぞれの〕縁が互いに相寄って誕生するということは、つまり父と母がいる〔ということである。〕父と母がいるのであれば、〔この父と母に対して〕大恩がある。〈中略〉身体を得るということは、〔つまり〕自身の〔これまでの〕輪廻の中における行為の積み重ね〔業識〕を内なる因とし、〔さらに〕父の精と母の血を外の縁とすることである。〔この〕内なる因と外の縁とが結びつくことで、この身があることとなる。このことから父と母に対する恩は重いのだ。〈中略〉また父と母は、この〔娑婆〕世界において福徳を生み出す究極〔の存在〕である。〔また〕仏は、覚りの世界において福徳を生み出す究極〔の存在〕である。[24]

とあり、父母は大恩ある存在であり娑婆における福田の極み、仏は覚りの世界における福田の極みであるとお示しである。また法然上人は「我が身の人となりて往生を願い念仏する事は、偏に我が父母の養い立てたればこそあれ」[25]と、父母への大恩を説いている。

・誹謗正法…正法すなわち仏法を誹謗すること。謗法または破法、断法ともいう。主に大乗経典に対する誹謗を意味する。

『往生論註』には、

問うて曰く、何等の相か是れ誹謗正法なるや。答えて曰く、若し仏無く、仏の法も無く、菩薩無く、菩薩の法も無しと言わん。是の如き等の見、若しは心に自ら解し、若しは他に従いて受けて、其の

心、決定するを皆誹謗正法と名づく。[126]

とあって、「誹謗」とは仏法僧の三宝の存在を完全に否定することをいう。これは単にみ教えをけなし罵るということではなく、法宝を壊すことであり、縁起や因果といった道理および自身が存在する理をも否定することとなろう。

また誹謗正法は、五逆罪を超えて最も重い罪になるという。『往生論註』にはその理由として、

若し諸仏菩薩世間出世間の善道を説きて衆生を教化したまうを無くする者、豈に仁義礼智信有ることを知らんや。是の如きは世間一切の善法、皆断じ、出世間一切の賢聖、皆な滅す。[127]

と記され、正法および仏菩薩の否定は、世間一切の善法と出世間一切の賢人聖人を断滅することになる。ゆえに「五逆罪は正法を無くするより生ず[128]」とし、正法など無いという誤った見解から五逆罪が生じることを示している。

## ⑥〈解説〉

・「王本願」（我らに最も親しい行であり、四十八願の本体である）

『選択集』第六章には、「およそ四十八願、皆本願なりといえども、殊に念仏を以て、往生の規と為す。故に善導の『釈』に云く、〈弘誓多門にして四十八なれども、偏に念仏を標して、最も親しとす。人能く仏を念ずれば、仏また念じたまう。専心に仏を想えば、仏人を知りたまう[129]〉」と理由を挙げて、「故に知んぬ。四十八願の中に、すでに念仏往生の願を以て、本願の中の王と為す」（聖典三・一三五頁）と示されている。また「逆修説法」三七日においては、「其の四十八願の中に第十八の念仏往生の願を以て本躰とするなり[130]」とある。

・願成就文①（義山[131]）は、巻下の「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜して、乃至一念、至心に廻向して、かの国に生ぜんと願ずれば、すなわち往生を得て、不退転に住す。ただ五逆と正法を誹謗

するとを除く」（聖典一・二四九頁）である。／「〔そして、それらの世界の〕あらゆる人々が〔諸仏によって讃えられる無量寿仏の〕名を耳にして、〔自らもその仏に〕想いを募らせ、〔その仏に〕夢中になって、たとえ一遍であっても念仏を称えて、心の底から全身全霊を込めて、かの〔極楽〕世界に往生したいと願うならば〔命終の後には、ただちに〕直接〔極楽世界への〕往生が叶い、覚りの境地に至るまで退転することはない。ただし〔よく心得よ〕。五逆罪を犯した者と仏の教えを謗る者はその限りではない」（現代語訳・一〇〇頁）。

・願成就文②（義山[132]）は、巻下の「その佛の本願の力、名を聞きて往生せんと欲すれば、皆悉くかの国に到って　自ずから不退転に到る」（聞名得益偈、聖典一・二五三頁）である。／「かの〔無量寿〕仏の本願が〔実現し〕／その力〔を発揮しているからこそ〕／その仏の名を聞いて往生を願う〔者は〕／みなことごとく〔極楽世界に到達して〕／〔覚りを得るまで仏道から〕退転することのない境地に／知らぬ間に達するのである」（現代語訳・一一一頁）

・抑止門と摂取門（『新纂浄土宗大辞典』参照）

弥陀化身善導大師は『観経疏』散善義において、

この義仰いで抑止門の中に就いて解せん。四十八願の中に、謗法と五逆とを除けるがごときは、然るにこの二業はその障さわり極めて重し。衆生もし造れば、直に阿鼻に入る。歴劫周憧すとも、出ずべきに由し無し。ただ如来、その、この二の過を造らんことを恐れて、方便して止めて往生を得ずと言う。またこれ摂せざるにはあらず。また下品下生の中に、五逆を取って謗法を除くことは、その五逆はすでに作れり。捨てて流転せしむべからず。還って大悲を発おこして摂取して往生せしむ。然るに謗法の罪はいまだ為らず。また止めてもし謗法を起さば、すなわち生ずることを得ずと言う。これは未造業について解す。[133]

と記し、十八願の「唯除五逆誹謗正法」は「未だ悪

を造らない者」（未造悪）を抑止するために説かれたものと示し（抑止門）、また『観経』下品下生の文[134]を受けて「已に五逆や謗法罪を造った者」（已造悪）であっても阿弥陀仏の大慈悲によって摂取されることを示している（摂取門）。また『法事讃』上には、「仏願力を以て五逆と十悪と罪滅して生ずることを得。誹謗と闡提と廻心して皆往く[135]」とあり、誹謗の罪を犯した者や闡提（仏の教えを信じず、成仏する因縁をもたない者）でも廻心し念仏すれば往生はかなうとしている。

ちなみに、聖光上人は『西宗要』五四「唯除五逆事」（浄全一〇・二一七頁上）において、抑止門が釈尊によるものなのか法蔵菩薩によるものなのか問い、法然上人からの伝聞として法蔵菩薩の抑止門であると結論づけている。一方、良忠上人は『散善義略鈔』（浄全二・六一〇頁下）において阿弥陀仏の抑止であるとするが、『伝通記』散善義記三（浄全二・四二九頁下）においては、抑止摂取とも釈尊によるものとした上で阿弥陀仏の抑止でもあるとしている。

**⑦〈法話のポイント〉**

・五逆罪は、仏教の基本として「無間地獄に堕ちて多くの劫を送りて苦を受[136]」けることが避けられないほどの罪業であることをお伝えする。十八願文によれば、それは往生の妨げとなるほどである。

・特に「殺父母」に限ってみてみると、まずは**⑤〈語義・用語解説〉**に記したような父母の大恩を伝え、今一度この世に生を受けたことについて思い巡らしていただくのがよかろう。（例えば『登山状』のお言葉〈『元祖大師御法語』前篇第一「難値得遇」〉などをお伝えする）

そのうえで、この娑婆はもちろん流転三界中に恩愛の絆は断ちがたいものであることをお伝えする（「報恩偈[137]」参照）。そして家族の絆といえば聞こえはいいが、現実は愛憎悲喜こもごもである。『無量寿経』に「世間の人民・父子・兄弟・夫婦家室・中外の親属、まさに相敬愛して、相憎嫉することなく、有無相通

じて、貪惜を得ることなく、言色常に和して、相違戻することなかるべし」[138]とのお示しがあるのは、家族親族といった近しい間柄だからこそ「相敬愛」することが難しいからであろう。このお示しのすぐ後には、哀しいかな、「世間の事、更に相患害す」（世間を生き抜くということは、〔どこかで〕互いに傷つけ合うということだからである）[139]とあるのだ。遺産相続における骨肉の争いや老老介護による憔悴の果ての事件など、殺人事件の約半数が親族間といわれる現代日本である。また「毒親」や「親捨て」のように、親子であればこそ互いに傷つけ合うという現実がある。我らにとっても機縁によっては全く他人事ではない問題なのである。

・誹謗正法について、法然上人は『一百四十五箇条問答』の六七番目において、

一つ、誹謗正法は五逆の罪に多く増りと申しそうろうは、まことにてそうろうか。

答う、これはいと人のせぬことにてそうろう。[140]（これはあまり人がすることではありません）

とお答えになられた。話し方は控えめかもしれないが、およそ人が為すべきことではないという誠に強い御心が感じられる。**⑤〈語義・用語解説〉**にあるように、「誹謗正法」は単に仏法を罵るということではない。三宝の完全な否定であり、世間一切の善法と出世間一切の賢人聖人を断滅するほどのこととなる。道徳や倫理観が益々廃れていくのではないかと不安が募る世の中で、まずは因果の道理や生死輪廻といった仏教の世界観を分かりやすくお伝えすることが必要であろう。

**【話材】**

「情けは人の為ならず」（因果の道理・善因楽果）

「人を呪わば穴二つ」（因果の道理・悪因苦果）

「袖すり合うも多生の縁」（生死輪廻）

そのうえで、「津戸の三郎入道へつかはす御返事」にあるように、

この弥陀の名号を称えて永き生死を忽ちに截り常

住の極楽に往生すという頓教の御法を謗り滅ぼして、この罪によりて永く三悪道に沈むといえるなり。かくのごときの人には大地微塵劫を過ぐとも、永く三悪道の身を離るる事を得べからずといえるなり。[141]

とのお示しを胸に止めたい。

・しかし阿弥陀仏（法蔵菩薩）は、「〔誰であれ〕あらゆる世界に住むすべての人々（十方衆生）」を救わんがために「念仏往生の願」をお建て下さったのである。大慈悲のみ心[142]ゆえに、我らが五逆（および誹謗正法）の罪を造ること及びその報いを恐れ、あえて「ただし五逆罪を犯す者と、仏法を謗る者は除くこととする」と付して述べられたのである（抑止門）。これは念仏往生乃至成仏へと至る巧みな手立てであり、五逆謗法罪の者をも漏らさず救い摂る故（摂取門）、諸仏諸菩薩の誓願を超えた、「超世の願」と呼ばれるのである。そして我らにとって最も親しい行であり四十八願の本体である故に、法然上人は「王本願」とお示しくださったのだ。

※『一百四十五箇条問答』（六五番目）

一つ、五逆十悪、一念十念に滅びそうろうか。

答う、疑いなくそうろう。[143]

・もちろん仏教徒として、法然上人がお示しくださるように、各々できる限りの廃悪修善に努めるべきことを、あわせてお伝えするべきであろう。

罪をば十悪五逆の者なお生まるると信じて小罪をも犯さじと思うべし。[144]

諸悪莫作、衆善奉行は、三世の諸仏の通戒なり。善を修するものは善趣の報をえ、悪を行ずる者は悪道の果を感ずという。この因果の道理をきけどもきかざるがごとし。はじめていうにあたわず、しかれども分にしたがいて悪業をとどめよ、縁にふれて念仏を行じ往生を期すべし。[145]

・そして父母等への真の報恩を問うならば、お互い凡夫の身でありながらも、共に阿弥陀仏の光明に照らされながら仏教徒としてこの世を歩み（「ともいき」）、

命終の後は共に極楽に往きて生まれて仏道を成ずる身である（「共生極楽成仏道」、「総願偈」参照）と決着することが肝要である。そのためにも、日々のお念仏をお勧めすることが大切である。

【付記（私案）】

※第三十五願（女人往生願）について

・第十八念仏往生願において対象を「十方衆生」としながら、なぜ別に「女人往生」の願を建てられたのか。

・「十二問答」の中で法然上人は、「十方衆生のことばの中に有智無智、有罪無罪、善人悪人、持戒破戒、男子女子、三宝滅尽の後の百歳までの衆生みな籠るなり」[146]と仰っておられる。

・しかし自他の区別がある以上、私たち衆生は身勝手な欲望ゆえに、不平等な見方（偏見）から差別を生んでしまうのである。

「欲にひかれ、好みにとらわれている人は、どうして自分の偏見を超えることができるだろうか。かれは、みずから完全であると思いなしている。かれは知るに任せて語るであろう」[147]（『スッタニパータ』）

・無意識の「偏見」。

【話材】公益社団法人ACジャパンのCM[148]（ラジオ版）

（包丁で野菜を切る音…）

「キッチンで夕食の支度をする人がいます」

（オフィスの環境音…）

「オフィスで部下の資料に目を通す人がいます」

（レストランの環境音…）

「夜景の見えるレストランで支払いをする人がいます」

（黒板にチョークで字を書く音…）

「パイロットになる夢を発表する子どもがいます。想像したのは男性の姿ですか？女性の姿ですか？無意識の偏見に気づくことから、はじめませんか」

・「常識」に囚われた我ら。

【話材】アインシュタインの言葉

COMMON SENSE IS THE COLLECTION OF PREJUDICES ACQUIRED BY AGE

EIGHTEEN.

（常識とは、一八歳までに身につけた偏見のコレクションのことをいう）

・おそらく、法蔵菩薩がご覧になった二百一十億の世界の中には、衆生に何らかの性差があり、煩悩によって起こる不平等な見方（偏見）によって、差別が存在する世界が多かったのではないか。そうした偏見や差別は、「常識」という名のもとに、そして本人たちも気が付かぬうちに、自他および集団社会を縛るのである。こうした「常識」によって、「私〔の性〕は、救いにあずかれない」と、第十八願に疑いを持って苦しむものも現れよう。そうした往生への疑いを生じさせないための大慈大悲の顕れが、第三十五願である。

・『無量寿経釈』には「或いは道俗有って曰く、女人浄土に生ずることを得ずと云うは此れは是れ妄説なり信ずべからず。云云。是れ則ち女人の苦を抜て、女人楽を与へる慈悲の御意の誓願利生なり」[49]とある。

※また、第三十五願を第三十六常修梵行願との関係で捉える見方も参照のこと。

・『【現代語訳】浄土三部経』の第三十五願現代語訳。

・袖山榮輝「『無量寿経』第三十五願考察の一視座」（『高橋弘次先生古稀記念論集　浄土学佛教学論叢』第二巻、山喜房佛書林、二〇〇四）

（執筆者：布教研究班）

## 3―20「第十九、来迎引接願」

### ①〈讃題〉

「もし我れ佛を得たらんに、十方の衆生、菩提心を発し、諸もろの功徳を修し、至心に発願して、我が国に生ぜんと欲せんに、寿終の時に臨んで、もし大衆の与に囲繞せられて、その人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ」（第十九来迎引接願、聖典一・二二七頁）

### ②〈現代語訳〉

「私が仏となる以上、〔誰であれ〕あらゆる世界に住

むすべての人々が覚りの境地を求め、様々な功徳を積み、まことの心をもって私の国土に往生したいとの願いを発したにもかかわらず、〔その者が〕命を終えようとする時、〔万が一にも私が〕多くの聖者たちとともにその人の前に現れ出ないようなことがあるならば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・五一頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第十九願、来迎引接、囲繞、臨終／通夜、彼岸会、十夜会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「仏さまのお迎え」

「仏さまの道案内」

「握手の宗教」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・菩提心…悟りを求める心。法然上人は菩提心を往生のための行業として、廃捨した。法然上人は菩提心について、『三部経大意』の中で「浄土宗ノ心ハ浄土ニ生レムト願ルヲ菩提心ト云ヘリ」[150]と述べ、『逆修説法』二七日でも、「今、浄土宗ノ菩提心トは、先ズ浄土ニ往生シテ、一切衆生ヲ度シ、一切ノ煩悩ヲ断ジ、一切ノ法門ヲ悟リ、無上菩提ヲ證ント欲スル之心也」[151]とあり、浄土宗の菩提心とは、浄土に往生を願う願往生心であると規定している。

・寿終…臨終、命が終わる。

・囲繞…周りを取り囲む。『選択集』に「また前の二十五の菩薩等とともに、百重千重に行者を囲繞して、行住坐臥、一切の時処を問わず、もしは昼、もしは夜、常に行者を離れたまわず」[152]とあり、仏、菩薩が、その人を取り巻くこと。

**⑥〈解説〉**

・願名について

四十八の誓願のうち第十九番目の願。第十九願は、「来迎引接願」、「聖衆来迎願」、「臨終現前願」、「行者命終現前導生願」などと称される願文である。[153]

ちなみに浄土宗では、了慧道光の『無量寿経鈔』の

呼称に基づき、第十九願を「来迎引接願」と呼び習わしている。

・願成就文（義山[154]）は、巻下の「佛、阿難に告げたまわく。十方世界の諸天人民、それ至心あって、かの国に生ぜんと願ずるに、凡そ三輩あり。その上輩の者は、家を捨て欲を棄てて、沙門となり、菩提心を発し、一向に専ら無量寿佛を念じ、諸もろの功徳を修して、かの国に生ぜんと願ず。これ等の衆生、寿終の時に臨んで、無量寿佛、諸もろ大衆と与に、その人の前に現じたまう。すなわちかの佛に随って、その国に往生し、すなわち七宝華の中において、自然に化生す。不退転に住して、智慧勇猛、神通自在なり。この故に阿難、それ衆生あって、今世において、無量寿佛を見たてまつらんと欲さば、まさに無上菩提の心を発して、功徳を修行してかの国に生ぜんと願ずべし〈中輩・下輩は省略〉」（聖典一・二四九―二五一頁）である。／「〔そこでまた〕釈尊が阿難に仰せになった。『あらゆる世界の天人や人々の中で、心の底から〔無量寿仏の極楽〕世界に往生したいと願う〔者は〕、おおよそ〔次の〕三通りに分けられる。〔まず〕その〔第一は〕上輩の者〔である。彼ら〕は出家して諸々の欲望を捨て去ろうと〔人里離れた場所で修行に励む〕沙門となり、覚りを目指す心を発した上で、ただひたすら無量寿仏〔を慕ってそ〕の名を称え、〔さらに〕諸々の功徳を積んで〔極楽〕世界に往生したいと願う〔者たちである〕。こうした者たちが命尽きようとする時、無量寿仏は〔極楽の〕聖者たちとともに、その人の前に姿を現すのである。〔そして〕すぐに〔無量寿〕仏〔の後ろ〕に付き随って〔極楽〕世界に往生し、〔その極楽の池の〕七種の宝玉でできている蓮の華の中に忽然と生ずるのだ。〔そして〕覚りに至るまで決して退転することのない境地に立って〔歩を進め〕、果敢に智慧を究め、神通力を自在に駆使するのである。〈中輩・下輩は省略〉」（現代語訳・一〇一―一〇三頁）。

・第十九願の内容について

第十九願の内容は、「あらゆる世界の衆生が菩提心を発し功徳を修して至心に往生を願うならば、その人の命終のときに聖衆と共に来迎するようにしたい」という意である。しかし、原文の内容だけでは、臨終に阿弥陀仏が行者の前に現れるまでに留まり、願成就文の「これ等の衆生、寿終の時に臨んで、無量寿佛、諸もろ大衆と与に、その人の前に現じたまう。すなわちかの佛に随って、その国に往生し、すなわち七宝華の中において、自然に化生す」の御文によって、来迎引接へとつながるのである。

法然上人も、「三部経大意」において、「次ニ三輩往生ノ文アリ。是ハ第十九ノ臨終現前ノ願成就ノ文也[155]」と述べ、さらに「臨終ノ時ニミツカラ菩薩聖衆囲繞シテ、其人ノ前ニ現セムト云フ願ヲ建テ給ヘリ。第十九ノ願是也[156]」と述べていることから、第十九願と三輩段との関連が言える。また、第十九願と来迎引接との関連についても法然上人は、「逆修説法」第一七日において「其来迎引接願者、即是四十八願中第十九願也[157]」と述べていることから、第十九願の内容は「来迎引接」と見做すことができるのである。

了慧道光の『無量寿経鈔』によると、「来迎引接願」が誓われた訳は、凡夫が臨終の際に、正念を得させるためにあるという。[158]

・『観経』、『阿弥陀経』における来迎引接の記述ついて

来迎引接について『観経』上品上生段には、「かの国に生ずる時、この人、精進勇猛なるが故に、阿弥陀如来、観世音・大勢至・無数の化佛・百千の比丘・声聞大衆・無数の諸天・七宝の宮殿と与なり。観世音菩薩は金剛台を執り、大勢至菩薩と与に行者の前に至り、阿弥陀佛は大光明を放って、行者の前を照らし、諸もろの菩薩と与に手を授けて迎接したまう[159]」とあり、『観経』所説の九品段の中に、九品中、中品下生、下品下生を除く、残りの七品位において、内容は違えども来迎引接についての記述がみられる。

また、『阿弥陀経』にも、「その人命終の時に臨んで、阿弥陀佛、諸もろの聖衆とともに、現にその前に在す。この人終わる時、心顛倒せず、すなわち阿弥陀佛の極楽国土に往生することを得」[160]とあり、来迎引接が説かれている。

## ⑦〈法話のポイント〉

### ◆法話のポイントと法話例

・法然上人の来迎についてのお言葉は、多くの遺文に説かれているが、特に注目すべき点は、当時の仏教界において常識であった「臨終→正念→来迎→往生」という死の過程に対し、新たに「臨終→来迎→正念→往生」という死の過程を提唱した点にある。つまり、法然上人は、来迎に対する捉え方を「正念来迎」から「来迎正念」に百八十度転換させたのである。

法然上人は来迎の働きについて、『逆修説法』第一七日[161]において以下の三義を挙げている。

i、行者を正念に至らしめるため

ii、極楽浄土へ道案内するため

iii、魔事を対治するため

この三義のうち、法然上人が来迎の働きとして重要視されたのはiの「行者を正念へと導くため」であった。なぜなら、我々凡夫は死に臨んで、境界愛（妻子・親族・家屋・財産等に対する執着心執着心）・自体愛（自己の身命に対する執着心）・当生愛（命終の後に自らの生がどうなるのかわからない不安）という三種の愛心が起こるからである。しかし、法然上人は、この三種の愛心を滅するために阿弥陀仏が来迎するとして、したがって心が乱れることなく、心が顛倒することなく、正念を得て死に臨むことができるのである。このように死に臨んで三種の愛心が起こることは、現代の我々にも通じるところであり、阿弥陀仏が来迎するからこそ、我々の死に対する恐怖心や不安、虚無感に苦しめられることなく、心穏やかに死を迎えられることを強調すると同時に、だからこそ臨終に向けて常平生から念仏を称えることの重要性を伝えることも忘れてはならない。

・『法然上人行状絵図』巻三七において、法然上人の臨終の様子を伝える中で来迎について以下のような記述がある。

十一の辰時に、上人起き居給いて高声念仏し給う。聞く人皆涙を流す。弟子等に告げて宣わく、「高声に念仏すべし。弥陀仏の来り給えるなり。この御名を唱うれば、一人として往生せずという事なし」とて、念仏の功徳を誉め給う事、恰も昔の如し。「観音・勢至菩薩、聖衆現じてまします。拝み奉るや」と宣えば、弟子等「拝み奉らず」と申す。これを聞き給いて、「愈々念仏すべし」と勧め給う。[162]

法然上人は往生される二週間前の建暦二年（一二一二）の一月十一日に、阿弥陀仏や菩薩衆の来迎があることを弟子達に告げ、来迎の可視について弟子達に尋ねている。残念ながら弟子達には来迎の姿を見ることはできなかったが、法然上人の眼には、確かに来迎の姿が映っていたのである。この法然上人の来迎の場面を紹介することは、現代においても看取る側には来迎の姿が見えなくても、この世を旅立つ往生人の眼には間違いなく来迎の姿が映っていることを説く確証となるであろう。

・「阿弥陀二十五菩薩来迎図」などの来迎図のコピーを紹介することで、往生人が阿弥陀仏や菩薩衆に囲まれて、極楽浄土に導かれる様を視覚的に訴えることができ、来迎の有難さを伝える一助となろう。その際に、来迎図のコピーであっても、そこには阿弥陀仏や菩薩衆が描かれているので粗末に扱わず、大切に保管するよう注意喚起を促す。

・来迎のことを我が国では「お迎え」ともいうが、その「お迎え」の事例について、最古は平安時代中期に慶滋保胤が編纂した『日本往生極楽記』に見られる。その後、「お迎え」の事例は、数々の往生伝の中で描かれ、現代まで語り継がれている。

また、この「お迎え」が昨今、医学の世界でも「お迎え現象」と呼ばれ、注目を浴びている。その背景

には、長年、仙台を中心に末期がんの患者を在宅で看取ってきた在宅緩和ケア医の故岡部健医師の影響が大きい。岡部医師は、二千人以上を看取ってきた経験から、「お迎え」があることを医学の世界でも訴えてこられた。実際に、岡部医師は「お迎え」について以下のような事例を紹介している。

あれはパーキンソン病で四肢に麻痺があった八十歳の女性だった。定義如来（定義如来とは仙台特有の呼び名で阿弥陀仏の別名を指す。仙台には、定義山信仰という山岳信仰があり、その山の麓に西方寺という浄土宗寺院があり、そのご本尊である阿弥陀仏のことを定義如来と呼んでいる）のお札を飾っていたので、「定義山、よく行ったの」と声をかけたら「今でも定義山を信じて、お念仏をあげてるんです」と言う。それからしばらく経った頃、突然、こう言われた。

「小さな定義如来さんが見えるようになったんです」

お念仏をあげていると、定義如来の姿が小さく見えるようになったのだという。〈中略〉

「よかったね、最後に阿弥陀さんがお迎えに来てくれるといいね。定義如来さん見えるようになったんだからきっと来ると思うよ」

私がこう言うと、本当に嬉しそうだった。この瞬間に、私のターミナルケアは終わったようなものだ。家族もそれを聞いていて「よかったね、亡くなる時は阿弥陀さんがいいね」なんて話になったのだから、もう私が往診に行かなくてもいいのである。[15]

このように、岡部医師は多くの患者を看取った経験から「お迎え」があることを実感され、臨床の現場において、「お迎え」に勝る治療はないと述べておられたのである。このような、事例を示しながら、現在、「お迎え現象」といって医学の世界でも注目されていることを紹介すると、来迎を身近に感じてもらえるであろう。

・親鸞聖人は来迎について「臨終の来迎をまつものは、いまだ信心をえぬものなれば、臨終をこころにかけてなげくなり」[164]と述べ、また「臨終まつことなし、来迎たのむことなし」[165]と述べ、あまり重視していない。したがって、同じ念仏を旨とする浄土真宗では、来迎について積極的に説けないのに対し、浄土宗では来迎を説けることを強みとして、もっと世間一般にアピールすべきであろう。

**《十分法話例》**

「お迎えは　どこから来るのと　孫が聞く」

この川柳は、ある雑誌に七十代の女性が投稿されたものですが、おそらくこの女性がお孫さんの側で「早くお迎えにきてほしい」と何気なくおっしゃったのでしょう。この言葉を聞いたお孫さんが「おばあちゃんは、一体どこからお迎えに来るのだろうか」と不思議に思って尋ねたことが、そのまま川柳になったのです。「早くお迎えに来てほしい」、これは、よくお年寄りの方がおっしゃる言葉の一つですが、皆さんは、もしお孫さんから「どこから来るのと」と尋ねられてはっきり答えることができるでしょうか。正解を申しますと、まずここでいうお迎えの主語は、阿弥陀さまを指します。なら、どこから来るかというと、阿弥陀さまの世界、つまり西方極楽浄土です。

このように阿弥陀さまが極楽浄土から私たちの命が尽きる時、お迎えに来てくださることを「来迎」と申します。そして、阿弥陀さまが私たちと共に極楽浄土へと道案内してくださることを「引接」と申します。このことは、阿弥陀さまが第十九番目のご本願に「必ず迎えに行って、極楽浄土に導くぞ」とお誓いくださっているのです。その「来迎引接」に預かるためにも、まず口に南無阿弥陀仏と称えて頂きたいのです。

法然上人のお言葉にも来迎について、「ただ一向に念仏だにも申せば、仏の来迎は法爾の道理にて疑いなし」と出てまいります。つまり、ただひたすらに念仏を称えれば、阿弥陀さまの来迎は動かしようのない自然の道理だというのです。それはあたかも、太陽が東

から昇り、西へ沈んでいくように、水が上流から下流へと流れるように、火が下から上に燃え広がっていくのと同様に、阿弥陀さまの来迎も疑いようのない現象なのです。実際、法然上人も臨終の際に阿弥陀さまや観音菩薩さま、勢至菩薩さまから来迎を頂かれております。

法然上人は建暦二年（一二一二）正月二十五日、八十歳でご往生を遂げられたのですが、その往生される二週間前、法然上人の枕辺をお弟子さんたちが取り囲む中、法然上人がお弟子さん達に次のように語りかける場面がお伝記に記されております。

「お前達も大きな声で念仏するがよい。今ここに阿弥陀さまや観音菩薩さま、勢至菩薩さまがお迎えに来られ、お姿を現してくださっている。お前達も来迎の姿が見えておるか」

残念ながら、お弟子さん達の眼には何も見えなかったそうですが、法然上人の眼には間違いなく、阿弥陀さまや菩薩さまの来迎の姿が映っていたのです。

法然上人が、臨終の際にご覧になった来迎の様子を絵図に表しますと、このようになります（来迎図を紹介）。これは、総本山知恩院に所蔵されている国宝「阿弥陀二十五菩薩来迎図」、俗に「早来迎」と呼ばれる来迎図のコピーです。この来迎図の真ん中の上あたりに多くの菩薩さま達を引き連れているお方が阿弥陀さまです。ここには、阿弥陀さまをはじめ観音菩薩さま、勢至菩薩さまといった多くの菩薩さまが私たちのもとに一刻も早く駆けつけて救ってやろうとされている姿が描かれています。このように、阿弥陀さまが来迎してくださるからこそ、死の恐怖や不安に苛まれず、安らかな境地で最期を迎えることができるのです。つまり、お念仏を信仰する私たちもこのような中で最期を迎えていくのでありまして、単に極楽往生ということだけでなく、来迎ということが死に臨んだ時に、とても心強く感じられるのです。ですから、けっして暗い道をたった一人でトボトボと歩いて死出の旅に向かうのではなく、阿弥陀さまや菩薩さまに囲まれる中、極

楽浄土へと生まれてゆくのです。

ある先徳が、この来迎の姿からお念仏のみ教えのことを「握手の宗教」とおっしゃいました。その所以は、生前にお念仏を称えていた方であれば、命終わる時、阿弥陀さまが救いの御手を差し出し、私たちの手をギュッと握ってくださることから「握手の宗教」と表現されたのです。どうぞ、皆さん、阿弥陀さまが差し出された救いの御手を常日頃から離さぬよう、お念仏を共々に称えてまいりましょう。

（執筆者：井野周隆）

## 3―21「第二十、係念定生願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係けて、諸もろの徳本を植え、至心に廻向して、我が国に生ぜんと欲せんに、果遂せずんば、正覚を取らじ」（第二十係念定生願、聖典一・二二七頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔誰であれ〕あらゆる世界に住むすべての人々が〔仏としての〕私の名（名号）を聞いて、私の国土に想いを馳せ、〔そして〕様々な功徳を積み重ね、まことの心をもって〔それらの功徳を〕振り向けて、私の国への往生を望んだにもかかわらず、〔万が一にもそれが〕果たされないようなことがあるならば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・五一頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第二十願、係念、徳本、廻向／彼岸会、盂蘭盆会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「一つの目標に向かって励もう！」

「ゴールに向かって、ひた走れ！」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・係念…念を係ける。思いを一つのところに向ける。思いを向ける。

・徳本…功徳。善根。さとりの果をもたらすもととなる善根。
・廻向…廻し向ける。方向を転じて、ある対象に向けること。自己が行った善をめぐらしひるがえして自己のため、あるいは他人のために差し向けること。梵語 pariṇāma の訳で、自己の修めた善行・功徳をめぐらし転じて自らの悟りや一切衆生の悟りのために振り向けること。『無量寿経』の中で廻向の語が出るのは第二十願と巻下の一箇所のみである（聖典一・二二七、二四九頁）。
・果遂…果たし遂げる。目的を達成する。

**⑥〈解説〉**

・第二十願は四十八願中、第十八願と第十九願を一括りとし、合わせて「三願」と呼ばれる。法然上人は、第十八願を念仏する衆生は必ず往生することを誓う願とし（念仏往生願）、第十九願を第十八願における念仏の衆生を摂取し、必ず来迎することを誓う願とし（来迎引接願）、また第二十願は、第十八願の念仏行者が係念していれば必ず往生できることを誓う願とする（係念定生願）。つまり法然上人は、第十八願を中心として、その念仏往生の確実性が第二十願で強調され、第十九願で臨終時に阿弥陀仏の来迎が必ずあることを、これら三願によって解釈する。一方、法然上人門下では、長西は第二十願を「諸行往生願」と名づけ、諸行の報土往生を誓った本願であり、諸行が本願行であるとして諸行本願義を提唱した。また隆寛は第十九願を、聖道門の行者が縁にあって浄土門に帰し、三心をおこして往生を遂げることを示す願とし、第二十願は自力の念仏および諸行を行じている者が回心し、三心をおこして往生を遂げることを示す願とする。
ちなみに、第二十願に対応する願成就文は説かれないとされているが、『無量寿経』巻下に第十八願の成就文として「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜して、乃至一念、至心に廻向して、かの国に生ぜんと願ずれば、すなわち往生を得て、不退転

に住す。ただ五逆と正法を誹謗するとを除く」（聖典一・二四九頁）とあり、「其聞名号」と「至心廻向」の語が第二十願との関連を窺わせる。

**⑦〈法話のポイント〉**

・第二十願を法話の讃題として取り挙げる場合、願文中の「係念」と「廻向」の言葉を取り上げて法話の組み立てをするとよいでしょう。

・「係念」とは、念を係ける、思いを一つのところに向けることで、言うまでもなく、私たちにとっては阿弥陀さまの極楽浄土に念を係ける、思いを向けることであるから、十方世界に浄土は種々多くあるけれども、凡夫の往生が叶う極楽浄土だけに思いを係けるべきで　あることをお伝えしましょう。

関連する話材としては、安心起行の「起行」である「四修」のみ教えを取り上げてもよいでしょう（『元祖大師御法語』前篇第二三）。四修とは恭敬修、無余修、無間修、長時修の四種の行で、ただひたすらに極楽浄土を求める心を起こし、お念仏を相続するための態度・方法をいう。例えば、『西方要決』において無余修を説く中では、遠い異郷で辛苦を強いられている者が、故郷の父母のもとへ帰ることについて、片時も忘れることがないことを比喩に用い、常に極楽往生の思いをなすべきことを説いている（浄全六・六〇五頁）（要義問答、聖典四・三九三頁）。また、蓮生房（熊谷直実公）の「東行逆馬」の逸話を取り上げてもよいでしょう（勅伝二七、聖典六・四一五頁）。この逸話は蓮生房が京都より故郷の武蔵国熊谷へ馬に乗って下る際に、西に背を向けずに関東へ下ることができるように馬に逆さに跨って下向したというもので、念仏行者は常に西方極楽浄土に思いを係け、お念仏の相続すべきことを教示するものであり、私たちも蓮生房を見習うべきであることをお伝えしましょう。

ただし、「一枚起請文」に「三心四修と申すことの候は、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ううちにこもり候なり」とあるように、四修の行も

ただ専らお念仏を相続することに帰結することをお伝えしましょう。

**【参考】**

・『新纂浄土宗大辞典』「三願」「四修」「熊谷次郎直実」「回向」の項参照。

（執筆者：北條竜士）

## 3―22「第二十一、三十二相願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、国中の人天、悉く三十二大人の相を成満せずんば、正覚を取らじ」（第二十一三十二相願、聖典一・二二七頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔私の〕国土に住む人々や天人が、みな〔仏の身に具わるという〕三十二種類のすぐれた特徴を、〔万が一にも、たった一つでも〕具えないようなことがあるならば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・五一頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第二十一願、三十二相、菩薩、極楽浄土、慈悲の姿／通夜、年回法要、彼岸、仏教法話

**④〈キャッチフレーズ〉**

「極楽浄土でのお姿」

「仏さまのお姿」

「菩薩さまの証し」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・三十二相…仏の身体に備わっている三十二種類のすぐれた特徴。ここでは、紙面の都合上、『新纂浄土宗大辞典』によりその名称のみを列挙する。[166]

1足下安平立相　2足下二輪相　3長指相　4足跟広平相　5手足指縵網相　6手足柔軟相　7足趺高満相　8伊泥延腨相　9正立手摩膝相　10陰蔵相　11身広長等相　12毛上向相　13一一孔一毛生相　14金色相　15丈光相　16細薄皮相　17七処隆満相　18両腋下隆満相　19上身如獅子相　20大直身相　21肩円好相　22四十歯相　23歯斉相　24牙白相　25獅子頰相　26味中得上味相　27大舌相

28梵声相　29真青眼相　30牛眼睫相　31頂髻相　32白毛相

**⑥〈解説〉**

・四十八願のうち第二十一番目の願。極楽浄土の菩薩の姿として、仏の三十二相が備わることが説かれていることから「三十二相願」と呼ばれている。

・願成就文は『無量寿経』巻下の「阿難。それ衆生あって、彼の国に生ずる者は、皆悉く三十二相を具足す」（聖典三、二五六頁）である。／「ところで阿難よ。人々が〔極楽〕世界に往生したならば、誰もがみな〔仏の特徴である〕三十二相を具えることになる」（現代語訳・一一八頁）。

・とくにこの願の成就文は、『選択集』三で願成就の事例として第一「無三悪趣の願」とともに明示されている。[167]

**⑦〈法話のポイント〉**

・菩薩という立場になる

初期仏教経典である阿含経など、数多くの経典に説かれる三十二相は、まさに仏の象徴であり、その一つひとつを見れば、仏の慈悲や救済が表されている。その特徴を備えるということは、極楽浄土に往生した後には、他者を救済する側となることが示されているといえよう。つまり、往生した後には阿弥陀さまと共にこちらに残る多くの方々を救い導く、菩薩という立場へと至ることを示す大事な願であると受け取れる。この願を用いて、菩薩という存在はいかなる立場であるかということを説くこともできるだろう。[168]

・凡夫の下劣性と比較する

凡夫である私たちが極楽浄土で三十二相を得ることができるということから、至らぬ私たちを菩薩まで引き上げてくださるという本願力の絶大さを伝えることもできよう。三十二相は大悲のはたらきの結果、般若波羅蜜や布施等の結果として具わるとされている。[169] つまり、それを一気に具えることができるという本願力の尊さなのである。

・三十二相を話材とする

三十二相の中から一つひとつを取り上げて話材とすることも考えられる。仏像の見た目からわかりやすいもの（頂髻相、白毫相など）を取り上げる場合は、本尊など仏像を示しながら話すこともできる。前の項目で示したように本来、一つひとつ具わるものということを考えると、年回法要などでシリーズ化することも可能かもしれない。

例として、いくらか左記に上げてみる。

1足下安平立相（そくげあんびょうりゅうそう）

いわゆる扁平足と言われる相だが、踏まない土が無いということから、仏さまの平等救済の姿が表されている。

5手足指縵網相（しゅそくしまんもうそう）

手で水を掬う時、必ず指の間から僅かな水がこぼれてしまうものである。いわばその小さな隙間さえも無くすほどの仏さまの大慈悲の象徴がこの相である。

27大舌相（だいぜっそう）

古代インドで言葉の真実を証明するために舌を出すという風習があった。この相が表すのは、仏が説き示すものには決して嘘偽りがなく、真実であるということである。ちなみに、『阿弥陀経』では、諸仏が三千大千世界を覆う舌を出し、嘘偽りの無い阿弥陀仏への称讃が示される。

・話材として

○よく知られている書道の習熟法に「臨書」がある。名筆とされる古典を手本とし、その特徴をよく観察して書写することをいう。中でも、書聖と称される王羲之の作品は、書道を学ぶものにとっては、誰もが憧れ、その特徴を習得したいと臨書を志すものである。どのような世界でも、憧れの対象の特徴を得たいという気持ちが起こるのは当然なことだろう。仏教徒にとって、憧れを抱く対象は紛れもなく仏さまである。究極的な目標が仏に成るという教えだからこそ、同じような特徴を得たいということは仏教徒の基本といえよう。ただし、特徴そのものという

よりは、それに表されている慈悲の姿こそが、仏教徒としての憧れとなることも踏まえて伝えたい。仏教徒としての憧れである仏さまの慈悲のお姿を得ていくということもこの願の有り難さであり、お伝えするポイントになるだろう。

○『梁塵秘抄』に記される仏歌

「弥陀の御顔（みかお）は秋の月　青蓮（しょうれん）の眼（まなこ）は夏の池　四十の歯ぐきは冬の雪　三十二相春の花」

現代語訳：阿弥陀如来のお顔は秋の月のようにまろやかだ。青蓮華より青い眼は涼しい夏の池に、四十の歯は冬の雪に似ている。それらを合わせて三十二相は春の花のように華麗であるよ。

解説：四季の比喩の原拠の大半が、阿弥陀如来の姿を心をこらして思い浮かべる「観想」を説く『往生要集』にあるとはいえ、各句は美しい連接であり、ことに第四句が巧みに一首をまとめている。[170]

（執筆者：工藤大樹）

## 3―23「第三十一、国土清浄願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、国土清浄にして、皆悉く十方一切無量無数不可思議の諸佛世界を照見せんこと、なおし明鏡をもってその面像を覩るがごとくならん。もししからずんば、正覚を取らじ」（第三十一国土清浄願、聖典一・二二九頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔私の〕国土は、まるで磨き上げられた鏡が〔見る者の〕顔を鮮明に映し出すように、数限りないあらゆる仏の世界を余すところなく映し出すほど清らかにしよう。〔万が一にも〕そうならないようであれば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・五四頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第三十一願、国土清浄、照見

**④〈キャッチフレーズ〉**

「国土光中に諸仏世界を映し出そう」

「国土清浄にして諸仏世界を映し出そう」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・国土清浄…極楽の荘厳は、垣根や壁までも皆、透き徹っていて光明を放っている。このために清浄という。

・照見…〔十方の諸仏世界の様子が〕光明の中に現れ出でて見てとれること。

・覩る…見わける。よく見ること。

**⑥〈解説〉**

・四十八願中、仏国土の有りように関する誓願（摂浄土願）である。（第四十見諸仏土願は、極楽の菩薩の利益を説く）

・『随聞講録』には「彼の土の菩薩、意楽に依りて浄穢俱に照見すべし。大悲心、起るときは即ち穢土を現ず。悲心、衆生を愍れむが故に之を見て下化の心を発す。上求心、起るときは則ち浄土を現ず。之を見て尚、仏果を求む」[171]とある。

・願成就文（香川）[172]は、巻上の「かの佛の国土は、清浄安穏にして微妙快楽なり。無為泥洹の道に次げり」（聖典一・二四四頁）である。／「かの〔無量寿〕仏の〔極楽〕世界は清らかに澄みわたり、穏やかな安らぎに満ち、喩えようもない幸福に包まれている。〔そこにいる者は〕迷いなき覚りへと歩むこととなるのである」（現代語訳・八一頁）。

**⑦〈法話のポイント〉**

・先立たれたご家族・ご先祖さま（往生人）は清浄な国土において光明に包まれ、願成就文にもあるように「穏やかな安らぎに満ち、喩えようもない幸福に包まれている」ご様子をお伝えする。

・極楽自体は、阿弥陀仏が清浄・安穏・快楽のみを選び取られて建立された浄土である。この現世における災害疫病戦乱の悲しみを共にし、だからこそ極楽にはそのような災いが一切無い（起きない）よう荘厳された旨をお伝えする。

・一方、荘厳の光の中には、あらゆる諸仏世界の、清らかな様相のみならず穢れた様相および善悪苦楽の業縁などの一切が現れる。往生人は極楽に居ながらこれらの諸相を明らかに見てとるので、自然に悪を避け善を求める心（探湯不及の情）がわき起こる。[173]また当然、往生人は以前に生死輪廻した苦界の様相および各世界での縁者の現在の様子を観ることともなろう。

・大悲心（抜苦）の思いで諸仏世界の穢土の諸相を見ては下化衆生の心を発し、上求菩提の思いで浄土の諸相を見ては覚りを目指す心が強まるのである。そのため、往生人は自ずから「迷いなき覚りへと歩むこととなる」。

・おそらく、極楽での修行がある程度すすんだ往生人は、自身の目指す仏およびやがて自身が建立する仏国土の理想像を求めるようになろう。現世の災いには、目を背けてしまう自分であったり、例えどれほど力を尽くせども限界があって、無力無気力に苛まれたりもしよう。（おそらく法蔵菩薩様も、国王という世俗の力・世俗の宝〈宝蔵〉では一切衆生の救済という願いは叶えられないとの結論があったのかもしれない）[174]しかし極楽においては、阿弥陀様・極楽浄土を究極の理想としながら、まさに阿弥陀様が選び取られたように、自身の理想の成仏と国土建立を目指して諸仏世界を見て取ることができるのである。（そのために第四十見諸仏土願もご用意下さった阿弥陀仏の大慈悲である）

・こうした極楽の様子や、菩薩として仏道を歩む往生人のお姿をお伝えし、故人への追慕と極楽への欣慕の念を聴衆と共にする。そして、阿弥陀様はもちろんのこと、菩薩となったご先祖様・故人が喜んでくださるような日々の歩みをお勧めし、悲しませるような行いは互いに慎み、何より念仏相続をもって結勧とする。それこそ、極楽の皆様が最も喜んで下さる勤めだからである。

**【参考】**

「私が仏となる以上、〔私の〕国土の菩薩たちが、数限りない清らかな仏の世界を見てみたいと思うなら、その時には〔いつでも〕、まるで磨き上げられた鏡が〔見る者の〕顔を鮮明に映し出すように、〔私の国土の〕宝玉でできた樹々の中に〔あらゆる諸仏の世界を〕その願いの通りに映し出せるようにしよう。〔万が一にも〕それができないようであれば、〔その間、〕私が仏となるわけにはいかない」（第四十見諸仏土願、現代語訳・五七頁）

（執筆者：宮入良光）

## 3―24「第三十二、国土厳飾願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、地より已上、虚空に至るまで、宮殿楼閣、池流華樹、国中のあらゆる一切の万物、皆無量の雑宝、百千種の香をもって、共に合成し、厳飾奇妙にして、諸もろの人天を超えん。その香、普く十方世界に薫じて、菩薩聞く者は、皆佛行を修せん。もしかくのごとくならずんば、正覚を取らじ」（第三十二国土厳飾願、聖典一・二二九頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔私の国土の〕大地から天空に至るまで、〔その間にある〕宮殿・楼閣・池や〔湧き出る〕水流・花々や樹々〔など〕、国中のあらゆるものがみな、すべて数え切れないほどの様々な宝玉〔の彩り〕を具え、さらに百千種類もの芳香を醸し出し、〔その美しく〕厳かに飾られた絶妙な〔様子が、他の国の〕人々や天人たち〔のそれ〕を凌駕するようにしよう。〔さらに〕その香りをあらゆる世界に漂わせ、〔これを〕かいだ菩薩たちがみな仏道に励むようにしよう。〔万が一にも〕そうならないようであれば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・五四―五五頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第三十二願、国土厳飾、聞香

**④〈キャッチフレーズ〉**

「宝玉と香りを以って導かん」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・宮殿楼閣…極楽浄土の荘厳の一つ。仏菩薩、天人が住まう。七宝で造られる。『観経』には「楼閣千万あり。百宝をもって合成せり」[175]（水想観）とある。

・七宝…金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・硨磲・碼碯。

・池流…八功徳水（澄浄・清冷・甘美・柔軟・潤沢・安和・飲食飢渇）と支流のこと。『観経』（池想観）参照。

・華樹…七宝の宝樹、金色や紅色の光を放つ。また、華には蓮華も含む。『観経』（樹想観・華座観）参照。

・百千種の香…極楽の七宝、皆香気有り。穢土の金銀には香気無く、香木には妙なる光無し。極楽の諸宝は光と香気有り。

・普薫十方世界…極楽の香気は、浄土・穢土の普く世界に薫ずる。香薫は穢土を隔たず。

**⑥〈解説〉**

・四十八願中、極楽浄土の国土のありように関する誓願（摂浄土願）。

・極楽浄土の宮殿楼閣、蓮池および支流、華樹など、あらゆる万物は無量の雑宝と妙なる香により造られており、その香気は普く十方世界に薫習する。その香を聞く者は、自然と仏道修行を修めたい心を発す。

・願成就文①（義山）[176]は、巻下の「その佛の国土は、自然の七宝、金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・硨磲・碼碯をもって合成して地とせり」（聖典一・二三六頁）である。／「〔そして〕その仏の世界に〔広がる〕大地は、そもそも金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・硨磲・碼碯の七宝からなり、〔実に〕広々として際限がない）」（現代語訳・六七頁）。

・願成就文②（義山）[177]は、「また講堂・精舎・宮殿・楼観あり。皆七宝の荘厳、自然の化成なり」（聖典一・二四二頁）である。／「さらに〔極楽世界には無量寿仏が法を説く〕講堂があり、〔無量寿仏や極楽の

住人が起居する〕精舎があり、宮殿や楼閣がある。〔それらは〕みなそれぞれ七種の宝玉でできており、〔無量寿仏の成道と同時に〕最初から出現している」（現代語訳・七七頁）。

・願成就文③（義山[178]）は、「黄金の池には、底に白銀の沙あり。白銀の池には、底に黄金の沙あり。水精の池には、底に瑠璃の沙あり。瑠璃の池には底に水精の沙あり。珊瑚の池には、底に琥珀の沙あり。琥珀の池には、底に珊瑚の沙あり。硨磲の池には、底に碼碯の沙あり。碼碯の池には、底に硨磲の沙あり。白玉の池には、底に紫金の沙あり。紫金の池には、底に白玉の沙あり」（聖典一・二四二頁）である。／「〔それら沐浴用の池のうち、〕黄金の池の底には白銀の砂が敷き詰められ、白銀の池の底には黄金の砂が敷き詰められている。水晶の池の底には瑠璃の砂が敷き詰められ、瑠璃の池の底には水晶の砂が敷き詰められている。珊瑚の池の底には琥珀の砂が敷き詰められ、琥珀の池の底には珊瑚の砂が敷き詰められている。硨磲の池の底には碼碯の砂が敷き詰められ、碼碯の池の底には硨磲の砂が敷き詰められている。白い宝玉の池の底には紫金の砂が敷き詰められ、紫金の池の底には白い宝玉の砂が敷き詰められている」（現代語訳・七八頁）。

・願成就文④（香川[179]）は、「もし食せんと欲する時は、七宝の盌器、自然に前に在り。金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀・明月真珠、かくのごときの諸盌、意に随って至り、百味の飲食、自然に盈満す。この食ありといえども、実に食する者なし。ただ色を見、香を聞いて、意に食なりとおもえば、自然に飽足す。身心柔軟にして、味著する所なり。事おわれば化し去り、時至ればまた現ず」（聖典一・二四四頁）／「食事を摂りたいと思えば七宝でできた食器が忽然と目の前に現れる。〔それらは〕金でできたもの、銀でできたもの、瑠璃でできたもの、硨磲でできたもの、碼碯でできたもの、珊瑚でできたもの、琥珀でできたもの、明月真珠でできたものなどであって、それ

らの食器は〔極楽の住人の〕思うがままにやってきて、様々な食べ物や飲み物が自ずと山盛りになって現れる。とはいえ、このように食事が目の前に現れても、実際にそれを口にする者は誰もいない。その色形を見たり、香りを楽しんで、心に『これが食事である』と思えば、それだけで自然と満腹になるのである。身も心も満ち足り、食べ物に執着することがない。そうして食事が済めば、〔食べ物を山盛りにした食器は〕消え去り、〔やがてまた食事の〕時間になれば再び現れるのである」（現代語訳・八〇―八一頁）。

**⑦〈法話のポイント〉**

・極楽浄土の宮殿楼閣や、蓮池、宝樹等のあらゆる物は、諸々の宝と百千種にも及ぶ香により自然と造られており、その荘厳は妙なる物であり、諸仏の国土の人天の所有する物を遥かに超えている。

・「戒香」「定香」「解脱香」の意の通り、戒を保つ、定の境地に至る、智慧の眼が開かれると、その身から自然と香気が薫習するように、極楽浄土の宮殿や楼閣、蓮池、宝樹等は香気を放っている。

・その香を聞く者は自然と仏道を求める心が起こる。香は「かぐ」事は無粋とされ、古来より「聞く」と表現する。

・「聞く」は自然と耳に入る事で、「聴く」は意識して聞く事であり、浄土の香りは求めずとも自然と身に入り込むかのように、み教えが身に染みわたり、自然と仏道修行を修めたいとの心を起こすようになる。

・娑婆世界の諸々の宝は、光は放つが香気は無い。香木も妙なる香りはするが、光を放つ事は無い。極楽世界の万物は、光を放ち香気を持つ。その美しさと香りの素晴らしさは、想像もつかない。本堂や仏壇は、この誓願の如くありたいと願い荘厳される（実際は極楽の様相を再現する事は不可能だが）。本堂、仏壇の荘厳に、極楽世界の有りように憧れの心を抱き、良き香木や線香を焚く事によって、仏道を修めたいとの心を起こしたいものである。

・極楽浄土の香りは穢土まで薫習する。穢土にあって

煩悩具足の身であるが、我が身が妙なる香気を薫習する存在でありたいと願う「香偈」は、この穢土にありながら、仏法を伝え修めたいとの誓いでもあろう。

※中川正業・宮田恒順・山田紹隆「香偈」（「常用の偈文を通した法話の研究（一）」、『教化研究』三三・二六〇頁上―二六五頁下）参照。

・昨今は香りの無いお線香やお焼香もあるが、香を焚く事は、仏様を敬う心のあらわれでもある。出来るだけ良い香りのお線香や、お香を焚く事の大切さをも伝えたい。

・娑婆世界は誘惑も多く、この身は煩悩を具えている。しかし、本堂や仏壇の荘厳を拝し、香を焚く時には、極楽浄土の様相に思いを馳せ、憧れを抱きたいものである。そして極楽浄土の万物より薫習する香気を通して教えを聞き、仏法を頂く事の有難さに思いを致しながら、極楽往生の思いを再確認し、念仏相続をもって結勧とする。

【和歌・道詠など】

「阿弥陀仏と　申すばかりを　つとめにて
浄土の荘厳　見るぞうれしき」（法然上人）

（執筆者：山田紹隆）

## 3―25「第三十三、触光柔軟願」

### ①〈讃題〉

「もし我れ佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我が光明を蒙って、その身に触れん者は、身心柔軟にして、人天を超過せん。もししからずんば、正覚を取らじ」（第三十三触光柔軟願、聖典一・二二九頁）

### ②〈現代語訳〉

「私が仏となる以上、数限りないあらゆる仏の世界に生きている者が、その身を私の光明にてらされたならば、身も心もやわらぎ、〔他の〕人々や天人よりも〔幸福な者〕となるようにしよう。〔万が一にも〕そうならないようであれば、〔その間、〕私は仏となるわけに

はいかない」（現代語訳・五五頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第三十三願、光明、触光、身心柔軟／年回法要、別時念仏会、十夜会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「身心ともに和らぐ御光」

「光明に照らされると」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・光明…3―14「第十二、光明無量願」の項目を参照。

**⑥〈解説〉**

・四十八願のうち第三十三番目の願。阿弥陀仏の光明に触れると身心柔軟になるということから「触光柔軟の願」と呼ばれている。

・願成就文（義山）[180]は、『無量寿経』巻上のいわゆる「光明歎徳章」にある「それ衆生あって、この光に遇う者は、三垢消滅し身意柔軟なり。歓喜踊躍して、善心生ず」（聖典一・二三七頁）である。／「〔誰であれ〕生きとし生けるものが、この光明に照らされたならば、〔貪り・瞋り・愚かさといった〕三種の心の汚れが消え去って身も心もやわらぎ、歓喜に満ち溢れて踊らんばかりとなり、善行を積もうとする心が生じてくる」（現代語訳・七〇頁）。

ただし、義山の『無量寿経随聞講録』には、「三垢消滅とは、即ち三毒を指して、三垢と曰う。光触を蒙る故に、能く貪等を滅す。問う、設い、光力と雖も、具縛の凡夫、何ぞ速かに惑を滅せん。答う、三毒漸薄、之を名づけて、滅とす。断惑と謂うには非ず。要を挙げて、之を言わば、発心以前の三毒と、称念已後の三毒と定めて同ずべからず。三毒、若し微薄の分有らば、当に知るべし、光益なりと、若し其の分無くんば、深く慚愧すべし」[181]とあり、光明に照らされることで三毒が完全に消滅するのではなく、だんだんと薄まっていくと受け止めるべきことが示されている。

**⑦〈法話のポイント〉**

・第十二願との関係（第十二願の項目要参照）

第三十三願だけでは、願文の「諸佛世界の衆生の類」から、その対象が浄土の衆生に限られたものと捉えられるが、光明に限りがないという第十二願「光明無量の願」と合わせていただくことで、この私たちも間違いなく触光柔軟の対象であると受け止められる。

・十二光仏について（詳細については第十二願の項目に記載有）

光明に関するものとして『無量寿経』巻上に説かれる十二光仏も踏まえてお伝えすることも可能であろう。

〔際限のない光を放つ〕無辺光仏、〔何ものにも遮られない光を放つ〕無礙光仏と合わせることで、この世界においては病室のベッドの上やどのような場所でも、さらには三悪道（地獄・餓鬼・畜生）にいたとしても光明に触れると身心柔軟となることが伝えられる。

この点に関して、関連する法然上人の御法語を次に示す。

当時日ごとの御念仏をも、かつがつ回向しまいらせられ候うべし。亡き人のために念仏を廻向し候えば、阿弥陀仏、光を放ちて、地獄・餓鬼・畜生を照らし給い候えば、この三悪道に沈みて苦を受くる者、その苦しみ休まりて、命終わりて後、解脱すべきにて候。[182]

また、〔貪りを取り除き人の心を清らかにする光を放つ〕清浄光仏、〔人の瞋りの心を取り除く光を放つ〕歓喜光仏、〔愚かさといった人の煩悩を取り除く光を放つ〕智慧光仏は関連性が強い。願成就文も意識して、柔軟になるということは三毒が薄まり、善行を積もうとする心が生じてくることであるとお伝えすることもできるだろう。

・摂益文や三身礼でも示されるような光明に関する偈文と合わせてお伝えすることもできる。[183]

・実体験として感じるものがあるということを伝える程度や表現はさまざまであるが、触光柔軟を実感で

きたという経験を持つ念仏者は少なくないのではないだろうか。実体験について伝えることもできるだろう。ただし、体験をしなければならないとは伝わらないように注意が必要である。

【実体験の事例】

(1)別時念仏中に懺悔の思いが深まるということがある。とくに別時念仏中などには、光明に照らされることで、自身の煩悩をより深く自覚し、懺悔の思いが深まるという実感を抱くこともある。その懺悔、念仏により、三毒煩悩が薄まる思いに至る。

このようなことについて、貞極上人は問いを立てて次のように述べている。

問、念仏する時妄念の発るを云何すべき。

答、闇き室の中には、空塵見えざるに、朝日の影窓よりさし入るを見れば、其光りの中に空の塵充ち満たり、人力いかんぞ此塵を除き捨てむ、煩悩妄念本来常に相続せり、無明の闇心中には是を知らざりき。〈中略〉

上人曰、欲界散地の凡夫、妄念をやめて念仏せんと申すは、生れつきたる目鼻を取り捨てんと云はんが如し。此御教訓を能々心得て、唯助け玉へ南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と申して、妄念を見る時、今如来の光明我心を照し玉ふらんと思へ、かく言へばとて妄念善きものに非ず、唯仏光の照し入る方を有難と思ひて念仏すべし。前年此心を或る人に示し侍る歌に、

朝日さす窓の光の一筋に　厭い捨てばや塵の世の中[184]

朝日が差し込むことで宙に舞う塵がよく見えるというたとえを用い、光明に触れることにより煩悩が照らされ、懺悔→念仏へとつながることを示している。

(2)浄土宗新聞のコラムより

「心臓の手術を受ける時にお念仏を称えると、阿弥陀さまにおまかせと思い、安心してすっかり気分が楽になりました[185]」

(3)東日本大震災遺族の会でのお話

ご長男を津波で亡くした方が「阿弥陀さまが強いすくいの光で照らしてくださる」という話を聞き、心の支えとなった。いまでは毎日仏壇の前でお念仏を称えると、阿弥陀様に悩みや苦しみを聞いていただいている思いになり、心が和らぐ。

・注意点として

身心柔軟だけでは、真の救いとはならず、やはり往生極楽を勧めることが第一義であるということは言うまでもない。「光明摂取」と合わせて、お伝えしていく必要がある。

（執筆者：工藤大樹）

## 3―26「第三十四、聞名得忍願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我が名字を聞きて、菩薩の無生法忍、諸もろの深総持を得ずんば、正覚を取らじ」（第三十四聞名得忍願、聖典一・二三〇頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、数限りないあらゆる仏の世界に生きている者が、〔仏としての〕私の名を聞いたならば、菩薩の〔獲得すべき〕無生法忍と、仏法を記録して決して忘れない力を得られるようにしよう。〔万が一にも〕そうならないようであれば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない。」（現代語訳・五五頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第三十四願、菩薩、聞名、無生法忍、総持、忘れない力

**④〈キャッチフレーズ〉**

「阿弥陀様のお力が届く範囲は計り知れない」

「たとえ極楽浄土に往生しなかった人であっても」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・聞名…仏や菩薩の名を聞くこと。つまりそれで仏や菩薩の存在や功徳を認識する事。

・無生法忍…真理を獲得する事、具さには全ての物は生まれて消滅するという認識を離れること。空を悟

ること。この境地を得ると悟りの境地に入る。道光の整理によると、初地の境地なのではないかとしている。

・総持…仏のみ教えを記憶して忘れないこと、能力。善い法を保持し、悪を離れること。『随聞講録』に総持とは、「為得大利無上功徳、多善因縁、具包衆徳、是れを総持と名づく。見生、無生、衆徳の総持、若し三心を具して、名号を唱念すれば、任運無功用に平等の善根、則ち成満するが故に」[186]といい、三心具足して称名念仏を修した功徳を指している。

**⑥〈解説〉**

・四十八の誓願のうち第三十四番目の願。「阿弥陀仏の名を聞いたものは、無生法忍という境地を得、また聞いた教えを決して忘れない境地を得る」ということから、「聞名得忍願」と呼ばれている。

・願成就文（香川[187]）は『無量寿経』巻上の「微風、徐く動いて、諸もろの枝葉を吹くに、無量の妙法の音声を演出す。その声、流布して、諸佛の国に徧す。その音を聞く者は、深法忍を得て、不退転に住す…」（聖典一・二四一頁）である。／「〔その上〕穏やかな風がそよぎ〔道場樹の〕枝葉を〔優しく〕揺らすと、真理を顕す調べが数限りなく奏でられ、その音色は広がりに広がって、あらゆる仏の世界に行きわたる。〔そして、それらの仏の世界の人々がひとたび〕その調べを聞いたならば、奥深い真理を〔よく〕身に修め、覚りの道を歩みつづけ決して退くことがない…」（現代語訳・七五頁）。

・対象は「数限りないあらゆる諸仏世界に住む者」とあり、極楽浄土以外の諸仏世界に生まれ変わったとしても、阿弥陀仏の力で無生法忍を得、輪廻から解脱できるという。

**⑦〈法話のポイント〉**

・阿弥陀仏のふところの広さ

阿弥陀様は自分の世界はおろか、他の仏の世界に生まれ変わった者であってもその救いの力を届けて下さるということが受け取れる。阿弥陀様は私達人間

と違って、どんな壁をも関係なくそのお力を届けて下さるという、分け隔て無さや普遍さを伝えることができる。

・阿弥陀様の名を聞き、存在を確認するだけで…

その阿弥陀様の名を聞いて阿弥陀様の存在を知るだけで、たとえなかなか成仏が出来ない世界に生まれ変わっていたとしても、菩薩として歩み成仏を遂げる事が出来る。「うちのお父様は信心がなくて、神様仏様なんて全く信じていなかったんです…」という方にも勇気を与えられるのではないだろうか。

・阿弥陀仏の名、教えは微風によって響き渡る

願成就文には、「極楽浄土の微風が、木々のせせらぎを生み、その音に乗って妙なる法が響き渡る」という。極楽浄土の不思議な様子、清浄な世界が改めて伝わってくる。

・「聞名によって無生忍を得る」ことは阿弥陀仏の他にも例がある

了慧道光の『無量寿経鈔』によると、空海『十住心論』には「過去無数劫に海徳という仏がいて、諸仏はこの仏に随って発願し、この仏の名を聞いて皆仏となったという例がある」[188]と伝えている。阿弥陀仏は「超世の願」を誓ったのであり、この海徳に劣ることは無いはずであるという。

・注意点

娑婆の衆生が名を聞くことですぐさま無生忍を得るという理解にならないようにすべきか？この願文は諸仏世界（浄土・仏国土）の衆生が対象であり、娑婆世界の我ら衆生が対象という理解は注意が必要であろう。道光『無量寿経鈔』では「仏国土の菩薩は名を聞いて無生忍を得るが、凡夫は念仏という起行が必要である」[189]といい、義山『随聞講録』では「聞我名号とは、唯、聞と言うと雖も、是れ但聞に非ず。必ず所帰と去行とを兼ぬ。今、聞を挙げて、所帰と去行とを摂す」[190]といい、「聞く」には阿弥陀仏の極楽浄土を求めて称名念仏することも含まれると理解している。「名を聞く」者には願往生心が生じ、念

仏を申すようになるのであろう。

（執筆者：郡嶋昭示）

## 3―27「第三十七、人天致敬願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸天人民、我が名字を聞きて、五体投地し、稽首作礼し、歓喜信楽して、菩薩の行を修せんに、諸天世人、敬いを致さずということなからん。もししからずんば、正覚を取らじ」（第三十七人天致敬願、聖典一・二三〇頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、数限りないあらゆる仏の世界に住む天人や人々の中で、〔仏としての〕私の名を聞く者は、地に伏して恭しく礼拝し、心の底から大いに歓喜し、菩薩の行を修めて、諸々の天人や世界の人々の誰からも畏敬されるようにしよう。〔万が一にも〕それができないようであれば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・五六頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第三十七願、菩薩、六波羅蜜、念仏、聞名、礼拝、称名、五体投地、畏敬（恭敬）／彼岸会、十夜会、仏名会、別時念仏会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「〔真の〕念仏者は敬われる」

「念仏して、互いに敬い合おう」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・五体投地…頭部・両肘・両膝の身体の五体を地に投げだして、最高の敬意を表す礼拝。

・稽首…頭を深く地につけること。

・歓喜信楽…「歓喜」は阿弥陀仏の名を聞いて踊り喜ぶこと。「信楽」は信じ願うこと。

・菩薩行…六度（六波羅蜜）のこと。大乗の菩薩が悟りに至るために実践する六つの実践徳目。即ち、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六つ。

## ⑥〈解説〉

・四十八の誓願のうち第三十七番目の願。「人天致敬（にんでんちきょう）の願[191]」という。願文中の「諸天世人、敬いを致さずということなからん」という阿弥陀様（法蔵菩薩）の願いからその名がつけられている。阿弥陀様の仏国土を除いた仏国土において、阿弥陀様の名を聞いて（聞名）[192]、礼拝し、おおいに喜び、菩薩行を行じている天人や人々は、天人や世界の人々の誰からも敬われているのである。

・菩薩行について

菩薩行といえば、通常、六波羅蜜のことを指すが、例えば義山の解釈では「六度等を指す。問う。凡夫、豈に六度の行に堪えんや。答う。分に随いて之を修す。菩薩に同じからず。或いは唯、念仏を菩薩行と名づく。大乗の行なるが故に[193]」とあることからもわかるように、凡夫（私たち）はできる範囲で六波羅蜜を行じるか、あるいはお念仏のみでもよいと解釈する。

・致敬について

致敬について、義山は「念仏の行者に限らずと雖も、真実の念仏者は、一分一分に人の尊敬アルモノなり。〈中略〉此の如きは皆、願功なり[194]」と述べ、また川合は「即ち阿弥陀仏に帰依渇仰して、称名念仏する者は即ち世人より信頼致敬せらるるのである[195]」と述べている。阿弥陀様に帰依し、心からお念仏をお称えする真の念仏者は、すべての天人や人々から敬われるのである。

・願成就文（香川）[196]は、「専ら法を楽求して、心に厭足なし。常に広説を欲して、志疲倦なし。法鼓を撃ち、法幢を建て、慧日を曜かし、痴闇を除き、六和敬を修す。常に法施を行じ、志勇精進にして、心退弱せず。世の燈明となって、最勝の福田なり。常に導師となって、等しくして憎愛なし。ただ正道を楽って、余の欣戚なし。諸もろの欲刺を抜いて、もって群生を安んず。功慧殊勝にして、尊敬せられずということなし。三垢の障りを滅して、諸もろの神通に遊ぶ。因力・

縁力・意力・願力・方便の力・常力・善力・定力・慧力・多聞の力・施戒忍辱精進禅定智慧の力・正念正観諸もろの通明の力・如法に諸もろの衆生を調伏する力、かくのごとく等の力、一切具足せり。身色相好、功徳弁才、具足し荘厳して、与に等しき者なし。無量の諸佛を恭敬し供養して、常に諸佛に共に称歎せらる。菩薩の諸波羅蜜を究竟し、空無相無願三昧と不生不滅との、諸もろの三昧門を修して、声聞縁覚の地を遠離せり」（聖典一・二五九頁）である。／「〔また彼らは〕あくまでも教えを求め続け、うんざりすることがない。絶えず〔教えを〕説き弘めようと願い続け、疲れてその思いが途切れるようなことはないのである。〔戦に打ち鳴らす〕太鼓のように教えを轟かせ、〔戦場での〕旗印のように教えを高く掲げている。〔また〕太陽のように明るい智慧の光を輝かせ、〔人々の煩悩という〕愚かさの闇を取り除いて、〔さらに彼らは〕心を一つにして修行し、敬い合っている。常に教えを説いて〔人々を導き、仏道を歩む〕志はひるむことなく勇ましく、損なわれることがない。〔自らの迷いの〕世界を照らす灯火となり、〔人々に〕これ以上ない幸福を与えるのだ。常に〔人々を〕導く師となり、〔その慈しみには〕分け隔てがなく、誰かを憎んだり選り好みをしたりしない。ただひたすらに仏道のみを望み、〔喜び悲しみに〕一喜一憂することがない。欲望という刺を抜き取って、人々〔の痛み〕を取り除くのである。〔こうした菩薩たちの具える〕功徳と智慧は極めてすぐれており、尊敬されない者は誰一人としていない。〔彼らは〕三種の煩悩（貪・瞋・癡）という障害を断じていて、様々な神通力を自在に操ることができるのである。〔彼ら極楽世界の菩薩たちには〕これまで功徳を積み重ねてきた力（因力）があり、師に恵まれている力（縁力）があり、修行が道理に適っていると認識する力（意力）があり、覚りを求める力（願力）があり、修行の秘訣をつかんでいる力（方便之力）があり、常に修行を続けて

いる力（常力）があり、善行にいそしむ力（善力）があり、心を静めている力（定力）があり、諦かに観て取る力（慧力）があり、教えを聞き会得している力（多聞之力）がある。〔また〕布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六波羅蜜を修めている力（施戒忍辱精進禅定智慧之力）がある。〔また〕何を想い描いても煩悩を伴わず、何を見ても邪な想いを懐くことがなく、自身の過去世を知る能力・はるか遠くや未来を見通す能力・はるか遠くの音を聞き取る能力・他人の心を知る能力・思いのまま瞬時に移動する能力・自らの煩悩を断ち切る能力（正念正観諸通明力）がある。〔そして〕み仏方に倣い人々を救い導く力（如法調伏諸衆生力）があるのである。〔彼ら菩薩たちには〕このようなありとあらゆる力が余すところなく具わっているのである。〔また彼らには〕姿形といい、功徳といい、軽やかな弁舌といい、〔およそ考えられ得る〕すべての長所が〔他と〕比べようもないほどに具わっている。あらゆるみ仏方を敬い、供養を捧げ、常にみ仏方はこぞって〔彼らを〕称讃するのである。〔彼ら極楽世界の〕菩薩たちは覚りを得るために修めるべき行をすべて究め、すべての存在はうつりかわり（空）、〔それ故〕定まった姿形もなく（無相）、〔従って〕執着することは何もない（無願）〔と体得する〕深い精神統一の状態と、〔この世には〕生じるものもなければ滅するものもないという境地などのあらゆる精神集中を達成し、〔覚りの境地を独り楽しむだけの〕声聞や縁覚の立場を離れて、〔菩薩の境地を究め尽くして〕いる」（現代語訳・一二六―一二八頁）。

**⑦〈法話のポイント〉**

・お念仏の勧め

解説でも触れたように、願文中に出てくる菩薩行とは通常、六波羅蜜の菩薩行のことを指している。しかし、凡夫である私たちが菩薩行を行じてゆくことは甚だ難しいのが現実である。であるから、先に解説で述べた義山等の注釈にしたがって、凡夫である

私たちにとっての菩薩行とは称名念仏であるとお伝えし、お念仏をお勧めしてゆくのが法話の基本構成となるであろう。[197]

・五体投地の勧め―お念仏の呼び水として―

願文中に「五体投地」が出てくることから、礼拝念仏する法会の機会にこの願文を紹介してもよいだろう。「礼拝（五体投地）はお念仏の呼び水」と先達から聞いたことがあるが、礼拝することによって口からお念仏が自然とこぼれ出てくるのである。願文にあるように、礼拝しよろこびに包まれながら（歓喜信楽）、お念仏をお称えしていただけるようお伝えしたい。

・真の念仏者は敬われる―互いに敬い合おう―

「お念仏をお称えするものは敬われる」ということがこの願文の眼目である。お念仏を称えることによって周りの者から敬われることをしっかりとお伝えする。また、お念仏を日々お称えする念仏者同士は、互いに敬い合いながら生活していくものであることをお伝えするとよいだろう。

**【関連のあるお歌】**

「拝む人　周りのひとから　拝まれる（敬われる）」

「親が拝めば　子も拝む　拝む姿の　美しさ」

（執筆者：岩井正道）

## 3―28「第三十八、衣服随念願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、国中の人天、衣服を得んと欲せば、念に随ってすなわち至らん。佛の所讃のごとくなる応法の妙服、自然に身にあらん。もし裁縫擣染浣濯することあらば、正覚を取らじ」（第三十八衣服随念願、聖典一・二三〇頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔私の〕国土の人々や天人が、衣服を手に入れたいと思えば、思っただけですぐに現れ、〔しかも〕諸仏のお褒めにあずかるような、修行者にふさわしい尊い衣が気がつかぬうちにまとってい

るようにしよう。〔また、その衣は誰かが布を〕裁断して縫い合せ、染めて濯いだものでもあってはならないようにしよう。〔万が一にも〕それができないようであれば、その間、私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・五六頁）

**③〈キーワード／設定〉**

本願、第三十八願、応法妙服、慈悲、増進仏道楽／五重相伝、彼岸会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「妙なる衣で仏道修行に集中」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・応法妙服…『随聞講録』には、「如法衣なるが故に応法と云う」「自然の衣なるが故に妙服と云う[198]」とある。

・裁縫…布を断ち切り、縫いあわせること。

・擣染…つやだしにために衣をたたいたり、染色したりすること。

・浣濯…洗いすすぐこと。

**⑥〈解説〉**

・願意について『随聞講録』には、「所見の土の中に、或る土の衆生は衣服の故に身心を苦労して衆罪を造る〈中略〉或る土の衆生は、自然の法衣、身に在りて、念に随う。法蔵、衣服に辛苦するを愍念して、此の願を選択して衆生を摂するなり[199]」とある。

・願成就文（香川[200]）は、「阿難。かの佛の国土の諸もろの往生せる者は、かくのごときの清浄の色身、諸もろの妙音声、神通功徳を具足す。処する所の宮殿、衣服飲食、衆もろの妙華香、荘厳の具、第六天の自然の物のごとし」（聖典一・二四三頁）である／「阿難よ。かの〔無量寿〕仏の〔極楽〕世界に往生する者はみな、確かにその姿形は清らかで、〔口から発せられる〕音声は妙なる響きであって、神通力や〔様々な〕功徳を具えている。〔また〕住まいとする宮殿、衣服、食べ物や飲み物、〔あたりの〕花々や香、美しさを演出する装飾品は、まるで他化自在天に自ずと具わっているもののようである」（現代語訳・

八〇頁）

・袈裟については、「常用の偈文を通した法話の研究（二）」の「袈裟」（井野周隆・大髙源明執筆、『教化研究』三四・一二八―一三三頁）を参照。

**⑦〈法話のポイント〉**

・不寒不暑の極楽浄土では、衣で寒暖を調整する必要は無い。そうした環境において如法な衣を自然に頂戴することができるのであるから、衣（食住）に一切の患いが無いのが極楽浄土である。ところが娑婆世界では、衣（食住）が整わない環境も存在する。戦争などで厳しい生活に追い込まれることもあれば、大きな災害が起きてすべての財産を失う事もあるのが娑婆世界である。そのような環境にならなくても、見た目を気にしたり、貪欲により、よりよい衣（食住）を求めることがある。時には他者のものを盗んだり、嫉んだりして、苦悩を増やすこととなる縁になるのが衣服である。そうした苦悩は極楽浄土に往生すれば、一切無くなるのである。阿弥陀仏は、娑婆での凡夫の在り方を徹底的に見つめ、大慈悲をもって修行に専念しやすい環境を整えてくださっていることを伝える。娑婆と極楽を対比することで大慈悲が鮮明となる。

・極楽では自然にいただける妙服を縫う必要もなければ、洗濯する必要もない。その時間を仏道修行に充てることができるのである。娑婆世界では、かつて洗濯板などを用いて洗濯していた時代と比べれば、大幅に手間暇がかからない時代となった。その空いた時間はどのように使っているのだろうか。人間としての限られた命を娯楽など、楽しみながら生きることは大切にしたい。しかし、人間として生きていることを見つめ、法を求めたり、お念仏を唱える時間に充てることが大切ではないかと伝えることもできる。

・外見を気にすることもよいが、内面を気にするきっかけとしてもらうこともできるだろう。

「外を飾るのには金と時を惜しまず　内を清むるに

は金も時も惜しむ」

・初期仏教の出家修行者は、死体を遺棄する場所で死体から取った（捨てられた）布を得て袈裟にしていた。極楽浄土に往生すれば、無量寿を得ることとなるから、死者はおらず、死体から布を取ることもできない。つまり極楽では如法衣を被着することはできないことになる。往生人が無量寿を得るというご利益を優先するだけではなく、往生人が自然に袈裟を得て修行に専念できるようにまで配慮してくださっているのである。

・「応法妙服　自然在身」と書かれた浄衣を身に着けた五重相伝の受者に対して）如法な姿で修行に励む五重相伝の期間に限らず、成満後も浄衣を身に着けることを勧める。すくなくとも袈裟は毎日必ず身に着けて日課称名に勤めることを伝える。

・以上のポイントなどを通して、妙服をいただき、身も心も整えて仏道修行に励める極楽浄土に欣慕の心を持っていただき、「極楽往生のためには、日々の念仏信仰を人生の柱に」と伝えることが最も大切である。

（執筆者：中川正業）

## 3―29「第三十九、受楽無染願」

**①〈讃題〉**

「もし我れ佛を得たらんに、国中の人天、受くる所の快楽、漏尽比丘のごとくならずんば、正覚を取らじ」（第三十九受楽無染願、聖典一・二三一頁）

**②〈現代語訳〉**

「私が仏となる以上、〔私の〕国土の人々や天人の〔身も心も安らぐ〕幸福について、すべての煩悩を断ち切った出家修行者〔の境地〕と同じであるようにしよう。〔万が一にも〕それができないようであれば、〔その間、〕私は仏となるわけにはいかない」（現代語訳・五七頁）

**③〈キーワード／設定〉**

厭離穢土欣求浄土、無常と常住、凡夫の楽と菩薩の楽、極楽は仏道修行の道場

**④〈キャッチフレーズ〉**

「楽多けれども道を廃することなし」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・説我得佛国中人天所受快楽不如漏尽比丘者…「著楽なきことを顕す。三禅の楽を受くれども、一念の著なきこと漏尽の人のごとし」[201]（『無量寿経合讃』）。

・人天…「人天とは荘厳経には所有菩薩と云う」[202]（『無量寿経鈔』）。普通、六道の中の人道と天道を指し、またそこを自らの境界として存在する人間・天人を指す。四十八願の幾つかの願文中に「国中の人天」と見られるが、巻上に「因順餘方」[203]とあるように、極楽国中では往生以前の境涯による呼び名があるだけである。

・快楽…曇鸞大師は「楽」の意味に三種あるとして「第一は外楽である。これは、眼耳鼻舌身の五つの感官が外界の対象たるいろ・かたちあるもの、音声、香、味、触れられるものに働いて感受する楽しみをいう。第二の意味は内楽である。これは初禅、二禅、三禅の禅定を修めている意識内の楽しみをいう。第三の意味は法楽楽である。これは法楽（真理の教えを味わい楽しむこと）の楽しみで、智慧から生ずるものである。この智慧から生ずる楽しみは、阿弥陀仏の功徳を愛楽することから起こるのである。この愛楽の心が自我への貪著を遠ざける心（遠離我心）であり、衆生をなぐさめ安んずることのない心を遠ざける心（遠離無安衆生心）であり、そして、自身を尊重し敬愛する心を遠ざける心（遠離自供養心）なのである」[204]と説いている。これについて良忠上人は、内楽を有漏、法楽楽を出世の楽としている。[205]極楽は、外楽（徳風ゆるく起こりて寒からず暑からず等）内楽（三禅の楽を受く。『合讃』による）法楽楽（一念の著なきこと漏尽の人のごとし。『合讃』による）、すべてが極まった世界であるが、第三十九願で誓われた快楽とは、無執着の出世間の楽である法楽楽であると考えられる。

・漏尽比丘…声聞羅漢の中で優れし證を得た人を云ふ

意味で、其人なれば一切の快楽に對して無着無執であるから其執着無きをそれに喩へられた。[206]

**⑥〈解説〉**

・「願意は所見の土の中に或る土の衆生は刹那の楽に著して永劫の苦を忘る。或る土の衆生は快楽不退にして著心無し。法蔵著楽の衆生を愍念して此の願を選擇して衆生を摂す[207]」（『無量寿経鈔』四）。

・「澄憲の云、穢土の快楽は皆是れ麤弊也。亦意の如くならず。得るに難く失うこと易し。初は楽しみ後は苦しむ。凡夫之に著すること猶を塵の膠に著か如し。始の楽に著して後の苦を知らず。少楽を受け又多苦に遇う。〈中略〉彼の浄土の如きは三禅の楽を受けて、一念の著無きことは漏盡比丘の如し。あに之を欣わざらん乎[208]」（『無量寿経鈔』四）。

・願成就文（義山[209]）は、「譬へば比丘の、滅尽三昧を得たるがごとし」（聖典一・二四六頁）である。／「それはまるで修行者が最高の法悦に浸っているようなものなのである」（現代語訳・八四頁）。また『無量寿経合讃』には、「『譬如』等とは、譬喩の意に楽着なきことを顕す。『倶舎論』根品にいわく、『また、別法ありて、能く心。心所をして、滅せしむるを滅尽定と名づく』。これすなわち第三十九受楽無染の願の成就なり[210]」とある。

**⑦〈法話のポイント〉**

・苦を嫌い、楽を求めるのは、誰もが願うことであるが、しかしながらその「楽」に執着するならば、迷いを生んで却って「苦」の因となることを示す。『無量寿経』巻下には次のように示されている。

田あれば田に憂う。宅あれば宅に憂う。牛馬・六畜・奴婢・銭財・衣食・什物また共にこれを憂う。思いを重ね息きを累みて、憂念愁怖す。〈中略〉田なければまた憂えて、田あらんことを欲し、宅なければまた憂えて、宅あらんことを欲す。〈中略〉たまたま一つあればまた一つ少け、これあればこれを少く。斉等あらんと思う。適たま欲して具にあれば、すなわちまた糜散（みさん）[211]す。

※「思うこと　一つ叶えば　また二つ　三つ四つ五つ
六（難）かしの世や」[212]

・財産、健康、名誉など我々の喜びを支えるものは、それらを失った時に苦しみの原因ともなる。諸行無常は釈尊が説かれた真理であり、この娑婆に永遠の喜びはないことを説く。

・それに対し、極楽浄土は「衆もろの苦あることなく、ただ諸もろの楽のみを受く」[213]（『阿弥陀経』）という世界であり、常住の世界である。

・極楽浄土は、名の如く楽の極まったところであるが、その土に生まれたものは、その快楽に執着することがない。この故に善導大師は「楽多けれども道を廃することなし」[214]（『往生礼讃』）と述べておられる。これは、極楽浄土が単なる快楽境ではなく、まさに法楽の場であり、仏道修業にいそしむ場であることを表している。いわゆる天国との違いを示すことができよう。

・法然上人は「誹謗ともに縁として先に生まれて後を導かん。引接縁はこれ浄土の楽しみなり」[215]と述べ、浄土の楽として、化他行を挙げられている。この楽は、往生人が、極楽での快楽の境地に留まることなく、穢土に下って自在に他の衆生を利益することによって得られる楽である。ここには、出世間の楽から進んでいわば出出世間の楽へ進む道程を見ることができる。すなわち第三十九願は菩薩が化他行を修するための前提となるものであり、そこに阿弥陀仏がこの願を誓われた深意があると説くこともできるのではないか。

（執筆者：大髙源明）

## 3―30「和顔愛語」

**①〈讃題〉**

「虚偽諂曲の心あることなし。和顔愛語して、意に先だって承問す」（聖典一・二三五頁）

**②〈現代語訳〉**

「〔また法蔵菩薩は他人に対して〕偽りやへつらいの

心などまったくなく、その表情は穏やかに微笑み、語りかける言葉は優しく響き、相手の気持ちを察して話しかけるのであった」（現代語訳・六五頁）

**③〈キーワード／設定〉**

・法蔵菩薩、菩薩、菩薩行、六波羅蜜、布施、無財の七施、和顔悦色施、愛語（言辞）施／授戒会、帰敬式、彼岸会、仏教法話、学生への法話

**④〈キャッチフレーズ〉**

「菩薩様のお人柄」

「相手への接し方」

「相手に真剣に向き合う」

「虚偽諂曲の心あることなし―偽らず、自分の心を曲げない心―」

「和顔愛語―いつも笑顔で優しい言葉―」

「先意承問（ぜんにじょうもん）―相手の気持ちを汲んで行動―」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・諂曲…自分の意志をまげて、他人にこびへつらうこと。

・和顔愛語…なごやかな笑顔とやさしい言葉。

・先意承問…相手の思いを先に慮って、相手の思いを満たすように話し掛けること。

**⑥〈解説〉**

法蔵菩薩は四十八の誓願を成就するために長く厳しい菩薩行を行じられた。その菩薩行として法蔵菩薩が具体的にどのように人々に接していたのかが説かれている箇所がこの讃題である。

義山によれば「虚偽諂曲」と「和顔」と「愛語先意承問」はそれぞれ「意」と「身」と「口」の三業に配当される[216]。つまり、法蔵菩薩は御自身の身口意すべてでもって、真剣に相手に向き合って、相手に応じて、法を説かれていたことが理解されるのである。

**⑦〈法話のポイント〉**

・法蔵菩薩をお手本として

法蔵菩薩が菩薩として行じておられた人々との接し方が説かれているのがこの讃題である。私たちはど

こまでも凡夫ではあるけれども、法蔵菩薩をお手本とさせていただき、人々に接していくよう努めてゆくことをお勧めしたい。

※法蔵菩薩の接し方については、**3―4「大安を作さん」**も参照。

・法然上人をお手本として

法然上人の人々への教化姿勢もまさにこの讃題の通りの姿勢であったように思われる。救いを求めて訪ねてくる人々に対して、法然上人は嘘偽りのない心で、自身の信仰の意志を曲げることなく（無有虚偽諂曲之心）、和やかな笑顔と優しい言葉でもって（和顔愛語）、相手の気持ちを慮って、その人に応じてお念仏のみ教えを説かれていた（先意承問）ことが、今に伝わるお伝記や上人のお言葉を通して伝わってくる。[217] 私たち僧侶も法を説く際には、そのような態度で人々に説いていきたいものであるし、また聴衆にも法然上人のこのような姿勢をよくよくお伝えして、法然上人の説かれたお念仏のみ教えを有難く頂戴して、共々にお念仏に励んでゆくことをお勧めしたい。

・虚偽諂曲の心―現代社会の問題を考える機会として―

私たちはときに自身の心を偽り自分の意思を曲げて他人にこびへつらうような心になってはいないだろうか。例えば、クラスメートがいじめられている現場を目撃したとする。いじめはいけないとわかっていながらも、自分がいじめられるのが嫌で、見て見ぬ振りをしたり、いじめる側に加担してしまうといったことがあろう。

このようなまさに「虚偽諂曲の心」が多くの人々の心に深く根付いてゆけばゆくほど社会はより悪い方向へ向かってしまうのではないだろうか。私たち一人ひとりが自身の「虚偽諂曲の心」を取り除いてゆき、正直に行動することによって、悪に目を背けることなく悪を排除し、よりよい社会を築いてゆくことが大切ではなかろうか。

聴衆に「虚偽諂曲」という言葉を紹介し、「いじめ」や「不正の隠蔽」、「戦争」等の現代社会における様々な問題に私たち一人ひとりがどのような心で向き合ってゆくべきなのかについて、話をするのはいかがであろうか。

・布施の実践としての和顔愛語―通仏教的お話として―

和顔（和顔悦色施）と愛語（言辞施）は「無財の七施」[218]にも数えられる布施行であるから、通仏教的な布施の実践を説くお話を組み立てるのもよいであろう。特に彼岸会は通仏教的には六波羅蜜の実践を勧める期間であるので、六波羅蜜の中の布施行の実践として和顔・愛語のお話することもできるであろう。また、教育現場等においても学生・生徒・児童に対してどのように人々（仲間）に接してゆくべきなのかということについてお伝えする場合に、この和顔・愛語を中心としてこの讃題を紹介するのもよいであろう。

・悩み苦しんでいる人々に対しての接し方

「愛語先意承問」とは相手の言葉を慮って相手に声をかけることである。悩み苦しんでいる人、困っている人がいれば、その人のことを慮って声をかけてゆく、行動してゆく大切さをお伝えしたいところである。

・法名（戒名）としての「和顔」

ご生前に笑顔を周りに振りまいて、周りの人々を笑顔にしておられた檀家様には「和顔」という二文字を法名の一部としてお授けすることがある。ご親族に対して法事の席で、和顔という二文字を、またこの讃題をご紹介してご法話をさせていただくのもよいだろう。

【「和顔愛語」についての話材】

○絵本『泥かぶら』眞山美保（原作）、瑞雲舎、二〇一二。

「泥かぶら」というあだ名を付けられ、周りから虐げられていた一人の少女が、決して笑顔を絶やすこ

となく、美しく成長を遂げていく様子を描いた作品。

○モデルのアンミカさんの座右の銘

アンミカさんは「美人とは一緒にいて心地よい人」と考える母から「和顔愛語」という言葉を教えてもらい、その言葉を大切にして活動されている。

○江崎グリコのコマーシャル（二〇一七年放送）のナレーション

「人はなぜ笑うのだろう　笑顔でいると頼りにされる　笑顔でいると若々しくいられる　大切な人を想うと　自然な笑顔になる　子どもは一日四〇〇回笑う　大人になると十五回に減る　幸せだから笑うのではなく　笑うから幸せになれる　あなたが笑うと、世界は変わる」

○平和は微笑から始まる（マザー・テレサ）

○笑顔は女の子ができる最高のメイク（マリリン・モンロー）

【「和顔愛語」に関するお歌[219]】

「老いの身に　うれしきものと　人問わば
和顔愛語と　我は答えむ」（藤本浄本）

「誰よりも　先によき声　よき笑顔」

「微笑みは　いつでもどこでも　どなたにも」
（前川進一）

「微笑みは　微笑みを生む　春の風」

「微笑みは　みんなもってる　宝物」
（執筆者：岩井正道）

## 3―31「十劫正覚」

### ①〈讃題〉

「阿難また問いたてまつる。その佛、成道より以来、幾ばく時を逕（す）ぐるとやせん。佛ののたまわく。成佛より已来、凡そ十劫を歴たり」（聖典一・二三六頁）

### ②〈現代語訳〉

「阿難がまた尋ねた。『その仏が覚りを開かれてから、これまで一体どれほどの時が経ているのでしょうか』。釈尊が仰せになった。『〔その仏が〕覚りを開かれてから、およそ十劫という〔永い〕時を経ている』」（現代語訳・

六七頁）

**③〈キーワード／設定〉**

十劫正覚、成道、成仏／十夜会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「十劫正覚の本願に出逢えた悦び」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・阿難…十大弟子の一人で釈尊の従兄弟にあたるとされている。多聞第一。第一結集の時には法を誦したとされる。

・成道…修行して悟りを開き、仏と成ること。

・成仏…仏と成ること。成仏道、成道、成正覚などと同義。

・劫…インドの時間単位の最長単位。四十里四方の岩山を百年ごとに天界より天女が飛来し、その衣で払拭し、その岩山が磨滅しても終わらないとの譬えがあり、「盤石劫」と呼ばれる。また、四方一由旬の鉄城に芥子粒を満たし、百年ごとに一粒取り去る事を繰り返し、その鉄城が空になっても終わらないとの譬えもある。これを「芥子劫」と呼ぶ。

・十劫…一劫の十倍。十劫の昔に成仏したことにより「十劫の弥陀」と呼ばれる。「阿弥陀佛、成佛より已来、今において十劫なり」[220]（『阿弥陀経』）。

**⑥〈解説〉**

・阿弥陀仏が十劫の昔に、確かに成仏した事が説かれる。

・『無量寿経』巻上で、法蔵菩薩の五劫思惟、四十八願、不可思議兆載永劫の修行の様子を説かれた後に続く経文で、阿難尊者の問いに釈尊が答える。

・「阿難、佛にもうさく。法蔵菩薩、すでに成佛して、滅度を取りたまうとやせん。いまだ成佛したまわずとやせん。今現に在すとやせん」に対して「法蔵菩薩、今すでに成佛して、現に西方に在す。ここを去ること十万億刹なり。その佛の世界を名づけて安楽という」との問答に続いて、阿難尊者が質問を重ねる部分。三部経を通して、阿難尊者が重ねて問う部分は極めて稀である。

・本願成就、光明摂取、来迎引接が確かな事の証明と

なる。

**⑦〈法話のポイント〉**

・阿弥陀様が十劫の昔に成仏され、衆生に対して「南無阿弥陀仏と我が名を称えよ、必ず極楽浄土に救う」と呼びかけ続けて下さっておられる。しかし、煩悩具足、無明の存在故に、その阿弥陀様の呼びかけを知らず、気付かずに、六道輪廻を続けていた私達自身の現状を伝え、過去世にどのような因と縁があったのか知る由もないが、この度、人として生まれた事は仏教の道理では、仏縁によるところであり、しかもお念仏の縁があったからこそ、阿弥陀様の本願に出遇えた。この事の有難さを伝えたい。

・十劫正覚により、本願成就、光明摂取、来迎引接、四十八願が確かに成就したとの事を伝える事も大切であろう。『無量寿経』では、この一節の後に願成就文（第三十二・一・十二・三十三・十七・十三・十五・十四願）が続き、極楽浄土の荘厳、阿弥陀仏の光明寿命等が説かれている。その部分で、自分自身が有難く頂いている部分を伝えたいものである。

・阿難尊者が重ねて釈尊に問う程に、阿弥陀様の素晴らしさ、（五劫思惟、四十八願、不可思議兆載永劫の修行）が経典から伝わる。阿難尊者程の感動を凡夫である我々は感じ得る事は出来ないが、万分の一でも、阿難尊者のお心を感じ、伝えたいものである。

・阿難尊者は、釈尊の入滅時に阿羅漢果を得ていないとの理由で、第一結集の参加が認められていなかったが、釈尊の教えを誤る事なく、正確に記憶していたために参加を求められていた。釈尊の後継である摩訶迦葉尊者は阿難尊者の参加を認めなかったが、瞑想修行をすすめ、第一結集の朝に悟りを得たと伝わる。美男子故に女難を被る事が度々でありながらも、志操堅固にして修行に励むが、「定」と「慧」が定まらず悟りの境地に至らなかった。多聞第一であったが悟りを得る事が出来なかった阿難尊者が、阿弥陀様の存在の尊さに、聞かずにはいられないとの想いが伝わる一節であろう。

・阿難尊者は釈尊への取次の役割を果たしていたとの説もある。[21] 釈尊の養母、摩訶波闍波提らが出家する際、釈尊は最初認めなかったが、阿難尊者の説得で認められた。摩訶波闍波提は、一説に摩耶夫人の妹であり、同時に浄飯王に嫁いだとされる。また、焔口餓鬼が、阿難尊者を脅迫し救いを求めた事が、施餓鬼会の由来ともなる。餓鬼までもが阿難尊者にすがったとも言えるだろう。

・『一紙小消息』や『登山状』に示されるように、人として生まれ、遇い難き仏教に遇えた。しかも仏教の中でも念仏の御教えに遇い、極楽往生が叶う身となった事の有難さを伝える。三世因果の中で、今、阿弥陀様の本願に遇えた事がいかに稀であるのかを伝えたい。

【和歌・道詠など】

「我が名呼べ　必ず救うの　弥陀の声　今ようやくに逢えた悦び」（筆者詠む）

「我聞と　つとふる人の　なかりせは　いかて仏の法（のり）をしらまし」（『拾玉集』前大僧正慈鎮）

（執筆者：山田紹隆）

## 3―32「神通功徳」

**①〈讃題〉**

「阿難、かの佛の国土の諸もろの往生せる者は、かくのごときの清浄の色身、諸もろの妙音声、神通功徳を具足す」（聖典一・二四三―二四四頁）

**②〈現代語訳〉**

「阿難よ。かの〔無量寿〕仏の〔極楽〕世に往生するものはみな、確かにその姿形は清らかで、〔口から発せられる〕音声は妙なる響きであって、神通力や〔様々な〕功徳を具えている」（現代語訳・八〇頁）

**③〈キーワード／設定〉**

身相神通楽、六神通、菩薩道の実践、還相回向／年回法要、十夜会

**④〈キャッチフレーズ〉**

「覚りの力は衆生のために」

「浄土からの見守り」

**⑤〈語義・用語解説〉**

・清浄色身…身業の勝なり。即ち真金色の故に色、清浄なり。すなわち第三願（悉皆金色）の成就なり。諸相を具するが故に身、清浄なり。すなわち第二十一（三十二相）の成就なり。

・諸妙音声…口業の勝なり。弁無礙の故に、音声、妙なり。すなわち第三十（智弁無窮）の成就なり。

・神通功徳…「意業の勝なり。六通を具するが故に、意功徳なり。即ち第五と六と七と八と九と十との成就なり」[222]（『無量寿経合讃』）。

**⑥〈解説〉**

・この節は浄土に往生したものが受ける快楽（けらく）（浄仏国土において得られる安楽）の一部を説いたものである。すなわち浄土に往生したものは身口意の三業が清浄となり、身は金色、三十二相を具し、口には微妙な音声を、意には六神通等の功徳を得ることができる。

※悉皆金色・三十二相については、第三願・第二十一願の解説を参照のこと。

・この御文は、第五願（宿命智通）から第十願（速得漏尽）までの、六神通諸願の願成就文（義山）[223]である。また、第三願（悉皆金色）の願成就文でもある。

・「身相神通楽」として浄土十楽のひとつに数えられる。[224]（『往生要集』）

・六神通について、『発願文講説』には、

**得六神通**、妙用はかりがたきを神と云、自在にして塞ることなきを通と云、一宿命通、二天眼、三天耳、四他心、五神境、六漏盡通。

宿通命（マ）、極楽に往生すれば先自身の宿命を知り、及六道衆生の各々の宿命其所作の事を知て、上は弥陀大悲の恩を謝し、下は一切衆生の世々の恩を報ず、天眼通を得ては六道衆生の此に死し彼こに生じて苦を受け楽を受る相を見、又父母師長妻子の三途に落て苦しむを見る、天耳通を得ては其愁嘆の聲を聞き、他心通を得ては其心中の所念をさ

とり、神境通を得ては、十方世界に遊戯して其苦を抜き楽を與へ、漏盡通とは生死の罪縛を悉く解脱して寂然清朗なるを云、自の罪縛ありては他を度すること自由を得ず云々。（『大日比三師講説集』上・九八四―五頁）

とある。林隆碩勧学は右の順序は四十八願の説相に従ったもので、供仏利生の次第になっていると述べ、次のように相伝するとしている。

先づ　宿命を以て昔の恩所を知り　次に、天眼を以て其の在所を見　次に、天耳以つて其の音聲を聞き　次に他心を以つて衆生種々の欲相を識知し　次に、神境を以つて其の所に飛至し　而して、親近供養し、現身説法す。云々（『発願文講話』・八八頁）

・六神通は、本来であれば一つ一つ、四静慮（禅定）の難しい修行により漸く得ることのできる力であるが、浄土に往生したものには仏願力により、生得として自然に備わるのである。

三明の自然なるは佛願に乗ずればなり。須臾に合掌して神通を得る。[262]（『法事讃』）

## ⑦〈法話のポイント〉

### ◆法話のポイントと法話例

・浄土で受ける快楽は、往生人が単にそれを享受する為のものではないことは言うまでもない。六神通を得るのは、菩薩道の実践、浄仏国土成就衆生の為である。

問うて曰わく、神通には何なる次第か有る。答えて曰わく、菩薩は五欲を離れて諸禪を得、慈悲あるが故に衆生の爲に神通を取り、諸の希有奇特の事を現じて衆生の心をして清淨ならしむ。何を以ての故に。若し希有の事なければ多くの衆生をして得度せしむること能わざればなり。[263]（『大智度論』）

善導大師は「彼の国に到り已って六神通を得て十方界に入て苦の衆生を救摂せん[264]」と衆生済度の利他行としての還相廻向を説かれ、浄土教における大乗

菩薩道をお示しになられた。このことを押さえておかないと、説き方によっては神通力を荒唐無稽な超能力のように受け取るむきもあるので注意を要する。菩薩道を実践する手段として阿弥陀仏が本願に誓い、生得としてくださったのである。

我衆生を度せんと欲すれども、今未だ力を得ず。当に浄土に生じ已に悲願力を成就して生死に還入し、普く衆生を度すべし。[228]（賢洲『浄土論註研機鈔』）

・源信僧都は『往生要集』において「身相神通楽」（浄土十楽の第三）に続いて、その神通力をもって、有縁の衆生を引接できるとして「引接結縁楽」（浄土十楽の第六）を説かれている。

ところでもし極楽に生まれたのなら、智慧はあくまでも高く明晰となり、超人的な神通力は洞く達して、生まれかわるごとに恩恵を受けた者、知り合った者を意のままに極楽に連れてくることが可能である。天眼（超人的な眼力）をもってかつて生まれた所を見、天耳（超人的な聴力）をもってさまざまの声を聞く。宿命智（過去を知る超人的な智）により、かつて受けた恩を憶い、他心通（他人の心を知る超人的な智）をもって相手の心を理解する。神境通（超人的な脚力）により思うがままに意とする所へ赴き姿を変え、方便力という巧妙な手だての力を発揮して人を教誡し、導くのである。[229]（『往生要集』）

・法然上人はこれらの説示を受け、菩薩道の実践ということを第一義としながら「娑婆でご縁のあった方々を見守り、浄土へ導きたい」という我々凡夫の心を汲んで「父母師長の生所を訪ねて」など、ご縁のあった方々への還相回向を説かれている。

さそうらえば後の世を訪いぬべき人そうらわん人もそれを憑まずして、我と励みて念仏申して急ぎ極楽へ参りて、五通三明を悟りて、六道四生の衆生を利益し、父母師長の生所を訪ねて心のままに迎え取らんと思うべきにてそうろうなり。[230]（『往

生浄土用心』）

・これらを踏まえて、讃題中の神通力を説くにあたってのポイントを考えてみたい。篤信の方には、神通力を用いて大乗菩薩道を実践する、往生人の未来像を説くことが出来よう。年配の方には、老いの中で日々衰えゆく容姿や身体機能を、以前を遥かに超えて再び得ることの歓び、あるいは子や孫を浄土より見守る未来を語ることもできよう。また、年回忌などの席では亡き方からの還相廻向を説くことができる。

以下それぞれの通力について試案を述べることとする。

・「宿命通」について

阿弥陀仏自ら往生人に人間界にあった時の辛苦の模様をお尋ね下さり、共に痛み嘆いて、その苦しみは我が身の巡り合わせであるから決して他を恨んではならないとお諭し下さるという。[231]

善導大師は般舟讃の中で「父に当る阿弥陀仏は、子である往生人を迎えて説法の座に入らしめ、まず人間界にあった時の辛苦について問い給う。往生人は答えていった。前の世で五戒十戒を保っていた報いで人間界に生まれたといっても、仏法にも本願にも会わずに悪業を重ねていたのであると。阿弥陀仏と菩薩たちは自分の子供が苦しんでいた話を聞いて、みな痛み嘆き給うた。そして阿弥陀仏はもろもろの仏子に告げての給うた。自らつくった悪業によって自らの苦しみを受けたのであるから、決して他を怨んではならないと。次いで阿弥陀仏はもろもろの仏子に告げての給うのに、極楽浄土と人間界とを較べると、どのように違っているかと。往生人たちは答え奉らんとしても、悲喜こもごも来って、合掌したまま何もいうことができなかった」と説いている。[232]（『父子相迎』）

これらの説示は現に今、苦しみの中にいる聴衆の心に届くのではないか。また往生人は自分の苦しみの原因を知るとともに、今極楽にある歓びをかみしめ、

阿弥陀仏の御恩を謝す。やがて果てしない輪廻の中で六道衆生から受けた恩をも知って、それに報ずべく衆生を済度する機縁となるのである。

・「天眼通」「天耳通」「他心通」「神境通」について

これらの通力により有縁無縁の衆生を利益するに無礙なること、あるいは自在に諸仏の浄土を巡り、供養、聞法して仏道を増進することなどを伝えることができる。

さらに有縁の衆生への化益として、浄土に往生すればご縁のあった大切な方のもとに還相回向できる。あるいは年忌等の追善の席では、今は亡き大切な方から還相回向いただいているということを説けよう。

いわゆる年忌法要等の廻向では還相廻向という教えが浄土宗にあることをもっともっと大事に考えなきゃいけない。（松島定宣『浄土宗の廻向』・一五頁）

このように法然上人は、先立たれた方がこの娑婆世界に遺した方をお浄土からお守りしたい、お浄土へお導きしたいという思い、逆に、残された方が先立たれた方に見守られたい。共にそばにいて欲しいという私たちのありのままの切なる思いを大切にされたのです。なんと大らかであたたかい法然上人のみ教えでありましょうか。倶会一処にしても、還相廻向にしても、娑婆と浄土とその場をどれほど隔てることがあったとしても、先立たれた方と残された方との心と心のつながりは決して失われないという教えは、大きな悲しみにうちひしがれているご遺族の方が、これから先の人生を力強く生きていくためのこれ以上ない大きな心の支えとなることでありましょう。だからこそ私たち浄土宗僧侶は、こうした法然上人の優しさをしっかりと受けとめ、亡き方と今に生きる私たち、さらには私たちの次の世代の方々とを結ぶお念仏という命の絆をご遺族の方にもしっかりと伝えていかなければならないのではないでしょうか。（林田康順『いざというときのための布教Q&A』・

一五四―五頁）

・「漏盡通」について

三毒煩悩に纏われ悩み尽きない我が身であるが、浄土では煩悩にさいなまれることのない、寂然たる境地が得られるということを伝えられよう。その境地はもちろん衆生済度ためであることを伝えることも忘れてはならない。

**【和歌・道詠など】**

「思うこと　一つ叶えば　また二つ　三つ四つ五つ六（難）かしの世や」

「恐るべし　カッといかりの　胸の火が我とわが身を　焼きつくすなり」

「良い仲も　近頃うとく　なりにけり　隣に蔵を建てしよりのち」

「冬はまた　夏がましぢゃと　思いけり」

（以上、上田見宥編『ことばの華　道詠集録』〈総本山知恩院布教師会〉・五八―六四頁）

「吝い貪し憎い可愛いは寝る間も絶へぬ身の上」

（『的門上人全集』一・五頁）

**《法話例》**

只今は○○様の十三回忌を共々に念仏をお称えし、お勤めいたしました。お亡くなりになって十二年、○○様もこの間お浄土で益々仏道を増進（漏盡通）、身につけられたお覚りの力（神通力）をもってこの道場にご来臨されていることでしょう（神境通）。そして皆さまのお念仏の声を聞き（天耳通）、またご家族一同がお集まりの姿、とりわけ成長したお孫様の姿をご覧になって（天眼通）さぞかしお喜びになられ、またそれぞれの心の声もお聞き下っている（他心通）ことと存じます。

浄土宗の教えでは、私たちが亡き方に手を合わせるように、亡き方も残されたものが正しき道を歩みますよう思いを掛け、時には目には見えない、耳には聞こえませんが、お覚りの力をもってお護りお導きを下さるとのお示しがあります。専門の言葉で「還相廻向」と申します。

私事ではありますが、私もお師匠様、私の叔父にあたりますが、十三回忌を迎えました。叔父は北海道のお寺で住職をされており、中々普段は会う機会も少のうございましたが、尊敬するお師匠様でありました。

少し前ですが、私自身、僧侶としての在り方や、お檀家様に法を伝えるということについて悩んでいたことがありました。その折、ふと手にした浄土宗から出されている冊子に、私のお師匠様の書かれた原稿が載っておりました。随分昔に出版されたもので、その原稿の存在を知らず偶然のことでありました。

原稿を読み進めるうちにお師匠様の生前の柔らかな笑顔や口調が目の当たり蘇り、胸が一杯になりました。それと同時に私の求めていた答の手掛かりがそこに書かれていることに気が付きました。そう思い当たった時に冊子を手にしたことが単なる偶然ではなく、「お師匠様がお浄土から私に教えを下さった」としか受け取れませんでした。

そして、お檀家さまやご縁のある方から相談を受けた際、どうお答えすればよいのか迷った時に自然と「ああ、お師匠様はこんなことをおっしゃっていたなあ」とその姿や言葉を思い浮かべて、応対していたことに思い至りました。知らず知らずのうちに亡きお師匠様から、導きをいただいていたんだなあと。思わず手が合わさりました。

皆様方の中にも、あるいは同じような体験をされた方がいらっしゃるかもしれません。お浄土からのよいお便りも、受け取る側の心が閉じておりますと、素直にいただくことができません。どうぞ心を開いて、亡き人からのお導きを頂戴できますようお伝えをさせていただき、この席を閉じさせていただきます。同称十念

（執筆者：大髙源明）

## 4．参考資料（敬称略、発行年順）

### 〈讃題について〉

『説教賛題要文』（岸上恢嶺編、一八八〇）

『讃題集　吉水法語抄』（知恩院布教師会発行）
「讃題の例と解説」（浄土眞宗本願寺派総合研究所HP）[233]

〈三部経について〉

『三部経釈』（『無量寿経釈』『観無量寿経釈』『阿弥陀経釈』）
：昭法全・六七―一五八頁
：『法然全集』第一巻（『三部経大意』『無量寿経釈』『観無量寿経釈』『阿弥陀経釈』収録、現代語訳併記）
『逆修説法』
：浄全九・三八三―四一七頁
：昭法全・二三二―二七三頁、二七四―三一〇頁
：『黒谷上人語燈録写本集成1』（浄土宗総合研究所編、浄土宗、二〇一一）・一四一―二七八頁
：『法然房源空述 逆修説法』（眞柄和人・齋藤蒙光・吉原寛樹・岩谷隆法訳注、佛教大学法然仏教学研究センター、二〇二三）
『浄土三部経合讃』（観徹撰、一七二五）
：『浄土宗選集』第三・四巻（同朋舎、一九八五）に書き下し収録
『三経随聞講録』（義山講説・素中記、一七二七）
：浄全一四・二四八―七五八頁
：「義山『浄土三部経随聞講録』対照表」
（『教化研究』第一九号〈二〇〇九〉）
：「『阿弥陀経随聞講録』書き下し」
（『教化研究』第二〇号〈二〇一〇〉）
：「『無量寿経随聞講録』巻上之一―四　書き下し」
（『教化研究』第二一号〈二〇一〇〉―第二四号〈二〇一三〉）
：「『無量寿経随聞講録』巻下之一―二　書き下し」
（『教化研究』第二五号〈二〇一四〉―第二六号〈二〇一五〉）
：「『観無量寿経随聞講録』巻上　書き下し」
（『教化研究』第二七号〈二〇一六〉）
：「『観無量寿経随聞講録』巻中之一―二　書き下し」

（『教化研究』第二八号〈二〇一七〉―第二九号〈二〇一八〉）
・「『観無量寿経随聞講録』巻下之一―二（『教化研究』第三〇号〈二〇一九〉―第三一号〈二〇二〇〉）
『浄土三部経和解』（川合梁定著、宗粹社、一九二二）
「浄土三部経説教」（『浄土宗布教全書』一六所収、川合梁定著、浄土教報社、一九三一）
『浄土三部経概説　新訂版』（坪井俊映著、法藏館、一九九六）
『浄土三部経講座』（坪井俊映著、浄土宗、二〇〇二）
『総研叢書　第8集　浄土宗の「浄土三部経」理解―法然上人と親鸞聖人の相違をめぐって―』（浄土宗総合研究所編、浄土宗、二〇一四）
『【現代語訳】浄土三部経』（浄土宗総合研究所編、浄土宗、二〇一一）
『尾張教区浄土宗青年会50周年記念事業　尾張浄青研修ノート（三経一論）』（尾張教区浄土宗青年会、二〇二二）

〈その他〉

・令和五年三月二日、齊藤舜健主任研究員・井野周隆研究員を講師として所内勉強会「『三部経』について―『三部経』説教にむけて―」を開催し、ご教示いただいた。

・袖山榮輝主任研究員より講義資料「四十八願をめぐって」（全二七回分）を頂戴し、研究班内で共有させていただいた。

## 5．おわりに

本報告は、あくまでも素案であり、一例としての提案にすぎない。昨年度の報告にも記したが、讃題として頂戴する経文の内容を到底語り尽くせたとは言えないものである。これは一人ひとりが自ら考え、自らの言葉で伝えることで、初めて完成する類の資料である。

また、研究会当初より意識した点を以下に挙げておく。充分に達成できたとはいえないが、本報告をご活

用していただくにあたって皆様にもご思案いただければ幸いである。

・浄土宗の檀信徒はもとより、浄土宗以外の一般聴衆にも〝伝わる〟法話を考えてみる。

・仏教をお伝えする。その結論としての称名念仏である。仏教の中の念仏（釈尊付属の念仏）を意識する。

・インドと日本、時と場所を越えて人間共通の変わらぬ部分を説き示す。

・本願念仏の法話はもちろんのこと、仏教〔概論〕的な法話に繋がる讃題を、意識して選定する。

注

（1）『浄土宗 法話のいろは 上 基礎編』（浄土宗、二〇一七）・三三―七一頁。

（2）浄全一二・九頁上―下。

（3）昭法全・二三五頁。

（4）聖典五・二三三頁。

（5）聖典一・一五頁。

（6）聖典一・二一八頁。

（7）聖典六・五一九―五二〇頁。

（8）聖典六・三四〇頁。

（9）聖典二・一八二―一八三頁。

（10）昭法全・七九頁。

（11）「PCの普及化と「阿弥陀仏の表現」について」、『教化研究』一一。

（12）深貝慈孝「第六章　往生浄土の理解―一浄土宗教師として―」（『中国浄土教と浄土宗学の研究』、思文閣出版、二〇〇二）・四四五頁。『佛教文化研究』四五（浄土宗教学院、二〇〇一）。

（13）浄全一四・二九二頁上、『教化研究』二二・四二三頁上。

（14）浄全一四・二九二頁上、『教化研究』二二・四二三頁上―下。

（15）浄全一四・二九二頁上、『教化研究』二二・四二三頁下。

（16）浄全一四・六〇頁下。

（17）「歎仏頌」の直後に「その時、世自在王佛、この高明の志願の深広なることを知らしめて」（聖典一・二二三頁）とある。

（18）『元祖大師御法語』前篇第一、聖典六・五一九―五二〇頁。

（19）『元祖大師御法語』前篇第二二、聖典六・五二一頁。

（20）『観経疏』散善義、聖典三・二九九頁。

（21）『法事讃』下、浄全四・二五頁。

(22)「諸人伝説のことば」、聖典四・四八四頁。
(23) 浄全一四・二九二頁下、『教化研究』二二一・四二四頁上。
(24) 正蔵一四・五四四頁中。
(25)『浄土宗選集』三・七一頁。
(26) 浄全一四・二九〇頁下、『教化研究』二二一・四二〇頁下。
(27)『浄土宗選集』三・七一頁。
(28) 同右。
(29) 同右。
(30) 正蔵三八・四六四頁上。
(31)『浄土宗選集』三・七一頁。
(32) 同右。
(33)「歎仏頌」の直後に「その時、世自在王佛、この高明の志願の深広なることを知らしめて」(聖典一・二二三頁)とある。
(34) 真宗大谷派では「四十八願は阿弥陀如来の別願であり、「嘆佛偈」(歎仏頌のこと。真宗では嘆佛偈と称す。筆者注)は総願の関係にあるのであって、総願の中に別願が包まれてあり、別願もまた総願に帰着する。それを示すものが「重誓偈」(四誓偈のこと。真宗では重誓偈と称す。筆者注)である」とする。(曽我量深『嘆仏偈講話』・七頁)そしてその関係を曽我師は「「嘆佛偈」は、いわば憲法の前文で、重誓偈は結文、四十八願は如来荘厳浄土の憲法である」(曽我量深『嘆仏偈講話』・九二頁)と例えている。歎仏頌と四十八願の関係を考えるに参考となる見方であると思われる。
(35)『浄土宗布教全書』一六・二九―三一頁。
(36) 浄全四・五三〇頁。
(37) 聖典六・六五頁。
(38) 蓬茨祖運『お聖教に学ぶ1　嘆佛偈』の「『その衆、奇妙にして』〈中略〉浄土に生まれることができないような悪人も、愚かな人も聖人も凡人も、みなそろって生まれることができるということを示しているのであります」(五一―五二頁)との記述を参考にした。
(39) 聖典三・二六／一二〇頁。
(40) 浄全四・三六九頁。
(41) 聖典三・七／九九頁。
(42) 浄全一四・二九四頁上、『教化研究』二二一・四二六頁下。
(43)『浄土宗選集』三・七一―七二頁。
(44) 浄全一四・二九四頁上、『教化研究』二二一・四二六頁下―四二七頁上。
(45) 聖典一・二二三頁。
(46) 聖典一・二三四頁。
(47)『法然上人行状絵図』三二、聖典六・五三五頁。(原典は『賢愚経』の「大施抒海品」)

(48) 聖典一・二三三五頁。
(49) 大橋俊雄『法然全集』一（春秋社、一九八九）・九九頁、浄全九・三三二頁下。
(50) 辻信一監修『ハチドリのひとしずく　いま、私にできること』（光文社、二〇〇五）。
(51) 昭法全・七〇〇頁。
(52) 聖典一・二七五―二七六頁。
(53) 浄全一四・三七〇頁上、『教化研究』二四・一四四頁下。
(54) 聖典一・二七五―二七六頁。
(55) 昭法全・七三頁。
(56) 昭法全・七三頁。
(57) 昭法全・七四頁。
(58) 昭法全・七〇〇頁。
(59) 聖典一・二七五―二七六頁。
(60) 聖典一・二四四
(61) 浄全一四・四二二四頁上、『教化研究』二五・三〇二頁上。
(62) 聖典一・二七五―二七六頁。
(63) 昭法全・七三頁。
(64) 昭法全・七三頁。
(65) 昭法全・七四頁。
(66) 昭法全・六五二頁
(67) 浄全一四・三〇九頁下、『教化研究』二二・四五一頁上。
(68) 昭法全・二三三頁。
(69) 浄全一四・三〇九頁下、『教化研究』二二・四五〇頁下―四五一頁上。
(70) 浄全一〇・一九四頁。
(71) 『四休菴貞極全集』中・六九一頁上。
(72) 浄全一四・二八七頁下、『教化研究』二四・一七五頁上。
(73) 浄全一四・二八七頁下、『教化研究』二四・一七五頁上。
(74) 浄全一四・四三四頁上、『教化研究』二五・三二三頁上。
(75) 浄全一四・三一〇頁上、『教化研究』二二・四五一頁下。
(76) 浄全一四・三〇九頁下―三一〇頁上、『教化研究』二二・四五一頁下。
(77) 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』、四一頁。
(78) 浄全一四・三一四頁上、『教化研究』二二・四五八頁上。
(79) 浄全一四・三一四頁上、『教化研究』二二・四五八頁下。
(80) 浄全一四・三一四頁下、『教化研究』二二・四五九頁上。
(81) 浄全一四・三一四頁上、『教化研究』二二・四五八頁上。
(82) 浄全一四・三九八頁上、『教化研究』二五・二六三頁下。
(83) 聖典一・二四七頁。
(84) 現代語訳・八五頁。
(85) 『法然上人行状絵図』三二、聖典六・五二〇頁。道綽禅師が『安楽集』に引用している、『浄度菩薩経』に基づく御文である。

(86) 聖典一・三〇〇頁。
(87) 昭法全・二四六―二四七頁。
(88) 坪井俊映『浄土三部経概説』新訂版（法藏館、一九九六）・八七頁参照。
(89) 上田見宥「阿弥陀仏をどう説くか」（『佛教文化研究』四六、浄土宗教学院、二〇〇二）参照。
(90) 浄全一四・三七〇頁下、『教化研究』二四・一四五頁下。
(91) 伊藤真宏『法然さま二十三のお歌―こころにふれる教えに親しむ―』（浄土宗、二〇一八）。
(92) 伊藤真宏『法然さま二十三のお歌―こころにふれる教えに親しむ―』（浄土宗、二〇一八）。
(93) 「読売新聞」二〇一四年、四月一三日。
(94) 浄全一四・三一五頁上、『教化研究』二二・四六〇頁上。
(95) 浄全一四・三七五頁下、『教化研究』二四・一五四頁上。
(96) 聖典一・三一八頁。
(97) 昭法全・二四八―二四九頁。
(98) 聖典四・二八八頁。
(99) 『阿弥陀経』に「今現に在して説法したまう」（聖典一・三一六頁）とある。
(100) 浄全一四・三七六頁上、『教化研究』二四・一五四頁下。
(101) 浄全一四・四六〇頁上、『教化研究』二五・三六八頁上。
(102) 聖典一・三一八頁。
(103) 昭法全・二四九頁。
(104) 聖典一・二六二頁。
(105) 聖典一・二六八―二六九頁。
(106) 聖典一・二七四頁。
(107) 聖典一・二七四―二七五頁。『無量寿経』五悪段参照。
(108) 聖典四・四四四―四四五頁。
(109) 川合梁定『浄土三部経和解』・八八頁。
(110) 浄全一四・三一八頁下、『教化研究』二三・二六九頁上。
(111) 浄影寺慧遠『無量寿経義疏』（浄全五・二七頁上）。
(112) 道光『無量寿経鈔』（浄全一四・八八頁上）。
(113) 浄全一四・三一八頁下、『教化研究』二三・二六八頁上。
(114) 『阿弥陀経』「六方段」（聖典一・三一九―三二一頁）。
(115) 第三十七人天致敬願は、阿弥陀様の御名を聞いた人天が菩薩行を修して、人天から敬われるという願であるが、当願によってすべての世界で阿弥陀様の御名を聞くことができるからこそ成り立つ願であるといえる。
(116) 法然上人の『三部経釈』には「名号をもて因として衆生を引接したまう事を一切衆生に遍く聞かしめんがため」（聖典四・二八七頁）とあり、道光『無量寿経鈔』には「我等、今、往生の教に値うも、偏に此の願の恩なり。善く之を思念せよ」（浄全一四・八八頁下）とあることからも理解される。また、次に続く第十八念仏往生願も当願によって阿弥陀様

の御名を聞く（聞名）ことによって、有効となる願であるといえるであろう。

(117) 浄全一四・三七五頁上、『教化研究』二四・一五二頁下―一五三頁上。

(118) 浄全一四・四〇〇頁上、『教化研究』二五・二六六頁上下。

(119) 浄全一四・四一〇頁上、『教化研究』二五・二八一頁上下。

(120) 所謂、四誓偈に「我れ仏道を成ずるに至らば名声十方に超え、究竟して聞こゆる所なくんば、誓って正覚を成ぜじ」（聖典一・四〇頁）とあり、当願との関係を指摘することができるであろう。尚、四誓偈を法話に活用する際には次の研究が大いに参考になる。

郡嶋昭示・北條竜士「四誓偈」（常用の偈文を通した法話の研究（一）」、『教化研究』三三・二九八―三〇三頁）

(121) 阿弥陀様の御名を聞くという因によって私たちは往生したいと願い、お念仏をお称えしているわけである。阿弥陀様の御名を聞くことの有難さもお伝えしたいところである。

(122) 聖典四・四二六頁。

(123) 『国訳一切経　毘曇部』二六下・四一頁、正蔵二九・九三頁下。

(124) 「善導『観経疏』現代語訳②」（『教化研究』三一・四三八頁下―四三九頁下）、聖典二・二三七―二三八頁。

(125) 聖典四・五一一頁、『元祖大師御法語』後篇第一九「孝養父母」参照。

(126) 浄全一・二三五頁下―二三六頁上。

(127) 浄全一・二三六頁上。

(128) 浄全一・二三六頁上。

(129) 『法事讃』巻上、浄全四・八頁下。

(130) 浄土宗総合研究所編『黒谷上人語燈録写本集成1』（浄土宗、二〇一一）・二〇七頁。

(131) 浄全一四・四〇〇頁上、『教化研究』二五・二六六頁上。

(132) 浄全一四・四一五頁下、『教化研究』二五・二九二頁上。

(133) 聖典二・三一九頁。

(134) 『観経』下品下生には、「あるいは衆生あって、不善の業たる五逆十悪を作して、諸もろの不善を具す。〈中略〉かくのごとく至心に、声をして絶えざらしめ、十念を具足して、南無阿弥陀仏と称す。念念の中において、八十億劫の生死の罪を除く、命終の時、金蓮華の、なおし日輪のごとくなるが、その人の前に住するを見る。一念の頃のごときに、すなわち極楽世界に往生することを得」（聖典一・三一二―三一三頁）とある。

(135) 浄全四・四頁上。

(136) 前注二二二。

(137) 「流転三界中　恩愛不能断　棄恩入無為　真実報恩者」。

(138) 聖典一・二六二頁。

(139) 現代語訳・一三二頁。
(140) 聖典四・四六二頁。
(141) 聖典四・四一七頁。
(142) 例えば、『登山状』に見られる「五劫思惟」の御法語（聖典六・五三一頁、『元祖大師御法語』前編第六）をお伝えする。
(143) 聖典四・四六一頁。
(144) 『一紙小消息』、聖典四・四二〇頁、昭法全・五〇〇頁。
(145) 『登山状』、聖典六・五三〇頁、昭法全・四一六頁。
(146) 聖典四・四三七頁。
(147) 中村元訳『ブッダのことば―スッタニパータ―』・一七六頁。（第四　八つの詩句の章、三悪意についての八つの詩句）
(148) https://www.ad-c.or.jp/campaign/self_all/self_all_02.html
(149) 昭法全・七八頁。
(150) 昭法全・四五頁。
(151) 昭法全・二四〇頁。
(152) 聖典三・一八一頁、昭法全・三四六頁。
(153) 坪井俊映『浄土三部経概説』新訂版（法藏館、一九九六）・八七頁参照。
(154) 浄全一四・四〇二頁下、『教化研究』二五・二六九頁上。
(155) 照法全・二九頁。
(156) 照法全・三二頁。
(157) 照法全・二三四頁。
(158) 浄全一四・九一頁下。
(159) 聖典一・三〇六頁。
(160) 聖典一・三一八―三一九頁。
(161) 昭法全・二三四―二三五頁。
(162) 聖典六・五八三頁。
(163) 奥野修司『看取り先生の遺言―がんで安らかな最期を迎えるために』（文藝春秋、二〇一三）・二〇四頁。
(164) 「尊号真像銘文」、『浄土真宗聖典』・六五七頁。
(165) 「親鸞聖人御消息」、『浄土真宗聖典』・七三五頁。
(166) 『新纂浄土宗大辞典』「三十二相」参照。
(167) 聖典三、一二一頁。
(168) 菩薩については、「常用の偈文を通した法話の研究（一）」「総願偈」の項目も参照されたい（『教化研究』三三・三四七―三五三頁）。
(169) 同注一六六。
(170) 新編日本古典文学全集４２『神楽歌　梁塵秘抄　催馬楽　閑吟集』（小学館、二〇〇〇）・一九一頁
(171) 浄全一四・三三九頁上、『教化研究』二三・三〇一頁上。
(172) 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』・四一頁。
(173) 浄全一四・三三九頁上、『教化研究』二三・三〇一頁上。

(174)「四誓偈」には「衆の為に法蔵を開きて、広く功徳の宝を施し」（聖典一・二三三頁）とある。世俗の宝（宝蔵）ではなく、仏法の蔵（法蔵）を開け放ち、その功徳を施して「普く諸もろの貧苦」を救うためである。
(175) 聖典一・二九三頁。
(176) 浄全一四・三六七頁下、『教化研究』二四・一四〇頁下。
(177) 浄全一四・三八三頁下、『教化研究』二四・一六八頁上。
(178) 浄全一四・三八五頁上、『教化研究』二四・一七〇頁上。
(179) 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』・四一頁。
(180) 浄全一四・三七三頁下、『教化研究』二四・一五〇頁上。
(181) 浄全一四・三七三頁下、『教化研究』二四・一五〇頁下。
(182)「往生浄土用心」（昭法全・五六〇頁）
(183)「常用の偈文を通した法話の研究（一）」参照（『教化研究』三三、「摂益文」〈三二九―三三六頁〉、「三身礼」〈三五三―三五九頁〉）。
(184) 角田俊徹編『四休庵貞極全集』下巻下、二〇三七―二〇三八頁。
(185)『浄土宗新聞』平成三〇年一〇月号（巻頭コラム「鐸声」）。
(186) 浄全一四・三四三頁上、『教化研究』二三・三〇七頁上。
(187) 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』、四一頁。
(188) 浄全一四・一一三頁下。
(189) 浄全一四・一一三頁下―一一四頁下。
(190) 浄全一四・三四二頁上、『教化研究』二三・三〇五頁下。
(191) 道光『無量寿経鈔』（浄全一四・一一七頁下）
(192)「聞名」については第十七諸仏称揚願を参照のこと。第十七願の通り、十方の諸仏が阿弥陀様の御名を称えるからこそ、当願において天人や人々が聞名するのである。
(193) 義山『無量寿経随聞講録』（浄全一四・三四五頁下）。他の諸師の注釈もほぼ同じ解釈である。
道光『無量寿経鈔』（浄全一四・一一八頁下）。
観徹『無量寿経合讃』（『浄土宗選集』三・一〇一頁）。
川合梁定『浄土三部経和解』・一〇九―一一〇頁。
(194) 義山『無量寿経随聞講録』（浄全一四・三四六頁上）。但し、義山が述べているように敬われるのは、自身が偉いから敬われるのではなく、あくまで阿弥陀様の願功によるものなのである。
(195) 川合梁定『浄土三部経和解』・一〇九―一一〇頁。
(196) 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』・四一頁。
(197) その上で、彼岸会等では菩薩行としての六波羅蜜の実践を法話の題材として説くこともできるであろう。
(198) 浄全一四・三四六頁下、『教化研究』二三・三一三頁上。
(199) 浄全一四・三四六頁上、『教化研究』二三・三一二頁上―下。
(200) 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』・四一頁。
(201)『浄土宗選集』三・一〇三頁。

(202) 浄全一四・一二〇頁。

(203) 聖典一・六三頁。「その諸もろの声聞・菩薩・天・人、智慧高名に神通洞達し、咸同じく一類にして、形異状なし。ただ余方に因順するが故に、天・人の名あり。顔貌端正にして、世に超えて稀有なり。容色微妙にして、天にあらず人にあらず、皆自然虚無の身、無極の体を受く」（聖典一・二四四頁、浄全一・一七頁）。

(204)『佛典講座　浄土論註』・四〇〇―四〇一頁。

(205)『往生論註記』、浄全一・三三九頁。

(206) 川合梁定『浄土三部経和解』・一一一頁。

(207) 浄全一四・一二〇頁。

(208) 浄全一四・一二〇頁。

(209) 浄全一四・三九五頁上、『教化研究』二四・一八八頁上。

(210)『浄土宗選集』三・一六八頁。

(211) 聖典一・二六一―二六二頁。

(212) 上田見宥編『ことばの華　道詠集録』（総本山知恩院布教師会）・五八頁。

(213) 聖典一・三二六頁。

(214) 浄全四・三六九頁。

(215) 昭法全・四七八頁。

(216)『随聞講録』に、「虚偽諂曲」は「心過を離るることを明かす」とあり、「和顔」は「身過を離るることを明かす」とあり、「愛語先意承問」とは「口過を離るることを明かす」とある。（浄全一四・一一三頁下―一一四頁上、『教化研究』二四・一二八頁下―一二九頁上）

(217) 例えば、九条兼実、式子内親王、熊谷次郎直実、平重衡、高砂の浦の漁師夫婦、室の泊の遊女などに対する教化を挙げることができよう。法然上人の真摯な教化姿勢を感じ取ることができる。

(218) 無財の七施…布施行の一種で仏教徒が心がけねばならない態度。『雑宝蔵経』六の「七種施因縁」に「是れ七施と名づく。財物を損せずと雖も大果報を獲る」（正蔵四・四七九中）と説かれており、財物がなくても他者に布施をなすことのできる七つの行い。①眼施。相手を憎むことなく、好ましい眼差しで接すること。②和顔悦色施。和やかな喜びの顔つきで接すること。③言辞施（または愛語施ともいう　※筆者挿入）。相手に柔らかい思いやりのある言葉をかけてやること。④身施。相手を敬い、我が身を惜しむことなく、他に尽くしていくこと。⑤心施。善い心で相手の立場にたち心をかけていくこと。⑥床座施。相手に座席を設けたり、譲ったりすること。⑦房舎施。自分の家を一夜の宿として提供すること。（『新纂浄土宗大辞典』）

(219) 上田見宥編『ことばの華　道詠集録』、（総本山知恩院布教師会）・一八五―一八六頁。

(220) 聖典一・三一八頁。
(221) 袖山榮輝主任研究員よりご教示いただいた。
(222) 『浄土宗選集』三・一五七頁。
(223) 浄全一四・三八七頁下、『教化研究』二四・一七五頁上。
(224) 浄全一五・五五頁。
(225) 浄全四・二〇頁。
(226) 正蔵二五・二六四頁。
(227) 『往生礼讃』、浄全四・三六〇頁上。
(228) 続浄五・五〇四頁。
(229) 『日本の名著　源信』・一一八頁。
(230) 聖典四・五五二頁。
(231) 『般舟讃』、浄全四・五三六頁／『父子相迎』、続浄八・七六頁。
(232) 村瀬秀雄訳『三部仮名鈔の全訳　念仏の要諦』（常念寺・一九八三）・二六二―二六三頁。
(233) http://j-soken.jp/category/ask/ask_7/ask_7_5
讃題一五例について、○現代語訳、○全体の味わい、○みの教えのポイント、○法話作成のヒント、○語釈といった解説を掲載している。

令和五年度　科学技術の進展に伴う社会の変化と浄土宗の対応　研究成果報告

# 移植医療にどう向きあうか

移植医療の進展により、多くの命が救われるようになったのは紛れもない事実です。平成17年（２００５）に「臓器の移植に関する法律」（以下、臓器移植法）が改正されて以降、脳死者からの臓器提供は確かに増加していますが、慢性的な臓器不足が解消されたとはいえません。臓器移植法の改正以降、臓器移植が世間に大きく注目されることは少なくなったように感じる一方で、移植医療に関連する技術は着実に進み、臓器移植をめぐる状況も従来とは異なる様相を呈してきました。例えば、ｉＰＳ細胞やＥＳ細胞を利用した再生医療研究やゲノム編集技術などが進展普及し移植医療に取り入れられてきたこと、移植用臓器を遺伝子操作したブタによって供給する「異種移植」が臨床応用され始めたこと、患者の生存を目的とするわけではない移植医療（子宮移植）が出現し普及の兆しを見せていること、などです。私たちはこうした移植医療の変化をどう捉え、どう向き合うべきなのでしょうか。

研究所ではかつて、「『臓器の移植に関する法律』の改正についての見解」（『宗報』２００５年7月号）および総研叢書『いのちの倫理』（２００８）を発表しましたが、今日、あらためて移植医療に注目し検討する必要があると考え、調査研究を開始しました。研究は2年計画で、昨年度は、主に移植医療をめぐる現状について調査を行い、問題点や懸念点に言及しました。

本年度はそれを踏まえて、移植医療の実際や問題点をさらに深く掘り下げたうえで、私たち一人一人が判断を迫られた場合に考慮すべきポイントや基本的な向きあい方を考えていきます。

本年度の成果報告の構成と担当は以下の通りです。第一章では移植医療の実際と関係者が抱える苦悩について詳述し、第二章では臓器移植という医療のとりわけ影の部分について取り上げます。第三章では今期2年間のまとめとして、臓器移植という医療に対してどう向きあっていったらよいのか、私たちなりの考えを述べることとします。

第一章　臓器移植の実際と関係者の苦悩

1　移植コーディネーターの関わりと実態（伊藤竜信）

2　臓器提供する家族の決断のうちにある思い（平子泰弘）

3　移植後の健康管理の課題（水谷浩志）

第二章　臓器移植の光と影

1　海外渡航移植の実態と問題点（坂上雅翁）

2　小児臓器移植をめぐる問題点（岡崎秀麿）

3　生体移植の問題点（吉田淳雄）

4　異種移植の倫理的課題（熊谷信是）

第三章　移植医療に私たちはどう向きあうか

1　浄土宗総合研究所の見解（吉田淳雄）

2　異種移植をどう考えるか（熊谷信是）

おわりに

【主務・吉田淳雄】

## 第一章　臓器移植の実際と関係者の苦悩

### 1　移植コーディネーターの関わりと実態

#### 1．はじめに

臓器移植は病気や事故などにより臓器の機能が低下し、移植でしか直らない人に、他の人の臓器を移植し健康を回復する医療です。臓器提供者（ドナー）から

移植希望者（レシピエント）への臓器提供が無ければ成り立たず、実施に際しては、複数の医療施設と多数のスタッフの緊密な連携が必要となります。またその実施プロセスの中に「脳死」の判定や家族との死別、それに伴う悲嘆へのケアなどが含まれ、実務上の手続きや、関わる人々の心理的な負荷が大きな医療でもあります。

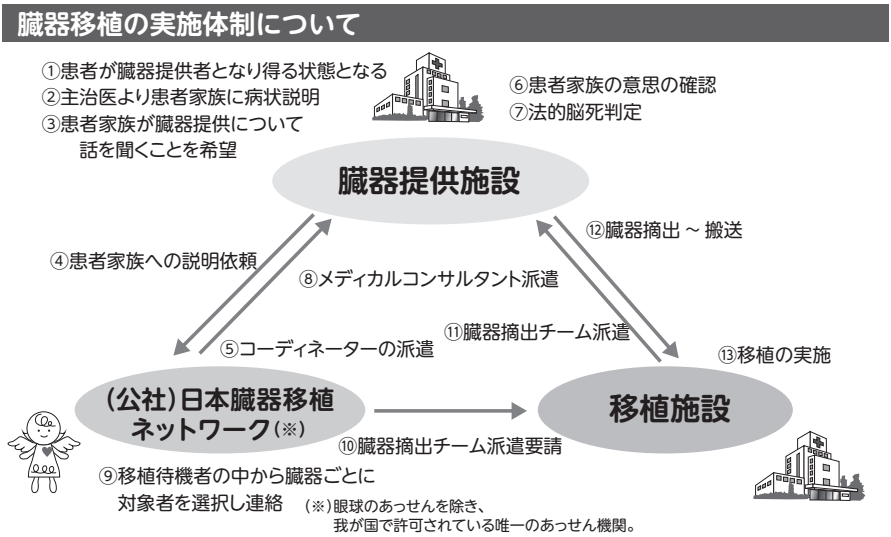
移植医療の中で、こうした実務・コミュニケーション面の調整を誰が行っているのか、レシピエントや遺族ケアの担い手は誰かについて調べたところ、「臓器移植コーディネーター」が大きな役割を果たしていることが分かりました。臓器移植コーディネーターは臓器移植手術のあっせんや手続き業務を行う職種ですが、ドナー家族やレシピエント本人と直接対面し、移植の一連の流れに関わりつつ様々なサポートを行い、その後の遺族のケアにも携わるなど、心理的・社会的なケアの担い手にもなっています。

本稿では、臓器移植の実施体制とそのプロセス（図1 ①〜⑬）を参照し、コーディネーターの関わりを概観し、その関わりの実態について紹介したいと思います。

## 2. 移植コーディネーターについて

臓器移植の実施には多くの医療機関が関わります。まずドナーとなる患者の主治医となり脳死の判定を行い、臓器の摘出手術が行われる臓器提供施設。移植を実施する移植施設。そしてこの医療全体をコーディネートし、レシピエントの選択にも関わる日本臓器移植ネットワーク（以下 JOT: Japan Organ Transplant Network）です。(1) ＪＯＴは、死後に臓器を提供したい人と臓器移植を希望する人の橋渡しや、希望者の登録、移植医療の普及啓発などを行う公益社団法人で、全国の自治体や腎・臓器バンク、医療機関と協働しています。

臓器移植の提供事例の際、ＪＯＴから派遣されコーディネート業務にあたるのが「臓器移植コーディネー




(資料)「臓器の移植に関する法律」の運用に関する指針（ガイドライン）
（平成９年10月８日健医発第1329号厚生省保健医療局長通知別紙）等を元に作成。

図１

ター」です。(1)・i　事例があると約10名のコーディネーターや医療アシスタントによるチームが設置されます（JOT内に5～6名、医療現場に4～5名）。移植コーディネーターには大きく分けてドナー側に関わる「ドナーコーディネーター」と、レシピエント側に関わる「レシピエントコーディネーター」があります。

## 3. 臓器移植の実施プロセスと移植コーディネーターの関わり

ここからは、図1にある臓器移植の実施プロセスを追いながら考察したいと思います。

①患者が臓器提供者となり得る状態となる。

②主治医により患者家族に病状説明

③患者家族が臓器提供について話を聞くことを希望

④患者家族への説明依頼

事故や病気による脳障害などで入院した人に対し、最善の救命治療を行ったにもかかわらず、回復の可能性がなく、救命が不可能であると診断された場合の終

末期医療の選択肢の一つとして、臓器提供があります。そうした「脳死とされうる」状況を前提として、主治医から家族に病状の説明が行われ、その際に家族から「臓器提供について詳しい説明を聴きたい」との申し出があった場合、主治医からＪＯＴに情報提供の依頼が入ります。

⑤コーディネーターの派遣

⑥患者家族の意志の確認

依頼を受けたＪＯＴは、ドナーコーディネーターを当該施設に派遣し、患者家族に臓器移植の情報提供を行います。この後、臓器提供の意思の確認となりますが、ドナーが事前に臓器提供の意思表示をしていたとしても、直前に家族が躊躇することや、反対を表明することもあり、強制することなく決断を待ちます。家族にとってはもっとも心が揺れる場面であり、決断と葛藤の場面でもあります。コーディネーター自身の言葉によれば、この時間が医療者にとっても心理的負担の大きい時間であるそうです。(1)-ⅱ、(2)。

⑦法的脳死判定

⑧メディカルコンサルタント派遣

家族が臓器移植を承諾すると、臓器移植に無関係な2人以上の医師により法律に基づいた脳死判定が行われます。「深い昏睡にあること」、「瞳孔が固定し一定以上開いていること」、「刺激に対する脳幹の反射がないこと」、「脳波が平坦であること」、「自分の力で呼吸ができないこと」の5項目を検査し、6時間以上経過の後に同じ一連の検査（2回目）を行い、状態が変化せず、不可逆的であることの確認をし、脳死と判定されます。(1)-ⅲ この脳死判定には、希望すれば家族が立ち会うことも可能です。

この間、ドナーコーディネーターは臓器提供の承諾書を作成し、臓器移植の計画を立案、臓器の検査手配などを行います。またＪＯＴからはドナーの状況や臓器の機能などを評価するメディカルコンサルタント（医師）が派遣され、医療面でのサポートを行います。(3)

一人のドナーからは心臓、肺、肝臓、膵臓、腎臓、小腸、眼球（角膜）などの臓器が移植可能ですが、年齢や病歴、健康状態などにより状況が異なるため、精密な事前検査が必要です。(1)-ⅳ　またこの間の家族へのケアもドナーコーディネーターが担っています。

⑨移植待機者の中から臓器ごとに対象者を選択し連絡

⑩臓器摘出チーム派遣要請

⑪臓器摘出チーム派遣

臓器提供が可能になると、ＪＯＴでは登録している移植希望者から、臓器ごとに最も適合したレシピエントが選定されます。その選択基準には、臓器の適合条件（腎臓の場合は前提条件）として、血液型やサイズ、感染症などの抗体反応、虚血許容時間（血を失ってからの機能の持続時間）などがあり、また医学的緊急度や血液型による具体的選択方法、術式、年齢、施設の所在地、待機時間などにより優先順位が決められています。また、全臓器においてドナー（臓器提供者）が親族優先提供の意思表示をしている場合には、医学的な適合条件等を満たせば親族に優先的に提供することもできます。(1)-ⅴ

ＪＯＴのコンピューターにドナーの医学的データが入力されると、臓器ごとに優先順位の高い候補者が選ばれ、第一候補者から順に主治医に連絡が入り、移植可能な状況かどうか、本人に移植を受ける意思があるかどうかの確認が行われます。

この間ドナーコーディネーターは摘出手術について、麻酔科医・手術室看護師・病理医等と打ち合わせを行い、また想定される搬送手段（ヘリコプター・救急車・チャーター機等）や関連する機関（消防・警察・空港等）との調整を行います。

レシピエントが決定されると、移植施設から臓器提供施設へ、専門医による臓器摘出チームが派遣されます。

⑫臓器摘出～搬送

摘出チームの到着後、ドナーの状態の最終確認が行われ摘出手術が行われます。提供施設内でのチームへ

のアテンドや情報提供、ミーティングの手配などもドナーコーディネーターの役目です。また手術前の家族への最終確認や、追悼の黙祷の合図もコーディネーターが行っています。(4) 手術は3〜5時間ほどかかり、摘出された臓器は、移植に適するかどうかの検査や、移植しやすい形に処置を施されます。臓器が摘出されたドナーの身体は、手術跡が目立たないように傷口を縫い合わせ、形が崩れないように処置を施されます。

摘出された臓器はクーラーボックスに納められ、摘出チームのスタッフにより移植施設に搬送されます。機能を保持しておける時間が非常に短い臓器もあり、迅速な搬送が必要な場合、ドナーコーディネーターが自ら搬送することもあるそうです。

ドナーの臓器の搬送を家族と共に見送る場面は、様々な心の揺れが引き起こされる場面でもあり、コーディネーターの寄り添いは特に重要とされています。

⑬移植の実施

移植施設に臓器が到着し、レシピエントへの移植手術が行われます。ここからはドナーコーディネーターに代わり、レシピエントコーディネーターがその任を果たします。(5)

レシピエントコーディネーターは多くの場合、移植施設に所属する医療者（医師・看護師など）が兼任しており、レシピエント本人やその家族に情報提供を行うほか、移植の承諾対応、手術実施のための手続きを行い、また手術後には、回復のサポートやカウンセリング、退院後の健康チェック、術後の生活指導、家族のアフターケアなども行っています。

○〝その後〟のドナー家族へのケア

上記までの実施プロセスが終了した後もドナーコーディネーターの業務は続きます。摘出手術終了後、ドナーの身体は手術創（あと）が目立たないよう処置を施され、家族のもとに帰り、通常の遺体と同じ形で弔いを待ちます。コーディネーターはこの場に立ち会うほか、家族の社会的なアフターフォローや、メンタルケアなどにも対応しています。ドナーの通夜や告別式

に参列する場合もあるそうです。またレシピエントの経過などの各種報告、様々なサポート情報を提供する冊子『大切な人を亡くされた方へ』(6)の配布、対面サポートを行う「みどりのカフェ」の対応や、支援を行う集会・窓口への紹介を行うなど、コーディネーターはドナー家族に対する継続的なケアの担い手にもなっています。

移植医療といえば脳死を前提とした臓器移植、いわゆる脳死・臓器移植ばかりが注目されますが、それだけではなく、移植医療という医療は多岐に及びます。

臓器とは、様々な細胞が集積し機能を持った器官のことです。心臓、肝臓、腎臓、膵臓、脾臓、肺臓など臓という文字がついた器官や胃、小腸、大腸のような内臓器官、目、鼻、耳、舌のような感覚器官があります。組織とは、器官を構成する機能と構造を持った細胞の集合体で、皮膚、筋肉、血管、骨、角膜、硬膜などです。血液も組織として分類されますが、多様な機能を果たしているため最も簡単な臓器と考えられることもあります。骨髄移植は骨髄幹細胞を移植するため細胞移植とも定義されます。増殖能力の高い幹細胞を移植し組織の再生を期待する再生医療も、移植医療の一分野といえます。

組織や臓器のドナーは、最も適合性がよいのが本人の自己組織や細胞ですが、適用できる条件が限定されています。そこで、組織や臓器の提供を希望する人からの移植が行われている他、人工物の移植や人間以外の動物からの移植が試みられています。

腎臓、膵臓、角膜、骨、脂肪、皮膚および組織については心臓死した遺体から取り出した臓器での移植が可能ですが、心臓に関しては生きている状態で移植する必要があり、脳死という状況が唯一移植可能な状態です。脳死とは、脳のすべての機能が回復不可能な段階まで達した状態のことで、そのままにしておけば程なく心肺停止状態になり移植が出来なくなります。つまり、脳死という死の定義は心臓を移植するということを前提として導入されたものといえます。だからこ

そ脳死・臓器移植が特別な問題として採り上げられるのです。

## 4. 臓器移植コーディネーターの関わりと現状

これまで見てきたように、臓器移植コーディネーターは移植手術の全般に関わり、重要な役割を果たしています。事務的な手続きはもちろん、医療側のサポートやレシピエント本人、ドナー家族の心のケアに到るまで、その業務は多岐にわたります。

また現場での業務のみならず、普段は臓器移植の記録作成やデータ管理などのデスクワークを行い、ドナー家族のケア、さらには臓器移植医療の啓発活動も担っています。

２０２３年現在、ＪＯＴ所属のドナーコーディネーターは28名、都道府県に所属し、ＪＯＴの委嘱を受けているコーディネーターは58名です。(7) 現在日本で実施されている脳死臓器移植の件数は年間１００例前後（２０２３年は１０６例）ですが、移植手術のプロセスを概観しただけでも、膨大な業務を抱えていることが窺えます。コーディネーターの経験談には「事例発生に備え、携帯電話が手放せない」、「病院に連泊し数日帰れない」、「十分な睡眠時間が取れない場合も多い」との言葉が散見されます。(1)-ii、(8)

その業務の多忙さや負担の重さ、人員不足の現状は厚労省の委員会でも取り上げられ（1事例の平均対応時間が1人あたり1カ月に２７２時間。過労死リスクが高まる月の労働時間は月２５０時間以上）、今後の業務量の軽減と人材の確保が議論されています。(9)

## 5. コーディネーターを取り巻く環境

移植医療の現場でコーディネーターが果たす役割は極めて大きく、実務上、「居なければ成り立たない」と言っても過言ではありません。この過酷な業務を支える〝やりがい〟として、コーディネーターの談話には「人の優しさや生きることへの思い、レシピエントの感謝の気持ちに触れた」ことや、「医療を通して人

と人とをつなげ、提供者の家族の納得を叶えられたこと」などが挙げられ、移植医療が持つ可能性への希望や期待が支えとなっていることが語られています。(1)-ii、(8)

しかしその一方、移植の現場で様々な感情や価値観が錯綜する場面に立ち会い、その複雑さに苦悩したという経験談や、臓器提供のために『いのち』を操作しているような感覚にとらわれたという心情を吐露するコーディネーターもいます(2)。

移植医療における「脳死」の捉え方や、提供意思の確認方法、倫理上の問題点（レシピエントはドナーの死を待望しているのか、臓器移植は脳死者を切り捨てる医療なのか、など）については、批判的なものも含め様々な意見が示されています(12)。

移植コーディネーターは、移植医療が持つ理想（臓器提供により救える命を一つでも多く救う）と現実（それはドナーの死を持ってしか実現できず、また様々な議論を呼び起こすものでもある）の姿を、当事者たちに最も近い位置で見ている職種だと言えるかもしれません。

本稿が、移植コーディネーターの関りを通して、移植医療の一端を知るきっかけとなれば幸いです。

## 参考文献・WEBサイト


(1) 公益社団法人　日本臓器移植ネットワーク（JOT）
https://www.jotnw.or.jp/　JOTホームページより

(1)-i　臓器移植コーディネーター
https://www.jotnw.or.jp/recruit/job/coordinator/

(1)-ii　臓器移植コーディネーターの手記
https://www.jotnw.or.jp/note/detail.php?id=174

(1)-iii　法的脳死判定の検査方法
https://www.jotnw.or.jp/explanation/03/03/

(1)-iv　臓器提供を見据えた患者評価・管理と術中管理のためのマニュアル令和4年版
https://www.jotnw.or.jp/files/page/medical/manual/doc/manual202203.pdf

(1)-v　レシピエント選択基準(2)
https://www.jotnw.or.jp/explanation/04/03/

(2) 石井賀洋子「第16章　看護・臓器移植と宗教心理学」(『宗教が拓く心理学の新たな世界』福村出版２０２３)
(3) 小野稔「メディカルコンサルタントの現状と今後の課題」(『移植48巻２／３号』日本移植学会)
(4) 「摘出チームの心構え・脳死臓器提供の流れ」(日本移植学会　脳死下臓器採取術マニュアル　改訂版２０２１)
https://www.asas.or.jp/jst/pdf/manual2021/002.pdf
(5) 認定レシピエント移植コーディネーターの役割と意義(『Organ Biology 20巻1号』日本臓器保存生物医学会)
(6) 『大切な方を亡くされた方へ』(ＪＯＴ提供施設委員会ドナー家族ケア部会発行　２０２１)
(7) 厚生労働省　第55回臓器移植委員会 資料２-３「1臓器移植コーディネーターの現状　2提供家族ケアの取り組み」2021.06.16
https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000792819.pdf
(8) インタビュー・臓器移植コーディネーター北中亜未さん(朝日新聞デジタルマガジン)
https://www.asahi.com/and/article/20180125/400033287/
(9) 厚生労働省　第64回臓器移植委員会 資料1「臓器移植医療対策のあり方に関する提言」に対する取り組み」2023.07.06
https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001117568.pdf
(10) 厚生労働省　第65回臓器移植委員会 参考資料1「臓器移植対策の現状について」2023.11.15
https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001167551.pdf
(11) 小松美彦・市野川容孝・田中智彦　編『いのちの選択――今、考えたい脳死・臓器移植』(岩波ブックレット７８２ 岩波書店２０１０)

【伊藤竜信】

## 2　臓器提供する家族の決断、そこに生じるさまざまな思い

### 脳死判定による臓器移植の増加

私たち宗教者はさまざまな最期を迎えた方の葬儀を行う機会もあると思います。幼い子を亡くした親の悲しみや、突然の事故や自死に直面した遺族の悲嘆を受け止めることも多いことでしょう。脳死判定を受けて臓器移植に至るニュースを耳にすると思いますが、そこにも家族の脳死を受け入れて、別れをせざるを得な

い遺族が存在します。臓器の提供を決意した遺族がどのような思いを感じているかをご存じでしょうか。

臓器移植法が１９９７年に施行されてから26年、臓器提供を前提とした脳死判定が１０００件を超えたことが報道されています。２０１０年の法改正により15歳未満の提供が可能になるとともに、本人の意思が不明でも家族の承諾で臓器提供できるようになりました。

法改正以前、提供者家族には脳死判定の受け入れと本人の臓器提供への意思を受け入れる判断が課されていました。法改正後は脳死を受け入れるだけでなく、本人の意思が不明の場合には臓器移植をするかどうかという重い判断をしなければならなくなりました。臓器提供への本人の意志がわからないなかで家族の死を受け入れるだけでなく、提供すべきかどうかを決断しなければならないことは、家族にとって突然に降りかかる難題とも言えましょう。その決断に至る過程に生じるさまざまな思いを考えてみたいと思います。

## 家族による臓器提供への判断

神戸新聞に、兵庫県内初の18歳未満による臓器提供を決断した家族の手記を紹介する記事が掲載されています（２０２３年3月17日）。その中で提供者となる男子高校生（18歳）が脳死状態になり、臓器提供が提案されるなかで苦悩する家族の思いが綴られています。

「移植することが息子の生きた証になるはずだ。けれど相反して「悲しい」「苦しい」気持ちが、狂うほどに私の身体中を渦巻いた」

と〝二つの感情に引き裂かれ、もがき苦しむ母親の率直な思い〟が紹介されています。医師による説明、移植コーディネーターによる制度の説明や情報の提供もなされ、家族それぞれの抱く疑問や不安に対しても丁寧に対応してくれたといいます。高校生の兄弟は臓器提供に理解を示しながらも、複雑な思いを次のように記しています。

「（臓器提供は）この状況で留まってくれている彼の命をこちらが終わらせることを意味していま

した。さらに、私にとっては聞いたこともない組織に彼の臓器を預けることになる（中略）怖いし、恐ろしいし、どこまでそこを信用してもいいかも分からない」

その後も臓器提供への意思決定への過程をコーディネーターに寄り添ってもらいながら家族間での話し合いを続け、答えのない問いに家族一人一人が向き合い、悩みに悩み抜いて、臓器提供を決めたのは入院から一カ月以上が経ったころだといいます。

「家族の中で「私たちの彼」だけではなく「みんなの彼」になってもらおうという話が出てきました。（中略）やっとその考え方で前に進もうという気持ちも出てきました」

と兄弟が記しています。そして

「これから彼の命はただひとつの命から、国内各所で新たな息吹を得て、続いていく多くの命となります。その命が新たな未来をつくっていくことを切に望まずにはいられません」

という父親の言葉に至ったといいます。このように脳死を受け入れていくことは、言い換えれば「家族の死を決定してしまうこと」と「臓器移植を決断すること」を意味します。そして、家族の臓器が他で生き続けることとして納得していく過程には、一定の時間が必要なことが確認できます。そこには家族間での話し合いのプロセスが必要なことや、寄り添ってくれるコーディネーターの存在も必要であることが感じられます。

## 提供後にも続く家族の苦悩

臓器提供の橋渡しを行っている「日本臓器移植ネットワーク」では、これまでに臓器提供を行った臓器提供者家族を対象にしてアンケート調査を実施しています。これはこれまでのコーディネーターの取り組みが本当に家族の希望や要望に沿うものであったかを検証し、遺された家族の気持ちを把握することで今後の支援に活かすことを目的にして、２０１２年1月末に実施されたものです（公益社団法人日本臓器移植ネット

ワークＨＰ）。

調査結果はホームページ上に公開されていて、そこでは２０２事例の家族からの回答を閲覧することができます。回答者の内訳は「子どもの臓器を提供した親」が47％、「配偶者」が31％、「きょうだい」13％「こども」7％と続いています。そして、「臓器提供して良かったか?」の問いには、「（よかったと）思う」が73％、「やや思う」15％の順に多く、大半の家族が臓器提供して良かったと答えています。肯定的な受け止め方が多いのですが、その後の設問への回答を確認しますと、「良かった」だけでは表現できない複雑な思いを抱えていることがうかがえます。

「・・・母の希望であったが、全身に痛々しい傷を入れて本当に良かったのか・・・。」「・・・隣にいた父は決断できず、結局私ひとりで決めてしまい、本当にこれでよかったのかと未だに悩みます。」

と提供を決断したことを未だに悩む思いが見られます。

一方で決断できた背景については「本人の意思を尊重できた事と家族全員で話し合えて決められたから。」という回答も見られ、短い時間の中でも家族での話し合いが必要な要素になっていることが感じられます。

良かったのかどうかの判断についても

「・・・この選択が正しかったはわからない」

「この10年本当に提供してよかったか日々考える毎日を送っています。・・・」

と長く悩んでいる様子もうかがえます。

「子ども（6歳未満）の意志はわからないので、よかったとも、よくなかったとも思ってはいけないと考えております。」

と判断しない声もあり、

「今さら〝臓器提供しないほうが良かった・・・〟なんて後悔したくない。子供の意志だから・・・助かった人がいるのだから・・・納得するしかない。正直、わからない。」

と自分の気持ちを無理矢理に納得させなければならな

いほどに、家族を悩ませている様子が伝わってきます。

臓器提供の決断をすることが、そのまま家族の死を受け入れることになることも苦悩として見られます。

「決断は死を認め、死期を決めること。家族それぞれの死生観や息子への愛情を考えることに時間がかかった。最後は本人の声を想像して決めた。」

と回答しています。

脳死に伴う臓器移植の決断はその直後だけでなく、その後も長く思い悩ます様子が見られます。現在の気持ちを聞いた質問に対して、

「あの時から、時間が止まってしまっています。」

「悲しみと共に生きていくことを決めています。1人の時は今も大声を出して泣くし、話しかけたりしています。」

「常に申し訳ない思いにとらわれている。これは何年たっても変わらないと思う。」

と、今も苦悩する思いを持ち続けている様子が吐露されています。このように家族の突然の脳死を受け入れ、臓器提供に至る過程だけでなく、その後も長く自身の判断が良かったのかどうかに悩む姿が見て取れます。

**周囲の無理解や偏見**

自身の決断に対して悩むだけでなく、社会の中での臓器提供への意識が提供者家族を苦しめる事例も見られます。京都新聞が脳死臓器提供を決断した家族の葛藤をレポートした記事（２０２３年10月２日）では、脳死になった夫の意思を尊重して臓器提供を決断した女性の苦悩が紹介されています。

葬儀も終わり、しばらくしてから、知人に事情を聴かれ「でも、臓器提供したんだ」と口にした。一様に「えっ」と驚かれた。「いくらもらったの」と聞かれることも。肯定的に受け止められたことは一度もない。「いいことしたと思っているのは私だけだったんだ」と気づき、口をつぐむようになった。

このように臓器提供したことに対して肯定的な意見

を聞くこともできず、そればかりか臓器提供によって金銭の授受があったかのように受け取られていることに大きなショックを受けたことは想像に難くないことです。さらに記事では、

何げなく図書館で手に取った倫理学者の本には、脳死は人の死ではないと書かれていた。「それなら、私のしたことは人殺しなのか」と動揺した。

と自身の判断に対して不安に感じてしまったことを伝えています。この女性は他の提供家族がどのような気持ちでいるのかとの思いが募り、臓器提供した家族の会を立ち上げたことがレポートされています。

脳死に伴う臓器提供に際しては移植コーディネーターによる説明や精神的なサポートがされているといいます。提供後も遺族それぞれの要望に応じて、移植を受けた患者からのサンクスレター、提供後の経過報告などコーディネーターによるフォローがなされています。しかし、それでもここで見たようなさまざまな不安や苦しみが家族に生じていることも現実なのです。

臓器移植でしか助からない命がある現実を前に、臓器提供することは善行と受け止められそうですが、遺された家族には新たな苦しみを生じさせていることも確かです。「良いことをした」と自らに結論づけようとする思いの背景には、遺族の中に臓器提供への抵抗感があるのかもしれませんし、社会の評価が定まっていないことがあるのかもしれません。こうした苦悩を目の当たりにして、現在の脳死臓器移植医療に対して諸手を挙げて賛成することはできませんし、今後は提供者家族も含めて更なる心理的なサポート充実を図ることや、社会全体の意識を啓蒙していくことなしには、臓器移植の進展は難しいのではないでしょうか。

そして、こうした現状を踏まえても当事者にならないと実際には考えにくいことなのですが、私たちも周囲の偏見と同じような見方をしていないか、注意を払わなければなりません。私たち宗教者は提供者家族への偏見に加担しないことはもちろん、提供者の家族が

周囲の声に傷付くことがあることにも注意しなければなりません。そして、提供したことを肯定的に受け止めてあげることも必要であり、提供しなかった選択にも寄り添っていく必要があるのではないでしょうか。宗教者としてそれぞれの立場に直面する人々の苦悩を理解しながら、どこに苦悩を感じているかを受け止めつつ、寄り添っていくことが求められます。

【平子泰弘】

## 3　臓器移植後の健康管理に関する課題

### はじめに

臓器移植手術は、手術が完了すれば問題が解決するわけではありません。特に臓器移植後には、拒絶反応の早期発見とその対応が重要ですが、拒絶反応を防ぐため、免疫抑制薬を使用することで感染症のリスクが高まります。例えば、サイトメガロウイルス（ＣＭＶ）感染症を発症しやすくなります。この感染症は、発熱、筋肉痛、疲労感、視力障害、腹痛、下痢等の症状が起こります。この対策としては、予防的に抗ウイルス薬を使用することが一般的です。また、定期的な血液検査によりＣＭＶの活動性をモニタリングし、活性化の兆候が見られた場合には、早期に治療を開始します。このように臓器移植後には、免疫抑制薬の副作用に対する注意深い管理が求められます。また、感染予防としての日頃からの衛生管理が重要になります。長期的な視点では、移植臓器の機能維持に向けたライフスタイルの調整も不可欠となります。

以下、臓器移植後の健康管理に関する課題を５つの項目に分けて、具体的に解説します。

### １．免疫抑制薬の役割と感染症リスクへの対応

#### ①免疫抑制剤とは

免疫抑制薬は、移植手術後の拒絶反応の予防や体が自己の組織を攻撃する自己免疫疾患の治療に不可欠ですが、これらの薬剤は免疫系の働きを抑制するため、感染症に対する抵抗力も低下させることがあります。

免疫抑制薬は、異物として体が反応する移植された臓器や組織に対する拒絶反応を防ぐため、または自己免疫疾患を防ぐために使用されます。しかし、これらの薬剤は正常な免疫反応も抑制するため、感染症に対する体の防御能力が低下します。これにより、風邪やインフルエンザなどの一般的な感染症や、より重篤な細菌性・真菌性感染症のリスクが高まります。

**②定期的な医療チェックとワクチン接種の重要性**

免疫抑制薬を使用している患者は、定期的な医療チェックを受けることが非常に重要です。これには、感染症の兆候や他の健康問題の早期発見が含まれます。また、予防接種は、特にインフルエンザや肺炎球菌などの感染症から保護するために推奨されています。ただし、生ワクチンは免疫抑制薬を使用している人には適していないため、医師と相談して適切なワクチンを選択することが重要です。

**③免疫抑制薬の調整**

患者の状態に応じて、免疫抑制薬の種類や量を調整することが時には必要になります。これは、感染症のリスクを最小限に抑えつつ、移植臓器の拒絶反応や自己免疫疾患を効果的に管理するためです。

**④生活習慣の改善**

免疫抑制薬を使用している患者にとって、健康的な生活習慣はさらに重要です。これには、適切な栄養、定期的な運動、十分な睡眠、ストレス管理、禁煙、適度なアルコール摂取などが含まれます。また、衛生的な環境を維持し、手洗いを徹底することも感染症予防のために重要です。免疫抑制薬の使用は、患者の生活に大きな影響を及ぼし、感染症リスクの増加という深刻な副作用をもたらす可能性があるからです。

## 2. 慢性拒絶反応への対応

**①慢性拒絶反応とは**

慢性拒絶反応は、移植された臓器が受け入れた人体の免疫系によって徐々に損傷を受ける現象です。これは移植手術後数ヶ月から数年にわたって進行する可能

性があり、最終的には移植された臓器の機能不全を引き起こすことがあります。

**②原因**

慢性拒絶反応の原因は完全には解明されていませんが、免疫系の継続的な活動、移植された臓器と受け入れた体との間の微細な組織適合性の不一致、免疫抑制剤の不十分な使用などが関連していると考えられています。

**③症状の種類**

慢性拒絶反応の症状は、臓器によって異なります。例えば、肺移植の場合は呼吸困難や慢性的な咳、心臓移植では胸痛や心不全の症状、腎移植では腎機能の低下や高血圧などが見られます。

**④診断方法**

診断には、臨床症状の評価に加えて、血液検査、X線撮影やCTスキャンによる画像診断、そして最終的には移植された臓器の生検が含まれます。生検によって臓器の組織内での免疫反応の様子を直接確認することができます。

**⑤治療方法**

慢性拒絶反応の治療には、免疫抑制剤の調整が中心となります。これには、投与量の増加や異なる種類の免疫抑制剤への切り替えなどが含まれます。場合によっては、抗炎症薬や特定の症状を緩和する他の薬剤を使用する場合もあります。

**⑥予防**

慢性拒絶反応の予防には、適切な免疫抑制剤の管理が重要です。これには、薬剤の定期的な服用、血中濃度のモニタリング、定期的な医療チェックが含まれます。また、移植前の厳密な組織適合性の評価も重要です。

**⑦人体への影響**

慢性拒絶反応が進行すると、最終的には移植された臓器の機能が失われることになります。これにより、再移植の必要性や、その他の健康問題が生じる可能性があります。また、慢性拒絶反応は、患者の生活の質

にも影響を及ぼすことがあり、移植後の患者にとって長期的な課題です。

### 3. 生涯にわたる薬物療法の必要性とその副作用

移植医療において生涯にわたる薬物療法は、移植した臓器の機能を維持し、拒絶反応を防ぐために不可欠です。しかし、これらの薬物は多くの副作用を伴う可能性があり、患者には長期的な視点での対応が求められます。

#### ①薬物療法の必要性

移植された臓器が拒絶反応を示さないようにするため、免疫抑制剤を含む薬物療法が必要です。これらの薬剤は、移植された臓器に対する免疫系の攻撃を抑制し、臓器の機能を維持します。一般的には、移植後は生涯にわたりこれらの薬剤を服用する必要があります。

#### ②主な薬物とその副作用

免疫抑制剤（例えば、シクロスポリン、タクロリムス、ミコフェノレート）は、移植患者に広く使用されます。これらの薬剤は効果的ですが、腎機能障害、高血圧、糖尿病、感染症のリスク増加、骨密度の低下、癌リスクの増加など、多くの副作用を引き起こす可能性があります。

#### ③対策としての生活の工夫と定期的な医療チェック

これらの副作用に対処するためには、生活の工夫が重要です。これには、健康的な食生活、定期的な運動、十分な睡眠、ストレス管理、禁煙などが含まれます。また、定期的な医療チェックによる早期の副作用検出も重要です。

#### ④長期的な視点

長期的には、移植患者は薬物療法と副作用管理のバランスを見つける必要があります。これは、定期的な医療フォローアップと、医師との密接な連携を必要とします。医師は患者の健康状態に応じて薬剤の種類や用量を調整し、副作用を最小限に抑えることを目指します。移植後の生涯にわたる薬物療法は、患者の生活に大きな影響を及ぼします。副作用の管理と生活の質

の維持は、これらの患者にとっての重要な課題です。患者自身の努力と医療提供者との協力により、これらの課題を乗り越えていかなければなりません。

## 4. 移植臓器の寿命

移植臓器の寿命は、移植後の臓器が機能を維持する期間を指します。これは、移植された臓器が正常に機能し、受け取った体に受け入れられ続ける期間を意味します。移植臓器の寿命は、様々な要因によって影響を受け、臓器ごとに異なる平均寿命があります。

### ①寿命に影響を与える要因

移植臓器の寿命に影響を与える要因には、以下のようなものがあります。

・組織適合性:ドナー（提供する側）とレシピエント（受け取る側）との組織適合性が高いほど、拒絶反応のリスクは低くなります。

・拒絶反応：急性または慢性の拒絶反応は臓器の損傷を引き起こし、寿命を短縮させる可能性があります。

・免疫抑制剤の管理：免疫抑制剤の適切な使用は拒絶反応を防ぎ、移植臓器の寿命を延ばすのに重要です。

・ライフスタイル：健康的な生活習慣は移植臓器の健康を維持し、その寿命を延ばすのに役立ちます。

・移植後の合併症：感染症やその他の合併症も移植臓器の寿命に影響を及ぼす可能性があります。

### ②移植臓器別の平均寿命

移植臓器の平均寿命は臓器によって異なります。一般的に、腎臓移植の場合、寿命は約10～15年、心臓移植では約10～14年、肝臓移植では約20年以上、肺移植では約5～10年とされています。これらはあくまで平均的な数値であり、個々の患者の状況によって大きく異なることがあります。

### ③寿命を延ばすためのケア

移植臓器の寿命を延ばすためには、適切な免疫抑制剤の管理、定期的な医療チェック、健　康的な生活習慣、ストレス管理などが重要です。また、移植後に特定の症状や異常が見られた場合には、迅速な医療対応が必

要です。

**④再移植の可能性**

移植臓器の寿命が終わり、臓器の機能が著しく低下した場合、再移植が選択肢となることがあります。再移植は、ドナー臓器の可用性、患者の健康状態、前回の移植からの期間などによって決まります。患者の体が新しい臓器を受け入れるかどうかにも依存します。

## 5. 移植後の健康管理や社会復帰に伴う心理的スレスレス

移植臓器の寿命は多くの要因に依存し、患者と医療チームの継続的な努力によってその寿命を延ばすことが出来ます。患者の生活習慣、医療管理、そして時には再移植が、移植後の生活の質と寿命を延ばすための重要な要素です。移植後の生活は、患者にとって以下のような課題を伴います。

**①生活の変化への適応**

移植後の生活は大きく変化します。これには日常の習慣の変更、活動の制限、定期的な医療チェックなどが含まれます。これらの変化への適応はストレスを伴うことが多く、時間をかけて慣れる必要があります。

**②薬物療法のストレス**

長期にわたる薬物療法は、副作用や服薬スケジュールの管理に関するストレスを引き起こす可能性があります。これは、日常生活における一定の制約を科すことになります。

**③社会復帰のプレッシャー**

職場や学校への復帰は、多くの移植患者にとって重要な目標です。しかし、これには身体的および精神的な調整が必要であり、プレッシャーを感じることがあります。

**④体の変化への自意識**

移植手術後の身体的な変化（傷跡、体重の変化など）に対する自意識は、自己イメージに影響を与える可能性があります。

**⑤再発や拒絶反応への不安**

移植後の不安の主な原因の一つは、再発や拒絶反応への恐れです。これは、不確実性の不安と絶え間ない健康への懸念を引き起こすことがあります。

**⑥家族や友人との関係**

家族や友人との関係も、移植後に影響を受ける可能性があります。周りからのサポートと自身の独立性のバランスを見つけることは、時に困難を伴います。

**⑦経済的な負担**

移植手術とその後の治療にかかる費用は、高額であり、経済的な負担は患者とその家族にとって重大な問題です。これもストレスの原因となります。

**⑧適切なサポートの必要性**

移植後の健康管理と社会復帰は、患者にとって多くの心理的な負担を伴います。これらの負担に対処するためには、適切なサポートが必要です。医療チーム、心理カウンセラー、家族、友人、サポートグループの仲間等のサポートにより、患者はこれらの課題を乗り越え、充実した生活を送ることが可能になります。

**⑨自己効力感の重要性**

最後に、自己効力感、つまり自分の健康や生活を適切にコントロールしていくという目標を達成するための能力を、自らが持っていると認識していくことが、これらの課題に対処する上で非常に重要になります。

（参考文献）

臓器移植後の生活の体験談や心理的課題の考察については、以下のような参考文献があります。

・臓器移植ネットワークが提供する「移植経験者、臓器提供ご家族の手記」www.jotnw.or.jp
・生体腎移植におけるレシピエント，ドナーの メンタルヘルスの現状と課題 www.jstage.jst.go.jp/article/jjpm/58/8/58_709/_pdf/-char/ja
・生体肝移植後成人レシピエントの心理的体験プロセス www.jstage.jst.go.jp/article/jst/52/4-5/52_374/_pdf/-char/ja

【水谷浩志】

## 第二章　臓器移植の光と影

### 1　海外渡航移植の実態と問題点

#### はじめに

海外渡航移植は高額な経済的負担を伴います。移植手術はもちろん、付き添いの医療スタッフ、滞在費用、生活費、継続的なフォローアップ治療にかかる費用は莫大です。海外渡航移植は、臓器移植法施行以前から問題視されていましたが、マスコミに取り上げられてきたのは、主として多額の寄付金によりアメリカへ渡航し心臓移植を受けた幼児の例でした。このように、日本のメディア等で米国への渡航移植が時折脚光を浴びますが、「10歳までのみでみても心臓で２８２人、肝臓では２３１人、腎臓では４５９人が待機中で（２０２１年5月現在）、決して、米国内で充足しているわけではないことを理解する必要がある」という重要な指摘もあります（田村純人「移植」56－2）。なお、イスタンブール宣言（自国内で死体臓器提供を増やす努力を促す宣言）以降もアメリカでは海外からの移植患者を一定の割合で受け入れています。ヨーロッパでは国境を越えた連携が盛んに行われ、各国の啓発活動と共に、国単位の組織と，国境を越えた連携を有する機関があり活動しています。啓発活動の中でとくに注目されるのは、一人のドナーから多くの臓器移植のみならず組織移植を必要としている患者が救われることに加え，域内の多様な民族と宗教的背景に配慮し、キリスト教、仏教、ヒンドゥー教、イスラム教、ユダヤ教，シーク教の各指導者の言葉や経典からの引用を交えて臓器・組織提供は人としての尊い行いであり、信仰に反するものではないことを示した上で、人権、民主主義、法の支配の下に国際社会の基準策定を主導する汎欧州の国際機関として移植医療を支える立場を明確にし、例年社会啓発のための European Organ Donation Day(EODD)を開催しています（田村純人「移植」56－2、Council of Europe European Day for Organ Donation and Transplantation - 9 October 2021）

我が国では、厚生労働省の臓器移植委員会（海外渡航移植患者の実態調査）によると、日本移植学会等に所属する移植実施施設、２０３施設２８０診療科に実態調査を行い、結果をまとめています。令和５年３月31日時点での渡航移植患者の診察を実施している施設は、88施設１１１診療科。渡航移植者数は５４３名、生体ドナーから42名、死体ドナーから４１６名、不明85名となっています。渡航先は多岐にわたりますが、渡航者数の多いものは、米国２２７名、中国１７５名、オーストラリア41名、フィリピン27名などです。

ただ、これらのデータは、日本移植学会等に所属する移植実施施設のうち、渡航移植患者の診察を実施しているものに限られていることに注意しなくてはなりません。

## 1．「イスタンブール宣言」と海外渡航移植、移植ツーリズム

現在、日本には海外渡航移植を制限する法律は存在しません。臓器移植については、厚生労働省から認められている機関は日本臓器移植ネットワークだけで、それ以外のＮＰＯ法人経由で海外渡航移植をうけて帰国し、臓器売買の疑いのある患者は診療を断るという院内規定に基づき診療継続が拒否され裁判になり、患者側が高裁で敗訴、確定したケースも見られます。

これは、浜松医科大学で２０１９年に起こったもので、ＮＰＯ法人の紹介で、中国で腎移植手術を受けた患者が帰国後、フォローアップ治療のために浜松医科大学医学部付属病院を受診、同病院が治療を継続できないとしたのは医師法19条の応召義務違反に当たるとして、２７１万２８４３円の損害賠償を求めた裁判の控訴審判決が5月16日、東京高裁（中西茂裁判長）で言い渡され、一審の静岡地裁の判決と同様に、患者（原告）の請求を退けたというもので、東京高裁は、患者に対して緊急の診療の必要性があったとは言えず、浜松医大への紹介元での診療が確実に見込まれていたこと、「臓器取引と移植ツーリズムに関するイスタンブー

ル宣言」に則った対応であるという3つの観点を踏まえ、患者の診療を拒否したことは、「社会通念上、正当として是認できる」と判断したとのことです。

イスタンブール宣言における臓器取引の解釈は、次のようなものです。

臓器取引とは下記の行為全てを含む。

(a)正当な同意や許可なく生体あるいは死体ドナーから臓器を摘出すること。またドナーと第三者、ドナー又は第三者に対する金銭あるいは金銭に相当する利益と引き換えに臓器を摘出すること。

(b)それらの臓器の移送、処置、移植またはその他の用途に用いること。

(c)それらの臓器の摘出・使用を促進しまたは実行させるために、医療従事者、行政職員あるいは民間団体職員に不当な利益を提示すること、あるいは医療従事者、行政職員あるいは民間団体職員が不当な利益を要求すること。

(d)金銭の授受やそれに相当する利益を提供する前提でドナーやレシピエントを勧誘、募集すること。

(e)上記のいかなる行為の試み、援助、扇動。

臓器摘出のための人身取引とは、脅迫、暴力、その他の方法による強制力の行使、誘拐、詐欺、欺罔、権力もしくは弱者の状況の悪用、人を支配する立場の者の同意を得るための金銭や利益の供与、受領などの手段で、移植用臓器の摘出目的でなされる人の調達、輸送、譲渡、保管または受領をいう。

さらに、海外渡航移植についても、移植のための渡航とは、臓器移植の目的のために国境を越えて移動することをいう。臓器摘出目的での人身取引や人の臓器取引が移植のための渡航に関係する場合、あるいは臓器移植資源（臓器、専門家、移植施設）が非住民に回されたために自国民の移植医療の機会が減少したりする場合は移植ツーリズムであり、非倫理的であるとしています。

（国際移植学会「臓器取引と移植ツーリズム」に関するイスタンブール宣言、２００８年5月2日）。

イスタンブール宣言は、海外渡航移植に内在する臓器移植に不平等や搾取、人権侵害といった側面があることを指摘しています。その背景には、経済的な困難や貧困があることが挙げられます。とくに発展途上国では、貧困層が自らの臓器を提供することで生計を立てようとするケースが見られ、これに対して、富裕な患者（渡航者）が臓器を購入し、合法性を欠いた手続きで移植手術が行われることがあります。このことは、今に始まったことではなく、何十年にもわたって行われてきたことで、臓器売買の問題に対処するためには、国際的な協力が不可欠であり、違法な臓器取引を防ぐために、倫理的な基準を確立し、法的な手続きと透明性を重視した国際的な枠組みが必要とされるでしょう。

宣言後も臓器売買の撲滅には至らず、むしろ悪化している状況も認められたため、２０１７年にはフランシスコ第２６６代 ローマ教皇の下、各国の移植医療関係者と臓器売買撲滅に詳しい検察官、倫理学者、法律家、ジャーナリストら78名がバチカン国科学アカデミー会館に招聘され、臓器売買撲滅バチカンサミットが開催されました。そこには、日本からも日本移植学会江川裕人理事長（当時）が招聘されました。

サミットでは、

「全世界の臓器摘出を目的とした人身売買と移植ツーリズムの現状についての報告、難民の犠牲、そして各国と地域から現状の報告がなされた。移植先進国では臓器提供を増やす取り組みに重点が置かれ、移植後進国では他国への渡航移植の現状、とくにアフリカ地域・東地中海地域・アジアでは臓器売買の現 状報告が中心になった。レシピエント担当ブローカーとドナー担当ブローカーがインターネットで情報をやり取りし契約する国際的な臓器売買シンジケートが存在すること、臓器売買による移植の中心が中国からエジプトに移ったこと、臓器提供国となっている国の名が報告され

た。臓器売買を成り立たせるシステムに対する国際的取り締まりの必要性が中近東地域の検察官から強調された。臓器売買の根源は貧困と無知と弱者への虐待であり教育と行政の取り組みが最も重要であることが確認された」

（臓器売買と移植ツーリズムに関する科学アカデミーサミット教皇宣言２０１７）

と報告されています。

## 2. 海外渡航移植が抱える問題点

冒頭に述べたように、海外渡航移植は高額な経済的負担を伴います。移植手術や滞在費用、生活費、継続的なフォローアップ治療にかかる費用は莫大です。とくに、医療保険の適用や制度の違いが影響を与える事が考えられます。

２００７年に臓器移植法（以下、旧法）が施行され、以後、心臓移植の治療効果が一般国民に知られるようになった一方で脳死臓器提供数は伸び悩みました。その結果、旧法成立後にかえって海外渡航移植をうけた患者数が増えるという現象が見られました。旧法のもとでは国内での心臓移植が実質不可能な10歳未満の小児に限らず、国内でも心臓移植を受けることが可能なはずの体の大きな小児や成人も、海外で心臓移植を受けています。そんな中、２００８年5月にイスタンブール宣言が出され、ヨーロッパ、オーストラリアなどが日本人の受け入れを制限した影響、さらにイスタンブール宣言を受けて整備された「改正臓器移植法」が２０１０年7月に施行されたこともあって、２００９年をピークに海外渡航心臓移植件数は減少しました。しかしながら一方、２０１５年8月、小児用の体外設置型ＶＡＤであるＥＸＣＯＲが保険償還（全額を一旦支払い、後で申請を行うことで規定の額を払い戻す）されたことで乳幼児期に心不全に陥った小児が救命され、安定した状態での海外渡航が可能になったため、特に小児での海外渡航心臓移植は、今でもなくなりません（日本移植学会、２０２１「ファクトブック」）。

また、渡航先の国について見るとき、各国は異なる医療基準や倫理規定を持っており、これが渡航移植において課題となります。例えば、一部の国では特定の移植手術が合法である一方で、他の国では法的に問題が生じる可能性があります。また、臓器提供や移植の倫理的な問題も存在し、異なる文化とくに死生観、遺体観につながる宗教によっても慎重な検討が求められます。さらに、医療技術や施設の水準の差が問題となります。一部の先進国では高度な医療技術が提供されているが、他の国ではまだまだ医療水準が低い場合があり、これにより、患者が求める移植手術の質や成功率が異なる点が危惧されます。

日本移植学会倫理指針では、渡航移植患者の診療を断る可能性がある例として、

①臓器売買が疑われる場合。

②臓器売買にあたるか否か判断できる情報が得られない場合。

③死刑囚など倫理的に問題があるドナーから臓器が提供された可能性が高い場合。

などが挙げられ、医師法の応召義務（「正当な理由がなければ患者からの診療の求めを拒んではならない」）がありますが、日本移植学会倫理指針に従ってホームページ等で上記のケースでは診療を断ることがあると公表している病院として、東京都立大久保病院、東京大学付属病院、群馬大学付属病院、横浜市立大学市民総合医療センター、沖縄の友愛会友愛医療センターなどが挙げられます。

東京大学医学部付属病院の例ではホームページ上で、

「東大病院・ご来院のみなさまへ

海外で臓器移植を受けられ、その後帰国された患者さんのフォローアップ診療について」

「心臓・肺・肝臓・腎臓などが病気のために不可逆的な機能不全をきたし、生命の危機にさらされている患者さんにとって臓器移植は唯一の救命手段です。これはドナーとその家族による無償の協力によって支えられていることはよくご存じのこ

とと思います。

世界的な臓器移植医療の普及に伴い、海外の一部では移植される臓器が貧しく弱い立場の人々から金銭と引き換えに摘出されるケースが明らかとなってきました。このような臓器取引を通じた臓器移植は非倫理的かつ違法性があり、２００８年『臓器取引と移植ツーリズムに関するイスタンブール宣言』が出され、公平な臓器移植を行うためには渡航移植は行うべきではないと世界的に示されました。

当院におきましても、非倫理的かつ違法性のある臓器移植は断固として許容できないと考えており、このような渡航移植を根絶するための取り組みをしていく所存です。

当院におきましては、海外で臓器移植を受けられ、その後帰国された方が移植後のフォローアップ診療を希望された場合、上記『イスタンブール宣言』のほか、我が国の『臓器の移植に関する法律（臓器移植法）』、『日本移植学会倫理指針』に則り対応いたします。原則として、違法性のある臓器移植を受けられたと判断された場合、当院での診療をお断り申し上げます。」

としています。

これは、日本の医療機関を通さずＮＰＯなどの橋渡しで渡航し移植手術を受け、帰国後容態が悪化し国内の医療機関に駆け込む例が決して少なくないことを物語っています。

近年では、20年間にわたり１７０人から多額の現金を受け取り、海外での臓器斡旋を行っていたＮＰＯ法人の理事長が逮捕され、「ＮＨＫクローズアップ現代」でも取りあげられました。ＮＰＯ法人が長年にわたって携わってきた臓器斡旋について逮捕されたこの事件は、「海外渡航移植」の闇にスポットを当て、この番組の中で、ＮＰＯ法人の斡旋を受け高額な費用を支払い、海外で移植を受けた人物（移植に成功している）が、「日本で移植を待っていてもいつになるかわからない。

必要悪です」とインタビューに答えていた言葉は、海外渡航移植を含めた移植医療全般について、ドナー不足に加え法整備が遅れている我が国の現状を物語っているといえましょう。

臓器移植問題は、日常的に起こりうるものではありませんが、だれにでも起こりうる可能性があるものです。ここに直面したとき、あなたはどう考え行動するでしょうか。

ここでは、海外渡航移植の実態と問題点を取り上げました。

【坂上雅翁】

## 2　小児臓器移植をめぐる問題点

### はじめに

２０１０年7月17日に全面施行された改正臓器移植法の大きな改正点は、脳死判定及び臓器提供の要件にあった「本人の書面による意思表示がある場合に限る」という要件の緩和でした。この緩和によって臓器提供の意思表示がない場合と、民法９６１条の規定により意思表示能力を認められていなかった15歳未満の小児からの臓器提供が国内においても可能になりました。

ここでは、臓器移植法を改正する目的の一つであった「小児臓器移植」の現状と課題を取り上げたいと思います。

### 小児臓器移植の現状

小児臓器移植の実施数については、

２０２３年9月末までに、18歳未満からの脳死下臓器提供が76名あり、２０１９年はこれまでで最も多くの小児の方からのご提供がありました。ご提供された方々の年齢別では、6歳未満28名、6歳以上10歳未満8名、6歳以上18歳未満24名、10歳以上15歳未満10名、15歳以上18歳未満6名でしたが、合計３４３名の方が移植を受けるに至り、そのうち２１５名が18歳未満の小児登録患者でした。(1)

と報告されるように、改正臓器移植法施行後の約13年で76名、1年平均6名程度という実施数になっています。この実施数ですが、「日本小児循環器学会移植委員会の全国調査によると、心臓移植を必要とする小児は毎年50例程度（10歳未満は30例程度）[2]」という現状の中で、2022年9月末までに計63名[3]、1年平均5名にしか小児心臓移植が行われていませんので、成人同様に小児の場合も臓器移植を受けられる可能性はかなり低いといわなければなりません[4]。加えて、小児の場合も成人と同様に圧倒的な臓器不足[5]という問題があるため、「死亡率の高さ[6]」と「海外渡航移植」が大きな問題として生じています。特に海外渡航移植については、臓器移植に関する国内唯一の斡旋機関である公益社団法人日本臓器移植ネットワークに登録していない場合があり[7]、「国内では移植が期待できないという患者家族の意志の現れと考えられる[8]」という指摘がなされています。

こうした現状をうけ、現在は小児脳死と臓器移植に対応できる体制をはじめとした施設の整備[9]、被虐待児を除外する手順の明確化[10]などに取り組むことで、小児の臓器提供者の増加が目指されています。

## 小児臓器移植の問題

小児臓器移植の今後を考える際に重要なことは、「臓器移植法改正時に提示された根本的な問題へと立ち返ること」だといえます。なぜなら、臓器移植法改正の目的の一つが小児の臓器移植を可能にすることあったことから、改正に際して、「小児の脳死判定基準」「被虐待児の取扱い」「15歳未満の小児の意思表示」といった小児臓器移植に関わる中心的問題が取り上げられていたからです。

例えば「小児脳死」については、アメリカにおける「長期脳死（脳死判定後、30日以上生存していること）」の事例を背景に改正案への反対があり、参議院における審議では子どもの脳死判定・臓器提供については有識者による臨時調査会を設置すること等を内容とした

「子どもに係る脳死及び臓器の移植に関する検討等その他適正な移植医療の確保のための検討及び検証等に関する法律案（参題26号、E案）」が提示されるなど、[11]「小児脳死」を「死」として認めることへの慎重な態度がありました。また、「意思表示」については、「家族の承諾のみで、臓器提供をすることができる事について、法理論的な根拠づけは難しい」[12]とも指摘されるように15歳未満の小児の意思表示の取り扱いとともに、家族の同意をもって小児の臓器提供が可能となることの理論的根拠が問題視されました。これに対して、日本小児科学会は、２００３年に「小児脳死臓器移植はどうあるべきか」を発表し、その中で「小児の人権を護る立場からは自己決定権を明示するチャイルド・ドナーカードの推進が望ましい」と提言しています。

こうした問題が小児臓器移植にはあるからこそ、「日本の宗教界は、脳死状態の人々、とくに社会的立場の弱い、脳死状態の子どもたちの人権、いのちの尊厳を守ろうと世に問い、国に働きかけた」[13]という過去があります。現在の状況は、臓器移植法改正時に小児臓器移植を中心として問われた「脳死は人の死なのか」といった根本的な問いや、臓器移植が孕んでいた「人体組織や臓器の部品化という考え方」[14]へと傾斜していくのではないかといった不安に対して、十分な社会的議論が深まらないまま「臓器移植推進」の波に押し流されているのではないでしょうか。その上、小児臓器移植には、小児ドナーのコーディネーションや両親へのケア、[15]障害をもつ小児からの臓器提供、[16]海外渡航移植における虐待を受けた児童からの臓器提供[17]などさまざまな問題も指摘されるに至っています。

臓器移植法が施行され25年、改正されて10年以上の時間が経過した今、脳死臓器移植数の増加が示すように、「臓器移植」は〝一般的な医療〟になりつつあると言えます。それは、臓器提供カードが身近になったことに代表されるように、小児を含むあらゆる人びとに「脳死」や「臓器移植」が具体的な選択肢になっているとも言うことができます。しかし、「小児臓器移植」

の現状を確認すると、小児を含む臓器移植に関する根本的な問いに向き合いきれていない状態、本報告中の論考で指摘されるようなさまざまな問題が見過ごされている状態で臓器移植の一般化がなされていると言えるように思います。特に小児臓器移植の場合には、臓器提供側、いわば「亡くなる命」「犠牲になる命」に十分な注意が払われ、社会的な議論がなされなければならないと思います。

【註】

（1）ＪＯＴニュースレター２０２３

（2）福嶌教偉「わが国の小児心臓移植の現状と課題」『日本小児循環器学会雑誌』33巻1号、２０１７年1月

（3）ＪＯＴニュースレター２０２３

（4）「現在、日本で臓器移植を希望してＪＯＴに登録している方の総数は、約１６０００人です。一方で、1年間で臓器移植を受けられた人は、約４００人。わずか3％の人しか移植を受けることができていないというのが現状です」（公益社団法人臓器移植ネットワークＨＰ）。臓器移植実施数の少なさについては、朝日新聞「国民4割が「前向き」なのに先進国ワースト　臓器移植25年」（２０２２年12月14日付）、読売新聞「臓器移植法25年、ドナー不足の解消見えず」（２０２２年10月17日付）などの報道がある。

（5）この点は脳死者の発生数と関係があり、小谷みどり（「臓器提供の意思は誰が決めるのか」『Life Design Focus』２０１３年10月）、岩波祐子（「臓器移植の現状と今後の課題（1）」『立法と調査』２９８号、２００９年）などが、指摘している。

（6）佐野俊二「小児における心臓移植の実際とその問題点」（第4回日本循環器学会プレスセミナー「改正臓器移植法施行後の心臓移植―現状と将来の展望―」２０１０年9月）、福嶌教偉「移植待機患者の現状」（第１３２回日本医学会シンポジウム「わが国の臓器移植―現状と問題点―」２００７年8月）、恩田裕之「子どもの脳死と臓器移植」（『調査と情報』４４０号２００４年）など参照。

（7）福嶌教偉「改正法施行後の小児心臓移植の現状と課題」『日本小児循環器学会雑誌』第27巻第3号、２０１１年

（8）日沼千尋、木戸恵美、西尾麻里子、長谷川弘子「我が国における小児の臓器移植の現状と課題」『東京女医大看会誌』Vol.8 No.1 2013

（9）「各提供施設が経験する小児脳死の頻度は低いと想定されるため、遭遇した際の円滑な対応に向けて、全提供施設に

て小児脳死に対応できる体制を整備しておく必要がある」（問田千晶、六車崇「小児専門施設における小児脳死の現状」『日救急医会誌』24号、２０１３年）

(10)「虐待の疑いをかけられ、それを晴らすことができないという理由で拒絶されて、子は荼毘に付されるという、最も残酷な事態になりかねない」（厚生労働省「小児からの臓器提供に関する作業班」第5回（２０２１年9月6日）参考資料1第56回厚生科学審議会疾病対策部会臓器移植委員会資料1「これまでに出た主な意見について」）と述べられるように、虐待かどうかの判断を明確に行うことで、「臓器提供が可能な小児脳死者」を取りこぼさないという方向性が中心となっている。また、この方向性のもと、２０２２年8月1日に「臓器の移植に関する法律」の運用に関する指針（ガイドライン）の一部が改正され、特に「15歳未満の知的障害者等の臓器提供に関する有効な意思表示が困難となる障害を有する者の取り扱い」及び「虐待を受けた児童への対応」についての変更が行われている。

(11) 岩波祐子「臓器移植の現状と今後の課題（2）」（『立法と調査』２９９号、２００９年）、山﨑亮「脳死論の現在―臓器移植法の改定をめぐって」（『島根大学法文学部紀要社会文化学科編』7号、２０１１年）、小松美彦、市野川容孝、田中智彦編『岩波ブックレット　いのちの選択』（岩波書店、２０１０年）など参照。なお、総研叢書第5集『いのちの倫理』（２００８年3月、22～23頁）では、3つの改正案について触れられている。

(12) 澤田聡子、菅原梓「小児の脳死」『帝京平成大学紀要』第22巻第2号、２０１１年

(13) 冲永隆子「移植医療における弱者の「いのち」：子どもの脳死臓器移植問題に関する一考察」『宗教と社会貢献』2巻1号、２０１２年。また、脳死臓器移植に関する宗教界の動向については、宗教情報センターＨＰに掲載されている研究員リポート「臓器移植法に賛成ですか？反対ですか？」（２０１０年9月）に詳しい。

(14) 総研叢書第5集『いのちの倫理』（２００８年3月）38頁

(15) 臓器移植関連学会協議会では２０１０年3月1日に「臓器移植法改正後の移植医療の体制整備に関する提言　改訂版」を発表しており、小児に固有な諸問題として、小児ドナーのコーディネーションを含む6点を挙げている。

(16) 毎日新聞「知的障害児、臓器移植のドナー対象に」（２０２１年12月23日付）

(17) 平田康隆「アメリカでの小児重症心不全医療の現状」『日本小児循環器学会雑誌』第33巻1号、２０１７年

【岡崎秀麿】

## 3　生体移植の問題点

### 生体移植は希望の光？

本年（２０２４）３月４日、世界初の生体肺肝同時移植手術が成功したというニュースが流れました。

京都大病院は４日、先天性の難病を抱える10歳未満の男児に対し、親族３人の肺と肝臓の一部を同時に移植する手術に成功したと発表した。生体肺肝同時移植手術は世界初という。手術は昨年11月に実施され、男児は順調に回復し、今月１日に無事退院した。／男児は「先天性角化不全症」と呼ばれる病気で、骨髄の機能不全などによって皮膚や臓器に影響が出る。根治療法はなく、国内の重症患者数は約２００人とされる。／発表によると、男児は関東在住で、４歳のときに妹から骨髄移植を受けたが、次第に肺が酸素を取り込みにくくなり、肝硬変も発症。肺と肝臓両方の移植が必要な状態に陥った。／臓器提供したのは、40歳代の両親と60歳代の祖父。昨年11月15日に実施された手術では、父親の右肺、母親の左肺、祖父の肝臓の一部が移植され、手術時間は約18時間に及んだ。／日本移植学会などによると、脳死ドナー（提供者）からの肺肝同時移植は、海外での実施例はあるが、国内ではこれまで行われていない。／執刀医の伊達洋至教授は記者会見で、「複数の臓器を痛めている人にも同時に移植できることを示せた」と話した。(1)

別の報道によると、男の子の両親は「移植を諦めるしかなく何もできないもどかしさや絶望感を抱えている患者さんや親族の方の一筋の光になればうれしい」(2)とコメントしているそうです。

臓器移植を望む人に対して臓器提供数は世界中で圧倒的に不足しており、そのことが本報告でさまざまな角度から取り上げたような問題を引き起こしています。そうした現状では、このニュースが吉報と捉えられるのも無理はありません。しかしあまり知られていないようですが、「生体移植」には手放しで喜べない面も

あるのです。

## 日本でのみ主流となっている生体移植

生体移植とは、「健康な人」から臓器の提供を受けて行われる移植医療です。心臓・膵臓など生体移植できない臓器もありますが（逆に角膜などは心停止後でも提供可能）、腎臓と肝臓、肺などでは生体移植が可能です。

日本では脳死からの臓器移植が少ないことはよく知られています。２０２２年の人口１００万人あたりの脳死後と心停止死後の臓器提供数は、アメリカ44・5例、スペイン46・1例、フランス24・7例、韓国7.9例に対し、日本は0・88例でした。[3]

日本でなぜ脳死移植が増えないのか――。死生観の問題や医療への不信などが挙げられることが多い中、櫛島次郎氏は「日本の移植医療が、生きている人からの臓器提供に過度に依存してきたこと」が最大の原因であると指摘しています。[4] 確かに、日本では、脳死移植を可能とするための法制度の整備や社会的な合意形成の目途がなかなか立たなかった１９７０年代以降、生体移植に活路が見出されノウハウが蓄積されていきました。日本における生体移植の割合は、２０２０年のデータで腎臓91・8％（1,７１１件中1,５７０件）、肝臓83・４％（３８０件中３１７件）、肺22・７％（75件中17件）となっています。[5] その多くは家族・親族からの提供となっているようです。臓器移植法の施行後も生体移植に依存する流れは変わらず、現在に至っていると言えるでしょう。

一方海外では、「健康な人」からの臓器提供は窮余の策と見なされ、できるだけ避けようとするのが一般的であり、生体移植を実施する条件についても法律によって規制されている国が多いといいます。生体移植が（臓器によっては）これほどまでに主流となっているのは、実は世界の中で日本だけなのです。

## 生体移植が多い理由と問題点

櫛島氏は日本で生体移植が圧倒的に多い理由として、

①日本人の身内主義…見知らぬ他人の脳死者よりも生きている親族からの提供が望ましいという社会文化的な要因

②生体移植に対する規制のなさ…臓器移植法には生きている人から臓器を摘出してよい条件や手続きの規定がなく、法規制の厳しい脳死移植よりも無規制でやりやすい生体移植に移植医療のエネルギーが傾斜していること

の二点を挙げ、このうち後者について強い懸念を表明しています。(6)

生体移植には、健康な人から臓器を取り出すという大きなリスクが伴います。しかし日本の臓器移植法は、あくまでも脳死者から臓器を摘出できる条件や手続きを定めたものであり、生体移植に関しては対象としていません。法的な規制がなく、学会の指針や各医療機関での倫理審査に丸投げされている現状が、臓器売買や提供者の健康被害などの問題を招く温床となっているというのです。

臓器売買については、臓器移植法の規程が脳死移植以外にも適用されるとされ、生体移植においても禁止されてはいるものの、借金を抱えた人に臓器売買をもちかけた（ほぼ強要した）事件がすでに起きています。また〝身内主義〟の強い日本社会では、親族間での臓器提供を拒否したことで関係が悪化するなどのトラブルも充分起こりえることでしょう。生体移植の場合、提供者本人の同意が確認しやすいという利点がありますが、本当に自発的な意思で臓器提供に同意しているのかを確認する手続きは各医療機関の判断に委ねられているのが現状で、提供を断る権利がしっかり保証されるなど、改善が必要だと考えます。

提供者の健康被害については、死亡例を含め少なからぬ問題事例があるといわれていますが、世間にはほとんど知られていません。また、提供者が受ける健康被害についてもその実態が明らかにされてこなかった

のが実状です。海外では提供者の負担などを考慮して生体から提供できる臓器が制限されている国が多く、肺については日本以外ではほぼ禁止されています。冒頭で「世界初の生体肺肝同時移植」のニュースを紹介しましたが、確かに〝世界初〟ではあるものの、世界の他の国では実施されていない手術であることは知っておくべきでしょう（今後、提供者の負担が少ない術式が開発されるなどしたら状況が変化する可能性はありますが）。フランスでは、臓器提供者の健康状態のフォローアップが法律で義務づけられ、また臓器提供者が生命保険に加入しづらくなるのを防ぐ法規程も設けられているそうです。[7] 日本でも、提供者の健康被害がもう少しクローズアップされ、リスクに対する適切な保障が求められるのではないでしょうか。

## 結び

生体移植は、脳死者からの臓器提供のハードルが高かった日本において、いわばガラパゴス的に普及・進展してきました。とはいえ慢性的な臓器不足は、日本だけでなく世界においても解消されていません。このため異種移植など様々な手段で臓器を得ようという動きが世界各国で拡大しています。こうした流れで、日本で特異な進展を遂げた生体移植が海外から注目されるようになってきています。

本節冒頭で述べた生体肺肝同時移植手術についても、執刀医は日本人医師でした。この例をはじめ、生体移植のノウハウを持つ日本人医師の海外での活躍も目立っており、また実現はしなかったものの、生体移植を目的とした日本への医療ツーリズムなども企画されていたようです。

このように、生体移植は今後ますます増加していく可能性が高いと思われます。しかしすでに述べたように、生体移植には生体移植で問題がないわけではありません。臓器移植というと脳死臓器移植ばかりが注目を集める傾向にありますが、私たちはもっと生体移植についても意識を向け、考えてみる必要があるのでは

ないでしょうか。

【註】

（1）読売新聞オンライン、2024/3/4 配信（https://www.yomiuri.co.jp/medical/20240304-OYT1T50100/）

（2）ＮＨＫニュースＷＥＢ、2024/3/4 配信（https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240304/k10014378991000.html）

（3）日本臓器移植ネットワーク WEB サイト「世界の臓器提供数（１００万人当たりのドナー数）」（https://www.jotnw.or.jp/explanation/07/06/）２０２４／３／25閲覧

（4）櫛島次郎『先端医療と向き合う―生老病死をめぐる問いかけ』（平凡社新書、２０２０）57頁。

（5）『日本移植学会ファクトブック２０２１』（https://www.asas.or.jp/jst/pdf/factbook/factbook2021.pdf）

（6）櫛島氏前掲書、57～59頁。

（7）櫛島氏前掲書、60頁。

【吉田淳雄】

## 4　異種移植の倫理的課題

### はじめに

近年、他種の動物の臓器をヒトに移植する異種移植が注目を浴びています。２０２３年9月30日、アメリカのメリーランド大学医療センターにおいて、ローレンス・フォーセット氏への世界で2番目の豚からの心臓移植手術が行われました。フォーセット氏は、手術の約6週間後に亡くなりましたが、２０２４年3月16日には遺伝子改変したブタから腎臓移植が行われ、今後異種移植が更に行われることは間違いなさそうです。現在アメリカでは10万人以上が移植を待っている状態です。平均して一日に17人が臓器を待ち望みながら亡くなっているというデータもあります。[1] 異種移植はその根本的な解決方法になる可能性があるため、現在注目を浴びているというわけです。

### 異種移植の歴史

実は異種移植の歴史は深く、令和四年度の「移植医療を巡る最近の動向」の中で、異種移植の歴史とその倫理的課題について概要をまとめました。その歴史について、簡単に復習しますと１９０２年にアレクシス・

カレルが血管吻合技術を開発した後に異種移植は行われるようになり、当時はドナーの動物としてブタ、ウサギ、ヤギ、ヒツジ、サルなどが用いられていたそうです。[2] さらには、１９５０～60年代になるとヒトからヒトへの臓器移植が行われるようになります。その後、より人に近いチンパンジーやヒヒからの移植が行われるようになりました。１９６３年にはチンパンジーからの腎移植で９ヶ月生着した例も見られたものの、一般的に異種移植後の拒絶反応は激烈で、多くの場合は数時間から数日で移植した臓器はその機能を失っていました。

その後、倫理的問題と感染症の危険性などから霊長類からの移植は望ましくないとされ、代替としてブタからの移植が行われるようになります。現在ではブタがドナー臓器不足の問題を解決する可能性が最も高い動物であると考えられているため、[3] 以後ブタを用いた異種移植の歴史について書いていきます。

**ブタの異種移植の歴史**

ここからはブタの異種移植の歴史について書いていきたいと思います。遺伝的にヒトから遠く離れたブタからの臓器移植を行う場合、超急性拒絶反応が大きな障壁となっていました。超急性拒絶反応とは、ヒトの免疫機能がブタの臓器を異物として認識し攻撃してしまうために、ブタの臓器をヒトに移植した後、数分から数時間で移植臓器が機能不全に陥ってしまうことを指します。この障壁を乗り越えるために１９９４年には、免疫反応を制御するためのヒト遺伝子をブタに導入した遺伝子組み換えブタが作出された結果、超急性拒絶反応を回避出来るようになりました。

さらに近年では、CRISPR/Cas9 に代表される迅速な標的遺伝子編集技術でも超急性拒絶反応等のリスクに対処出来る様になったため、異種移植の分野が再活性化しています。[4] ２０２２年にアメリカの２つのグループで豚の腎臓移植に成功（ニューヨーク大学54時間、ＵＡＢ研究所74時間生存、移植された腎臓から尿

が生成）したという報告があり、さらに豚の心臓移植手術も行われ、約2ヶ月後には亡くなりました。この際に事前のチェックでは確認されなかった豚ＣＭＶ（サイトメガロウイルス）に移植された心臓が感染していたことがわかり、病原体伝播のリスクが依然として存在することも指摘されています。そして、２０２３年9月、世界で2人目の豚の心臓移植を受けた患者が6週間生存したことが報じられました。[5,6] このように、CRISPR/Cas9等で遺伝子操作された豚を用いた異種移植の臨床研究は現在盛んに行われるようになっており、異種移植が未来の話ではなく現実のものになりつつあります。それと同時に異種移植に関わる倫理的な議論も盛んになってきました。

## 異種移植における倫理的課題

一般的に異種移植に反対する議論には、大きく分けてドナーの動物に対するものとレシピエントの人間に対するものがあります。動物に対するものとしては、

- 動物虐待や動物の権利侵害（例：異種移植が医療処置として利用可能になる前にドナーの動物は治験や実験の対象となり苦痛を与えてしまう可能性がある）
- 種間での差別（例：霊長類は可哀想だがブタは食用にも用いられるため臓器を「利用」する精神的なハードルが霊長類に比べて低い）

が挙げられます。動物虐待や動物の権利侵害については異種移植に限ったものではなく、生命科学研究全般に言えることです。「もしも動物に苦痛を与えないような代替の手段が利用可能であれば、その使用を検討することが奨励されるべき」という意見もあります。[7]

現在、ブタは食用にも用いられるため動物愛護的問題が少ないという理由からも異種移植の研究に多く用いられています。もちろんブタについても道徳的に理想ではないものの大きな利益をもたらすことがあるのなら今後も使用が継続される可能性が高いと考えられます。

霊長類に対しては倫理的な問題が多く指摘されているにもかかわらず、ブタに対しては倫理的な問題が指摘されづらいという、種間で差別があることに対して反対意見もあります。プリンストン大学教授で哲学者のピーター・シンガーは種間差別を「自分の種のメンバーの利益を優先し、他の種のメンバーの利益に反する偏見や態度」と定義し、実験に使われる動物の権利に関しても倫理的な議論が起こっています。

また、レシピエントの人間に対する倫理的課題としては、

・人間の尊厳を脅かされる
・移植を受ける者のアイデンティティを曖昧にする（ブタの臓器が自分の一部になっている）
・道徳的タブーを破壊する可能性がある（伝統的にキリスト教は異種移植には反対の立場を取っていた）

などの点が指摘されています。

異種移植により身体の完全性が損なわれ、人間の尊厳が脅かされる可能性があることはよく指摘されていますが、レシピエントが獲得しうる利益や身体機能の回復によってこの点は容認されると考えられているのも事実です。[8] 道徳的タブーに関しては、キリスト教は伝統的に異種移植に反対の立場を取っていました。例えば、1682年戦闘で頭皮と頭蓋骨の一部を失ったロシアの貴族が外科医によって犬の頭蓋骨の骨片を使って頭蓋骨の欠陥を修復することに成功。しかしロシアの教会は、頭に犬の骨がある人はキリスト教徒にはなれないと考え、この貴族を破門すると脅しました。[9] 近年は反対の立場を軟化させている傾向にありますが、今後異種移植技術の発展に伴って、さらにキリスト教における道徳的タブーを破壊する可能性は増してくると考えられます。

【註】

（1）https://edition.cnn.com/2024/01/30/health/pig-organ-transplant-xenotransplantation/index.html
（2）https://jsn.or.jp/journal/document/47_2/83-93.pdf

（3）https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC6487536
（4）https://www.nature.com/articles/s41591-023-02471-9
（5）https://www.nature.com/articles/d41591-023-00078-8
（6）https://www.umms.org/ummc/news/2023/announcing-the-passing-of-lawrence-faucette
（7）OOCYTES FOR SALE? LORI GRUEN
（8）Ethical considerations in xenotransplantation: a review
（9）https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/xen.12797.

【熊谷信是】

## 第三章　移植医療に私たちはどう向きあうか

ここまで移植医療、とりわけ臓器移植についての実態と問題点をみてきました。ここからは、私たちが臓器移植に対してどのように向きあっていったらよいのか、浄土宗の立場から考えていきたいと思います。

### 1　浄土宗総合研究所の見解について（

浄土宗総合研究所ではこれまで、「脳死・臓器移植問題に対する報告」（１９９２年）、「『臓器の移植に関する法律』について」（２００５年）、総研叢書『いのちの倫理』（２００８年）などで基本的な立場を表明してきました。これらは発表された時期こそ違え、基本的な立場や見解に相違はありませんので、以下に要点を列挙します。

・脳死・臓器移植問題について、浄土宗が教団としての見解を、賛成か反対かという二者択一的な立場から公表すべきではない。

・脳死・心臓死どちらによって人間の死とするのか、臓器移植をおこなうのかという問題に対しては、念仏の教えをどのようにいただいて生きていくのかという目的のもとに、各個人の主体的な判断によることを重んじるべき。

・（臓器を）提供することに対しては、否定する根拠は極めて少ない。純粋な気持ちから他者の幸福を

願って、自らの臓器を進んで提供しようとする姿勢は評価すべきである。臓器の提供を受ける側としては、自然な命の営みに抗してながらえるものであることを自覚し、さらに提供する人をはじめ、さまざまな縁によって移植できることを感謝し、その恩に報いる生き方をすることが望まれる。

・（臓器移植法の改正に関して）現行の法律およびその運用は現状に即したものと考えられる。脳死者からの臓器提供年齢の引き下げや本人以外の家族等の同意による移植の実施、親族優先権などの導入が議論されているが、あえて改正の必要性はないと考える。

これらの見解、とくに1992年の報告は、浄土宗宗議会での質問に基づき宗務総長からの諮問を受けて作成されたもので、当時の宗内を代表する学識経験者が参集し、丁寧な議論を経てまとめられており、現在においてもその価値は減じていないと思われます。2005年の答申も『いのちの倫理』もその立場や見解を踏襲しつつ、時代の変化に対応したものです。現在においても、右に挙げた見解は基本的な立場として変更や修正の必要はないと考えます。

しかし近年では、この見解において想定外とも言える事態、動物の命を利用した「異種移植」の可能性がひらけ、大きな期待が寄せられるようになってきました。したがって異種移植については、従来の見解を踏まえつつ別に検討してみる必要性があると考えられたので、次節にて取り上げることにします。

【吉田淳雄】

## 2　異種移植をどう考えるか

ここでは、一浄土宗教師として、異種移植に対してどのような態度で取り組めばいいのか考えてみたいと思います。

浄土宗として異種移植について直接言及しているような考え方はありませんが、異種移植は他の動物の命を奪う行為にあたり、不殺生戒を破ってしまうことに

繋がるため積極的に勧められるものではないと考えられます。しかしながら、私達は凡夫であり欲の心を捨てられないのも事実です。もしも自分が命の危機に瀕していて、ブタの心臓や腎臓を移植すれば命が助かるという状況になった場合、自分の命よりもブタの命を優先出来る人は少ないと思います。

この不殺生戒という考え方は、生きとし生けるものを殺すなという考え方ですが、逆にいえば、「頂いた命は活かす」、「色々な命に生かされていることを真剣に捉え感謝の気持ちを持って生きろ」という考え方にもつながっています。

法然上人の御法語「自身安穏」の中に

念仏の助業ならずして、今生（こんじょう）のために身を貪求（とんぐ）するは、三悪道（さんなくどう）の業（ごう）となる。往生極楽のために自身を貪求するは、往生の助業となるなり

（訳：念仏の助けとすることなく、この世を楽しむために我が身を愛することは、三悪道へ堕ちる行為となります。極楽往生のために自身を愛することは、往生の助けとなるのです）

とあるように、自分自身がこの世を楽しむために動物の命を利用することは勧められる考え方ではありません。しかしながら、正しい目標に対して邁進するために自分自身の身体を大切にすることは往生の助けとなると法然上人は認めてくださっています。

共生という思想があります。他の動物の命をもらわないとこの私は生きては行けないという考え方ですが、浄土宗の食作法の中にこの共生の考え方が良く現れています。浄土宗の食作法の中には「ほんとうに生きんがために」という言葉があります。頂いたものを貪るような生き方ではなく、我が身を養い、頂いた命に感謝し報いることを真剣に考えて生きる、ただ生きるのではなく「ほんとうに」生きることが大切だと浄土宗の食作法は教えてくれます。そのように考え生きることが、頂いた臓器を活かすことにもつながるのではないでしょうか。布施をする際の理想的な心のあり方と

して、三輪清浄という考え方があります。施しをした人、それを享受した人、その品物、それぞれが清らかなことが布施をする際には大切であるという考え方です。ブタの命を頂戴する側として、三輪清浄的な考え方からも頂く際の心得として我欲に囚われないことが大切なのではないでしょうか。

「ほんとうに生きんがために」食を頂く場合と同じように、将来異種移植で動物の臓器を頂く場合は、誓って恩に報いる、立派な身になっていこうという思いを持って命を頂くという考え方を持つのが大切だと考えます。

１９９７年に急性肝不全を起こした青年の命が遺伝子組み換えブタの体外灌流で助かったお話があります。ロバート・ペニントンという青年はインフルエンザにかかった数週間後に体調不良を訴え、アメリカのダラスにあるベイラー大学メディカルセンターに運ばれ劇症肝不全、つまり肝臓が機能しなくなったと診断されました。肝臓移植をしなければこの青年は死んでしまいます。ロバートは移植リストの一番上に載せられたものの、この時点で移植可能な肝臓の空きはありませんでした。ロバートの容態が急変し深い昏睡状態に陥り、自力で食べることも呼吸することもできなくなりました。彼の祖母は、主治医から提案された当時前例がなかった遺伝子組換えブタの肝臓を用いた体外灌流を行うことを決断しました。生後15週、体重１１８ポンド（約53・５kg）の肝臓が体外灌流で使用され、ロバートの灰色がかった血液は、ブタの肝臓を通り、鮮やかな赤に変わっていき、主治医はブタの肝臓が確実にロバートの血液中の毒素を取り除いていくのを確認したといいます。それから6時間半後に移植可能な人間の肝臓が見つかり、結果として、青年の祖母の思い切った決断とこの遺伝子組換えブタがこの青年の命を救いました。その青年の祖母のスクラップブックの中には、その青年の命を救うために犠牲になったブタ――スウィーティーパイと名付けられた――のスナップ写真を大切に残しているといいます。(1)

この青年に対するインタビューでは、このブタを他人だと思えないと青年本人が言っており、青年のために犠牲になったこのブタにずっと感謝の気持ちを持ち続けているそうです。青年の命を生きながらえさせてくれたブタの写真をずっと持って感謝の気持ちを持ち続けているこの青年と祖母のように、頂いた命に感謝するという姿勢が大切なのではないでしょうか。

今回は、命を頂くという意味で、異種移植と食べることを同列に並べて考えてみましたが、実際に同様に考えても良いのかどうか、読者の皆様にも考えて頂きたいと思います。

技術の進歩は止めようがなく、医療はどんどん異種移植の実用化に向けての臨床研究を進めています。一宗教者として、異種移植が実用化された際にどのような態度で望むべきか、読者の皆様が考えて頂く一助としていただければ幸いです。

【註】

（1）https://www.nytimes.com/1999/10/03/magazine/could-this-pig-save-your-life.html

【熊谷信是】

## おわりに

これまで、移植医療の現状と新たな動向について述べてきました。改正臓器移植法の施行以降、関連分野での科学的知見の拡大や新技術の開発などと連動して、移植医療は着実に進展しています。その一方で、法改正後も大きな変化が見られない事象があったり、新たに生じた問題点やより深刻化する懸念も存在しているのです。最後に、2年間の調査・研究の成果を列挙してまとめとします。

①移植医療は有効な医療であり、当該患者にとって大きな希望の灯となっているのは事実である。しかし

自家移植を除けば、他者（提供者）の生命や健康と引き換えに患者の治療が可能となることを忘れてはならない。とくに日本では、深刻な臓器不足が背景となっているためか、患者が救われるという側面のみが強調され、提供臓器数を増やそうという社会的な傾向が認められる。

②臓器移植について考えるためには、臓器移植の実際の手順やリスク、関係者の心理や社会的・倫理的な問題点などについて知る必要がある。ポジティブな面もネガティブな面も両方知ってはじめて、自分や家族が直面した場合どうするかを考えるための材料が揃うことになる。

③浄土宗総合研究所ではこれまで、「脳死・臓器移植問題に対する報告」（一九九二年）、「『臓器の移植に関する法律』について」（二〇〇五年）、総研叢書『いのちの倫理』（二〇〇八年）などで基本的な立場を表明してきた。それらにおいて述べられた見解については、現在においても概ね変更や修正の必要はないと考える。

④近年の移植医療の動向や現状を踏まえて、従来の見解に付加するならば以下の通りである。

・脳死者からの臓器提供は家族に深い苦悩を残すことがあり、充分な情報収集と普段からの家族間でのコミュニケーションが必要（それでも悔いや葛藤は起こりうる）。移植後の健康管理もシビアで、必ずしも期待していたような結果につながらない可能性も考慮しておかなければならない。

・海外渡航移植や生体移植においては、他者の臓器を資源として見てしまい、相手の健康や生活、本当の意思などを軽視ないし度外視することも起こりうる。私たちは凡夫であり、そのような利己的な判断や行動に傾くおそれが充分考えられることを自覚しておかなければならない。したがって、社会的に弱い立場にある人やまだ自分の意思を明示できない小児などが、そうした状況に追い込まれないことを最優先とした社会的な仕組みが確立するよう注視し、努め

てゆく必要がある。

・異種移植のような、臓器提供元に動物を利用する手法も実施されつつある。動物の生命は食料をはじめ様々に利用されてはいるので、様々な考え方が成り立つと思われるが、宗教的な立場からは、人間も動物も一つの「いのち」である点を重視したい。異種移植の場合も、自然な命の営みに抗してながらえることを自覚し、提供者（動物）をはじめ医療関係者などさまざまな縁によって移植が実現していることを感謝し、その恩に報いる生き方をすることが望まれる、という点は従来の臓器移植と同じであると考えられる。

・生存または生活に大きな支障をもたらす病状を改善することを目的としていた従来の臓器移植とは異なる、子宮移植（子どもを得ることを目的とする）のような臓器移植も出現してきた。日本でも子宮移植の臨床試験が開始されようとしているが、このような目的での臓器移植をどう考えるべきか、私たち一人一人が考えてゆく必要がある。

移植医療が病に苦しむ人を救うために有効な手段であることは言うまでもありません。それだけに、賛否についても様々な意見があることでしょう。今回の私たちの研究は、賛否について論ずるものではなく、自分自身がそうした状況に置かれた時に、自分自身をはじめ関係する人たちになるべく後悔や悔恨を残さないような選択をするために、知っておくべきことや目を向けるべきことなどを提示し、判断材料の一助となればという思いから取り組んできたものです。当然、取り上げきれなかった問題や調査が及ばなかった事項も少なからずありますし、異論や違和感をお持ちの方もいらっしゃると思いますが、本研究がみなさまに移植医療への関心を惹起し、深く考えていただく契機に、議論の端緒になれば幸いです。

【吉田淳雄】

# 研究ノート

# 十重禁戒のキャッチコピー

## ◎第一殺戒

### 一、戒の名称

・「殺戒」（せっかい）

### 二、キャッチコピー

・殺しあうのではなく生かしあおう
・みんな同じ　生きているから
・戦争反対　殺人反対　殺生反対
・生命尊重
・生命を大切に尊ぶべし
・生命を尊んで助けよ

### 三、戒の趣旨

・むやみに殺さず、慈しみの心で生命を尊ぶ勧め

### 四、『梵網経』漢文

佛言佛子若自殺教人殺方便殺讃歎殺見作隨喜乃至呪殺殺因殺縁殺法殺業乃至一切有命者不得故殺是菩薩應起常住慈悲心孝順心方便救護一切衆生而反更自恣心快意殺生者是菩薩波羅夷罪

### 五、『梵網経』訓読

仏の言わく、仏子、若し自ら殺し、人を教えて殺さ

しめ、殺すに方便し、殺すを讃歎し、作すを見て随喜し、乃至、咒して殺さば、殺すの因、殺すの縁、殺すの法、殺すの業あらん。乃至、一切有命の者の、故らに殺すことを得ざれ。是れ菩薩は、応に常住の慈悲心・孝順心を起こし、方便して一切衆生を救護すべし。而るを反って更に自ら恣心・快意にて殺生せば、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

## 六、『梵網経』和訳

仏の仰るには、仏子よ、もし自分で殺したり、人をそそのかして殺させたり、手立てを用いて殺したり、殺すことを褒め称えたり、殺すことを見て喜んだり、あるいは、呪って殺せば、殺す因（直接原因）や、殺す縁（間接原因）や、殺す法（方法・手段）や、殺す業（行為）がそろう〔ことになる〕であろう。

あらゆる命ある者に至るまで、意図して殺してはいけない。菩薩は、常に変わらない慈悲心や孝順心を起こし、手立てを講じてあらゆる衆生を救い護らなければいけない。それなのに返ってなお一層に、ほしいままに喜んで殺生すれば、これは菩薩の波羅夷罪である。

## 七、例話

十重禁戒の中の第一「殺戒」では、あらゆる命あるものを殺してはいけないことについて、自ら殺すこと、他に殺させることが説かれています。三聚浄戒は、摂律儀戒（止悪）・摂善法戒（行善）・摂衆生戒（利他行）ですが、「殺戒」も三聚浄戒を通して考えることができます。

善導大師の『観経疏』「散善義」[1]に「一切の生命に慈心を起すはすなわちこれ一切衆生に寿命安楽を施すなり。またこれ最上勝妙の戒なり。これすなわち上の初福の第三の句に慈心不殺と云えるに合わす。すなわち止と行との二善有り。自ら殺さず。故に止善と名づく。他をして殺さざらしむ。故に行善と名づく」とありますように、自ら殺さないことは「止悪」だけではなく、「行善」でもあり、他人に殺させないことも「行

善」になります。

「殺戒」の対象を人間に限定した場合を考えますと、自ら人間を殺すのはごく一部の方に限定されるでしょう。また他人に命じて殺させるのも大部分の方は縁がないように思います。しかし現代社会においては、そのように言い切れない現実があります。

釈尊在世のインドや法然上人在世の日本における社会の在り方は、国民が国家を動かすことはほとんどできず、権力者が国家の在り方を決める社会でした。一方で現代の日本は日本国憲法の三原則にありますように「国民主権」の国家です。国の政治の在り方を決めるのは国民であるということです。

ここで自衛隊の服務宣誓を見ていきますと、「私は、わが国の平和と独立を守る自衛隊の使命を自覚し、日本国憲法及び法令を遵守し、一致団結、厳正な規律を保持し、常に徳操を養い、人格を尊重し、心身を鍛え、技能を磨き、政治的活動に関与せず、強い責任感をもって専心職務の遂行にあたり、事に臨んでは危険を顧みず、身をもつて責務の完遂に務め、もって国民の負託にこたえることを誓います」とあります。これは自衛隊員になるときに必ず誓うもので、自衛隊員は国民の負託を受けて任務にあたるというものです。つまり、もし日本が戦争をすることになれば、国家の方向性を決めた国民が自衛隊員に殺させることになるということです。

戦争が現実になれば、その恨みは世代を超えて、時代を超えて受け継がれていくことは、第二次世界大戦から今日にいたるまでの他国の主張を見れば明らかです。映画監督の黒澤明氏が「何が何でも戦争だけはしちゃいけない」[2]と指摘しておられるように、戦争は「殺戒」だけに止まらず、盗・淫・妄などたくさんの戒にもつながるものですから、政治的・外交的・文化的・宗教的などあらゆる公私の交流を通して、戦争が起こらないように全人類の知恵を出し合う必要があります。戦争にならないように努めることは「止悪」になりますし、自衛隊員の家族や友人の不安や悲しみを

軽減させることからも「行善」や「利他行」にもなります。自衛隊は国家や国民を守る存在である一方、国民が自衛隊員やその家族を守ることにもなるということです。阪神・淡路大震災や東日本大震災を始めとして、多くの災害救助活動などで活躍する場が増えている自衛隊です。災害大国日本において、自衛隊の方々の命を大切にすることは、沢山の命を救うことにもつながるのです。

現代社会において、「自衛のため」という目的で始められることの多い戦争は、人間を含むあらゆる生き物を殺すことであり、釈尊や法然上人在世の時代とは比較にならないほどの広範囲にわたって殺すことが出来る力を我々人間は持ってしまっているのです。ひとたび核戦争になれば、地球上の全生物に悪影響を及ぼし、未来に生きる全生物にも悪影響が残ることを受け止めて、「殺戒」を理解することが大切です。戦争を通して人間の命を考えることはもちろん、他の生物の命も無駄にしないようにしたいものです。

「いかなる生物生類であっても、怯えているものでも強剛なものでも、悉く、長いものでも、短いものでも、大きなものでも、中くらいのものでも、微細なものでも、粗大なものでも、目に見えるものでも、見えないものでも、遠くに住むものでも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれようと欲するものでも、一切の生きとし生けるものは、幸せであれ」[3]というお釈迦様の教えを大切にしたいものです。

（参考）『朝日新聞』折々のことば　令和五年六月七日（水）朝刊　鷲田清一

「何が何でも、戦争だけはしちゃいけない」　黒澤明

この考えだけは「ピクリとも動かなかった」と、映画監督の生涯を娘の和子はふり返る。いったん戦争が始まってしまうと、虫も殺せなかった人が「鬼の形相」で人を殺める。恐怖の連鎖の中でついに「人間が人間でなくなる」。そういう深い傷から立ち直るまでに、

「さらに世代を超えて累々と悲しみは続くんだよ」と語っていたと。黒澤和子の『黒澤明「生きる」言葉』から。

## ◎第二・盗戒

### 一、戒の名称

・「盗戒」（とうかい）

### 二、キャッチコピー

・盗むな、与えよ
・盗みは損、正直は宝
・盗みは苦を生む
・優しさをあの人にも
・盗みは苦、与えるは楽
・パクるな―仏の眼は盗めない―

### 三、戒の趣旨

・他人の物を盗まず、互いに助け合う勧め

### 四、『梵網経』漢文

若佛子自盗教人盗方便盗讃歎盗見作隨喜乃至呪盗盗因盗縁盗法盗業乃至鬼神有主劫賊物一切財物一針一草不得故盗而菩薩應生佛性孝順心慈悲心常助一切人生福生樂而反更盗人財物者是菩薩波羅夷罪

### 五、『梵網経』訓読

若（なんぢ）、仏子、自（みずか）ら盗み、人を教えて盗ましめ、盗むに方便し、盗むを讃歎し、作すを見て随喜し、乃至、咒して盗まば、盗むの因、盗むの縁、盗むの法、盗むの業あらん。乃至、鬼神・有主・劫賊の物、一切の財物、一針一草も、故（こと）らに盗むことを得ざれ。而も菩薩は、応に仏性の孝順心・慈悲心を生じ、常に一切の人を助けて福を生じ楽を生ぜしむべし。而るを反（かえ）って更に人の財物を盗まば、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

## 六、『梵網経』和訳

おまえ達、仏子よ、自分で盗み、人をそそのかして盗ませたり、手立てを用いて盗んだり、盗むことを褒め称えたり、盗むことを見て喜んだり、あるいは、呪術で盗めば、盗む因（直接原因）や、盗む縁（間接原因）や、盗む法（方法・手段）や、盗む業（行為）がそろう〔ことになる〕であろう。

鬼神の物、所有者のある物、強盗の物、あらゆる財物、一本の針、一茎の草に至るまで、意図して盗んではいけない。そのうえ菩薩は、仏になりうる資質としての孝順心や慈悲心を起こして、常にあらゆる人を助けて、福を生じ楽を生じさせなければいけない。それなのに返ってなお一層に、人の財物を盗めば、これは菩薩の波羅夷罪である。

## 七、例話

十重禁戒の第二は「盗戒」です。「盗戒」の基本的な意味は「他人のものを盗むことなく、常に人々を助けて安楽を与えましょう」ということになります。

盗みと言えば、資産家のお家・宝石店などが強盗・窃盗の被害にあうニュースを近頃よく見聞きいたします。このような刑事事件となるような盗みを犯したことがない人であったとしても、目立たない小さな盗みを犯したことがある人はたくさんいるのではないでしょうか。例えば、職場にある文房具を自宅に持ち帰り、私的に使用したことがないでしょうか。鉛筆一本・消しゴム一個であったとしても職場の所有物です。それらを持ち帰り、自分のものとすることは立派な盗みにあたります。自身は今までどのような盗みをしてきたのかを一度振り返り、今後は小さな盗みでもなるべく犯さないように努めていきたいものです。

また「盗戒」には盗む行為とは反対に「常に人々を助けて安楽を与えましょう」とあります。助けるとは具体的には三施や七施といった布施行[4]を指します。強盗・窃盗事件の記事をみていると、盗みを犯した人の多くは経済的に困窮していたり、あるいは心に何ら

かの問題を抱えていたりすることが多いようです。そういった人々を含めてすべての人々に対して、私たちが菩薩として惜しむことなく与える行為を実践し、彼らを助け、彼らに安楽を与え、彼らにより良き人生を歩んでもらえるように努めていきたいものです。

この「盗む」・「与える」という行為に関連したお話をご紹介いたします。ご存じの方も多いでしょうが、小学校高学年の道徳の授業でよく取り上げられる「銀の燭台」[5]というお話です。このお話はフランスの有名な作家ヴィクトル・ユーゴー作の『レ・ミゼラブル』[6]という小説に出てきます。以下のようなあらすじです。

貧しい農家に生まれ、早くに両親を亡くしたジャン・バルジャン（以下「ジャン」とする）は、一人の姉とその七人の子どもたちをたった一人で養っていました。ある時、お腹を空かせた彼らの為にたった一切れのパンを盗み、牢屋に入れられてしまいました。十九年もの長い刑期を終えてジャンはようやく牢屋を出ることになりました。しかし、そのころにはジャンの心はすっかり荒れ果てていたのでした。

牢屋を出た後、ある町までやって来ますが、ジャンはどこの宿にも泊めてもらえず、食事もできないで、困り果ててしまいました。ジャンはある教会に辿り着くと、教会にいた老人に泊めてほしいと懇願しました。老人は、ジャンを教会の中に招き入れると、食事を振る舞い、ベッドも用意してくれました。ジャンはその夜ベッドの上で、夕食のテーブルに並んでいた銀の食器のことを思い出しました。「あれを売ったら、高く売れるぞ」と。

ジャンはベッドから起き上がると、銀の食器を盗み出し、逃げ去ってしまったのでした。一緒に教会の老人も殺してしまおうかと思いましたが、月明かりに照らされた老人の穏やかな顔を見て、殺すことを思いとどまりました。

しばらくして街中で憲兵に捕まったジャンは、憲兵に連れられて再び教会の老人のもとに戻ってきました。

老人は「銀の食器は盗まれたのではなく、彼にあげたものだ」と憲兵に言います。さらに「この銀の燭台もあげたのに、忘れていきましたね」と言ってジャンに銀の燭台も手渡したのです。驚いて立ちすくむジャンに向かって老人は「これは、あなたが正直な人間になるために使いなさい。決して忘れないでください」とそっとささやきました。後でジャンが知ることになるのですが、あの老人はミリエル司教という教会内でとても位の高い人でした。

ミリエル司教との出会い以降、ジャンはすっかり改心し、名前を変えて正直に生きる人生を歩み出し、ついには市長にまでなります。ジャンの人生は波乱に満ちたものでしたがミリエル司教の教えの通りに正直に生きるように努め、最後亡くなるまでミリエル司教から頂いた銀の燭台を手放すことは決してありませんでした。

以上が「銀の燭台」についての大まかなあらすじです。ミリエル司教は親切にもてなしたジャンに銀の皿を盗まれて裏切られたわけですが、ジャンのことを深く思い、決してその盗みの行為を責めることなく、さらには彼が正直に生きる人生を歩んでもらえるように銀の燭台も惜しみなく与えたのです。ミリエル司教のこの温かな導きによって、ジャンはミリエル司教から与えられた燭台を自己の灯として生涯にわたり正直に生きる人生を歩むことができたのです。

ミリエル司教はキリスト教徒の鏡として描かれていますが、その行為は菩薩としての私たちの理想のあり方に重なるところがあるように思われます。「盗戒」は「他人のものを盗むことなく、常に人々を助けて安楽を与えましょう」ということでしたが、ミリエル司教はまさにそのお手本となる行為を示してくれているように思われます。十重禁戒の第二「盗戒」を拠り所として、私たち菩薩も盗まないように努めることはもちろんのこと、そのうえでお互いに惜しみなく与え合い、布施行を実践し合い、安楽を生じさせ合い、より良き人生を歩んでいけるよう努めていきたいものです。

## ◎第三・邪淫戒

### 一、戒の名称

・「邪淫戒」（じゃいんかい）

### 二、キャッチコピー

・邪な関係を慎め
・純潔は美徳の根
・純粋な愛、純粋な人生
・性純な道を歩む勇気
・欲望よりも思いやり
・情欲、愛欲、色欲、肉欲に溺れるな
・夫婦関係は1＋1＝1にならなければいけない

### 三、戒の趣旨

・欲望のままにふるまわず、相手を大切にする勧め

### 四、『梵網経』漢文

若佛子自婬教人婬乃至一切女人不得故婬婬因婬縁婬法婬業乃至畜生女諸天鬼神女及非道行婬而菩薩應生孝順心救度一切衆生淨法與人而反更起一切人婬不擇畜生乃至母女姉妹六親行婬無慈悲心者是菩薩波羅夷罪

### 五、『梵網経』訓読

若、仏子、自ら婬し、人を教えて婬せしめん。乃至、一切の女人故らに婬することを得ざれ。婬の因、婬の縁、婬の法、婬の業あらん。乃至、畜生女、諸天鬼神女、及び非道に婬を行ぜんや。而も菩薩は応に孝順心を生じて、一切衆生を救度し、浄法を人に与うべし。而るを反って更に一切人の婬を起こし、畜生を択ばず、乃至、母女・姉妹・六親に婬を行じて、慈悲心無くば、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

### 六、『梵網経』和訳

おまえ達、仏子よ、自分から淫らな行為をし、人を

そそのかして淫らな行為をさせるとしよう。すべての女性に至るまで、意図して淫らな行為をしてはいけない。淫行の因（直接原因）となり、淫行の縁（間接原因）となり、淫行の法（方法・手段）であり、淫行の業（行為）がそろう〔ことになる〕であろう。

動物の雌、諸天・鬼神の女、更には性器以外での淫らな行為をするのは猶更である。そのうえ菩薩は、孝順心を起こして、あらゆる衆生を救い助け、浄らかな教えを人に与えなければいけない。それなのに返ってなお一層に、あらゆる人が持っているであろう淫らな心を起こし、動物に限らず、母・娘・姉妹、近親者（六親）に至るまで、淫らな行為をして、慈悲心がなければ、これは菩薩の波羅夷罪である。

## 七、例話

「邪淫戒」は性欲を抑えるためにつくられた戒であると言われています。釈尊の時代から、様々な規則やルールなどを設け、教団または社会が乱れないためにつくられたものです。特に、男性の欲望から女性を守るために十重禁戒のなかに「邪淫戒」が制定されたのではないかと思われます。昔は、女性は結婚するまで、親に、親戚に守られていました。

ところで、人と人のかかわりの中には「結婚」という制度があります。結婚について、『世界大百科事典』では、次のようにあります。

婚姻とは、社会的に承認された夫と妻の結合であり、この〈夫〉と〈妻〉の資格、役割については、それぞれの社会において独自の意味づけがなされている。

もちろん、これは国や、民族などによって変わります。現代日本における結婚の概念は、西洋から伝わったものであって、昭和時代から、皇族を含め一夫一妻が定着しました。社会がこのように決めたなら、一夫一妻の関係以外の関係を持つことになると、現代社会では「罪」とみられ、周りからバッシングを受けることになります。

某雑誌には不倫について、「不倫だろうとセカンドパートナーだろうと、純愛だろうと遊びだろうと、配偶者や子供を傷つけるのは同じなのですよね。ですから今回、一連の報道によって『家族を失うという可能性』に改めて気づいてしまい、肝を冷やした既婚者も多かったのではないでしょうか」とあるように、一人もしくは二人の行動によって多くの人に影響を与え、家族なども失うこともあります。ひと時の行動が、その人の人生を狂わせることになるのです。

人と人の間に性欲が湧きます。この性欲が罪にならないように「邪淫戒」があると考えます。

昨今、テレビや雑誌で様々なハラスメントを見聞きします。その中で、「邪淫戒」はセクシュアル・ハラスメント（セクハラ）と結びつきます。『日本大百科全書』には、セクハラについて次のようにあります。

性的嫌がらせのこと。とくに問題とされているのは、職場において男性の上司などから女性が性的言動の対象とされ、不利益や悪影響を受ける場合である。性的関係を迫られて拒否すると解雇・左遷されるなど不利益を受けるタイプが「脅迫型」または「代償型」、噂などによって、職場で働きにくくなるなど悪影響を受けるタイプが「環境型」とよばれている。一九八〇年ごろから、女性の尊厳・人権を侵害する重大な問題であるとして社会問題化しており、日本では「セクハラ」と略されて広く使われるようになった。

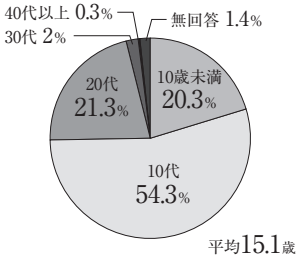
NHKが「性暴力アンケート」を実施したところ、三万三千三百八十三人から回答があり、その結果は以下の通りであります。(7)

回答者の性別

| | |
|---|---|
| 女性 | 91.3%（35,078 人） |
| Xジェンダー | 5.4%（2,086 人） |
| 男性 | 1.1%（437 人） |
| その他 | 0.9%（350 人） |
| 答えたくない | 0.8%（345 人） |

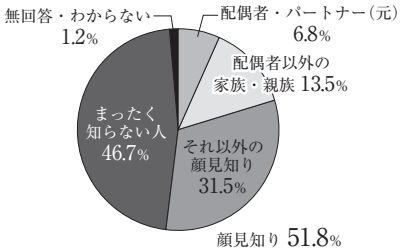
（小数点以下第２位は切り捨て）

被害に遭ったときの年齢




加害者との関係性

全体




被害の内容

| | |
|---|---|
| 衣服の上から触られた | 65.7% |
| からかいなど、性的なことばをかけられた | 40.0% |
| 体を直接触られた | 39.6% |
| 加害者の性器、胸などを見せられた | 29.2% |
| 加害者の性器、胸などを触らせた・押しつけられた | 26.1% |
| 唇や舌などを体に当てられた | 20.9% |
| 性器や体の一部を自分の口、肛門、膣（ちつ）に挿入された | 18.6% |
| 脱がされた | 16.4% |
| 加害者に自慰行為見せられた・手伝わされた | 10.8% |
| 盗撮された | 8.9% |

（複数選択 上位10項目）

このアンケートから分かることは、被害者の中で女性が非常に多く、特に二十代までの若者が被害の対象になっているということで、これは、社会的、組織的弱者がターゲットになりやすい現実を示しています。

最近でも、某芸能プロダクションの問題が明るみになり、若い少年たちが被害に遭っていたことが世界中までに報じられています。権力によって、このことを隠しきったことも話題になっています。

また歌舞伎界でも、某役者は共演する役者たちにキスや体を触る行為といった「性的スキンシップ」を求めていたことが報じられました。性的スキンシップを拒否したスタッフを公演から外すなどのパワーハラスメントという問題も含まれていたこともあり、結果的にご両親までも追い詰め、死に至らせるという悲劇的な結末を生んでしまいました。

「邪淫戒」は、他の戒と同じように、人間社会が乱れないため、特に立場的に弱い人を守るためにできた戒めであると考えます。この世の中にはタイムスリッ

プというものがありません。また、人生はゲームでもありませんので、リセットもできません。「邪淫戒」は、社会や組織の中でどれだけ力がある立場にあろうとも、常に慈悲心を持って行動することの大切さを説いているのではないでしょうか。

## ◎第四・妄語戒

### 一、戒の名称

・「妄語戒」（もうごかい）

### 二、キャッチコピー

・嘘をつくな、誠実の言を語れ
・一番大きな嘘は、今まで一度も嘘をついたことがないという嘘
・嘘という斧で人を傷つけてはいけない
・嘘は泥棒のはじまり、誠は仏道のはじまり
・金の斧、銀の斧、鉄の斧、あなたが手にするのは？
・正直者が馬鹿をみない仏の世界
・嘘は自他を惑わす
・ウソは共生をぶち壊す

### 三、戒の趣旨

・妄りな言葉を用いず、正しい言葉を用いて他者を導く勧め

### 四、『梵網経』漢文

若佛子自妄語教人妄語方便妄語妄語因妄語縁妄語法妄語業乃至不見言見見言不見身心妄語而菩薩常生正語正見亦生一切衆生正語正見而反更起一切衆生邪語邪見邪業者是菩薩波羅夷罪

### 五、『梵網経』訓読

若（なんぢ）、仏子、自（みずか）ら妄語し、人を教えて妄語せしめ、方便して妄語せば、妄語の因、妄語の縁、妄語の法、妄語の業あらん。乃至、不見を見と言い、見を不見と言い、身心に妄語せんや。而も菩薩は、常に正語・正見

を生じ、亦、一切衆生の正語・正見を生ずべし。而るを反(かえ)って更に一切衆生の、邪語・邪見・邪業を起こさば、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

## 六、『梵網経』和訳

おまえ達、仏子よ、自分で嘘をついたり、人をそそのかして嘘をつかさせたり、手立てを用いて嘘をつくならば、嘘をつく因（直接原因）や、嘘をつく縁（間接原因）や、嘘をつく法（方法・手段）や、嘘をつく業（行為）がそろう〔ことになる〕であろう。

また見ていないのに見たと言い、見たのに見ていないと言い、身体・心で嘘をつくのは、なおさらである。しかも菩薩は、常に正語（正しい言葉）・正見（正しい見解）を持ち、またすべての衆生に正語（正しい言葉）・正見（正しい見解）を持たせなければいけない。それなのに返ってなお一層に、すべての衆生に、邪語（よこしまな言葉）、邪見（よこしまな見解）、邪業（よこしまな行為）を起こさせれば、これは菩薩の波羅夷罪である。

## 七、例話

仏教を開かれたお釈迦様は、「人は生まれながらにして、口の中に斧を持っている」（『スッタニパータ』六五七）とおっしゃいました。本来、斧は木を切る便利な道具ですが、使い道を誤ると人を傷付ける凶器にもなります。即ち、言葉も使い道を誤ると、人を傷つけてしまいかねないのです。だからこそ、仏教では、言葉という斧で、人を傷つけないように「妄語戒」が定められているのです。この「妄語戒」では、嘘、偽りの言葉を語ることを戒めていますが、それ以外にも、悪口や二枚舌、心にもないお世辞を語ることも戒めています。逆に言うと、ここでは正しい言葉を用い、真実を語ることが勧められているのです。

お釈迦様の十大弟子の中の一人に「密行第一」と呼ばれた羅睺羅という弟子がいました。羅睺羅は、お釈迦様の実の息子でもありましたが、出家した当初は、

教団内でちょっとした問題児でありました。
羅睺羅が、どんな問題を起こしていたのかと言うと、あるお弟子さんから、
「お釈迦様は、どちらにおみえですか」と尋ねられると、羅睺羅はそのお弟子さんに、嘘をついて、全く別の場所を教え、無駄足を踏ませては喜んでいたそうです。このような羅睺羅の言動が、お釈迦様の耳にも入り、事態を重く見たお釈迦様は、ある日、羅睺羅のもとを訪ねていかれました。すると、お釈迦様は羅睺羅のもとに着くなり、
「羅睺羅よ、ここに来る途中に足が汚れてしまった。すまぬが、足を洗ってくれんか」と頼まれました。羅睺羅は、言われた通り、盥に水を張り、お釈迦様の足を盥の水で洗いました。羅睺羅が、洗い終えるのを見て、お釈迦様は、次のように尋ねられました。
「羅睺羅よ、この水が飲めるか」
「いえ、世尊、この水は飲むことができません」
「どうしてだ」
「はい、今、この水で世尊の足を洗いましたから、汚れていて飲めません」
と答えました。お釈迦様は、
「そうだ、飲めんな。しかし、足を洗わなかったら、この水は飲めたはずだ。羅睺羅よ、お前の心も、この濁った水と同じある。人に嘘をついて惑わし、それを見て喜ぶなど、心が濁りきっている証拠だ」
お釈迦様は、盥の水を羅睺羅に捨てさせ、また今度は次のように尋ねられました。
「羅睺羅よ、この盥に食べ物を盛ったら食べられるか」
「いえ、食べられません。なぜなら、この盥は足を洗うためのものであり、食べ物を盛る器ではありませんので…」
「そうだな。足を洗う盥には、食べ物は入れぬものだ。しかし本来、盥自体には綺麗とか、汚いということはない。この盥も、最初は、まっさらなただの盥であった。だが、この盥を、足を洗うために使った時点から、

この盥は汚いものになっていくのだ。お前の心も、出家を志した時は、この汚い盥のようではなく、まっさらな盥のようであったはずだ。しかし、足を洗った瞬間から盥が汚れていくように、お前が嘘をついた瞬間から心は汚れだし、嘘を積み重ねることで、心はどんどん汚くなっていくのだ。まさに、お前の心は、この汚い盥と同じだ」

羅睺羅は、神妙な面持ちで黙って聞いていましたが、さらに、お釈迦様は、その盥をいきなり蹴っ飛ばされました。盥は、カラカラ、カラカラと音を立てて転がっていきました。お釈迦様は、転がる盥の方を見ながら、

「羅睺羅よ、盥が壊れるかかと心配したか」

「いいえ、あの盥は、どこにでもある盥ですから、心配していません」

と答えると、お釈迦様は、声を荒げ、厳しい顔つきで、叱りつけました。

「羅睺羅よ、まだ分からぬか。あれだけ盥に入った水を、一度に、お前の両手に汲むことができるか。盥は、水を入れるのには非常に便利な道具である。盥は、その使い道によって価値が決まる。今のお前は、まさに蹴られて転がる盥のようなものだ。お前のように、嘘ばかりついていると、この盥のように人から蹴られ、誰からも相手されず、不幸な人生を歩むであろう」

つまり、嘘を積み重ねると、周りに迷惑をかけるばかりでなく、人から嫌われ、最終的には、自分をも苦しめることになるのです。あまりの厳しいお叱りに羅睺羅は深く反省し、これをきっかけに真実を語るようになり、その後、人里離れた山に籠り、ひとり修行に明け暮れたといわれています。

このようなお話がある本の中で紹介されていましたが、[8] 私たちも言葉をどのように使うか、その使い道によって価値が決まるのです。羅睺羅のように、心という盥の中に、嘘、偽りの言葉を入れたならば、誰からも信用されず、汚い盥のように人から蹴られ、見捨てられるでしょう。しかし、その反対に、真実の言葉

を心に入れたならば、人から好かれ、誰からも信頼され、よりよい人生を送ることができるのです。

私たちは、口の中に嘘、偽りという斧を持っていることを自覚して、その斧を妄語戒という鞘で包み、日々の生活の中で、なるべく正しい言葉を用い、真実を語るよう心掛けてまいりましょう。

## ◎第五・酤酒戒

### 一、戒の名称

・「酤酒戒」（こしゅかい）

### 二、キャッチコピー

・汝、人を狂わせることなかれ。汝、人をして正気を持たしめよ

・喜びを売る、悲しみは売らない

・売るは喜び、狂わせず

・幸せを運ぶ商人、不幸を運ぶ売人

・飲むに罪になし、売るに罪あり

・飲酒軽罪、酤酒重罪

・うるな、よわすな、すすめるな

### 三、戒の趣旨

・酒を販売して利益を得ず、他者を正気にする勧め

※この条項は、酒の販売を禁止する。その理由は、自らの利益のために他者を狂わせる（他者を不幸にする）ことが菩薩の振舞としてふさわしくないからである。酒の販売だけでなく、人を不幸にすることで自らの利益を得ることが禁止されてる、と理解すべきである。

### 四、『梵網経』漢文

若佛子自酤酒教人酤酒酤酒因酤酒縁酤酒法酤酒業一切酒不得酤是酒起罪因縁而菩薩應生一切衆生明達之慧而反更生一切衆生顛倒之心者是菩薩波羅夷罪

## 五、『梵網経』訓読

若、仏子、自ら酤酒し、人を教えて酤酒せしめば、酤酒の因、酤酒の縁、酤酒の法、酤酒の業あらん。一切の酒、酤ることを得ざれ。是れ酒は、起罪の因縁なり。而も菩薩は、応に一切衆生の明達の慧を生ずべし。而るを反って更に一切衆生の顛倒の心を生ぜば、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

## 六、『梵網経』和訳

おまえ達、仏子よ、自分で酒を売り、人をそそのかして酒を売らせれば、酒を売る因（直接原因）や、酒を売る縁（間接原因）や、酒を売る法（方法・手段）や、酒を売る業（行為）がそろう〔ことになる〕であろう。

あらゆる酒を、売ってはいけない。酒は罪を作る原因である。そのうえ菩薩は、すべての衆生に、聡明な智慧を生じさせなければいけない。それなのに返ってなお一層に、すべての衆生に誤った心を生じさせれば、これは菩薩の波羅夷罪である。

## 七、例話

「酤酒戒」は、人を狂わせる物を売ることによって利益を得ることを禁止する規定です。本条では人を狂わせる物の代表として酒が取り上げられています。

『静かなるドン』という漫画があります。昼は下着会社のサラリーマン、夜はヤクザのドン、という設定の主人公のお話です。その中で、ある出来事で自暴自棄になった主人公が麻薬を吸う場面があります。一の子分がその場面に飛び込んできてこんなセリフを吐きます。「総長（主人公のこと）、シャブは打つもんじゃなくて、売るもんですがな」[9]。こう言って親分から麻薬を取り上げます。この言葉に、「酤酒戒」が何を禁止しているのかが端的に示されていると思います。

麻薬を始めとする薬物がどれだけ人を蝕むものであるのか、ここで言う必要もないことでしょう。使用者を狂わせるのは使用した時だけでなく、その後も中毒

となり、やめようにもやめられなくなり、薬のためにあらゆる悪事を行い人生を破滅させます。その中毒性があるからこそ、提供者は使用者から継続して利益を得ることができます。使用者から搾り取るだけ搾り取って、後は捨てれば良い。提供者は、相手のことを全く考えず、利益をもたらす使い捨てのモノとしか見ない。時々報道されることですが、最初から人を破滅させる目的で薬物を提供するケースもあるようです。そのことを分かっている提供者は、自分自身が薬物を使用することはありません。人を狂わせ悪業を犯させる原因となるものを他者に提供することによって利益を得ることが、麻薬の販売の本質です。そういう理由からか、麻薬は、使用、所持、譲渡し又は譲り受けをすれば、一〇年以下又は七年以下の懲役に処せられますが、それがお金を得る目的だった場合は、一年以上二〇年以下又は一年以上一〇年以下の懲役と、より重い刑罰が与えられます。

「酤酒戒」が明示的に禁止するのは、酒の販売です。そもそも酒は飲むために売買されます。この飲酒に関しては、仏教では在家信者の五戒に「飲酒戒」があり殺・盗・妄・邪淫と並ぶ重罪とされています。一方、比丘戒でも同様に禁止されますが、波逸提法という懺悔するだけで許される比較的軽い罪とされています。また、病気の時には酒の服用を認めるといった例外規定が定められるように、飲酒を完全な悪事としているわけではありません。円頓戒でも十重禁戒ではなく軽戒の第二に定められていて、重罪というわけではありません。

飲酒それ自体の是非をどのように考えるのかは、社会・文化・宗教、さらに時代によって異なります。それは、飲酒それ自体を絶対的な悪とみなすことは困難であり、むしろ状況によって評価が変わるものだからでしょう。

前世紀までの我が国では、飲酒それ自体や飲酒が引き起こす問題に対して寛容でした。三〇年あまり昔の大学の研究室では、教員と学生が酒を酌み交わして談

笑、議論する姿がよく見られたものですが、今日ではまず見られません。むしろ、このようなことをすれば、教員は懲戒の対象となる可能性さえあります。そして近年は飲酒者の行為が厳しく咎められることが多くなってきました。

飲酒に対する世間の目が厳しくなった背景には、飲酒運転による悲惨な事故が続いたことがあります。一九九九年に東名高速道路で、親子四人が乗った乗用車に飲酒運転のトラックが追突し、乗用車に乗っていた一歳と三歳の女児が死亡しました。この事件を切っ掛けに危険運転致死傷罪が制定されました。また、二〇〇六年には福岡県「海の中道大橋」で、飲酒運転の乗用車に追突された乗用車に乗っていた三人の子供が死亡する事件が起きました。この事件の後、飲酒運転は厳罰化されます。

飲酒運転だけではなく、大学の新歓の時期には過度の飲酒による事件・事故がしばしば起こり、そういったことも飲酒に対する厳しい見方を強めることにつながったと思われます。

飲酒運転はもちろん、飲酒の上の過失は、飲酒によって適切な判断と行動ができなくなることが原因です。東名高速道路での事故ではトラックの運転手はろれつが回らず、まっすぐに立っていることもできない状態だったといいます。

比丘に対して飲酒が禁止されることになった理由も、飲酒運転の厳罰化と似たような事情があったようです。飲酒が禁止されることになった経緯を『摩訶僧祇律』では次のように述べています。

拘睒弥国（コーサンビー）で暴れていた菴婆羅という悪龍を地元の人々の依頼を受けた善来比丘が降伏しました。そのお礼に善来比丘は豪華なもてなしをうけたのですが、水と間違えて酒を飲んでしまい、酔いつぶれて世尊の前に足を投げ出して寝込んでしまいました。世尊は、悪龍を降伏できた善来比丘もいまやガマガエルさえ降すことができない、といって飲酒を禁止しました。『僧祇律』では、続いて、酒のもてなしを

受けた比丘が、精舎に帰って世尊の説法を聞きながら寝込んでしまったことから飲酒が禁止されたことも伝えています。[10]

飲酒の害をまとめたものとして『大智度論』十三に、三十五失を挙げています。[11] いくつか挙げると、①財産を失う。酒を飲んで酔っ払うと節度なくお金を使ってしまうから。④裸でいても恥ずかしいと思わなくなる。⑥智慧の働きを覆い隠してしまう。㉝狂気の原因となる、などがあります。悪業を積み重ねるだけでなく、㉜に挙げるように、涅槃を遠ざけることになってしまいます。

比丘に対する場合であれ、三十五失であれ、飲酒によって理性を失い、さらには素面であればしないような悪業を犯してしまうことを指摘して、飲酒は禁止されます。「酤酒戒」のなかに「是れ酒は、起罪の因縁なり」というのはそのことを指します。それ故からか、「飲酒戒」（四十八軽戒第二）では、単に飲むだけでなく、他人に酒を与えることも同様に禁止しています。

それでは、どうして酒の販売が重罪とされるのでしょうか。

「酤酒戒」は、この戒を受持する者が、本来、人を覚りに導くために活動し、悪業の報いを受けることのないように仕向ける存在、つまり菩薩であると規定します。そもそも円頓戒はあらゆる仏菩薩が共通して受持する戒であって、仏戒であり菩薩戒です。菩薩としての振舞を規定する戒なのです。そして菩薩が菩薩たる所以は、人々を覚りに導き救いとることにあります。

酒の販売は、人を狂わせ悪業を犯させる原因となるものを他者に提供することによって利益を得ることです。酒によって正気を失い悪業を犯すのは、飲酒者本人の責任です。しかし、もしも相手を破滅させることを目的として酒を提供し、それによって利益を得るとするならば、それは麻薬の販売と同様、自らの利益のためにことさらに人を不幸に落とし入れる行為であるといえましょう。まさしく、菩薩とは正反対の振舞です。菩薩たるものが、自分の利益を得るために、他人

に正気を失わせ、悪業を犯させてしまうのならば、もはや菩薩では有りえません。それゆえ、菩薩の資格を失うことを意味する波羅夷罪という重罪とされるのです。

具体的な対象として酒の販売が示されていますが、比丘戒に定められるように酒自体については薬としての有用性を認める場合もあります。単に酒の販売を禁止しているのではなく、人を不幸に陥れて自らの利益をはかること、このことが禁止されているのです。

人を狂わせることの罪の重さ、そして、人を狂わせることで利益を得ることの罪深さに思いをはせるべきでしょう。

## ◎第六・説四衆過戒

### 一、戒の名称

・「説四衆過戒」（せつししゅかかい）

### 二、キャッチコピー

・人のしくじり、拡散禁止

・信頼売る話、買う人いない

・信頼漏らすな、サンガの絆を

・見ざる、言わざる、聞かざる

### 三、戒の趣旨

・他者のあやまちを言いふらして貶めず、思いやりの心を育む勧め

### 四、『梵網経』漢文

若佛子自説出家在家菩薩比丘比丘尼罪過教人説罪過罪過因罪過縁罪過法罪過業而菩薩聞外道悪人及二乗悪人説佛法中非法非律常生悲心教化是悪人輩令生大乗善信而菩薩反更自説佛法中罪過者是菩薩波羅夷罪

### 五、『梵網経』訓読

若（なんぢ）、仏子、自（みずか）ら出家在家の菩薩、比丘、比丘尼の罪（ざい）

過を説き、人を教えて罪過を説かしめば、罪過の因、罪過の縁、罪過の法、罪過の業あらん。而も菩薩は外道悪人及び、二乗悪人の仏法中の非法、非律を説かんを聞きては、常に悲心を生じ、この悪人の輩を教化して、大乗の善信を生ぜしむべし。而るを菩薩、反って、更に自ら仏法中の罪過を説かば、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

## 六、『梵網経』和訳

おまえ達、仏子よ、自分が出家、在家の菩薩、比丘、比丘尼の罪を〔人に〕説いたり、〔また〕人をそそのかしてその罪を説かせたならば、罪を説く因（直接原因）や、罪を説く縁（間接原因）や、罪を説く法（方法・手段）や、罪を説く業（行為）がそろう〔ことになる〕であろう。

そのうえ菩薩は、異教徒の悪人（外道）や二乗の悪人（声聞・縁覚）が、仏法の中にいる人に、教えに反する行為や律に反する行為があるのを聞いた時、常に慈悲の心を起こして、この悪人たちを教化して、大乗のすばらしい信仰を生じさせなければならない。それなのに菩薩が返ってなお一層に、自分から仏法の中〔にいる人〕の罪を説くならば、これは菩薩の波羅夷罪である。

## 七、例話

「説四衆過戒」は十重禁戒の六番目の戒です。出家の菩薩・在家の菩薩・比丘・比丘尼の四衆、すなわち仏教教団の構成員の罪を言いふらすことを禁じた戒です。本来、大乗仏教を批判したり、誤った教えを説く外部の人たちを教化して、大乗仏教のすばらしい信仰に導くべきであるのに、逆に仲間の罪を言いふらすのは、他者に対して思いやりの心をもった菩薩の行為ではありません。また「不説他罪過戒」、「説過戒」、「説他罪過戒」、「説他過失戒」などと称し、対象を四衆に限定せず、すべての人の罪過を言いふらすことを禁じている、という捉え方もあります。

仏教教団関係者の罪過を言いふらすことは、人を謗ることにもなりますが（「自讃毀他戒」〈十重禁戒第七〉）、実際に罪を犯した人だけでなく、仏法自体の信用を失うことにもなります。報道された事件は、永く不信の原因となります。現に、二〇〇六年に起こった着服事件を、十五年以上過ぎても、浄土宗批判の材料にされる人がいます。特定の宗教法人の不祥事（脱税や献金など）を、宗教法人全体の問題とみなす人もいます。宗教法人であるということ以外、共通点もなく、全く関係のない浄土宗寺院が揶揄される、といった事例は、少なくありません。仏教教団や寺院に対する不信感が、仏教の教えそのものに対しての不信につながり、教えが伝わるはずであった方から、その縁を奪ってしまうのは、あってはいけないことです。

情報技術の発達が目覚ましい現代においては、個人が、印刷文書の大量作成・配布だけでなく、ＳＮＳなどネットワーク上で、気軽に情報を発信できます。共感の意思表明（「いいね！」）や、転載（「リツイート」）によって、他者の発信情報も簡単に広めることができます。仏教への興味を持ってもらえるための情報発信ツールは、非常に使いやすくなっています。ただ、深く考えずにおこなった情報「拡散」が止め処もなく一気に広がった結果、収拾がつかなくなる騒動は、日常茶飯事です。仏教に限らず、不確かな情報を誤った正義感で拡散し、無関係の人を傷つけた事件も枚挙に暇がありません。テレビの演出を真実と思い込み、出演者を精神的に追い詰め、死に至らしめた事件もありました。人の「あやまち」を安易に言いふらすことは慎まなければなりません。

ただ、現代社会においては、内部のあやまち（不祥事）を秘匿するのは、必ずしも良いこととはされていません。いじめなどの人権侵害に遭遇した際に、それを黙って見過ごせば、間接的に人権侵害をしているのと変わらないと見なされます。セクハラなどの性的被害を告発する#ＭｅＴｏｏ運動からは「見て見ぬ振りをするのは終わりにしよう」という運動（Time's

Up）も起こっています。

芸能事務所の創設者の児童性的虐待に関して、なぜ被害にあった時に言い出さず、今頃告発するのかという批判がありました。様々な「力」を持った人たちに対して、被害者が声をあげることは、容易にできることではない、ということを無視した「批判」です。

内々で是正し穏便に解決できるなら、「忖度」したり傍観者でいても良いでしょう。ただ、隠蔽は、問題を先送りにし、往々にして不祥事とつながりがちです。外部から第三者に関与してもらうことで問題解決を図ろうとするのも間違いではありません。実効性はともかく、日本においては、組織内の犯罪行為を公益通報（内部告発）した者の保護は、『公益通報者保護法』によって制度化されています。

以上のように考えていくと、「説四衆過戒」は、教団に自浄能力があることが大前提となります。あやまちを犯したものが、自分で気付くのでも、他者から指摘を受けてでも構いませんが、あやまちをあやまちとして認め、素直に懺悔できるならば、「説四衆過戒」は意義を持ちます。また、他人があやまちを犯すのを見たならば、適切に指摘し、懺悔させる（「不教悔罪戒」〈第五軽戒〉）ことができるならば、問題はありません。逆に、自らのあやまちを省みない者だけなのに「説四衆過戒」をきっちりと守り、人のあやまちに遭遇しても見て見ぬ振りをする者だけならば、問題を隠蔽するだけになってしまいます。[12]

「説四衆過戒」は、単に人のあやまちを言いふらすことを禁じているのでなく、私たち自身が、言いふらされる必要がないように、自分のあやまちに真摯に向かい合えるかどうかが問われているようにも感じられます。

理想的な状況ならば、戒の条文を厳密に考えた「拡散禁止～人のあやまちを言いふらして貶めない～」でしょう。ただし、現代社会での運用を考えるなら、絶対禁止ではなく「拡散注意」、拡散させる危険性に充分留意した上で、必要な指摘を排除しない「～貶める

ために人のあやまちを言いふらしてはいけない～」のほうがより相応しいのではないでしょうか。

## ◎第七・自讃毀他戒

### 一、戒の名称

・「自讃毀他戒」（じさんきたかい）

### 二、キャッチコピー

・自慢しつつ、他人を誹謗中傷するな
・自分の話は自慢、他人の話は悪口
・自慢より共感、誹謗より理解
・比べない輝き
・自分の光、他を消さず照らそう
・自慢大会、見てるこっちが恥ずかしい
・誰も傷つけない、そんな自慢がカッコいい
・自讃毀他は心の貧しさ
・自慢して、悪口言うて、その後に、心に貯まるは、毒のかたまり

### 三、戒の趣旨

・自慢から他者を誹謗中傷せず、思いやりの心を向ける勧め

※悪い心で、自身の欲望や利得のために、自慢すると同時に、他人を意図的に害して打ちのめすような誹謗中傷をしてはならない。むしろ、この件についての理想像は、慈悲の心で、他人への誹謗中傷を自らに向け、よいことを他人に向けるべきということである。

### 四、『梵網経』漢文

若佛子自讃毀他亦教人自讃毀他毀他因毀他縁毀他法毀他業而菩薩應代一切衆生受加毀辱悪事自向己好事與他人若自揚己徳隠他人好事令他人受毀者是菩薩波羅夷罪

## 五、『梵網経』訓読

若（なんぢ）、仏子、自讃毀他し、また人を教えて自讃毀他せしめば、毀他の因、毀他の縁、毀他の法、毀他の業あらん。而も菩薩はまさに一切衆生に代わりて、毀辱（きじく）を加えるを受け、悪事をば、自ら己れに向かえ、好事をば、他人に与うべし。もし自ら己れが徳を揚げ、他人の好事を隠し、他人をして毀辱を受けしめば是れ菩薩の波羅夷罪なり。

## 六、『梵網経』和訳

おまえ達、仏子よ、もし自分のことをほめたたえて人をそしり、人をそそのかして自分のことをほめたたえ、人をそしることをさせれば、〔自讃〕毀他の因（直接原因）や、〔自讃〕毀他の縁（間接原因）や、〔自讃〕毀他の法（方法・手段）や、〔自讃〕毀他の業（行為）がそろう〔ことになる〕であろう。

そのうえ菩薩は、すべての衆生に代わって、そしり辱めを受け、悪いことを自分に向けさせ、よいことは他人に与えるべきである。もし自分で自分の徳を持ち上げて、他人のよい事を隠して、他人が謗り辱めを受けるようにするならば、これは菩薩の波羅夷罪である。

## 七、例話

この戒の「自讃毀他」の用語のうち、「自讃」とは、自分自身を讃じてたたえることですので、悪い心で、自分自身を誉めたり、自慢したりすることだと思われます。

ところで、例えば、就職活動などでは、「自讃」に少し似ている自己アピールをするかと思います。あるいは、ビジネスの場でも、同じく自己アピールなど必要でしょうし、その他、この現代の日本社会では、自己アピールは、諸処で求められる場合があります。

しかし、基本的に、自讃と自己アピールとは少し異なるように思います。自讃は自身を讃じることですから、通常、「思い上がった人だ」などとあきれられるでしょう。一方、自己アピールは、自分のできること

などを提示することなので、相手も違和感なく受け止めるということになるのでしょう。

両者の違いは、その場の状況に応じながらの程度問題のように思われます。自己アピールも、その場の状況で度が過ぎれば、自讃となりそうです。つまり、悪い心で過剰に自己アピールをすれば、自讃になるのでしょう。しかし、穏当な自己アピールなら、自讃とまではいえないように思われます。

次に、「自讃毀他」の用語のうち、「毀他」とは、他人を打ちのめすように誹謗中傷することだと思われます。

「毀」というのは、誹謗するという意味ですが、特に、強い調子のもののようですので、「他人を打ちのめすような」というニュアンスがあると思われます。

そのような毀他である誹謗は、意図的に他人を害するものであり、慎むべきということでしょう。すなわち、毀他・誹謗とは、意図的に他人を害しようとしているものであり、悪意あるものといえるでしょう。

故に、毀他・誹謗には、悪意があるので、誤情報が混ざる場合が多いことが予想されます。すなわち、歪曲や誇張や嘘をまじえて、他人を誹謗する傾向があるということです。

例えば、A氏は、少々精神的な問題をかかえているが、極めて軽度であるため、ほとんど全ての場合、正常な判断や、正常な言動をしているとしましょう。にも関わらず、そのA氏が精神的問題を少しかかえていることを取り上げ、大きく誇張・歪曲しながら、或る人が、「A氏は、妄想が激しいので、A氏のいうことを信じてはいけない」という悪意ある情報を流したなら、明らかに、誤情報をまじえた悪質な誹謗中傷ということでしょう。

あるいは、B会社という穏健な会社があるとして、或る人が、「B会社は、ブラックな会社だ」と悪意をもって全くでたらめの嘘の情報を流したら、当然、完全な誤情報の誹謗中傷といえるでしょう。

ただし、仮にB会社が、客観的に見て、本当に悪質

な会社なら、右記の言は、誹謗中傷とはいえないかもしれません。悪意がなければ、単なる批判などということになるかもしれません。

いずれにせよ、このように、何らかの意味で、誤情報が混ざった内容で、意図的に害する目的で他人の悪口をいうのが、典型的な毀他（誹謗）ではないかと考えます。

故に、第六戒の「説四衆過戒」の「説罪過」とは、少し異なるかもしれません。すなわち、「説罪過」の場合は、基本的に、本当に犯した過ちを説くことのようですので、歪曲や誇張や嘘が混ざる傾向にある自讃毀他戒の毀他とは、そのような点でも、少々異なるかもしれません。それ故に、両者の戒が、別立てになっているのかもしれません。

この「自讃毀他戒」については、おそらく、自讃と毀他と両方揃った状態なら、この戒を犯したことになるという趣旨だと思われます。これについては、『梵網経』を註釈する人師によって異なるようですが、もし、いずれか一方だけでも、この戒を犯したことになるなら、おそらく、別々の戒として制定するのではないでしょうか。天台大師智顗も、両方が揃った状態なら、この戒に違反したことになると述べているようです。[13]

よって、単なる自讃だけなら、この戒に抵触しないと思われます。悪意があって、自讃に加え、毀他もしてしまうなら、この戒を犯したことになると思われます。

とするなら、毀他だけをして、自讃がないなら、この戒に抵触しないということも考えられます。

ただし、この戒に抵触しないからといって、毀他がよい行いというわけではないでしょう。常識的に考えて、悪意をもって他人を打ちのめすような誹謗中傷は、道徳的には、避けるべきことでしょう。また、悪い心による自讃のみでも、やはり、道徳的には、避けるべきでしょう。

自讃毀他が両方揃っての言動は、ほとんど謀略ともいえそうに思えます。つまり、自らの立身出世・名誉

欲・利得などのために、他人をけなしつつ、同時に、自慢するのは、ほとんど謀略ともいえることでしょう。つまり、自慢したいために、他人の誹謗中傷をするということです。

あるいは、他人を誹謗中傷したいために、過剰に自慢して、その相手を辱めて追い詰める場合もあるでしょう。これなども、ある種、謀略ともいいたくなるようなことです。

このようなことが、自讃毀他の典型的な例だと思われます。このようなことが含まれている自讃毀他の言動が、十重禁戒で禁止されているということです。

なお、自らの宗派の教えを説法する上で、他宗派の教えを批判し、自分の宗派の教えを勝れているとたたえて勧めるというのは、この「自讃毀他戒」に抵触するようにも見えます。もし、同戒により、他宗派よりも自らの宗派が勝れていると説法することができないなら、教えを説く僧侶の立場としては、少々困ったようにも思えます。これをどのように考えるべきでしょうか。

基本的に、悪意なく、善意で正しい仏法を適切な形で主張するなら、「自讃毀他戒」に抵触せず、認められるということではないでしょうか。正しい教えを説けないはずもないでしょうから。

このうち、「悪意なく、善意で」というのは、至極当然としても、「正しい仏法を適切な形で主張する」というのは、真実をきちんと見極められる智慧の能力（正しい判断力）が必要かと思われます。

すなわち、善意のように見えても、強引で無理な形で布教をしてしまえば、色々トラブルも生じるでしょう。更に、そのようなトラブルが、こじれにこじれてしまう場合もありうるでしょう。基本的に、なるべくなら、トラブルのない形で布教したいものです。それには、その場その場で、何が適切で正しい形かを、智慧の能力で見極め、無理のない形で布教するのが、より望ましいのではないでしょうか。

ただし、困難な状況の場合、時には、堅固な意志で、

布教を強く推し進めるという姿勢も大事なことなのでしょう。しかし、何が適切で正しい仕方か、ありかたかを判断するのは、簡単ではなく、それには、真実を見極める高度な智慧の能力・判断力が必要でしょう。高い智慧の能力・判断力がないなら、布教をする上でも、他宗派などへの批判をあまりしないようにし、穏当な言動をしておくのが無難かと思われます。

この自讃毀他と、正反対ともいえる善行が、この戒の条文に説かれています。すなわち、一切衆生に代わって、毀辱を受け、悪事を自らに向かわせ、好事を他人に与えるということです。この戒の条文には明記されていませんが、おそらく、大乗仏教の慈悲の精神によるものと思われます。十重四十八軽戒では、この大乗仏教の慈悲が、全体的な前提となっているといってよいでしょう。

大乗仏教の慈悲では、空の考え方により、自分と他人を区別しません。すなわち、空とは、全てのものごとの実体や本体を否定するものですので、自分の固有と見えるものや、他人の固有と見えるものをも否定します。

このような考え方により、他人の悪事を他人に固定化せず、自分に向け、自分などの好事を、やはり固定化せず、他人に与えるということだと思われます。この「自讃毀他戒」に対し、そのような大乗仏教の慈悲の精神により、ここでは、他人の悪事を自分に向け、好事を他人に与える行為を導出するということでしょう。この戒に対する大乗仏教の慈悲的行為が、右記の行為ということでしょう。そのような行為が、この「自讃毀他戒」を巡っての理想像ということです。

なかなか、そのような高いレベルの理想通りとはいかないものですが、なるべく自讃毀他をしないようにしつつ、右記の理想像の方向を向いて、少しでも、心がけるべきなのでしょう。

最後に、時折我々の周りで見られそうな、自讃毀他の例をあげてみましょう。

C機関に、D氏とE氏が所属していて、D氏は上級

の身分だが能力は低く、E氏は下級の身分だが能力はかなり高いとしましょう。上級だが能力の低いD氏は、同じ職場にいるE氏の能力の高さのために、面目を失い、名誉欲や保身や逆恨みのため、D氏は次のようにいったとしましょう。「E氏は身分は低く、故に、能力も劣り、時々わけのわからないことをいう人物だ。一方、上級の我々は、上級故に、当然E氏よりもはるかに能力が高い」などと、C機関の実情を十分に把握できていない共通の知人たちに、嘘の情報を流しました。実情をあまり把握できていない知人たちは、D氏のほうが身分の高いこともあり、すっかりだまされて、D氏のいうことを信用してしまいました。

このD氏の言動は、悪意をもって、でたらめな情報で、E氏を毀他・誹謗しつつ、D氏自身などを自讃したことになり、当然、自讃毀他ということになります。

概して、一般の多くの人々のものの見方として、その当該機関で、身分の高いほうが能力も勝れ、身分の低いほうが能力も劣るという偏見や思い込みの傾向があるかと思われます。その偏見・思い込みを悪用したD氏の悪意ある自讃毀他ということです。

これに似た類の出来事は、様々な職場において、時折見られることでしょう。そのような自讃毀他をなるべくしないようにしつつ、既述のような理想像を少しでも目指すべきことを、この第七戒の「自讃毀他戒」では、教えているということです。

## ◎第八・慳惜加毀戒

### 一、戒の名称

・慳惜加毀戒（けんじゃくかきかい）

### 二、キャッチコピー

・思いやりを惜しみなく贈り合おう
・物より心
・物惜しみレベル達人、同情心レベル見習い
・貯金箱満タン、人間関係空っぽ
・財布は閉じて、心は開け

・ケチるなら、人を傷つける言葉も節約しよう
・金を惜しんでも、人への温もり忘れるな

## 三、戒の趣旨

・物惜しみの心を起こさず、他者に喜びを与える勧め

## 四、『梵網経』漢文

若佛子自慳教人慳慳因慳縁慳法慳業而菩薩見一切貧窮人來乞者隨前人所須一切給與而菩薩以悪心瞋心乃至不施一錢一針一草有求法者不爲説一句一偈一微塵許法而反更罵辱者是菩薩波羅夷罪

## 五、『梵網経』訓読

若、仏子、自ら慳(おし)み、人を教えて、慳ましめば、慳(けん)の因、慳の縁、慳の法、慳の業あらん。而も菩薩は一切貧窮(びんぐう)人の来たり乞う者を見ては、前人の所須(しょしゅ)に随いて、一切給与すべし。而るを菩薩、悪心、瞋心(しんしん)を以て乃至、一銭、一針、一草をも施さず。求法の者の有らんに。為に一句、一偈、一微塵ばかりの法をも説かず。而も反って、更に罵辱(めにく)せば、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

## 六、『梵網経』和訳

おまえ達、仏子よ、自分が惜しむことをしたり、人をそそのかして惜しむことをさせたりすれば、惜しみの因（直接原因）や、惜しみの縁（間接原因）や、惜しみの法（方法・手段）や、惜しみの業（行為）がそろう〔ことになる〕であろう。

そのうえ菩薩は、一切の貧困の人がやって来て、ものを乞うのを見たら、その人の求めにしたがって、あらゆるものを与えるべきだが、それなのに菩薩が、悪しき心や怒りの心で一銭も一本の針も一本の草さえも施さず、仏の教えを求めるものがあっても、〔その人に〕一句、一偈もほんのわずかな教えをも説かずに、それなのに返ってなお一層に、その人を罵り辱めるような事をすれば、これは菩薩の波羅夷罪である。

## 七、例話

先日、とある映画を公開日に見に行ってきました。その時、劇場パンフレットを買おうと思い、売店で尋ねたのですが、一言「ありません」と、つっけんどんな態度であしらわれてしまい、少しモヤッとした気持ちになってしまいました。後で調べたら、パンフレットの販売は来月からだったのですが、それならそうと説明してくれればよかったのにと心に少し不快感が残りました。

最近は耳にすることが少なくなったこの「つっけんどん」という表現は、態度や言葉遣いがとげとげしく、愛想が無い様、つまりは無愛想を示す言葉として説明されます。この「つっけんどん」は漢字では「突慳貪」と書きます。「突（突撃の突）」は「突っ走るや、突っ込む、突っぱねるといった形で用いられ、強調の接頭辞になります。そうすると、「突慳貪（つっけんどん）」とは、「とても慳貪」という意味になります。さて、この「慳貪」ですが、実は仏教用語です。「慳貪」とはインド語ではマートゥサルヤ（mātsarya）と言いまして、小乗仏教では布施行を妨げる煩悩、つまり、物惜しみの原因や、ケチや欲深さの原因となる煩悩として紹介されます。困っている人を助けるためにお金や物品（施物）を寄進するという布施行は素晴らしい行為です。施物を寄進することの意義や価値は誰もが理解しています。けれども、いざ自分が、となると二の足を踏んでしまうことがあると思います。それは、この煩悩に起因しています。

そうすると、「突慳貪（つっけんどん）」は単に「ドケチ」という意味になりそうなものですが、どうして「無愛想」という意味になるのでしょうか。この点について、解き明かした資料はなく、詳細は不明です。ですが、布施の記述を紐解けば、一つの可能性が見えてきます。一般的に施物と言えば、物品か金銭を思い浮かべますが、大乗仏教では困っている人に寄進する施物は金銭・物品だけではなく、仏教の教え（法施）や様々な相手に対する優しい言動（無財の施物）など

も含めます。例えば、相手に好ましい眼差しを向けること（眼施）や、笑顔を向けること（和顔悦色施）や、優しい言葉を向けること（言辞施）等がそうであります。つまりこういった相手に対する思いやりを伴った優しい態度は、相手に対する寄進物（施物）になります。つまり、そういった「思いやり」という施物を出し惜しみしてしまう人を、無愛想な人として、「突慳貪（つっけんどん）」と呼んだのではないでしょうか。

さて、今回お伝えする『梵網経』の「慳惜加毀戒」は慳貪（物惜しみ）の心を抑止することを述べた戒であります。ここでは、菩薩は求められれば物惜しみの心なく、財物であっても教えであっても施す必要があり、求められたときに悪態をついてはならないと説かれています。つまり、菩薩は、金銭、物品、教え、家族、果ては自分の命に至るまで、求められれば物惜しみすることなく差し出すことが求められることになります。そして、それがどんな無茶な要望であっても物惜しみの心から悪態をついてはいけないのです。このような熾烈なまでの施しの実践は布施波羅蜜として、大乗経典によく説示されます。例えば、法隆寺の玉虫厨子には捨身飼虎図という有名な布施波羅蜜譚が描かれています。これは、『金光明経』等に説かれる菩薩の物語であります。

ある時、菩薩は崖下に飢餓に苦しむ虎の母子がいるのを見つけます。このままだったらお腹の空いた母虎が子虎を食べてしまいます。それを見かねて菩薩は、母虎が不殺生戒を犯してしまわないように、子殺しの罪を犯してしまわないようにと、慈しみの心を起こして、自らの肉体を崖下に投げ捨てて、自らの肉塊を虎の母子に差し出しました。その結果、虎の母子は飢餓から救われ、助かりました。

この話は、熾烈なまでの菩薩による施しの実践を描いたものに他なりません。それに鑑みると、現代社会を生きる心弱き我々がこのような理想の菩薩の振る舞いをとることは至極困難であります。我々には無尽蔵の財力が有るわけでもなく、不惜身命の志が有るわけ

でもありません。

我々にとって財産や肉体は現代社会を生きていく上で必要であり、それを誰かに施す際には常に慳貪（物惜しみ）の思いが常に生じ、それによって悪態をついてしまったりします。これは現代社会において仕方がないものでしょう。ですが、相手に対する思いやりを伴った優しい態度は、誰かに施しても何も無くなるものはありません。誰もが無尽蔵に施すことができる優れた施物なのです。我々は、ついつい、無関心や怠慢な気持ちから、思いやりをもって行動できないことがあります。しかし、それは、心がけ一つで誰であっても改善することができるものです。皆が思いやりを物惜しみすることなく、贈り合えれば、人とのつながりの中で不快感を感じることは減っていき、我々の生活は今より幸福なものになるに違いありません。皆の少しの心がけで世界はより良いものに変えることができるのであります。

『梵網経』の「慳惜加毀戒」では、慳貪（物惜しみ）の心を抑止することが説かれていました。財産や肉体に対する慳貪（物惜しみ）の心は、現代社会を生きていく上で、抑止することは難しいものです。しかし、思いやりや優しさに対する慳貪（物惜しみ）の心であれば、現代社会を生きる我々でも、心がけ一つで抑止することができるのではないでしょうか。「慳惜加毀戒」の教えは我々に相手を思いやる心の大切さを教えてくれます。誰に対しても「つっけんどん」な態度は取らないように心がけ、出し惜しみせずに、皆で思いやりを贈り合いたいものですね。

## ◎第九・瞋心不受悔戒

### 一、戒の名称

・「瞋心不受悔戒」（しんじんふじゅげかい）

### 二、キャッチコピー

・怒りの心を抑え、相手の謝罪を受け入れるべし

・怒りは一時、傷つけは一生

・恨んでも、許せ
・許すあなたはえらい
・憎しみと慈しみ

## 三、戒の趣旨

・怒りの心から相手を辱めず、相手の過ちを許すことの勧め

## 四、『梵網経』漢文

若佛子自瞋教人瞋瞋因瞋縁瞋法瞋業而菩薩應生一切衆生善根無諍之事常生慈悲心孝順心而反更於一切衆生中乃至於非衆生中以悪口罵辱加以手打及以刀杖意猶不息前人求悔善言懺謝猶瞋不解者是菩薩波羅夷罪

## 五、『梵網経』訓読

若、仏子、自ら、瞋り、人を教えて瞋らしめば、瞋るの因、瞋るの縁、瞋るの法、瞋るの業あらん。而も菩薩は、応に一切衆生の善根無諍の事を生じ常に慈悲心、孝順心を生ずべし。而るを反って、更に一切衆生の中に於き、乃至、非衆生の中に於いて、悪口を以て罵辱し、加うるに手打、及以び刀杖を以てして意、猶、息まず。前人求悔し、善言懺謝すれども、猶、瞋りて解けざるは、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

## 六、『梵網経』和訳

おまえ達、仏子よ、自分が怒ったり、人をそそのかして怒らせれば、怒りの因（直接原因）や怒りの縁（間接原因）や、怒りの法（方法・手段）や、怒りの業（行為）がそろう〔ことになる〕であろう。

そのうえ菩薩は、全ての人の善根や、争いのない状態を作り上げ、常に慈悲の心と孝順の心を起こすべきである。それなのに、返ってあらゆる心を持つ者や、心を持たない者に対して、粗悪な言葉で罵り辱め、さらに自分の手で殴ったり、刀で傷つけたり、杖で打っても、まだ（怒りの）気持ちが収まらない。目の前にいる人が悔いることを求め、〔その人が〕心からの言

葉で罪を告白し、謝罪しても、まだその怒りが解けないなら、これは菩薩の波羅夷罪である。

## 七、例話

子どもの頃、母親から「誰かにイジワルされても相手が『ごめんなさい』と謝ってきたら許してあげなさい」と教えられた記憶があります。今から思えば、知らず知らずのうちに「怒りの心を抑え、相手の謝罪を受け入れるべし」という「瞋心不受悔戒」の実践を勧めてくれていたのでしょうが、当時の私は怒りにまかせて、なかなか相手の謝罪を受け入れることができませんでした。

仏教では、怒りを「瞋恚」といって「三毒煩悩」の一つに数え、心身を悩ませ煩わせる悪しき心の働きと捉えます。また、昔のお歌に

恐ろしや　カッと怒りの　胸の火が　徳とわが身を　焼き尽くすなり

と詠まれていますように、怒りは火に例えられ、我が身まで焼き尽くすといわれています。ある大学病院の先生がおっしゃるには、怒りの状態というのは、通常の時と比べて二十一倍血液が濁り、健康上にも害を及ぼしているそうです。まさに、怒りは我が身を焼き尽くす火種といえましょう。

この怒りについて、国民的歌手だった三波春夫さん（一九二三～二〇〇一）が生前、戦争体験について、次のような事をおっしゃっていました。

人間は、ただ人を殺す気にはなりません。私の場合、戦場にいて戦友が殺されたとき、その瞬間、鬼になります。平気で人を殺せます。そのことが戦争体験のない人には理解できないんですね。[14]

三波春夫さんといえば、『お客様は神様です』というフレーズがすぐに思い浮かび、舞台の上から、いつも笑顔を振りまいておられた印象があっただけに、この言葉は少々意外でした。実際、三波春夫さんは二〇歳で招集され、旧ソ連のシベリアに捕虜として四年間抑留されたそうです。その間に、戦争の悲惨さという

のを嫌というほど、味あわれたのでありましょう。戦後、その体験から「二度と戦争を起こしてはならない」というメッセージを込め、平和と日本人のために笑顔で歌い続けられたといわれています。しかし、そんな三波春夫さんでさえ、戦場で仲間が殺された瞬間には、我が身を焼き尽くすほどの怒りが沸き起こってくるというのです。このように、仲間や身近な人、さらには家族といった大切な人が殺されたならば、その怒りの矛先は加害者に向けられます。人間は感情に流されやすい動物ですから、怒りがこみあげてくると理性を失ってしまい、どれだけ加害者が反省し謝罪してきたとしても、なかなか許せるものではありません。しかし、それでは怒りに縛られ、真の安楽が得られないことを「瞋心不受悔戒」は教えてくれているのです。

そこで実際に、加害者が心から反省し、謝罪をしてきたならば、それを許そうとされた方がおられました。その方のお名前を山下京子さんといいます。京子さんは今から二九年前の一九九七年、神戸連続児童殺傷事件で酒鬼薔薇聖斗と名乗る当時、一四歳の少年Aに当時一〇歳の愛娘、彩花ちゃんを殺害されました。つまり、京子さんは殺害された彩花ちゃんのお母さんです。

京子さんは、事件後、ご主人と一緒に、殺害した少年Aのご両親と対面を果たされます。それは、京子さんご自身が望んでおられたことでありました。その少年Aのご両親が待ってらっしゃる部屋に通されて、まず京子さんの目に飛び込んできたのは、土下座されたご両親の姿でした。そして、消え入りそうな小さな声で、「申し訳ありません。申し訳ありません」と何度も何度も謝罪の言葉を繰り返しておられたそうです。

そして、お互いが席につくと、京子さんは生まれてから殺害される最近までの彩花ちゃんの写真を相手のご両親に差し出しました。それを見た、相手のご両親は言葉を詰まらせ、泣いておられたそうですが、またこの時、京子さんご夫妻も共に涙にされていたといいます。

少年Aのご両親を目の前にして、憎んでも憎みきれ

ない相手であるはずなのに、なぜか京子さんは、罵倒する気にはなれなかったそうです。泣いて謝罪を繰り返すご両親に対し、どうしも出来なかった。それどころか、憔悴しきっているご両親の痛ましい姿を見ていて、反対に何だか無性に悲しく、辛くなってきたというのです。この時、京子さんは相手のご両親を責めることなく、一時間半ほどで、対面の場は済んだそうです。京子さんの本当のところは分かりませんが、結果的には、相手の謝罪を受け入れ、許す形となりました。この時の様子については、後日、出版された京子さんの著書の中で紹介されていますが、その著書の最後の方で、加害者である少年Aに対して、「最後にA君へ」と題して、次のように語りかけておられます。

今、あなたに会いたいような、絶対に顔も見たくないような複雑な思いでいます。私たちの宝物だった、たった一人の愛娘を、あんなかたちで奪い取ったあなたの行為を、決して許すことはできません。母であるがゆえに、娘がされたことと同じことをしてやりたいという、どうしようもない怒りと悔しさと憎しみがあります。その一方で、これもまた母であるがゆえに、どんなに時間がかかってもあなたを更正させてやりたいと願う気持ちがあることも嘘ではありません。《中略》もし、私があなたの母であるなら……、真っ先に、思い切り抱き締めて、共に泣きたい。言葉はなくとも、一緒に苦しみたい。《中略》そして、あんな恐ろしいことをしてしまうまで自分を追いつめていくことに、どうしてもっと早く気づいてやれなかったのでしょうか。たった一人の母なのに、どうしてわかってやれなかったのか。氷のように冷たく固まってしまったあなたの心。そのうえ、それを深い海の底に沈めてしまった。でも、深く暗い海底からそれを探し出し、ていねいにゆっくりと氷を溶かし、ゆったりとほぐすことができるのは親の愛しかない。とりわけ、母の愛が太陽の温かさで包み込む以外に、道はないと思うのです。罪を

罪と自覚し、心の底からわき出る悔恨と謝罪の思いがいっぱいつまった、微塵のよどみもない澄み切った涙を、亡くなった二人の霊前で、苦しんだ被害者の方々の前で流すことこそ、本当の更正と信じます。それまで、共に苦しみ、共に闘おう。あなたは大切な息子なのだから。[15]

一部、本文の内容を省略させて頂きましたが、私が驚いたのは、憎んでも憎みきれないはずの加害者の少年Aに対して、まるで我が子のように慈しみの心をかけておられる点です。そして、少年Aによって、「心の底からわき出る悔恨と謝罪」がなされたら、京子さんが許そうとされている点です。

もし私が京子さんと同じ境遇に陥ったならば、果たして、どこまで同じような態度を取れたでしょうか。それどころか、怒りにまかせて、相手を罵倒し、それこそ同じような目に遭わせようとするかもしれません。しかし、このような態度は、怒りによって我が身を焼き尽くしているようなもので、今度は、自分自身が加害者になりかねません。このように、一時の感情に流されると、自分の人生まで台なしになってしまいます。ですから、まずは京子さんのように怒りの心をグッと抑え、加害者と向き合うことが大切になってくるのです。そして、相手が心から謝罪し、許しを乞うてきたならば、一旦は、その謝罪を拒まず、受け入れてまいりましょう。

京子さんの態度は、まさに「怒りの心を抑え、相手の謝罪を受け入れるべし」という「瞋心不受悔戒」の実践を心掛けたものといえましょう。[16]

このように、「瞋心不受悔戒」を実践することは、怒りから解放され、自らの心を整え、安楽が得られることにつながるのです。

## ◎第十・謗三宝戒

### 一、戒の名称

・「謗三宝戒」（ぼうさんぼうかい）

## 二、キャッチコピー

・篤く三宝を敬え
・三宝をディスるな
・三つの宝を大切に
・明るく、正しく、仲よく
・三宝蔑視は無知の証
・宝のような仏教の基本を敬う
・仏教の宝のような第一歩を踏み出す
・三宝滅尽を阻止せよ
・心の依るべ仏・法・僧

## 三、戒の趣旨

・仏法僧の三宝を誹謗せず、三宝を敬う勧め

## 四、『梵網経』漢文

若佛子自謗三寶教人謗三寶謗因謗縁謗法謗業而菩薩見外道及以悪人一言謗佛音聲如三百鉾刺心況口自謗不生信心孝順心而反更助悪人邪見人謗者是菩薩波羅夷罪

## 五、『梵網経』訓読

若、仏子、自ら、三宝を謗り、人を教えて三宝を謗らしめば、謗るの因、謗るの縁、謗るの法、謗るの業あらん。而も菩薩は、外道及以び悪人の、一言謗仏の音声を見いては、三百の鉾をもて心を刺すが如くすべし。況や口、自づから謗じて、信心・孝順心を生ぜざらんや。而るを反って更に悪人、邪見人を助けて謗ぜば、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

## 六、『梵網経』和訳

おまえ達、仏子よ、自ら三宝を謗り、人をそそのかして三宝を謗らせれば、謗りの因（直接原因）や、謗りの縁（間接原因）や、謗りの法（方法・手段）や、謗りの業（行為）がそろう〔ことになる〕であろう。

そのうえ菩薩は、〔もし〕異教徒や悪人の仏を誹謗する声を一言でも聞いたならば、あたかも三百本の鉾で胸を突き刺されたような〔心持ち〕になるべきであ

る。ましてや自らの口で〔仏を〕謗り信心や孝順の心を起こさないことがあろうか。いや、そのようなことはない。それなのに返ってなお一層に、悪人や邪見の人を助けて、謗るならばば、これは菩薩の波羅夷罪である。

## 七、例話

第十「謗三宝戒」とは、仏法僧の三宝を軽んじ誹謗することを禁止する戒条です。菩薩は悪人や邪見の者が三宝を謗る場面に遭えば心を痛めるべきであって、またその様な者に応じて同じように三宝を謗ることは追放に値する罪であると戒められています。

仏教徒として入門すれば、先ず三宝に帰依するところから修行が始まるわけですから、その根幹たる三宝を謗ることが禁止されるのは当然のことでありましょう。三宝とは変わることのない三つの宝、即ち真実の法を説き導いてくださる仏（ブッダ）、ブッダが説かれる法（ダルマ）、その法に従って生き、その法の輪を広げる人々の集まり、つまり僧伽（サンガ）のことであり、第十「謗三宝戒」はこれらの仏法僧に対する誹謗抑止と併せて、これらを信じて疑わず、心から従い敬う姿勢が積極的に推奨されています。

では、三宝を敬うとは、具体的に如何なる姿をいうのでしょうか。そこで、一つ作法を軸に考えてみたいと思います。例えば、参道を横切るときやお堂に入るときに、素通りせず向き直って一礼をする姿、仏前に対し奉り手を合わせ、おじぎする姿などは「敬い」の心の表れといえます。普段、読誦するお経本を両手に大事に頂いてから、読む姿もそうでありましょう。また仏様から授かった袈裟は、単なる衣類やアクセサリではなく、仏教徒の証でありますから、不用意に地べたや足元に置くことも、控えなければなりません。お経本や袈裟も、私たち仏教徒の大事な拠り所と思えばこそ、その扱いは自ずと丁寧になるものです。

毎年十二月二十五日に総本山知恩院で勤められる「御身拭式」においては、法然様の御影を御門主猊下

はじめご出仕の僧侶方が奉書で作られたマスク（覆子）をつけて拭い清める作法をなされます。儀式作法の途中で自身の息が御影に直接かからない様にする配慮でありますが、これも広い意味で考えれば三宝に対する敬いの心と考えることができます。ただし、この行いが決して形だけの「行為」にならないよう常に三宝に依って、心を整え、敬う「作法」となるよう努めることが大切です。

その事を実感させられる出来事がありました。それは、ある宗門高校の運動部の合宿に指導員として携わったときのことです。合宿は某本山の一部をお借りして二泊三日の間で勤められ、一年生から三年生まで四十人程の参加でした。宗門校というだけで、当然ほとんどが仏道修行の経験の無いごく普通の学生であったと思います。合宿は、体育会系の部らしくハキハキとした声と賑やかな雰囲気の中に始まりましたが、お堂で正座をしてのお勤めや、普段なら気の休まる食事すらも「黙食」という慣れない作法を要求される状況に、生徒達は戸惑い早くも疲れきっている様子でありました。学校の授業と違い、仏様の居られる道場は椅子席ではなく畳に座る形式です。長時間の正座は苦痛でありましょう。殆どの学生は早々に足を投げ出して先生たちの話を聞いている中、数人の上級生が正座こそ崩してはおりましたが、足はなるべく仏様に対しほうり出すことない姿勢で臨んでいる様子がありました。また合宿終盤には、彼ら上級生がお堂への入退出のたび毎に必ず仏様に向かい直りスッと一礼する姿も見かけました。決して先生や指導員から「そうしなさい」とか「そうするものです」と言われたから行ったのではなく、自ずと振る舞うその姿に、仏様（三宝）に対する敬意の表れを感じたのでありました。そんな上級生を見習うように下級生もまた、次第にこれに倣い作法をするようになっていきました。

このような、合宿での上級生の振る舞いというのは、決して形だけの「行為」によるものでなく、仏様に対する敬いの心が「作法」という形を通して現れたので

ありましょう。と同時に、この上級生の仏様に対する敬いの心が、下級生にも波及していった事が何より素晴らしく、美しいと感じたのでありました。このように、普段の振る舞いや行いの中にも、「謗三宝戒」の実践が含まれており、まずは、三宝に対する敬いの心を持つことによって、「謗三宝戒」の持戒につながっていくのです。

注

（1）『浄全』二巻、六一頁。

（2）『朝日新聞』「折々のことば」参照。

（3）『ブッダのことば―スッタニパータ―』（中村元訳）、三七頁。

（4）「三施」①財施。衣食などの物資を施すこと。
②法施。教えを説き与えること。
③無畏施。他人から怖れを取り除いてやること。
「七施」①眼施。相手を憎むことなく、好ましい眼差しで接すること。
②和顔悦色施。和やかな喜びの顔つきで接すること。
③言辞施。相手に柔らかい思いやりのある言葉をかけてやること。
④身施。相手を敬い、我が身を惜しむことなく、他に尽くしていくこと。
⑤心施。善い心で相手の立場にたち心をかけていくこと。
⑥床座施。相手に座席を設けたり、譲ったりすること。
⑦房舎施。自分の家を一夜の宿として提供すること。
『新纂浄土宗大辞典』「三施」及び「無財の七施」の項参照。

（5）『私たちの道徳　小学校5・6年』文部科学省、八二頁～八三頁。
以下の文科省のホームページ内より教科書を閲覧することができる。
https://doutoku.mext.go.jp/pdf/elementary_school_moral5_6.pdf

（6）多くの日本語訳が出版されているが新しいものを挙げておく。
『レ・ミゼラブル』五巻、西永良成訳、ちくま文庫、二〇一二年 ― 二〇一四年／平凡社ライブラリー、二〇一九年 ―

二〇二〇年。

『レ・ミゼラブル』二巻、永山篤一訳（抄訳）、角川文庫、二〇一二年。

（7）（https://www.nhk.or.jp/minplus/0029/topic123.html）

（8）鷲津清静『仏弟子ものがたり』白馬社、二〇〇〇年、一二五頁〜一二八頁。

（9）『静かなるドン』、単行本二七巻。

（10）『摩訶僧祇律』巻二十、大正二二、三八六下〜三八七上。

（11）『大正』二五、一五八頁中〜下。

（12）自分で反省しない人は、指摘しないと反省しない。

（13）『浄土宗全書』十五巻、八四二頁下。

（14）渡邊直樹『宗教と現代がわかる本』平凡社。

（15）山下京子『彩花へ「生きる力」をありがとう』河出書房新社、一九九八年、一七六〜一七七頁。

（16）二〇一五年に少年Aが遺族に無断で手記（『絶歌』）を出版したことに、京子さんの思いは裏切られ、事件以来、続いていた少年Aとの手紙の交流も断たれた。そして、残念ながら少年Aから直接、謝罪を受けることなく京子さんは、二〇一七年に七二歳で乳がんでこの世を旅立っていかれた。

# 取材記録

# 釈尊三大法要取材の記録

法式研究班では本年度より研究テーマを「釈迦三大法要」とし、涅槃会・灌佛会・成道会ぞれぞれの次第の由来と変遷、現行『法要集』の次第内容研究を行っている。それと共に浄土宗における釈尊由来寺院として東京奥沢九品佛淨眞寺と京都嵯峨釈迦堂清涼寺の取材を行ない、寺院の伽藍見学と縁起沿革、伽藍見学、年間行事、釈尊関連法要とその次第を伺った。

浄土宗は「阿弥陀仏の慈悲を信じ、お念仏をとなえて浄土に往生することを願う」宗旨であり、浄土宗における釈尊観という視点でみると、貞慶が『興福寺奏状』九箇条をもって、法然の専修念仏を批判したその第三条に「釈尊を軽んずる失」あるように、釈尊軽視とされた側面があった。しかし、善導『観経疏』には「釈迦はこの方より発遣し、弥陀はすなわちかの国より来迎したまう」とあるように「お釈迦様がお示し下さったお念仏の教え」であり、釈尊は発遣教主であって二河白道に比喩される。『観無量寿経』による九品の弥陀と共に二河白道図に示される二尊遣迎を、開山珂碩上人（1618～1694）の構想のもと伽藍に具現化し造営されたのが奥沢九品佛淨眞寺である。

『九品佛淨眞寺略縁起』によると、開山は江戸時代初期の高僧珂碩上人で、四代将軍徳川家綱公の治世、延宝六年（1678）に奥沢城跡であったこの地を賜り、浄土宗所依の経典である『観無量寿経』の説相によっ

て堂宇を配置し、この寺を創建され、『江戸名所図絵』にかかれている堂宇と現状とはほとんど変わりはないという。九品の阿弥陀如来像を上品堂（中央）・中品堂（右）・下品堂（左）の三佛堂にそれぞれ三体ずつ安置、向かい合わせの本堂は「龍護殿」ともいい釈迦牟尼如来像を安置し、浄土（彼岸）を表象する三佛堂に対比して西面して穢土（此岸）を表している。

珂碩上人は念仏行者として一代の高僧であるとともに、また非常に彫刻に秀でられ、その彫刻された仏像も多数におよんだという。九体の阿弥陀如来像は、上人十八歳で発願し、五十一歳の時完成した畢生の代表作で末代衆生化益の仏像である。本堂の釈迦牟尼如来も珂碩上人御自作であり、三佛堂、本堂共に元禄十一年第二世珂憶上人の代に上棟した。他にも開山珂碩上人像を安置する開山堂や、閻魔堂・総門・仁王門・鐘楼・書院・食堂の伽藍を持つ。余談ではあるが、境内に「さぎ草園」があり、毎年7、8月に花が咲き人々の目を楽しませている。真夏の暑さの中、水辺に白く浮かぶシラサギの姿をした花は涼しげで浄眞寺の夏の風物詩といえる。

浄眞寺では各種年間行事法要が執り行われているが、釈尊関係法要は二月第二日曜日に開山堂で「涅槃会」、四月八日に本堂で「灌佛会」が行われている。「涅槃会」の次第は「報恩の歌」として『父母恩重経』を加えた次第としている。

各行事の中で代表する行事が四年ごと（旧来は三年ごと）に奉修されている「二十五菩薩来迎会」がある。「二十五菩薩来迎会」（旧来は八月十六日、平成二十九年より五月五日奉修）は広く「おめんかぶり」の名で親しまれている行事で、無形文化財に指定されている。念仏行者の臨終の際、阿弥陀如来が二十五菩薩をしたがえて西方浄土より来迎し、浄土に引摂する様子を行事にしたものである。本堂から三佛堂へ橋を架け、信者の方々が菩薩の面をかぶり楽人等をしたがえ三佛堂より本堂へ行道し（来迎）、本堂で珂碩上人像をむかえ厨子にのせ二十五菩薩、導師式衆と共に上品堂へ練

行列し（往相）、再び珂碩上人像、導師式衆が本堂に練行列（還相）するというドラマティックかつ厳粛な儀式である。当に珂碩上人の構想であった淨眞寺堂宇配置の意図を映像行事化したものといえる。コロナ禍によりしばらく行われていなかったが、令和六年五月五日に行われる予定であり、是非とも許可を頂き取材を行いたい。

続いて嵯峨釈迦堂清涼寺は、三国伝来生身の釈迦牟尼如来像たる国宝・赤栴檀の釈迦如来「釈迦栴檀瑞像」を本尊とする浄土宗寺院である。

釈迦堂縁起によると、釈尊三十七歳の御姿そのままの尊容を伝えるというその釈迦栴檀瑞像は、釈尊が母である摩耶夫人に法を説くために忉利天へのぼられた際、憍賞弥国の優塡王をはじめ一般の信者たちは釈迦の不在を悲しみ、優塡王が名工毘首羯磨に命じ栴檀の香木で釈迦生身の尊像を作らせたもので、釈尊と寸分違わぬ尊像であるという。後にこの像は鳩摩羅琰三蔵が奉ぜられヒマラヤの峻嶮を超えて亀茲国に至り、鳩摩羅什三蔵によって長安に伝えられた。南朝から隋・唐にかけて楊州開元寺に奉安されたが、唐が滅び宋の統一によって９８４年に宋の都汴京に伝わり、啓聖禅院に安置されていた。

清涼寺の開山である東大寺の僧奝然上人は、愛宕山を中国の霊場五台山に模して、大清涼寺の建立を誓い、永観三年（９８３）に入宋し、天台山、五台山を巡拝した後、啓聖禅院において釈迦栴檀瑞像を拝し、その御姿を日本に請来したいと願い、太宗皇帝より模刻を許され寛和元年（９８５）に完成する。寛和三年（９８７）に奝然上人はその新たな如来像を将来して京都に帰還する。

釈尊は自分と寸分違わぬ尊像を見てよろこび、「私の亡き後はこの像が衆生を済度する」としたと伝えられ、釈尊生き写しの尊像として釈迦栴檀瑞像はインドから中国に渡り東伝し、日本に将来した。故に三国伝来生身の釈迦牟尼如来なのである。

また釈迦栴檀瑞像の体内からは五色のシルクで造

られた「五臓六腑」を含む二十六件（計二百五十点）という多くの納入品が発見されている。「五臓六腑」は世界最古の内蔵模型として、極めて珍しく貴重なもので、五臓の周りには多数の絹織物や網が入れられており、血液体液、筋肉、血管神経を表すものと思われ、このような明確な五臓六腑をもち、多くの納入品数をもつ仏像は、他に例を見ない唯一の仏像である。

清涼寺は棲霞寺内の釈迦堂にその釈迦梅檀瑞像を奉安したことに始まる。源融（嵯峨天皇皇子）の別荘嵯峨の棲霞観が融公の没後に棲霞寺となり、重明親王妃が棲霞寺に新堂として釈迦堂を建立する。奝然上人の発願によるが、事ならず寂した上人寂後に意思を継いだ弟子の盛算によって、棲霞寺内釈迦堂に釈迦梅檀瑞像を安置して五台山清涼寺として建立され、勅願寺となった。その後享禄三年（1530）に円誉上人が清涼寺に入住し、初めて十二時の念仏を行い、以降釈迦瑞像は宗旨や、貴賤僧俗の別なく多くの民衆の信仰をあつめ、やがてこの本寺を清涼寺に合併し、種々の変遷を経て、現在は浄土宗の一院としていたる。本尊釈迦梅檀瑞像の他にも、棲霞寺の本尊であった「国宝・阿弥陀三尊坐像」を始め、多くの国宝・重要文化財等を有しているが、江戸への出開帳をはじめ、多くの民衆からの祈りを受けてこられた「三国伝来生身の釈迦牟尼如来像」を本尊とする嵯峨釈迦堂清涼寺が、浄土宗の一院としていることは大変喜ばしいことである。

毎月八日に行われる釈尊ご聖日（八日会法要）、四月十九日の「お身拭式」、十二月六、七、八日に「仏名会」など多く年中行事が行われているが、毎年三月十五日「涅槃会」に併せて厳修されている「お松明式」が有名である。「お松明式」は大文字送り火、鞍馬の火祭と並んで京都三大火祭として受け継がれている。

『古寺巡礼 京都 21 清涼寺』（淡交社 昭和五十三年五月二十日初版発行）「清涼寺のみ仏・生身の証し 歴史と信仰（鵜飼光順）」によると、

「嵯峨御松明式は「嵯峨のはしらたいまつ」とよばれ、京都の古式の年中行事の一つに 数えられている。毎

年三月十五日の夜八時から境内で高さ七メートル余の松明三基を、松の枯枝や藤蔓などで巧みにゆわえて漏斗型に組み立て、本堂前に立てて火をつける。点火は火のついた枯松を竹竿の先につけ、松明の上から落とすと火は燃え出し、三本の松明は古来早稲・中稲・晩稲に見たてられ、火勢の強弱によってその年の豊作物の豊凶が占われる。これは釈尊を荼毘に付したさまを表わしたものと伝えられている。」とされ、寺院行事であるだけではなく、お松明作りからはじめ、現代においても地域の住民や保存会会員など多くの民衆と共にまもり続けられてきた伝統行事であることが推察できる。

以上、奥沢九品仏浄眞寺、嵯峨釈迦堂清涼寺の紹介になってしまったが、両寺院を通して浄土宗内においての釈尊観をうかがう事ができ、また行われている行事の次第から「釈尊三大法要」だけではなく、釈尊を対象とした法要次第の参考とすることができる。

维时 〇年〇月〇日

〇誉〇〇 敬白

Há tempos realizamos o Ofício de Entronização. Passou-se muito tempo desde então e muitos símbolos estão deteriorados. Assim, de acordo com as tradições ritualísticas iremos incinerar. Suplicamos que retornem ao mundo espiritual de origem.

Data:

Nome do monge.

---

1 Oratórios, imagens, *Ihais* (placas mortuárias, etc).

2 Em sânscrito: *Sabbe dhammā aniccā*. Em língua japonesa: *Shōhōmujō*.

3 Em sânscrito: *Sabbe dhammā anattā*. Em língua japonesa: *Shōhōmuga*.

● イタリア語

**La cerimonia della rimozione (porre termine sacro alla tavoletta memoriale)**

Tutte le cose sono impermanenti.

Ogni esistenza è priva di sé.

Questi sono i preziosi insegnamenti del Buddha.

Molto tempo è passato da quando è stata celebrata la cerimonia di consacrazione di questa tavoletta memoriale. Poiché questa venerabile tavoletta si è deteriorata nel tempo, ora osserviamo una cerimonia per rimuoverla secondo la tradizione. Preghiamo affinché lo spirito del nostro antenato possa rientrare nel luogo spirituale cui appartiene.

● 中国語

**《拨遣式宣疏》**

夫诸行无常、诸法无我，此乃佛祖金言。伏以，昔日所行开眼入神之庄严仪式以来，岁月已久，尊牌日渐腐朽，破损愈甚。由是谨遵仪轨，敬为拨送。

惟愿灵位回归佛国。

● 中国語

**《开眼式表白（墓碑）》**

夫凡涉水者必寻其源头，爱花者必养其根本。兹有净信檀越○○○○氏，资性温厚，素仰净土教法，深谢祖上慈薰。如今，迎接○忌日，建立○○家祖先累代之墓碑，迎请精灵，恭行开光仪式，以表报恩谢德之一端。

愿○○家祖先累代之精灵（○○○○○○）于佛国升进宝池莲品，遥相教导，为之护念。

维时 ○年○月○日

○誉○○ 敬白

撥遣式宣疏（位牌净焚） p38

● 英語

**Invocation for Discarding Ceremony (for a Memorial Tablet)**

All things are impermanent.

All existence lacks self.

These are the precious teachings of the Buddha.

A long time has passed since the consecration ceremony for this memorial tablet was observed. Since this honorable tablet has deteriorated, we are now observing a discarding ceremony according to tradition. We pray for our beloved one to return to his/her spiritual home.

● ポルトガル語

**Declaração no Ofício de Incineração - Símbolos**[1]

“Tudo é impermanente[2], não tem substância[3]”. São as sábias palavras do Buda.

admira as flores e zela por suas raízes.

Aqui temos o (a) Sr. (a) de profunda fé e de natureza gentil, que admirava os ensinamentos budistas da (Escola) Terra Pura e cultuava seus ancestrais.

Neste momento, para expressarmos nossa profunda gratidão oramos em memória de: (Nome) por ocasião do ○ ○ aniversário de sua partida, e também erguemos esta lápide. Convidamos a todos os antepassados da família (sobrenome) a participar deste Ofício de Inauguração e suplicamos vossa ajuda, orientando e protegendo (Nome) e assim possa continuar sua jornada até sagrada terra (Pura).

(local) e 00 de (Mês) Ano

● イタリア語

**Invocazione per Kaigen-shiki (“Lapide”)**

Coloro che hanno ereditato una tradizione dovrebbero guardare alle sue origini e coloro che custodiscono i fiori dovrebbero coltivare le loro radici. Il fedele [ nome del membro ] ha dato prova di gentilezza e rispetto verso gli insegnamenti del buddismo della Terra Pura. Con un profondo senso di gratitudine verso i propri antenati, [ nome del membro ] ha eretto questa lapide per gli antenati della [ nome della famiglia ] in questo [ anno xesima ] commemorazione di [ nome dell’antenato / persona cara scomparsa ]. La famiglia [nome della famiglia] esprime inoltre la sua profonda gratitudine e riconoscenza agli antenati con questa solenne cerimonia rivelatrice per invitare gli spiriti degli antenati a entrare in questa tomba.

Preghiamo per gli spiriti degli antenati della famiglia [ nome della famiglia ] possano progredire nelle loro pratiche nella Terra Pura e preghiamo che continuino a guidarci e a proteggerci da lì.

Presentiamo con riverenza questa invocazione in questo [ giorno ] del [ mese ] del [ anno ].

恭修开眼入魂法事，以资追善菩提。

但愿〇〇（法名）增进宝池莲品。

维时 〇年〇月〇日

〇誉〇〇 敬白

開眼式表白（墓碑） p35

● 英語

**Invocation for the Consecration Ceremony (*Kaigenshiki*) of a Tombstone (*Bohi*)**

Those who have inherited a tradition should look to its origins, and those who cherish flowers should nurture their roots. The faithful member, [name of member], has exemplified gentleness, kindness, and a reverence for the teachings of Pure Land Buddhism. With a deep sense of gratitude towards his/her/their ancestors, [name of member] has erected this tombstone for the ancestors of the [family name] family on this XXth memorial of [name of ancestor/departed loved one]. The [family name] family also express their profound gratitude and appreciation to their ancestors by performing this solemn eye-opening ceremony to invite the spirit of the ancestors to enter this tomb.

We pray for the spirits of the [family name] family ancestors to advance in their practices in the Pure Land and ask that they continue to guide and protect us from there. We reverently present this invocation on this [day] day of [month] in [year].

● ポルトガル語

**Súplica no Ofício de Inauguração de Oratório (ou túmulo)**

Inicialmente, aqueles que seguem o fluxo procuram sua fonte, como quem

● イタリア語

**Invocazione per Kaigen-shiki (Ihai)**

Invocazione per la cerimonia dell'apertura degli occhi. (consacrazione di un'immagine di una tavoletta commemorativa, Il Ihai)

Con la più profonda riverenza, dedichiamo questa invocazione ad Amida Buddha, il Re Occidentale del Voto, e a tutti i Tre Tesorieri. Riflettendo sulla tavoletta commemorativa a forma di piattaforma di loto nella Terra Pura della Beatitudine Ultima, riveriamola e rispettiamola come prova della nascita nella Terra Pura.

Qui abbiamo [ nome del membro che fa l'offerta ], un membro devoto con pura fede, che sta custodendo questa tavoletta commemorativa per coltivare meriti virtuosi per il suo / la sua (compassionevole, padre affettuoso, madre affettuosa, fratello, ecc). Pertanto, osserviamo ora con reverenza questa cerimonia di apertura degli occhi affinché lo spirito amato entri in questa tavoletta commemorativa. Che questa trasferisca il nostro merito alla persona amata in forma visibile secondo il modo tradizionale della cerimonia.

Preghiamo affinché [ nome postumo del / della (padre, madre, ecc) ] nascerai sul loto nella fontana ingioiellata della Terra Pura.

Io, [ nome del ministro officiante ] dedico con riverenza questa invocazione in questo giorno di [ mese ] dell'anno ....

● 中国語

**《开眼式表白（牌位）》**

谨敬西方愿王阿弥陀如来及一切三宝之前敬白：

夫惟牌位，仿极乐净土之莲台为往生净土之证，宜应尊崇奉祠。

兹有檀越某某，为慈父（慈母等）的追福作善，奉安牌位。仍准仪轨，

Pure Land of Ultimate Bliss, let us revere it as proof of [name of deceased beloved one's] birth in the Pure Land.

We pray for [posthumous name of father/mother/beloved one] to be born on [his/her/their] lotus in the jeweled pond [of the Pure Land, where (he/she/they) will continue to practice toward enlightenment].

We reverently present this invocation on the [XX] day of [month] in the year [XX].

● ポルトガル語

**Súplica para a Cerimônia de Abertura dos Olhos (Ihai)**

Humildemente, em profunda reverência, encaminhamos este pedido ao Buda Amida da Terra Pura e aos Três Tesouros budistas. Este ihai tem sua base na forma de uma flor de lótus da Terra Pura. A partir deste momento, iremos reverenciá-lo e respeitá-lo como prova de seu nascimento na Terra Pura.

O (a) senhor (a) [nome da pessoa falecida] teve uma fé pura e foi um membro dedicado em nossa comunidade. Consagraremos este Ihai para cultivar os méritos virtuosos de seu (pai/mãe/irmã (o)/esposa (o) (filho (a). Assim, nesta Cerimônia de Abertura dos Olhos, convido a todos para transferirmos os méritos de nossas oraçõe e conforme as tradições, seu espírito amado seja introduzido neste ihai.

Assim, oramos para que [nome búdico do pai/mãe/etc.] a flor de lótus desabroche no lago de jóias da Terra Pura.

Hoje, no dia / mês /ano, eu (nome do oficiante) juntamente com todos os presentes encaminho humildemente esta súplica.

● 中国語

**《开眼式表白（持佛）》**

夫大圣释迦牟尼世尊为众生讲授八万四千法门，然而我等末代凡夫罪孽深重，无法立即解悟其高远教义。

因此，宗祖大师法然上人领会观无量寿经之心意，作为凡入报土之指南。即，念极乐之庄严，修厌离秽土之行法，称弥陀佛之名，劝欣求净土之愿行。

兹有〇〇〇〇氏，早奉净土之教，真心信仰阿弥陀如来。今设宫殿（佛坛）于现居一角，以迎如来尊像，日夜拜佛，以献报恩之诚，兼资于追善祖灵，并勉励纤悔发愿之净业。真乃笃信之人，其善根之极实应称赞。

愿西方愿王阿弥陀如来慈光愈发光辉，接受施主诚志，使本家祖先累代诸精灵，永住宝池莲台。又愿使家门繁荣，道缘具足，现当二世，身心安稳。

维时 〇年〇月〇日

〇誉〇〇 敬白

開眼式表白（位牌） p34

● 英語

**Invocation for the Consecration Ceremony (*Kaigenshiki*)**
**of a Memorial Tablet (*Ihai*)**

With deepest reverence, we offer this invocation to Amida Buddha, the Western King of the Vows, and to the Three Treasures.

Here we have [name of member making offering], a dedicated member of pure faith, who is enshrining this memorial tablet today in memory of and to cultivate merit for [his/her/their] beloved (father/mother/beloved one). Let us now reverently observe this consecration ceremony for the beloved spirit to enter this memorial tablet and help us transfer our merit to our beloved one according to tradition. With this memorial tablet (*ihai*) in the shape of a lotus platform in the

**statua di Buddha)**

Il Grande Sacro Shakyamuni Buddha ha esposto 84.000 insegnamenti per il bene di tutti gli esseri senzienti. Tuttavia, noi, gente comune di quest'epoca degenerata, con peccati ed impedimenti profondamente radicati, non siamo in grado di comprendere immediatamente queste profonde dottrine.

Per questo motivo, il nostro fondatore, il Grande Maestro Hōnen Shōnin, ha mostrato la via per la gente comune per nascere nella Terra Pura di Amida Buddha attingendo allo spirito del "Sutra della Visualizzazione". In altre parole, attraverso la contemplazione dell'aspetto della Terra Pura, insegnò le pratiche di rinuncia ai regni contaminati, recitando il nome di Amida Buddha e incoraggiando l'aspirazione alla nascita nella Terra Pura.

Qui, la signora / il signor .... ha abbracciato da tempo gli insegnamenti della Terra Pura, avendo vera fede in Amida Buddha. Ed ora, ha installato un altare buddista nella sua casa, ha accolto una venerata immagine del Buddha e prega diligentemente il Buddha ogni giorno e notte, offrendo sincera gratitudine e dando beneficio agli spiriti ancestrali. Inoltre, si impegna attivamente in azioni giuste attraverso l'atto di pentimento ed i voti.

È veramente una persona di fede profonda, degna di essere chiamata una persona con le più alte virtù.

Che la Luce Compassionevole di Amida Buddha nella Terra Pura Occidentale continui a risplendere, abbracciando le aspirazioni del donatore e permettendo a tutti gli spiriti degli antenati della sua famiglia di risiedere nella piattaforma del loto nello Stagno Gioiello per l'eternità. Auguriamo anche la prosperità della famiglia e la pace e il benessere delle generazioni presenti e venture.

In questo giorno, nell'anno .... il .... esimo giorno del .... esimo mese.

On this day, in the year XXXX, on the XXth day of the XXth month.

● ポルトガル語

**Súplica no Ofício de Instalação - Imagem do Buda**

O Abençoado e grande sábio Shakyamuni legou 84.000 ensinamentos em benefício dos seres sencientes. Evidentemente, por sermos seres comuns, temos muitas dificuldades em compreender sua profunda doutrina.

Por esta razão, o mestre Hōnen estudou e compreendeu o espírito do Sutra da Visualização da Vida Infinita e o utilizou como diretriz na propagação entre a comunidade budista. Em outras palavras, ele nos mostra como visualizar a Terra Pura, bem como o método, que nos permite acessá-la através da entoação do nome do Buda Amida. Aqui, (na residência da família: ○ ○ todos se dedicam aos ensinamentos da Terra Pura e possuem uma verdadeira devoção ao Buda Amida. Assim, hoje instalamos este altar (oratório), onde ornamentamos com uma imagem do Buda, para que todos possam realizar suas oferendas. Ainda, ornamentamos com os Ihais dos antepassados para que todos possam refletir sobre os méritos conquistados com base nos valores e princípios herdados.

Sejamos sinceros, são verdadeiramente da fé e compaixão. Desejamos que o Buda Amida, soberano da face oeste do cosmos ilumine cada vez mais e acolha vossos pedidos. Traga também os ancestrais para que vivam neste altar sobre a plataforma em flor de lótus. Oramos para a prosperidade da família e que a atual geração sempre tenha a paz de espírito.

Data: (dia) (mês) e (ano)

● イタリア語

**Invocazione per Kaigen-shiki (Altare buddista (domestico), la propria**

開眼式表白（持仏） p33

● 英語

**Invocation for the Consecration Ceremony (*Kaigenshiki*)**
**of Personal Buddha Image (*Jibutsu*)**

The great sacred Buddha Shakyamuni expounded 84,000 teachings for the sake of all sentient beings. However, even we, the ordinary people of this degenerate age, with deeply rooted sins and hindrances, are unable to immediately understand the profound doctrines. For this reason, our founder, the Great Master Hōnen Shōnin, showed the way for ordinary people to be born in the Pure Land of Amida Buddha by drawing upon the spirit of the *Visualization Sutra*. That is, by contemplating on the appearance of the Pure Land, he taught the practices of renouncing the defiled realms, reciting Amida Buddha's name, and encouraging aspiration for birth in the Pure Land.

Here, [name] has long embraced the teachings of the Pure Land, carrying true faith in Amida Buddha. Now, he/she has/they have installed a Buddhist altar in [his/her/their] home, welcomed a revered image of Amida Buddha, and diligently prays to Amida Buddha every day and night, offering sincere gratitude and benefiting his/her/their ancestral spirits. Moreover, he/she engages/they engage actively in pure deeds through the act of repentance and vows.

He/She is/They are truly a person of deep faith, worthy of being called one with the highest virtues.

May the Compassionate Light of Amida Buddha in the Western Pure Land continue to shine brightly, embracing the aspirations of [name], and allowing all the spirits of his/her/their family ancestors to reside in the lotus platform in the jeweled pond for eternity. May we also wish for the prosperity of the family and for the peace and wellbeing of present and future generations.

Possano coloro che ascoltano il sacro suono della campana del tempio essere liberati da tutti i 108 tipi di desideri mondani. Che i nostri corpi e le nostre menti siano puliti e purificati in modo da poter accogliere un nuovo anno di infinita gioia, felicità e prosperità.

Preghiamo anche che il sole risplenda intensamente, che la luna brilli con purezza, che i venti soffino dolcemente, che le piogge siano tempestive, che non si verifichino disastri e calamità e che non vengano usati eserciti e armi. Che tutto il mondo, sotto il medesimo unico grande tetto, rispetti la virtù e l'umanità e coltivi il rispetto e l'umiltà. Che si possa celebrare un nuovo anno di primavera nel mondo e si possa godere della pace e dell'armonia.

● 中国語

**《除夜洪钟之疏》**

谨此奉敬，今结诸众，至心颂扬利剑宝号，祈愿诸佛冥护、神明加佑，至诚一心弘扬除夕梵钟。

经曰："一人一日中，八億四千念。念念中所作，皆從三途業。" 无始以来，我等罪业虽说深重，而洪钟之梵音殷殷，响彻四方，当此之时，因佛祖哀悯，听一韵，灭一罪；留一音，断一障。

愿听此梵音者，远离百八烦恼，心器清净，欢欣鼓舞，福寿无量，喜迎新春。更相冀愿，日明月清，风和雨顺，灾厉不起，兵戈无用，歌八纮大宇之岁，崇德兴仁，颂四海永康之春，同享太平和乐之世。

维时 〇年十二月三十一日

〇誉〇〇 敬白

Vamos praticar mais a benevolência, sem levantar as armas, evitar as calamidades, espalhar a primavera a todos os cantos do mundo, vivenciar a paz no mundo.

Data:

Nome do celebrante:

---

1 Em língua japonesa: *Sanzu*. São: inferno, dos espíritos famintos e dos animais. Nos remete a analogia de um rio que separa nosso mundo e o mundo dos mortos. Aos grandes pecadores é possível atravessá-lo pela parte mais funda (do rio) onde há ninhos de serpentes, aos que tem pecados mais leves enfrentam apenas a corredeira das águas e os inocentes atravessam sobre uma ponte de pedra.

2 Do cosmos (universo).

● イタリア語

**L'invocazione al suono della campana del tempio che annuncia Capodanno (Joya no Kane)**

Ci riuniamo con riverenza per invocare il sacro nome di Amida Buddha, pregando per l'aiuto divino e la protezione di tutti i buddha e per suonare sinceramente la campana del tempio con una sola mente in questa vigilia di Capodanno.

Secondo gli insegnamenti, "ottocento quaranta milioni di pensieri entrano ed escono dalla nostra mente ogni giorno", e l'azione di ognuno di questi pensieri può portare il karma verso i Tre Regni Inferiori. Sebbene il nostro karma sia pieno di trasgressioni fin dal passato senza inizio, quando i rintocchi della campana del tempio risuonano nelle dieci direzioni, a ciascun rintocco sacro ogni trasgressione si dissipa, attraverso la forza della compassione del Buddha. E mentre ogni suono della campana indugia, gli ostacoli verso il sentiero buddista si dissipano ad uno ad uno.

one.

May those who hear this sacred sound of the temple bell be freed of all 108 kinds of worldly desires. May our bodies and minds be cleansed and purified so that we may welcome a new year of infinite joy, happiness, and prosperity.

We also pray for the sun to shine brightly, the moon to gleam purely, the winds to blow gently, the rains to be timely, for disasters and calamities not to arise, and armies and weapons not be used. May all the world under one big roof revere virtue and humanity and cultivate respect and humility. May we celebrate a new spring in the world and enjoy peace and harmony.

● ポルトガル語

**Orações no Ofício do Grande Sino**

Neste momento, respeitosamente, do fundo de nossos corações exaltamos o nenbutsu. Oramos para receber a proteção divina dos Budas. O sino do templo é badalado na véspera de ano novo de todo o coração.

Nos sutras consta que cada pessoa tem mais de 840 milhões de pensamentos num único dia. Todas as ações da mente resultam nos Três Mundos[1]. Desde os tempos mais remotos, quando os sinos ressoavam nas 10 direções[2], era possível ouvir a melodia da compaixão do Buda, que é capaz de extinguir os pecados e uma pequena sílaba é capaz de eliminar todos os obstáculos.

Suplicamos para que todos os que ouvem esta melodia se afastem de seus (108) desejos mundanos e purifiquem seus corações para iniciar o ano novo em plena felicidade.

Rogamos também para que os dias sejam ensolarados, que o luar seja limpo e que a brisa seja suave, que as chuvas sejam favoráveis e que não ocorram desastres (naturais).

● 中国語

**《秋季彼岸会表白②》**

谨敬白于西方愿王阿弥陀如来、大恩教主释迦牟尼世尊等一切三宝：

仰惟世尊为圣者涅槃示六度万行，为万民往生教称名念佛。

即，观经曰："称佛名故，如一念倾，即得往生极乐世界"，解说凡夫之念佛往生；又曰："系念一处，想于西方。正坐西向，谛观于日"，以日想观明证阿弥陀佛之西方净土。因此，往古硕学教人以娑婆世界为此岸，将西方净土为彼岸，法然上人选择本愿念佛，劝人到彼岸往生极乐。

今迎秋分时正之季，日落正指西方，凝想净土，祈求净业，追善供养回施祖灵，以求后世一莲托生。

仰愿西方愿王阿弥陀如来，接受我等志愿，使愿行悉成就。

维时 〇年〇月〇日

〇誉〇〇 敬白

除夜洪鐘之疏　p32

● 英語

**Invocation for the New Year's Eve Tolling of the Temple Bell (*Joya no Kane*)**

We reverently gather together to call the sacred name of Amida Buddha to pray for the divine guidance and protection of all the buddhas, and to sincerely toll the temple bell on this New Year's Eve.

According to the Buddhist teachings, "Eight hundred forty million thoughts enter our minds every day, and the action of these thoughts can lead to karma towards the three lower realms. Though our karma is full of transgressions since the beginningless past, when the temple bell resonates in the ten directions, each transgression dissipates with its sacred sound through the Buddha's compassion, and as this sound lingers, the obstacles toward the Buddhist path dissipate one by

Il Buddha rivelò le miriadi di azioni delle sei perfezioni per far sì che i saggi raggiungessero l'illuminazione e insegnò la pratica del Nenbutsu vocale ("shōmyō nenbutsu"), ovvero la recitazione del nome di Amida Buddha, affinché tutte le persone e gli esseri nascessero nella Terra Pura.

In altre parole, nel Sutra della visualizzazione, il Buddha ha spiegato la via per nascere nella Terra Pura attraverso la pratica del Nenbutsu per la gente comune. "Poiché recitare il nome di Amida Buddha è la pratica giusta, in un istante di pensiero si può ottenere immediatamente la nascita nella Terra Pura". Il Buddha ci ha anche mostrato che "dovremmo contemplare l'occidente con la mente fissa in un luogo e, rivolti verso ovest e seduti in posizione eretta, guardare chiaramente il sole che tramonta". In questo modo, la visualizzazione del sole al tramonto illumina la direzione della Terra Pura occidentale di Amida Buddha. Pertanto, gli illustri studiosi antichi consideravano questo mondo come "questa riva" e la Terra Pura come "l'altra riva", e Hōnen Shōnin ci ha incoraggiato a raggiungere l'altra riva, la Terra Pura, attraverso il Nenbutsu basato sul Voto Originale di Amida Buddha.

Mentre accogliamo il giorno dell'equinozio d'autunno, la direzione del sole al tramonto ci mostra l'esatta direzione dell'ovest e possiamo contemplare la Terra Pura e aspirare a nascervi. Trasferiamo i meriti che accumuliamo attraverso la nostra pratica del Nenbutsu ai nostri antenati e desideriamo nascere insieme a loro su un loto nella Terra Pura.

Possa Amida Buddha, il Sovrano occidentale, accettare le nostre aspirazioni e concederci la completa realizzazione di tutte le nostre speranze.

Il giorno di [ mese ] dell'anno ....

Ao refletirmos, ele nos (Shakyamuni) nos ensina as práticas (ascéticas) em 6 níveis[1] e a recitação do nome de Buda Amida, que nos possibilitará conquistar a Terra Pura.

Em outras palavras, no Sutra da Contemplação da Vida Infinita[2]: "Ao invocar o nome do Buda (Amida), seremos capazes de renascer imediatamente na Terra Pura". E completou: "Devemos nos posicionar de forma ereta e nos concentrarmos para a face oeste, do sol".

Vários mestres nos ensinaram que nos ensinaram que: "nosso mundo (mundano) está numa das margens do rio e a Terra Pura está na margem oposta". E o mestre Hōnen nos ensinou que "a forma correta de alcançar a outra margem é através da prática do nenbutsu".

Neste período de equinócio de outono, ao contemplarmos o sol do entardecer provindos da face oeste, onde está a Terra Pura, resgatamos a memória de nossos antepassados. Desejamos nos purificar para também a fim de alcançar nosso assento na flor de lótus da Terra Pura.

Rogamos para que o Buda Amida aceite nossas súplicas.

Data:

---

1 Caridade, conduta, tolerância, devoção, concentração e sabedoria. Em sânscrito: dāna, síla, ksānti, vīrya, dhyāna e jnāna. Em língua japonesa: fuse - 布施 , jikai - 持戒 , nin-niku - 忍辱 , shōjin - 精進 , zenjō - 禅定 e chie - 智慧 .

2 Em língua japonesa: Kan-muryōjukyō – 観無量寿経

● イタリア語

**Invocazione per l'autunno O-higan ②**

Presento con rispetto questa invocazione a tutti i Tre Tesori, nonché ad Amida Buddha, il Sovrano occidentale, e a Shakyamuni, il Signore dei Grandi Insegnamenti Benevoli.

practice of reciting the name of Amida Buddha for all people and beings to be born into the Pure Land.

In the *Visualization Sutra,* the Buddha taught the way to be born into the Pure Land through the practice of nenbutsu for ordinary people, explaining, "Because reciting Amida Buddha's name is the right practice; in an instant of thought, one can immediately achieve birth in the Pure Land." The Buddha also showed us that "we should contemplate the western direction with our minds fixed on one place and, facing west and sitting upright, look clearly at the setting sun." In this way, the visualization of the setting sun lights up the western direction of Amida Buddha's Pure Land, which the distinguished ancient scholars called the "Other Shore," while they regarded this world as "This Shore." Hōnen Shōnin thus encouraged us to reach the Pure Land, the "Other Shore," through the nenbutsu based on the Original Vow of Amida Buddha.

As we welcome the autumn equinox day, the setting sun shows us the exact direction of the west, which allows us to contemplate the Pure Land and aspire to be born there. Therefore, let us transfer the merits we accumulate through our nenbutsu practice to our ancestors and wish to be born together with them on a lotus in the Pure Land.

May Amida Buddha, the King of the Vows in the Western Direction, accept our aspirations and grant us complete fulfillment of all our hopes.

● ポルトガル語

**Súplica para Ofício de Equinócio de outono ② – Ohigan**

Em profundo respeito, nos curvamos diante do Buda Amida soberano da face oeste dos cosmos, de Buda Shakyamuni, que é o benevolente mestre fundador dos ensinamentos (dharma) e dos Três Tesouros.

dell'illuminazione.

Presentiamo con riverenza questa invocazione in questo giorno di settembre, [ anno ].

● 中国語

**《秋季彼岸会表白》①**

遥遥奉拜，本寺常住正尊阿弥陀如来、观音势至两大菩萨、善导法然两位大师及莲门列祖、本寺开山中兴历代诸上人等之宝前敬白：

谨寻宗祖法然上人之足迹，往昔上人于难波荒陵之地修日想观，晚年于北摄胜尾寺望河内山野，拟白云为弥陀来迎之紫云。此皆凝思于极乐净土而期望阿弥陀佛、观音势至诸菩萨的接引所致。

彼岸虽遥于西方十万亿土，但阿弥陀佛闻众生念佛，应声即现。

而今秋分佳时，发誓执持弥陀名号一日乃至七日，拜佛扫墓（随喜写经会等），以助修善，自策自励。

香花芬芳处，诸佛必来临，珍膳供养处，祖灵各纳受。但愿，敬乞观经曼陀罗界会诸尊，照鉴今日香客之志愿，结缘诸灵慈光妙润，愈益增进佛道菩提。

维时 〇年〇月〇日

〇誉〇〇 敬白

秋彼岸会表白②　p25

● 英語

**Invocation for the Autumn Ohigan (Equinox) Service ②**

We respectfully offer this invocation to Amida Buddha, the King of the Vows in the western direction, to Shakyamuni, the Lord of the Great Benevolent Teachings, and to the Three Treasures. Shakyamuni Buddha revealed the myriad actions of the six perfections for sages to achieve enlightenment and taught the

● イタリア語

**Invocazione per l'autunno O-higan ①**

Ci inchiniamo con riverenza in direzione di Amida Buddha del lontano ponente. Con il più profondo rispetto, presentiamo questa invocazione davanti all'immagine di Amida Buddha, ai bodhisattva Kan-non e Seishi, ai due grandi maestri Shandao e Hōnen, ai patriarchi della Terra Pura e a tutti i passati ministri di questo tempio.

Riflettiamo ora sul percorso di vita del nostro fondatore Hōnen Shōnin, che praticò la visualizzazione del tramonto del sole nel Tempio Isshin-ji (nell'attuale Osaka). Nei suoi ultimi anni, mentre recitava il Nenbutsu e guardava le montagne dal Tempio Katsuō-ji, Hōnen Shōnin vide delle nuvole bianche, che percepì come nuvole viola, a significare l'approccio accogliente di Amida Buddha. Tutte queste pratiche, concentrate sulla Terra Pura, furono svolte in previsione del benvenuto di Amida Buddha e della sacra assemblea. Sebbene l'altra sponda nel lontano ovest, Higan, l'aldilà in lontananza attraversa ben diecimila miliardi di mondi (significa la Terra Pura), il Buddha appare istantaneamente rispondendo alla voce che recita il Nenbutsu.

Oggi, in questa bella stagione dell'equinozio d'autunno, facciamo il voto di invocare il nome di Amida Buddha da un giorno a sette giorni e ci incoraggiamo a praticare diligentemente visitando il tempio, offrendo preghiere davanti ai nostri antenati e dedicando loro delle tavole commemorative.

Quando offriamo incensi e fiori profumati, i Buddha appariranno sicuramente davanti a noi. Quando offriamo cibi speciali, lo spirito dei nostri antenati li riceverà. Preghiamo che tutti i buddha e i bodhisattva della Terra Pura vedano le nostre aspirazioni. E che i nostri cari antenati ricevano costantemente soddisfacimento dalla luce compassionevole, e avanzino lungo il sentiero

onde está o Buda Amida e com o mais profundo respeito, apresentamos esta súplica, ao Buda, aos bodhisattvas Avalokiteshvara e Mahasthmaprapta, ao grande mestre Shandao, ao nosso fundador Hōnen e a todos os monges predecessores deste templo.

Ao refletirmos sobre a caminhada do mestre Hōnen, verificamos que ele vivenciou a contemplação do sol poente nas proximidades do Templo Isshin-ji. (na atual cidade de Osaka).

Em seus últimos anos, enquanto recitava o Nenbutsu e olhava para as montanhas do Templo Katsuōji, Hōnen viu nuvens brancas, mas as sentiu como nuvens roxas, o que simbolizava o acolhimento do Buda Amida. Todas as práticas (ascéticas), com foco na conquista da Terra Pura foram idealizadas em preparação às boas-vindas do Buda Amida. Assim, desejamos que todos sejamos convocados pelo Buda Amida e pelos bodhisattvas Avalokiteshvara e Mahasthmaprapta. Embora a outra margem (Higan) esteja no extremo oeste, a uma distância de 10 trilhões de terras do Buda, este surgirá instantaneamente, em resposta à voz do Nenbutsu.

Hoje, neste clima ameno do equinócio de outono, juramos clamar o nome de Buda Amida semanalmente, para nos encorajarmos a visitar o templo para oferecer as orações aos ancestrais.

Ao oferecermos os incensos e flores, certamente os Budas estarão entre nós. Quando oferecermos alimentos, os espíritos de nossos ancestrais os receberão. Que o Buda e bodhisattvas da Terra Pura acolham nossas aspirações. E que nossos ancestrais e entes queridos, que constantemente recebem a luz compassiva, continuem avançando no caminho da iluminação.

Assim, humildemente apresentamos esta súplica

Dia: março Ano: (hemisfério sul)

Kannon and Seishi, the grand masters Shandao and Hōnen, the Pure Land patriarchs, and all the past ministers of this temple.

Let us now reflect on our founder Hōnen Shōnin, who practiced the visualization of the setting sun at Isshin-ji Temple [in Osaka]. In his later years, while he recited the nenbutsu and gazed at the mountains from Katsuō-ji Temple, Hōnen Shōnin saw white clouds, which appeared purple, signifying Amida Buddha's welcoming approach. All these practices focusing on the Pure Land were performed in anticipation of the welcome of Amida Buddha and the sacred assembly. Though the other shore, Ohigan, exists in the far west as many as ten trillion buddha lands away, Amida Buddha appears instantly responding to the voices of the nenbutsu.

Today, in this fine season of autumn, we vow to call the Name of Amida Buddha for one to seven days and encourage ourselves to practice diligently by visiting our temple, offering prayers to our ancestors, and dedicating memorial tablets to them.

When we offer fragrant incenses and flowers, the buddhas will surely appear before us. When we offer special foods, the spirit of our ancestors will receive them. May all the buddhas and bodhisattvas in the Pure Land see our devotion and aspirations. And may our ancestors and loved ones, who constantly receive Amida's Compassionate Light, advance on the path to enlightenment.

We reverently present this invocation on this XXth day of September, XXXX.

● ポルトガル語

**Súplica para Ofício de Equinócio de outono ① – Ohigan**

Humildemente, em reverência nos voltamos para a face Oeste do cosmos,

● 中国語

**《施饿鬼会表白》**

夫以，施饿鬼之滥觞，源于《救拔焰口饿鬼陀罗尼经》之经说。

一日，阿难尊者独在清净处，观诸法皆空之理。子时，有一焰口饿鬼突然现身道："阿难，汝命不过三日。死后将生饿鬼道。若欲长寿，当除一切饿鬼之饥渴，为饿鬼供奉佛法僧三宝。"阿难向世尊请教济度饿鬼之妙法，世尊即为阿难说无量威德自在光明大圣妙力之神咒。并曰："若念此咒，能少增饮食，使一切饿鬼，皆得饱腹。"

阿难依此教诲，行施饿鬼之法，因其功德，延其三日之寿命，获福德寿命，而饿鬼皆能生于天上。《无量寿经》曰："若在三涂，勤苦之处，见此光明，皆得休息，无復苦恼，寿终之后，皆蒙解脱。"因此，若欲追善亡者，施饿鬼为最善之胜缘；若欲往生净土之得利，称名念佛及回向为最上。

如今，在如来慈光之下，在此敬修大施饿鬼会。

愿以此功德，本寺开山〇莲社〇誉上人〇〇大和尚、中兴历代诸上人普贤行愿究竟圆满，并为本寺初创以来之总檀信徒各家祖祖辈辈先亡之精灵，及新盆诸精灵位等追善增上菩提。

为祈求三界万灵有缘无缘之冥福，兴建法会，庄严既备，供物俱列。请遵仪轨，谨伸迎请。

维时 〇年〇月〇日

〇誉〇〇 敬白

秋彼岸会表白①　p24

● 英語

**Invocation for the Autumn Ohigan (Equinox) Service ①**

We reverently bow in the direction of Amida Buddha in the distant west. With deepest respect, we present this invocation to Amida Buddha, the bodhisattvas

Un giorno Ananda stava meditando da solo in un luogo sacro la verità dell'origine dipendente della natura o della vacuità della natura. Quando era mezzanotte, un Gaki che soffiava fiamme di fuoco dalla bocca apparve improvvisamente di fronte ad Ananda e disse:

« Ananda, la tua vita sta per finire tra tre giorni. Dopo la tua morte, cadrai nel mondo dei gaki. Se vuoi vivere più a lungo, devi soddisfare immancabilmente la fame di tutti i gaki e venerare tre tesorieri a nome dei gaki ».

Dopo aver detto questo, se ne andò. Ananda chiese al suo maestro Shakyamuni Buddha gli insegnamenti profondi per salvare i gaki. Così, per il bene di Ananda, Buddha gli diede parole darani di grande potenza ....

Se reciti questo darani, tutti i gaki affamati saranno soddisfatti senza problemi.

Secondo il Sutra della Vita Immensa, "se qualcuno si imbatte nella luce di Amida nei Tre Regni Inferiori, dove regnano solo dolore e disperazione, sarà sollevato dall'agonia e otterrà riposo e tranquillità. Quando terminerà la sua vita, gli verrà conferita l'illuminazione. Pertanto, questo servizio Segaki o servizio di offerta ai gaki è eccellente per aggiungere virtù al defunto. E per ottenere il merito della nascita nella terra pura, il Nenbutsu o recitare il nome di Buddha è il miglior trasferimento di meriti per il defunto.

Ora, sotto la guida della luce compassionevole di Amida Buddha, stiamo osservando questo servizio Segaki. Aspiriamo che questi meriti e queste virtù siano conferiti al nostro maestro fondatore di questo tempio, al restauratore, a tutti i sacerdoti e membri, ai loro antenati e a tutti i defunti nel loro primo Bon. Anche per la promozione della felicità di tutti gli spiriti dei tre mondi, dedichiamo questo servizio e offriamo tutte le offerte e gli ornamenti in modo completo.

Secondo la tradizione, presentiamo con riverenza questo invito.

1 Em língua japonesa: *Ranshō*. O termo nos remete aos ideogramas de origem chinesa que fazem uma analogia com as nascentes (pequenas) de grandes rios.
2 Rituais e orações.
3 Espíritos famintos. Em língua japonesa: *Gaki*.
4 Volume único (folha), traduzido pelo monge *Amoghavajra* (705 – 774). Um doa 8 patriarcas da Escola Budista *Shingon*.
5 Em *Kapilavastu*
6 Primo de *Gautama Sidharta*, também foi seu discípulo.
7 Vazio. A existência do mundo real é estabelecida por causas diretas e indiretas. Tal existência não pode ter um sujeito permanente. As projeções de formas de existência não correspondem a realidade.
8 Espírito faminto, ou *gaki* em língua japonesa. Em língua japonesa: *Enkugaki*.
9 O Buda, seu ensinamento e discípulos (comunidade).
10 Em sânscrito: *Saddharma*. Ensinamentos profundos. (não podem ser expressos através de palavras). Sutra do Lótus.
11 Ser iluminado com grande compaixão, que deseja espontaneamente alcançar a condição de Buda e m benefício de todos os seres sencientes.
12 Em língua japonesa: *Sanzu*. São: inferno, dos espíritos famintos e dos animais. Nos remete a analogia de um rio que separa nosso mundo e o mundo dos mortos. Aos grandes pecadores é possível atravessá-lo pela parte mais funda (do rio) onde há ninhos de serpentes, aos que tem pecados mais leves enfrentam apenas a corredeira das águas e os inocentes atravessam sobre uma ponte de pedra.
13 Termo (epíteto) de qualificação utilizado pelo Buda em referência a si mesmo.
14 Representa a felicidade ou bondade. Em língua japonesa: *Fugen Bosatsu*.
15 *Puja*. Em língua japonesa: *Hōe*. Literalmente uma reunião do *dharma*, ou de monges.
16 Em sânscrito: *Trailokya*. Em língua japonesa: *Sankai*. Na cosmologia budista temos: *Kāma-loka* (mundo do desejo), *Rūpaloka* (mundo da forma) e *Arūpaloka* (Mundo da ausência de forma).

● イタリア語

**Invocazione per Segaki**

Riflettendo sul significato del servizio Segaki o del nutrire i Gaki (i dannati affamati), l'origine dell'offerta di preghiere e cibo ai Gaki si basa sugli insegnamenti del "Kubatsu Enku Gaki Darani Sutra" (Sutra Darani per salvare i gaki dalle sofferenze).

passadas, quando era um *Bodisatva*[11], um Buda de Imensurável Luz e da Infinita Sabedoria e lhe transmitiu o maravilhoso *mantra*. Se você cumprir esta orientação, os pretas serão saciados e todos serão salvos.

*Ananda* seguiu as orientações contidas nos ensinamentos do *Segaki* e prolongou sua vida para além de 3 dias. Consta no Sutra da Vida Infinita, que os pretas foram salvos e renasceram nos céus. Caso alguém vá para um dos 3 mundos[12] (rotas infernais, caminhos), mas consiga ver a Luz do Buda Amida este também poderá se livrar do sofrimento sem angústia alguma e poderá descansar em paz.

Após a existência (morte) todos receberão a liberdade. Assim, as orações do *Segaki* são as mais adequadas aos falecidos e as oferendas das orações na prática do *nenbutsu* são melhores para conquistar a Terra Pura.

Neste momento, sob a luz misericordiosa do *Tathagata*[13] oferecemos as orações do (grande ofício) *Segaki*. Assim como o *Bodisatva Samatabhadra*[14], *oramos* para que através dos méritos alcançados por estas orações, o fundador deste templo (nome búdico do monge), seu sucessor (nome búdico do monge) e as sucessivas gerações de monges que realizaram a promessa de boas práticas em todos os lugares, possam repousar em locais calmos e harmoniosos.

Além disso, oramos também para que membros recém-falecidos e os antepassados das famílias de nossa comunidade também possam gozar a plena paz. Esta solenidade foi estabelecida para apresentarmos as orações em forma de adoração[15] para que todos os espíritos (inclusive os não identificados) dos 3 mundos[16] possam descansar em paz. Assim, respeitosamente lhe estendemos o convite.

Data: Nome do monge:

Pure Land. After their lives end, they will all be released. Therefore, this Segaki service is an excellent way to cultivate merit for our beloved departed ones and to obtain the benefits to be born in the Pure Land, through the nenbutsu or calling Amida Buddha's name, the best transference of merit for the deceased.

Now under the guidance of the compassionate light of Amida Buddha, we observe this Segaki Service. We wish for the merits and virtues of our prayers to be transmitted to our founding master of this temple, the restorer, and all the ministers and members, their ancestors, and our recently departed loved ones. We also dedicate this service and all the offerings and adornments for the happiness of all spirits in the realms of reincarnation. May we now offer our prayers for the benefit of the nenbutsu to spread to all beings equally. May we also encourage the aspiration for enlightenment, and together may we realize the benefit of achieving birth in the Pure Land.

● ポルトガル語

**Invocação para o Ofício de SEGAKI-E**

Ao refletirmos, notaremos que o ofício de *Segaki* tem sua origem[1] nos Ensinamentos[2] Imensuráveis para salvar os Pretas[3], que consta no Sutra *Dharani*[4] e é baseada numa história.

Certa vez, quando estava sozinho, num local[5] agradável, *Ananda*[6] observou a verdade sobre todas as leis da vacuidade[7]. Naquela época, durante a infância, um solitário *preta*[8] (*Enkugaki*) lhe apareceu e disse: "Sua vida não terá mais do que 3 dias. Caso queira ter uma vida mais longa, remova as angústias (fome) de todos os *pretas*. Em outras palavras, ofereça os Três Tesouros[9]. Ainda, peça ao honrado Buda que lhe ensine um método[10] de salvação".

Assim, para atender *Ananda*, *Shakyamuni* recuperou as memórias de vidas

维时 〇年〇月〇日

〇誉〇〇 敬白

施餓鬼表白　p22

● 英語

**Invocation for *Segaki* (Service for the Hungry Ghosts)**

Today we have gathered to observe *Segaki-e*—the service to offer prayers and food to *gaki*, or hungry ghosts. This observance is based on the teachings of the dharani sutra to save hungry ghosts from suffering. According to this sutra, one day, Ananda was meditating on the truth of dependent origination (or emptiness) at a sacred site. At midnight, a *gaki*, who blew fire flames from his mouth, suddenly appeared before the monk and said, "Ananda, your life will end in three days. After your death, you will fall into the realm of hungry ghosts. If you wish to live longer, you must satisfy the hunger of all hungry ghosts without fail and revere the Three Treasures on our behalf. After saying this, the *gaki* disappeared. Ananda then asked his teacher Shakyamuni Buddha for the profound teachings to save these beings. Thus, for the sake of Ananda, the Buddha taught him the dharani for magically multiplying food and said, "If you recite this dharani, all the *gaki* will be satisfied without fail."

Ananda followed the Buddha's instructions and observed a blessing ritual for the hungry ghosts. With the merit accumulated from this rite, Ananda was able to extend his life of three days to a virtuous, long life and all the *gaki* attained birth in the heavenly realm without fail.

According to the *Sutra of Immeasurable Life*, "Should anyone come across Amida's Light in the three nether realms, where only pain and despair reign, they will be relieved of suffering, obtain rest and repose, and become enlightened in the

Il giorno di [ mese ] dell'anno ....

Il Sutra della Vita Immensa dice che « dopo la fine della loro vita, tutti otterranno la liberazione (“Gedatsu”, giapponese) » .

● 中国語

**《盂兰盆施饿鬼会表白②》**

夫施饿鬼之滥觞：古时目连尊者初得神通，观见母亲之新生，哀哉，母亲堕入饿鬼道，形销骨立，口中冒火，若欲得饮食，食物即化为火而不能食。其痛苦之态，难以具言。

于是目连尊者不胜悲哀，至佛处求救母之妙法。

世尊为其讲解拔苦之法，《佛说盂兰盆经》是也。

又，一日，阿难尊者于空旷处观诸法皆空之理，

有一饿鬼忽然现身曰：“尊者命不过三日。若欲长寿，当救一切饿鬼之苦难。”而去。

阿难尊者思曰：短命虽不足恐，但恨不得拯救苦界沉伦之众生。

于是尊者向世尊请教济度恶鬼之妙法。世尊为其讲解拔苦之法，《焰口饿鬼经》是也。

《无量寿经》曰：“‘若在三涂，勤苦之处，见此光明，皆得休息，无复苦恼，寿终之后，皆蒙解脱。”

由此，追善亡者以施饿鬼为胜缘，往生净土之要谛以称名行及回向为最上。

如今，在如来慈光之下，在此奉修大施饿鬼会。

愿以此功德，为本寺开山上人、历代诸上人及法类法眷先亡诸上人庄严净土，为本寺初创以来之总檀信徒各家祖祖辈辈先亡之精灵，及去年以来新盆诸精灵位等追善增上菩提，并为战死战伤病殁殉难横死之诸精灵，以及天灾地祸遇难横死之诸精灵追善菩提，又愿荐七世父母及六亲眷属、有缘无缘三界万灵之冥福，又愿恶疫退散，五谷丰登，众生皆增福寿，法界有情，同登觉峰。

Buddha Shakyamuni per riferire la questione nei dettagli e consultarsi con lui. Il Buddha disse a Mokuren come salvare sua madre dalle sofferenze dei gaki. Questa storia sull'O-bon proviene dal sutra "Urabon kyō".

Un'altra storia ci racconta l'origine del Servizio Segaki. Un giorno, Ananda stava meditando sulla verità dell'origine dipendente della natura o del vuoto in un luogo sacro. A mezzanotte, un Gaki che soffiava fiamme di fuoco dalla bocca apparve improvvisamente davanti ad Ananda e disse: « Ananda, la tua vita finirà tra tre giorni. Dopo la tua morte, cadrai nel mondo dei gaki. Se vuoi vivere più a lungo, devi immancabilmente soddisfare la fame di tutti i gaki affamati e venerare i Tre Tesori a nome dei gaki ». Dopo aver detto questo, un Gaki scomparve. Ad Ananda non importava se la sua vita fosse stata breve, ma era più preoccupato di salvare tutti gli esseri viventi che soffrivano in tutti i regni.

Ananda chiese al suo maestro Shakyamuni Buddha gli insegnamenti profondi per salvare i gaki. Così, per amore di Ananda, il Buddha gli diede un dharani, o parole di grande potere, chiamato "Kubatsu Enkugaki kyō" (Sutra Dharani per salvare i gaki dalla sofferenza).

Secondo il Sutra della Vita Immensa, se gli esseri senzienti dovessero soffrire le difficoltà nei tre regni dell'impurità, quando vedranno la luce radiosa di Amida Buddha, otterranno tutti sollievo e non soffriranno più. Al termine della loro vita, nasceranno nella Terra Pura.

Oggi osserviamo questo servizio di Bon Segaki sotto la luce compassionevole di Amida Buddha. Con le virtù accumulate nelle nostre preghiere, trasferiamo i nostri meriti al ministro fondatore del nostro tempio, al restauratore, a tutti i ministri residenti e ai nostri familiari e amici del Dharma. Preghiamo anche per tutti i membri del passato, gli antenati e tutti i cari defunti che accolgono il loro primo Bon quest'anno dall'estate scorsa per essere illuminati.

dificuldades do cotidiano.

Oramos também por aqueles que pereceram devido a infortúnios naturais ou não, para que possam descansar em plena paz.

Oramos pelos nossos pais, todos os familiares e inclusive por aqueles que possuem registro.

Oramos por uma produtividade abundante e para que todos os seres sencientes possam conquistar sucesso, e que possam ascender ao pico da iluminação.

Data:

---

1 Em ideogramas japoneses: 施餓鬼 . Cerimônia budista originária do Japão.
2 Em língua japonesa: 目連 - Mokuren
3 Em sânscrito: Pretas. Em língua japonesa: 餓鬼 - Gaki.
4 Em língua japonesa: 仏説盂蘭盆経 - Urabon-kyō.
5 Em língua japonesa: 焔口餓鬼経 - Nome do Espírito Faminto que expele labaredas de fogo.
6 Em língua japonesa: 三塗 – Sanzu (Infernal, dos espíritos famintos e animal)

● イタリア語

**Invocazione per Bon Segaki ②**

L'origine del servizio O-bon deriva dalla storia di Mokuren (Sct. Maudgalyayana). Dopo aver ottenuto "Jintsū" (i poteri spirituali) di vedere negli altri regni, Mokuren volle immediatamente conoscere il regno in cui era rinata la madre defunta. Tuttavia, Mokuren fu profondamente rattristato nello scoprire che sua madre era caduta nel mondo dei gaki (i dannati affamati). Appariva emaciata, con solo pelle e ossa. Dalla sua bocca uscivano fiamme e ogni volta che cercava di mangiare, il cibo si trasformava istantaneamente in fuoco e non poteva mangiare nulla. Questa sofferenza era indescrivibile.

Mokuren fu sopraffatto dal dolore e, gridando a squarciagola, corse dal

seu renascimento. No entanto, foi um choque, pois sua mãe havia caído no mundo dos espíritos famintos[3] e sua fisionomia era deplorável. De sua boca saíam labaredas, todos alimentos se transformavam em fogo e nada podia ser ingerido. O estado de sofrimento era indescritível.

Vivenciando uma dor insuportável ele se aproximou do venerável Buda e lhe pediu para ensinar alguma maneira para resgatar sua mãe. Assim, Buda ensinou o que consta no Sutra Ullanbana[4]

Outra história foi vivenciada pelo discípulo Anan. Certo dia, quando estava tranquilamente observando o princípio do dharma e a vacuidade de tudo, um demônio faminto apareceu e disse: "Sua vida vai durar apenas três dias. Se quiser viver mais, e a todos os espíritos famintos para livrá-los do sofrimento", que consta no Sutra Enku Gaki[5].

Neste diálogo, mesmo sendo jovem, o venerável Anan entendeu as razões que levaram os seres sencientes a se tornarem espíritos famintos e decidiu resgatá-los.

Maudgalyāyana e o Buda iniciaram as orações com esse mesmo objetivo.

Consta ainda no Sutra da Vida Infinita, que após a partida deste mundo, os seres dos 3 níveis[6] de prática ascética ao perceberem a luz do Buda Amida encontrarão a paz e tranquilidade e nascerão na Terra Pura.

O fato é que este Ofício de Segaki é a maneira mais adequada para alcançar a iluminação, a prática de orações do nembutsu e sua respectiva oferenda às pessoas que já partiram é igualmente eficaz para alcançarmos a Terra Pura.

Acolhidos neste local, sob a orientação do Buda, estamos orando neste Ofício de Segaki. Em memória dos fundadores deste templo, dos monges que faleceram e membros desta comunidade que faleceram durante o outono, bem como todos os antepassados de nossas famílias e dos todos que tombaram nas

Buddha's disciples, Ananda. One day, Ananda was meditating on the truth of emptiness at a sacred site when a hungry ghost, who was blowing fire flames from his mouth, suddenly appeared before him at midnight. The hungry ghost said, "Ananda, your life will end in three days. If you wish to live longer, you should save all hungry ghosts from suffering." After saying this, the hungry ghost disappeared.

Ananda did not care if his life would be shortened but was concerned about saving all beings from the realm of suffering so he asked his teacher Shakyamuni Buddha for the profound teachings to save hungry ghosts. In response, the Buddha taught him the *Kubatsu Enkugaki daranikyō* (dharani sutra to save hungry ghosts from suffering).

According to the *Sutra of Immeasurable Life*, sentient beings suffering in the three realms of defilement will all attain relief upon witnessing the radiant light of Amida Buddha. After their earthly demise, they will be born in the Pure Land.

Today, we observe this Bon Segaki service with the compassionate light of Amida Buddha shining upon us. With the accumulated virtues from our prayers, we transfer our merit to the founding minister of our temple and all the resident ministers and to our Dharma family and friends. We also offer our prayers for the enlightenment of all the past members, ancestors, and to our departed loved ones, who welcome their first O-Bon this year.

● ポルトガル語

**Invocação para o Ofício de BON - SEGAKI-E ②**

Ao refletirmos, notamos que o Ofício de Segaki[1] iniciou-se há muito tempo, quando um discípulo (de Buda) chamado Maudgalyāyana[2] obteve pela primeira vez uma experiência divina. Após o falecimento de sua mãe, ele teve uma visão de

● 中国語

**《盂兰盆会表白》①**

诚以《盂兰盆经》曰：欲为父母修行之人，应为盂兰盆供养。父母的乳哺养育之恩甚深，七世父母的恩德累积于我们。为报其恩德修盂兰盆，为饿鬼贡献百味饮食供养三宝，祈愿施主家福德圆满，增上祖先菩提。

当此盂兰盆祥日，励菩萨心行，修施饿鬼大会，为一切饿鬼施饮食，依五大如来的神咒力使其超生善趣生天。此功德甚大甚贵。

但愿依施饿鬼的善根功德，增上所祭祀的祖先神灵的菩提。

再愿我们愿行圆满成就，让诸众生普得见闻，获得无量福德。

维时 〇年〇月〇日

〇誉〇〇 敬白

盆施餓鬼表白② p20

● 英語

**Invocation for *Bon Segaki* (O-Bon Service) ②**

The origin of O-Bon traces back to the story of Mokuren (Skt. Maudgalyayana) as recounted in the *Ullambana Sutra,* or *Urabon kyō* in Japanese. After attaining the spiritual power to see into other realms, Mokuren sought his deceased mother and was deeply saddened to find her emaciated with only skin and bones in the world of hungry ghosts. Flames came out of her mouth and whenever she tried to eat, the food instantly changed into fire so she could not eat anything. This suffering was beyond description.

Overwhelmed with sorrow, Mokuren ran back to Shakyamuni Buddha to tell him about this in detail. The Buddha instructed Mokuren on how to save his mother from the suffering of the hungry ghost realm.

The origin of the Segaki Service begins with another of Shakyamuni

língua japonesa temos: Gonyorai: Dainichi nyorai, Ashaku nyorai, Hōshō nyorai, Muryōju nyorai e Fukūjō nyorai,

● イタリア語

**Invocazione per Bon Segaki ①**

Ora riflettiamo sul significato di questo servizio O-Bon. Secondo l'Urabon Sutra (Ullambāna Sūtra), si dovrebbe osservare O-Bon e fare offerte al defunto se si vuole mostrare pietà filiale. Abbiamo ricevuto molti benefici dai genitori per averci allevato ed educato. Oggi dobbiamo recitare con gratitudine le devozioni dedicate ai genitori delle ultime sette generazioni. Per ringraziare con cuore quello che hanno fatto per noi, osserviamo O-Bon ed offriamo vari cibi ai tre tesorieri per salvare i dannati affamati. Inoltre, desideriamo trasferire il nostro merito a tutti i membri della famiglia a beneficio della loro felicità e pace. Aspiriamo altresì a trasferire il nostro merito a tutti gli antenati a beneficio della loro felicità e del raggiungimento dell'illuminazione.

In questo giorno propizio di O-Bon, osserviamo con reverenza la Grande Cerimonia Segaki ed offriamo il cibo spirituale ai dannati affamati. E con i poteri spirituali divini dei Cinque Tathagata, li condurremo a rinascere in mondi migliori. Questi atti benefici per gli affamati sono incredibilmente graziosi e preziosi.

Aspiriamo che i meriti e le virtù del servizio Segaki siano trasferiti con beneficio a tutti gli spiriti che possano essere illuminati.

Desideriamo che questa aspirazione si realizzi e che tutti gli esseri senzienti possano raggiungere virtù e felicità incommensurabili.

Presentiamo con riverenza questa invocazione in questo giorno di luglio / agosto dell'anno ....

● ポルトガル語

**Invocação para o Ofício de BON - SEGAKI-E ①**

Ao refletirmos,sobre o significado do Urabon, no Sutra Ullambana[1] consta que aqueles que desejam servir aos pais que já partiram, devem realizar um ofício memorial[2] de Urabon e fazer oferendas. Somos profundamente gratos aos pais que nos amamentaram e educaram. Além disso, herdamos as virtudes acumuladas em 7 gerações. Em retribuição, realizamos este ofício de Obon, quando oferecemos aos Três Tesouros[3] e muitas oferendas de alimentos e bebidas aos Pretas[4]. Desejamos a felicidade e prosperidade da Família. Aspiramos transferir os méritos das orações aos ancestrais, para que os mesmos alcancem a iluminação.

Neste dia de Obon desejamos que nos encoraje a mente de um bodisatva para realizarmos o Ofício de Segaki e possamos alimentar todos os Pretas.

Com poderes divinos dos Cinco Budas[5], os levaremos a renascer em mundos melhores. Esses atos benéficos para os Pretas são incrivelmente graciosos e preciosos.

Desejamos que através dos méritos (acumulados) pelo (ofício de Segaki) sejam transferidos para o benefício de todos os espíritos para alcançar a iluminação e que todos os seres sencientes sejam capazes de obter um amplo conhecimento e bênçãos imensuráveis.

Data:

Nome do celebrante:

---

1 Sutra Ullambana. Em língua japonesa: Urabon Kyō. Em chines Yulanpen Sutra

2 Em língua japonesa: Urabon. Bon: Honrar as almas dos ancestrais.

3 São: Os Budas, os ensinamentos budistas e os díscípulos.

4 Fantasmas famintos. Em língua japonesa: Gaki.

5 São: Vairochana (manifesta os fenômenos); Ratnasambhava (mente do Buda); Amitaba (Luz incomensurável). Akshobya (da face leste) e Amogasidi (realização prática da sabedoria). Em

盆施餓鬼表白①　p 19

● 英語

**Invocation for *Bon Segaki* (O-Bon Service) ①**

Let us now reflect upon the meaning of this O-Bon service. According to the *Ullambana Sutra,* or *Urabon gyō,* those of us wishing to be filial to our parents [and ancestors] should observe O-Bon and make offerings to them. We owe our parents a great deal for feeding and caring for us, and are here today due to the devotion and the dedication of seven generations of parents. To express our deep gratitude for all they have done for us, we observe O-Bon and offer foods of a hundred flavors to the Three Treasures for the sake of saving hungry ghosts. We also wish to transfer our merit for the peace and happiness of all who have requested prayers on this occasion. Further, we aspire to transfer merit to all their ancestors for their happiness and achievement of enlightenment.

On this auspicious day of O-Bon, we reverently observe the Great Segaki service and offer nourishment to the hungry ghosts. With the divine powers of the Five Buddhas, may they be born into a better incarnation.

These virtuous acts are greatly beneficial and noble. We aspire for the merits and virtues of this Segaki service to be transferred to cultivate merit for the enlightenment of our ancestors. We also wish for our aspirations to come true, and for all sentient beings to see the Buddha and hear the Teachings in order to attain immeasurable virtues and happiness.

We reverently present this invocation on this day of July/August in the year, XXXX.

In quel momento, il cielo e la terra si rallegrarono e piovvero fiori meravigliosi e soavi nettari. Per la sua naturale dignità, fu chiamato “Siddharta”, che significa colui che ha raggiunto un obiettivo. Fedele al suo nome, raggiunse la meta dell’illuminazione e divenne il Buddha.

In seguito, insegnò il Dharma per allontanare le persone dalla sofferenza e arricchire le loro menti.

Oggi abbiamo organizzato un “Hanamidō”, un altare di fiori, per offrire fiori e per versare “Amacha”, tè dolce di ortensia, al Buddha bambino per esprimergli la nostra più profonda riverenza e gratitudine.

Preghiamo sinceramente Buddha di proteggerci e guidarci con la sua grande compassione presentando con riverenza questa invocazione in questo .... giorno [ mese ] dell’anno ....

● 中国語

**《浴佛会表白》**

久远，印度迦毗罗卫国王妃摩耶夫人梦见白象，身怀贵子。十月满足，在蓝毗尼花园，贵子诞生。时为四月八日。

贵子行走七步，指着天地说：“天上天下，唯我独尊 "。

此时，天地喜悦，降下妙花甘露。贵子以其气度非凡，得名悉达多，长大成人，开悟成佛。

此后，世尊讲法度人，消除苦痛，滋润心灵。兹设此花御堂，敬献香花、灌注甘茶，以报佛恩。

愿以大悲保佑我们。

维时 〇年〇月〇日

〇誉〇〇 敬白

um elefante branco e em seguida concebeu um filho. No final do período lunar, ou para alguns em 8 de abril nasceu uma criança no jardim de Lumbini. Imediatamente esta criança deu 7 passos e em seguida apontou o céu e a terra, quando proclamou que era um ser especial. Neste momento, numa manifestação de alegria dos céus caiu uma chuva de néctares e na terra as flores se abriram em profunda alegria. Devido a sua nobreza foi nomeado Sidharta e tempos depois (adulto) alcançou a iluminação, tornando-se um Buda.

Após esta fase passou a orientar as pessoas ensinando sua doutrina, o que possibilitou a todos a eliminação dos sofrimentos e o aquecimento de seus corações.

Neste momento desejamos retribuir sua gentileza, pois preparamos este altar florido, onde lhe ofereceremos chá adocicado.

Suplicamos para que sua misericórdia[1] (empatia, compaixão), nos proteja.

Data:

Nome do celebrante:

---

1 Em sânscrito: *Karunā*. Em língua japonesa: *Jihi*. Não é pena nem dó.

● イタリア語

**Invocazione per Hanamatsuri (servizio del giorno del Buddha)**

Riflettiamo con riverenza sul significato di Hanamatsuri, la celebrazione della nascita del Buddha. La regina Maya di Kapilavastu concepì un bambino sacro dopo aver sognato un elefante bianco che entrava nel suo grembo.

Proprio l'otto aprile, il bambino apparve in questo mondo nel giardino fiorito di Lumbini. Lui fece sette passi in avanti e, indicando il cielo e la terra, dichiarò: « Nel cielo sovrastante e sulla terra sottostante, io solo sono colui che è Onorato ovunque ».

维时 〇年〇月〇日

〇誉〇〇 敬白

花まつり表白　p18

● 英語

**Invocation for *Hanamatsuri* (Buddha Day Service)**

Let us reverently reflect upon the significance of Hanamatsuri, the celebration of the Buddha's birth. After dreaming of a white elephant entering her womb, Queen Maya of Kapilavastu conceived a sacred child. On the eighth day of the fourth month, the child appeared in the flower garden of Lumbini, in India. The baby took seven steps forward and, pointing to the heavens and earth, declared, "In the Heavens above and on the Earth below, I alone am the World-Honored One."

In that moment, the heavens and the earth rejoiced and wondrous flowers and sweet nectar rained down. For his natural dignity, the baby was named "Siddhartha," which means "one who has accomplished a goal." True to his name, he achieved his goal of enlightenment and became the Buddha. Thereafter, he taught the Dharma to lead people away from suffering and enrich their minds.

Today, we arranged a *hanamidō*, or flower altar, to offer flowers and pour sweet tea on the Baby Buddha and express our deepest reverence and gratitude to him. We sincerely ask the Buddha to protect and guide us with his great compassion by reverently presenting this invocation on this XX day of [month] in the year XXXX.

● ポルトガル語

**Invocação no Ofício da Festa da Flor – Hana Matsuri**

Em tempos remotos, no reino de Capilavastu, a Rainha Maya sonhou com

Nenbutsu e offriamo preghiere ai nostri antenati.

Con questi meriti e virtù, aspiriamo ad aiutarci immediatamente a sviluppare l'aspirazione all'illuminazione e a raggiungere la nascita nella Terra Pura, dove potremo incontrare i molti virtuosi in un unico luogo, dove potremo incontrare il Buddha e ascoltare i suoi insegnamenti. Possiamo promuovere la pace e la felicità finali dopo aver realizzato come diventare un Buddha e tornare in questo mondo per salvare tutti gli esseri.

Il giorno di [ mese ] dell'anno ....

● 中国語

**《春季彼岸会表白②》**

谨敬白于此土教主释迦牟尼如来、西方愿王阿弥陀如来、观音势至诸大菩萨、极乐界会中九品莲台之圣众等，一切三宝之前曰：

夫以，彼岸会乃于春分中日前后七日，祈愿往生彼岸，口称阿弥陀佛名号之法会。

本日正迎春花烂漫，日出正东，落于正西。弥陀佛国在日落之处，向正西越过十万亿刹。当专心致志，一心一意，念想西方。此乃日想观，当厌离秽土，欣求净土。

善导大师之《观经曼陀罗》，依《观无量寿经》之经说，描绘极乐净土之佛祖、圣众及庄严。应拜此弥陀三尊及依正二报之庄严。即，《观经曼陀罗》以极乐净土之庄严为画图，佛堂则为此一庄严之具象。

因此，于佛堂礼拜本尊，即是在极乐净土礼拜阿弥陀佛。于佛堂听法话，就等于在极乐净土见佛闻法。

先拜佛、听法、一同念佛、供养祖先。

仰愿凭此功德，增上菩提，与诸上善人，俱会一处，见佛闻法，证得不退，还来度生，怨亲平等。

tutti i Tre Tesori.

Quando si pensa al significato del Servizio Higan, tradizionalmente si trattava di una pratica di sette giorni centrata sull'equinozio di primavera per invocare il Nome Sacro di Amida Buddha e per desiderare la nascita nella Terra Pura.

Il giorno dell'equinozio, quando la primavera è in piena fioritura, il sole sorge ad est e inoltre tramonta ad ovest.

È nella direzione del sole che tramonta che esiste la Terra Pura di Amida Buddha, nel lontano ovest, a dieci trilioni di terre di Buddha da qui.

Pertanto, dovreste concentrarvi con devozione su un solo luogo e, inoltre contemplare la Terra Pura a ovest.

Questa è chiamata la visualizzazione del sole che tramonta, in cui dovremmo rifiutare questo mondo impuro e cercare la Terra Pura.

Amida Buddha, le sacre moltitudini e gli ornamenti della Terra Pura della Beatitudine Definitiva sono raffigurati nel Mandala del Maestro Shandao, basato sugli insegnamenti del Sutra sulla Visualizzazione del Buddha della Vita Infinita.

Dovremmo venerare Amida Buddha e i due bodhisattva presenti Kannon e Seishi, nonché i magnifici ornamenti della Terra Pura.

In altre parole, il Mandala del Sutra sulla visualizzazione del Buddha della Vita Infinita descrive lo scenario della Terra Pura e l'Hondō (Sala principale) è un'incarnazione di questi magnifici ornamenti.

Pertanto, venerare l'immagine principale dell'Hondō significa venerare Amida Buddha nella Terra Pura.

Ascoltare il Dharma nell'Hondō significa incontrare il Buddha e ascoltare il Dharma nella Terra Pura.

Per prima cosa, preghiamo il Buddha, ascoltiamo il Dharma, recitiamo il

Inicialmente, este método, bem como a majestade da Terra Pura estão descritas no “Sutra Visualização da Vida Infinita” e posteriormente foram detalhadas na obra (ilustração) de Shandao sobre o Sutra “Visualização do Sutra da Vida Infinita”.

Devemos reverenciar o Buda Amida e sua Terra Pura. Em outras palavras, a ilustração é uma representação pictórica do Sutra da Visualização da Vida Infinita. Um altar (dos templos e oratórios) também tem a mesma simbologia.

Louvar o Buda diante de um altar é equivalente a mesma prática na Terra Pura.

Ouvir o dharma (sermão) diante do altar é o mesmo que ouvir os ensinamentos do Buda Amida na Terra Pura.

Inicialmente, desejamos reverenciar o Buda, ouvir seus ensinamentos e entoar o nenbutsu, dedicar nossas orações em agradecimento aos ancestrais, pois desejamos fortalecer o cultivo de nossas virtudes. Por meio dos méritos acumulados nas orações deste Oficio, humildemente pedimos a proteção do Buda a fim de vivermos em harmonia na busca da iluminação. Após alcançarmos a Terra Pura nos comprometemos retornar para auxiliar todos a conquistarem o mesmo propósito.

Em reverência, apresentamos a invocação nesta data: ○○ de setembro de ○○○○ .

● イタリア語

**Invocazione per la primavera Higan (l’equinozio di primavera)** ②

Con profonda riverenza, presento questa invocazione per riverire Shakyamuni Buddha, il Grande Maestro di questo mondo, Amida Buddha, il Soprano Occidentale dei Grandi Voti, Kannon, Seishi e tutti i grandi bodhisattva, le Assemblee nella Terra Pura, le sacre moltitudini sui fiori di loto dei Nove Gradi, e

image depicts the scene of the Pure Land and encourages us to revere Amida Buddha and his two attending bodhisattvas Kannon and Seishi as well as the magnificent adornments in the Pure Land, which is represented by the *hondō* (main hall/temple). Thus, to revere the main image in the *hondō* means to revere Amida Buddha in the Pure Land. To listen to the Dharma in the *hondō* means to encounter Amida Buddha and hear the Dharma in the Pure Land.

Let us now pray to the Buddha, listen to the Dharma, recite the nenbutsu, and offer prayers to our ancestors. With these merits and virtues, we pray for our beloved departed ones to immediately become enlightened. May they meet all the virtuous ones, encounter the Buddha, and hear the Teachings. May they attain nonretrogression, return to this world, and save all beings equally.

● ポルトガル語

**Súplica no Ofício do Equinócio de Primavera – Ohigan ②**

Humildemente, em profunda reverência nos dirigimos ao Buda Shakyamuni transmissor do dharma; a Buda Amida, soberano da face oeste do cosmos; a todos os grandes bodisatvas, em especial a Avalokiteshvara e Mahasthmaprapta e a todos os que alcançaram a Terra Pura, que estão no pedestal de lótus e aos Três Tesouros.

Ao realizamos Oficio de Ohigan durante a semana do equinócio de primavera, honraremos o nome do Buda Amida desejando renascer na margem oposta (Terra Pura).

Neste dia, quando se inicia a primavera, lembramos que o sol nasce no Leste e se põe no Oeste, onde está a terra do Buda Amida, no infinito . Devemos nos concentrar e contemplar a face oeste do cosmos. Esta prática é denominado “Visão do pôr do sol” . Devemos distanciar do mundo mundano e buscar a Terra Pura.

今日春季彼岸，恰逢草木生芽之时，正当劝播菩提之种，勤修别时念佛，坚定信心。建先祖之塔婆而奉献，念菩提之增上以供养。

但愿以所修善根，蒙佛护念。

维时 〇年〇月〇日

〇誉〇〇 敬白

春彼岸会表白② p14

● 英語

**Invocation for the Spring Ohigan (Equinox) Service ②**

With deepest reverence, I present this invocation in reverence of Shakyamuni Buddha, the Great Teacher of this world; Amida Buddha, the Western King of the Great Vows; Kannon, Seishi, and all the great bodhisattvas; the Assemblies in the Pure Land; the sacred multitudes on the lotus daises of the Nine Grades; and the Three Treasures.

When thinking of the significance of the Ohigan Service, it was traditionally a seven-day practice to call upon Amida Buddha's sacred name centered on the spring equinox to wish for birth in the Pure Land.

On the day of the equinox when spring is in full bloom, the sun rises in due east and sets in due west. The Pure Land of Amida Buddha exists in the direction of the setting sun, in the distant west as far as ten trillion buddha lands away. Therefore, we should devotedly concentrate on this one place and contemplate the Pure Land in the west. This practice is called the visualization of the setting sun, in which we reject this impure world and seek the Pure Land.

Amida Buddha and the sacred multitudes as well as the adornments in the Pure Land of Ultimate Bliss are depicted in Master Shandao's mandala, based on the teachings in the *Sutra on the Visualization of the Buddha of Infinite Life*. This

Shakyamuni Buddha ha esposto ottantaquattro mila vie di insegnamenti buddisti, inoltre ha mostrato le vie dell'illuminazione. Da questi insegnamenti, il nostro fondatore Hōnen Shōnin ha selezionato la sola pratica del Nenbutsu per guidarci verso l'altra riva, la Terra Pura.

Secondo il Sutra sulla Visualizzazione di Amida (Amitāyurdhyāna Sūtra), la pratica per raggiungere la Terra Pura in Occidente inizia con la contemplazione del tramonto del sole. Durante O-higan, il sole tramonta esattamente ad ovest, la direzione della Terra Pura. Quindi, Shandao ha spiegato che gli equinozi di primavera e d'autunno sono le stagioni più adatte per le pratiche.

Metaforicamente parlando, nel celebrare O-higan di primavera, quando le piante cominciano a germogliare, seminiamo i semi dell'illuminazione e rafforziamo la nostra fede osservando uno speciale servizio di Nenbutsu. Possiamo coltivare la virtuosità dedicando la tavoletta commemorativa Tōba ai nostri antenati. Possiamo anche chiedere sinceramente la protezione del Buddha con le virtù accumulate da questo servizio.

Presentiamo con riverenza questa invocazione in questo [ data ] giorno di marzo del [ anno ].

● 中国語

**《春季彼岸会表白》①**

谨敬正尊阿弥陀如来、发遣教主释迦牟尼佛、六方恒沙证诚诸佛、观音势至诸大菩萨、高祖光明善导大师、宗祖大师法然上人之前敬白：

伏以释尊曾说八万四千法门而提示菩提之道，宗祖大师法然上人从其法门中选择念佛一行为往生彼岸之引导。《观无量经》说：见日欲没（日想观）是一个至西方之道。日出正东，落于正西，指示极乐净土之方向。故古语说：别至彼岸，正直为心，勤于佛道。

ensinamentos, nosso fundador, mestre Hōnen selecionou a prática única do Nenbutsu para nos conduzir à “Outra Margem”, que é a Terra Pura.

De acordo com o “Sutra da Visualização da Vida Infinita”, a prática que possibilita alcançarmos a Terra Pura Ocidental começa com a contemplação do sol poente. Durante o Ohigan (equinócio), o sol se põe no oeste, a direção da Terra Pura. Shandao, explicou que a primavera e o outono são as estações mais indicadas para essa prática.

Celebramos o Ohigan de Primavera quando as plantas começam a brotar, assim lançamos as sementes da iluminação e renovamos nossa fé observando o serviço especial do Nenbutsu. Desejamos fortalecer o cultivo de nossas virtudes dedicando nossas orações em agradecimento aos ancestrais através destes Toba[2]. Por meio dos  méritos acumulados nas orações deste Oficio, humildemente pedimos a proteção do Buda.

Em reverência, apresentamos a invocação neste dia. ○○ de ○○ março de ○○○○ .

---

1 Tanto quanto os grãos de areia do rio Ganges.

2 Toba: Placas de madeiras nas quais é registrado a oferenda das orações.

● イタリア語

**Invocazione per la primavera Higan (l’equinozio di primavera)** ①

Con la più profonda riverenza, offriamo questa invocazione alla nostra immagine di Amida Buddha, a Shakyamuni Buddha, il dispensatore e fondatore degli insegnamenti, a tutti i Buddha numerosi come le sabbie del Gange nelle sei direzioni, a Kan-non, Seishi, tutti i grandi bodhisattva, al Grande Maestro Shandao ed al nostro fondatore Hōnen Shōnin.

Riflettiamo con riverenza sul significato di questo Servizio O-higan.

Shakyamuni Buddha expounded 84,000 ways of the Buddhist teachings and showed us the way to enlightenment. From these teachings, our founder Hōnen Shōnin selected the single practice of the nenbutsu to guide us to the Other Shore of the Pure Land.

According to the *Sutra on the Visualization of Amida,* the practice to reach the Pure Land in the West begins with the contemplation of the setting sun. During the equinox, *ohigan*, the sun sets in due west, the direction of the Pure Land. Master Shandao, therefore, explained that spring and autumn are the most suitable seasons for this practice.

In celebrating the spring *ohigan*, when plants begin to sprout, let us sow the seeds of enlightenment and strengthen our faith by observing this special nenbutsu service. May we cultivate virtue by dedicating memorial tablets (*tōba*) to our ancestors, and may we also sincerely ask for the protection of the Buddha with the virtues accumulated from this service.

We reverently present this invocation on this XXth day of March, XXXX.

● ポルトガル語

**Súplica no Ofício do Equinócio de Primavera – Ohigan ①**

Humildemente, em profunda reverência, encaminhamos este pedido ao Buda Amida, ao Buda Shakyamuni, que é o pioneiro e fundador dos ensinamentos (dharma), a todos os incontáveis[1] Budas das seis direções do cosmos, a todos os grandes bodisatvas, mas em especial a Avalokiteshvara e Mahasthmaprapta, ao Grande Mestre Shandao e ao nosso fundador, mestre Hōnen.

Ao refletirmos sobre o significado deste Oficio de Ohigan, nos lembramos que o Buda Shakyamuni expôs infinitas (84.000) teorias nos ensinamentos budistas, quando nos mostrou os caminhos para alcançarmos a iluminação. A partir desses

Inoltre, continueremo a recitare il Nenbutsu e ad essere guidati da Amida Buddha fino alla nostra ultima ora.

---

1）La porta per raggiungere l'illuminazione in questo mondo di sofferenza.

● 中国語

**《御忌大会表白》**

伏惟，宗祖法然上人本是势至菩萨垂迹降生，早登比睿山勤修佛道，智慧第一之名声闻天下。然而只因圣道之行证不能及于众生（释迦牟尼的修行和醒悟），所以法然上人隐居于报恩藏，遍读一切佛经，终于悟得弥陀释迦两尊之圣心、善导大师的深意，从而开辟往生极乐之道。

自此以来，他一心向众人劝讲选择本愿的念佛，于建历二年正月二十五日终于完成往生净土的素怀。至今，慈爱之祥云日渐漫布天空，佛法之雨露愈发滋润大地。在前的弟子等，今日迎接上人忌辰，无分道俗，一心合掌，身口意三业诚恳，奉修法会，以报答上人慈恩之万一。

仰望在前的大众等继续称名念佛，临终时必垂迎来接引。

维时 〇年〇月〇日

〇誉〇〇 敬白

彼岸会表白①　p13

● 英語

**Invocation for the Spring Ohigan (Equinox) Service ①**

With deepest reverence, we offer this invocation to Amida Buddha, to the dispatcher and founder of the teachings Shakyamuni Buddha, to all the buddhas as many as the sands of the Ganges in the six directions, to Kannon, Seishi, and all the great bodhisattvas, to the Great Master Shandao, and to our founder Hōnen Shōnin.

Let us now reverently reflect upon the meaning of this Ohigan service.

comprometemos em nos esforçar para difundir seus ensinamentos. Além disso, renovamos nossos votos em dar continuidade na prática do Nenbutsu para sermos guiados pelo Buda Amida até o último dia de nossas vidas.

● イタリア語

**Invocazione per Gyoki, il servizio commemorativo per Hōnen Shōnin**

Pensiamo con omaggio reverenziale Hōnen Shōnin, il nostro fondatore del Jōdo-Shū. Egli è nato come reincarnazione del bodhisattva Seishi. Nei primi anni della sua vita, andò sul monte Hiei e si dedicò alle pratiche buddiste tradizionali. Arrivò ad essere rinomato per la sua erudizione e fu chiamato "la più grande saggezza". Tuttavia, si rese conto che la pratica per raggiungere l'illuminazione attraverso la Porta Nobile[1)] fosse impossibile per la gente comune. Così lesse tutti i molti volumi delle scritture buddiste nel deposito dei sutra, Hō-onzō e finalmente realizzò l'intento di Amida e di Shakyamuni Buddha. Comprese anche profondamente gli insegnamenti della Terra Pura del Maestro Shandao ed aprì la via affinché tutti potessero nascere nella Terra Pura di Amida Buddha.

In seguito, si dedicò alla pratica ed alla diffusione del Nenbutsu selezionato nel Voto Originale e il venticinquesimo del primo mese, gennnaio, del 1212 (secondo anno Kenryaku), ottenne la nascita nella Terra Pura. Da allora, l'insegnamento di Nenbutsu si è diffuso fino ad oggi, come le nuvole di compassione si diffondono nel cielo ed il Buddha Dharma permea la terra.

Ora, osservando questo servizio commemorativo per Hōnen Shōnin, noi, i ministri ed i laici (i devoti), congiungendo le mani uniamo i nostri palmi per pregare sinceramente attraverso le nostre azioni, parole e pensieri. Non importa quanto piccolo, vorremmo esprimere il nostro più sincero apprezzamento a Hōnen Shōnin e sforzarci di diffondere i suoi insegnamenti.

(1) The gate to achieve enlightenment in this world of suffering.

● ポルトガル語

**Súplica no Ofício de Gyoki – Ofício Memorial do Mestre Hōnen**

Em reverência, vamos refletir sobre a vida e as realizações do fundador da Escola Budista da Terra Pura. O mestre Hōnen nasceu como a reencarnação do bodisatva Mahasthamaprapta.

Na juventude, ele foi para o Monte Hiei, onde dedicou-se às práticas ascéticas do budismo tradicional. Ele ficou famoso por sua erudição e foi classificado como “o mais sábio”.

No entanto, quando ele percebeu que as práticas que visavam alcançar a iluminação através do Caminho Nobre não eram viáveis para os seres sencientes, ele se enclausurou na biblioteca Hō-onzō, onde passou a estudar ainda mais e leu todos os volumes que formavam o conjunto de escrituras budistas.

Tempos depois, ele se deparou com os ensinamentos da doutrina budista da Terra Pura do Mestre Shandao e ao compreender profundamente suas teorias, finalmente entendeu a verdadeira intenção do Buda Amida e do Buda Shakyamuni. Assim, iniciou sua saga em propagar o ensinamento para que todos pudessem alcançar a Terra Pura do Buda Amida. Uma vida dedicada a prática e difusão do Nenbutsu.

Em 25 de janeiro de 1212, ele partiu para a Terra Pura. Desde então, o ensinamento do Nenbutsu tem se propagado até os dias atuais.

Hoje, neste Oficio Memorial do Mestre Hōnen, nós monges, devotos, e toda a comunidade, humildemente unimos as palmas de nossas mãos para orar com sinceridade através de nossas ações, palavras e pensamentos. Despojados de vaidade, gostaríamos de expressar o nosso mais sincero apreço ao mestre e nos

## 御忌会表白　p11

● 英語

**Invocation for *Gyoki*, the Memorial Service for Hōnen Shōnin**

Let us reverently reflect upon the life and achievements of our founder of Jōdo Shū, Hōnen Shōnin. Hōnen Shōnin was born as an incarnation of Seishi, the bodhisattva of wisdom, according to legend, and at a young age, he went up to Mount Hiei to devote himself to study and practice Buddhism. There, he came to be renowned for his scholarship and was called the "wisest in the land." However, he realized that the practice to achieve enlightenment through the Noble Gate[(1)] was not something that ordinary people could do. After reading through the many volumes of Buddhist scriptures in the Hōon-zō, sutra repository, he finally realized the intent of Amida and Shakyamuni Buddha. He also deeply understood the Pure Land teachings of the Great Master Shandao and paved the way for all to be born in the Pure Land of Amida Buddha. Thereafter, Hōnen Shōnin devoted himself to the practice and spread of the nenbutsu as selected in the Original Vow, and on the twenty-fifth day of the first month in 1212, he attained birth in the Pure Land. Since then, the teaching of the nenbutsu, just as the clouds of compassion in the sky, has spread and the Buddha-Dharma has increasingly permeated throughout the world up to this day.

Now in observing this memorial service for Hōnen Shōnin, we have gathered to place our palms together to sincerely pray through our actions, words, and thoughts. No matter how small, we would like to express our sincerest appreciation to Hōnen Shōnin and endeavor to spread the Pure Land teachings he taught us. Let us continue to recite the nenbutsu and be guided by Amida Buddha until our final hour.

● イタリア語

**Invocazione per l'anno nuovo**

Con profonda riverenza, offriamo questa invocazione ad Amida, il Buddha della Terra Pura Occidentale, a Shakyamuni Buddha, il Dispensatore e Fondatore degli Insegnamenti, ed ai Tre Tesori.

Oggi, per iniziare il nuovo anno, purifichiamo questo luogo e ci riuniamo per osservare un servizio speciale del canto Nenbutsu. Con le virtù ed i meriti di questo servizio, aspiriamo a rendere puri i nostri corpi e le nostre menti ed a raggiungere la giusta consapevolezza. Aspiriamo anche alla suprema l'illuminazione affidandoci al potere del Voto Originale di Amida Buddha.

Possano i Tre Tesori riconoscere i nostri cuori sinceri, che le nazioni siano ricche e le persone tranquille, che il nostro tempio possa avere pace e stabile e che i nostri devoti possano godere prosperità di fede incrollabile.

Che le nostre case siano pace, le nostre famiglie siano felici. E desideriamo i nostri meriti che le nostre virtù crescano.

● 中国語

**《修正会表白》**

谨敬西方愿王阿弥陀如来、发遣教主释迦牟尼世尊，以及一切三宝之前敬白：

时值新年，庄严道场，道俗相聚，开称名念佛之法筵。其旨何者，在正念于心器清净，仰阿弥陀佛之愿力所成之慈悲，以证无上菩提。

愿一切三宝，照鉴我等微衷，愿国富民安，当山安稳，愿檀信徒信心坚定，家内安全，家运隆盛，福德增长。

维时 〇年 元旦

〇誉〇〇 敬白

bountiful and people safe. May our virtues, safety, faith, and prosperity of our members increase. May we also have peace and stability for our temple and community.

● ポルトガル語

**Invocação para o Ofício de Ano Novo - SHUSHŌ-E**

Humildemente, em profunda reverência nos voltamos para face oeste[1], onde está o Buda Amida, ao Acolhedor[2] e Honrado Mestre Buda *Shakyamuni* e também aos Três Tesouros.[3]

Neste momento, quando damos boas-vindas ao ano novo, enfeitamos este lugar e os monges e os membros se reunem para entoar o Nenbusu. Para isso purificamos nossos corações e praticamos o Nenbutsu.

Ao realizarmos este procedimento, focando na força do voto original do Buda Amida e de sua grande misericórdia[4](empatia, compaixão), conquistaremos pensamentos corretos e purificaremos nossos corações.

Desejamos que os Três Tesouros nos ajudem a refletir sobre nossas limitações mais íntimas.  Suplicamos para que nossa nação e todos os cidadãos prosperem, que nossa comunidade viva em harmonia e que a fé de nossos membros seja fortalecida, suplicamos ainda pela segurança e prosperidade de nossas famílias.

Data: 1 de janeiro ...

Nome do celebrante:

---

1 Do cosmos (universo).

2 Das súplicas.

3 São: Os Budas, os ensinamentos budistas e os díscípulos.

4 Em sânscrito: *Karunā*. Em língua japonesa: *Jihi*. Não é pena nem dó. Eliminar o sofrimento e atribuir bem estar.

有为山高三千尺，今日迈步从头过。

生年匆匆黄粱枕，醉生梦死都看破。

今生虽未得遇，以成发心行善之缘；回向渐能为功，则云西方之路稍通。

爰有少年（少女），俗名（某某），法名（某某）。汝虽受生于人界，仅以〇岁而逝。惜哉！春之山樱，夏之碧莲，秋之金菊，妙花谢而不还，去而无迹。呜呼悲哉！

幸而，汝如今已听难遇之佛法，何不知阿弥陀佛本愿曰：设我得佛，十方众生，至心信乐，欲生我国，乃至十念，若不生者，不取正觉。阿弥陀佛实为慈悲父母，观世音、大势至为友养育。去矣！阿弥陀佛为汝来迎，极乐净土是汝故乡！

我在此垂示一句：

观音势至为其胜友，应坐道场生诸佛家。

## 表　白

修正会表白　p10

● 英語

### Invocation for New Year's Day

With deepest reverence, we offer this invocation to Amida Buddha, the Western King of the Vow, to Shakyamuni Buddha, the dispatcher and founder of the teachings, and to the Three Treasures.

Now as we welcome the New Year, we observe this special service of nenbutsu chanting by purifying the hall with various offerings and by the community gathering together. With these virtues and merits, we aspire for our bodies and minds to be pure and to achieve right mindfulness. We also rely on the power of the original vow of Amida Buddha and aspire for supreme enlightenment.

May all the Three Treasures see our sincere hearts. May nations be

.... Sebbene abbia avuto la fortuna di nascere in questo mondo come essere umano, ci ha lasciato alla tenera età di [ anni ].

La nostra tristezza va oltre le parole. In primavera, i fiori di ciliegio; in estate, i loti; in autunno, i crisantemi; per quanto bello possa essere un fiore, tutti si disperdono, senza lasciare traccia. È davvero tragico.

Tuttavia, abbiamo il Buddha-Dharma, che è difficile da incontrare e ascoltare.

Forse non lo sapete, ma il voto essenziale di Amida Buddha afferma:

"Dopo che avrò raggiunto la Buddità, se uno qualsiasi degli esseri senzienti nelle dieci direzioni, che aspira in tutta sincerità e fede a nascere nella mia terra, reciterà il mio nome anche solo dieci volte e non vi nascerà, allora non potrò raggiungere la perfetta illuminazione".

[ Nome ], sarai allevato da Amida Buddha, che sarà i tuoi genitori compassionevoli, e i bodhisattva Kan-non (Avalokiteśvara) e Seishi (Mahāsthāmaprāpta) saranno i tuoi amici.

Adesso va'! Il Buddha ti dà il benvenuto nella Terra Pura, la vostra dimora eterna.

Il Sutra della visualizzazione dice:

"Nascerai nella Terra Pura, dove Kan-non e Seishi saranno tuoi buoni amici".

● 中国語

**《引导・少年、少女》**

究竟大乘淨土門　諸行往生稱名勝
我閣萬行選佛名　往生淨土見尊體
莫道花开好颜色，花无百日终须落。
世人纷纷来与往，尽是红尘羁旅客。

Você não teve contato com o Voto Original do Buda Amida, quando ele afirma que: “Depois de ter alcançado o estado de Buda, se algum dos seres sencientes nas dez direções aspirar com toda a sinceridade e fé o desejo de nascer na minha terra, ao recitar o meu nome até dez vezes e não conseguir nascer na Terra Pura, eu não poderei alcançar a iluminação perfeita”.

Num sentimento de compaixão o Buda Amida lhe acolherá, de forma semelhante a empatia de seus pais. O Bodhisatva Avalokiteśvara (Kannon) e o Bodhisatva Mahāsthāmaprāpta (Seishi) serão seus companheiros e te farão crescer.

Agora vá! O Buda Amida virá buscá-lo e a sua Terra Pura será seu novo lar.

Oferecemos um verso em despedida.

O Bodhisatva Avalokiteśvara e Mahāsthāmaprāpta serão seus amigos mais experientes. Eles se juntarão a você e certamente poderá nascer na morada dos Budas”.

● イタリア語

**Requiem (Orazione funebre per guidare i cari defunti in giovane età)**

Anche se la loro fragranza persiste, i fiori si sono dispersi.
Nessuno in questo mondo rimane immutato.
Tutti attraverseremo le profonde montagne dell’impermanenza,
senza inseguire sogni superficiali né illudendoci.

Anche se non avete ancora coltivato una fede profonda o compiuto buone azioni in questa vita, il cammino verso la Terra Pura Occidentale di Amida Buddha vi sarà aperto attraverso le preghiere di trasferimento dei meriti (il Ekō) dei vostri cari.

Siamo qui riuniti per [ nome ], a cui è stato dato il nome buddista postumo

compassionate parent, and the bodhisattvas Kannon (Avalokiteshvara) and Seishi (Mahasthamaprapta) will be your friends. Go now! The Buddha welcomes you to the Pure Land, your eternal home.

The *Visualization Sutra* says, “You will be born into the Pure Land, where Kannon and Seishi shall be your good friends.”

● ポルトガル語

**Encaminhar para a Terra Pura（少年少女）**

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

Embora a fragrância da flor permaneça, em algum momento suas pétalas cairão.

Nada neste mundo permanecerá imutável.

Hoje, ultrapassamos o cerne da existência física.

Não perseguiremos sonhos superficiais, nem ficaremos extasiados, ao contrário alcançaremos um estado de perfeita paz.

Devido ao curto tempo (de vida), não lhe foi possível aprender e praticar os ensinamentos do Buda. Mas, através dos méritos destas orações te encaminhamos para a Terra Pura.

(nome) lhe atribuímos o nome búdico de: (*kaimyō*). Sabemos que é muito difícil, mas você conseguiu nascer como um ser humano. Infelizmente nos deixará com apenas ( )　anos.

A cerejeira floresce na primavera, a flor de lótus no verão e o crisântemo no outono. Apesar de sua beleza suas pétalas sempre caem e com o tempo não percebemos nem um sinal de sua magnitude. Como é entristecedor!

Neste momento, você tem a possibilidade em ouvir os ensinamentos do Buda.

引導（少年・少女）p70

● 英語

**_Indō_ (Funerary Verse) for a Child**

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

Although their fragrance lingers, the blossoms have scattered.

No one in this world remains unchanged.

We will all cross the deep mountains of impermanence,

neither pursuing shallow dreams

Nor being deluded.

Even though you may not yet have cultivated deep faith nor performed many good deeds in this life, the path to the Western Pure Land of Amida Buddha will be open to you through the merit-transferring (*ekō*) prayers of your loved ones. Here we have gathered for [name 俗名] , who has been given the posthumous Buddhist title [posthumous name 戒名]. Though he/she was fortunate to be born in this world as a human being, he/she has left us at the tender age of XX. Our sadness is beyond words. In spring, cherry blossoms; in summer, lotuses; and in autumn, chrysanthemums, no matter how beautiful a flower may be, they all scatter and disappear quickly. It is truly tragic. However, we have the Buddha-Dharma, which is difficult to encounter and hear.

You may not know it but Amida Buddha's essential vow states:

"After I have attained Buddhahood, should any of the sentient beings in the ten directions, who aspire in all sincerity and faith wishing to be born in my land, recite my name even ten times and not be born there, then may I not attain perfect enlightenment."

[Name], you shall be raised by Amida Buddha, who will be your

servito offerendogli Nenbutsu, fiori, tè e dolci per tutti questi anni, di guidarvi sempre.

Ora ci riuniamo per accompagnarvi alla vostra nascita nella Terra Pura recitando il verso.

"Le gocce di rugiada, qui, là e ovunque, evaporano,

Ma insieme i nostri spiriti si incontreranno sul piedistallo del loto".

● 中国語

**《引导・寺庭妇人》**

究竟大乘淨土門　諸行往生稱名勝

我閣萬行選佛名　往生淨土見尊體

兹有本寺之寺庭妇人，俗名（某某），以其自身，显示无常迅速，会者定离之理。以行年〇岁，尽其娑婆之报命。

夫人自嫁至本寺以来〇年，辅佐住持执事法要，又兼掌理寺务。其为人温厚笃实，不负檀越信徒之众望。……（介绍生前业绩。）

其法名号〇〇〇〇〇〇，维时〇年〇月〇日，归去西方乐土，有四十八愿法王之瑞相。其第十八愿曰：设我得佛，十方众生，至心信乐，欲生我国，乃至十念，若不生者，不取正觉。此方发遣，彼土来迎，既约已定，又何疑焉?

夫人在本尊之前，朝夕献花，供奉茶果。于今唯愿本尊来迎引接。在此谨诵一句，送夫人往诣乐邦：

身如朝露，彼此俱灭。其心不二，在于花台。

● イタリア語

**Requiem (Orazione funebre per guidare la consorte der sacerdote)**

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

Ed ora questa donna incarna parole di verità come “Tutto cambia rapidamente” e “Chi si incontra deve separarsi”. La signora [ nome ] ha concluso la sua vita in questo mondo all’ [ età ] e le è stato dato il nome buddista [ kaimyō ].

Nel [ anno di matrimonio ], la signora [ nome ] ha sposato il Rev. [ nome ], l’ex / attuale ministro residente di [ nome del tempio ] e ha servito questo tempio dal [ anno ]. Che si trattasse di un evento speciale o del servizio quotidiano al tempio, ha sempre sostenuto questo luogo e i suoi membri. La sua personalità gentile e sincera ha suscitato la fiducia e l’amore di tutti coloro che la circondavano.

(Descrizione dei suoi successi / i episodi)

Al [ giorno di decesso ], la signora [ nome ] è entrata in uno stato di beatitudine. Questo è un segno di buon auspicio: Amida Buddha, che ha adempiuto ai quarantotto voti, la sta aspettando nella Terra Pura del Paradiso Occidentale.

Nel diciottesimo voto si legge:

“Dopo che avrò raggiunto la Buddità, se qualcuno degli esseri senzienti nelle dieci direzioni, che aspira in tutta sincerità e fede a nascere nella mia terra, dovesse recitare il mio nome anche solo dieci volte e non nascere lì, allora non potrò ottenere la perfetta illuminazione”.

Shakyamuni Buddha vi manda da questa sponda e Amida Buddha vi accoglie dall’altra, quindi chi potrebbe dubitare di questo?

Chiediamo sinceramente al Buddha Amida di questo tempio, che avete

Neste mundo nada é inerte, tudo está em transformação. São nestas mudanças que nos deparamos com a grande verdade ensinada pelo Buda, “Aqueles que se encontram um dia se separam”.

A Senhora (nome) com (idade) anos deixará este mundo.

Há ( ) anos contraiu matrimônio com o ex / atual monge residente do templo (nome). Desde então empenhou-se na manutenção do mesmo, principalmente na realização das atividades realizadas. Sempre teve uma personalidade gentil e sincera, o que a permitiu conquistar a confiança dos membros da comunidade.

(Mencionar sua(s) conquista(s) ou episódio(s))

Neste momento de partida para a Terra Pura lhe atribuímos o nome búdico de ( *kaimyō* )

O Buda Amida cumpriu seus 48 votos e construiu a Terra Pura, onde te acolherá. Entre estes votos, no 18º consta: “Se eu não acolher todos os seres sencientes das dez direções do cosmos, que desejarem de todo o coração nascer na minha Terra Pura, ao praticarem o Nenbutsu por até dez vezes, não tiverem sucesso, que eu não entre no estado de perfeita iluminação”.

O Buda Shakyamuni está lhe encaminhando a partir deste mundo e o Buda Amida te acompanhará para recebê-la na Terra Pura. Não tenha dúvidas sobre isso.

Rogamos ao Buda Amida que acolha a Senhora (nome), pois em seu cotidiano sempre praticou o Nenbutsu e lhe dedicou várias oferendas como flores e chá.

Neste momento de partida, oferecemos um verso de despedida.

A nossa vida é como o orvalho que desaparece. Quando partirmos, nasceremos na mesma flor de lotus da Terra Pura.

the age of [years] and has been given the Buddhist name [*kaimyō*].

In [married year], Mrs. [name] married Rev. [minister's name], our former resident minister/our resident minister of [temple name] and served this temple since [year]. Whether for a special event or daily temple duties, she always supported the temple and the members. Her gentle and sincere personality has been trusted and loved by all around her.

[Mention her achievements or episodes]

On [date of passing], Mrs. [name] entered a blissful state. This was an auspicious sign that Amida Buddha, who fulfilled his forty-eight vows, welcomed her to the Pure Land of the Western Paradise. In the eighteenth vow, it states: "After I have attained Buddhahood, should any of the sentient beings in the ten directions, who aspire in all sincerity and faith wishing to be born in my land, recite my name even ten times and not be born there, then may I not attain perfect enlightenment." Shakyamuni Buddha sends you off from this shore and Amida Buddha welcomes you from the other shore, so who would doubt this?

We sincerely ask the Amida Buddha of this temple, who you have served and offered nenbutsu, flowers, tea, and sweets to all these years, to guide you always. Now we gather to send you off to your birth in the Pure Land by reciting the verse:

Dew drops here, there, and everywhere, they evaporate,

Yet together our spirits will meet on the lotus pedestal.

● ポルトガル語

**Encaminhar para a Terra Pura　（寺庭婦人）**

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

Con grande riconoscenza per i suoi insegnamenti e la sua amicizia di lungo corso, le dedichiamo sinceramente questi versi:

“Che tutti noi possiamo raggiungere la Terra Pura di Amida Buddha e tornare in questo mondo per aiutare a salvare gli esseri umani e celesti”.

● 中国語

**《香语・前住持、住持》**

究竟大乘淨土門　諸行往生稱名勝

我閣萬行選佛名　往生淨土見尊體

夫以法不能自弘，俟人而兴隆；人不能自进，随法以开悟。

兹迁化于西方净土者，为本寺第〇世〇莲社〇誉上人〇〇和尚。

〇誉上人就总本山知恩院（大本山增上寺）〇誉大僧正相承传宗传戒后，晋董此寺为住持。以来〇年，……（介绍生前业绩。）

近日，上人虽四大不调，仍训导后进不怠，尽力掌理寺门。然于〇月〇日，以世寿〇岁，往生净土，遂其素怀。

而今，上人应于金莲台上与先师上人再会。

我等深谢上人教导与道交，于灵前谨诵一句：

誓到弥陀安养界，还来秽国度人天。

引導（寺庭婦人）p69

● 英語

***Indō* (Funerary Verse) for the Wife of the Resident Minister**

究竟大乘淨土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生淨土見尊体

Here you embody the words of truth such as “Everything changes rapidly” and “Those who meet must part.” Mrs. [name] completed her life in this world at

Terra Pura.

Ofereço-lhe um verso em agradecimento.

*"Eu prometo alcançar a Terra Pura do Buda Amida e depois retornar a este mundo para ajudar e encaminhar todos os seres".*

● イタリア語

**Versi funebri dedicati al sacerdote residente (Kōgo)**

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

Il Dharma non si diffonde da solo, ma fiorisce attraverso le persone e i loro sforzi. Allo stesso tempo, le persone non possono raggiungere l'illuminazione da sole, ma unicamente attraverso il Dharma.

Qui abbiamo il defunto reverendo [ nome ], che è andato nella Terra Pura Occidentale di Amida Buddha. Era il [ .... ] sacerdote residente della [ .... ] Missione Jōdo. Il suo nome e i suoi titoli buddisti sono [ il renjagō e il kaimyō ].

Il defunto reverendo [ nome ] ha ricevuto i precetti e gli insegnamenti Jōdo Shū, trasmessi dall'abate capo [ nome ] del [ Grande Tempio Principale di Cion-in / Tempio del Capo di Zōjo-ji ]. Ha servito come sacerdote residente presso la Missione Jōdo di [ .... ] dal [ anno ].

(Descrizione dei suoi successi / i episodi)

In vita, non ha mai smesso di impegnarsi nell'insegnamento, nella guida dei membri e nella gestione del tempio, e nel suo ultimo giorno ha raggiunto l'Ōjō, la nascita nella Terra Pura, all'età di .... anni. Reverendo [ nome ], lei ha raggiunto la grande riunione con i suoi cari sul piedistallo di loto d'oro.

With great appreciation for your teaching and friendship, we sincerely dedicate this final verse to you:

"May we all reach Amida Buddha's Pure Land and return to this world to help save all human and heavenly beings."

● ポルトガル語

**Palavras em Oferenda de Incenso – Monge（香語）**

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

Os ensinamentos do Buda não se propagam sozinhos, mas sim através das pessoas. A Iluminação não se alcança apenas através do próprio esforço, mas quando seguimos o ensinamento do Buda, o Dharma.

Aqui temos o Reverendo (Nome) que partiu em direção Terra Pura do Buda Amida.

Ele (a) foi o (a) (numeral, cargo: missionário, monge residente, bispo) do templo (Nome). Seu nome budico é: (nome búdico).

O reverendo (nome) recebeu os ensinamentos e preceitos da Escola Budista da Terra Pura do Patriarca (nome), no Templo Matriz Chion-In, em Kyoto / do Abade (nome) no Templo Zōjōji, em Tokyo) e há (número) anos atrás foi nomeado (numeral, cargo: missionário, monge residente, bispo) desta comunidade.

(Menção sobre seu currículo / episódios).

Nos últimos tempos, mesmo enfrentando limitações físicas (a citação varia de acordo com o tipo da morte), e sempre empenhou-se com afinco nas orações diárias, na transmissão dos ensinamentos e na manutenção deste templo. Aos (número) anos partiu para a Terra Pura do Buda Amida. Agora, se reunirá aos monges antecessores do Templo: (nome) no pedestal da Flor de Lótus de ouro da

之法号。

而来，汝日夜口称佛名，思念摄取不舍之光明，心念西方净土，唯盼阿弥陀佛来迎引接。实乃人中之白莲华！

然而，生者必灭之法无人得免，〇月〇日，世寿〇岁而逝，乘阿弥陀佛大悲誓愿之法船，往生极乐净土。

香語　p66

● 英語

***Kōgo* (Funerary Verse for a Resident Minister)**

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

The Dharma, the Buddhist teaching, does not spread by itself but flourishes through people and their efforts. At the same time, people cannot become enlightened by themselves but only through the Dharma.

Here we have the late Reverend [name], who has gone to the Western Pure Land of Amida Buddha. He/She was the [XXth] resident minister of the [temple name] Jodo Mission. His/Her Buddhist name and titles are [*renjagō* and *kaimyō*].

The late Reverend [name] received the precepts and Jodo Shu teachings, transmitted by the Chief Abbot [name] of [Chion-in Grand Head Temple/Zōjō-ji Head Temple] and served as the resident minister at [temple name] Jodo Mission since [year].

(Description on his/her achievements/episodes)

In life, Reverend [name] never stopped his/her efforts to teach the Dharma, lead the members, and run the temple, and on his/her last day, he/she attained ōjō, birth in the Pure Land, at the age of XX. Reverend [name], you have achieved the great reunion with your beloved ones on the golden lotus pedestal in the Pure Land.

Você é uma pessoa venerável, é como uma flor de lótus branca dentre os seres humanos. No entanto, ninguém escapa da Lei da Impermanência.

No dia / mês, você concluiu mais um ciclo de __ anos. E, ao embarcar no navio da compaixão do Buda Amida, você será levado para a outra margen para nascer da Terra Pura.

● イタリア語

**Requiem (Orazione funebre, il Ritiro della Quintuplo Trasmissione)**

La signora / il signor .... hai avuto una profonda fede nel Dharma sublime e hai preso rifugio nell'Insegnamento della Terra Pura in vita. Tu sei stato anche insignito del nome di Dharma .... hai compreso il significato più profondo degli insegnamenti e bene appreso nell'antica tradizione della legge buddista, come riconoscimento per aver ricevuto l'essenza dell'insegnamento del Nenbutsu nel rituale della Quintuplo Trasmissione. Poi hai recitato il Nome di Amida Buddha con una mente che desidera la Luce che abbraccia tutti e non abbandona mai coloro che recitano il Nenbutsu. Nel tuo cuore Tu sei consapevole della Terra Pura e attendi il benvenuto di Amida. Quindi sei una persona molto venerabile che è candido come un fiore di loto bianco. Tuttavia, nessuno può sfuggire alla Legge dell'Impermanenza. Il [ mese / giorno ] hai concluso la tua vita di .... anni e, imbarcandoti sulla nave della compassione di Amida, sei stato portato sulla riva per passare all'altro mondo e rinascere nella Terra Pura.

● 中国語

**《引导・五重》**

汝某某（俗名），生前深信难信之法，归命往生净土之教。又列座本寺五重之会，受传念佛之奥义，纳口传于耳底，留血脉于白骨。以此，获授〇誉〇〇

引導（五重）p46，47

● 英語

### *Indō* (Funerary Verse) for *Gojūsōden*

[Name of departed one], you had deep faith in the sublime Dharma and took refuge in the Pure Land teaching in life. You have also been endowed with the Dharma name [posthuous name], in recognition of your receiving the heart of the nenbutsu teaching in the ritual of the Fivefold Transmission Retreat. Thereafter you recited the Name of Amida Buddha with a mind that looks to the Light that embraces all and never forsakes those who recite the nenbutsu. In your heart you are mindful of the Pure Land and await Amida's welcome. You are therefore a most venerable person who is like a white lotus flower. Nevertheless, no one can escape the Law of Impermanence.

On [month, day], you concluded your life of [age] years, and boarding the ship of Amida's great compassion, you were carried to the shore of the Pure Land. There to be born.

● ポルトガル語

**Encaminhar para a Terra Pura（Gojū）**

(nome) , você teve uma profunda fé no sublime Dharma e se refugiou no Ensino da Terra Pura, também foi agraciado com o nome búdico de _____ em reconhecimento por ter recebido os ensinamentos do Nenbutsu na cerimônia de Transmissão do Ensinamento do Cinco Pergaminhos.

Em seguida, seus lábios recitaram o nome do Buda Amida, desejando ser abraçado por sua Luz. Ele não abandona aqueles que praticam o nenbutsu.

Consciente, de que o Buda Amida virá para te acolher e levá-lo à Terra Pura.

Crediamo che Buddha Sakyamuni ci incoraggi ad uscire da questo mondo angoscioso e che Amida Buddha verrà ad accoglierci nella Terra Pura. Buddha Sakyamuni ci manda da questo mondo e Amida Buddha ci chiama dalla Terra pura. Come possiamo rimanere qui, rifiutando di nascere nella Terra Pura?

Ora, per la tua partenza, ti offro questa poesia come regalo d'addio:

« Anche se il tuo corpo sarà lasciato lontano, la tua mente sarà la stessa nella Terra Pura di Amida! »

● 中国語

**《引导・一般③》**

究竟大乘淨土門　諸行往生稱名勝

我閣萬行選佛名　往生淨土見尊體

夫诸行无常，是生灭法，生灭灭已，寂灭为乐。世尊于沙罗林中显示涅槃寂静之态，先德消灭于晨露之中，呈现生者必灭之理。何况我等末法浊世之凡夫，如何免得爱别离苦、会者定离之习？

新华台○○○（法名），谛听谛听，善思念之。汝，生于经多生曠劫而难生之人界，际遇历无量亿劫而难遇之佛法。此番离生死之道，无过于念佛一行。为往生佛国，只须乘弥陀本愿之船，渡过生死之海，到达极乐之岸而已。阿弥陀佛早已怜悯末代众生，发四十八大愿。其第十八愿曰：

“设我得佛，十方众生，至心信乐，欲生我国，乃至十念，若不生者，不取正觉。”

阿弥陀佛成佛已来，今已十劫，今现在说法。当知本誓重愿不虚，众生正念，必得往生。仰惟则释迦牟尼在此方拨遣，阿弥陀佛自彼国来迎。彼唤此遣，岂不往生？

如今，你将往生净土，我谨以一句为你送别：

汝身虽在千里之外，其心不二弥陀净土。

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

Tutti i fenomeni condizionati sono impermanenti. Tutto nasce e cessa. Questa è la legge della vita. Liberarsi dai desideri di questa realtà sarebbe vera beatitudine.

Buddha Shakyamuni entrò nel Nirvana nel bosco di sāla, in modo da mostrare lo stato di emancipazione da questo mondo condizionato. Anche i maestri precedenti sono scomparsi come gocce di rugiada per insegnare che tutte le vite sono mortali. Ancor di più, è impossibile per noi, esseri senzienti che vivono nel periodo del declino del Dharma (il mondo contaminato), evitare la realtà di soffrire per la separazione dai propri cari.

La signora e il signor .... ora vi conferisco il nome di Dharma .... Stai nascendo in un loto. Ascolta attentamente e rifletti profondamente. Nel tempo presente, nessuna via è superiore alla recitazione del Nembutsu per allontanarsi dai mondi illusori del samsara. Solo il voto di Amida Buddha può portarci alla riva della Terra Pura oltre l'oceano illusorio del samsara. In previsione della nostra situazione, Amida Buddha ha misericordiosamente stabilito i grandi quarantotto voti. In diciottesimo voto dice:

"Se, quando otterrò l'illuminazione, tutti gli esseri senzienti nelle dieci direzioni che hanno fede con cuore sincero e che desiderano nascere nel mio regno non vi nasceranno entro soli dieci istanti dal momento in cui sono completamente consapevole di me, allora non realizzerò l'illuminazione".

Sono già passati dieci eoni, da quando Amida Buddha ha raggiunto l'illuminazione fino ad oggi. (Secondo il Maestro Shan-tao), quindi, Amida Buddha insegna attualmente nella Terra Pura. È necessario comprendere che il suo voto essenziale non è stato fatto invano. Se noi esseri senzienti recitiamo il suo nome, otterremo con certezza la nascita nella Terra Pura.

nascer como ser humano e assim encontrou os ensinamentos do Buda.

Quando desejamos nos afastar dos mundos ilusórios do samsara, devemos nos lembrar que em momento algum haverá método superior ao da recitação do nenbutsu.

Somente o Voto Original de Buda Amida poderá nos levar para à Terra Pura.

Prevendo esta situação, Ele assumiu misericordiosamente os Quarenta e Oito Votos.

No décimo oitavo destes votos consta: “Se, quando eu alcançar a iluminação, os seres sencientes das dez direções do cosmos, que sincera e alegremente entoar meu nome, ainda que dez vezes, desejando nascer na minha Terra Pura, não tiveram sucesso, que eu não alcance o estado pleno de Buda.”

Já se passou muito tempo desde que o Buda Amida alcançou a iluminação.

O Mestre Shandao nos ensinou que o Buda Amida atualmente prega seus ensinamentos na Terra Pura. Seu Voto Original não foi feito em vão. Se nós seres sencientes recitarmos seu nome, com certeza alcançaremos, o nascimento na Terra Pura.

Acreditamos que Buda Shakyamuni nos incentiva abandonar este mundo de ilusões e ao mesmo tempo em que o Buda Amida nos chama para a sua Terra Pura.

Como podemos permanecer aqui recusando estes incentivos?

Agora te ofereço um poema de despedida:

Nossos corpos, são efêmeros como o orvalho. Desaparecerão. Talvez aqui, talvez ali, mas nossas mentes estarão no mesmo pedestal da flor.

● イタリア語

**Requiem (Orazione funebre) ③**

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

Buddha Shakyamuni encouraged us to free ourselves from this world of anguish and Amida Buddha will come to welcome us into the Pure Land. Hither Buddha Shakyamuni sends us and thither Amida Buddha calls us. How can we remain here, refusing to be born in the Pure Land?

Now, for your departure, I offer this poem as a farewell gift:

Our bodies, ephemeral like the dew will disappear. Perhaps here, perhaps there. But our hearts and minds will be in the Pure Land together.

● ポルトガル語

**Encaminhar para a Terra Pura ③**

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

Neste mundo tudo é impermanente.

Tudo que surge, acaba.

A libertação plena é alcançada com a extinção do sofrimento.

Para nos mostrar, O Buda Shakyamuni alcançou o estado de Nirvana na floresta de Sāla.

Os mestres do passado nos ensinaram, tudo que nasce um dia morre, desaparecendo como a gota de orvalho.

Neste período, do declínio do Dharma no qual vivemos, temos que conviver com a realidade, como: nos separar dos entes queridos, ou das pessoas com as quais convivemos.

Neste momento, quando ( Sr./Sra) está prestes a nascer numa flor de lótus, e eu te  concedo o nome búdico de (　　). Ouça com atenção e pondere bem sobre isso.

Sr./Sra. passou por varios renascimentos, e apesar de ser difícil, conseguiu

引導（一般③）p52

● 英語

***Indō* (Funerary Verse Leading the Departed Loved One to the Pure Land)** ③

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

All conditioned things are impermanent. Everything arises and ceases. The ultimate stillness of the law of creation and destruction is itself true bliss. The Buddha Shakyamuni entered Nirvana in the sala woods to show the state of emancipation from this conditioned world. Even previous masters disappeared like dewdrops in order to teach that all lives are mortal. It is impossible for us sentient beings living in the period of the decline of the Dharma (this world of defilement), to avoid the suffering of separation from our loved ones.

[Name of departed], I now endow you with the Dharma name [posthumous name]. You are being born in a lotus. Listen carefully, and ponder this well. In this present time, no way is superior to the recitation of nenbutsu for departing from the delusive worlds of reincarnation. Only the vow of Amida Buddha can bring us to the shore of the Pure Land beyond the delusive ocean of transmigration. In anticipation of our situation, Amida Buddha compassionately made forty-eight great vows. The eighteenth vow says:

"If, when I attain buddhahood, all sentient beings in the ten directions who hold faith with genuine hearts and who wish to be born in my land are not born there by calling my Name even ten times, I will not realize enlightenment." Ten eons have passed since Amida Buddha achieved enlightenment. [Master Shandao explained,*] therefore, Amida Buddha presently teaches in the Pure Land so it should be known that his essential vow was not made in vain. If we sentient beings recite his Name, we will with certainty attain birth in the Pure Land.

Com'è possibile rimanere qui, rifiutando di nascere nella Terra Pura?

Ora, all'avvicinarsi della tua partenza verso la Terra Pura, ti dono una poesia di commiato:

"Il tempo della vita è come la goccia di rugiada del mattino. Prima o poi, i giorni della vita mortale finiscono. Eppure, nel nostro cuore desideriamo nascere nella Terra Pura per posarci su quel calice di loto (nelumbo)".

● 中国語

**《引导・一般　②》**

究竟大乘淨土門　諸行往生稱名勝

我閣萬行選佛名　往生淨土見尊體

夫惟人世不定，如梦如幻，一旦无常之风吹起，又有谁能阻止？生者必有灭，这是无疑的真理；相逢必别离，这是难免的结局。

兹有新莲华生，俗名（某某），法号（某某）。谛听谛听，善思念之。此次寻道脱离生死，无过于念佛一行。因此宗祖法然上人有云："十方世界净土虽多，唯愿往生西方极乐净土，只因能生十恶五逆的众生之故。诸佛之中只皈依阿弥陀佛，因为只要念三五遍佛，他便亲自来迎引接我们。诸行之中只用念佛，因为念佛就是阿弥陀佛的本愿。现在乘弥陀本愿，往生净土，凡有所愿，无有不成。"

其本愿有云：设我得佛，十方众生，至心信乐，欲生我国，乃至十念，若不生者，不取正觉。

高祖善导大师解释此文说："设我得佛，十方众生，至心信乐，欲生我国，乃至十念，若不生者，不取正觉。"阿弥陀佛现今在世成佛，当知本誓重愿不虚，众生正念，必得往生。

仰而思之，释迦牟尼在此拨遣，阿弥陀佛自彼来迎。彼唤此遣，岂不往生？

现在，你将往生净土，我谨以一句为你送别：

身如朝露，彼此俱灭。其心不二，在于花台。

nome anche solo un poco, come tre o cinque volte.

Scegliamo la pratica del nembutsu. Perché il nembutsu conferma il voto essenziale del Buddha Amida.

Adesso, possiamo nascere nella Terra Pura attraverso il nembutsu. Facendo affidamento sul voto essenziale, colui che desideri la nascita nella Terra Pura, sicuramente compie un atto certo".

Il Buddha Amida disse nel voto essenziale:

"Dopo che avrò raggiunto il nirvana (sarò svegliato) (Buddhità), tutti gli esseri viventi (gli esseri viventi nelle dieci direzioni) che aspirano in tutta sincerità e desiderano con fede nascere nella mia terra pura, recitino il nome del Buddha anche dieci volte. Se io non fossi nato lì, allora non si potrebbe raggiungere l'illuminazione perfetta."

Il Maestro Shan-tao ha interpretato il voto essenziale così:

"Quando io [ Amida Buddha ] raggiungerò la Buddità (il nirvana), tutti gli esseri senzienti (nelle dieci direzioni) che invocano il mio nome almeno dieci volte nasceranno nella Terra Pura. Se essi non nascono nella Terra Pura, io non avevo assolutamente realizzato l'illuminazione".

Effettivamente, Amida Buddha realizzò la Buddità (il nirvana) e attualmente risiede nella sua Terra Pura.

Sappiate che il suo voto essenziale non è stato fatto invano. Se gli esseri senzienti reciteranno il suo nome (namu-amida-butsu), nasceranno nella Terra Pura con certezza assoluta."

Ecco, riflettiamo sul fatto che Buddha Sakyamuni ci indica la via da questo mondo angoscioso verso la Terra Pura, mentre Amida Buddha ci accoglie nella Terra Pura.

Tra questo mondo e l'altro mondo, il primo ci guida, il secondo ci invita.

Para a sua partida ofereço um poema em despedida.

A nossa vida é como o orvalho que desaparece. Quando partirmos, nasceremos na mesma flor de lotus da Terra Pura.

● イタリア語

**Requiem (Un'orazione funebre) ②**

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

Ora, la transitorietà di vivere è proprio come il tempo in un sogno o in una illusione.

Una volta che soffia il vento dell'impermanenza, nessuno può fermare il corso del tempo.

Che tutti gli esseri viventi siano mortali, è una ragione innegabile. Che le persone che si incontrano debbano separarsi, è una realtà inevitabile.

C'è una nuova vita che nasce in un loto d'altro mondo. Il suo nome secolare era Signor / Signora..., ora ti conferisco un nome Dharma, ..... Ascolta attentamente questo nome. Imprimilo nella tua mente e non dimenticarlo.

La via per allontanarsi dal mondo illusorio delle reincarnazioni (il samsara), è soltanto una, la pratica del nembutsu.

Ecco perché il nostro fondatore maestro Hōnen insegna:

"Ci sono numerose terre pure nelle dieci direzioni, eppure desideriamo nascere specificamente in una Terra Pura, quella occidentale del Buddha Amida. Poiché lui si offrì, anche se uno commette le dieci trasgressioni o le cinque gravi, può nascere lì".

Possiamo giungere soltanto al Buddha Amida tra tutti i Buddha. Perché lui accoglie personalmente nella Terra Pura i devoti del nembutsu che recitano il suo

(Nome), você que está prestes a nascer sobre a flor de lótus da Terra Pura, lhe atribuo o nome búdico: (hōmyō).

Ouça com bastante atenção :

No mundo em que vivemos, a recitação do Nenbutsu é o único caminho para nos livrarmos dos mundos ilusórios do Samsara.

O Mestre Hōnen, fundador da Escola da Terra Pura ensinou que:

"Nas dez direções do cosmos existem inúmeras Terras Puras. Escolhemos nascer na Terra Pura do Buda Amida que está na face oeste. Dentre os vários Budas, o escolhemos e chamamos pelo seu nome três, ou cinco vezes, pois é assim que ele acolhe os que entoam o Nenbutsu. Entre as várias práticas ascéticas escolhemos a do Nenbutsu, porque é parte do Voto original realizado.

Neste voto, Buda Amida se compromete: "Assumo este voto para alcançar o estado de Buda. Se eu não acolher todos os seres sencientes das dez direções do cosmos, que desejarem de todo o coração nascer na minha Terra Pura, ao praticarem o Nenbutsu por até dez vezes, que eu não entre no estado de perfeita Iluminação".

O Mestre Shandao interpretou este voto da seguinte forma: "Faço o voto para alcançar o estado de Buda e se eu não acolher todos os seres sencientes das dez direções do cosmos que entoam meu nome por até dez vezes, em minha Terra Pura, que eu não alcance o estado de perfeita iluminação".

Tenha em mente que o Buda Amida já está num estado de perfeita iluminação na sua Terra Pura, e o seu voto não é vão, portanto todos que entoarem o seu nome certamente nascerão na Terra Pura.

Neste mundo de sofrimento, acreditamos que o Buda Shakyamuni nos encaminha e o Buda Amida vem nos buscar para a sua Terra Pura. O Buda Amida nos chama, portanto vá.

upon the essential vow, then birth in the Pure Land is definitely assured."

According to this essential vow, Amida promised, "If, when I attain buddhahood, all sentient beings in the ten directions who hold faith with genuine hearts and who wish to be born in my buddha land are not born there within just ten moments of being mindful of me, I will not realize enlightenment." Master Shandao interpreted this to mean, "If, when I [Amida Buddha] attain buddhahood, all sentient beings in the ten directions who call out my name at least ten times are not born in the Pure Land, I will not realize enlightenment." Amida Buddha did, indeed, realize buddhahood and presently resides in the Pure Land. Know that the essential vow was not made in vain. If sentient beings recite his Name, they will, with certainty, attain birth in the Pure Land."

We know that Shakyamuni Buddha encouraged us to free ourselves from this world of suffering and Amida Buddha will welcome us into the Pure Land. Thus Buddha Sakyamuni now sends you off as Amida Buddha receives you in the Pure Land. For your departure, I offer this poem as a farewell gift:

Our bodies, ephemeral like the dew, will disappear. Perhaps here, perhaps there. But our minds will be on the same flower pedestal.

● ポルトガル語

**Encaminhar para a Terra Pura ②**

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝
我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

Ao fazermos uma reflexão sobre a vida, notamos que ela é imprescindível, como um sonho, é uma ilusão. O vento da impermanência sopra e ninguém pode detê-lo. Todos os que vivem, um dia perecerão. Todos que se encontram, um dia se separam. É a realidade da qual ninguém pode fugir.

信往生而称念，除此之外，别无他事。”释迦牟尼劝人们念佛，指示往生净土的道路。阿弥陀佛在极乐迎接，劝人们称他的名。现在，我遵从二尊的教诲，广开净土之门。

（法名），你将往生净土，我谨以一句为你送别：

月照八方无不至，唯宿仰望人心中。

引導（一般②）p51

● 英語

***Indō* (Funerary Verse Leading the Departed Loved One to the Pure Land)** ②

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

The transientness of our life is like a mirage. Once the wind of impermanence blows, no one can stop it. An absolute truth is that living things must die. An inevitable reality is that those who meet must part.

Here is a new life to be born in a lotus. [Name of departed], now I endow you with the Dharma name [posthumous name]. Listen carefully and ponder this well. There is no way superior to the recitation of the nenbutsu for departing from the delusive realms of reincarnation. Therefore our founder Hōnen Shōnin taught us, “There are numerous pure buddha lands in the ten directions, but we desire to be born specifically in the Western Pure Land of Amida Buddha because even those who commit the ten transgressions or the five grave offenses can be born there. Among all buddhas, we rely exclusively upon Amida Buddha because Amida will personally welcome nenbutsu devotees who recite *Namu Amida Butsu* a mere three or five times into the Pure Land. We choose the practice of nenbutsu over all other practices because the nenbutsu is in accordance with the essential vow of Amida Buddha. Now, if we desire birth in the Pure Land through the nenbutsu by relying

esistono altre ragioni e gli altri mezzi sono futili”.

Il Buddha Shakyamuni ci incoraggia a recitare il Nenbutsu e ci indica la vita da seguire per raggiungere la Terra Pura. E Amida Buddha ascolta le voci che invocano il suo nome per accoglie le persone dalla Terra Pura. Adesso, la Porta per la Terra Pura è ampiamente aperta, se verranno seguiti gli insegnamenti dei Due Onorati.

……. All’avvicinarsi della tua partenza verso la Terra Pura, ti dono una poesia di commiato:

“Sebbene la luna sia così luminosa, e irradia l’intera superficie della terra, solo chi la guarda con cuore calmo, verrà rischiarato dall’interno e sarà illuminato”.

● 中国語

**《引导・一般　①》**

究竟大乘淨土門　諸行往生稱名勝

我閣萬行選佛名　往生淨土見尊體

鲜花盛开于东升之旭日，又易谢于薄暮之悲风。生命如露水，结于夕夜，消于晨光。人们不知此理，常思永久之繁荣；人们不悟此道，常盼无尽之生命。然而，一吹无常之风，永灭有为之露。兹有新莲生，俗名（某某），授法号曰（某某）。

谛听谛听，善思念之。汝既得难得之人身，又遇难遇之本愿，已发难发之道心，将赴难赴之净土。阿弥陀如来怜悯末代众生，发四十八誓愿，其誓愿悉数成就，现在彼国。

其第十八愿有云：设我得佛，十方众生，至心信乐，欲生我国，乃至十念，若不生者，不取正觉。

如来光明遍照十方世界，摄取念佛众生不舍。

宗祖法然上人有云：“为往生极乐，唯称念‘南无阿弥陀佛’而无疑，坚

La gente spera nella vita eterna, poiché ignora la fragilità dell'essere umano.

Al contempo, quando soffia il vento dell'impermanenza, la vita scompare definitivamente come se fosse una goccia di rugiada.

Ecco, c'è una nuova vita che nasce in un loto d'altro mondo. Il suo nome secolare era Signor / Signora ..., ora ti conferisco un nome Dharma ...

Ascolta attentamente questo nome. Imprimilo nella tua mente e non dimenticarlo.

Nonostante sia estremamente difficile, tu sei nato come essere umano, hai incontrato il voto essenziale e hai risvegliato l'aspirazione alla nascita nella Terra Pura. Inoltre, ti sei distaccato dai mondi illusori della trasmigrazione e stai per nascere nella Terra Pura.

Poiché Amida Buddha soffre eternamente per gli esseri viventi (il periodo del declino del Dharma), stabilì i "quarantotto voti". Quindi, adempì questi voti e attualmente risiede nella Terra Pura.

"Il diciottesimo voto" dice:

"Dopo che avrò raggiunto il nirvana (sarò svegliato) (Buddhità), tutti gli esseri viventi (gli esseri viventi nelle dieci direzioni) che aspirano in tutta sincerità e desiderano nascere con fede nella mia terra pura, recitino il nome del Buddha anche dieci volte. Se io non rinascessi lì, allora non si potrebbe raggiungere l'illuminazione perfetta".

Le luci radianti del Buddha Amida illuminano l'universo intero (le dieci direzioni), cosicché tutto possa essere salvato. Il Buddha Amida non abbandonerà gli esseri che recitano il suo nome (il Nenbutsu).

Il nostro fondatore maestro Hōnen insegna:

"Recita il nome del Buddha Amida (il Nenbutsu) per raggiungere la Terra Pura, credi in modo fermo e senza alcun dubbio che nascerai nella Terra Pura: non

No décimo oitavo voto assumiu: “Se eu não acolher todos os seres sencientes das dez direções do cosmos, que desejarem de todo o coração nascer na minha Terra Pura, ao praticarem o Nenbutsu por até dez vezes, que eu não entre no estado de perfeita iluminação.”

A luz do Buda Amida ilumina todos os dez lados do cosmos, acolhendo a todos e principalmente aqueles que entoam o Nenbutsu.

O mestre Hōnen ensina a única forma de nascermos na Terra Pura, a prática do Nenbutsu. Devemos recitar o Namu Amida Butsu acreditando que nasceremos na Terra Pura.

O Buda Shakyamuni nos encoraja a entoar o nenbutsu indicando-nos o caminho para a Terra Pura. Do outro lado, a partir da Terra Pura o Buda Amida nos convida dizendo: invoque pelo meu nome. Ao atendermos os ensinamentos dos dois Budas, o portal da Terra Pura será amplamente aberto.

(nome), nesta caminhada, ofereço-lhe um poema de despedida:

O luar ilumina toda a terra, mas apenas aqueles que a comtemplam percebem o brilho e a sua beleza.

● イタリア語

**Requiem (Un’orazione funebre)** ①

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

Ora, anche se il fiorellino sboccia con grazia al mattino, sfiorirà alla brezza leggera del crepuscolo. Inoltre, anche le gocce di rugiada della sera scompaiono al sole del mattino.

La gente cerca sempre una vita prospera, poiché ignora la mutevolezza dell’essere umano.

Though the moon so bright lights the world's expanse, only those who earnestly gaze upon it are touched within are embraced by serenity.

● ポルトガル語

**Encaminhar para a Terra Pura ①**

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝

我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

As pétalas da bela flor que floresce durante a manhã são espalhadas pela brisa da noite, o orvalho da vida que se forma ao entardecer, desaparece com a luz do sol da manhã.

Inconsciente sobre a impermanência da vida, o ser humano sempre procura prosperar; não tendo conciencia da fragilidade da vida, tendemos a acreditar que a vida é eterna.

Quando sopra o vento da impermanência, a gota de orvalho desaparece por um longo tempo

(nome),  você que está prestes a nascer sobre a flor de lótus, concedo-lhe o nome búdico de: (  ).

Ouça com atenção e pondere bem sobre isso. Apesar de ser extremamente difícil, você nasceu como um ser humano, aprendeu sobre os caminhos budistas, quando encontrou o voto original do Buda Amida e despertou para nascer na Terra Pura.

Você se desapegou dos mundos ilusórios da transmigração e nascerá na Terra Pura.

Neste período da decadência do Dharma, o Buda Amida com sua compaixão pelos seres sencientes estabeleceu os quarenta e oito votos. Após cumprir todos os votos, passou a residir numa das Terras Puras.

The petals of the beautiful flowers that bloom in the morning gently scatter in the breeze of nightfall; the dewdrops of the evening disappear in the light of the morning sun. Unaware of the impermanence of life, human beings seek to prosper; unaware of the frailty of life, humans hope for longevity. However, once the wind of impermanence blows, life disappears as if it were a dewdrop.

Here is a new life to be born in a lotus. In this life, we knew you as [name of departed one], now I endow you with the Dharma name [posthumous name]. Listen carefully and ponder this well. You were born a human being, and encountered the essential vow to be awakened to the aspiration of birth in the Pure Land, despite the extreme difficulty of this. You have detached yourself from the delusive worlds of transmigration and are being born into the Pure Land. With his compassion toward sentient beings in this period of the decline of the Dharma, Amida Buddha fulfilled his forty-eight vows and now resides in the Pure Land.

In the eighteenth vow, Amida said, "After I have attained Buddhahood, should any of the sentient beings in the ten directions, who aspire in all sincerity and faith wishing to be born in my land, recite my name even ten times and not be born there, then may I not attain perfect enlightenment."

Amida's radiant light universally illuminates the realms in the ten directions, embracing all and forsaking none who recite his Name.

Our founder Hōnen Shōnin taught us that to be born in the Pure Land, we need only to call upon Amida Buddha's Name without doubt. Shakyamuni Buddha also encouraged us to call Amida's Name, showing us the way to the Pure Land. And from there, Amida Buddha hears our calling and welcomes us. Now the Gate of the Pure Land is wide open according to the teachings of the Two Honored Ones.

~~~~~, for your departure, I offer a poem as a farewell gift:
~~~~~

令和５年度　海外開教区用儀式文例作成　研究成果報告

# 海外開教区用儀式文例作成

本研究は、浄土宗発行『浄土宗書式文例集』の引導と表白を英語、ポルトガル語、イタリア語と中国語に翻訳した。

ｐ○○は『浄土宗書式文例集』のページを表す。

英語訳：石川広宣、市川定敬
ネイティブチェック：原真理、ウィルソン哲雄
ポルトガル語訳：田中芳道、稲場ペドロ
ネイティブチェック：稲場ペドロ、田中芳道
イタリア語訳：前田信剛
ネイティブチェック：ミンニチェッリ・エツィオ
中国語訳：林雅清
ネイティブチェック：陳駿千

（敬称略）

## 引導・香語

引導（一般①）p50

● 英語

***Indō* (Funerary Verse Leading the Departed Loved One to the Pure Land)** ①

究竟大乗浄土門　諸行往生称名勝
我閣万行選仏名　往生浄土見尊体

ついて提言をした。第５章では青壮年層の宗教意識に基づき、広報という視点を含めながら青壮年層教化の「マネジメント戦略」について論考した。第６章では全国浄土宗青年会が推進活動として展開した「慈悲つむぎ法要･セミナー」に関する効果について報告をした。

本研究は社会部からの委託研究であり、一宗が今後の施策を考えるうえでの基礎的資料という性格も強く、本報告は理念的な内容が多く含まれる。しかし、各寺院が参考にできる青壮年層教化事例を集め検索できる一覧も公開したので、是非多くのご寺院に活用していただき教化にお役立ていただきたい。

今期の研究では、前期に作成した「慈悲つむぎ法要・セミナー」の効果測定も行った。体験的法要と視聴覚資料を用いた教化資料が広い年齢層に効果的であることが明らかになり、青壮年層教化にも有効であることが見込まれる。ただし、アンケートを通じて、セミナー資料への改善点も明らかとなったので、次期の研究において検討を加え、より広く活用いただけるよう改善する予定である。

最後になるが、浄土宗・寺院の将来を見据えると、一刻も早く教団を挙げてこの問題に取り組む必要があるのは明らかである。その際に大切なのは、既存の檀信徒のみならず、檀信徒以外にどのようにアプローチをしていくかである。檀信徒以外へのアプローチを考える際には､「教化」という言葉を広く捉え、まずは「浄土宗ファン」を育てることが必要となろう。誰に対してどのようにアプローチをし、どのような成果をもって「教化」が成功したと捉えるか（例えばメールアドレスの登録者数）など、慎重に見定めておくことも肝要であろう。

## ４．まとめ

本章では、「慈悲つむぎ法要セミナー　実践マニュアル」を用いての実践報告として、全浄青による青壮年層檀信徒教化推進事業より寄せられた実施報告書並びにアンケート結果を報告した。

実施報告書やアンケート結果からは、慈悲つむぎ法要セミナーへの評価は概ねよかったが、いくつかの課題も見られた。まず全浄青では青壮年層をターゲット層としつつも、実際の参加者の多くは高齢者層となっており、青壮年層へのアプローチの難しさが伺えた。また内容面についても、初学者には難しいと感じることがあったようである。初学者、特に寺院との関わりをほとんどもってこなかった層への教化を念頭にいれると、専門用語を極力排除し、わかりやすい表現を心がける必要があるだろう。また慈悲つむぎ法要セミナーを帰敬式の一歩手前の入門と位置付けていることを考慮すると、より簡単な説明、手短な説明にとどめるのも一手であるかもしれない。

## おわりに

主務　名和清隆

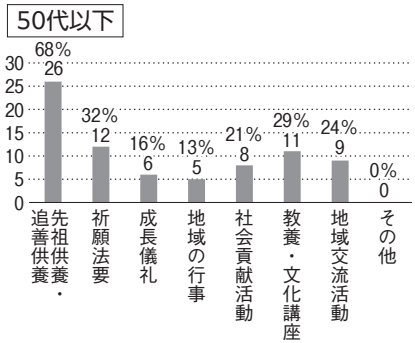
ここまでにおいて青壮年層教化の可能性について、多方面より検討を加えてきた。第１章では教化を「直接的教化」と「間接的教化」とに分類し、檀信徒のみならず、それ以外のターゲットへの教化の可能性について言及をした。また本研究班で収集した「青壮年層向け教化活動事例リスト」について紹介をした。

第２章では、他教団で行われている取り組みを分類し、その特徴について言及をした。第３章では、教団として青壮年層教化に取り組んでいる２つの教団の事例を紹介した。第４章では、教育機関における青壮年層教化の可能性に

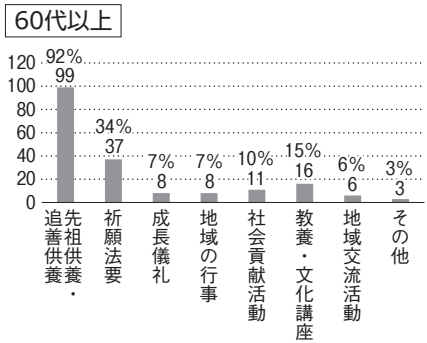
「教養・文化講座」の順であったのに対し、智慧結び法要アンケートでは「祈願法要」26 票「先祖供養・追善供養」21 票「成長儀礼」18 票の順となっている。智慧結び法要は子どもの成長儀礼、祈願法要であることがアンケートにも反映されているとも考えられるが、智慧結び法要を受けた世代（あるいは受けさせた親世代)、つまり青壮年層では「先祖供養･追善供養」よりも「祈願法要」「成長儀礼」への期待感が強いということも言えるだろう。

また試みに本アンケート Q10 を年代別に分けると、「先祖供養・追善供養」の回答が 60 代以上では 92％にのぼるのに対し、50 代以下では 68％に留まる。60 代以上は「先祖供養・追善供養」を現に行っている世代であることから数値が高くなっていると思われる。一方 50 代以下で「先祖供養・追善供養」を求める声が低くなっていることは、これまでの檀家制度、寺院運営を見直し、他の活動もしていかなければ、青壮年層の要望に応えることはできないということであろう。これからの寺院のあり方を考えるにあたり、次世代というターゲット層を意識して活動していくことは、非常に重要なこととなっていくだろう。

Q7 お寺でどのような活動を増やしてほしいか




回答数38




回答数108

なお自由回答欄には、「改めて浄土宗に触れる良い機会になりました」「今日は初めて参加させて頂き大変勉強になりました。良い体験をさせていただきましてありがとうございました」などの好意的意見が多くあった。また「通常の法要や法話を基本とし、新しいスタイルの法要もたまに取り入れることは、檀信徒側にも学びが多く、マンネリにならず心から参加してよかったと思える内容だった」「今までにない事にふれられて良かった」など、通常とは異なる法要を評価する声も多数あった。一方、「もう少し若者向けに簡単な説明が欲しい」など、セミナー内容を難しいと考える声も見られた。

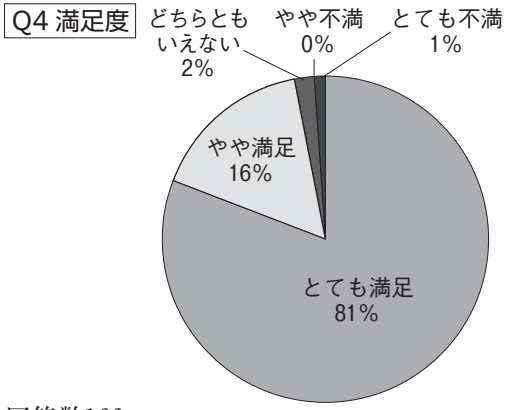
### 3-3. アンケート分析

平成29年度に作成した「子どもの成長儀礼実践マニュアル」を用いて、全浄青では平成30年度～令和元年度に仏式通過儀礼推進事業を行っている。そこでの智慧結び法要開催寺院アンケート・受者アンケート（「次世代継承に関する研究　成果報告」（教化研究31号、2020年）所収）にて、本アンケートと同様の質問を行っているので、ここで比較検討していこう。

開催寺院アンケートでは、Q10「開催、準備にあたりご苦労された点は何ですか？上位3点お答えください。」（1位3ポイント、2位2ポイント、3位1ポイントとして集計）について、慈悲つむぎ法要アンケートでは「本堂のしつらえや仏具の飾り付け」「セミナー講義の事前練習」「参加者募集」の順であったのに対し、智慧結び法要アンケートでは、「参加者募集」13ポイント「広報（告知法要）」6ポイントが上位にきており、ターゲット層が青少年層であるか青壮年層（高齢者層を含む）であるかの差異がアンケート結果に影響を与えていると考えられる。

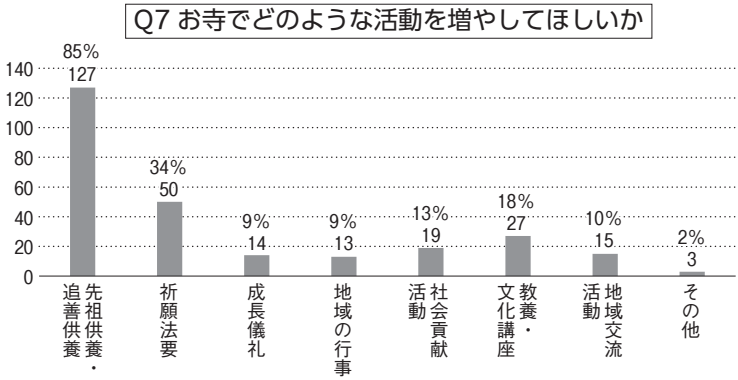
参加者用（受者）アンケートでは、Q7「今後、「お寺」のどのような行事に参加したいと思いますか？あてはまるものすべてに○を付けてください。）」で同様の質問をしており、本アンケートでは「先祖供養・追善供養」「祈願法要」

Q4「今回の慈悲つむぎ法要に参加しての、ご自身の満足度をお聞かせください」では、「とても満足」「やや満足」を合わせると 97% となり、満足度は高かったといえよう。

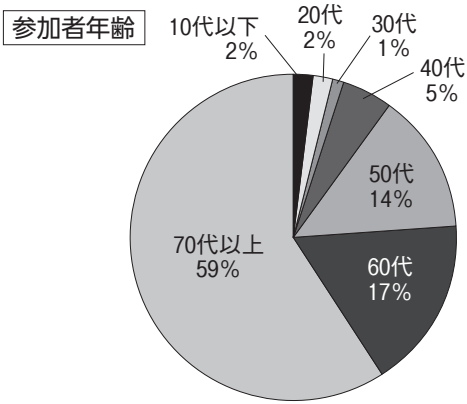



回答数166

Q7「今後、「お寺」のどのような行事に参加したいと思いますか？あてはまるものすべてに○を付けてください。)」では、「先祖供養・追善供養」が 127 票と最も多く、「祈願法要」50 票、「教養・文化講座」が 27 票と続いている。

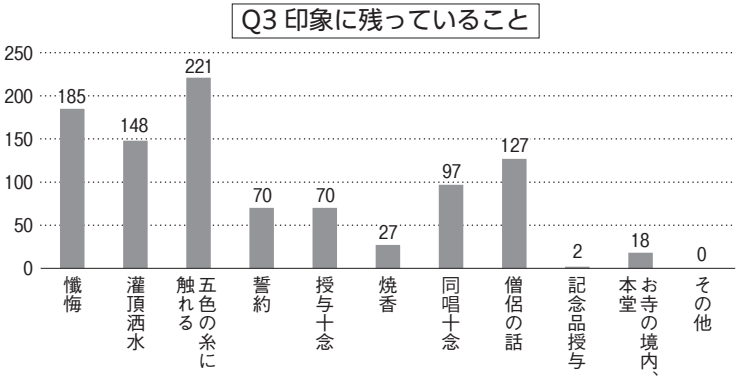



回答数149




回答数174

Q3「本日の法要で印象に残っていることは何ですか？（下記の選択肢の中から上位３点をお答えください。）」（1位３ポイント、２位２ポイント、３位１ポイントとして集計）では、「五色の糸に触れる」が221ポイントで最も高く、「懺悔」185ポイント、「灌頂洒水」148ポイントと続いた。五色の糸や灌頂洒水といった体験型の作法だけではなく、懺悔（自らを省みる）という心身の行為に印象が残っていることは非常に興味深い結果といえる。




回答数170

に対し、それぞれ「やや悪かった」「やや不満」も1票ずつ見られた。またQ14「慈悲つむぎ法要・セミナーは、檀信徒の次世代への信仰継承に有効だと思いますか？」では、「とてもそう思う」「ややそう思う」が総数10票中6票にとどまり、「どちらともいえない」3票、「そうは思わない」1票となっている。

また参加者の反応について自由回答欄には、「話（セミナー）が良かった」「いつもの様に法話だけでなく体感的でわかりやすい内容だった」「普段とは違う法要で喜んでいる方は多かった」「映像があり分かりやすかった」といった好意的意見が多かったが、当日困ったことや改善点を聞いたところ、「時間が長かった」「読み原稿の量、PPTページ数が多すぎる」「内容が詰め込みすぎなのと感動の押しつけに見える」といった時間面・分量面などでの課題や、「次世代の方に参加いただくための広報などの取り組みが必要だが難しい」「告知や広告が遅かったことがあり、参加者を思ったより広くは募れませんでした」など広報面での課題も挙げられた。その他の意見として、「自分の感覚でしかないが檀信徒は教義的な細かい知識を知りたい訳ではないと感じている。後々記憶に残るのは結局、体を動かして触れたこと体験した事だと思う。そういう意味では御手糸縁つなぎは参加の動機づけになりやすい」といった回答もあり、セミナーよりも体験できる法要を評価する声もあった。

### 3-2. 参加者用アンケートについて（回答総数176）

参加者用アンケートでは、回答者の基本情報、慈悲つむぎ法要で印象に残っていること、法要の満足度、慈悲つむぎセミナーの評価、満足度、お寺でどのような活動をしてほしいか等を質問した。その中より抜粋して紹介する。

まず参加者の年齢分布は、「60代」「70代以上」を合わせた高齢者層が76%と全参加者の4分の3を占めており、既存檀信徒のメイン層の参加が多くなった。青壮年層檀信徒教化推進事業として全浄青では勧奨したものの、実際に青壮年層を呼び込むことは困難であったことが伺える。

修差定・式次第・表白」が総数 11 票中 2 票となり、差定・表白はほぼすべての回答者が実際に使ったと回答し、「法要セミナー紹介動画」は総数 11 票中 5 票となり、視聴覚資料も確認いただいているようである。Q8-2「どの資料を実際にお使いになりましたか？（セミナーに関する資料）」については、「講義用パワーポイント」が総数 11 票中 8 票に対し、「講義読み原稿」総数 11 票中 5 票、「講義動画」総数 11 票中 4 票、「配布レジュメ」総数 11 票中 4 票となり、利用頻度から鑑みると、読み原稿などよりもパワーポイント資料の方が需要が高いと推測される。

続いて Q9「実践マニュアルに付け加えたことや略したこと、または工夫をしたことはありますか？」に対し、「はい」が総数 11 票中 5 票とおよそ半数あった。具体的には、「次第、差上、表白の一部変更、pp 内容の加筆、削除など」「所定時間内におさめるため、適宜省略しました」「時間内に終わらせる必要があり、早足で原稿を読んだ」など省略することが多かったようだ。また「児童を含む形での開催としたため、説示の文言、表現などを調整」「檀信徒以外の参加者が多かったため、宗の歴史や教義の部分や懺悔式を略した」など参加者の属性に合わせた調整も適宜されていたようである。

Q10「開催、準備にあたりご苦労された点は何ですか？上位 3 点お答えください。」（1 位 3 ポイント、2 位 2 ポイント、3 位 1 ポイントとして集計）という質問では、「本堂のしつらえや仏具の飾り付け」が 19 ポイントと最も高く、「セミナー講義の事前練習」が 14 ポイント、「参加者募集」が 12 ポイントとなった。普段とは異なる設え、普段とは異なり法話ではなくセミナーを行うということに、苦労を感じられることが多かったようだ。

Q12「開催してみて、参加者の反応はいかがでしたか？」、Q15「今回、慈悲つむぎ法要・セミナーを開催した、ご自身の満足度をお聞かせください。」に対しては評価が分かれた。Q12 では、「とても良かった」「やや良かった」が総数 11 票中 9 票、Q15 では「とても満足」「やや満足」が総数 11 票中 8 票

に多くご参加いただいた」という意見があり、告知方法や参加募集に工夫を加えることで、新たな層の開拓につながる可能性が見えた。また「今回の法要を機縁として、秋彼岸法要・十夜法要に参詣に来る檀信徒がいたことから、効果は絶大だった」という声もあることから、一度でも法要セミナーに来ていただければ、次回につながっていくだけのポテンシャルを秘めているということも言えよう。

## 3．アンケート結果報告

全浄青による推進事業としての慈悲つむぎ法要セミナーでは、開催時にアンケートの協力をお願いし、少数ながら回答を得られた。アンケートは開催寺院用アンケートと参加者用アンケートの2種類がある。ここでアンケートから抜粋して集計結果を報告する。なお、開催寺院用アンケートは回答総数が11票であるため、グラフ化は控えた。

### 3-1．開催寺院用アンケートについて（回答総数 11）

開催寺院アンケートでは、慈悲つむぎ法要セミナーの開催形式や参加者数といった基本情報に加え、どのセミナーを行ったか、『慈悲つむぎ法要・セミナー実践マニュアル』の評価、ダウンロード資料の使用有無、苦労した点、広報活動について、参加者の反応、慈悲つむぎ法要セミナーの有効性等を質問した。

まずQ7「『慈悲つむぎ法要・セミナー実践マニュアル』は役に立ちましたか？」に対し、総数11票中10票が「とても役に立った」あるいは「役に立った」であり、1票は「どちらともいえない」であった。浄土宗総合研究所からダウンロードできる資料については、すべての方が利用になり、Q8-1「どの資料を実際にお使いになりましたか？（法要に関する資料）」に対し、「慈悲つむぎ法要・セミナー実践マニュアル」が総数11票中10票、「法要差定」と「法要表白」が総数11票中8票、「法要式次第」が総数11票中7票、「十夜法要併

うこともあり、「慈悲をつむぐってどういう意味？僧侶側でも共通認識を持つ必要ある」という意見があり、意味・内容まで十分に浸透していたとは言えない状況であった。マニュアルで詳しく解説してはいるものの、ニューワードを用いる際はより簡潔でわかりやすい説明も必要となってくるであろう。

②慈悲つむぎセミナーについて～視聴覚資料・体感型セミナーの効果～

これまでの伝統的な法話とは異なり、プロジェクタースクリーンを使用した慈悲つむぎセミナーは、「普段は使用されないプロジェクタースクリーンに見入っていた」など概ね高評価であり、視聴覚資料を用いたセミナーの有用性が確認された。また「体感型のセミナーでは、映像を見る、音を聞く、香の香りを嗅ぐといった刺激で退屈しない仕掛け」といった意見のように、第三講では聞くだけではなく、参加者も体感できるセミナーとしていたことも、興味を引く内容であったと思われる。

このほか「セミナーでは保護者を本堂に集め、会員による前説の後、プロジェクターでの動画視聴を行った。その間、子どもは写経・念珠づくりを行った。主催側の人数も少ない中、動画が用意されていることで、人的負担が軽減されたのが有難かった」という意見があり、子供信行道場にて保護者向けに行う慈悲つむぎ法要セミナーも確認された。慈悲つむぎ法要セミナーのターゲット層である青壮年層へのアプローチの好事例であり、今後も子供信行道場の保護者に向けた教化方法は検討していくべきであろう。

③告知や参加募集について

告知や参加募集について、ほとんどの事例では寺報等での告知やチラシの郵送、寺院への掲示であり、SNS 等を用いた幅広い層への告知は行われていないようであった。ただし新盆などのターゲットを絞って案内した場合、「新盆を迎える檀信徒へはがき連絡したところ、普段はあまり顔を出さない檀信徒

表1

| No. | 開催教区 | 開催形態 | 場所 | 日時 | 参加者数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 北一 | 単独 | 北一教区内寺院 | R4.6.23 | 10 |
| 2 | 北一 | 新盆供養併修 | 北一教区内寺院 | R4.8.7 | 20 |
| 3 | 北二 | 定期法要併修 | 北二教区内寺院 | R4.9.25 | 20 |
| 4 | 北一 | 定期法要併修 | 北一教区内寺院 | R4.10.30 | 100 |
| 5 | 群馬 | 定期法要併修 | 群馬教区内寺院 | R4.11.26 | 60 |
| 6 | 岐阜 | 国際交流事業併修 | 岐阜教区内寺院 | R4.12.4 | 18 |
| 7 | 長崎 | 檀信徒研修会併修 | 長崎教区内寺院 | R4.12.9 | 49 |
| 8 | 北二 | 単独 | 北二教区内寺院 | R4.12.25 | 15 |
| 9 | 秋田 | 新盆供養併修 | 秋田教区内寺院 | R5.6.11 | 19 |
| 10 | 北一 | 吉水講詠唱奉納大会併修 | 北一教区内寺院 | R5.7.3 | 40 |
| 11 | 長野 | 新盆供養併修 | 長野教区内寺院 | R5.7.9 | 52 |
| 12 | 新潟 | 新盆供養併修 | 新潟教区内寺院 | R5.7.22 | 39 |
| 13 | 三州 | 子供信行道場併修 | 三州教区内寺院 | R5.8.23 | 25 |
| 14 | 滋賀 | 単独 | 滋賀教区内寺院 | R5.9.24 | 45 |
| 15 | 千葉 | 単独 | 千葉教区内寺院 | R5.9.24 | 25 |
| 16 | 石川 | 単独 | 石川教区内寺院 | R5.10.21 | 8 |
| 17 | 岡山 | 檀信徒研修会併修 | 岡山教区内寺院 | R5.11.7 | 100 |
| 18 | 栃木 | 定期法要併修 | 栃木教区内寺院 | R5.11.12 | 80 |
| 19 | 兵庫 | 定期法要併修 | 兵庫教区内寺院 | R5.11.18 | 33 |
| 20 | 鳥取 | 定期法要併修 | 鳥取教区内寺院 | R5.11.22 | 20 |
| 総計 | | | | | 778 |

た」という阿弥陀仏とのつながりを喜ぶ声のほか、「法要では普段入ることのできない内陣で、ご本尊とつながる五色の糸に触れる」というように、通常とは違う体験を提供することで、マンネリ化を防ぐという効果も見られた。また「五色の糸の先に匂い袋をつけ、それと同じ香の小さな匂い袋を記念品として持ち帰ってもらう」などのように、得た体験をそのまま記憶として留めるために、記念品に工夫を凝らす事例も見られた。

なお「慈悲つむぎ」という言葉は当研究班が生み出したニューワードとい

のような状況下、寺檀関係をいかに継続し、念佛の信仰をいかに継承していくかは喫緊の課題である。そこでターゲット層である青壮年層檀信徒を中心に浄土宗檀信徒としての心構えを持っていただくことを目的として、浄土宗総合研究所と協力し、「慈悲つむぎ法要」ならびに「慈悲つむぎセミナー」を推進し、次世代への信仰継承を目指す。

〈概要〉2ヵ年中にすべての教区での開催を勧奨し、助成を行う。また各教区青年会より、実施後報告書並びにアンケートを提出していただき、成果報告とする。

（第27期全国浄土宗青年会令和4年度事業計画より抜粋）

以上のような経緯から、全浄青より「青壮年層檀信徒教化推進事業実施報告書」ならびに「慈悲つむぎ法要セミナーアンケート（開催寺院用）」・「慈悲つむぎ法要セミナーアンケート（参加者用）」の提供を受けた。この2ヵ年で、全浄青による推進事業としては、慈悲つむぎ法要セミナーは、すべての教区での開催という目標には到達しなかったものの、各地において計20回開催された。表1のとおり、開催地区は全国各地に渡り、参加者数は総計約778名にも及び、大きな広がりを見せた。

## 2．実施報告書から見える現状と課題

「青壮年層檀信徒教化推進事業実施報告書」では、多くの私見や感想も寄せられた。これらから現状と工夫、また課題を紹介したい。

### ①慈悲つむぎ法要について～体験型法要への好印象～

実施報告書に寄せられた慈悲つむぎ法要への意見は概ね好印象で、特に五色の糸に触れる体験について共感を得る感想が数多く見られ、「五色の糸は天井等に吊るすことによって、糸が目立ち、阿弥陀様と直接繋がっていることがよく見えるようになった」「実際に弥陀と繋がったと思える体験が印象深かっ

を発刊し、法然上人のみ教えを伝える機縁として、阿弥陀仏・法然上人と縁を結ぶための新たな儀礼である「慈悲つむぎ法要」、および浄土宗の教えや仏事の基礎知識などを簡易に伝える、５コマからなる「慈悲つむぎセミナー」を提案した。法要という体験的理解とセミナーでの知的理解の両面で、受者への「心での理解」へと導くことを目的としたのである。

この慈悲つむぎセミナーは視覚的資料を多く使用し、様々な状況で使用できる教化資料であり、幅広い年齢層への教化に資するものである。むろん映像資料に慣れ親しんだ青壮年層に向けての有益な教化資料となるであろう。第27期全国浄土宗青年会はこの「慈悲つむぎ法要・セミナー実践マニュアル」を活用し、青壮年層教化推進事業を展開した。

## １．全浄青による推進事業について

第27期全国浄土宗青年会では、当研究班と連携し、「青壮年層檀信徒教化推進事業の勧奨及び実施」を活動計画に盛り込み、令和４～５年度の２ヵ年に渡り、社会教化事業の一環として、青壮年層檀信徒教化推進事業を行った。その目的と概要は以下の通りである。

〈目的〉現在、葬送や墓制に対する意識変化、また居住地の拡散化や３世代同居率の低下に伴い、家庭内の信仰継承が困難な状況となっている。こ

## 第６章　「慈悲つむぎ法要セミナー　実践マニュアル」を用いての実践報告

石上　壽應

### はじめに

本研究班ではこれまで、子どもを対象とした「寺院における子どもの成長儀礼」、檀信徒の次世代を対象とした「慈悲つむぎ法要、セミナー」を提案してきた。青壮年層教化を「直接的教化」と「間接的教化」とを含め広く捉えるならば、これらの成果物はともに青壮年層教化に資するものと言えるであろう。

寺院における子どもの成長儀礼を提案した「子どもの成長儀礼実践マニュアル」（平成 30 年 3 月）では、寺院における子どもの成長儀礼の普及を目指し、寺院での七五三法要、また新たな学業成就の法要である「智慧むすび法要」を提案した。

子どもの成長儀礼に着目した理由は、成長儀礼が祖父母・親・子どもの三世代、さらには両家族にわたって寺院に来る機会となり、次世代に信仰を継承する一つの契機となるからである。この意味において、子どもを介しての青壮年層への教化の入り口と位置付けることができるだろう。また檀信徒以外の層に参加いただける好機ともなり得ることは言うまでもない。なお、第 26 期全国浄土宗青年会は、子どもの成長儀礼を推進事業として採択し普及に努めた。

また本研究班は「慈悲つむぎ法要･セミナー実践マニュアル」（令和 4 年 3 月）

用途例：法要や法話などの動画配信・行事案内等の発信

主な年齢層：40 ～ 50 歳代

⑤ YouTube

利点：長時間の動画配信ができる、利用者が多い

用途例：法要や法話などの動画配信・遠方の檀信徒の年忌法要配信（限定公開）

主な年齢層：全世代

⑥ LINE

利点：全世代幅広く利用者が多い、個人への発信ができる

用途例：檀信徒への行事案内の一斉送信や年忌法要の受付

主な年齢層：全世代

## ３．まとめ

青壮年層への次世代継承のためには、まずは認知度の高い仏教行事や仏教文化を活用し、普段関わりのない人でも仏教や浄土宗の教えに触れてもらうきっかけを作ることが重要である。その具体的な内容は、各教団・寺院・僧侶からの積極的な発信が必要であり、さらにインターネット（SNS）を活用し、青壮年層に馴染みのある SNS を使い分けながら、より多くの人の目に触れられる機会を作ることで、個々への発信を行なう必要がある。

きちんと「ジャンル分け」と「伝え方の変更」を行ない、それぞれの年齢層に合わせて SNS を使い分けることで、受け取った側にも「“ 私個人 ” に伝えようとしてくれている」という当事者意識が芽生えるのではないだろうか。それにより従来受け身であった仏教との関わり方を、自発的に関わっていこうという意識を持ってもらうことが重要であり、ただ単純に目についた対策を行なうのではなく、情報を発信する相手のことを考えて行うことが次世代継承のための “ マネジメント戦略 ” であると考える。

⑷インターネット（SNS）の活用

以上のように、様々な視点から考えられる具体的対策を挙げてきたが、最終的にはこれらの情報を普段寺院と関わりのない人々にも伝える手段が必要である。青壮年層の大半がスマートホンを所持している現在において、インターネット、特にSNS（Social Networking Service）は最も手軽に多くの人の目に触れやすい布教ツールであると考える。ホームページを作成するには一定数の費用が必要となるが、SNSであれば大きな費用をかけず、普段仏教に興味の無いような不特定多数の人にも発信することができる。しかし、SNSにはそれぞれ活かせる用途と利用する年齢層が異なるため、発信する内容や受信する年齢層によって使い分ける必要がある。一例であるが、以下に実際のSNSにおける利点、用途例、主な年齢層を挙げる。

① X（旧 Twitter）

利点：リアルタイムで最新情報を得ることができる、閲覧者が情報を拡散できる

用途例：行事案内やイベントなど最新情報の発信

主な年齢層：20 ～ 40 歳代

② Instagram

利点：写真を中心に見映えを意識した視覚情報を発信できる

用途例：境内や行事の写真や短い動画の発信

主な年齢層：10 ～ 20 歳代

③ TikTok

利点：若い世代が親近感を感じやすい情報発信ができる

用途例：音楽に合わせ寺院や行事の紹介動画の発信

主な年齢層：10 歳代

④ Facebook

利点：壮年層や企業に向けた情報発信ができる

jodoshu-koninji.com/

（絵画を得意とした僧侶によって描かれた華やかな御朱印を求めて、檀信徒以外にも寺院に来てもらう機会を作ることができる。）

…教学、布教、法式、絵画、IT など、僧侶それぞれの得意分野に合わせた内容を発信し、僧侶自身の特技を活かした活動を行なう。

⑶伝え方の変更

「ジャンル分け」では、発信者に合わせて講ずべき対策を変更する必要性を提示したが、受信者に合わせて表現を変更する必要もあると考える。具体的には以下のような例が挙げられる。

・年齢層に合わせて言葉選びや表現を変える

・子供や青年層が興味を示すイラスト、映像、音楽の使用

【参照】浄土宗発行ポスター（https://jodo.or.jp/poster/）

⇒各年齢層の目を引くイラストや写真を使い分け、提示する文章等も年齢に合わせて変更している。

ぬりえリーフレット（https://jodo.or.jp/nurie-lf/）

⇒仏教の様々な行事に関連するイラストを子供が好むぬりえとして作成し、ぬりえをする子供やその親にも仏教について触れる機会を作っている。

・青壮年層（はたらき世代）が関心のある内容について触れる

【参照】「浄土宗からのおやすみなさい」公式チャンネル浄土宗

（https://www.youtube.com/@user-mz1rr8rb4j/）

⇒青壮年層、特に仕事をしている忙しい世代にとって癒しになるような落ち着いた寺院の動画を発信することで、寺院や仏教への興味を促している。

・日常勤行のYouTube配信（東京教区江東組） https://youtu.be/j9wBEBsovcQ
（見る機会の少ない複数の僧侶による勤行を誰でも見ることができる。）
・子どもの成長儀礼、慈悲つむぎ法要（浄土宗総合研究所）https://jsri.jodo.or.jp/
（研究機関だからこそ収集できる知識や情報を扱った研究成果を発信できる。）
…組織単位だからこそできる比較的大規模な対策が考えられ、組織に所属する僧侶や職員らの得意とする分野で様々な対策を行なう。

②各寺院
・七夕祭り（大本山増上寺） https://www.zojoji.or.jp/event/ev_tanabata.html
（増上寺大殿と東京タワーという見映えのある立地を活かした催しを行ない、普段関心の低い人にも寺院に来てもらう機会を作ることができる。）
・寺ヨガ（光明寺・福島教区） https://www.instagram.com/aizubange_koumyouji/
（ヨガと親和性の高い雰囲気を有する本堂を利用して、檀信徒以外にも寺院に来てもらう機会を作ることができる。）
…寺院の立地や周辺地域の環境、本尊や所蔵する仏像などの歴史的価値や形相、本堂の広さや雰囲気など、各寺院が持つ特色を活かした行事などを行なう。

③各僧侶
・仏教入門講座の開催（常徳寺・東京教区） https://www.jotokuji.or.jp/bukkyoukouza.html
（教学に精通した僧侶によって仏教を分かりやすく学べる講座が開催できる。）
・凝ったイラストを付した御朱印（興仁寺・福島教区） https://www.

⇒「除夜の鐘」という大晦日の定番である認知度の高さに加え、動画による迫力と特徴的な打ち方も相俟って毎年高い再生回数となっており、注目度の高さが窺える。

・「仏前結婚式」という認知度の高い仏教行事を利用

徐々に認知度が高まってきている仏前結婚式を自身の寺院で行なえることを宣伝する。

【参照】道往寺の結婚式（http://www.dououji.com/marriage/）

⇒仏前結婚式の写真を多く掲載し視覚的に伝えることで、一般化している教会式とは異なる仏前結婚式の魅力を宣伝している。

以上のように、認知度の高い仏教文化や仏教行事を活用することで、普段は寺院と関わりのない人でも仏教や浄土宗の教えを体験するきっかけを作る必要があると考える。

では次に、各教団・寺院・僧侶それぞれがどのような対策を行なうことが適切であるか、その方法として「ジャンル分け」と「伝え方の変更」を提示する。

⑵ジャンル分け

ジャンル分けとは、発信側の環境や特色、得意分野などに合わせた内容を発信することである。各教団・寺院・僧侶によってどのような対策を講じることができるか、具体例を挙げながら提示する。

①各教団（宗・教区・教化団など）

・開宗 850 年慶讃事業（浄土宗）https://850.jodo.or.jp/

（宗全体の事業として大規模な企画や催しを行なうことができる。）

人にも浄土宗の教えについて知ってもらうきっかけを作る必要があると考える。さらに「念仏」、「阿弥陀仏」、「極楽浄土」、「法然上人」というような浄土宗で布教すべきことをより多くの人に知ってもらうことで、「〇〇と言えば浄土宗」というイメージを定着させることが重要ではないだろうか。具体的には以下の浄土宗の事例が挙げられる。（以下、URL の最終確認日は 2024 年 3 月 15 日とする。）

・「合掌」という認知度の高い仏教文化を利用
　合掌の仕方について動画で解説し YouTube で配信をする。
【参照】浄土宗善立寺 on YouTube「[ お坊さんが実演 ]2 分で分かる浄土宗の合掌と数珠の掛け方」（https://youtu.be/Y8_1bhFyUTg?si=3gt4qrePb9u0ZZIp）
⇒合掌の仕方や数珠の扱い方を動画によって実践的に分かりやすく解説しており、さらに数珠の歴史について触れながら浄土宗における念仏についても説明している。

・「極楽」という認知度の高い仏教文化を利用
　極楽の様相を描いた仏教美術の展覧会を開催・宣伝する。
【参照】中将姫と當麻曼荼羅―祈りが紡ぐ物語―（奈良国立博物館）（https://www.narahaku.go.jp/exhibition/special/202207_chujo/）
⇒中将姫という物語性のある要素を交えることで関心を集め、極楽の様相や浄土宗にも深く関わりのある仏教美術を多くの来場者が楽しむ展覧会となった。

・「除夜の鐘」という認知度の高い仏教行事を利用
　大晦日に除夜の鐘をたたき、またその様子を YouTube 等で配信する。
【参照】知恩院 除夜の鐘 2022（https://www.chion-in.or.jp/special/joya/）

| | 観光 | お寺の由緒を調べる | 法要の依頼 | ご朱印 | 葬儀の事前相談 | お墓の有無や募集状況を調べる | その他 | 閲覧することは無い |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 11.8 | 11.5 | 4.8 | 2.9 | 2.8 | 2.7 | 0.6 | 76.9 |
| 一般 20 代 | 18.5 | 8.7 | 0.7 | **6.1** | 1.6 | 1.3 | 0.1 | 75.8 |
| 一般 30 代 | **20.8** | 11.8 | 3.2 | **6.6** | 1.4 | 2.1 | 0.4 | 72.4 |
| 一般 40 代 | 17.2 | 10.3 | 2.7 | 1.8 | 1.7 | 2.1 | 0.4 | 76.5 |
| 仏教信者 20 代 | **19.4** | **17.7** | **12.4** | 4.7 | **5.1** | **8.9** | 0.1 | 60.3 |
| 仏教信者 30 代 | 16.8 | 13.8 | 6.7 | 5.3 | **5.1** | 4.5 | 0.5 | 68.4 |
| 仏教信者 40 代 | 13.9 | 14.8 | 7.2 | 3.2 | 2.7 | 5.5 | 0.3 | 70.9 |

図４　寺院ウェブサイトへの閲覧

どの層も「閲覧することは無い」と答えた人が大半であるものの、青年層を中心にウェブサイトの閲覧数が比較的やや高い傾向（図４下線部）にあることが分かる。

以上のことから、青壮年層への次世代継承において、仏教行事や仏教文化の認知度が高い点、従来の信仰のきっかけは受動的である点、青年層のインターネット利用の多さに注目すべきであると考える。

## ２．次世代継承のマネジメント戦略

以上のことを踏まえ、次世代継承のためにどのような対策を行なうべきかを浄土宗の事例を取り上げながら考察する。

### ⑴認知度を活かした布教

仏教行事や仏教文化の認知度の高さを利用し、普段は寺院と関わりのない

### ⑶　仏教への関心と満足度

仏教信仰者の信仰のきっかけについての調査（「仏教に関する実態把握調査（2022 年度）」参照）では、「家の宗教が仏教だったので（特にきっかけはない）」と答えた人が 62.6％と過半数を占めており、「身内の方の死」をきっかけとする人が 29.7％、「僧侶の法話を聞いて」という人が 12.8％、「仏教に関する書籍を読んで」という人が 7.3％、「学校で学んだ結果」と答えた人が 5.1％となっている。つまり信仰のきっかけは仏教への自発的な関心ではなく、家が仏教徒だっただけにすぎず、関わり方は受動的であることが考えられる。

さらに菩提寺のある人がどのくらい菩提寺に対して満足度を持っているかという調査（「仏教に関する実態把握調査（2021 年度）」参照）では、「満足している」と答えた人の割合は全体で 54.4％となっており、満足している人の地域・年代別の割合は以下の通りである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 都会 | 20・30 代…56.1％ | 地方 | 20・30 代…53.0％ |
| | 40・50 代…51.3％ | | 40・50 代…48.3％ |
| | 60 代以上…58.1％ | | 60 代以上…58.7％ |

菩提寺に対する満足度は地域・世代問わずほぼ過半数を占めている。しかし、一方で「どちらともいえない」と答えた人が全体の 3 割を超えており、「不満がある」と答えた人は全体の 8.4％となっていることは懸念すべきである。

また寺院のウェブサイトの閲覧について（「仏教に関する実態把握調査（2021 年度）」参照）を確認すると、以下の通りである。

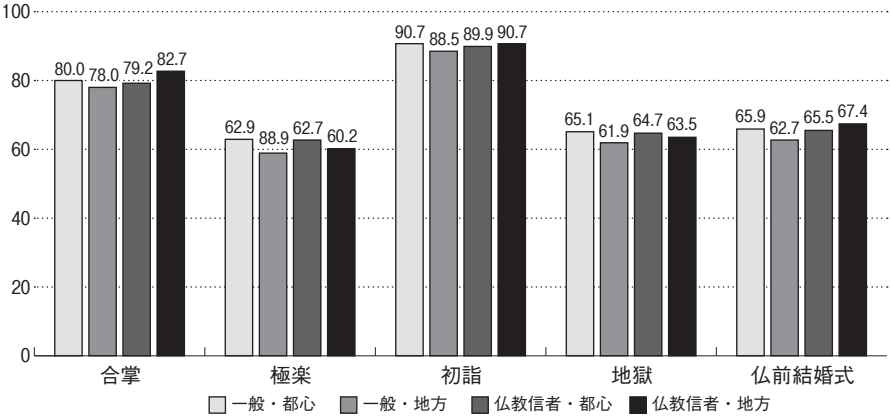



図２　仏教文化の内容認知度

さらに仏教行事における認知度について確認（「仏教に関する実態把握調査（2022 年度）」参照）すると、認知度自体は全体的に高く、御朱印については 2017 年から 2022 年にかけて認知度が高まっている傾向が分かる。

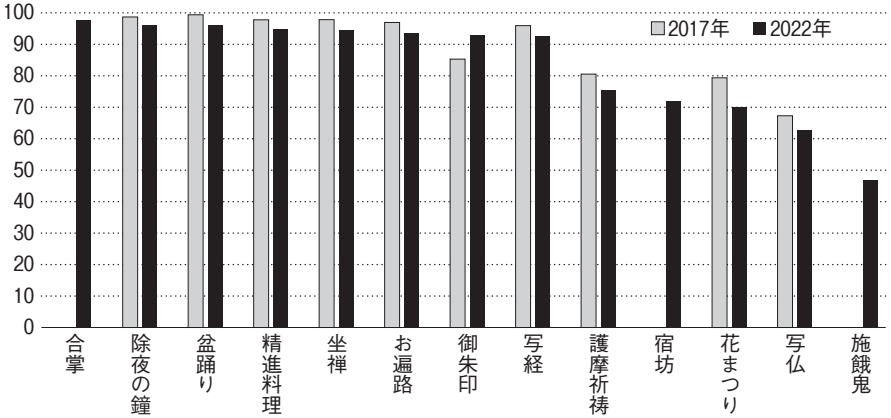



図３　仏教行事の認知度

るかという調査では「菩提寺を持つことを考えている」と答えた人は僅か3.2%であり、「菩提寺を持つことを考えていない」と答えた人は59.1%となっており、青壮年層と寺院との関係がさらに希薄になっていくことは明白である。

⑵　仏教文化・仏教行事の認知度

次に青壮年層の仏教文化や仏教行事における認知度について確認する。仏教文化に関する名称の認知度は以下の通りである。(「仏教に関する実態把握調査（2017年度)」参照)

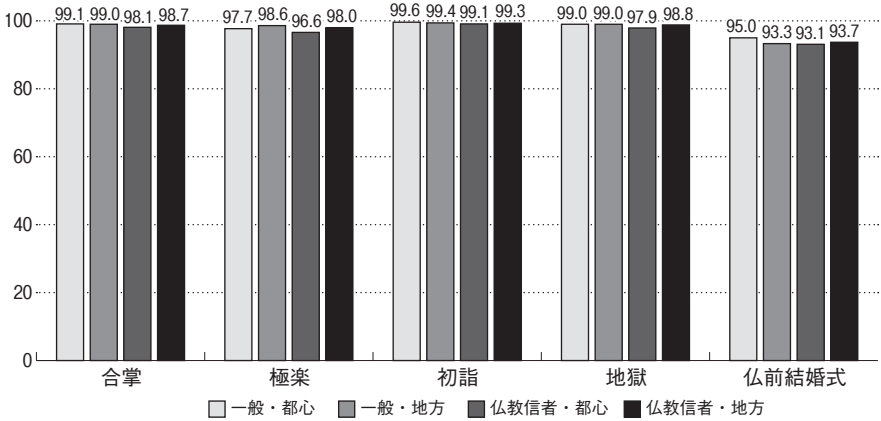



図１　仏教文化の名称認知度

名称の認知度はどの項目でもかなり高い割合を占めており、都心／地方、一般／仏教信者における大きな差はない。一方、仏教文化についての内容の認知度を確認すると、名称の認知度の高さに比べ、「初詣」以外の項目では、内容まで認知している人はやや少ないことが分かる。

居住している場所と同じ都道府県にある…41.1%

居住している場所と違う都道府県にある…12.3%

菩提寺はない　　…24.1%

菩提寺があるかどうか知らない　　…21.5%

「菩提寺はない」、「菩提寺があるかどうか知らない」と答えた人は全体の45.6%と半数近い割合を占めており、さらに「菩提寺はない」、「菩提寺があるかどうか知らない」と答えた人の年代・性別ごとの割合は以下の通りである。

20代…男性52.9%、女性61.4%　　50代…男性43.5%、女性49.1%

30代…男性50.9%、女性60.4%　　60代…男性33.4%、女性40.2%

40代…男性49.9%、女性52.5%　　70代…男性34.0%、女性37.6%

年齢層が低くなるほど、「菩提寺はない」、「菩提寺があるかどうか知らない」と答える人の割合が高く、青壮年層において自身の菩提寺が無いまたは知らないという人が過半数を占めていることが分かる。

次に「菩提寺がある」と答えた人が、菩提寺とどのように関わっているのか確認すると、全体では「自分が中心となって関わっている」26.9%、「自分は中心ではない、中心となって関わっている者と同居」26.6%、「自分は中心ではない、中心となって関わっている者と非同居」46.5%という結果となっている。さらに「自分中心ではない、中心となって関わっている者と非同居」と答えた人の年代・性別ごとの割合は、以下の通りである。

20代…男性52.9%、女性70.6%　　50代…男性49.0%、女性51.0%

30代…男性55.7%、女性71.9%　　60代…男性35.1%、女性33.1%

40代…男性56.1%、女性63.4%　　70代…男性29.7%、女性26.4%

青壮年層は「自分中心ではない、中心となって関わっている者と非同居」である人がほぼ過半数を占めており、青壮年層が寺院と関わる機会は非常に少ないということは明らかである。

さらに「菩提寺はない」と答えた人が、今後菩提寺を持つことを考えてい

践に、少なからず賛同をしているからこそ就職している。この教職員に対し、信者の獲得という視点ではなく、その宗派のファン作りという視点に立った、体験・経験を通した教化アプローチを行うことは、教育活動を行う上でも非常に重要であろう。

以上、4つの課題と教化アプローチ策をあげたが、既に教育関係機関に在籍をしている、学生、保護者、さらには教職員をファンにしていくことが、次世代への信仰継承や新たなる信仰対象者獲得の可能性を広げる一歩となるのではないだろうか。

## 第５章　青壮年層教化のためのマネジメント戦略

斎藤唯衣

### はじめに

本章では、青壮年層への次世代継承において注目すべき点を「仏教に関する実態把握調査」（公益財団法人全日本仏教会・大和証券株式会社）の調査結果に基づいて考察し、次世代継承に必要な対策を“マネジメント戦略”と称して、各教団・寺院・僧侶が出来る具体的なアプローチ方法を提示する。なお「仏教に関する実態把握調査」は年度によって取り上げている質問内容が異なっており、本章では考察のため様々な年度から調査結果を引用する。本章にて引用する際は「仏教に関する実態把握調査（〇〇年度）」と記して、どの年度の情報であるかを明記する。

### １．青壮年層への次世代継承の必要性

⑴　青壮年層と寺院の関わり

菩提寺の有無についての調査（「仏教に関する実態把握調査（2022年度）」参照）は次のような結果となっている。

《全体》

となっていることから[19]、幼保園で培われた宗教的習慣が、卒園とともに途切れていってしまうという点である。乳幼児期に習慣化された宗教的な行為を、これ以降どのように継続していってもらうかは、今後の課題であろう。このような状況の中で、現在多くの教区や児童教化連盟等で行われている子ども道場や子ども信行道場といった子ども会活動や、ボーイスカウト・ガールスカウトでの活動は、卒園とともに途切れてしまう宗教との関りを繋ぎ止める可能性を持つ教化アプローチではなかろうかと思われる。

２つ目は、幼保小中高の保護者への教化アプローチである。

特に子ども自身が園や学校選びに最終的な決定権を持っていない幼保や小学校期では、保護者は、上述同様、少なからずその教育方針等に賛同しているであろうし、中学・高等学校であっても、子どもが学校選択において主体的に決定をしていくにしても、保護者がその学校の教育方針に拒絶的な意思を持っていることはまずない。その保護者に対し、信者の獲得という視点ではなく、その宗派のファン作りという視点に立った教化アプローチを行うことは非常に重要であろう。

３つ目は、大学生への教化アプローチである。

宗教系大学に宗教への信仰や関心を持たずして入学した学生は多い。しかし、この大学生という期間に様々な宗教体験やフィールドワークなどを通じて、宗教に触れ、体験的に学ぶことで、その後の人生の様々な場面において有効であり、また善き社会人となる基礎を学び得るという視点に立った教化アプローチを行うことは非常に重要ではなかろうか。

４つ目は、宗教学校等の教職員への教化アプローチである。

せっかくの「ご縁」により就職をした教職員は、その学校等が掲げる、生涯にわたる人格形成の基礎を育む上で、その育む拠り所としての宗教教育の実

(19) 宗教系学校のみならず、日本全体を概観しても高等学校や大学、幼保園など各学齢別にみても、私立の小・中学校の設置数は少ない。

の取り扱いは少なくなっていく傾向にある。しかしながら、浄土宗総合研究所「宗立宗門学校における仏教教育研究班」による「宗門宗立学校における仏教教育の現状調査 結果報告」[18] にあるように、あくまで HP 上での紹介が少なくなるだけで、宗教教育活動はしっかりと行われている。

さらには、宗教教育活動における保護者との関わりについてみていく。幼保園では、乳幼児期は家庭と共に車の両輪のように、その子の成長を育むという観点から、家庭と連携して乳幼児教育保育活動を行っているので、自ずと保護者が参加する宗教行事や集会も多くある。また保護者は、生涯にわたる人格形成の基礎を育む上で、その育む拠り所としての宗教教育の実践に、同意をして入園させていることから、日頃から子どもを通して、または直接的に保護者へのアプローチを可能としている。

小学校では、入学式・卒業式などの行事や、学校案内、学校通信などの配布物を通じて保護者への宗教教育の理解を深めている。中学高等学校では、入学式・卒業式、文化祭などの行事や、学校案内等の配布物を通じて、大学では、入学式・卒業式、学校案内等の配布物を通じて保護者への宗教教育の理解を深めているが、学齢が上がるにつれて、保護者への直接的なアプローチは困難になってくる。

## ３．まとめ／見えてきた課題と可能性

ここでは、まとめとして、見えてきた課題と可能性としての教化アプローチ策をあげてみる。

１つ目は、切れ目ない宗教的習慣の継続である。

幼保園の数は他の学校種に比べ圧倒的に多く、次いで大学、中高、小学校

(18) 浄土宗総合研究所 令和３年度『教化研究』No.33 「宗門宗立学校における仏教教育の現状調査 結果報告」

養成や次世代の信仰継承者の育成を目的とはしていない。この点において、各宗派と一定の距離がある。

また、各宗教には、各宗派を超えた組織が存在する。仏教では12宗派に所属する各寺院が運営母体等になっている幼保園の連合体として、任意団体の公益社団法人日本仏教保育協会[17]があり、教育研修事業や機関誌・研究誌、仏教保育教材の編集等を行っている。中学・高等学校の任意組織として仏教主義学校連盟があるが、組織としての活動を主とするというよりは、加盟校の連携を中心にしている組織に見える。

カトリック系では、幼保園から大学までを対象とした一般財団法人日本カトリック学校連合会、プロテスタント系では、小学校から大学までを対象とした一般社団法人キリスト教学校教育同盟がある。また、キリスト教として、幼保園等の乳幼児保育施設、保育者養成機関が加盟している、一般社団法人キリスト教保育連盟があり、教育研修事業や機関誌の発行、キリスト教保育教材の編集販売等を行っている。

仏教及びキリスト教では、幼保園を中心とした超宗派の組織が存在し活発な活動が行われているが、小学校以上の学校ではそういった超宗派的な組織活動は顕著に見られず、寧ろ宗派内での組織活動によるところが大きいのではないかと思われる。

次に宗教教育活動の取り組みに関するHP上での取り扱いについて見ていく。幼保園での宗教教育活動の取り組みは、HP上前面的に表出傾向が強いが、小学校、中高、大学と進むにつれて、宗教教育活動の取り組みのＨＰ上での紹介は薄れていく傾向にある。このことは、幼保園や小学校では、人格形成の基礎を育むことが教育上、非常に重要な位置を占めているので、その拠り所としての宗教教育活動をHP上前面に押し出していっているが、学齢が上がるにつれ、学校での学びの目的や活動が多岐にわたっていくことから、宗教教育のHP上

(17) 真宗系に所属している寺院が運営母体となっている幼保園の多くは、加盟していない。

園数は相当な数に及ぶが、各宗派は HP 上での掲載は行っていない。

各宗派 HP 上での教育機関の取り扱い状況（表１）

| 宗派 | HP 上の取り扱い | 特徴 |
|---|---|---|
| 浄土宗 | 宗立宗門校掲載 (7) | |
| 曹洞宗 | 関係学校・関連学校掲載 (8) | 教師養成機関・教化機関、宗門関連学校　２区分 |
| 浄土真宗<br>本願寺派 | 宗門関係学校、幼稚園・保育所掲載 (9) | 龍谷総合学園 (10) 24 法人 72 校グールプ形成 |
| 真宗大谷派 | 関係学校掲載 (11) | 真宗大谷派学校連合会 (12) |
| 日蓮宗 | 教育機関掲載 (13) | |
| 臨済宗妙心寺派 | 関係教育機関 (14) | |
| 真言宗豊山派 | 関連リンク内 (15) に大正大学･種智院大学を紹介 | |
| 天台宗 | サイト内にバーナー　関連機関ページで紹介 (16) | |

## ２．学校種別宗教教育の特徴

ここでは、学校種別の宗教教育活動の特徴を概観していく。

まず、各学校等は、生涯にわたる人格形成の基礎を育むことを教育の目的としており、その拠り所として宗教教育の実践が行われているが、宗派の信者

(7) https://jodo.or.jp/links/（閲覧日 2024 年 3 月 22 日）
(8) https://www.sotozen-net.or.jp/school（閲覧日 2024 年 3 月 22 日）
(9) https://www.hongwanji.or.jp/link/school.html（閲覧日 2024 年 3 月 22 日）
(10) https://www.rsg1995.jp/（閲覧日 2024 年 3 月 22 日）
(11) https://www.higashihonganji.or.jp/organization/school.html（閲覧日 2024 年 3 月 22 日）
(12) https://otani1965gr.wixsite.com/otani1965（閲覧日 2024 年 3 月 22 日）
(13) https://www.nichiren.or.jp/temple/education/（閲覧日 2024 年 3 月 22 日）
(14) https://www.myoshinji.or.jp/education（閲覧日 2024 年 3 月 22 日）
(15) http://www.buzan.or.jp/link/（閲覧日 2024 年 3 月 22 日）
(16) https://www.tendai.or.jp/kikan/index.php（閲覧日 2024 年 3 月 22 日）

## 第４章　教育機関における次世代信仰継承の可能性

和田典善

### はじめに

次世代継承に関する研究班では、次世代の信仰継承を担う世代のひとつとして、青壮年層（高校生、大学生、及び乳幼児から中・高・大学生の保護者世代）を位置づけた。本章はこれらの層にどのような教化アプローチが行われているか、また行うことが有効なのかという観点のもと、実際にこの層と多くかかわっている宗門関係学校等に着目し、各宗派のホームページ（以下、HP）から

・各宗派において、関係学校等はどのような位置づけなのか

・幼稚園・保育園（以下、幼保園[(6)]）、小学校、中学高等学校、大学でどのような宗教教育の内容に違いがあるか

という視点で概観し、そこから見える傾向と課題を明らかにすることを目的とした。

### １．各宗派 HP 上での教育機関の取り扱い状況

各宗派では、その HP 上に関係学校名を掲載し、リンク先を貼付している。そのうち浄土真宗本願寺派と真宗大谷派には、龍谷総合学園や真宗大谷派学校連合会として紹介され、関係学校の連合体が形成されていることがわかる。曹洞宗では、教師養成機関・教化機関、宗門関連学校と２つの区分に分けそれぞれの学校等が掲載されている。浄土宗においては宗立宗門校として、日蓮宗は教育機関として、臨済宗妙心寺派では関係教育機関として各学校のリンク先を貼って紹介している。各宗派の HP 上に掲載されている関係学校等は、小・中学校、高等学校、大学である。また、幼保園の一部を掲載しているのは、浄土真宗本願寺派のみである。各宗派に所属している寺院が運営母体となって幼保

(6)　認定こども園を含む

〈助成〉１会所につき上限55,000円（事業の講師・当日スタッフ等の経費を補助）

〈窓口〉青少幼年センター

※青少幼年センターでは、「若者」を19歳以上おおむね35歳までの世代のイメージでとらえている。

## ３　まとめ

以上、浄土真宗本願寺派と真宗大谷派の２教団に注目し、教団が行う寺院支援の在り方をみてきた。

本願寺派の「離郷門信徒のつどい」と大谷派の「離郷門徒のつどい・ふるさと法要」は、教団による助成やサポートが手厚く、次世代への信仰継承の場を教団が主導的に創出する意図を読み取れる。

本願寺派による龍谷大学との連携事業は、宗門学校にとどまらず行政や企業へとかかわりが派生していくことが期待できる。青壮年層への認知度向上に資するだけでなく、農業の実習体験や寺院での宿泊体験によって獲得する身体知は一人一人に深く刻まれていくことであろう。

両教団ともに、寺院の事業計画づくりを推奨していることがわかった。講座の受講にあたって、本願寺派は推奨する同伴者に「門信徒」を含み、大谷派は要件で「寺族と門徒のペア」としていた。法人の代表役員や寺族のみではなく門信徒とともに寺院の未来を創り上げていこうとする姿がみられる。

このように青壮年層を寺院運営に携わる存在として捉えなおし、各寺院に対する支援プロジェクトを提示して門信徒との協働を促す教団の姿勢には学ぶところが大きいのではないだろうか。

### 2-2-⑤　子どもや若者との出あいの場づくり支援

寺院活性化支援室の３つ目の柱が「青少幼年教化支援」である。

〈目的〉青少年教化に意義を感じながらも初動に困難を感じている寺院を支援すること

〈期間〉特に定めなし

〈対象〉特に定めなし

〈内容〉寺院活性化支援員が各寺院の状況や悩みを聞きながら、「子どもや若者との出あいの場づくり」を支援する。支援員による傾聴と調整が中心で、対象寺院に合った場づくりを構想する。寺院のみで自己完結できる場合は寺院が主体的に計画を実施し、支援室は適宜困りごとの相談にのる。最初の一歩までサポートが必要な場合は、寺院と青少幼年教化のスタッフを支援員がつなぎ、そのスタッフの協力のもと実施する。ここでいうスタッフは、青少幼年センターや教区教化委員会、児童教化連盟、仏教青年会等から選出される。

〈助成〉支援員派遣に関する費用は企画調整局が負担

〈窓口〉寺院活性化支援室 青少幼年教化支援担当

### 2-2-⑥　若者教化立ち上げ応援プロジェクト

これは青少幼年センターの取り組み。

〈目的〉「若者と出あい、共に教えに聞く場」を開くための取り組みが推進されること。

〈期間〉2023 年度から 2025 年度

〈対象〉寺院、組、有志の会（真宗大谷派僧侶・門徒によるもの）70 会所限定

〈内容〉若者を誘って行う聞法会や法要行事等に対する補助。必要に応じて、寺院活性化支援員が訪問して事前相談を行う。（事前相談に係る寺院活性化支援員派遣費用は教団が負担）

して出向する。
〈助成〉10 万円（1 年度 1 カ所 1 回）
〈窓口〉所轄教務所

### 2-2-④　離郷門徒のつどい・ふるさと法要助成

〈目的〉真宗の教えとの出遇いの場、お寺とのつながりの場、次世代へ教えを相続していく環境をつくる取り組みが推進されること（「過疎地域寺院への教化支援を」との声が寄せられてきたことがきっかけ）
〈期間〉2023 年度から 2025 年度
〈対象〉教区、組、寺院・教会、複数寺院での開催　※国の「過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法」において、全部過疎、一部過疎、みなし過疎及び特定市町村に指定された市町村に属する寺院を含むこと
〈内容〉⑴離郷門徒のつどい：所属寺の住職が出向き、ふるさとを離れた門徒が集う　⑵ふるさと法要：ふるさとを離れた門徒が、所属寺に集う
〈助成〉10 万円（1 年度 1 カ所 1 回）
〈窓口〉所轄教務所

以上の②③④は、過疎・過密地域寺院教化支援事業として行われている。背景をたどると、2012 年宗務審議会「過疎問題に関する委員会」での方針に行き着く。宗門の過疎問題を、「社会的過疎」と「真宗の教えの過疎」に分けて考え、後者は「真宗の教えが伝わる場と次世代に教えを相続していく環境が損なわれていくこと」と定義した。「真宗の教えの過疎」は、「過疎地域」だけの問題でなく、単身世帯の増加などにより、家庭での教えの相続が困難な都市部の「過密地域」でも同様であるとし、「過疎・過密地域寺院教化支援」基本方針を示した。寺院活性化支援室の取り組みの背景には過疎・過密地域における信仰継承の希薄化に対する教団の危機感がある。

しあう「アフターミーティング」も開催している。各自の取り組みから得られた知見を共有し、次の計画と行動へとつなげる機会も寺院活性化支援室が提供している。

### 2-2-②　お寺に寄り添う講師派遣

〈目的〉過疎・過密地域の寺院・教会や組をはじめとする共同教化の現場の教化推進を図ること

〈期間〉特に定めなし

〈対象〉国の「過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法」で全部過疎、みなし過疎及び一部過疎に指定された市町村に含まれる寺院や都市部の寺院で、住職・寺族・門徒や地域の方とともに寺院の現状や将来について語り合い、教化について考えたい・見直したい・新たに何かをはじめたいと考えている寺院

〈内容〉寺院・教会・組で実施される教化事業への講師の派遣（本山からテーマに合わせて）

〈助成〉5 万円（講師謝礼、その他経費含む）講師の交通費・宿泊費は別途企画調整局が負担

〈窓口〉寺院活性化支援室（過疎・過密地域寺院教化支援担当）

### 2-2-③　地域連続法話会助成

〈目的〉真宗の教えとの出遇いの場、寺院が共同して聞法の場を開く取り組みが推進されること

〈期間〉2023 年度から 2025 年度

〈対象〉国の「過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法」において、全部過疎、一部過疎、みなし過疎及び特定市町村に指定された市町村に含まれる寺院

〈内容〉３カ寺以上の寺院が共同して同朋の会や法座を開き、同一講師が連続

団における教化の姿勢が施設という形で明確に表現されているといえよう。

### 2-2-①　元気なお寺づくり講座

全５回の講座をとおして、自坊が大切にしてきた教えや伝統を門徒と一緒に掘り起こし、自坊に求められる役割や目指す将来像を共有するための、事業計画書（寺業計画書）を作成する支援を行っている。

| | テーマ | 内容 |
|---|---|---|
| 事前準備 | 寺院へ支援員が出向し、講座の趣旨説明や打ち合わせ→申し込み確定 | |
| 第１回 | お寺を取り巻く環境の変化を見てみよう | 社会とお寺のまわりを見渡して、これから訪れる変化と、その変化がお寺の将来に与える影響をさまざまな角度から考える。 |
| 第２回 | お寺の強みと使命を考えよう | お寺のもつ潜在的な強みを考える。お寺を支える人はどんな個性をもち、相互にどのような関係性がはたらいているか。社会におけるお寺の使命を改めて考える。 |
| 第３回 | お寺の将来像を描こう | 元気なお寺の将来像を描き、お寺の目指す方向性を明確にする。「伝えたいことが伝わる」表現を磨く。アイデアを出し合い、将来像を実現するためのヒントを探す。 |
| 第４回 | 伝えたい相手をイメージした企画を立てよう | 誰に、何を、どのように伝えるのかを整理し、受け取る相手の視点を大切にした企画づくりに挑戦する。企画を具体化することで実現のイメージを共有する。 |
| 第５回 | 寺業計画書をみんなに発表しよう | 第１～４回を経て作成したお寺の事業計画書である「寺業計画書」を持ち寄り、１カ寺ごとに発表する。質問や意見交換も行い、お互いの計画を磨き合う場にする。 |

〈参加要件〉寺族と門徒１名のペアまたは寺族と門徒２名のチーム（寺族のみ門徒のみは参加不可）

〈開催期日〉１回３時間、全５回参加できるように日程調整。１ヵ月に１回程度のペースで開催。

〈開催費用〉不要（講師派遣に関する費用は企画調整局が負担）

なお、講座に参加した寺院を対象に、作成した寺業計画の進捗状況を報告

げる[5]。

## 2-1　組織における事業の位置づけ

ここでとりあげる６つの事業は、企画調整局の管理下で行われている。企画調整局は、寺院活性化支援室、青少幼年センター、教学研究所、大谷婦人会、解放運動推進本部、女性室を所轄している。

寺院活性化支援室には３つ柱があり、寺院運営活性化支援として①元気なお寺づくり講座、過疎・過密地域寺院教化支援として②お寺に寄り添う講師派遣・③地域連続法話会助成・④離郷門徒のつどい・ふるさと法要助成、青少幼年教化支援として⑤子どもや若者との出あいの場づくり支援を行っている。支援室のキャッチコピーは「お寺と地域のコンシェルジュ」だ。全国の教務所と連携して寺院活性化支援員を派遣している。

⑥若者教化立ち上げ応援プロジェクトは青少幼年センターが主導している。青少幼年センターは、青少幼年が抱えている悩みや問題を受け止め、その問題を宗祖の教えに尋ね、共に考えていくことを理念として 2010 年７月に創設された。カルト問題リーフレットや子ども会用のカードゲーム集、東本願寺キャラクターカット集などオープンアクセスのコンテンツを web 上で公開している。その一つに「若者」に焦点をあてた取り組みを教団が推奨するプロジェクトがある。

なお、企画調整局は、「真宗教化センターしんらん交流館」の施設運営も行っている。この交流館には、ギャラリー・カフェ・ホール・図書スペースなどが完備され、教化の拠点となり、そこが全国の寺院支援の窓口になっている。教

(5) ①元気なお寺づくり講座、②お寺に寄り添う講師派遣、③地域連続法話会助成、④離郷門徒のつどい・ふるさと法要助成、⑤子どもや若者との出あいの場づくり支援 https://jodo-shinshu.info/shienshitu/（2024 年３月１日参照）⑥若者教化立ち上げ応援プロジェクト https://jodo-shinshu.info/oyc/youths/（2024 年３月１日参照）

学をつなぐ支援を行っている。

⑴　龍谷大学農学部インターンシップ事業

農村漁村地域に本願寺派寺院が多く位置していることを活かして、2015年度に新設された龍谷大学農学部と連携し、2016年度よりインターンシップによる人的交流を実施している。外部からの視点で新たな地域の魅力が発掘されることや、訪れた人が第2のふるさととして愛着を持つことなどによる地域おこしを期待して策定された。

⑵　龍谷大学社会学部コミュニティマネジメント学習

教団と龍谷大学社会学部（コミュニティマネジメント学科）が連携し、寺院をフィールドとした地域連携に取り組む実習を実施している。学生は寺院活動や法要行事に参加しながら、寺院の日常を学ぶとともに、地域住民も交えた地域活性化の企画も行い、地域おこしに参画するための知識や能力を身につけられる。寺院にとっては、門信徒以外の人を寺院に呼び込むことによって地域及び寺院活性化が期待できるとして策定された。

⑶　お寺 de 農業インターンシップ

2017年度から「龍谷大学農学部インターンシップ」に参画した寺院と協力し、教団主催で農業インターンシップ（お寺に宿泊しながら地域農業の実習体験）を実施している。寺院が都市と農村との接点となり、人的交流から寺院活性化へ、さらには地域活性化へという展開を期待して策定された。

## 2　真宗大谷派の事例

①元気なお寺づくり講座、②お寺に寄り添う講師派遣、③地域連続法話会助成、④離郷門徒のつどい・ふるさと法要助成、⑤子どもや若者との出あいの場づくり支援、⑥若者教化立ち上げ応援プロジェクト以上6つの事業をとりあ

### 1-2-② 「離郷門信徒のつどい」（ふるさとの会）開催支援

ライフスタイルの変化や価値の多様化により移動と居住の自由度が高まり、門信徒が寺院の所在地近隣に居住することが前提ではなくなった。門信徒と寺院の物理的な距離がそのまま関係性の希薄化につながるとの認識のもと、接点を増やす試みとして主に都市部において伝道の場を設けている。教団が主導して複数のチャネルを用意し、助成金や記念品の交付といった支援を行っている。

<table>
<tr><th>開催形式</th><th>ケース</th><th>会場</th><th>支援内容</th><th>窓口</th></tr>
<tr><td>会場参集</td><td>本山参拝に合わせて、ふるさとを離れて居住する人を案内して開催</td><td>本山本願寺</td><td rowspan="3">会場・備品等の無償貸与、当日の開催準備及び補助、助成金（寺院 5 万円、組 10 万円、教区 15 万円）、記念品の交付</td><td>寺院活動支援部（過疎地域対策担当）</td></tr>
<tr><td>会場参集</td><td>首都圏への移住者を集めて開催</td><td>築地本願寺</td><td>築地本願寺教化育成部（教化推進担当）</td></tr>
<tr><td>会場参集</td><td>各地の教務所や別院付近への移住者を集めて開催</td><td>教務所又は直属寺院</td><td rowspan="3">寺院活動支援部（過疎地域対策担当）</td></tr>
<tr><td>オンライン</td><td>オンライン環境が整っている場合</td><td>一般寺院又は非法人寺院（活動拠点を含む）</td><td>記念品の交付、オンライン会議システム（Zoom）による接続方法の説明及び接続補助</td></tr>
<tr><td>オンライン</td><td>オンライン環境が整っていない場合</td><td>本山本願寺・築地本願寺・教務所又は直属寺院</td><td>会場・備品等の無償貸与、当日の開催準備及び補助、記念品の交付、オンライン会議システム（Zoom）による接続方法の説明及び接続補助</td></tr>
</table>

※会場参集型・オンライン型の併用開催も可能。

### 1-2-③ 龍谷大学（農学部・社会学部）との連携

宗門総合振興計画『基本方針Ⅲ．宗門の基盤づくり』の中で、「持続可能な寺院のあり方を検討、運用」する先駆的取り組みとして、宗門関係学校である龍谷大学と「宗学連携」による寺おこし・地域おこしを実施。教団が寺院と大

## 1-2-①　寺院サポート講座

寺院サポート講座のプログラムとして「お寺のビジョン作成研修」を実施している。

〈目的〉寺院の置かれている環境を把握し、寺院を支える人や組織力などを「無形の価値」として捉え、その強みを生かした持続的で実行可能な「寺院運営計画書」を寺院に関わる人々（僧侶、坊守、寺族、門信徒）で協働して作成する。

〈プログラムの概要〉

| | テーマ | 内容 |
|---|---|---|
| 第１回 | 寺院の使命・外部環境分析 | 寺院（自坊）の使命を探求し、外部環境を把握する |
| 第２回 | 無形の価値・ビジョン | 「無形の価値」の視点（①使命・ビジョン、②人の力、③組織の力、④関係性の力の４つに分類）から自坊の潜在的な強みを明らかにし、将来像（ビジョン）を描く |
| 第３回 | マーケティング | 受け手の視点から寺院運営計画を具体化する |
| 第４回 | 寺院運営計画書発表 | 寺院運営計画書（①自坊の使命、②外部環境分析、③無形の価値、④自坊のビジョン、⑤行動計画）の発表 |

〈参加対象者〉必須：住職（法人代表者）または住職後継予定者／推奨する同伴者：所属寺院関係者（衆徒、坊守、寺族、門信徒等）より１名以上　※全４回中３回以上参加できること（最終回は必須）

〈開催期日〉2024 年度は５つのパターンを用意（平日日中開催２つ、夜間開催１つ、日曜開催１つ）。参加できない場合は振替受講が可能な設計。

〈開催方法〉オンライン（Zoom ミーティングを使用）

〈募集寺院数〉100 カ寺（各日程 20 カ寺）

〈参加費用〉\16,000（１寺院）

上げている浄土真宗本願寺派と真宗大谷派の２教団に注目し[(2)]、どのような形で支援を行っているのか、その在り方を見ていく。

## １　浄土真宗本願寺派の事例

①寺院サポート講座、②離郷門信徒のつどい、③龍谷大学（農学部・社会学部）との連携、以上３つの事例をとりあげる[(3)]。前章で紹介した事例だが詳細は以下の通り。

### 1-1　組織における位置づけ

教団全体の組織図「宗派宗務部門・本山本願寺内局部門　組織相関略図表」がＨＰに公開されている[(4)]。ここでとりあげる３つの事業は、統合企画室の管理下で行われている。統合企画室は企画管理部門として宗務のマネジメントをつかさどり、所務部（宗務所員との関わり）、社会部（社会との関わり）、門信徒教化部（門信徒との関わり）、僧侶養成部（僧侶との関わり）、寺院活動支援部（寺院・伝道との関わり）の５部を所轄している。①寺院サポート講座は僧侶養成部（布教使担当）、②離郷門信徒のつどい③龍谷大学（農学部･社会学部）との連携は、寺院活動支援部（過疎地域対策担当）が主導している。

---

(2) 浄土宗と２教団の「包括宗教団体数･教師数･信者数」比較。（『宗教年鑑』令和５年版（文化庁編）pp.70-73）

| 項目 | 宗教団体（宗教法人を含む） | | | | | 教師数 | 信者数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 寺院 | 教会 | 布教所 | その他 | 計 | | |
| 浄土真宗本願寺派 | 10,078 | 4 | 14 | 92 | 10,188 | 18,689 | 7,753,864 |
| 真宗大谷派 | 8,424 | 90 | ― | 51 | 8,565 | 16,831 | 7,276,697 |
| 浄土宗 | 6,856 | 40 | ― | 85 | 6,981 | 10,501 | 6,021,900 |

(3)①寺院サポート講座 https://www.hongwanji.or.jp/jiin/jiinsupport.html（2024 年 3 月 1 日参照）②離郷門信徒のつどい、③龍谷大学（農学部・社会学部）との連携 https://www.hongwanji.or.jp/jiin/kaso.html#kaso_02（2024 年 3 月 1 日参照）

(4)https://www.hongwanji.or.jp/upload_img/shu-ha_honzan_soukanhyou_20210401.pdf（2024 年 3 月 1 日参照）

に手を取ってもらえるように出版事業を行っている好事例といえるだろう。

⑬ YMCA

YMCA（https://www.ymcajapan.org/）はキリスト教精神に根差したNGOで、キリスト教の奉仕の教えを基本原則としつつも、その活動においてキリスト教色をほとんど出さず、また職員・参加者に信徒となることをほとんど求めない団体である。そのような中で、青少年育成、発達支援、成人ウェルネス、高齢者支援といった様々な活動を通した情操教育をもって、ゆるやかにキリスト教の教えを広めている。

### まとめ

ここまで他教団における次世代継承の取り組みをマップ化し概観してきた。どの教団においても次世代への教化活動は重視されるべきものであり、檀信徒向け・非檀信徒向け、宗教色（宗派色）の強弱、さまざまなアプローチがされていることが確認された。これらの事例を学習し、各寺院、各教区、そして一宗として新たに取り組んでいくべき事業を、私たちそれぞれが考えていかなければならないだろう。

## 第３章　教団レベルにおける青壮年層教化の事例
## ―浄土真宗本願寺派と真宗大谷派の事例―

大屋正順

### はじめに

前章では他教団の活動を多角的に概観したが、本章では、教団が主導する取り組みに焦点をあてる。積極的に各寺院に対しての支援プロジェクトを立ち

の講習会に加え、霊友会法友文庫という点字図書館も設置されている。

⑩青壮年層向け動画・法話

青壮年層向けに動画や法話などのコンテンツは様々な教団で作られているが、ここでは真如苑の事例を紹介したい。

真如苑 HP（https://www.shinnyo-en.or.jp/feel/）では、子育て世代をターゲットとした「あっとムービー」という動画、また「小さな発見」というエピソードがあり、宗教色・宗派色をほとんど出さず、生活をよりよく生きる知恵を、青壮年層世代の身近な出来事にかこつけて紹介している。この動画は内容もさることながら、人形劇を使った動画全体のクオリティも非常に高いので、然るべき媒体にて、しっかりと広報を行えば相当数の再生回数が期待されるが、公開している媒体が公式 HP 上ということで、再生回数は確認できなかった。この動画制作のコンセプトを推し量ると、何を作りたいか、何を伝えたいか、ということよりもまずは、誰に聞いてほしいか、つまり青壮年層というターゲットを明確にしている点は評価できるだろう。

⑪宗門系学校

教育機関は次世代継承のためだけに設置されたものではないが、信仰継承の一端を担うものであるので、ここにも掲載しておく。なお宗門系学校については、幼児保育においては宗教園であることを全面に押し出す傾向があるものの、小・中・高・大学校では、そのような傾向は薄れていくようである。詳しくは第 4 章参照されたい。

⑫幅広いジャンルを網羅する出版社

立正佼成会を母体とする佼成出版社（https://books.kosei-shuppan.co.jp/）では、幅広いジャンルの書籍を発行している。多くの宗教系出版社は、自らの宗派の教えを広めることを目的とした書籍を多く出版しているが、佼成出版社では、立正佼成会の教えを広めるための本にとどまらず、仏教書全般さらには一般書や児童書も多く出版している。さらに著名な著者も多く、幅広い年代層

まずは築地本願寺（https://tsukijihongwanji.jp/）が長年経常収支赤字で参拝者数が減ってきていることを懸念し、顧客を新たに創造し、開かれたお寺にしようと動き出した。そこには顧客創造に関わる3つのステップがあり、①まずは開かれたお寺になって、今までご縁がなかった一般の人たちとご縁をつくる、②そして、彼らの人生のコンシェルジュとなって、ご縁をつなげていく、③最終的には、ご縁がつながった人たちに門信徒になっていただく。これらの3つのステップを踏むことで、新たな顧客（今までにない新しいタイプの門信徒）を創造していこうとする狙いがある。東京など都市部では、このような新しいタイプの門信徒がこれからのボリューム層の顧客となっていくためである。

具体的には境内の樹木を伐採して、明るく開放的な空間を作り、そこに各種インフォメーションセンターやカフェを新設し、敷居を低くして、誰でも気軽にお寺に入れる仕組みを創造している。また合同墓新築にあたっても、マーケティング調査を入念に行い、顧客の価値観に非常に気を配っているようである。また寺院運営においては、DX化を推進し、一般企業と同様に、先進的な考え方やシステムを積極的に取り入れて改革を進めている。ダイバーシティにも積極的であり、職員約150名中、僧籍をもたない職員は約50名おり、幅広い外部人材を登用しており、着実に改革を進めている印象である[(1)]。

⑨ボランティア福祉活動

宗教色が薄い活動として、ボランティア活動、福祉活動が挙げられるが、ここでは特徴的なものとして、霊友会の事例を紹介する。

霊友会（https://reiyukaiplus.jp/osekkai.html）ではおせっかいをしてあげることを奨励し、そこから人の輪を広げていき、それをボランティア活動につなげていくことを教団として推し進めている。また福祉活動（https://reiyukai.jp/welfare-work）にも積極的であり、点字や点訳・音訳、手話など

(1) 安永雄彦「築地本願寺の経営学：ビジネスマン僧侶にまなぶ常識を超えるマーケティング」（東洋経済新聞社、2020年）を参考した。

「青年部（男子部・学生部・未来部）」に所属し、各部の活動に参加させることで、二世三世に継承する仕組みを取っている。

またGLA（https://www.gla.or.jp/studysessions/seminar/）では、少年期（小学生～高校生とその保護者）・青年期（高校生～30歳）・壮実年期（30歳～64歳）・老年期（65歳以上）の世代別で研修を行い、それぞれの世代に特有のテーマや課題に取り組むことで、同世代の仲間意識を育むセミナーとしている。

⑥プロパガンダ映画

幸福の科学（https://hs-movies.jp/）では、芸能人信者を採用したプロパガンダ映画を多数制作している。布教的要素を全面に押し出した映画ではないが、これも次世代への教化施策といえるだろう。

⑦ドキュメンタリー映画

全国曹洞宗青年会では、「典座」（https://sousei.gr.jp/article_cat/indoctrination/movies/）というドキュメンタリー風映画を制作している。内容としては、東日本大震災を機に社会活動する僧侶の姿を描きつつ、高名な僧侶の法話を通して、信仰を見つめなおすという物語となっており、カンヌ国際映画祭に招待されたり、ダライ・ラマからメッセージをもらうなど、注目を集めた。映画というあらゆる世代にPRできる媒体を利用することで、普段仏教になじみのない層にもアクセスすることが可能となる好事例だろう。

⑧寺院運営の改革

主にこれまで寺院との縁がなかった、非檀信徒向けの施策として、浄土真宗本願寺派（https://www.hongwanji.or.jp/）では現在、積極的に経営改善を行っている。在家出身で元銀行員、経営コンサルタントをされていた安永雄彦氏は、2015年に築地本願寺代表役員宗務長、2022年には本願寺の事務方トップである執行長に就任し、経営コンサルタントとしてのノウハウを存分に生かし、新規顧客開拓のイノベーションを起こし続けている。

に現状の課題や要望を傾聴した上で、子供会や青年会の立ち上げ、若者が集う法要やイベント作りのために、青少幼年教化の経験者スタッフの調整（コーディネート）する支援を行っている。

いずれの支援においても、支援員派遣の費用まで負担してくれる手厚い支援がされている。

③お内仏頒布・帰敬式

浄土真宗本願寺派（https://www.hongwanji.kyoto/visit/application.html）・真宗大谷派（https://www.higashihonganji.or.jp/application/gohonzon/）では、以前からお内仏の頒布が盛んに行われていたが、近年は目まぐるしく変化するライフスタイルに合わせ、携帯型のご本尊や三つ折り型のご本尊なども作成されている。

また浄土真宗では本山での帰敬式も従前より盛んで、東西本願寺では基本的に毎日２回の受式が行われている。浄土真宗ではご門主から法名をいただくのが本義であるとはいえ、生前から本山とご縁を結ぶ機会があるのは、強みということができよう。

④オンライン坐禅会

宗教色が強いものの、檀信徒・非檀信徒ともに対象となる事業として、全国曹洞宗青年会が企画しているオンライン坐禅会（https://sousei.gr.jp/article_cat/indoctrination/）が挙げられる。坐禅は近年人気のマインドフルネスとも相容れやすく、あらゆる世代で人気が高いもので、コロナ禍をきっかけに全曹青が企画したオンライン坐禅会はすでに30回を超えるほどの盛況だそうだ。

⑤年齢別組織・世代別セミナー

新宗教教団では、信者を年齢別・世代別に組織して教化活動を行っている。創価学会（https://www.sokagakkai.jp/about-us/organiztion.html）では、すべての会員が地域活動に参加するために、年齢性別ごとに「壮年部」「女性部」

訳されただけではない外国語ページも充実しており（曹洞宗９ヶ国語、高野山真言宗２ヶ国語）、インバウンドや海外布教も視野に入れたサイトとなっている。

続いて神社本庁お宮キッズ HP（https://www.omiyakids.com/）では、総ルビの子供向けサイトとなっており、ターゲット層を絞ったサイトの好事例として挙げられる。子供向けに限らず、ターゲット層を意識した運用は大変有効であろう。

SNS については、教団としての発信は告知・報告がメインであり、特徴的な投稿はあまり確認できなかった。一方各宗派本山の SNS は、インスタ映えするものが多く、寺院の魅力発信ツールとして使用されている。清水寺（https://www.instagram.com/feel_kiyomizudera/）はフォロワー数 17 万人を超えるなど、世界から注目されるものも数多くみられる。

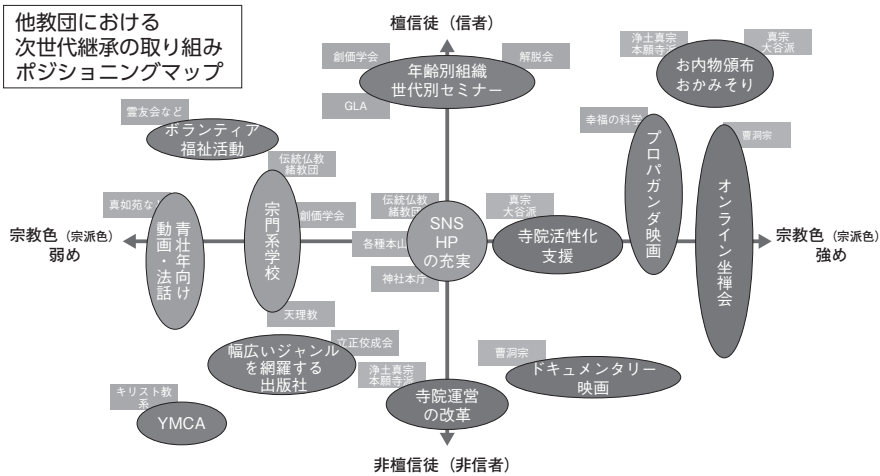
②寺院活性化支援

真宗大谷派では、真宗教化センターしんらん交流館に寺院活性化支援室（https://jodo-shinshu.info/shienshitu/）が置かれ、「寺院運営活性化支援」・「過疎・過密地域寺院教化支援」・「青少幼年教化支援」の３本柱で寺院の教化活動を支援している。

この３本柱の１つ目である「寺院運営活性化支援」では、講義とワークショップを通じてこれからの寺院運営に向けて事業計画書を作成することを目的としている。参加要件として、寺族と門徒のペアで参加することが求められ、門徒と一緒に将来を考えてもらうことを目指している。檀信徒への次世代継承を考えるにあたって、当事者とこれからの寺院像を議論することは非常に有効な方法といえるだろう。

２つ目の「過疎・過密地域寺院教化支援」では、企画調整局員や寺院活性化支援員を派遣し、現状の課題や要望を傾聴し、その聞き取り内容を基に寺族と支援員で教化事業を創造していくという活動を行っている。

３つ目の「青少幼年教化支援」では「過疎・過密地域寺院教化支援」同様




本章で紹介する取り組みのほかにも調査を行ったが、ここではホームページという限定的な媒体を通じて把握できた、顕著な活動を展開している教団のみを紹介することをお断りしておく。

さて、まずは他教団における次世代継承の取り組みをマップ化してその傾向を見ていこう。縦軸は取り組みの対象として檀信徒であるか、非檀信徒であるか。横軸は宗教色（宗派色）が強いか弱いかを表している。以下よりそれぞれの取り組みを概観していこう。（以下に紹介する URL の調査日は 2024 年 1 月 5 日）

① SNS・HP の充実

近年では SNS・HP は情報発信の中心として、各教団において重視されるコンテンツである。まず HP について、正確な情報をわかりやすく伝えるという基本は維持しつつ、ビジュアルを重視した HP として、曹洞宗 HP（https://www.sotozen-net.or.jp/）、高野山真言宗 HP（https://www.koyasan.or.jp/）などが挙げられる。これらの HP では、まずは見てもらう、印象に残るサイト作りがされており、青壮年層を多分に意識したものとなっている。またただ翻

インターネット上での掲載なし）

・本願寺派ホームページ「地域での活動レポート」https://www.hongwanji.or.jp/project/report/

・真宗大谷派「寺院活性化支援室」 https://jodo-shinshu.info/shienshitu/

・全日本青少年協議会　正力松太郎賞　http://www.zenseikyo.or.jp/katsudo/katsudousya/matsutarou/

収集した活動事例は、総合研究所ホームページに「青壮年層向け教化活動事例リスト」として掲載した。この一覧は、活動内容や活動内容によってカテゴライズした一覧であり、参照元、ある場合には寺院のホームページアドレスなども記載されており、活動の詳細をより深く知る手がかりとして利用できるものとした。（各事例は各事例が参照元に掲載された時点の情報であり、現時点においてその活動が継続されているかは不明であることは留意されたい。）

ここに記載した事例のほかにも、「浄土宗てらかつナビ」（https://terakatsu.jodo.or.jp/）や浄土宗ともいき財団「視察レポート・イベント報告」（https://tomoiki.jp/report/）でも様々な事例が紹介されている。参考になるので、是非合わせてご利用いただきたい。

次章においては、主に他教団のホームページから把握することのできた青壮年層教化の具体例を挙げ、その概念化を試みる。

## 第２章　他教団における青壮年層教化の取り組み
## ～HP から見える取り組みの紹介～

石上壽應

本章では主に他教団のホームページから捉えることのできた、次世代の人々への取り組みを紹介したい。ただしホームページという限定的な資料からの把握であるので、他教団の取り組みのすべてを網羅しているわけではない。また、

ら抽出してみると、次のようになろう。

１）学生期（10 代半～ 20 代前半）

宗門系学生、スカウト参加者、おてつぎこども奉仕団手伝いなど

２）社会人期（20 代～ 60 代）

宗門関係幼保・学校の教職員、おてつぎこども奉仕団手伝い、本山臨海学校スタッフなど

３）結婚～子供幼少期（20 代～ 40 代）浄土宗系幼稚園・保育園やサラナの保護者など

４）子供が小学生～高校生（30 代～ 50 歳位）

子ども信行道場参加者の保護者、宗門系学校のＰＴＡ、宗門関係学校の同窓会組織、スカウト指導者など

５）親の死去を迎える時期（およそ 40 歳～）寺に関わる中心世代としての檀家、檀信徒会など

## ３．青壮年層への教化活動事例一覧「青壮年層向け教化活動事例リスト」

本研究班では、青壮年層教化の目的を①既存檀信徒の青壮年層つなぎ止め②新規檀信徒の獲得、およびその種まき　と設定した。また教化を「直接的教化」だけでなく、「間接的教化」をも含めて広く捉えてきた。このような立場に立つと、参考にすべき教化活動事例は、その活動内容、主催者、活動の対象者などを広く捉えるべきであることは明らかである。

本研究班では伝統仏教教団において、寺院・僧侶レベル、組や教区でのレベル、宗レベルそれぞれにおいて青壮年層教化に資する活動事例を収集し、各寺院・僧侶が教化の参考とできるような一覧を作成した。一覧に記載した出典元は以下の通りである。

・「いきいきお寺事例集　てら活のススメ」（浄土宗、平成 27 年）

・『地域寺院』1 ～ 91 号（大正大学出版会､2016 年 6 月～ 2023 年年 12 月）（＊

＊ 44

・広報（宗 HP、YouTube、浄土宗新聞、ほか広告媒体）

・その他ブランディング戦略

2）寺院（僧侶）

・教化活動

写経、念仏会、法話会、人生儀礼（子どもの成長儀礼、還暦奉告法要、厄除け）、年中行事（節分、父の日、ほかイベントなど）、葬儀・法事、施餓鬼、新盆のつどいの機会　など

・公益的活動

寺院という場を利用した活動　様々なイベントの開催など

僧侶（または一個人）という立場での活動　地域の役職（保護司、町会役員など）やスポーツコーチなど

3）宗門系学校・幼稚園

・宗教関連の授業

・仏教年中行事、仏教人生儀礼

・研修：学生の本山研修、教員研修など

・ほか：学校の HP、保護者への説明会の機会など

4）浄土宗関連団体・事業

・各寺院や施設での活動

・教区、地区、全国組織での活動（研修会、講習会など）

このように捉えると、青壮年層への教化の機会は多様に存在することが見えてくる。

＜青壮年層への教化 「ライフステージ」から見る青壮年層教化の可能性＞

先に一宗、寺院（僧侶）、宗門系学校・幼稚園など、浄土宗関連団体・事業という、それぞれのレベルにおける教化の可能性についてみたが、ライフステージごとにどのような教化対象があるか、特に浄土宗関連団体や取り組みの中か

持つ青壮年層に対するアプローチの可能性についても考える必要があるだろう。

③一般　浄土宗と機縁を持たない層

この層は、浄土宗と機縁を持たない一般の層である。この層に対する広報をはじめとした方策も考えねばならない。

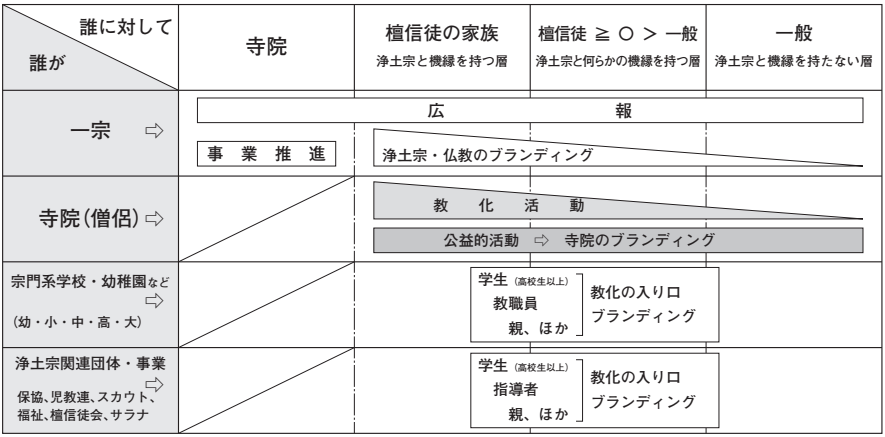
＜青壮年層へのアプローチ　教化の可能性＞

先のように、3つのターゲットを設定すると、一宗、寺院（僧侶）、宗門系学校・幼稚園など、浄土宗関連団体・事業という、それぞれにおいて取り組むべきことが浮かび上がってくる。各レベルにおける教化の可能性についてまとめたのが＜図３＞である。なお、図の中での三角形は、面積が広い方が効果が高く見込まれ、面積が狭い方が効果が薄いことを表している。

この表で挙げた教化の可能性は、具体的には次のようである。

１）一宗

・事業推進（助成金の交付、団体や寺院への広報）




＜図３＞

ある。家族の葬式や法事に参列する機会はあるものの、仕事の現役世代、あるいは学生であるためか、寺院の行う教化活動や行事などの取り組みに、本人が主体的に参加する機会は少ないと言わざるを得ない。

このような青壮年層に対しての教化を考える上では、「教化の機会」というものを広く設定する必要があるのではないか。ここで提案したいのが、「直接的教化」と「間接的教化」という考え方である。「直接的教化」とは、青壮年層本人に対して直接アプローチをする方法である。一方、「間接的教化」とは、青壮年層本人ではなく、その関係者（子どもなど）に対する教化のことである。例えば、子どもへの教化を通じて、その親である青壮年層が結果的に寺院や浄土宗への共感性を高めることは十分にあり得ることである。この意味において「教化の入り口」であり、また寺院や浄土宗のブランディングにつながることにもなる。

＜青壮年層　３つのターゲット＞

教化を「直接的教化」だけでなく、「間接的教化」をも含めて広く捉えると、その教化対象は次のように広く設定することが可能となる。

①檀信徒の家族　浄土宗と機縁を持つ層

この層は、檀信徒の家族である青壮年層である。浄土宗と機縁を持っているため、葬儀や法事、寺院の行事などに参加を促すことが可能である。

②檀信徒　≧　○　＞　一般　　檀信徒ではないが、何らかの機縁を持つ層

この層は、檀信徒ではないが（＊檀信徒の家族の場合もある）、浄土宗と何らかの機縁を持つ層である。例えば、自分の子どもが浄土宗系の学校（小学校～大学）や保育園･幼稚園に通っている場合もあるだろう。また寺院で行っている諸活動（サラナ、ボーイスカウト、子ども食堂など）に参加している場合もある。また浄土宗系学校や園の教員や、ボーイスカウトの指導員などを務めている青壮年層もかなりの人数に及ぶ。このように、何らかの機縁を

この教化の対象と活動内容をより具体化したのが＜図２＞である。

信仰的要素が強い順から①→②→③→④となり、①→④となるに従い、その活動が対象とする範囲（裾野）が広くなると思われる。

①が信仰心を育む教化活動である。五重相伝や授戒会などの儀礼、念仏会や法話会などがこれに当たるであろう。

②が寺檀関係の護持意識を保持・教化するための取り組みである。現在の青壮年層は主に檀信徒関係を担ってきた高齢者と同居していない場合も多い。そのために、寺院規則や墓地規則を含めた「寺との付き合い方」を寺院側がしっかりと伝える必要があろう。また寺報やSNSなどによって寺院や僧侶のことを知ってもらうことも、寺を護持する意識を高めることにつながるであろう。

③は寺院・仏教への興味を抱いてもらうための取り組みである。檀信徒だけでなく、非檀信徒も参加できる、除夜の鐘といった年中行事、七五三などの成長儀礼を含む人生儀礼、御朱印授与や人生相談などがこれに当たるだろう。

④は地域における寺院・伝統文化への共感を育む取り組みである。寺院という場所を活用したイベント、地域の歴史性を背負った寺院という存在の広報、地域の住民の一人として僧侶が地域の役職などを引き受けるなど、広い意味で地域に貢献する取り組みである。

青壮年層教化の目的を、①既存檀信徒の青壮年層つなぎ止め　②新規檀信徒の獲得、およびその種まき　の２点と捉えるならば、①～④の取り組みをバランス良く取り入れることが肝要である。なぜなら、③④のような間口の広い活動を通じて、浄土宗の信仰へと導くきっかけとなることもあるからである。しかしながら一方で、③④のような活動を、「信仰へと導く」ことと全く切り離して捉える立場も尊重しなければならないことは言うまでもない。

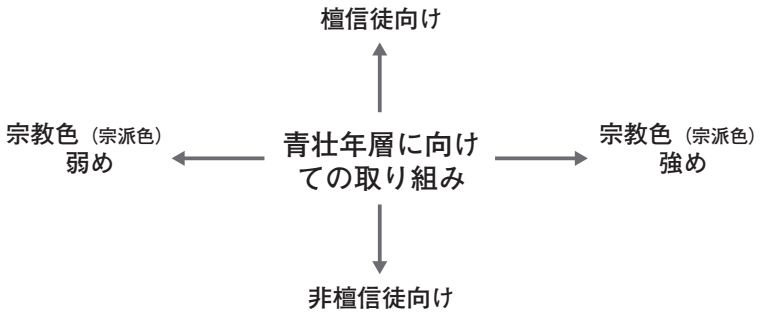
＜直接的教化と間接的教化＞

先述したように、青壮年層は寺院と係わり合いを持つことが少ない世代で

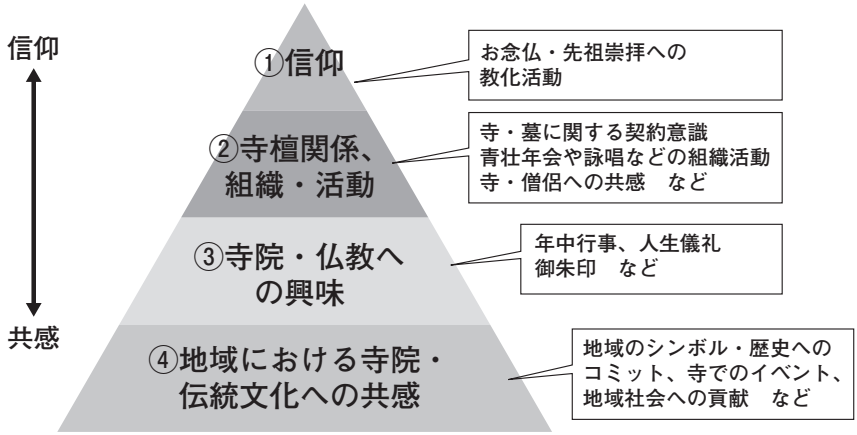
## 2．青壮年層へのアプローチの可能性

ここでは本研究班が収集した活動事例の分析を基に、青壮年層教化の対象と活動内容の側面から概念化を試みたい。

まずその対象を捉えると、檀信徒向けのものと非檀信徒向けのものがあるだろう。むろん、これら二者選択ではなく、両者を包括した取り組みもあり得る。次に活動内容を捉えると、宗教色（宗派色）強めの活動と宗教色（宗派色）弱めの活動の両者があり得る＜図１＞。




＜図１＞




＜図２＞

な課題である。

次世代継承に関する研究班は、平成28年より研究を開始し、子どもとその親世代、喪主として寺院と中心的に関わり始める世代など、特定の世代をターゲットとして研究を行ってきた。これら成果を踏まえ、令和4～5年度は青壮年層をターゲットとし研究を展開した。なおここでは、青年層を高校生～20歳代、壮年層を30歳代～50歳代と捉え、青壮年層を高校生～50歳代という広い年齢層と設定した。

青壮年層は学生や社会人といった、いわば「現役世代」であるため、各年齢層のなかで寺院との関わりが最も希薄な層であると言えよう。しかしこの層にアプローチすることは、今後の寺院にとって非常に重要なことであると考える。なぜなら、寺院と主に関係を持つ世代は60～80代が中心であろうが、現在その下の世代は菩提寺や墓のある場所で生まれ育っていない人も多く、「ふるさと意識」を持たず菩提寺に親近感を持たない人も多いからである。このような人々に如何に寺檀関係や信仰の継承を行うことができるのか。浄土宗や寺院の将来を見据えると、一刻も早くこの問題に取り組む必要があるのは明らかである。

本研究班では、青壮年層教化の目的を「①既存檀信徒の青壮年層つなぎ止め」「②新規檀信徒の獲得、およびその種まき」と設定し、その可能性を探るべく多方面からの情報収集、および検討を重ねた。本稿では、2年間の成果を報告する。具体的には、寺院や教団レベルにおける次世代への信仰継承の取り組みの収集と分析、教育機関における次世代への信仰継承の可能性、広報という視点を含めた次世代への信仰継承のためのマネジメント戦略、それに加え、本研究班の令和2・3年度成果「慈悲つむぎ法要・セミナー」の教化における可能性について論究したものである。なお、本研究は社会部からの委託研究であることを付記しておく。

# 次世代継承に関する研究　成果報告書

目次

第１章　青壮年層教化の可能性　名和清隆
第２章　他教団における青壮年層教化の取り組み
～ HP から見える取り組みの紹介～　石上壽應
第３章　教団レベルにおける青壮年層教化の事例
～浄土真宗本願寺派と真宗大谷派の事例より～　大屋正順
第４章　教育機関における次世代継承の可能性　和田典善
第５章　青壮年層教化のためのマネジメント戦略　斎藤唯衣
第６章　慈悲つむぎ法要・セミナー実践報告
～全国浄土宗青年会推進活動を通じて～　石上壽應
おわりに　名和清隆

## 第１章　青壮年層教化の可能性

主務　名和清隆

### １．はじめに　本研究班の研究目的

高度経済成長期以降、特に都市部への人口移動現象が生じ、遠距離居住檀信徒の増加、3 世帯同居率も減少するなど大きな社会変動が生じた。これらの変化により、寺檀関係やお念仏の信仰を次世代檀信徒に継承することが、以前に比べ困難な状況となっている。開宗 850 年という大切な節目にあたり、寺檀関係、またお念仏の信仰を如何に継承していくかについて考えることは重要

わらない」「諸々の賢者たちと交わる」「尊崇すべき方々を尊崇する」などの良い結果をもたらす因となる38種類の行いを指している。確かに、269偈において釈尊が述べるように、例示されている38種類の行いを実施し、完遂すれば、安泰な状態に至るのであろう。法然上人の教えに従えば、まずもって私たちは、偽りのない姿で往生を願って専らお念仏を称えるべきである。それと同時に、できる範囲で善行に取り組むことが仏教徒として望まれよう。釈尊･阿弥陀仏･法然上人の教導にしたがい、何よりもまず念仏を称え、日々を過ごしていくうえでは、さまざまな善行を行うのが肝要である。

## ○関連

①『法然上人のご法語』② p.159-160

善人は善人のままお念仏を称え、悪人は悪人のままお念仏を称え、ただありのままに素直にお念仏を称える人のことを「念仏の他に助けを添えない（人）」というのです。そうはいっても、自身の悪行を悔い改め、善人となってお念仏を称えようとする人は阿弥陀さまの御心に適っているに違いありません。

【禅勝房伝説の詞・昭法全四六二】

## ○キーワード

生き方、幸せ

だろう。しかし、いつでもそういった事柄に心を奪われ、興奮したり憂いを抱いたりするのが、私たち人間である。ただし、法然上人は、そういった私たちが、そのままの自分で念仏を称えていくべきだと述べている。「世間の価値観」にとらわれ、平常心を失いがちであるものの、至らぬ我が身を振り返りながら往生を願い、念仏し続けていくのが大切であるといえよう。

〇関連

①『法然上人のご法語』③ p.262

人の心はつねにそうした名誉欲や財欲に染まって濁った水のようですが、お念仏という、（濁水を清浄な水に変える）宝珠を投げ入れれば、心という水は自ずと清らかになるのです。往生が叶うのもそのお念仏の力によるのです。まず自身の心を静め、こうした欲望による罪の障りを除いてからお念仏しなさい、というわけではありません。ただつねにお念仏を称えて、その罪を滅しなさい。

【十二箇条問答・昭法全六七四】

〇キーワード

理想、現実、生き方

## （11）真の幸せに向かえ

【第 269 偈】

これらのことを行って、どこにいても負けることなく、どこにいても平安に達している。―これが彼らの最高の幸福である。

〇解説

この偈文は、それ以前の偈文の内容をまとめたものとなっており、「これらのこと」とは 259 偈から 268 偈のなかで示されている「諸々の愚者たちと交

⑥『法然上人のご法語』② p.246

私、源空は、中国の善導大師のみ教えに従い、またわが国の先徳、恵心僧都源信さまのお勧めのままにお念仏を称え、これまで長いあいだ毎日六万遍としておりました。いよいよ自分の死期が近づいたと感じてからはさらに一万遍を加えて、日々七万遍称える行者となったのです。

【聖光上人伝説の詞　其三・昭法全四六一】

⑦『法然上人のご法語』② p.247

善導大師が『法事讃』で「七日七晩、絶やす心なく念仏を称えよ」とおっしゃっているのは、「明日かもしれない往生の一大事を逃してしまわないように、今日の一日を励もう」との思いでお念仏を称えなさいということです。

【つねに仰せられける御詞・昭法全四九五】

〇キーワード

苦行、修養、梵行、聖諦、真理、真実、涅槃、幸せ、幸福

## （10）何があっても平常心を

【第 268 偈】

世間の価値観に触れても、その心は揺れ動かず、憂えることなく、曇りなく、安らかである。―これが最高の幸福である。

〇解説

「世間の価値観」とは、註釈書によると、例えば八世間法であるとされる。すなわち①獲得すること、②獲得できないこと、③名誉、④非難、⑤貶められこと、⑥讃えられること、⑦楽、⑧苦の８つである。このような八世間法に遭遇したとしても、感情を乱さないように生活するのが好ましいと諭しているの

③『法然上人のご法語』② p.253-254

この世を生きていくには、お念仏が称えられるように過ごすべきです。お念仏の妨げになるのであれば、たとえどんなことであっても厭い捨てて、それをやめなさい。たとえば、俗世を離れた修行者となっては称えられないならば、妻を娶って称えなさい。それでは称えられないというのであれば、修行者となって称えなさい。居を構えては称えられないならば、各地を遍歴しながら称えなさい。それでは称えられなけれないというのであれば、家にいながら称えなさい。自分の力で衣食を賄ってお念仏が称えられないならば、他の人に助けていただきながら称えなさい。それがままならないようであれば、自分で衣食を賄って称えなさい。一人では称えられないならば、お念仏の同志と一緒に称えなさい。それでは称えられないというのであれば、一人籠って称えなさい。

【禅勝房伝説の詞・昭法全四六二】

④『法然上人のご法語』② p.253

たとえお念仏以外のことをするにしても、お念仏を申しながらそれをするよう心がけなさい。その事をするついでにお念仏を称えようと思ってはなりません。

【つねに仰せられける御詞・昭法全四九三】

⑤『法然上人のご法語』② p.245-246

直しようのない凡夫の性を考えれば、一日に二万遍、三万遍とお念仏の回数を定めたところで、その通りに実行できるものではありません。もっとも、回数を多く定めるに越したことはありませんが、それも心を励ましてお念仏を継続させようという意図によるものです。ただし、必ず数を定めることが必要というわけではありません。ただ、ひまなくお念仏をするためなのです。回数を決めないと怠ける原因となりますから、回数を定めるようにお勧めしているのです。

【一期物語・昭法全四四二】

最善の修行は念仏である。念仏は阿弥陀仏の本願の行であり、極楽往生をかなえる正しき手立てである。だからこそ、念仏を称えやすい生活をすることが、最善の生き方となる。それゆえ念仏生活の妨げになるものは捨て、その人にとって最善の環境を整えるべきである。またその念仏行を相続し、修行を怠らないためにも日々の念仏の回数を定め、いつ最期を迎えるかわからないとの思いで念仏行に励むべきである（関連⑤⑥⑦）。そして、終に西方極楽浄土に往生することで、この世では目の当たりに出来ない「さとり」という真実の世界を目の当たりに出来るのである。それが最高の幸せである。

## ○関連

①『【現代語訳】浄土三部経』p.28-29

〔第六にやがて、〕（菩薩は）老・病・死〔のありさま〕を見て世の無常に気付き、国も財産も王位も棄てて、山に分け入って覚りを得ようと〔志〕す。〔そこで、〕乗ってきた白馬と身に付けていた宝冠や装身具を〔御者に託し王宮に〕帰らせ、美しい服を脱ぎ捨てて修行者のまとう粗末な衣（法服）を身に付け、髪も髭も剃り落とすのである。〔そして〕樹の根元に威儀を正して〔静かに〕坐り、苦行を重ねること六年に及ぶ。〔その〕修行は出家者としての振る舞いに適うのである。（中略）〔そして、ついに菩薩は〕えも言えぬほど奥深い真理を得て、この上ない覚りを体得するのである。（『無量寿経』）

②『観無量寿経疏』散善義

一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に、時節の久近を問わず。念念に捨てざる者、これを正定の業と名づく。かの仏の願に順ずるが故に。

（『観無量寿経』聖典 2・294）

して、今年あたりはお浄土からのお迎えが来るかもしれないというお心構えでお待ちになられますようにと存じます。（中略）お母さまはあなた一人だけを頼りにされているのですから、お母さまが必ずこうしたお心構えでお迎えをお待ちになるようにお勧めください。

【熊谷の入道へつかはす御返事（五月二日付）・昭法全五三六】

④『法然上人のご法語』① p.185

お念仏を称えるときはいつも、御目を閉じ、掌を合わせ、御心を静めるようになさるべきです。そして「どうか阿弥陀さま、ご本願の通り、臨終のときには必ず私の前にお迎えに現れ、大いなる慈悲を差し伸べて、心静かに、安らかにしてくださいますように」と心の中でお思いになり、声に出してお念仏をお称えになるべきです。これに勝ることはないでしょう。

【正女房へつかはす御文・昭法全五四六】

〇キーワード

忍耐、和顔愛語、和合僧、幸福、幸せ

### （9）極楽往生―それこそがさとりへの近道である―

【第 267 偈】

熱心な修行と、如法な生活と、聖なる真実を見つめることと、そして、さとりを開くこと―これが最高の幸福である。

〇解説

修行僧にとってはさとりへの道を歩み、修行に勤しみ、禁欲の生活を送り、真理を見極め、やがて涅槃という安らぎに至ることが最高の幸せである（関連①）。他方、極楽往生を通じてさとりへの道を目指す私たち念仏者にとって、

みならず、自身の心までも焼き尽くす。その逆に、相手を思いやり、優しい言葉を発すると、相手を穏やかにさせ、さらに自分の心も穏やかになる。まさに『無量寿経』に説かれる和顔愛語の教えである（関連①②）。また、法然上人が弟子に宛てた手紙の文面は柔らかく、慈愛に満ちた言葉遣いで綴られ、私たち念仏者にとっての模範である（関連③）。だからこそ、凡夫である私たちにとっては本願念仏によって阿弥陀仏の光明に照らされ、凡夫の心が阿弥陀仏の慈愛に満たされることによって、穏やかな念仏生活が確立されるのである（関連④）。共に集い、お念仏を称え、極楽往生を願い、教えを語ることこそが、私たち念仏者にとっての最高の幸福である。

〇関連

①『【現代語訳】浄土三部経』p.65

〔また法蔵菩薩は他人に対して〕偽りやへつらいの心などはまったくなく、その表情は穏やかに微笑み、語りかける言葉は優しく響き、相手の気持ちを察して話しかけるのであった。（『無量寿経』）

②『【現代語訳】浄土三部経』p.131

〔そもそも〕世間の人々は、親子・兄弟・夫婦・諸々の親類縁者であれば、互いに敬って親愛しあい、〔また〕互いに憎んだり妬んだりすることなく、〔物が〕ある時もない時もともに分かち合い、意地汚く独り占めするようなこともなく、言葉遣いも表情もいつも穏やかで、お互いに誤解し仲違いするようなことがあってはならない。（『無量寿経』）

③『法然上人のご法語』① p.154

親に孝養を尽くすことは、阿弥陀さまの本願の行ではありません。けれども、お母さまは八十九歳におなりになるのですから、孝養にお心がけください。そ

ためには、仏の教えを学ぶことが大切である。我々をときに励まし、ときに諫め、ときに慰めてくれる仏の言葉を聞いて、少欲知足や知恩を思い出し、自己を奮い立たせることが幸福への道である。

〇関連

①『【現代語訳】浄土三部経』p.65

欲すること少なくして、心〔晴れ晴れと〕満ち足りることを知り、貪り・怒り・愚かさがなくなって、精神を集中させて、常に寂静な境地を保ち、〔その境地から湧き出る〕智慧は何ものにも妨げられることはなかった。(『無量寿経』)

②『法然上人のお言葉―元祖大師御法語―』p.123

いま浄土宗に制(せい)するところは、不喜足大欲の貪煩悩(とんぼんのう)なり。まず行者(ぎょうじゃ)、かようの道理(どうり)を心得て念仏すべきなり。

〇キーワード

欲、少欲知足、恩、幸せ、幸福

## (8)お念仏ではじまる穏やかな日々

【第266偈】

忍びやり過ごすこと、和やかに言葉を遣うこと、修行に励む人たちを目にすること、時宜を得て教えについて語り合うこと、―これが最高の幸福である。

〇解説

私たちは日々の出来事や人間関係に捉われ過ぎずにやり過ごすことができれば、思い煩うことなく心穏やかに過ごすことができる。すなわち忍辱の精神である。人との会話において怒りに満ちた粗暴な言葉を用いると、相手の心の

ともあるかもしれないが、もろもろの悪事から離れるためには、酒は飲むべきではないというのが釈尊の教えである。世の習いの言葉があるとはいえ、酩酊して正気を失うようなことがあってはならないのである。

〇関連

①『法然上人の御法語』③ p.302

お酒を飲むのは罪になるのでしょうか。お答えします。本来は飲むべきではありませんが、この世のならいです。(『百四十五箇條問答』)

〇キーワード

飲酒、悪、幸せ、幸福

## (7) 足るを知り、恩を知る

【第 265 偈】

〔師に対して〕尊敬の念を抱くこと、逆らわないこと、足るを知ること、恩を知ること、時宜を得て教えを聞くこと、—これが最高の幸福である。

〇解説

十分なものを持っているのに満足できず、さらに求める人は幸せを感じにくいだろう。その逆に今あるものに満足している人は幸せである。物事だけではなく、これは人間関係にも言える。自分が相手にしたことを数え上げ、相手からしてもらったことを数え忘れると不満が募る。一方で相手からしてもらったことをしっかりと覚えておけば、感謝の気持ちをもって穏やかに生きていくことが可能となる。仏教の言葉でいう少欲知足や知恩が幸せに生きるためのコツである。しかし、人は自分の持っていないものに目を奪われ、受けた恩より自分が提供した行為を数え上げたくなる。そういった思いをコントロールする

〇関連

①『【現代語訳】浄土三部経』p.66

数限りない人々をこの上ない覚りの世界に安住させるべく〔財宝を施して正しく〕教え導いた。(『無量寿経』)

②『法然上人の御法語』① p.160

この世において経済的に恵まれない人たちにも、助力を惜しまないようにしましょう。　【鎌倉二位の禅尼へ進ずるお返事・昭法全五三〇】

〇キーワード

手放す、布施、幸せ、幸福

## (6) 幸福をもたらす自制心

【第 264】

悪をとどめ、悪から離れ、飲酒を自制し、教えをおろそかにしないこと—これが最高の幸福である。

〇解説

さまざまな悪行から離れ、もろもろの善行をなし、心を清めることが諸仏の教えであるが、この偈文では悪行から離れることで幸福がもたらされると説く。我々は悪いことはしないほうが良いと理解しているが、怒りやむさぼりから悪事に手を染めることがある。これは突発的な衝動や感情が自制心を超えるためだろう。この自制心を働かせにくくするのが飲酒である。法然上人は飲酒について「世のならい」と評してはいるものの、その言葉の前置きとして「本来は飲むべきではない」と述べている。釈尊在世より飲酒によって我々は正気を失い、悪事を働いてしまうと考えられてきた。酒のせいにして済まされるこ

②『【現代語訳】 浄土三部経』p.189
一つには親孝行に励み、指導者や先輩に仕え敬い、慈しみの心を絶やさず不殺生に努め、十善業を修めることである。(『観無量寿経』)

〇キーワード
家族、仕事、幸せ、幸福

### (5) 手放すことで幸福を得る

【第263偈】
施し与えること、教えを実践すること、親族を大事にすること、非難されない行い—これが最高の幸福である。

〇解説
この偈文の「施し与えること」とは布施のことである。布施は喜捨ともいわれ、喜んで捨てることだが、そこで捨てるものは自分にとって大切なものである。人は大事なものを抱え、いらないものを捨てて生きていく。そうやって生きていくと大事なものが増えていき、いずれは抱えきれなくなってかえって不自由になってしまう。布施行はそれを捨て去り自由で楽に生きるための修行である。現代では金銭の布施が一般的となっているが、これも大切なものを捨て去る行為である。もっともそれが端的に出るのが、金銭を賽銭箱に向けて捨て去る賽銭であろう。金銭を投げる行為は賽銭以外ではかなり限られており、顧みると特殊な行動であることがわかる。金銭を賽銭として捨てる時、我々は広くこの世の中に浸透した経済的価値観をともに捨てさり、ほんの少しの心の自由を得ていると考えることもできよう。抱えるのではなく、手放すことで得られる幸福があるのである。

両親に孝行すること、子と妻を愛し養うこと、また仕事が順調なこと、―これが最高の幸福である。

〇解説

仏教では出家という行為を基盤としているため、世俗の仕事や家族・親族間の親愛の情というのはともすれば軽く見られがちである。しかし釈尊在世の時代から、出家者の生活というのは在家の信者の布施によって成り立っている。したがって在家者の社会生活や家庭生活は、出家者にとっても大きな意味を持っており、生業や家族の絆というのも否定されるべきものではない。さらに言えば出家者といえども人の子である以上、育ててくれた親などの保護者が必ずいたわけであり、その恩を忘れてはならない。法然上人もまた、仇討ちをするのではなく「菩提を弔え」という父の遺訓に従い出家の道を選んだ。まさに孝行が身を結んだ結果として、浄土宗が開かれたということになる。我々も身近な人々への感謝の気持ちを持ちながら、自分だけでなく彼らの往生をも願うべきであろう。

〇関連

①『法然上人の御法語』① p.156

父母に孝養を尽くし大切にしようと思う人は、まず父母のことは阿弥陀さまにおまかせして、このように考えてみてはいかがでしょうか。すなわち「私が人として生まれ、往生を願ってお念仏できるのは、ひとえに父母にお育ていただいたお陰なのですから、阿弥陀さま、どうぞ、私がお念仏を称えた功徳に慈悲を垂れ給い、私の父母を極楽へとお迎えいただき、父母の罪をも滅してください」と願うのです。そうすれば阿弥陀さまは必ず御両親を極楽へ迎え摂ってくださります。　【示或人詞・昭法全五八七】

いるからである。一方で言葉は、そのような大きな力を持ちながらも、日常の生活に根差したものである。法然上人は念仏さえ称えれば他に何をしても良いというような、自分勝手な考えを戒めている。常に周囲の人々に敬意を払い、人を傷付けるような言葉遣いを避け、穏やかに念仏をお称えして暮らすことこそが、我々の目指すべき生活である。

〇関連

①『法然上人の御法語』① p.116

まず、自分自身については、自分が過去にも、そして今生においても、身や言葉や心で積んできたすべての功徳を振り向けて極楽往生を願うべきです。次に、自分自身の功徳のみならず、他の人が積んできた功徳や、仏さまや菩薩さまが具えてこられた功徳を仰ぎ喜びますと、それらすべての功徳がこの自分にも及ぶわけですから、そのことごとくをも振り向けて極楽往生を願うのです。

【御消息・昭法全五八三】

②『【現代語訳】　浄土三部経』p.65

荒々しい言葉遣いや、自分を傷つけたり他人を傷つける振る舞い、自分も他人もともに傷つける振る舞いから遠ざかり、優しい言葉遣いや、自分を大切にしたり他人を大切にする振る舞い、自分も他人もともに大切にする振る舞いを身につけ実践したのである。

〇キーワード

言葉、幸せ、幸福

## （4）家族と仕事を疎かにするべからず

【第 262 偈】

なった誓願です。お念仏以外の種々の行はそうした誓願ではありません。お釈迦さまは、人々の気質の違いや状況に応じてさまざまな行をお説きになられましたが、そのお釈迦さまがこの世にお出ましになられた本意は、阿弥陀さまの第十八念仏往生の願を説き弘めるためだったのです。お念仏以外のさまざまな行をお説きになった日もありましたが、それはその時の人々の気質やそのときの状況に応じたまでのことで、決してお釈迦さま本来の御心によるものではありません。ですから、お念仏は阿弥陀さまにとっては、人々を漏れなく救うための本願であり、お釈迦さまにとっては、それを弘めることがこの世にお出ましになられた真の目的だったのです。

【津戸三郎へつかはす御返事（九月二十八日付）・昭法全五七二】

〇キーワード

目標、努力、幸せ、幸福

### （3）正しい言葉が幸福を呼ぶ

【第 261 偈】

多くの知識と技術と礼儀とをよく学び、正しく言葉を用いること―これが最高の幸福である。

〇解説

人間と他の動物を区別する大きな特徴のひとつが言語の使用であることに、異論を持つ者はいないだろう。古来より人々は言葉を神聖なものと考え、そこには特別な力が宿ると考えた。釈尊の始めた仏教もその例に漏れず、妄語を戒め、正しい言葉、すなわち教えに即した言葉を用いることが、修行の完成に繋がると説く。そして、浄土宗の教えにおいても言葉の力が過小評価されることはない。阿弥陀仏の誓願も、念仏往生も、すべて言葉の力を通じて実現されて

至菩薩がその人のすぐれた友（勝友）となるのである。〔未来には〕覚りを開く座に坐るべく、諸仏の家系に連なるのである。（『観無量寿経』）

### ○キーワード

善友、友人、幸せ、幸福

### （2）正しい目標が幸福を呼ぶ

【第 260 偈】

暮らしやすい場所に住み、これまでに善い行いを重ねて、自ら正しい目標を持っていること―これが最高の幸福である。

### ○解説

世の教職者や道徳家たちは、みな努力の大切さを説く。それはもちろん必要なことである。しかしながら、いくら努力を重ねても、そもそもの目標が間違っていれば、その努力は無駄になってしまう。それでは努力に値する、正しい目標とは何であろうか。釈尊の説くところによれば、人生の究極の目標とは解脱である。仏教のあらゆる教説は、すべて解脱に繋がるものである。一方で法然上人は、数多くある釈尊の教えの中で、念仏往生の教えこそが最も解脱の手段として優れていることを見出した。そして、釈尊の真意は念仏往生の教えを説くことにあったと喝破したのである。したがって我々の掲げるべき正しい目標とは、釈尊と法然上人の御教えに従い、念仏の行に邁進して極楽往生を遂げることに他ならないであろう。

### ○関連

①『法然上人の御法語』① p.41

念仏往生の願は、阿弥陀さまが法蔵菩薩として修行していらした頃にお建てに

## ○解説

ことわざに「朱に交われば赤くなる」「善悪は友を見よ」などと言う。誰を友とするか、誰を師として仰ぐか、そのことによって人生が左右するといっても過言ではあるまい。己の人生を軽んずるような愚者と交わっていれば、いつの間にかそのような人生で構わないと染まってしまうだろう。反対に己の人生を大切にする賢者と親交を結べば、きっと豊かな人生を選択できるようになるはずである。尊敬できる人との出会いが人生の指針を与えてくれる。人間関係はまさに人生の基盤である。善き友、善き師。ともに歩むことができればそれが幸せへの道となる。仏典によれば、お念仏を称えれば菩薩方もまた勝れた友「勝友」になってくださるという。ここにも人生の基盤、幸せへの道が示されている。

## ○関連

①『法然上人のご法語』③ p.27

私、源空（法然）は明遍の兄、遊蓮房円照がいたからこそ念仏の行者となったのです。私も、お釈迦さまが生涯をかけてお説きになった教えのなかでも、お念仏こそが生死を繰り返す迷いの世界を離れ出る教えに違いないと見定めてはいましたが、自分は愚かな凡夫なものですから、その教えに確信をもてずにおりました。そうした時、ひたむきな念仏行者であった円照とめぐり会い、志を同じくする方がいたと思えばこそ、強く意を固めて念仏者となったのです。多くの人が私のことを、勝手に念仏宗を開いたと非難していますが、そのようなことは少しも気になりません。　【常州敬仏房との問答・昭法全七一三】

②『【現代語訳】　浄土三部経』p.226

よくよく知っておけ。もし念仏する者は、この人こそが〔煩悩多き〕人々の中に〔咲く、汚れなき〕白蓮華（びゃくれんげ）〔のよう〕である。〔そして〕観世音菩薩と大勢

序、石田一裕

（1）袖山榮輝　　（2）、（3）渡邉眞儀

（4）、（5）石田一裕　　（6）、（7）北條竜士

（8）、（9）春本龍彬

## （序）誰もが幸せを求めている

**【前文】**

このように私は聞きました。ある時、世尊は舎衛城の祇園精舎に滞在していました。そのとき、とある麗しい美貌の神が、夜も更けたころに祇園精舎を隅から隅まで照らして、世尊に近づき、傍に来てから世尊に礼拝して一方に立った。そこで、その神はその場から、世尊に詩の形式で語りかけた。大勢の神々と人々が、さまざまな幸福について考え、平安を願っています。最高の幸福をお説きください。

**〇解説**

本経では仏陀が神に対して教えを説く。ここで示したのは神からブッダに対する問いかけである。神はブッダから「最高の幸福」を聞きたいと願い、仏陀はそれにこたえて「最高の幸福」を本経で説示する。この幸福は出家者に限らず、神々から在家者までもが実現可能な実践として説かれている。幸福とは何かを手に入れることではなく、何かを実践することで得られるものといえよう。

## （1）善き友　善き師　幸せへの道

【第259偈】

諸々の愚者たちと交わらないこと、諸々の賢者たちと交わること、尊崇すべき方々を尊崇すること、これが最高の幸福である。

# 釈尊聖語の広報・布教用現代語訳研究

## １．はじめに

本研究班は、釈尊の聖語としてパーリ語仏典であるスッタニパータから浄土宗の広報や布教に資すると考えられる経文を収集し、現代語訳と解説を付す作業を行っている。スッタニパータの現代語訳の代表として中村元訳『ブッダのことば』（岩波書店、1984）があり、仏教学の知見に基づきつつ、簡明な翻訳が行われている。また荒牧典俊、本庄良文、榎本文雄訳『スッタニパータ [ 釈尊のことば ] 全現代語訳』（講談社、2015）や村上真完、及川真介『仏のことば註』（春秋社、2009）などの現代語訳も刊行されている。これらを参照しつつ、昨年度まで行ってきたダンマパダに対する作業と同様に、本文を読解し、それに基づいたキャッチコピーを作成した。

また浄土宗の法話における活用を念頭にして解説を付し、SNS で使用する場合のハッシュタグとしてキーワードを示している。浄土宗寺院では、著作権などを気にせずにこれらのフレーズを掲示伝道や SNS で用いるとともに、その解説文なども適宜活用していただければ幸いである。

## ２．フレーズと現代語訳

以下に、スッタニパータの第二章第四経「マンガラスッタ（吉祥経）」の偈文から作成したフレーズを示し、次いで現代語訳、解説、関連する法語や三部経の経文を提示する。なお担当は以下の通りである。

recite ten *nenbutsu*s while respecting the ten prohibitions and [I] sincerely hope that people rely on the forty-eight vows while keeping the forty-eight minor precepts.

＊ 18

affirm doctrines stemming from their attachment to themselves, each of them standing upon their own thinking that they themselves affirm as appropriate when they analyze the merits of the different teachings. How could this express the proper understanding [of the Dharma]? Both sides are turning their backs on the Buddha's intention.

### ④五逆十悪の衆生でも、一念十念で極楽往生できる

【和語】

五逆十悪の衆生の、一念十念によりてかの国に往生すというはこれ『観経』の明らかなる文なり。ただし五逆を造りて十念を称えよ、十悪を犯して一念を申せと勧むるにはあらず。それ十重を持ちて十念を称えよ、四十八軽を護りて四十八願を憑むは心に深く冀うところなり。(504.3-7)

【現代語訳】

五つの逆罪、十の悪業を犯した者でも、わずか一遍や十遍のお念仏で、阿弥陀さまの浄土に往生するというのは、お釈迦様が『観無量寿経』で明言されたところです。だからといって、あえて五つの逆罪を造って十念を称えなさいとか、十の悪業を犯して一念を称えなさいと勧めているわけではありません。そもそも、十重禁戒をたもとうと心がけつつ十念を称えなさい、四十八軽戒を守ろうと心がけつつ四十八の本願を頼みとしなさい。そのように私、法然は切に願うものです。(② 180)

【英訳】

The *Visuzalization Sutra* contains text clarifying that living beings who commit one of the five heinous crimes or do one of the ten unwholesome acts will be born in the Pure Land by means of "one or ten *nenbutsu*s", but it does not recommend performing ten recitations after committing one of the heinous crimes or reciting a single *nenbutsu* after doing one of the ten unwholesome acts. [I] urge people to

### ③他宗を謗るな

【和語】

念仏を修せん者は余行を謗るべからず、謗らばすなわち弥陀の悲願に背くべき故なり。余行を修せん者も念仏を謗るべからず、また諸仏の本誓に違うが故なり。しかるを今真言止観の窓の前には念仏の行を謗る、一向専念の床の上には諸余の行を謗る。ともに我我偏執の心をもて義理を立て、互いに各是非の意に住して会釈をなす。あにこれ正義に契わんや。みなともに仏意に背けり。(503.9-13)

【現代語訳】

お念仏を修める者は、他の行を謗ってはいけません。謗ることは、すなわち阿弥陀さまの慈悲深いご本願に背くことになるからです。他の行を修める者もお念仏を謗ってはいけません。なぜなら、あらゆる衆生を救おうと願われたみ仏方のお誓いに違うこととなってしまうからです。けれども、昨今、現実には真言の行や止観の行を修める者の観点から見てはお念仏の行を謗り、お念仏の行を修める者の立場では他の行を謗っています。お互いに偏った執着の心で教えを理論立て、お互い自分たちだけの価値判断に執着して解釈しているのです。こんな状態では、どうして正しい教えに適うことなどありましょうか。いずれもみな、み仏の教えに背いているのです。(② 154)

【英訳】

One who cultivates the practice of *nenbutsu* should not denigrate other practices. If such denigration was engaged in, that would constitute turning one's back on Amida's Vow[s] of Compassion. People who pursue other practices should also not denigrate *nenbutsu.* This also differs from [the intentions of] the vows of other buddhas. And yet, standing before the windows of the Shingon and Shikan practices of Tendai, people belittle the practice of *nenbutsu;* on the floors where people gather for practice focused on *nenbutsu*, other practices are belittled. Both

名号を忘れることなく後の世に伝えるということである』」とあります。こうしたお示しの意図はすなわち、先に述べた阿弥陀仏の弘願を示そうとしているのです。（② 37）

**【英訳】**

Therefore, the three gates of focused practice, unfocused practice, and the universal vow were established. The "universal vow" states,

> If I attain buddhahood, living beings in the ten directions who aspire to be born in my realm sincerely ask and hold this thought for ten thought-moments and are not born there, then I will not take full liberation myself. This excludes those who have committed the five heinous crimes or who have maligned the True Dharma.

Shandao interpreted this in the following way:

He said,

> When I attain buddhahood, if living beings in all ten directions who recite my Name as few as ten times and yet are *not* born in my land, then I will not take full liberation myself" and yet at the present time he has attained buddhahood. Therefore, we know that the compelling vow that he promised in the past is not meaningless today. When living beings recite *nenbutsu,* they will surely attain Birth.

After concluding its discussion of the two paths of focused and unfocused practice, the *Contemplation Sutra* states,

> "The Buddha said to Ānanda, you must appropriately ( 好 ) retain these words. To 'retain these words' specifically means to retain the Name of Buddha of Infinite Life." This is none other than the essence ( 心 ) of the Universal Vow.

### ②阿弥陀仏の第十八願－我が名号を称えよ―

【和語】

しかれば定善散善弘願の三門を立てたまえり。その弘願といは『大経』にいわく「もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に、信楽して、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とを除く」といえり。善導釈していわく「もし我れ成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称すること下十声に至るまで、もし生ぜずんば正覚を取らじ。かの仏、今現に世に在して成仏したまえり。まさに知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生することを得」云云。『観経』の定散両門を説き終わりて「仏、阿難に告げたまわく、汝好く是の語を持せよ。是の語を持せよとはすなわこれ無量寿仏の名を持せよとなり」云云。これすなわち前の弘願の心なり。(499.16-500.8)

【現代語訳】

...『無量寿経』に「もし、私（法蔵菩薩）が仏となった時、あらゆる世界の衆生が、嘘偽りなく心の奥底からわが浄土に往生したいと願いわずか十念であったとしても、もし往生が叶わなければ、私は仏とならない。ただし、五逆を犯した者と仏の教えを謗る者を除く」と記されています。善導大師は、その文を「『もし、私が仏となった時、あらゆる世界の衆生が、我が名を称えることわずか十遍であったとしても、もしもそれで往生が叶わなければ、私は仏とならない』と解釈され、その上で阿弥陀仏は、今、現に極楽浄土にいらっしゃって仏となられている。だから、阿弥陀仏がかつて誓われた尊い本願は虚しいものではないことを、まさに知らねばならない。衆生が念仏を称えれば必ず往生が叶うのである」とおっしゃいました。

また『観無量寿経』には、定善と散善が示された後、「釈尊は阿難に次のように告げられた。『汝は、しっかりとこの言葉を忘れることなく、後の世に伝えねばならない。この言葉を忘れずに後の世に伝えるとは、すなわち阿弥陀仏の

る年月が久しいならば、どうして本願のお力を信じないなどと言えましょうか。まったくもって、何の取り柄もない凡夫が阿弥陀さまのお浄土に往生するには、阿弥陀さまのお力におすがりする以外、いかなる道も閉ざされているのです。(② 139)

**【英訳】**

Next are the golden words of Śākyamuni in saying that one is reborn in that land by means of ten or even one *nenbutsu.* This is very clear in the *Visualization Sutra.* The Venerable Shandao interpretation was this:

> . . . down to as few as ten *nenbutsu*s, one will definitely attain Birth, and this extends to the fact that nary a single moment of doubt will arise. This we call, the "profound mind".

It is also said,

> . . . regardless of whether one is walking, standing, sitting, or lying down, or how long one has been in any of these positions, without abandoning one's practice thought after thought, this is called "the practice of the rightly assured" [in reference to attaining Birth] because it is in accordance with the vows of the Buddha.

As a result, understanding that one is born [in the Pure Land] with [as little as] one *nenbutsu* in reference to faith translated into [Shandao's] urging of effort to be made by the individual in the single form of practice for their entire life. If one believes in the Original Vow[s] of Amida and amasses merit from *nenbutsu,* after years of thinking about these things, how could we say this person does not believe in the power of the Vows? If the idea of ordinary beings at the beginning stages of the path being reborn in Amida's pure land were not based on "other power", it would mean that everyone's path is gone.

いて『浄土宗聖典』第４巻を底本としているため、本稿に利用させて頂いた現代語訳の底本（『昭法全』）とは異なる。また英訳の際、現代語訳を踏まえ、相互の訳文の整合性を図りながら英訳したものでないため、若干の文意の相違が見られる点についてはご了承頂きたい。

### ①立教開宗の御文

**【和語】**

次に一念十念によりてかの国に往生すというは釈尊の金言なり。『観経』の明らかなる文なり。善導和尚の釈にいわく「下、十声一声等に至るまで、定んで往生を得、乃至一念も疑心あることなし。故に深心と名ずく」といえり。またいわく「行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざる、是を正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるが故に」といえり。しかれば信を一念に生まると取りて行をば一形励むべしと勧むるなり。弥陀の本願を信じて念仏の功を積もり運心年久しくば、なんぞ願力を信ぜずというべきや。すべて薄地の凡夫弥陀の浄土に生まれん事他力にあらずばみな道断えたるべき事なり。(504.16-505.7)

**【現代語訳】**

一遍、十遍のお念仏で阿弥陀さまの浄土に往生するというのは、お釈迦さまの真理のお言葉であり、『観無量寿経』において明言なされたところです。善導大師は「たとえ十遍や一遍の念仏であろうとも、必ず往生が叶うと信じ、ただの一遍も疑う心がないので深心と名づける」と解釈されています。また「歩いていても止まっていても、座っていても横になっていても、また、念仏を称える年月・時間の長短にかかわらず、片時も忘れることなく称えるならば、それを正定の業と名づける。彼の阿弥陀仏が本願に誓われた行だからである」ともおっしゃっています。ですから、信心は一遍のお念仏で往生すると心得、念仏行は一生涯にわたって励みなさい、とお勧めしているのです。

阿弥陀さまの本願を信じ、称えたお念仏の功徳が積み重なり、お浄土に心寄せ

# 英訳「登山状」抄訳

## はじめに

現在、本研究班[1]は『和語灯録』に収録されている各ご法語の英訳作業を進めている。本研究ノートでは令和５年度の研究成果である新規英訳「登山状」の中から適宜、ご法語の英訳の一部分を選出し、それに対応する原文和語と現代語訳を対比させ、研究成果の報告とする。

〈凡例〉

・各ご法語の見出し語は本研究班にて適宜付した。

・各テキストの底本は以下の通りである。

【和語】…『浄土宗聖典』第４巻釈文（各ご法語末尾の数字は頁数を示す）

【現代語訳】…文庫版『法然上人のご法語』①消息編②法語類編③対話編④伝語・制誡編浄土宗総合研究所編訳、令和３～４年、発行：浄土宗

各ご法語末尾の丸数字は巻数、算用数字は法語番号を示す。

【英訳】[2]…本研究班による英訳文

・現代語訳と英訳の整合性ついて…本研究班は『和語灯録』の英訳作業にお

(1) The English Translation Project Members: Mark L. Blum, Yoshiharu Tomatsu ( 戸松義晴 ), Ryushi Hojo ( 北條竜士 ), Hodo Tanaka ( 田中芳道 ), Tatsuaki Harumoto ( 春本龍彬 ), Atsushi Aoki ( 青木篤史 ), Masayoshi Watanabe ( 渡邉眞儀 ), Jinsei Sakai ( 酒井仁成 ), Ryuho Iwaya ( 岩谷隆法 ), Keisuke Shimobata ( 下端啓介 ).

(2) This translation is a draft. Please do not cite without the permission of the author. 本英訳は下訳です。著者の許可なく引用は出来ません。

【基礎研究】　基礎研究プロジェクト　法式研究

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 中野孝昭 | | |
| 研究員 | 青木篤史 | 荒木信道 | 大橋雄人 |
| | 西城宗隆 | 柴田泰山 | 八橋秀法 |
| | 若林隆仁 | 坂上典翁 | |
| 研究スタッフ | 粟飯原岳志 | 青木玄秀 | 井川直樹 |
| | 井上良昭 | 清水秀浩 | 遠田憲弘 |
| | 八尾敬俊 | 山本晴雄 | 吉原寛樹 |

【基礎研究】　基礎研究プロジェクト　布教研究
（『三部経』説教の研究 ―讃題・フレーズ集の作成―）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 宮入良光 | | |
| 研究員 | 青木篤史 | 井野周隆 | 郡嶋昭示 |
| | 北條竜士 | | |
| 研究スタッフ | 岩井正道 | 大髙源明 | 工藤大樹 |
| | 後藤真法 | 遠田憲弘 | 中川正業 |
| | 宮田恒順 | 八木英哉 | 山田紹隆 |

【基礎研究】　基礎研究プロジェクト　教学研究Ⅰ（東京）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 柴田泰山 | | |
| 研究スタッフ | 小川法道 | 坂上雅翁 | 長尾光恵 |

【基礎研究】　基礎研究プロジェクト　教学研究Ⅱ（京都分室）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 八橋秀法 | | |
| 研究員 | 市川定敬 | 井野周隆 | 齊藤舜健 |
| | 田中芳道 | | |
| 研究スタッフ | 粟飯原岳志 | 伊藤茂樹 | 岩井正道 |
| | 岩谷隆法 | 小川法道 | 角野玄樹 |
| | 曽田俊弘 | 陳敏齢 | 永田真隆 |
| | 松尾善匠 | 南宏信 | |

【応用研究】　応用研究プロジェクト　海外開教区用儀式文例作成

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 田中芳道 | | |
| 研究員 | 市川定敬 | 井野周隆 | 齊藤舜健 |
| | 北條竜士 | 八橋秀法 | |
| 研究スタッフ | 石川広宣 | 岩井正道 | 角野玄樹 |
| | 林雅清 | 原マリ | 吹田隆徳 |
| | 前田信剛 | 南宏信 | 下端啓介 |

【応用研究】　応用研究プロジェクト　釈尊聖語の広報・布教用現代語訳研究

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 石田一裕 | | |
| 研究員 | 佐藤堅正 | 袖山榮輝 | 春本龍彬 |
| | 北條竜士 | | |
| 研究スタッフ | 渡邉眞儀 | | |

【応用研究】　応用研究プロジェクト　浄土宗基本典籍の英訳研究

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 北條竜士 | | |
| 研究員 | 青木篤史 | 石田一裕 | 齊藤舜健 |
| | 佐藤堅正 | 柴田泰山 | 田中芳道 |
| | 戸松義晴 | 春本龍彬 | |
| 研究スタッフ | 酒井仁成 | ジョナサン・ワッツ | 髙瀬顕功 |
| | 和田良世 | 渡邉眞儀 | |
| | 平間理俊 | | |
| 業務委託 | マーク・ブラム | | |

【応用研究】　応用研究プロジェクト　法然上人漢語文献『無量寿経釈』の研究

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 郡嶋昭示 | | |
| 研究員 | 青木篤史 | 吉田淳雄 | 春本龍彬 |
| 研究スタッフ | 伊藤茂樹 | | |

【応用研究】　応用研究プロジェクト　浄土宗関連情報デジタルアーカイブ研究

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 佐藤堅正 | | |
| 研究員 | 市川定敬 | 大橋雄人 | 工藤量導 |
| | 齊藤舜健 | 柴田泰山 | 春本龍彬 |

【総合研究】　総合研究プロジェクト　浄土宗寺院における社会事業の地域間連携の展開

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 東海林良昌 | | |
| 研究員 | 大橋雄人 | 工藤量導 | 田中芳道 |
| | 中野孝昭 | 名和清隆 | 宮入良光 |
| | 吉田淳雄 | | |
| 研究スタッフ | 石井綾月 | 伊藤竜信 | 岩田照賢 |
| | 小川有閑 | 小林惇道 | 下村達郎 |
| | 髙瀬顕功 | 山下千朝 | |

【総合研究】　総合研究プロジェクト　宗立宗門学校における仏教教育

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 宮坂直樹 | | |
| 研究員 | 青木篤史 | 石田一裕 | 今岡達雄 |
| | 工藤量導 | 袖山榮輝 | 名和清隆 |
| | 林田康順 | | |
| 研究スタッフ | 大屋正順 | 神田眞雄 | 齋藤知明 |
| | 高瀬顕功 | 平間理俊 | 渡邉龍彦 |
| | 澤田和幸 | 宮田恒順 | |

【総合研究】　総合研究プロジェクト　浄土宗の平等思想と LGBTQ

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 工藤量導 | | |
| 研究員 | 青木篤史 | 石田一裕 | 大橋雄人 |
| | 東海林良昌 | 宮入良光 | 宮坂直樹 |
| | 若林隆仁 | | |
| 研究スタッフ | エリカ・バッフェリ | 関光恵 | 中村吉基 |
| | 服部祐淳 | 山下千朝 | 吉水岳彦 |
| | 斎藤唯衣 | 若麻績憲義 | |

【応用研究】　応用研究プロジェクト　「和語灯録」現代語訳の研究

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 林田康順 | | |
| 研究員 | 青木篤史 | 石田一裕 | 大橋雄人 |
| | 工藤量導 | 郡嶋昭示 | 佐藤堅正 |
| | 東海林良昌 | 袖山榮輝 | 曽根宣雄 |
| | 春本龍彬 | 和田典善 | |
| 研究スタッフ | 石川琢道 | 石上壽應 | 杉山裕俊 |
| | 吉水岳彦 | 長尾隆寛 | |

# 令和５年度　研究プロジェクト別スタッフ一覧

【総合研究】　総合研究プロジェクト　四十八軽戒の現代的理解

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 井野周隆 | | |
| 研究員 | 市川定敬 | 齊藤舜健 | 柴田泰山 |
| | 田中芳道 | 八橋秀法 | |
| 研究スタッフ | 粟飯原岳志 | 安達俊英 | 伊藤茂樹 |
| | 岩井正道 | 上野忠昭 | 鵜飼秀徳 |
| | 角野玄樹 | 善裕昭 | 曽田俊弘 |
| | 田中裕成 | 中川正業 | 南宏信 |

【総合研究】　総合研究プロジェクト　次世代継承に関する研究

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 名和清隆 | | |
| 研究員 | 大橋雄人 | 工藤量導 | 東海林良昌 |
| | 袖山榮輝 | 宮坂直樹 | 和田典善 |
| 研究スタッフ | 大屋正順 | 石上壽應 | 鍵小野和敬 |
| | 菅波正行 | 武田道生 | 斎藤唯衣 |

【総合研究】　総合研究プロジェクト　浄土宗寺院における対人援助の研究
―浄土宗的カウンセリング―

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究代表 | 石川到覚 | | |
| 研究主務 | 曽根宣雄 | | |
| 研究員 | 郡嶋昭示 | 春本龍彬 | 宮坂直樹 |
| 研究スタッフ | 大河内大博 | 大島慎也 | 小野静法 |
| | 籠島浩貴 | 曽田俊弘 | 髙瀬顕功 |
| | 樋口広思 | 平間俊宏 | |

【総合研究】　総合研究プロジェクト　科学技術の進展に伴う社会の変化と浄土宗の対応

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主務 | 吉田淳雄 | | |
| 研究員 | 工藤量導 | 若林隆仁 | |
| 研究スタッフ | 伊藤竜信 | 岡崎秀麿 | 熊谷信是 |
| | 坂上雅翁 | 水谷浩志 | 平子泰弘 |

# 令和５年度　研究プロジェクト一覧

| | | |
|---|---|---|
| 【総合研究】 | 総合研究プロジェクト | 1　四十八軽戒の現代的理解 |
| | | 2　次世代継承に関する研究 |
| | | 3　浄土宗寺院における対人援助の研究<br>―浄土宗的カウンセリング― |
| | | 4　科学技術の進展に伴う社会の変化と浄土宗の対応 |
| | | 5　浄土宗寺院における社会事業の地域間連携の展開 |
| | | 6　宗立宗門学校における仏教教育 |
| | | 7　浄土宗の平等思想と LGBTQ |
| 【応用研究】 | 応用研究プロジェクト | 8「和語灯録」現代語訳の研究 |
| | | 9　海外開教区用儀式文例作成 |
| | | 10　釈尊聖語の広報・布教用現代語訳研究 |
| | | 11　浄土宗基本典籍の英訳研究 |
| | | 12　法然上人漢語文献『無量寿経釈』の研究 |
| | | 13　浄土宗関連情報デジタルアーカイブ研究 |
| 【基礎研究】 | 基礎研究プロジェクト | 14　法式研究 |
| | | 15　布教研究 |
| | | 16　教学研究Ⅰ（東京） |
| | | 17　教学研究Ⅱ（京都分室） |

# 浄土宗総合研究所運営委員一覧（教化研究35号）

| | | |
|---|---|---|
| 委員（役職） | 川中光教 | （宗務総長） |
| | 名越邦博 | （宗務役員） |
| | 光岡素生 | （宗務役員） |
| | 宮林雄彦 | （宗務役員） |
| | 今岡達雄 | （総合研究所長） |
| 委員 | 松岡玄龍 | |
| | 田中勝道 | |
| | 西村實則 | |
| | 廣瀬卓爾 | |
| | 藤堂俊英 | |
| | 安部隆瑞 | |
| | 勝崎裕彦 | |
| | 大澤亮我 | |

（令和6年3月31日現在）

# 浄土宗総合研究所研究員一覧（教化研究 35号）

（令和 6 年 3 月 31 日現在）
〒105-0011　東京都港区芝公園4-7-4　明照会館4 階
電話　03-5472-6571（代表）　　FAX　03-3438-4033
＜分室＞
〒605-0062　京都市東山区林下町 416　浄土宗教化研修会館（源光院）内
電話　075-744-0841　　FAX　075-744-0849
ホームページアドレス　https://www.jsri.or.jp/

| | |
|---|---|
| 所長 | 今岡達雄 |
| 副所長 | 戸松義晴 |
| 主任研究員 | 齊藤舜健・坂上典翁・袖山榮輝 |
| 研究員 | 青木篤史・荒木信道・石田一裕・市川定敬・井野周隆・大橋雄人<br>工藤量導・郡嶋昭示・西城宗隆・佐藤堅正・柴田泰山・東海林良昌<br>曽根宣雄・田中芳道・中野孝昭・名和清隆・林田康順・春本龍彬<br>北條竜士・宮入良光・宮坂直樹・八橋秀法・吉田淳雄・若林隆仁<br>和田典善 |
| 事務員 | 青木篤史・岩井正道・斎藤唯衣・春本龍彬 |
| 研究スタッフ | 青木玄秀・粟飯原岳志・安達俊英・井川直樹・石井綾月・石上壽應<br>石川広宣・石川琢道・伊藤茂樹・伊藤竜信・井上良昭・岩井正道<br>岩田照賢・岩谷隆法・上野忠昭・鵜飼秀徳・エリカ　バッフェッリ<br>大河内大博・大島慎也・大髙源明・大屋正順・岡崎秀麿・小川有閑<br>小川法道・小野静法・鍵小野和敬・籠島浩貴・角野玄樹・神田眞雄<br>工藤大樹・熊谷信是・小林惇道・後藤真法・齋藤知明・斎藤唯衣<br>酒井仁成・坂上雅翁・澤田和幸・下端啓介・下村達郎・ジョナサン　ワッツ<br>菅波正行・杉山裕俊・関光恵・善裕昭・曽田俊弘・髙瀬顕功<br>武田道生・田中裕成・遠田憲弘・中川正業・長尾光恵・長尾隆寛<br>永田真隆・中村吉基・服部祐淳・林雅清・原マリ・樋口広思<br>平子泰弘・平間俊宏・平間理俊・吹田隆徳・マーク　ブラム<br>前田信剛・松尾善匠・水谷浩志・南宏信・宮田恒順・八尾敬俊<br>八木英哉・山下千朝・山田紹隆・山本晴雄・吉原寛樹・吉水岳彦<br>若麻績憲義・渡邉眞儀・渡邉龍彦 |

## 編集後記

▽令和５年度の研究成果をあらわした『教化研究』第 35 号をお届けします。

▽本号では研究活動報告として、総合研究・応用研究・基礎研究・コーポレート業務の各プロジェクトの研究目的と進捗状況について、計 18 本掲載しています。

▽また研究成果報告として、「『黒谷上人語灯録』（和語）　巻第十三　現代語訳」・「『三部経』説教の研究 ―讃題・フレーズ集の作成―（一）『無量寿経』巻上」・「移植医療にどう向き合うか」・「海外開教区用儀式文例作成」・「次世代継承に関する研究　研究成果報告」の計５本を掲載しています。

▽また研究ノートとして、「十重禁戒のキャッチコピー」・「釈尊聖語の広報・布教用現代語訳研究」・「英訳「登山状」抄訳」の計３本を掲載しています。

▽おかげさまで本年も『教化研究』第 35 号を発行することができました。これもひとえに当研究所の活動に携わり、お支え下さった方々のご尽力があってのことです。すべての関係者の皆さまに、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

教化研究　第 35 号
令和６年９月６日　発行

発行人　今　岡　達　雄
編集・発行　浄土宗総合研究所
〒105-0011　東京都港区芝公園4-7-4　明照会館内
電話(03) 5472-6571（代表）FAX(03) 3438-4033

制作・DTP
印刷・製本　株式会社平河工業社

JOURNAL OF JODO SHU EDIFICATION STUDIES

教化研究

# JOURNAL OF JODO SHU EDIFICATION STUDIES

## (KYŌKA KENKYŪ)

No. 35, 2024

*Published by*

JODO SHU RESEARCH INSTITUTE

(Jōdo Shu Sōgō Kenkyūjo)

*TOKYO, JAPAN*